大正三年七月七日印刷
大正三年七月十日發行

有朋堂文庫
新編水滸畫傳四
（非賣品）

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理

印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登

印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

（岡山製本）

斯一部難約。是亦作者所不得止也乎。嚮水滸畫傳一編十卷刻成。東武簔笠翁所新譯也。其旨趣卷首備言。愚因書肆之需。嗣編八十卷稿畢。間有論者之言。擧之。通計九十册而滿尾焉。固不學老衰之所述謬誤可夥。四方之君子枉賜宥恕。

文政戊子孟冬　東武南郊伊皿子隱子高井蘭山翁述

新編水滸畫傳 終

新編水滸畫傳跋

支那有水滸傳之作。世稱奇筆。抑水滸也者梁山泊之謂。傳也者所聚水泊。天罡地煞一百零八人來歷之謂。卷中之目錄者如蒙求標題。本文者似各譜。惟原出稗史家一時之戲編。扨表題冠忠義二字。吳門金聖歎斷一百回爲七十回。且省忠義二字。此書專言寇盜放火殺人之事業。普演俠者不避水火之意氣。其間世態万變互交。恠異奇譎。屢儲夢寐託宣。且往々假正史實有之人。强首尾一部。故皇帝叱四賊官。屢而不果咎。有似兒戲。是作者不得止也。諺云。盛名之下難久居。易云。君子見幾而作無至悔。宋江盧俊義不曉之。倘令燕青爲宋盧。疾察毒饌不食。鴆酒不飲。然此時金國兀求之軍事起。宋盧吳用李逵之們不如

由來義氣包天地　只在人心方寸間
罡殺廟前秋日淨　英魂常伴月光寒

又一律あり、

梁山寒日淡無輝　忠義堂深晝漏遲
孤塚有人薦蘋藻　六陵無涙濕冠被
內苑羯鼓催花發　小殿球簾看雪飛
義血一腔人百八　罡光煞耀仰神威

かや。されば後々に至て宋公明しば〳〵靈をあらはし、雨を祈れば雨あり、風を索れば風を來し、立どころに感應あらずといふことなし。されば楚州蓼兒洼も靈驗あらたなりければ、重て大殿を建立し、其結構梁山泊に劣ることなく、年々四時に祭をなして萬民頂禮し、今にいたるまで斷絶なしといへり。尤も古跡今に存せりと云々。太史唐律二首哀挽の詩あり、云く、

莫レ把二行藏一怨二老天一　韓彭當日亦堪レ憐
一心征レ臘摧レ鋒日　百戰擒レ遼破レ敵年
煞曜罡星今已矣　讒臣賊相尙依然
早知鴆毒埋二黃壤一　學二取鴟夷一泛二釣船一

又、

生當二廟食一死封レ侯　男子平生志已酬
鐵馬夜嘶山月暗　玄猿秋嘯暮雲稠
不レ須三出處求二眞跡一　却喜忠良作二話頭一
千古蓼洼埋レ玉地　落花啼鳥總關レ愁

後人の詩に、

を罵り、大に怒て宣はく、汝等朕に勸め宋江に酒を賜はしめ、毒酒に易へて宋江を鴆殺したるを知れり、汝等忠良を忌妬する奸臣、いかんぞ朕が天下を亡さんとするや。兩人地上に俯して罪を謝し奉れども、龍顏猶も安からず、蔡京、童貫傍より奏して云く、陛下先怒りを息給へ、人の生死こと〴〵く定りあり、況や楚州より未だ申狀あらざれば、其虛實を知りがたしと、色色と奏するにぞ、遂に巧言に惑ひ給ふぞ淺ましき。時に天子叱て高俅、楊戩を退けしに、御酒を齎せし勅使を召しむるに、料らずも其者はその後病死せしよしを奏すれば、又宿太尉を召て、共に宋江の忠義なることを語り給ひて、各傷むに堪ず。去程に宋江の弟宋淸は官に封ぜられ、宋江の職を續でありしが、久しく風疾に侵され、自ら表を奉り官を辭し、故郷の鄆城縣に回り、元のごとく農業を働んことを願ひければ、天子其孝を感じ給ひ、錢十萬貫田地三千畝を賜つて其家を贍はし、其子安平を朝廷に召され、後來官を進んで、祕書學士となり、子孫永く榮えけるとなり。去ほどに天子は再び自ら勅狀を書し、宋江を封じて忠烈義濟靈應侯と追號し、錢百萬貫を賜つて梁山泊に廟堂を建立し、靖忠之廟といへる御筆の額を賜ひ、玉戶珠門彫甍畫棟その美いふべからず。黃金殿上には宋公明を始めとして、三十六人の天罡星の像を安置し、左右の廊下には朱武を肇として、七十二人の地煞星の像を安置して、四時の祭怠ることなしと

されば次の日文德殿に出御なれば、高俅、楊戩傍にあり。天子問て宣はく、汝等近來楚州の安撫宋江の消息を聞くや。此時兩人しらざる由を奏す。聖慮甚だ安からざる處に、宿元景は心服の人を楚州に遣しけるに、歸り來て語りけるは、宋江實に賜りし毒酒に中て死し、李逵宋江と等しく此酒に死し、呉用、花榮も來て、歎の餘り自ら墓の側に縊れ、四人の墓所相竝べり、楚人忠義を憐んで、蓼兒洼高原の地に葬て祠堂を建て、四時の祭怠ることなく、雨を祈て雨を得、風を祈れば風を得、極めて靈驗ありと具に語れば、宿元景聞て其非命の死を憐み、天子四人の賊臣を信用し、幾度か其惡を知り給ひながら、忽ち又此面々の言處を信用し給ふは、第一天下の安危に係る處なりと、後來をも歎き思ひけるが、朝廷に於て具に聞通りを奏しければ、天子も悲傷に堪給はず。時に宿元景又奏しけるは、世の諺に大木は風に折れ、忠義の士は奸佞に惡まる、宋江は毒酒を賜りし本人なれば、暫くこれを閣き、呉用の軍慮、花榮が射術、李逵が強勇、此三つを世に存しても、宋朝の天下いづれの州より窺ふことありとも、磐石のごとく、陛下股肱爪牙の臣となるべき者、陛下に左右する四賊臣は賢路を忌塞ぎ、善良を猜み害ふのみにあらず、後來君の天下を危ぶめんことは眼前に明らかなり、臣陛下の爲に愁歎くは、是のみなり、と述ければ、天子も深く歎息し給ひしが、次の日早朝に百官の前に於て、高俅、楊戩

らかにして、李師々は以前の儘にて猶眠らずありければ、上皇問でのたまはく、寡人只今何れの處へか行し。李師々奏して云く、陛下今少し寐給ふと。此時天子夢中に彼梁山泊に至り、宋江及び多くの將士に逢給ひ、蔡京を始め、朝廷の奸臣等が朕に隱して、彼等に毒酒をあたへ、彼等已に死し、陰魄散ぜず、今夢に告る處を語り給へば、李師々又奏して云く、凡そ人正直なる者は神と成ると聞ば、只今宋江已に死し、靈を現はして夢を陛下に託するにあらずや。天子宣はく、朕明日此事を正し、若果して眞實ならば、必ず彼が爲に廟を建列侯に封ぜん。李師々奏して云く、陛下若果してかくのごとくになし給はゞ、眞に功臣の德に負き給ふまじと。天子其夜は歎じて寐給はず。次の日早朝文德殿に出御あれば、蔡京、童貫、高俅、楊戩、各殿上に竝び居しが、恐らくは天子の宋江が事を問ひ給はんことを恐れ、朝やんで各宮中を出去ければ、只宿太尉のみ御前にあれば、天子則宿元景に問で宣はく、卿楚州の安撫宋江の消息を聞知りたるや。宿太尉奏していはく、臣曾て音信をきかずといへども、昨夜の夢に、宋江臣に告て云く、陛下毒酒を賜て死し、楚人其忠義を憐んで、南門外蓼兒洼に葬り、祠堂を建て、四時の祭怠る事なしと見て覺め候と奏すれば、天子首を振うて、是寔に奇事なり、汝が語る處朕が夢見る處と同じとて、宿元景に命じ、心服の人を楚州に遣し、事の實否を聞繕はしめよと命じ給ふ。

と奏しければ、皇帝愕然給ひ、寡人自ら酒瓶を封じて卿に與ふに、何人か毒酒に易ゑや。宋江がいはく、陛下その時の使者に問給はゞ、直ちに知るべし、と奏しける。其時皇帝三關の雄莊なるを見て、問て宣はく、是は又何れの處ぞや。奏していはく、是臣等が昔聚りし梁山泊なり。帝また問て宣はく、汝等已に死して、何の故に此地に集るや。答ていはく、天帝臣等が忠義を憐み、玉帝の命によつて臣等をして、梁山泊の守護神となさしむ。故に臣等此地に聚り、屈情を述がたし、こゝに仍て萬乘の主を勞して水泊に請じ、平生の哀情を告奉る。皇帝宣はく、汝等何ぞ九重の禁闕に來て寡人に告ざる。宋江奏していはく、臣は幽冥の人、いかんぞ鳳闕龍樓に近づかん、仍て陛下を此地に迎ふ。帝宣はく、寡人暫時此地に遊ぶべし、とありければ、宋江等各恩を謝しにけり。時に皇帝玉座を立て堂上より下つて、堂上の額を見給ふに、忠義堂と書せしかば、心中果して梁山泊なることを知り給ひ、すでに階を下り給ひし時、忽ち宋江の背後より、李逵雙の斧を持て跳り出で、高聲に叫んでいはく、宋の皇帝々々汝いかんぞ賊臣の讒言を聞て、我等を殺すや、今日只今其仇を報ず、我は則ち宋江が部下にありし黑旋風李逵なり、と未だ言も終らず、直ちに討て懸れば、皇帝大に驚き、階下に跌き給ふと覺しくて、忽ち夢は覺けり。此時帝眼を開き給うてあれば、總身冷汗し給ひ、傍りを見給ふに、燈燭猶明

云く、臣は則ち梁山泊の宋江なり。帝宣はく、寡人先達て卿を楚州の安撫使とせしに、今何故に此所にあるや。答ていはく、請ふ陛下忠義堂に至り、臣が旨趣微細を聞給へ。其時帝馬を下り、忠義堂に至り堂下を御覽ずるに、衆將各煙霧の中に拜せり。宋江階を上て、皇帝に向ひ涙を流しければ、帝問て宣はく、卿何の故に涙を流すや。奏していはく、臣等昔年は天兵に抗拒ふといへども、原來忠義を主とし分毫も異心なし、一たび陛下の勅命を受てより、遼の軍兵を破り、田虎、王慶、方臘を亡し、義兄弟の輩十にして八を失へり、後勅命に楚州に任官してより、聊も百姓を侵さず、任所の士民馴順ひ、平安靜謐なり、然るに陛下何の罪かあつて、臣等に毒酒を與へ一時に害し給ふや、然りといへども、臣等陛下の賜に身を失ひしことを微しも憾にあらず、只恐らくは李逵此怨みを含んで、異心を起さば、是迄臣等が忠臣の清名なるを汚さん、此によつて某に賜る處の毒酒を貯へ置き、使を潤州の李逵が任所に遣し、彼を呼寄せ、欺き其毒酒を與へて、後の患を除けり。然るに孔明にも比すべき吳用、李廣に劣るまじき花榮、兩人も尋ね來て只忠義の爲に死しけり、是を以て楚州南門の外に葬られ、四人同じく蓼兒洼の高地に魂魄を集めり、里人集湊り、忠義を憐んで、廟堂を立て四時の祭をなす、今臣等魂魄散ぜず、こゝにあつまつて、平生の哀情を訴ふ、伏して望むらくは、陛下鑑み給へ

赦免に依て、某も倶に武節將軍兗州府の都統制に封を受け、病に依て官を辭し、泰安州の岳廟に入て今其傍に住り。天子宣はく、汝何の爲にこゝに至るや。戴宗がいはく、臣が義兄宋江自ら奏聞したきむねあり、是に依て臣をして聖駕を迎へしむ。帝宣はく、輕々しく寡人を迎へて何國に行や。戴宗がいはく、淸秀甚しき地あり、因て陛下を行幸なさしめん。其時皇帝戴宗に隨て房外に出給へば、車馬悉く備はれり。

○徽宗帝夢に梁山泊に遊ぶ

天子此時馬に乘じ行給ふに、忽ち雲霧四方に起り、只風雨の音のみきこえて、前後を辨じ給はざりしに、程あつて雲霧すでに霽ければ、遙か向うを叡覽あるに、只烟水渺茫として、四方に高山聳え、日月の光無うして、蘆葉蓼花洲前に暗く、鴻雁所々に哀鳴し、曠々たる所なり。皇帝馬を駐め、戴宗に問て宣はく、是は何といふ處ぞや。戴宗山上の路を指していはく、陛下彼所に至り給はゞ、すなはち知れんと。皇帝馬を縱て三つの關を過り、前の方を叡覽あるに、二百餘人の軍將各鎧衣甲盔を著し、地上に俯して拜しけり。此時帝大に驚き問て宣はく、汝等は皆これ何人ぞや。一人の大將頭に鳳翅を飾りし金盔を戴き、身に錦袍を著したるが進み出て

楚州蓼児洼
靖忠廟と
建て梁山泊の
廟ふ擬す

を築き、楚州の百姓宋江の仁徳を思ひ、上に一字の廟を立て、四時の祭絶ず。里人風を祈れば風を得、雨を祈れば雨を得るとて、祈ること一つとして感應あらずといふことなし。さる程に徽宗天子は、高俅、楊戩等の勸によつて、宋江に御酒を賜ひし後、聖意常に安からず、屢疑ひを設け、宋江の消息を問んと思ひ給へ共、常に高俅、楊戩の説に惑はされ、只風花雪月の御遊に日を送り給ひしかば、四人の佞臣、いよ〳〵賢路を閉塞し、忠良の人を害しけり。皇帝或日内宮に遊び給ひしが、忽ち李師々のことを思ひ給ひ、二人の小黄門を引て、直ちに李師々の房前に至り、鈴の索を引給へば、李師々は慌しく出迎へ、皇帝を臥房に請じ奉り、自ら房門を閉ぢ、盛粧して立寄けり。天子宣はく、寡人常におらず、此頃は微しく病に染て、神醫安道全が藥を服せり、是をもつて久しく愛卿に逢ず、今一度愛卿を見て思慕の念を遂ぐ。李師々奏して云く、賤人も久しく陛下の聖恩を蒙りて報ずる所なし、今又聖顔を拜し喜悦に堪ずとて、宮娃に命じ、酒肴を供へしめ、自ら杯を取て皇帝に勸め奉りしかば、帝王も數杯を飲給ひ、頻りに困倦し給ひ、李師々が膝に寄て休んとし給ひしに、忽ち冷風聖體に入て、燈燭の下に黄なる衣を著せし人、儼然として立ければ、帝王大に驚き問て宣はく、汝は何人にて、いかんぞ此處に至るや。彼人奏していはく、臣は則ち梁山泊宋江の部下に神行太保戴宗と申者なり。宋江御

が幸ひなり、某心中に宋公明を思うて恩義捨がたく、交情忘れがたし、今此所に縊れ死して、仁兄の魂魄と一所にあひ集らんとす、我死せば賢弟萬乞我を此處に葬り給はれ。花榮がいはく、軍師すでに此心あらば某もまた從ふべし、仁兄と同じく死せんこと是我願ふ處なり。吳用がいはく、我死せば賢弟に死後の事を托せんと思ふに、いかゞして我と死を同じうせんと云給ふや。花榮がいはく、某も先に大罪を侵し、梁山泊に上りしを幸ひにして死せず、天子の招安を蒙り罪を赦され、四方を征伐して已に姓名を天下に現はせり、是則ち功成名遂て、身退くの時節なり、若此まゝ朝廷にあつて、後來奸臣の輩に讒言をもつて罪に落されなば、其時千萬悔るとも及ぶまじ、今仁兄と死を同じうせば、黃泉に歸して後淸名を世上に殘さん。吳用がいはく、賢弟が言其理に當れりといへども、今某は獨身なれば、死すとも何ぞ妨からん。賢弟は現に妻子あり、是をいかゞせん。花榮が云く、此義妨なし、某是まで貯へし銀子あれば、是を妻子に與へ置ば、又糊口に足り、舅の家より料理せば、思ひ殘す事なしとて、其時手を取て大に泣哭き、兩人墓の樹に縊て死しにけり。されば花榮の從人蓼兒洼の麓に待けるが、主人久しく出來らざれば、各山に登て見るに、吳用、花榮墓の樹に縊れ死しければ、大に驚き、急ぎ當所の官員に告げ、棺槨を備へて、兩人を宋江の墓の側に葬りけり。されば西に四つの墓

涙雨の灑ぐが如し。坐して旦をまち、次の日寝食安からず、則ち行李を收拾め從人をも帶ず、只獨楚州をさして急ぎけるが、一兩日を經て楚州の界に至て尋るに、果して宋江すでに死し、彼地の人民各嗟嘆せざるはなし。其時吳用は祭儀を調へ、直ちに南門外蓼兒洼に至り、墳墓を拜し祭を設け、手をもつて宋江の石碑を撫て哭していはく、仁兄英靈昧からざれば、我言を聞き給へ、吳用は是村鄉の學生にして、始め晁蓋に隨ひて後仁兄に遇ひ、高恩を蒙り、共に榮花を受ること十四年、皆仁兄の賜なり、今仁兄國家の爲に死す、夢中に某に告給ふに悲歎し、且驚駭す、某曾て仁兄の德に報ずることなし、唯願くは仁兄と九泉の下に會せんと、云終て痛く歎き、自ら縊んとせしに、忽ち後に人音しければ、驚て是を見るに、則ち花榮なりければ、吳用再び驚き問ていはく、我きく賢弟は向に應天府に在て官となりしに、何に仍て宋江の死を知るや。花榮がいはく、某衆兄弟と別れ應天府に至りしより、日夜衆兄弟の情を思うて忘ることなかりしに、比夜の夢に、宋公明李逵と共に某を引止め、訴へ說く、朝廷毒酒を賜うて已に死し、楚州南門外蓼兒洼高原の地に葬られたり、舊交を忘れずば、一たび墳の前に至るべしとなり、こゝを以て某萬事を打捨て、夜を日に續で此地に至れり。吳用が云く、我もまた夢に見ること賢弟と異なる事なし、此に仍て來れり、今賢弟の此地に至り給ふこと、某

ども路遠うして相逢ふこと能はず、其夜毒發し、已に危きに臨ば、家人親隨の輩を召集め、懇に遺囑しけるは、我靈棺を此處南門のそと蓼兒洼の高原なる地に葬るべし、必ず汝等衆人の徳に酬ふべしと、いひ畢て死しければ、從人の輩まづ棺槨を備へて禮に依殯盛しけり。されば當所の官人等宋江の遺言に隨て蓼兒洼に葬れり。其日楚州の官吏より百姓に至るまで、宋江の徳を感じ歎かぬものはなかりけり。されば數日を經て、李逵の靈柩も潤州より來りければ、同じく宋江が墓の傍に葬りぬ。扨又宋淸は家に在て風疾に染み、聊不快の體なる處へ、楚州より家人回り來て報じけるは、兄宋公明すでに死せりと。宋淸大に驚き悲しみ、急に楚州に行んとせしかども、鄆城縣とは路遙に隔たり、身病に臥て行こと能はず、又靈柩は遺言に依つて、南門外蓼兒洼に葬れりと聞て、急ぎ家人を遣し享祭をなさしめけり。去ほどに武將軍の承宣使軍師吳用は、自ら任官して後常に樂しまず、宋公明の恩義を思うて、唯日夜懸念せしが、或夜心恍惚として寐られず、半夜に至りしに、夢に宋江、李逵二人來り、吳用の衣を引て云く、軍師我等忠義を以て主とし、天に替て道を行ひ、曾て天子に負かざるに、今朝毒藥を賜ひ、我等罪無うして身死す、今楚州南門の外蓼兒洼に葬られたり、軍師昔の交情を思ひ給はゞ、一たび墳墓に至るべし。吳用大に驚き、再び微細を問んとするに、冷風忽ち身にしみ、散然として夢覺め、

快活さば、此賊官等が手下に在て、彼等が毒を受んよりも勝らんか。宋江がいはく、此議よしと。其夜兩人酒を飲み、翌日未明に宋江舟を命じ、李逵を送る。李逵が云く、哥々何れの日か義兵を起し給ふや、我も兵を起して接應すべし。宋江が云く、賢弟我を怪しむことなかれ、昨日朝廷より毒酒を賜て服しければ、我死せんこと旦夕に在り、我一生忠臣たらんことを思うて、朝廷に仕へ負くことなし、朝廷却て我に背く、我死せば必ず汝造反せん、汝造反せば、我梁山泊天に替て道を行ふ、忠義の名を汚さん、此に因て特と汝を請て相辭し、又酒中に鴆を交へ與へたり、汝潤州に囘らば必ず死せん、汝死するの後靈魂必ず此地に來るべし、此處の南門の外に蓼兒洼とて風景の能所あり、甚だ梁山泊に相似たり、我死するの日定て此地に葬らしめん、汝の靈魂と相聚んと、云終て涙雨のごとくなりしかば、李逵が云く、罷乎々、我生て哥々に隨へば、死してもまた哥々に隨ふべしてとて、同じく涙を雨の如く濺ぎけり。此時はや腹中大に痛みければ、涙ながら永く宋江に辭別し、舟に乘じ、潤州に歸りけるに、果して毒發し死に臨み、家人をめして懇に云付けるは、我死するの後、必ず我靈棺を楚州南門の外蓼兒洼に葬り、我哥々宋公明と一處に埋むべしと、云終て死しければ、家人等その遺言に隨て、棺槨を具へ盛貯しめ、靈柩を舁て楚州に赴きける。去程に宋江は李逵と別れてより後、呉用、花榮を戀へ

せん、李逵今潤州の都統制と成て彼地にあり、若此事を聞知ば、必ず兵を起して朝廷を鬧がし、我等一生の淸名を汚し、又忠義の名を失ふべし、たゞかくのごとく行ふべしと、思案すでに究り、其夜使を潤州に遣し、委用有とて、急に李逵を招きけり。去程に李逵は都統制となつて、潤州に赴きしより、心中悶えて常に樂しまず、終日只酒を飲で暮せしに、忽ち宋公明の使來つて、委用ありと告ければ、李逵がいはく、哥々我を召は、必ず火急の用ならんとて、其儘宋江の使者と同じく、直ちに楚州に至つて宋江に見えけり。宋江が云く、賢弟いかんぞや、我汝と別れてより日夜汝を思ふ、呉用軍師は武勝軍に在ば、此を去こと遠し、花榮は應天府にあつて久しく消息をきかず、只賢弟は潤州にあれば、此地と遠からず、只今汝を請うて一大事を計らん。李逵がいはく、哥々何の事を商議あるや。宋江がいはく、汝先酒を飲べしとて、後廳に請て酒食をあたへければ、李逵飽まで飲で、酒已に半酣に及びし時、宋江語ていはく、賢弟知らず、今朝廷より我に毒酒を賜ふ、是をいかんがせんや。李逵大に叫んでいはく、哥々兵を起して朝廷を討給へ。宋江がいはく、今兄弟の輩盡く分散し、又兵馬もことごとく離散せり、いかんがしてか兵を起すべき。李逵がいはく、我潤州に三千の軍馬あり、是を楚州の軍馬と共に合し、又百姓を召て力を合さしめ、兵を招き馬を買て、賊官を砍盡し、再び梁山泊に登て、

で麗しくして松柏茂り、峰巒環遶りて、龍虎の蹲踞がごとし。前後すべて湖水にして、瑠璃を湛へたるがごとく、奇花異草四時に芬芳しく、しかも其風景儼然として、梁山泊に似たりければ、宋江常に此地を愛し、公事の暇あるごとに、酒を携へ遊玩し、甚だ喜び、自らおもへらく、我若此地に死せば、必ず此地に葬らるべしとて、其地の風景を愛しける。されば年月流るゝごとく、住に至てすでに半年餘も過て、宣和六年初夏に至りけるに、東京より勅使來て、御酒を賜りけると聞ければ、自ら衣冠を著し、勅使を郭外に迎へ、公廨に至りけり。其時勅使御書を讀で、御酒を宋安撫に遞しければ、宋江謹んで御酒を酌んで自ら飲み、また杯を勅使に回しければ、勅使自ら酒を吞ずと辭す。然して勅使は直に回ければ、宋江禮を厚し、勅使を送り出で、勅使は東京に立回る。さて宋江は御酒を酌けるの後、腹中大に痛みければ、自ら心中に思へらく、是酒中に毒あらんも知る可らずとて、急ぎ軍卒に命じて、勅使の宿せし路上の旅館に遣し尋ねしむるに、勅使は原來酒を飲しと告ければ、宋江すでに賊臣の奸計に中りしことを知り、自ら歎じていはく、我幼きより儒學をなし、已に長となつて吏に通じ、千辛萬苦を經て、今此任を授りしに、不幸にして身を賊官等が手に失ふ、我原來半點の異心も僞ざるに、天子輕々しく讒言を聞て、我に毒酒を賜ふは、我に何の罪かある、豈天命にあらずや、今さらいかんが

北において玉麒麟と呼れし天下無雙の英雄、賊官等が奸計に水中の漚と消にけり。其時從人大に驚き、急ぎ死首を撈げ、棺椁を具へ、泗州高原の地に葬りけり。されば當所の役人此おもむきを東京に注進ありければ、高俅、楊戩等小躍して大に悦び、又蔡京、童貫と共に計を定めて、天子に奏していはく、泗州より文書を以て告けるは、盧安撫淮河に至りて大醉の後、誤て水に落死し候と、臣等豈是を奏聞せざらんや、たゞ恐らくは宋江此事をきかば、心中に疑を設け思へらく、是朝廷の爲す所と、謀反を企て候はんも測り難し、伏して望むらくは、陛下勅使を楚州に遣され、御酒を宋江に賜ひ、彼が心を慰め給はゞ、遂に事なかるべし、と告ければ、上皇沈思し、暫くものを宣はざりければ、蔡京、童貫、高俅、楊戩、天下に四人の賊臣傍より、巧言令色をもつて種々勸め奉り、遂に御酒を賜るにぞ定りけり。されば高俅、楊戩心服の人を召て勅使とし、潛に御酒の中に鴆毒を用ひ、遂に勅使をして御酒をもたせて楚州に遣しけり。天命とはいひながら、賤しかりける計ひなり。さても宋江は當年楚州に安撫となり、兼て兵馬を司りて、下を惠み民を愛しければ、百姓これを敬すること父母のごとく、軍人是を仰ぐこと神明の如くにて、まことに路に遺たるを拾はず、夜戸を鎖さず、人心すでに服しけり。原來楚州南門の外に蓼兒洼とて絶景の地あり。四方は都て水港にて中に一つの高山あり。その山秀

に委用のことあれば、朝參あるべしと。盧俊義謹で勅命を領し、即日用意をなし、勅使と同じく東京に赴き、其月は皇城司に宿し、次の日早朝東華門に伺候せり。其時太師蔡京、樞密院童貫、太尉高俅、楊戩出むかへ、盧安撫を引て偏殿に至て天子に朝見す。まづ盧俊義拜し罷れば、皇帝宣はく、朕久しく卿に一面せんことを欲す、廬州の地身を容るに足や否や。盧俊義再拜し奏していはく、聖恩天に等しく、彼地の人民も盡く安泰にて、臣が榮光何ぞこゝにしかん。天子また他事を問ひ賜ひて、午時に至りければ、厨官奏して、御膳すでに成れりと。此時高俅、楊戩、潛に水銀を以て食中に交ぜ、是を御案の上に供へしむ。天子自ら御膳を以て、盧俊義に賜ひしかば、盧俊義更に賊官等が惡謀あることを知らず、拜受して食しけり。天子又撫諭して宣はく、卿廬州に返らば、務て軍士を安んじ、養うて異心を生ずることなかれとあれば、盧俊義頓首して恩を謝し、朝廷を出で、衆官に辭別して、廬州を望て進發す。其日高俅、楊戩は各計の成るを賀す。盧俊義は廬州の道中にて一二日を經けるに、腰胷しきりに痛んで、歩む事能はず、又馬に乘ことも能はざれば、船に乘じ泗州の淮河まで至りしに、その夜月明らかなること晝のごとくなれば、自ら船端に出て江中の景色を賞し、酒を酌て慰みしに、料らずも水銀の毒氣腰胷の骨髓に入ければ、醉後竟に跌て淮河に落て死しにけり。憐むべし、河

蔡太師に告ければ、蔡京其日高俅、楊戩を會して共に事を計り、四人の奸臣遂に盧州の首告人を引て天子に奏聞す。天子宣はく、朕思ふに、向には宋江、盧俊義等、四方の賊寇を征伐して、十萬騎の兵權を掌に握りし時だにも、聊異心を生ぜず、況や今邪を去て正に歸す、同心の義兄弟は十に八分を失ひ、其殘る族も諸州に散じ、羽翼もなき今に至て豈造反を做んや、其上彼等豪傑氣象を以て忠義を一途に守る、朕曾て彼等に背かず、彼等朕に背くの理なし、必ず是詐りあらん、未だ虚實を聞ず妄りに信用しがたし。高俅、楊戩傍より奏していはく、主上の宣ふ處道理は然りといへども、人心は計りがたし、臣愚意によらば、盧俊義官職の卑きを嫌ひ、未だ其足ことを知らずして、反意を企て、不幸にして人に早く知られ候には有まじきや。天子宣はく、朕盧安撫を召て自ら問ば、虚實を知ん、蔡京、童貫傍より奏していはく、盧俊義は猛獸に異ならず、今若此事を聞て大事に及ばゞ、遂に力を以て捕へがたし、唯御召あつて朝參する時は、陛下聖言を以て彼が心を慰め、御膳御酒を賜つて彼を賺し、虚實を問給はゞ、自ら知れ候はん、若此事詐りなくば、罪を加へ給ふまじ、遂に功臣の心に背き給ふにあらずと述ければ、天子其儘勅命を下し、使を盧州に遣し、盧安撫を召にけり。されば勅使盧州に著し、大小の官人城を出て相迎へ、勅使を州衙に請じけり。東京の勅使やがて勅狀を讀で、急ぎ盧安撫

しむ、我等豈世人の笑ひを被らざらんや、いにしへより云く、恨み小なるは君子にあらず、毒なければ丈夫にあらずと。楊戩がいはく、我一つの計あり、先に盧俊義を結果せば、宋江の片臂膊を無するなり、此者古今の英雄なれば、もし先に宋江を密計することを泄聞かば、彼必ず大事をなさん。高俅が云く、願くは君の妙計いかんぞや、其極を聞しめ給へ。楊戩が云く、潛に盧州より四五人の百姓を招き、此を省院に遣し首告しめんには、近來盧安撫しきりに軍兵を招き、馬を買ひ、糧を貯へ、草料を積み、造反の意ありと告しめ、其告狀を蔡太師に呈し、蔡太師と共に詐り、天子に奏聞し、勅命を以て盧俊義を召しめ、天子より彼に御膳を賜らば、其時潛に食中に些しの水銀を交へ、彼が腰腎に入ば、遂に癈人となつて、大事を做こと能ふまじ、其時又別に勅使を以て御酒を宋江に賜ひ、酒中に又熄毒を施さば、いまだ半月を經ずして、彼等が命ともに存することなからん。高俅聞て、大に悅で云く、此計甚だ妙なりとて、兩人商議し、計已に定りければ、先心服の人をして盧州の百姓兩人を召しめ、告狀を寫し、彼をして樞密院に遣し、童貫に告しめていはく、盧安撫此比、盧州に於て軍兵を招き、馬を買糧を集め、草を積て造反の心あり、又頻りに使を楚州に遣はし、宋安撫に示し合せ、兵を起さんばかりに見え候と訴へけり。元來童貫もまた宋江等の仇人なれば、其儘告狀を以て此趣を

馬川に任官せしが、兩人遂に商議し、官を辭し閒人となれり。蔣敬は故郷を思ひ、潭州に回り民となり、朱武は樊瑞に隨ひて道法を學び、兩人とも道士となつて四方を雲遊し去り、後遂に公孫勝に隨て天年を終り、穆春は官を辭し、自ら故鄉に歸り、揭陽鎭にて再び良民となり、凌振は鐵炮の名人なればとて、京に有て火藥局の役人と成にけり。又京師に止りし五人の將も、安道全は大醫院に於て金紫醫官となり、皇甫端は能馬の病を療すとて、御馬監の大使となり、金大堅は內府の御寶監の官人となり、蕭讓は蔡太師の府中にあつて官人となり、樂和は駙馬王晉卿の府中に在り、官人となつて、終身快樂せしとなり。去程に宋江は中書省に在て、已に用意も備りければ、盧俊義と相辭し、楚州の任に赴き、盧俊義もまた家屬なければ、童僕數人を引率し、自ら盧州へ發足せり。原來宋朝大祖武德皇帝より、今に至て朝廷に讒佞の臣多し。今上徽宗天子も聖明の君たりといへども、讒奸の臣に權を專にせられ、忠良の臣を屈害す、豈悲しむべからざらんや。此時に當て蔡京、童貫、高俅、楊戩四人の賊臣、天下を變亂し、國々を壞り、人民を害す、豈恐るべからざらんや。此時殿帥府の太尉高俅、楊戩、天子の禮を厚して、宋江等に高官を授け給ひしを見て、心中に悅びず。兩人密に商議して云く、宋江、盧俊義は原我等の仇人なるに、今彼等功あるの臣となれり、況や朝廷より高官を賜つて、彼をして軍民を管領せ

朱武樊瑞
公孫勝に
従んとて
薊州二仙山に
分登る

衆官に辭別し、滄州横海郡に囘りて、再び農業をつとめ、間を得て生活しけるが、後數年を經て、病なく死しけるとなり。さても李應は中山府の都統制を授り、任官して半年ばかり過けるに、柴進官を辭し去けると聞しかば、自ら又詐て風癱に染て官に任ずること能はずとて、遂に致仕し、故郷に囘り、再び獨龍岡の下に住し生活けるが、後杜興とともに富豪となり、終りを善せしとなり。又關勝は北京大名府に在て總官兵馬となりけるが、軍人甚だ是を敬服しけり。されば日々軍馬を操練たり。或時大醉して馬より落て、足痛を憂へ終に死しけるとぞ。又呼延灼は御營の指揮使となつて、毎日御駕に隨うて在けるが、後大軍を引率し、大金兀述第四の子を破り、淮西に至て、陣中に於て死せりとなり。さて朱同は保定府に任官せしが、軍卒を管領して功あり。後又劉光世に隨て大金を破り、太平軍の節度使に至りしとなり。さても花榮は妻と妹を引具し、應天府に赴きしかば、吳用は只獨り、童子を帯て武勝軍に任官す。李逵も又妻子なければ、只二人の供を引率し、潤州に行て任官す。されば京師に止まりし十五人の偏將等も、宋淸は先に故郷に歸て農となり、杜興は李應に隨て故郷に囘り、黄信は青州に行て任官し、孫立は舊に依て登州に任官す。孫新、顧大嫂幷に妻女を具し、登州に囘れり。鄒潤は官人たるを願はず、登雲山に囘り、蔡慶は關勝に隨つて北京に囘り民となり、裴宣は楊林と共に飲

に、度々阮小七の過失を說て云く、彼方臘の赭黄袍袞龍衣を著し、玉帶を粧ひしは、童樞密の前に未だ半年も經ざるに、大將王稟、趙譚等、幫源洞にて罵られし、舊恨を記し、一時のたはぶれに似たりといへども、終に不良のこゝろあり、況んや蓋天軍の地は東京を離ること遠うして、人民ことごとく蠻の氣あれば、彼後來は謀反をなさんこと必定なりと、度々讒言をなしければ、童貫遂に此事を蔡京につげにける。蔡京天子に奏聞し、遂に勅命と稱し、蓋天軍に至つて、阮小七が官を奪ひ庶人となしにけり。阮小七は心中に、王稟、趙譚の所爲なりと思へど更に恨みとせず、却て自ら大に喜び、老母を伴うて、再たび梁山泊の石碣村に至り、漁をなして業としけるが、後七十五迄生て終りしとなり。扨も小旋風柴進は京に在て官人となりしが、戴宗官を辭し去り、また朝廷より、阮小七が戲に方臘の平天冠、袞龍衣を著るを以て、逆反の意ありとして、官を奪へりと聞て、自らおもへらく、我もまたはかりごとゝいへ共、一旦方臘の駙馬となれば、後來もし奸臣知ることを得て天子に讒せば、遂に免るゝことを得ず、燕青が天子と大臣との體、世を見限て身を隱せしは、張良穀を避て、赤松子の遊びに比するのまねび、一百八人の中、義は宋江、才は燕青の上に出る者決してあらずと、くれぐれ歎息し、しかじ我も時務を知らんにはとて、自ら詐て風疾に染しと稱し、遂に官を辭して庶人となり、

九編 巻之九十

○宋公明の神蓼兒洼に聚る

保義宋公明は既に任處に赴く用意をなしける處に、神行 太保戴宗來て訊ひければ、宋江戴宗と二人坐し間話して在けるに、戴宗忽ち宋江を拜して云く、某已に聖恩に蒙り、兗州の都統制の官を授りしかど、今願くは官を辭して、泰安州の嶽廟に仕し、閒を求て天年を終らば、實に某が幸ひなり。宋江が云く、賢弟何の故に此念を起すや。戴宗が云く、昨夜夢中に崔府君我を召す、是を以て某しきりに此善心を起せり。宋江が云く、賢弟生ては神行太保なり、今より後必ず嶽府の神とならん。其時戴宗宋江に辭別し、官を朝廷に返し、自ら泰安州の嶽廟に至り、貯へ置たる金銀を廟裡に納て修堂金とし、毎日慇懃に香火を奉り、誠心を盡して怠ることなかりしに、後數月を經て病なく、一夜多くの道士を集めて辭別し、大に笑て死しけるが、後來嶽廟の裏に於て、度々靈驗有ければ、當所の人戴宗の像を彫刻し、今に至て祭をなしけるとなりっ扨も阮小七は勅命を奉じて、宋江に辭別し、蓋天軍に至り、都統制の官となりけるが、

は有べからず。然るに宋江錦を著て古郷に歸るに及で、老父の死を知らず。宋家村の家に入て、父の柩を見て肇て驚き、家來共は出て宋江が恙なきを賀し、宋江は父の病死の體を家來に問詞もあらず。他人たり共、何の病にて幾ばくの日數にて終焉しや、具に問人多し、親に孝ある人、父を見ること路人の如し。何ぞ是人情ならん。此書の作者は、鄆城縣の押司宋江も罪を犯し、天下に流浪の宋江も、大宋先鋒使の職たる宋江も、一列に見るといふべし。又云く、此卷の始百八人の內、當時存世の三十六人名前あり。靑面獸楊志も、此時は死去の知らせなければ、武松と戴宗の間に名前を加へ、三十七人と有て、煩ひ丹徒縣に留るよし記すべし、作者の無念に似たり。殊に情合の行屆ぬこと有ては、作り物語りの證據あまり早く見ゆ。又此卷に李俊が楡柳莊にて費保等四人に會すること有は、前の卷にも出たれども、赤鬚龍費保、捲毛虎倪雲、太湖蛟卜精、瘦臉熊狄公四人なり。臉は腮のことぞ。此卷にも限らず、從、耿二參謀といふ文有て、方臘征伐の始より張招討、劉光世の名は出れども、參謀從氏、耿氏二人隨ひ來りしこと更に見えず、名は何と云も知られず。

をして家事を納めしめ、自ら百餘人の軍卒を引率して、再び東京に回り、衆將に相見ゆ。其時衆將は家屬を引て任所に赴くもあり、京に住するもあり。又討死せる諸將は其子孫を召て、各錢帛を賜ひけり。されば宋江も中書省に住し、只勅命の下るを待て在けるが、程なく任所に赴くべきよし、勅命を蒙り、行李を収拾め、任所へ赴く用意をなしにけり。宋江、盧俊義等の成行き、次巻に詳なり。

論者いはく、此一段心得がたきこと有り。宋江は至孝の人にて、清風山を下て諸頭領と合體し、梁山泊に往て晁蓋に投んと、大勢を催し行途中にて、石勇より宋清か書狀を得て、父太公死せりと聞き、大勢を捨て、連夜に己一人古鄉に馳回りしとあり。然るに太公の死は詐にて、太公が宋清に命じなさせし謀、是より宋江幾くの危難を經よし、前に詳なり。今宋江招安の上先鋒使の職を蒙るは、其身分以前の宋江とは雲泥の差なり。宋清は家に在しめ、老父の介抱せしむべきものなり。若一同に御赦免を蒙りたる有難き其願も成がたく、宋江宋清共に軍事を勤るは、是も亦心底に任せざる處ならん。然らば縱ひ方臘を征伐して邊塞に在とも、太公の死を家來より知らせ遣はさゞるはいかん。況や方臘亡びて後は、宋江に先達て都に回り來る將士も有り。都まで訃音を告るとも、宋江に知れざること

打乘り、錦を著て古郷に回り、日を經て山東鄆城縣宋家村に著ければ、村中の老人親戚都て出迎へけり。宋江其日家に歸りけるに、料らずも宋太公已に死して、靈柩猶家にありければ、宋江、宋淸大に痛哭し、哀しみに堪ざりけり。其時家眷莊客都て來て、宋江兄弟に拜見し、各無事を賀しにけり。されば居宅、田產、家財に至るまで、宋太公の存せし時より能整へければ、各美をぞ盡しけり。宋江、宋淸は先多く僧を請て七晝夜の法事をなし、功果を修し、亡靈を薦祓しかば、當所の官人より百姓に至るまで、弔者市をなせり。遠からず日を選んで、太公の靈柩を村の南なる高原の地に葬りけり。此日當所の官人より、親隣の父老、賓朋、眷屬に至るまで、各〻葬りを送りけり。葬事已に終りければ、宋江又九天玄女の擁護を想ひ、願心いまだ酬いざればとて、錢五萬貫を以て工匠人に命じ、玄女の聖像を粧飾し、重て廟宇を建立し、宮殿、兩廊各〻美麗を盡して落成せり。宋江は古鄉に在こと月を重ねければ、天子の御限りを誤んことを恐れ、日を揀んで喪服を除き、又僧を請じ、懇に父母宗親を弔ひ、又宴を設て當村の鄉尊父老を招き、酒を酌で間別の情を述ければ、次の日又親戚より宴を置て管待しけり。されば宋江は莊院を以て弟宋淸に讓りけり。原來宋淸は官爵を受るといへども、鄉里に在て農を務め、先祖の弔ひをなしにけり。其時宋江は錢帛を鄉里の百姓に分ち與へ、鄉老に辭別し、宋淸

天子太平宴を
扈従官及び
宋江以下
功臣に
盃酒を
まふ

日中書省にて太平宴を設けて、宋江をもてなし、第三日には樞密院にて宴を設けけり。されば張招討、劉都督、童樞密、從、耿二參謀、王稟、趙、譚二將に至るまで、各厚き賜あり。去程に宋江は、翌日方臘を東京の市上に引出し、凌遲に行うて、三日まで衆人に肆示しけり。

時に詩ありていふ、

宋江重賞陞官日　方臘當刑受剮時
善惡到頭終有報　只爭來早與來遲

善事をなして賞を蒙り、官に昇り、忠義を末世に稱へらるゝも、惡事を行うて人を苦しめ殘ひ、其身榮花を究る間なく刑せられ、その醜名を後代にとゞめ、善に善報を得、惡に惡報の至る事、只報來るの遲きと早きのみ。いづれか其報あるは、必然の天理なれば、古より惡を照々に成者は、人得て是を罪し、惡を冥々になすものは、鬼得て是を罰すといへり、恐れざるべけんや。さても宋江は軍卒を召集め、軍役たらんことを願ふものは、龍猛虎威の二營に送て軍役となし、毎月俸米をあたへ、古郷に歸らんことを願ふ者には、金銀を與へて回し、宋江諸事を濟し、分派已に定りければ、衆人に辭別して、舍弟宋淸と同じく、軍卒二百餘人を引率し、各御賜の金銀衣袍幷に行李を荷はしめ、東京を發駕し、山東へと進發す。かくて宋江、宋淸は各馬に

朝の進士邵俊といひし人、落第し江に落て死せしが、後竟に神となれり、此始末廟前に古碑ありて彫しるせりと。天子此説話を聞給ひ、則ち忠靖靈德普孚祐惠龍王の號を賜ひ、御筆の額を掲げしむ。又是迄方臘が取掠めし州縣の名を盡く改め、睦州を更め、嚴州とし、歙州を更め徽州となし、清溪縣を淳安縣とし、幇源洞を鑿開き山島となし、又府庫の錢をもつて烏龍大王の廟を重修し、宮殿廊閣金銀を鏤めけり。原來江南の地方の百姓、久しく方臘が暴惡に殘害せられければとて、三年の間貢を免したまひけり。其日宋江等各恩を謝しければ、皇上また太平宴を設け、功臣及び文武の百官九卿に御酒を賜りければ、衆將も亦恩を謝しにけり。其時又奏していはく、臣が手下の軍卒梁山泊より隨ひし者、討死大半に過ぎ、今又故鄕に歸らんと願ふ者あり、希くは少し聖恩を賜へ。皇上奏する處を准げ給ひ、勅して軍役たらんことを願ふ者には、錢一百貫、絹十疋を賜うて、龍猛虎威の二營に遣し、每月俸糧を賜ふ。軍役たることを願はざる者は、錢二百貫、絹十疋を賜ひ、各故鄕に歸らしむ。宋江又奏していはく、臣鄆城縣に生れ、罪を得てより以來、自ら故鄕に回らず、願はくは天子聖恩を賜ひ、故鄕に回し親類を問ひ、次に楚州の任に登らば、何の榮かこれにしかん。上皇大に悅び、再び錢十萬貫を賜ひ、歸鄕の資となさしめ給へば、宋江聖恩の深きを感謝し、拜辭して朝廷を退きけり。次の

戴宗を兗州府の都統制に封ず。
阮小七を蓋天軍都統制に封ず。
朱同を保定府三山都統制に封ず。
李逵を鎭江潤州府都統制に封ず。

天子悉く勅し畢て、又宋江、盧俊義には、各黄金一千兩、錦緞十疋、花袍一套、名馬一疋を賜り、其餘の正將には、各金五百兩、錦緞一疋宛を賜ひ、偏將に金三百兩、綵緞一疋を賜りければ、宋江、盧俊義を初めとして、各聖恩を謝し奉りける。正に是金鑾殿承恩者、盡是功成名遂人、といふべし。時に宋江又奏していはく、先達て烏龍嶺の戰に、賊將包道乙邪法をもつて、萬松樹中に於て、大樹を化し人の形と見せ、已に臣が軍を破り、臣等が命も危ふかりし處に、烏龍大王靈を現はし、包道乙が幻術を破り、臣が數萬の軍を救ひ、しかのみならず、又夢中に屢靈をあらはし、國を護り民を保ち、且臣等が數萬の軍を救ふ、是を以て勝ことを全うす、よつて臣豫て、烏龍大王に廟宇を修せんことを冤せり、萬乞聖上、重ねて廟宇を建立し給はゞ、永く國家の守護神となるべし、と奏すれば、天子問て宣はく、烏龍大王とはと何の神なるやと。宋江答へ奏していはく、臣も亦初め何の神たることを知らず、彼夢中に靈を現し、自ら姓は邵と説給によつて、次の日吳用と共に、萬松林より烏龍嶺の山下まで尋ねて、烏龍大王の廟に詣り、神像を拜するに、夢中に見しと、其貌いさゝか異なることなし、此神は唐

人のみ存せり、眞に十の內八分を失へり、朕もまた悲しみにたへず、今其王事に沒する者、正將は各封じて、忠武郎となし、偏將は各封じて節義郎に改め、其子孫ある者は、其子孫を京に於て官爵を授け、子孫なき亡將は、各廟を建て四時に祭をなさしめん、中にも張順は靈を現し尤も功あれば、勅して金華將軍と追號し、魯智深は賊首を捉て大功あり、又終りを善す、則ち義烈照曁禪師と謚す、武松は多く敵を討て功あり、今又臂を折て出家す、則ち淸忠祖師と封じ、錢十萬貫を賜り天年を終らしめ、故の女將二人扈三娘を花陽郡夫人と稱し、孫二娘を旌德郡君と封ず、此度朝見する諸將、宋江、盧俊義兩人を除て、正將十人には、各武節將軍の號を賜ひ、諸州の統制を授け、偏長たらしむ。又女將顧大嫂を東源縣君に封ぜんと、其官爵を賜る人々には、

先鋒使宋江を武德太夫楚州の安撫使を授け、兼て兵馬都統を主どらしむ。
副先鋒盧俊義を武功太夫盧州の安撫使に封じ、兼て兵馬副都總を司どらしむ。
軍師吳用を武勝軍の承宣使に封ず。　關勝を大名府の正兵馬總管に封ず。
呼延灼を御營の兵馬指揮使に封ず。　花榮を應天府の兵馬都統制に封ず。
李應を中山府鄆州の都統制に封ず。　柴進を橫海郡の滄州都統制に封ず。

官爵を願ず途中より去る正偏將佐四人の内、正將二人、
燕青　李俊
同斷偏將二人、
童威　童猛
舊京に住し、勅に依て京に回り住する偏將五人、
安道全　皇甫端　金大堅　蕭讓　樂和
今度朝覲する正偏將佐二十七人の内、正將十二人、
宋江　盧俊義　吳用　關勝　呼延灼　花榮　柴進　李應
朱同　戴宗　李逵　阮小七
偏將十五人、
朱武　裴宣　蔣敬　黃信　孫立　樊瑞　凌振　杜興
宋淸　鄒潤　蔡慶　楊林　穆春　孫新　顧大嫂
宣和五年九月　日　　先鋒使臣宋江副先鋒臣盧俊義等謹上表
天子表を見給ひ、嗟嘆して宣はく、卿等一百八人は天の星曜に應ずる者なるに、今僅に二十七

段景住　侯健　孟康　王英　扈三娘　項充　李袞　燕順
馬麟　單廷珪　魏定國　呂方　郭盛　歐鵬　陳達　楊春
郁保四　李忠　薛永　李雲　石勇　杜遷　丁得孫　鄒淵
李立　湯隆　蔡福　張青　孫二娘

途中に於て病を以て死する正偏將佐十人、此內正將五人、
林冲　楊志　張橫　穆弘　楊雄

偏將五人、
孔明　朱貴　朱富　白勝　時遷

杭州六和寺に於て坐化する正將一人、
魯智深

臂を折て官爵を願はず、六和寺にて出家する正將一人、
武松

京より故鄉蘇州に囘り、出家する正將一人、
公孫勝

江再拜し、謹で表文を御案の上に供へ奉る。其文にいはく、

平南都總管先鋒使臣宋江謹上表。

伏念臣江等愚拙庸才狐陋俗吏。往犯無涯之罪。幸蒙莫大之恩。高天厚地豈能酬。粉骨碎身何足報。股肱竭力離水泊以除邪。兄弟同心登五臺而發願。全忠秉義護國保民。幽州城鏖戰遼兵。淸溪洞擒方臘。雖微功上達。奈緣良將下沈。臣江日夜憂懷。旦暮悲愴。伏望天恩。俯賜聖鑑。使已沒者皆被恩澤。在生者得庇洪休。臣江乞歸田野。願作農民。實陛下之賜。臣江不勝戰慄之至。謹錄存沒人數。隨表上進以聞。

陣中にて亡びたる頭領五十九人、此内正將十四人、

秦明　徐寧　董平　張淸　劉唐　史進　索超　張順

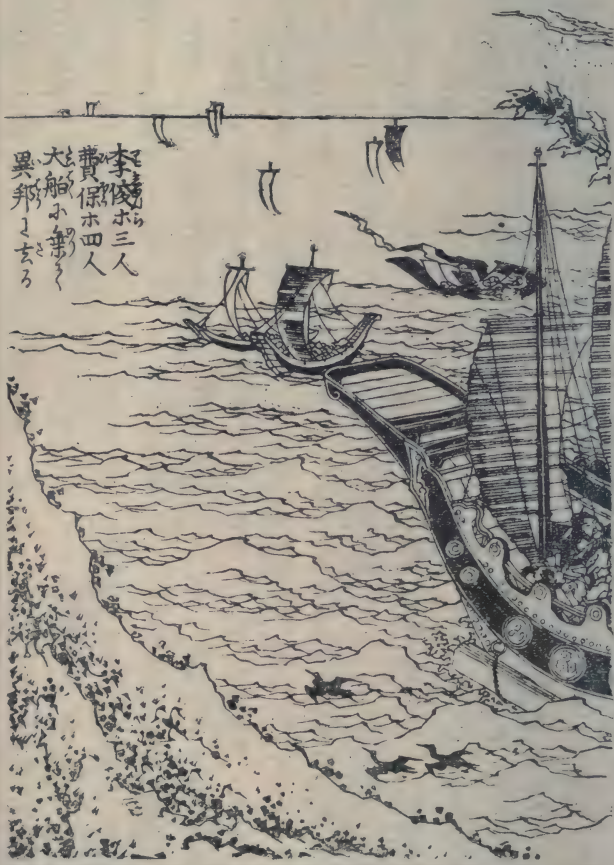
阮小二　阮小五　雷橫　石秀　解珍　解寶

偏將四十五人、

宋萬　焦挺　陶宗旺　韓滔　彭玘　鄭天壽　曹正　王定六

宣贊　孔亮　施恩　郝思文　鄧飛　周通　龔旺　鮑旭

第二番の朝見とは、宋江遼兵を破て京に歸りし時は、天子命じて、各戎衣を著しながら朝見せしむ。今度は四海も盡く平らぎ、太平の時の朝見なればとて、勅命有て、各文人の扮にて朝見有べしと。爰に於て宋江を初として、各幞頭を戴き、公服を著し朝覲す。東京の百姓人民等は、只此二十七人のみ殘りしを見て、各涙を流さゞるはなし。されば宋江等は正陽門にて馬より下り、内庭に入に、侍御使出來て相迎へ、引て玉階の下に至る。此時宋江、盧俊義は諸將と共に進んで八度拜し、退て八度拜し、中頃にして又八度拜し、三八二十四拜畢て、君臣の禮備りければ、殿上殿下の百官各萬歳を唱へける。此時徽宗皇帝は宋江等が只二十七人のみ返るを見給ひ、心中嗟念し給ひ、先勅して、殿上に昇らしむ。されば宋江、盧俊義は、謹で諸將と同じく金階にのぼり、珠簾の下に跪ば、近臣早く珠簾を捲上たり。天子則ち宣はく、朕知る卿等衆將江南を征伐し、苦勞甚し、況や義兄弟の輩を失ふこと大半なりと、朕豈傷むに堪ざらんや。宋江頭を垂て再拜し奏して云く、臣が不才を以て、たとひ腦を碎き骨を粉にすとも、國家の大恩に報ずること能はず、昔は臣等一百八人五臺に上て衆義せしに、今日料らずも十に八を失へり、謹で人數を錄して聖覽に備ふ、伏して望むらくは、御鑑を給へと。天子宣はく、卿等の部下王事に死するもの、朕各追號を加へ、子孫を封じ、その功を露すべし。宋

李俊等三人
費保等四人
大船に乗て
異邦に去る

傷寒に堪ざりき。昔日江を渡りし時は、諸頭領盡く恙なかりしが、今は纔になりければ、各涙を濺ぎけり。已に楊州を過て淮安に近づきければ、はや京城も遠からず。其時宋江命じて、諸將をして朝覲するの用意をなさしめける。されば宋江の軍馬、九月の下旬に東京に著しければ、張招討中軍の人馬、はや三日前に東京城中に入ける由聞えけり。其時宋江の人馬は城中に入らず、城外陳橋驛に陣取して、暫く人馬を休め、猶天子よりの令を待にけり。此時先達て蘇州にて、李俊等に付置し軍卒、返り來りて告けるは、李俊はもと病を患るにあらず、只京に回て官人となるを願はず、童威、童猛等と共に、遂に行方をしらずと報じければ、宋江も嗟嘆をなしにけり。其時宋江恩を謝するの表章を裴宣に書しめ、又今京に返るの諸將都合二十七人、又王事に死するの者の人數を盡く錄さしめ、正將、副將各列を正して、各幞頭を戴き、公服を著し、たゞ聖旨をぞ待にけり。されば三日の後、徽宗皇帝朝廷に出給へば、近臣奏して、宋江等朝見を相待よし告ければ、天子御准あつて、翌日朝參すべき旨、勅宣をぞ下し給ひけり。されば翌日東方漸明らかなる頃、宋江、盧俊義を初として、二十七人の諸將は各馬に打乘て城中に入にけり。是第三度の朝見なり。第一番の朝見とは、宋江初めて招安を受て京に入し時は、勅をうけて天子より賜る紅綠の錦の襖子を著し、金銀の牌を持せて、嚴重に裝うたり。

雁序分飛自可レ驚　納ニ還官誥一不レ求レ榮
身邊自有ニ君王赦一　洒ニ脱風塵一過ニ此生一

宋江見終て、心中鬱々として樂しまず。扨又宋江は是まで討死せし諸將に、官爵を賜りし勅書を箱に納め、諸將と共に軍馬を引具して、杭州に進發す。去程に已に蘇州の城外に至りし時、混江龍李俊風疾に中れりと、詐つて臥しければ、宋江自ら醫者を引て病を問ひ、且消息をなさしめけり。其時宋江に謝していはく、先鋒必ず某が爲に、朝廷に囘り給ふ日限を誤り給ふことなかれ、張招討返り給うて日已に久し、必ず先鋒を待給はん。先鋒某を憐み給はゞ、童威童猛を此地に留めて看病せしめ給ふべし、近日病痊る時は、卽日朝覲いたし候ふべし、先鋒はやく京に赴て、日限を誤まり給ふことなかれと述ければ、宋江さらに疑はず、童威、童猛を留めて看病せんことを懇に云付て、京師へと進發す。李俊等三人は已に宋江が軍馬の去を見、自ら費保を尋るに、翳の四人皆李俊を待侘居ければ、都合七人楡柳莊にして商議し、盡く家財を賣て大船を造り、多く鹽米を貯へて、大倉港より船を出し、大海に泛で外國に去にけり。後來李俊は暹羅國の王となり、童威、童猛、費保等も盡く官人となつて、榮耀をなしけるとかや。去程に宋江等諸將大軍を引具して、常州、潤州を過けるに、盡く舊日の戰場なれば、

ずんば、恐らくは後悔あらん、某すでに志決せり、若宋先鋒に辭別せば、義氣重き人なれば、輕々しく我を放ち給ふまじ、只此處にて主人に辭別せんのみ。盧俊義がいはく、汝我を辭して今何國にか行や。燕青がいはく、只主人の前後にあらん。盧俊義笑ていはく、かくのごときか、汝又何國へ行くや。燕青さらに答へず、盧俊義を拜し、涙をはら／＼と流し、其夜自ら貯へし金銀寶珠を一擔となし、自ら挑ひて遂に行方しらずなりにけり。

○宋公明錦を著て古郷に歸る

扨も翌日早朝に、軍卒一枚の字紙を拾ひ、是を宋公明へ呈しければ、宋江彼字紙を披き見るに、上に寫して云く、

辱弟燕青百拜懇告

先鋒主將麾下。

自蒙收錄。多感厚恩。效死幹功。輔報難盡。今自思。命薄身微。不堪國家任用。情願退居山野。爲一閒人。本得拜辭。恐主將義氣深重。不肯輕放。連夜潜去。今留口號四句拜辭。望乞主帥恕罪。

發せんと、已に人馬を用意せし處に、浪子燕青密に來て、故の主人盧俊義を勸めていはく、某幼より主人に隨つて恩を蒙り、遂に人となることを得たり、何ぞ一言に相謝すべき、今已に功なり名遂て退かずんば、次後恐らくは危ふからん、今主人と同じく官を朝廷に還し潛に去り、跡を隱して天年を終らば、豈樂しからざらんや、主人の意はいかんぞや。盧俊義が云く、我汝と倶に梁山泊に在て百戰を經、後朝廷に歸順してより、其苦楚も亦いふべからず、多くの義兄弟盡く討死すと雖も、幸に我一家二人の命を全うす、今已に功成り、錦を著て古郷に歸り、永く富貴を受べき時なるに、汝いかんぞ此不祥の言をいふや。燕青がいはく、主人の辭違へり、某曾て不祥のことをいはず、主人の言恐らくは不祥にあらずや。盧俊義が云く、我今まで少しの異心をなさず、朝廷いかんぞ我に背くべき。燕青が云く、主人聞給はずや、韓信十分の功を成ども、後は未央宮に首を斬れ、彭越は肉醬となれり、英布は毒酒を飲で死せずや、禍すでに至て後悔すとも遲からん。盧俊義が云く、我きく韓信は三齊に擅に王と稱し、陳豨をして逆反せしめ、彭越は大梁に在て、高祖に朝せず、英布は九江に任を受ながら、漢帝の江山を奪んとす、此に依て高帝詐て雲夢に遊び、呂后をして是を斬しむ、我未だ彼等がごとき高官を請ずといへども、又彼等がごとき罪を犯さず。燕青がいはく、主人已に某が辭を用ひ給は

六和寺の後山にあつまり、同様に是を拜しけり。されば火葬已に終り、骨を拾て塔に收め、魯智深の著せし衣鉢及び、朝廷より賜はる金銀は、多くの僧徒に布施し、鐵の禪杖幷に皂布の直裰は、是を寺中に納めけり。此時宋江は武松を呼出すに、未だ死せずといへども、已に癈人となりければ、車を以て京に送り、朝覲せしめんと欲すれども、武松已に官人たることを願はず、朝廷より賜る所の金銀を盡く六和寺に收め、陪用金とし、自ら無役の道人となつて、のち八十歳に至り、天年を終りけるとなり。去程に宋江は每日城中に伺候して在けるが、十餘日を經て京師より勅使杭州城へ著駕ありければ、張招討を始として、諸將勅使を城中へ迎へ奉り、勅狀を伺ふに、先鋒宋江幷に、中軍の人馬各〻列を分ち、京師に返るべしとの令なれば、張招討次の日童樞密、劉光世、從、耿の二參謀、幷に大將王稟、趙譚と共に、宋江に別を告げ、各勅使に從ひ、京師をさして發駕ある時に、忽ち楊雄は背の瘡を憂へて死し、時遷は胸痛を憂へて死したりと告ければ、宋江自ら傷むに堪ず。其時また丹徒縣より使來て、楊志已に死して、本縣の山中に葬れりと告げ、又林冲風病に染で、總身麻木たりと告ければ、宋江急ぎ軍卒に命じ、林冲を六和寺に送り、武松をして看病せしむ。されば林冲は、其病遂に癒ること能ず、後半年を經て六和寺に死しけるとぞ聞えし。宋江諸事全く終りければ、盧俊義と共に、次の日杭州を

平生不修善果、只愛殺人放火、這裏扯斷玉鎖、
忽地頓開金繩、咦錢唐江上潮信來、今日方知我是我

此時宋江、盧俊義と共に、頌を讀終て嗟嘆しやまず、各香を炷て禮拜せり。扨も城内には張招討、童樞密を始として、多くの官人も各此由を聞て、不思議の思ひをなし、急ぎ來て禮拜す。宋江自ら金帛を一山の僧にあたへ、三晝夜の法事をなさしめ、又朱紅の龕に智深の屍首を入て、徑山寺の住持大惠禪師を始めとして、諸山の諸知識を請て、經をよみ引導なさしめ、六和寺の後山に於て火葬させしめけり。此時徑山の大惠禪師は、左の手に念珠を取り、右の手に火把を取り、法語を唱て云く、

魯智深魯智深、起身自緣林、兩隻放火眼
一片殺人心、忽地隨潮歸去、果然無處跟尋
咄々、解使滿空飛白玉、能令大地作黃金

導師大惠禪師は唱へ終て火把を投ければ、一山の僧徒及び諸知識もことごとく經をよめば、宋江、盧俊義を始めとし、諸頭領及び、童樞密に從ひし朝廷の諸官人等も、各香を炷て禮拜し、涙を流し、隨喜の思ひを催せば、城中の百姓人民等も、追々此よしを聞て、老若男女皆我先にと、

日はこれ八月十五日、たゞ今はまさに三更の頃なるべし、信をたがへざるを以て潮信とは申なりと告ければ、魯智深きゝ終て、忽然として大悟し、掌を打て笑て云く、我師智眞長老、むかし我に四句の偈をさづく、夏に遇て擒にすとは、烏龍嶺の戰に夏侯成を生捉にし、臘に遇て執ふとは方臘を生捉なり、又潮を聽て圓し、信を見て寂すとは、今日のことなるべし、知らず圓寂とは何ごとぞや。僧徒答ていはく、師は出家なるに、いまだ圓寂といふことを知り給はずや、佛門中にて人の死するを圓寂と申なり。魯智深笑ていはく、已にかくのごとくならば、我たゞ今圓寂すべし、汝等我爲に湯を焚來るべしと。この時僧徒は、是戲なりとはおもへども、又魯智深のこゝろに逆はんことを恐れ、則ち湯を焼て法堂中に持來る。此時魯智深自ら洗浴し終て、天子より賜りし僧衣を著し、また人を宋先鋒の處へつかはし、此よしを知らしめ、寺僧に紙筆を求て一篇の頌を書し、自ら禪椅に上つて、左の足を右の足の上にのせ、一爐の香をたき、虚空に向つて禮拜し、雙の眼を閉畢る。此時宋江は寺僧よりの知らせを聞て、諸頭領と共に急ぎ來るに、智深は禪椅に上て動かず。一篇の頌あれば、取上て是を讀に、是智深が自筆なれば、宋江を初めとして、各奇特の思ひをなし、且讀み且感じて、驚歎せざるはなかりけり。其頌に曰く、

鼓上蚤時遷小尉遲孫新母大蟲顧大嫂

此日宋江は諸將と同じく睦州を離れ、杭州を望んで進發す。正に是金鼓千山に響き、旌旗十里に紅なり。されば三軍すでに杭州に著けるが、城中には張招討の兵馬屯せしかば、先城外の六和寺に本陣を定めて諸將を休ましめ、宋江、盧俊義とともに、朝夕城中に至つて令を聞く。されば魯智深も武松と同じく、六和寺の後への僧房に宿しけるが、江山の景色他所よりも增りければ、兩人大に悅び、また此夜月明らかに風淸くして、眞に秋水長天とともに一色といへる、王子安が句もおもひやられて面白し。二人は二更の頃まで月を賞し、各房中に入り、眠りて三更に至りしに、江上の潮聲ひゞきて雷のごとし、元より魯智深は關西の人にして、浙江の潮信を知らざれば、是を聞て大に驚き、思へらく、是必らず戰爭の聲なり、賊人再び寄來るに疑なしとて、手に禪杖を取て駈出んとせしかば、寺内の僧徒大におどろきて問ていはく、師父何れへ行給ふや。魯智深が云く、我まさしく戰爭の聲を聞出て敵を迎へんとす。僧徒大に笑ひ答ていはく、師父いまだ知り給はざるや、これ浙江の潮信なり。智深奇しんでいはく、潮信とは何事ぞや。此時僧徒窓を披て、江上をはるかに指ざすに、潮水山の如くに湧來り、其聲あたかも戰鼓のひゞきに等し。僧徒の云く、此潮信日夜に二度づつ來るに、滿干の時刻を違へず、今

し、陣に回て盧俊義と共に軍馬を取かたづけ、張招討に從て杭州に回り、勅狀の下るを相待に、次の日軍馬を發すべしと有ければ、各發足なしけり。扨も宋江が部下の諸將、ともに都て一百八人と聞えしも、三十六人のみ存世す。其人々には、

呼保義宋江　玉麒麟盧俊義　智多星吳用
大刀關勝　豹子頭林冲　雙鞭將呼延灼
小李廣花榮　小旋風柴進　撲天鵰李應
美髯公朱同　華和尚魯智深　行者武松
神行太保戴宗　黑旋風李逵　病關索楊雄
混江龍李俊　活閻羅阮小七　浪子燕青
神機軍師朱武　鎭三山黃信　病尉遲孫立
混世魔王樊瑞　轟天雷凌振　鐵面孔目裴宣
神算子蔣敬　鬼臉兒杜興　錦豹子楊林
獨角龍鄒潤　一枝花蔡慶　鐵扇子宋淸
小遮攔穆春　出洞蛟童威　翻江蜃童猛

するとも、芳名は竹帛にしるして千歳につたへ、子孫は擧られて、祭禮香華の供養を缺ずんば、武夫の本望たるべしと、こまやかに慰めければ、宋江拜謝して、しばし休息をなしにけり。されば張招討は盡くに令して、生捉にせし賊徒の内、囚車の方臘一人は京に引渡さしめ、其餘の從賊は盡く睦州において死刑に行はしむ。こゝに衢、婺二縣の賊人等も、方臘すでに亡ぶと聞て、各四方へ迯うせける。張招討の計らひに、降參する者は死を免して良民となし、産業をなさしめ、また榜を出して百姓を安んぜしめ、諸事の成敗畢りければ、睦州において太平宴をまうけ、慶賀をなし、東京に回るの用意をなしにけり。扨宋公明は自ら往事をおもひ、多く兄弟の輩を失ひしことを傷んで、洒然として涙にくれ、また杭州に在て病に染し、張横等六人の消息を聞しむるに、只楊林一人のみ恙がなく、殘る五人はすでに死亡し、看病してありける朱富、穆春も、朱富は死し、穆春のみ恙がなしと告ければ、宋江自ら悲泣にたへず、先追福の爲にとて、睦州の寺院に於て、七晝夜の法事をなし、張横、穆弘、孔明、朱貴、白勝、朱富が亡靈を慰さめけるに、生殘りし楊林、穆春は宋江より來りし使に消息を聞き、一所に歸京せんとて宋江が陣に至りける。又宋江は陣中にて亡びし人の屍を假に葬りしは、改て禮を以て安葬せしめ、又吳用と共に烏龍廟に詣りて、香を灶亨祭し、牲を供へて、神明救護の恩を拜謝

宋江睦州の寺院に六将の追薦を修せしむ

九編 巻之八十九

○其二

斯說宋朝の張招討は、劉都督、童樞密、并に從ひ來りし王、趙の兩將と同じく、睦州に在て、兵馬を合せ集めけるが、宋江、方臘を引渡さんとて睦州に來ると聞き、各郭を出て相迎へ、宋江が爲に慶賀を述ぶ。張招討が云く、將軍今邊塞の苦勞詞に盡し難しといへども、今すでに大功を立て、豈萬幸ならずや。宋江再拜し、且涕泣を拭ひ難て云く、肇某等一百八人遼を亡し、田虎、王慶を討平らげ、京師に回りし時は只一人も損ぜず、此度は未だ京を出ざる向に、公孫勝と別れ、楊子江を渡りて後は、十にして七八の大將を失ひ、今倖ひに某存すといへども、何の面目有て山東の父老にまみえんや。張招討がいはく、先鋒必らず心を勞することを歇よ、古へより貧富壽夭は前生の仕定なり、今諸將を失ふを以て、恥となすべからず、親方に戰死あれば、敵方討死尙多し、今日功成名遂げ、主上具に知り給はゞ、必ず厚く官爵を封じ給ふべし、錦を著て古郷に歸らば、誰かこれを羨まざるものあらんや、縱ひ不幸にして衆に先だちて戰死

次の日三軍に下知して諸將を連て、鸞源洞を打出で、睦州に回りけるに載せ、東京に引渡さんと、

魯智深が事は次卷に通じて見べし。

此卷に皇姪方杰の字は舊く支那人の名に用ひ、字義は豪傑の傑の字と同じすぐるゝなり。

魯智深が方臘を生捉しを見て、且駭き且悦んで、則ち問て云く、吾師いかんがして賊首を捉へ、今迄又何れにありしや。魯智深答て云く、某烏龍嶺の合戰に夏侯成を追蒐け、深く山中に入り、遂に彼を打取といへ共、道を失ひ廣野の地に至りしに、忽ち一人の老僧に遇しが、某を庵中につれ歸り、分付て云く、米穀及び、菜蔬の類、此處に多く貯へ置たれば、只此處にて時を待べし、もし大なる男有て、此處に至らば捉ふべしと有ける故に、此處にて日を送りしが、昨夜山前に大に火の光を見れ共、何れの地とも云ことを知らざりしに、今朝此賊林の邊を過るに依て、只一禪杖に打倒し、一筋の索にて綁めしに、料らずも是方臘なり。宋江が云く、彼僧今いづくにかあるや。魯智深答て云く、僧は向に某を庵中に連返り、柴薪を與へ、何れへ去りしや、其行所を知らず。宋江が云く、知るべし、是羅漢の化身、靈を現じ、我師をして大功を立しめしならん、我京に返らば天子に奏し、師を還俗せしめ、官人となし、永久に富貴を保しめん。魯智深答て云く、某の心已に死灰に等し、官人となることを願はず、只淸淨の地を揀で天年を終るべし。宋江が云く、吾師已に官人たることを願はざれば、名山大寺を住持して、長く宗風を輝すべし。魯智深首を揮て云く、すべて願はず、只此儘にて死なん事を願ふのみと。此時宋江かさねて、魯智深に出身を勸れども、都て願はざれば自ら悅びず、先方臘を陷車

ば、阮小七も小狡の持し鎗を奪取て、兩將を邀へんとす。此時呼延灼是を見て、身を横たへて相止む。宋江呉用も叉馬を馳飛來り、阮小七を喝して、違禁の衣冠を脱しめ、王稟趙譚に詫言す。されば王稟趙譚も宋江等に取さへられ、暫し顔ばせを和らぐといへ共、遂に恨の端を結びけり。此日幫源洞中には屍積で山をなし、血は流れて川をなす。宋江再び命じて火を放たしむるに、折しも狂風起り、今迄建列ねたる龍樓鳳闕も、一時の焦土となりにけり。此時宋江兵を洞口に屯し、生捉の人數を查照するに、只賊首方臘を捉へざれば、當地の百姓等に命じ、若方臘を捉へ來るものは、朝廷に奏し官を賜はん、其在所を訴る者には、黄金一千兩を與へん、と令を下されば、百姓等も皆方臘が行踪を尋んと、四方八面遠近に限らず索ける。去程に方臘は、幫源洞山上より、深山を望んで嶺を越林を過て、命を限りに走りけるに、赭黄袍も人の見咎んことを恐れ、脱捨夜通しに五つの嶺を越過て、溪の邊に至りけるに、向うに一つの草庵あり。此時方臘は且飢且疲れて、一足も引ざれば、庵中に至て休んと松の樹の邊を過けるが、忽ち一人の大和尚一禪杖を振上て、方臘を打倒し、一筋の索にて禁めける。是則花和尚魯智深なり。此時智深は方臘を縛て草庵に至り、飯を食して山下に引渡さんとせし處に、宋江の軍兵ども、方臘を尋ねて山に入來るに逢ければ、共に方臘を引渡して、宋江の軍前に至りければ、宋江は

されば方臘は近臣と同じく山上に有て望しが、此體を見て大に驚き、忽ち金交椅を蹴倒し、深山の中に遁れける。扨も宋江は大軍五隊に分れ、洞中に亂れ入り、皆我先にと方臘を搜せども、更に行踪知れず。先近臣を生捉にす。此時燕青は心腹の人をつれ、庫中に亂れ入て、金銀財寶を奪ひ、禁苑に火を放たしむ。柴進は東宮に入て見るに、金芝公主は已に縊れ死す。其餘は盡く迯失けり。宋兵は思ふ儘に深宮に亂れ入り、嬪妃を殺し、或は皇親を生捕り、猶も方臘の行踪を尋ね索む。此時阮小七は深宮に馳入て、あたりを見るに、一つの箱あれば、是を披き見るに、方臘が作らしめたる平天冠袞龍衣にて、各金銀を以て鏤たる物なれば、阮小七思へらく、我試に是を著んも苦しかるまじとて、自ら平天冠を戴き、袞龍衣を著し馬に打乘り、宮前に馳出れば、宋兵早く是を見て、方臘なりと心得しかば、各生捉んと立寄ば、阮小七なりければ、各笑を催しける。此時童樞密に從ひ來る大將王稟、趙譚は、三軍の笑を聞て何事やらんと來り見るに、阮小七は平天冠を戴き、袞龍衣を著て戲れて在ければ、兩將大に罵つて云く、汝も又方臘を學んで、逆反をなすやと。阮小七是を聞て、大に罵りて云く、汝等二人の小人、思ふに何の事をかなすや、若我宋公明あらざる時は、汝兩人の首は早く方臘が爲に切るべし、何ぞ人を侮ることの甚しきや、と叫びければ、兩將も又大に怒り、各鎗を取直せ

遙に南軍を望むに、柯引眞先に馬を出し、戰んとする時、皇姪方杰馬を跳せ、戟を横たへ止めて云く、柯駙馬少しく待給へ、先某が宋兵一人斬て後に向ひ給ふべしと。宋兵は南軍を望むに、燕青は刀を帶て柴進の後へに隨へば、今こそ計のなるべきと、各用意をなしにける。去程に方杰は眞先に馬を出せば、宋軍より大刀關勝馬を縱ち、靑龍刀を舞し來つて、方杰と相戰ふ。一來一往戰ふ事三十餘合にして、未だ勝負を分たず。宋軍の中より、花榮是を見て、方杰の後より打蒐れば、方杰は兩將を向へ少しも恐るゝ色なく、又戰ふこと七八合に至りける處に、又朱同、李應の二將馬を竝べ馳向へば、方杰は四將を迎へ叶はじと、馬を囘し、本陣にはせ返るを、柯引馬を横へ相止め、手をあげて宋將を相招けば、關勝、花榮、李應、朱同の四將馬を飛して追來る。此時柯引は手中の鎗を取直し、方杰を目がけ突懸れば、方杰大に驚き、馬より飛下り、急に身を遁れんとする間もなく、柯引に只一鎗に突れけるを、燕青早く飛來り、頓て首を刎にけり。此時南兵大に駭き、各命を逃れんと四面八方へ散亂す。扨も柯引と云しは假の名なり。實は宋將小旋風柴進なり。雲奉尉と呼れし、是又同僚なる浪子燕青なり。能洞中の案内を知て、方臘を生捉にするものあらば、高官に取立べし、又今日降參するものは命をゆるさん、逆らふ者は首を切んと、云畢て馬を囘し、四將と同じく大軍を引連れ、洞中に亂入す。

小旋風柴進
親方と戰く
方臘王
敗く

と五里ばかりして兵を收め、洞中に引退く。此時南軍中の人、柯引が英雄なること、宋江が猛將かはる〴〵戰へども、皆迯退き、後は宋江迄恐怖して、數里を迯走り、總崩れとなりたるよし、方臘に告ける故、大に悅び、先美々しく宴を開き、柯引を自ら後宮に請ひ、金杯を呈げ勸て云く、料らざりき、駙馬は是文武兼備の人ならんとは、朕もしはやくかくのごとき武藝鍛錬の英雄なるを知らば、多くの州郡を失ふまじ、今より力を竭し、朕が爲に基業を復せば、寡人と同じく萬歲の富貴を亨んとて、先杯を與へければ、柯引謹で頂戴し、又奏して云く、主上必ず安堵し給ふべし、臣力を盡し再び國祚を起さん、明日主上自ら山上に上て、臣が宋江を切退るを見たまへ、且宋江が部將に降參の者多かるべしと告ければ、方臘大に悅び、其夜は深更に至る迄、大に酒宴を催しける。されば翌日方臘自ら勅して、牛馬を宰殺さしめ。飽まで三軍に食せしめ、各衣甲を著せしめ、洞口に出て金をならし喊を作り、戰を挑ましめ、方臘自ら近臣を隨へ、幫源山上に打上り、戰の樣を伺ひける。此日宋江諸將に令して云く、今日の戰は常と同じからず、汝等各心を盡して方臘を生捉べしと。又令して云く、南軍陣上に、柴進が馬をかへすを見ば、其時齊しく洞中に切入べし、令に違ふこと有べからずと。三軍謹で令をうけ、各方臘を生捉んと、拳を撫てぞ待にける。時に宋江諸將に命じ、陣勢を列ねしめ、

汝等を殺し盡し、我城地を復するなりと、云も竟ず鎗を撚て突來れば、花榮も又鎗を撚て相迎ふ。されば兩將戰ふこと三十餘合にして、未だ勝負を分たず。此時柴進低聲に云ふ、兄長僞て負給へと。花榮心得て、少しく戰ふこと二三合にして、馬を囘し敗走す。柯引大に喝して云く、敗將あわつることなかれ、我汝を追ず、再び我と戰んと思ふ者あらば、出來るべしと。此時花榮は本陣に歸つて、宋江、盧俊義に告ぐ。吳用傍に在て云く、再び關勝を出して戰はしめよと。此時關勝馬を跳せ、青龍の偃月刀を舞し、大に罵て云く、山東の賊將我大刀を試むべしと、云も竟ず打て蒐れば、柯引も又鎗を挺へて相迎へ、兩將戰ふこと五六合にも及ばず、關勝も又僞負て敗北す。此時柯引は猶も大に呼て云く、再び猛將あらば出來れと。宋江又朱同を出して戰をなさしめけり。

○魯智深浙江に座化す

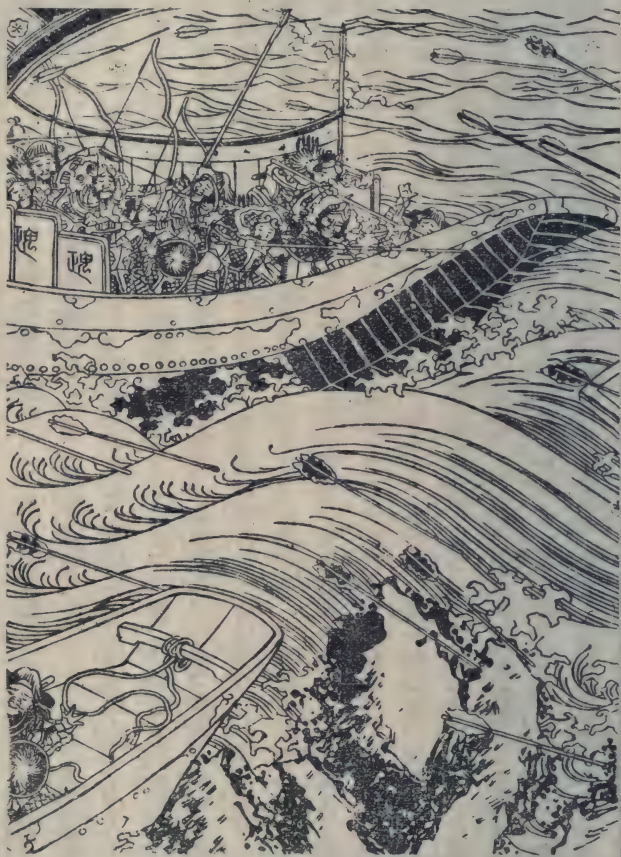
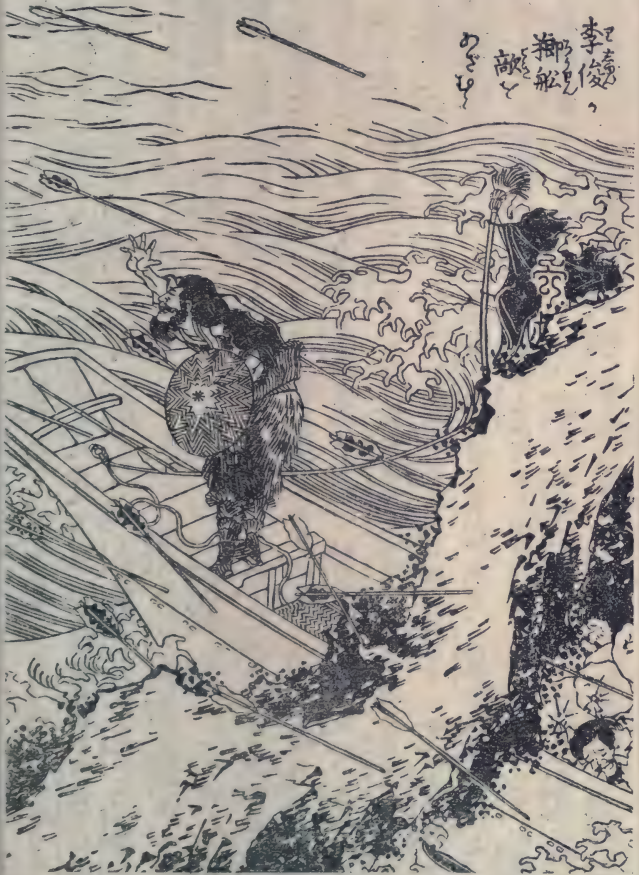
美髯公朱同戟を提げ、柯引と戰ふこと七八合、又僞負て迯ければ、柯引馬を飛し追來り、鎗を擧て空を一突衝く。朱同馬を乘棄て本陣に迯囘れば、南軍先一匹の良馬を取る。此時柯引南軍を招き、勢に乘じ切來れば、宋江僞り負て退くこと十餘里にして陣を取ば、柯引も又追ふこ

共に、大軍を以て幫源洞を圍ましむ。洞中には方臘針の氈に坐するがごとく、數日を經て、只洞口を守らしめ、出戰はず。或日方臘まさに憂悶せし處に、忽ち殿下に錦衣を著せし一大臣あり。金階の下に伏して奏し云く、我王、臣不才たりといへども、主上の聖恩を蒙ること久し、今一支の軍馬を借給はゞ、某平生學ぶ處の兵法により、又習ふ處の武術を以て、立處に宋兵を退け、國祚を中興せんはいかん、と述ければ、方臘誰なるやと是を見るに、東床附馬主爵都尉柯引なり。方臘是を聞て、大に悅び、先錦袍名馬を柯引に賜ひ、早く戰功を立べしとありければ、柯引其儘雲壁を後へに隨へ、皇姪方杰と同く御林の人馬一萬を引具し、幫源洞を出て陣を取り、此時宋江は軍馬をして洞口を圍ましめ、自ら陣中に在て往事を思ひ、多く兄弟の輩を失ふといへども、未だ方臘を捉へざれば、只悶えて在けるに、忽ち洞中の軍馬出來て戰を挑む、と報じければ、急ぎ盧俊義と共に馬に打乘り、諸將に命じて陣勢を列ねしむ。其時南軍の陣中より、柯引被甲け眞先に馬を出す。宋の軍中に是を見て、誰か柴進なる事を知らざらんや。其時宋江は花榮をして是を迎へしむ。花榮は令を得て、馬を跳せ鎗を挺へ、高聲に罵て云く、汝逆賊いかんぞ天兵に對し抵敵や、もし今降らずんば、汝を捉て肉泥となさん。柯引が云く、我は山東の柯引なり、誰か大名を知らざらん、汝梁山泊の草賊等何ぞ我に敵せんや、今

ねきよせ、一圓に攻寄たり。此時盧俊義の兵馬もはやく山を越て入來れば、宋江が兵と會合し、宋兵宛も潮の湧がごとく、四面八方より、清溪城を攻圍む。此時方臘は四方に敵を請しかど、方杰が祐を以て、漸く幫源洞中に入にけり。正にこれ縱ニ是逃ニ龍潭ニ又如ニ入ニ虎穴ニ。去程に宋江が大軍清溪城を攻破り、方臘の宮中に亂入り、我先にと火を放ちければ、方臘の宮中および金銀器物に至るまで、一時の灰燼とうせにけり。此日宋江、盧俊義は、兵を合して清溪に屯し、軍兵を算ふるに、郁保四、孫二娘は杜微飛刀を以て突殺し、鄒淵杜遷は亂軍の中に射殺され、李立、湯隆、蔡福は各重傷を被り癒ずして終に死し、阮小五は先達て清溪城に於て、婁敏中に殺されたりと。此時諸將は南國の僞官九十二人を生捉て、宋江の前に引渡すに、婁敏中、杜微見えざれば、人を分つて尋しめ、且生捉たる僞官を盡く、張招討の軍前に引渡し、首を斬り、又榜を出して百姓を安ぜしむ。されば次の日百姓來つて告けるは、婁敏中は阮小五を殺すによつて、宋兵已に清溪城を打破ると聞て、自ら松の樹に縊れ死し、杜微は彼が情熟の妓、王喬といへる者の家に隱れしを、杜老に欺かれ生捉れ、只今引渡せりと告ければ、宋江厚く杜老を賞し、蔡慶に命じ、婁敏中が首を斬しめ、又杜微の腹を割き、肝を取り、秦明を肇め清溪に戰て亡びたる諸將の靈を祀り、香を炷て追福懇なりけり。有左程に次の日宋江、盧俊義と

卒、撓鉤を以て秦明が屍首を取り、本陣に歸りければ、宋兵悉く色を失ひ、哭ぬ者はなかりける。宋江先棺椁を備へ、屍首を假に葬しめ、再び軍將を出して戰はしむ。此時方杰は勝に乘て、眞先に進み高聲に、宋兵誰か我に敵する者あらんや、と呼れば、宋江聞て、急ぎ軍前に出て望むに、方杰の後に龍鳳の旗風に飄り、鐵斧畫戟林のごとく建列ね、黄羅傘の下白馬に乘たるは、草頭天子方臘なり。頭に日月冠を戴き、身に九龍袍を著し、自ら戰を挑み、宋江を見、方杰に命じ捉へしめんとす。宋江も又準備して是を迎ふ。此時方杰馬ををどらせて陣前に馳出んとせし時、忽ち飛馬來て報じけるは、御林の都敎師賀從龍軍馬を領し、歙州に向ひしが、宋兵の先鋒盧俊義に生捉にせられ、人馬こと〴〵く四方に散亂し、宋兵勝に乘て已に山後迄攻來れり、と告ければ、方臘大に驚き、先軍を收めて、大內を守らんことを命じければ、方杰、杜微と同じく御駕を守り、兵馬を回し、清溪の界まで至りしに、清溪城中には喊の聲大に發り、火の光天地を焦すばかりなり。是元より李俊、阮小五、阮小七、童威、童猛等が火を放つなり。時に方臘大に驚き、御林の軍馬を進めて、城中の火を救はんと已に城下に至りけるに、早くも城上に宋軍の旗號なれば、あきれ果てぞ扣へたり。されば宋江の兵馬は、南兵の退くを見て追蒐しが、清溪の界に至つて、城中に火の起るを見、心中に李俊等が事を行ふを知り、急に兵馬をま

萬乞某等を麾下に止め給はゞ、永く忠勤を勵むべしと、告ければ、婁丞相も是を信とし、則ち李俊を內裏につれ來て、方臘王に朝見せしめ、兵粮を獻じ、降參するよしを奏しけるに、方臘も坦然として疑ず、李俊、阮小五、阮小七、童威、童猛をして淸溪の水寨を守らしめ、近日宋江の兵を打退くるを待て、各賞賜あるべしとのことなれば、李俊等は拜謝して、各水寨を守りけり。去程に宋江は吳用と共に分調をなし、まづ關勝、花榮、秦明、朱同の四將を先陣となし、淸溪の界に進しめけるに、早くも南國の皇姪方杰が兵に出合ければ、兩軍互に喊を作り、南軍の陣中より、方杰戟を横たへ馬を出せば、杜微歩行して後にしたがへり、彼杜微身に鐵甲を著し、背に飛刀を隱し、手に七星劍を携へたり。宋江の陣中より、秦明眞先に馬を出し、狼牙棍を舞して、方杰と戰ふこと三十餘合にして、いまだ勝負を分ず。方杰は心中に秦明の手段勝れたるを知りければ、自ら平生の本事を遣て、少しも空閑を使はず。秦明も又祕術を盡し猶戰ふこと三十合、豈料らんや、杜微は方杰の秦明に勝ざるを見て、忽ち飛刀を秦明の臉の上へ飛し來れば、秦明急に避る時、方杰其間を伺うて只一戟に秦明が脇の下を突ければ、忽ち馬より落にけり。憐むべし鬼神に勝る秦明も、南柯の一夢となりける。正に是由來霹靂動天地。到此寂然無一聲。此時方杰は再び戟を以て秦明をゑぐり、猶も近く攻來る宋軍の小

李俊の櫓船に敵をあざむく

聞ば、必ず疑はずして、味方に加ふべし。宋江が云く、軍師の高見きはめて明かなりとて、其夜戴宗を召て委しく說示し、水軍の頭領李俊等に傳へしむ、されば戴宗は、李俊等に委しく計を授けければ、李俊等謹で承り、先阮小五、阮小七を艄公の形に出立せ、童威童猛を水手となし、六十艘の船に多くの米を積あげ、大溪より搖出し、已に清溪に近付んとするに、忽ち南國の戰船四方より搖來り、雨のごとく矢を放てば、李俊船端に出て、大に叫んで云く、我等は是糧米を南國に獻じて投拜するの人なり、萬乞我等を麾下に加へ給はゞ、何の幸か是に過んと、高らかに呼れば、船上の軍卒、遙に李俊等が船を見るに、何も軍器もなき體なれば、則制して矢をとゞめ、人を遣し委細を問はしめ、船中の糧米を點見し、婁敏中に報じて云く、宋兵李俊兵糧を獻じて投降ると。此時婁敏中委しく問て、李俊を帳下に召出し問て云く、汝は是宋江の麾下に在て何の職をなし、今又何の爲に我に降參するや。李俊拜し畢て答て云く、某姓は李、名は俊、もと潯陽江上の者なるが、始め、江州の法場を劫し、宋江の命を救ひしに、今朝廷の命を承て、先鋒と成てより前日の恩を忘れ、屢〻某を辱しむ、宋江今已に州郡を得ること多しといへども、麾下の良將次第に亡ぶ、然るを進退を知らず、猶以て某を辱しむ、これを以て恨骨髓に徹す。今わざと潛に糧米を盜み來つて大國に獻ず、

前の金吾上將軍、內外の諸軍都招討、皇姪方杰を正先鋒とし、馬步新軍都太尉驃騎、上將軍杜微をもつて副先鋒となし、幫源洞の大內御林の軍馬一萬五千騎、戰將三十五人を隨へて、自ら戰を決せんと、已に用意をなしにけり。抑此方杰は方臘が姪にして、歙州の皇叔方垕が孫なり。萬夫不當の勇有て能方天畫戟を使ひ、至る所敵する者なし。此度宋兵方垕を殺したるを聞て、大に怒り、正に讐を報んとす。抑又此杜微と云は、元是歙州山中の鐵匠なるが、よく六口の飛刀を使ひ、萬夫不當の勇有とかや。此時方臘は別に御林護駕の都敎師駕從龍に一萬の兵を差添へ、歙州を救はしむ。去程に宋江が大軍睦州を離れ、水陸の兩所より、淸溪縣へ馳向ふ。宋江は吳用と馬を竝べて同行し、馬上に在て議して云く、此度淸溪、幫源の兩所を攻取んに、方臘早く知らば、深山に隱んも測がたし。其時誰か一人見知る者なければ、遂に賊首を生捉にすることと能はざらん、然る時は京に歸つて、何を以てか天子の面前に引渡さん、かならず裏に應じ、外に合する計を用て、方臘を擒にすべし、向には柴進、燕靑を遣しけれ共、いまだ其消息を聞ず、今又別に人を遣し、詐り降らしめんに、しかず何人を遣してか可ならんや。吳用が云く、某が愚意に因に、水軍頭領李俊等を遣はし、船中に多く兵糧米を積ましめ、是を獻じて詐り降らしめば、此計必ず成べし、方臘は、もと山僻の小人なれば、多くの糧米を獻ずと

家の大事を理め給ふべし。宋江答て云く、軍師の言其理有といへ共、當初石碣天文に記する處の百八人、此地に來て其大半を失へり、豈悲に堪ざらんやとて、又簌々涙を流しければ、吳用再三諫めて、漸と涙を斂め、囘書を盧俊義に遣し、日を定めて兵を起し、清溪洞を攻取んと約しけり。去程に清溪洞の中には、方臘王文武の百官を集め、軍の商議して在ける處に、忽條西州にて敗軍せし兵卒共、囘り來て奏しけるは、歙州已に宋兵に打破られ、皇叔及び王寅、高玉も共に討れ、宋兵追付兩路より清溪洞に攻詰ると告ければ、方臘聞て大に驚き、急ぎ衆官を召て、宋兵を退んことを計りけり。方臘が云く、汝等衆卿各官爵を蒙り、共に州郡を保ち、皆富貴を同うす、料ずも、今宋江が兵に數ケ所の城郭を奪れ、數人の將を討れ、多くの士卒を失へり、只清溪の大内有のみにして、其他は悉く敵に奪れたり、今又宋兵兩路より攻來るよし、いかゞして是を防んや。左丞相婁敏中進み出奏して云く、只今宋兵已に神州に近付き、內苑宮廷も又保ちがたし、兵懦く將寡く、恐らくは敵し難からん、只々君の御駕自ら征伐なし給はずんば、二三の將士も心を盡し戰ふまじ。方臘聞て尤なりと同じ、其儘令を下し、三省御史臺、樞密院、都督府、護駕二營、金吾龍虎の衆官に命じ、皆朕に隨うて一戰を決すべし、と宣じけり。婁丞相又奏して云く、君又何れの將帥を以て先鋒となし給ふや。方臘が云く、殿

退んとせし處に、王寅はやくも鎗を取延べ、遂に李雲を突伏けり。石勇、傍より是を見て、大に怒り、刀を奮て砍て蒐れば、王寅鎗を挺へて突蒐たり。兩將戰ふこと六七合、石勇竟に敵すること能ず、刀法次第に亂れければ、王寅早く便宜を伺うて、石勇を突殺す。宋兵是を見て、孫立、黃信、鄒淵、鄒潤の四將各勇を奮て切止めたり。王寅は南軍中の勇將なれば、四將を迎へ猶も恐るゝ色なく、火花を散し戰ひける處に、林冲鎗を取て背後より突蒐ければ、縱ひ鬼神なり共、などか衆人に敵し得ん、忽ち五將に突殺さる。五將は此趣飛馬にて盧俊義に注進す。其時盧俊義は已に歙州城を奪ひ取り、城中の行宮に入りて休息し、軍馬を城裏に屯し、札を出し百姓を安んじ、使者を以て歙州城を得たることを、張招討幷に宋公明に告知せ、且近日の内、兵を一所に合せんことを約したりけり。去程に宋公明は睦州城に屯して、唯盧俊義の來るを待ち、ともに軍勢を合せ、清溪洞を攻取んと豫て准備しありける處に、盧俊義の方より飛脚來て、歙州城を奪取り、百姓を安んじ、追付兵を合て、賊洞を攻んことを告ければ、宋江大に悅びけるが、又史進、石勇、陳達、楊春、李忠、薛永、歐鵬、張靑、丁得孫、單廷珪、魏定國、李雲、石秀十三人軍中に討死せしと聞て痛く哀みければ、吳用傍より諫て云く、生死は皆天命にして、人力の曁ぶ處にあらざれば、先鋒强て傷み、尊體を勞煩し給ふことなかれ、先國

じ、厚く是を葬らしめ、且龐萬春を引出し、腹を割て肝を剜出し、亡將歐鵬、史進の輩を祭り、首を切て張招討の軍中に送りたり。されば翌日盧俊義は諸將と同じく、勢に乘じて歙州の城中に攻寄けるに、城門開かず。城上を望むに一人の軍兵もなく、一本の旗もあらざれば、單廷珪、魏定國は各功を立んとて、眞先に城中へ砍入ければ、盧俊義も續て押寄けるに、不思議やな、單廷珪、魏定國、共に城門に推入ると見えしが、忽ち直倒に坑中に陷入けり。原來城中には王寅二人の親方を失うて、詐城を棄て逃ると見せ、豫て數ヶ所の陷穴を掘置けり。其時單廷珪、魏定國の兩將は、料らずも坑中に陷入ければ、四方の伏勢一度に起り、終に亂軍の中に殺されけり。憐むべし、聖水、神火の兩將も南柯の夢となりけり。盧俊義は又二將を失ふを見て、大に怒り、急に前軍の士卒に命じ、各土塊を取て投入々々、遂に坑中を埋ましめ、潮の湧がごとく推寄ければ、南兵却て其勢におどろき、散々に敗走す。其時盧俊義眞先に馬を躍せ、城中に入けるに、皇叔方垕に出遇ければ、盧俊義怒りの眼を開き、平生の祕術を使ひ、只一刀に方垕を馬より下に切捨たり。此時南軍散々に敗北し、城の西門より各逃れければ、宋兵追かけ追つめ、多く南兵を生捉けり。去程に王寅、宋兵に歙州城を攻敗られ、馬を飛せて逃れける處に、李雲に出遇ければ、鎗を挺へ戰ひしが、李雲は元來步立なれば、遂に敵すること能ず、

乘じ討給へと。高玉も其儀に同じ、軍兵に下知して、急に陣門に進ましむ。其時衆人各鎗長刀を取て我先にと中軍に至て見るに、唯一人の影さへなく、四方の柳の樹に數十疋の羊を縛り付け、蹄に鼓の撥を拴て大鼓を打しめければ、其音亂れて聞えたり。時に高玉、龐萬春は、其計に中りたるを知り、大に驚き、急に士卒に下知して、引返さんとせし處に、陣中より忽ち火起り、又山上に火炮の響して、四方の伏勢一度に喊を作りければ、其聲山野に充々て逃るべきやうぞ見えざりけり。此時高玉、龐萬春の兩將は、士卒に命じて引退んとせし處に、宋の軍兵潮の湧がごとくに砍蒐りければ、兩將は勇を奮うて一方を切ひらき、已に逃んとせし處に、後より呼延灼大に喝して云く、賊將逃るゝことなかれ、早く馬より下つて降參し、一死を免るべし、と呼りければ、高玉は猶も慌てて戰ふに心なく、馬を馳て逃れんとせしに、早くも呼延灼に追付れ、兩の手に雙鞭を揚て、腦袋を打碎かれ、微塵に成てぞ死しにける。龐萬春是を見て、大に驚き、只顧走りけるに、料らず湯隆豫て路の傍に潛んで在けるが、鉤鎗をもつて馬の前足を拖掛られ、遂に湯隆に生擒られけり。宋軍勢に乘じ砍輪りければ、南軍誰かは抵敵べき、散々に敗走す。去程に盧俊義は一戰に打勝て本陣に回り、まづ親方の軍兵を點檢するに、丁得孫昨夜山路の草の中にて、毒蛇に咬れ、毒氣腹中に入て死たりと告ければ、盧俊義士卒に命

將を失ひ心中に悲み、朱武を呼で議しけるに、朱武が云く、勝負は兵家の常の事なれば、必ず勞し給ふことなかれ、今日賊人我に勝を以て、今夜必ず夜討に來るべし、今呼延灼に人馬を添て、陣の左に伏せしめ、林冲に人馬を添て陣の右に伏せしめ、其餘の諸將は四方の小路に伏せしめ、中軍には多く羊を縛て、此のごとく〳〵と述ければ、盧俊義尤と同じ、其儘用意をなしにけり。去程に欽州の城中には、王寅、高玉、龐萬春等、皇叔方臘に申して云く、今日宋兵大に破れ、退くこと三十里退て陣を取ぬ、定て人馬疲れ倦て休むべし、今夜此勢に乘じ陣を攻打ば、必ず全き勝を得べし。方臘が云く、汝等宜しく行ふべしと。高玉が云く、某は龐萬春と共に兵を引て向ふべし、王尙書は殿下とともに、城中に在て守り給へとて、已に三更の比ほひに至て、自ら披掛て馬に打乘り、龐萬春と共に軍馬を引つれ、各枚を含で潛に城中を打出で、宋軍に至り、密に陣中を伺ふに、陣門さへ堅く閉ざれば、南軍擅に打入ず。陣中の更鼓を聞に、初の程は分明なれ共、後には大に亂れ打にけり。高玉は謀略有人なれば、馬を駐てあへて進まざれば、龐萬春が云く、相公何ぞ馬を進め給はざる。高玉答て云く、陣中の更鼓亂れ打は、敵必ず計あるにあらずや。龐萬春が云く、相公必疑ふことなかれ、某愚意に思ふに、敵軍今日敗北して、ともに膽を寒し、只睡中に更鼓を打に依て亂れ候ならん、唯勢に

を授け兵權を司どらしむ。去程に龐萬春は料ずも、昱嶺關を宋兵に奪れ、這々一方を逃れ出で、歙州の行宮に至り、皇叔方臘に見えて事の子細を語りければ、方臘聞て大に怒て云く、此昱嶺關は此處第一要害の地なるに、宋兵に奪れば、彼等攻來ん時いかんがして迎ふべき。王寅進み出奏して云く、主公先雷霆の怒を息給へ、古より云く、勝負は兵家の常なり、戰の罪にあらず、只今主公しばらく龐將軍の罪をゆるし、先將軍を先立て、敵を切退けしめ、若再たび負なば其時こそ罪を罰し給へ。方臘が云く、是可なりとて、則五千の兵を龐萬春に與へ、眞先に敵を迎へしむ。其時盧俊義が大軍已に城下に押寄せ、金を鳴して戰を挑みける。此時龐萬春馬を跳らせ陣前に馳出れば、宋の軍中より歐鵬馬を躍せ、鎗を撚て相迎ふ。兩將戰ひいまだ十合にも至らざるに、龐萬春僞り負て迯けるを、歐鵬は一番の功を顯さんと、馬を飛し追蒐けるに、龐萬春は思ふまゝに釣寄せ、身を扭向て一箭を放つに、歐鵬透さず箭を手に取しに、元より龐萬春が射しは管矢なれば、第二の矢に胸元を射られ、馬より落て死にけり。城上には、王寅遙に龐萬春が勝を得るを見て、大に鼓をならし、軍兵を進めしかば、宋軍大に敗北し、三十里ばかり退て陣取し、兵馬を點檢するに、又亂軍の内に菜園子張靑も、何者にか殺されければ、孫二娘は丈夫の死せるを見て、大に悲み、屍を厚く後山に葬れり。されば盧俊義は、又兩

ば、南軍の人々大に驚き、戰はずして大に亂る。龐萬春は是を見て、急ぎ雷烱、計稷と屋後に來て火を救んとせしに、時遷又火炮を放て、其音天地を崩すばかりなれば、南兵驚き、各鎗刀を抛去て、我先にと迯走る。此時時遷は高聲に、宋兵一萬はやく關を打取たり、汝等早く降參せば、一死を免るべし、と叫びければ、龐萬春を始として、雷烱、計稷も大に驚き、都て惣身麻木たるごとくにて、半時ばかり動くことあたはず。此暇に林冲、呼延灼眞先に關を打破り、散々に南軍を切殺す。されば孫立は雷烱を生捉たり。魏定國は計稷を生捉にせしかども、只龐萬春のみ何れへか迯失けん、行方知ず成にけり。されば宋兵已に亂入り、盧俊義忽ち昱嶺關を得て、大に時遷の功を賞し、先雷烱、計稷を引出さしめ、腹を割肝を取て、史進を始めとして、弩にて殺されし六將を祭り、次の日文書を以て昱嶺關を取し趣を張招討に告げ、自ら大軍を引具し歙州の城下へ攻寄る。抑此時歙州を守る大將、皇叔大王方垕と申て方臘の叔父なり。又二人の副將あり、尙書王寅、侍郎高玉と云ふ。又十餘人の猛將二萬餘騎の兵を以て、此歙州城を鎭守せり。尙書王寅は本當地の石匠なれど能鎗を使ひ、又一匹の名馬に騎て至る處の戰勝ずと云ことなし。此馬を轉山飛と名付て、山に上り水に臨で、平地を行がごとしとかや。又侍郎高玉は當地の故家の子にして、能鞭を使ひ、兼て謀略あり。此に依て方臘彼二人に官職

九　巻之八十八

○宋公明智をもつて清溪洞を取る

偖も鼓上蚤時遷は嶺の頂に至り、東の方を望に、火の光天を焦して白晝のごとし。是盧俊義、朱武大軍を以て火を放ち、山林を燒路を開き、關上に攻上るなり。昱嶺關上には小養由龐萬春、宋兵の火を放ち林を焚き、路を開くと聞て云く、此彼等が兵を進むるの法なり、我等は只堅く此關を守るべしとて、自ら雷炯、計稷と共に弩弓を竝べ、相扣て敵の動靜を見合居る。正に是前門に狼を防ぎ、後門に虎を進むるの類なり。時遷は早く關上に忍び入り、大樹の頂に上り、枝葉の茂りたる處に身を隱し、關前を見るに、龐萬春、雷炯、計稷と倶に陣門を固めたり。關下には宋兵はや攻寄せ、林冲、呼延灼馬を扣へ、大に罵りて云く、賊將いかんぞ天兵に敵するや。龐萬春大に怒り、已に弩を放んとす。此時鼓上蚤は早く樹の上より爬下り、關の後ろに至るに、多くの柴薪を積置たれば、先硫黄焔硝を揮かけ、火を燧て是に傳け、自ら屋脊に上り、火炮を放つに、其音山河に響き、かの柴薪に火一齊に起り、天を焦すばかりに、炎を卷て燒上れ

少しく明なれば、遙に四方を望むに、石壁嵯峨として、下に一筋の小路あり。こと〴〵く大石を以て路口を塞ぎ、高く築て墻のごとし。小僧が云く、將軍此石壁を過給はゞ、直ちに大路に至る、此昱嶺關に通ずる路なり。時遷が云く、我已に路徑を知れり、汝は是より歸るべしとて、小僧に謝して回し遣はし、其身は平生の手段を以て、岩を傳ひ、石を登る始末、次巻にくはし。

方臘が參政の官沈壽を、ちんじと訓は非なり。二巻目の末に云如く、沈の字しづむと訓はちんなり。人の姓氏はしんと訓べし。壽も普通の訓來る和讀にて、正音は壽なり。

忍び入り、合號の火炮を放ち、且又火を放たば、我計成就すべし。時遷が云く、已に炮を放ち火を傳ることならば、別に一人を添るに及ず、某一人此ことを成就なさしめん、別人を伴うて難所にいたる時は、我脊を飛び、壁を走る手段に及ず、却て時を延し大事を誤ち、我が手足纏になるべし、只知らず軍師は何の計を以て、關上に攻上り給ふや。朱武が云く、此事は容易し、向には敵の伏勢ありしに、利を失ふといへども、此回は敵の伏勢のあるなきに拘らず、只山林の茂たる處に至つては、火を放て是を燒ば、敵いかんぞ伏勢を用る所あらん。時遷が云く、軍師の高見究て明かなりとて、時遷は、火石、火刀、火藥を集め、火砲を包袱に蘊み背に負ひ、用意已に終りければ、盧先鋒、朱武に別れ行んとす。其時、盧俊義は銀二十兩糧米一石を彼老僧に送んとて、軍卒に荷はしめ、時遷の後に從はしむ。去程に時遷は向の路を尋ね、再び草庵に至て、彼銀子糧米を老僧に與へ、軍卒は本陣に回し、老僧に小路を案内せんことをこひければ、老僧が云く、將軍今少しく待ち、夜に入て行給へ、白晝に往給はゞ恐らくは關上の人に知られ、大事に及ぶべしと相止め、已に日暮に及しかば、晩飯を備へて時遷を款待し、さて小僧をして路の案內をなさしめける。されば時遷は夜に入て、案內の小僧と倶に草庵を離れ、林を過嶺を越え、葛を手操藤を擧て、數里を過けるに、山嶺の嶮しき處に至る。此夜月のいろ

此處の百姓も久しく方臘の害を蒙り、一人も恨みざる者なし、況んや老僧がごときは、常々施主の齋糧を得て、其日を過す者なるに、今人民こと〴〵く四方へのがれされば、只此處にて死をまつより外はなかりしに、今幸ひに天兵の至り給ふこと、豈悦しからずや、君も又官兵ならば、老僧語らんも苦しかるまじ、只此處には別に關を過る路なし、然れ共西山の邊に一條の小路有て、關上に通ふ、近來賊人其路を塞ぐよし。時遷が云く、已に此一路有とも賊人の本陣に通ずるや否や。老僧が云く、此路此關上に通じて、直ちに龐萬春の陣の後に至らるれど、近來賊人大石を以て其路を塞ぐよし、いかんぞ通ふことを得んや。時遷が云く、苦しからず、已に此路有からは、某別に手段あり、今回りて此趣を主將に告げ、再び來て、老僧に酬い奉るべし。老僧が云く、將軍必ず、我此路を君に語りしことを語り給ふことなかれ。時遷が云く、老僧此ことを案じ給ふな、我何ぞ他人に語んやとて、老僧に別れ、急ぎ陣中に回て、盧先鋒に斯と告ければ、盧俊義大に悦び、軍師朱武を請て關を攻る計を議するに、朱武が云く、もし此路さへあれば、昱嶺關を得んこと囊を探て物を取が如し、某が愚意に寄に、時遷に一人を添て扶けしめ、此大事をなさしめん。時遷が云く、軍師我に何の大事を成しめ給ふや。朱武が云く、別のことにあらず、是火を放ち炮を打のことなり、足下今密に火器を帶び、敵の後に

未だ委しく水戰に慣ず、此を以て今地の利を失へり、某が愚意によるに、今當所の百姓の中にて、能地利を知れる者を得て、此山の曲折を知る事を得ば、計を施すに便あらん。盧俊義が云く、軍師の言極て當れり、知らず何人を遣して、此輩を索むべき。朱武が云く、鼓上蚤時遷こそ蒼を飛壁を走る人なれば、究竟に候はずや。此時盧俊義、急ぎ時遷を呼で、委しく命じければ、時遷謹んで領受し、多くの乾糧を帶び、陣中を出で、深山をさして行くこと半日ばかり、日も已に暮ければ、何れにか宿せんと、四方を望に、遙山上に燈の光見えければ、彼所にこそ必ず人家あらんと、足をはやめて彼所に至るに、一つの僧庵有ければ、時遷は庵の前に來り、密に窓の透間より内を覗くに、八十ばかりの老僧、經を讀でありければ、門口に來て戸を敲くに、彼老僧一人の小僧を呼で門を開かしむ。時遷内に入て禮を施す。老僧怪み問て云く、客人はいかんぞ今戰地を經て、此深山に來れるや。時遷答て云く、某實に師を欺ずして説ん、某は梁山泊の宋公明が手下の將にて、時遷と申者なり、此度天子の勅命を奉て、方臘を征せん爲に、此昱嶺關迄至りしが、昨日の戰に亂箭を放たれ、親方の將卒を損ずること多し、尤關を越る計なし、是故に某をして別の小徑を尋しむ、今深山曠野を經て、此處に至れり、萬乞師父別に小徑有ば、我にをしへて此嶺を踰しめば、厚く此恩惠を報ずべし。老僧が云く、

と聞り、早く出來て、我と弓術を較ぶべし、先我手段を見せしめんと、未だ云も終らず、弓を挽て颼と放ければ、其矢史進の胸を射て馬より攧落しかば、石秀、陳達、楊春、李忠、薛永の五將、共に來て救はんとせしに、忽ち山上に鑼を響して、左右の松林の裏より、雨の如くに矢を放ちければ、五將は史進を救ふこと能ず、各命限りに走て、一つの山の嘴邊を過る時、山上には雷烱、計稷猶も下知して、矢を放たしむること雨よりも繁く、たとひいかなる英將たりとも逃るべきやうなく、憐むべし、さしも鬼神と聞えし水滸の六將、遂に弩に射立られ、南柯の一夢と失にけり。されば三千の兵も多く弩にあたり、只百餘人の小卒、這々命を遁れ囘り來て、委く盧先鋒に報じければ、盧俊義大に駭て、只醉るが如く、半時ばかりは言いふこと能ず。神機軍師朱武も、陳達、楊春は、別して華州華陰縣の少華山にて、倶に頭領をなせし無二の黨類故、哭てありしが涙を拭め、來て盧俊義を慰め云く、先鋒強て悲みを止め給へ、却て大事を誤るべし、早く計を廻らし關を破り、敵を切て此恨を報ずべし。盧俊義が云く、宋公明我に多くの軍馬を差添へ給ふに、未だ一戰にも勝ず、先六人の大將を失ひ、三千の步卒もやう〳〵百餘人に打なされ、何の面目有て、宋公明にまみえんや。朱武答て云く、古人云ることあり、天の時は地の利にしかず、地の利は人の和にしかずとかや、我等は元中原山東の者にて候へば、

ば、唯鬱々として樂ず。先睦州城に屯して、盧俊義の至るを待ち、兵を合せ淸溪洞を攻取んと、暫く軍馬を休めけり。去程に盧俊義は、杭州にて宋江と分れてより、二十八人の軍將を引率し、其勢都合三萬餘騎、杭州路より山路を經て、臨安鎭を打過ぎ、昱嶺關に著にけり。抑此昱嶺關は杭州第一要害の地なれば、方臘手下の大將龐萬春を遣して、此關を守らしむ。是龐萬春は江南の人にして、方臘軍中第一弓の名人なれば、世の人名づけ小養由基と呼にけり。又手下に二人の副將あり、雷烱と計稷となり。共によく八百斤の勁弩を放ち、又能鎗棒を使ひ、渾て萬夫不當の勇あり。龐萬春は宋兵昱嶺關に向と聞き、士卒に命じ、數千の弩弓を關上に置き、各準備をなしにけり。されば盧俊義は昱嶺關の下に陣取し、先史進、陳達、楊春、李忠、薛永の六將に三千餘騎の精兵を差添て、眞先に進しむ。史進等六人は都て馬に騎り、其餘は步にて關下に至りけるに、曾て一人の敵もあらざれば、史進大に疑ひ、衆將と商議せんとせし處に、忽ち嶺上に鼓の聲響きければ、史進首を仰で關上を望に、一面の綵りたる錦の旗を立て、彼小養由基龐萬春眞先に進み出で、史進等を見て、大に笑ひ罵て云く、汝等衆賊梁山泊に在て、盜をなすこそ相應なるに、今宋朝の招安を蒙り、輕々しく我國に向ふは、螳螂斧を振て、立車の隧に向ふに異ならずや、傳へ聞く、汝の軍中に何の小李廣とやらん云賊有て、弓を好す

上の大に騒ぐを見て、自ら謀て、味方の軍勢すでに嶺の西を攻けると知ければ、急に衆將を招き、大に喊を作り、嶺の東より攻寄ける。石寳は宋軍に東西を圍れ、自ら想道く、已に逃るゝに道なく、又敵軍に捉られ、其辱しめを請んよりはとて、劈風刀を引拔て首を刎てぞ死したりける。此時南軍大に亂れ、各戈戟を打棄て、我先にと迯去れり。宋軍は安々と烏龍の關を奪取り、關勝は使を宋江の陣中へ遣し、捷軍の趣を報じけり。されば水軍の大將成貴、謝福、翟源、喬正の四人は、已に烏龍嶺の敗れしを見て、水寨を捨岸を越て迯けるに、成貴、謝福は農民に生捉れ、睦州宋江の手へ引渡さる。翟源、喬正は遂に行踪を失ひけり。童樞密、劉都督は已に烏龍嶺を奪ひ、一千餘騎を分つて關隘を守らせ、自ら大隊の軍馬を引せ睦州に回りけり。宋江は二十里の外に出て相迎へ、各城中に入て軍馬を休め、先榜を出し、百姓を按撫しければ、南兵の降參する者其數を知らず。時に宋江は悉く米倉を開き糧米を取出し、百姓并に降參の者に與へ、各故鄉に回しければ、皆慈悲の心を感じけり。されば水軍の大將、成貴、謝福二人を、陣前の松樹に縛り、各腹を割て肝を取り、阮小二、孟康を始として、烏龍嶺にて亡びける衆將の亡靈を祀り、再び李俊等の水軍の將に命じ、南軍の賊將を張招討の軍前に解さしめ、各首を斬にけり。宋江は此度の一戰に烏龍嶺を奪ふといへども、又呂方、郭盛を失ひしか

○盧俊義大に昱嶺關に戰ふ

此時關勝は遙に嶺上を望みけるに、南軍大に亂れければ、何事にやと暫くが程訝かりて伺ひ居る。抑其故を尋るに、石寶原來烏龍嶺の東を堅め、嶺の西を隄防せざりければ、童樞密其暇を伺て、大に軍兵を分ち攻上りければ、南軍大に騷ぎしなり。宋軍の大將王稟馬を縱て、嶺上に攻上りければ、南軍の方よりは副指揮景德、戟を挺て兩人戰ふこと十餘合、王稟戟を舉て景德を砍ければ、馬より落て死し失ぬ。王稟勢に乘じ、呂方、郭盛を前に進め、直に山を上りて第一の嶺を越んとせしかば、計らずも山の上より、大石を打下しけるに、其石郭盛の頭を碎き、微塵に成て死しにけり。呂方是を見て大に怒り、戟を携へ、嶺上に上りけるに、南軍の内より、白欽鎗を以て突蒐けたり。呂方は早く身を扭過けるに、其鎗呂方の脇下を過て箇空を突き、大に慌けるを、呂方其透間を伺うて、鎗を奪んと取かゝれば、白欽は奪はれじと、二人は馬の上に鎗を引合爭ひしに、各力施屏すること能ざれば、二人は鎗を拋捨て、手に手を組で揪合けるに、原來山嶺峻しくして、馬の脚處定まらざれば、兩馬は忽ち亂石に趺き倒れければ、二人は手と手を取組て萬丈の深谷に陥り、微塵に成て死しにけり。去程に關勝は嶺

道乙は宋軍の中に風雷の響起るを聞き、急に身を避んとせし處に、忽ち凌振に轟天炮を放たれければ、何かは以て保つべき、首も身體も微塵になつてぞ死にける。既に南兵大に亂れければ、宋江は勝に乘じて睦州に切入たり。其時朱同は只一鎗に譚高を突殺し、李應は刀を飛して伍應星を殺しける。此時宋江の大軍、都て城中に亂れ入り、祖士遠、沈壽、桓逸等を悉く生捉にし、其他は姓名をも問ず、悉く切殺し、先火を以て方臘の行宮を燒拂ひ、貯置し金銀は悉く三軍に分ち與へ、百姓を安んじ、猶も軍事を議して在ける處へ、探馬來て報じけるは、烏龍嶺大路の軍に、馬麟は白欽に突殺され、燕順は石寶に流星槌にて打殺さる、是によつて、石寶、白欽、勝に乘て攻來れりと告ければ、宋江は又二將を失ふと聞て、大に哭き悲しみ、先花榮、關勝、秦明、朱同を遣して、石寶が軍を迎しむ。此時關勝等は宋江の命を領し、馬を躍らせ軍兵を引率して、烏龍嶺に向ひしが、早く石寶の軍馬に出遇しかば、關勝馬を軍前に乘出し、大に罵て云く、賊將いかんぞ我兄弟を殺すやとて、直に打て懸りければ、石寶は關勝なるを見て、戰に心なく、馬を囘し嶺上に去ければ、關勝猶追んとせしが、指揮使白欽馬を躍せ、直に關勝と戰ひける。時に嶺上に石寶鑼を鳴して軍を收ければ、白欽は關勝を捨て山上に囘りけり。關勝は馬を扣へて更に追ず。

死戰せずんば何を以てか是を解ん、城敗れなば我等都て擒と成べし、諸將いかゞと有ければ、鄭魔君尤と同じ、譚高、伍應星を左右に從へ、又後へに二十餘人の精兵を引連れ、其勢都て一萬餘騎、城門を開て宋江と對陣す。此時宋江はわざと彼に讓て兵馬を城外に出さしむ。城上には包天師を肇として、祖士遠、沈壽、桓逸、各城樓に上り、交椅に凭て扣へたり。此時鄭魔君は馬を躍らせ、鎗を挺で陣を出れば、宋軍の中より、大刀關勝馬を出し刀を舞して、これを迎ふ。兩將戰ふこと未十合に及はず。鄭魔君いかんぞ關勝に敵せんや、負色に見えければ、包道乙城上より是を見て、口中に呪文を唱へ、一聲喝と叫べば、忽ち鄭魔君の頭上より一道の黑氣を生じ、黑氣の內より一尊の金甲を著たる神人を顯はせり。手に降魔の寶杵を提げ、空中より打下る。此時南軍中に黑氣大に起て分ちがたし。宋江馬上より是をみて、急ぎ混世魔王樊瑞を召て法を行はしめ、自ら又天書を開て、風を囘し、暗を破る法を行ひ、呪文を唱るに、忽ち關勝の頭上より、一道の白雲を捲起し、白雲の中に一尊の神將を現す。紅髮靑き臉にして烏龍に乘じ、手に鐵槌を取て、鄭魔君頭上の金甲を著たる神人と戰へば、下の方には兩將火花を散て戰ひけるが、忽ち上面の烏龍に乘たる神將、かの金甲を著たる神人を戰ひ退ると見しが、下の方には早くも關勝唯一刀に、鄭魔君を馬より下に砍弃ける。此時兩軍大に亂る。包

宋江呉用烏龍神の
古廟に詣て碑文を讀

樹を見て、金甲大漢子に顯化せしことを呉用に語て、共に奇異の思ひをなし、各馬に乗て陣中に返りけり。其夜宋江は呉用と共に、睦州を攻る計を商議し、已に半夜に至り、大に困勢ければ、几に寄て假寐と覺えしが、忽ち一人來り報じて、邵秀才御出ありと告ければ、宋江急に座を立て、邵龍君を迎へ、守護の恩を謝しければ、邵龍君が云く、昨日は若某の救ふにあらずんば、義士已に包道乙が邪法に擒となるべし、今日は又義士の祭奠を受く、睦州の破んこと旦夕にあり、方十三擒にすべしと有ければ、宋江迎へて、委くことを問んとすれば、忽ち風の音に驚されて、睡の夢覺ければ、宋江急ぎ呉用を招て、此夢を占はしむるに、呉用が云く、已に龍君かくのごとく靈を顯すからは、急に兵を進めて、睦州を討べし。宋江が云く、軍師のこと極めて當れりとて、已に次の日に至て睦州を攻る用意をなしにけり。先燕順、馬麟に命じて、烏龍嶺の大路を守らしめ、又關勝、花榮、秦明、朱同の四人を眞先に立て睦州の北門に向はしめ、又凌振をして子母砲を城中に向つて放しむるに、其音天地に震動し、山鳴り谷響ければ、城中の人民大に驚き、上を下へと騒ぎけり。此時包天師、鄭魔君は城中に退て、祖士遠をはじめ、衆將と軍事の商議をなしける處に、砲聲天に響きて、宋兵已に城下に攻寄たりと告ければ、いかゞはせんと騒動す。右丞相祖士遠進み出て、古語に云ずや、敵兵城下に臨時は、

中の事を委しく語りければ、呉用が云く、已に此靈驗の夢あるは、必ず此邊に靈神在して兄長を守護し給ふに疑ひなし、兄長何ぞ廟宇を尋ねて、神明に謝し給はざるや、と告ければ、宋江尤なりと其議に同じ、二人は山に上り、廟宇も在やと尋けるに、未だ半時ばかりも過ざるに、松林の中に一所の古き廟有ければ、二人は華表の下に至て首を擧げ、牌額を見るに、金字にて鳥龍神廟と書付たり。其時二人廟に入て殿上を望むに、不思議や龍君の神像、夢中に見えしと少しも異なることなかりければ、彌奇異の思ひをなし、再拜して謝して云く、昨日は多く神明救護の恩を蒙りしか共、猶報ずること能ず、萬乞神明の擁護を以て、方臘を攻亡ぼし、天下靜謐になし給はゞ、敬で朝廷に奏聞し、重ねて廟宇を建立し、聖號を報じ、永く享祭を奉らんと、懇に祈り、二人は階を下りて階下の石碑を讀に、

當社の神はもと唐朝の進士にて、姓は邵、名は俊と云賢士なるが、不遇にして聖主にあはず。後江中に墜て死せしが、天帝其忠直を憐んで龍神となし、永く此地を守らしむ。是に依て當地の百姓風を祈れば、忽ち風を吹し、雨を祈れば、忽ち雨を降し給ふに依て、廟宇を建立して四時の祭り斷えざりし。

と宋江讀終て、益〻尊敬するに堪ず、士卒に命じ、烏き猪白き羊を供て祭をなし、猶も廟外の松

李逵は唯一人山中に追入けるに、南軍四方より攻しか共、少しも恐れず、板斧を振て散々に砍立ける處に、背後に又喊の聲起りければ、首を回らし是れを見るに、花榮、秦明、樊瑞の三將各軍兵を引具し、南軍を散々に切開き、李逵を救て返りしか共、猶魯智深の踪跡知ねば、衆將、宋江にまみえて、備細に勝敗を語りけり。其時宋江兵を點檢するに、已に其大半を失ふのみならず、項充、李袞は敵に亡び、武松は左の臂を折り、魯智深が行踪知れざりしかば、潸然として哭しける處に、忽ち走打の兵來て報けるは、軍師呉用、關勝、李應、朱同、燕順、馬麟と共に一萬の軍兵を引率し、唯今小路より到著あり、と告ければ、宋江急ぎ呉用等を軍中に召て、其來故を尋るに、呉用答て云く、某等童樞密并に大將趙譚と共に、烏龍の陣を守りて在けるに、又劉光世數萬の兵を引て御加勢ありければ、某命じて呂方、郭盛、裴宣、蔣敬、蔡福、蔡慶、杜興、郁保四、李俊、阮小五、阮小七、童威、童猛等十三人を彼地に留め、其餘は都て某と共に、此に至りて君を助け候なりと告ければ、宋江大に悅び、且多く親方を亡し、并に武松殘人となり、魯智深の行踪しれざることを備細に訴へ、又潸然として涙を流しけり。呉用諫て云く、兄長必ず憂へて貴體を損じ給ふことなかれ、正に今方臘を亡さんこと旦夕に有り、何ぞ國家の大事を重しと爲給はざる、と諫ければ、宋江少し涙を收て、那里の松樹を指さし、夢

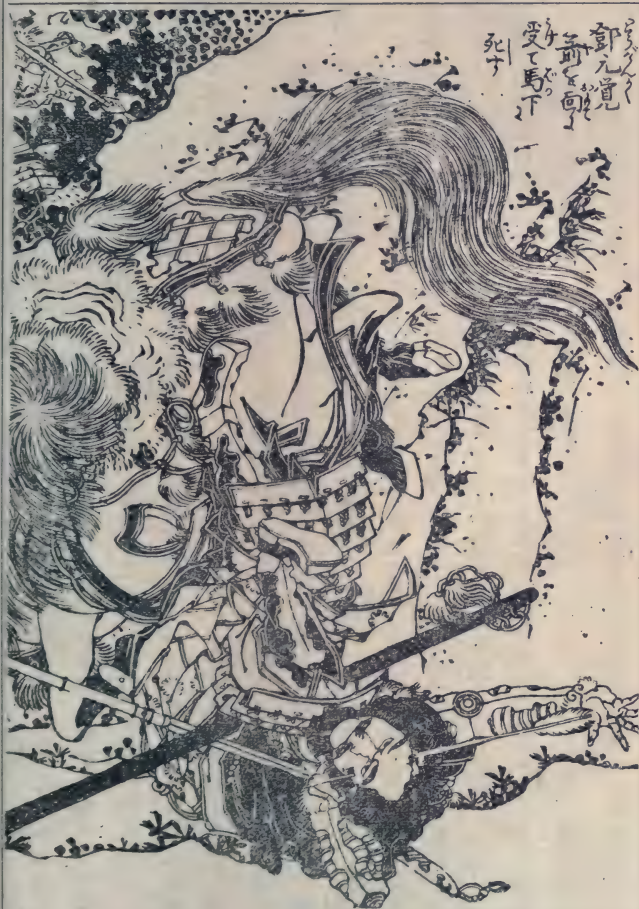
混天の劍を奪取り、暫しが間戰しが、左の臂の砍瘢深かりければ、時々閃避て見えにけり。魯智深大に叫で禪杖を以て打て蒐る。包道乙其勢ひに敵しがたく、馬を返して敗走す。其時宋江自ら馬を下つて武松を救ひ、左の臂を見るに、七八分の深疵にて、左の腕已に折しかば、猶も醫治せしめんと欲しければ、武松焦燥て、何ぞ療治の煩きを待んやとて、其儘戒刀を拔出し、遂に左の臂を割斷けり。されば宋江士卒に命じて、武松を本陣に送り休息をなさしめけり。去程に魯智深は、猶も南軍に砍入り、夏侯成と戰ふ事未だ十合に及ず、夏侯成遂に敵し難く、山林の中に敗走せしかば、魯智深猶も追かけ、深山の裏に入にけり。鄭彪は倘も軍將に令して、宋軍に攻入ければ、李逵、項充、李袞各刀をぬき鎗を挺へ、一度に衝入けり。鄭彪は三人の勢に敵しがたく、嶺をこえ、溪を渡て走りしかば、三將は原來路徑を知ざれ共、各功を立んと、猶も溪を渡て追蒐し處に、忽ち喊の聲左右に起り、南軍の伏兵一齊に起りけり。項充大に慌て、急に返さんとせしに、南軍早く左右より攻寄しかば、大に李逵、李袞を呼しか共、二人は鄭彪を追て溪を過ければ、自らは磵の中に入り、亂箭を避けるに、磵深くして巖石に跌き倒れければ、遂に亂箭に射られ死にけり。李袞は鄭彪を追て溪を過し處に、背後に忽ち喊の聲起るを聞て、急に岸に下らんとせしに、早く撓鉤に絆はされ、深磵に陷て肉泥となつて死にけり。去程に

ず、俯し居たりしが、忽ち一陣の風雨過る處に、一人宋江の手を携て高聲に、義士恐るゝこ
となかれ、と叫びければ、宋江猶も驚て頭を擡げ、其人を見るに、一人の秀才頭に烏紗の唐
巾を戴き、身に白羅の涼衫を著し、顔は粉を施すが如く、唇は朱を點じたるが如し。七尺
の身軀、三旬の年紀にして、其貌凡人にあらざれば、宋江見て大に驚き、身を起して禮を敍べ、
恭しく問て云く、秀才は何處の方にて、尊姓大名は何と申候や。秀才答て、某姓は邵、名
は俊と申て、昔より此地に住者なり、今將々來て義士の爲に報ん、那方十三の氣數今正に盡ん
とす、彼が亡んこと旬日に有べし、某も又義士のために力を添ん、今困を受るといへ共、救
兵已に至ん。宋江再び問て云く、先生已に氣數を知からは、方十三何れの日にか亡ぶべき。邵
秀才更に言ず、手に背甲を推と覺しくて、忽夢は覺にけり。宋江は猶馬上に在て醒來り、四
方を望に、雲收り霧晴れ、天朗に氣淸うして、今迄在つる金甲の大漢子は、都て大松樹にて
有ければ、宋江大に軍將を呼起し、路を尋出んとせし處に、又松樹の背後に喊の聲大に起りけ
れば、軍將に命じて砍出んとせし時、那里の山路より、魯智深、武松眞先に進んで南軍の中に
砍入けり。包道乙は馬上に在けるが、武松の歩行して來るを見て、忽ち立元混天の劍を拔出し、
空より飛下て武松の左の臂を砍たりけり。武松は猶も虎のごとくに叱て、早く右の手にて立元

んとせし處に、鄭彪の軍馬早く攻寄しかば、宋江怒氣胸に塡り、當先に馬を出して、大に鄭彪を罵つて云く、逆賊いかんぞ我將を殺したるや。鄭彪更に一言をも交ず、則鎗を挺へて、直に宋江を討んとす。李逵是を見て、大に怒り、手に兩把の板斧を提げ、虎の如く吼て砍掛ければ、項充、李袞も蠻牌を舞して戰を助け、直に鄭彪を望で衝蒐たり。鄭彪はいかゞ思ひけん、忽ち馬を回して走りけり。三人猶追々て南軍の陣裏に砍入ければ、宋江は李逵の誤あらん事を恐れ、急に五千の人馬を招て、勢に乘じ攻ければ、南兵大に敗走す。此時項充、李袞は、李逵を引て返りければ、宋江も先金を鳴らし軍を收んとせし處に、忽ち陰雲四方に起り、黑氣天地を罩ひ、大風砂石を飛し、急雨車軸を流せり。山鳴り谷響て、乾坤も崩るゝ許なれば、宋軍東西を辨ず。宋江は已に鄭彪が妖術なることを知れ共、いかんともすることなく、先三軍に下知して、前路に進まんとしければ、白晝暗夜のごとくにて、一物も見えざれば、前軍大に亂れ、すべきやうもなかりけり。其時宋江天に仰で歎息し、自ら思へらく、我まさに此地に死せんと、暫く馬を控へて在けるが、半時も過し比、黑霧少しく晴て幽に亮光有ければ、宋江も蘇たる心地して、前後を望見るに、金甲を著たる大漢に四方を圍れて在ければ、宋江大に驚き、忽ち地上に倒れけり。手下の衆將も都て地上に伏て、只死を待ばかりなり。宋江は暫く面も仰が

宋江の軍兵は日夜睦州を攻打けれ共、未だ勝敗を分たず、探兵回り來て、淸溪洞の救として軍勢出たりと告ければ、宋江急ぎ、王矮虎、一丈靑に三千の馬軍を添て敵を迎しむ。二人謹んで命を奉り、淸溪洞の路上に馳向ひける處に、早くも鄭彪の軍馬に出合ければ、兩軍各陣勢を排ね、各喊を作りける。其時王矮虎馬を出して、直に鄭彪に向て戰ひけるが、未だ八九合に及ばざる處に、鄭彪口に咒文を唱へて、一聲疾喝しければ、忽ち鄭彪の盔の內より、一道の黑氣滾起り、黑氣の內に一尊の金甲天神を現出し、手に降魔の寶杵を提空中より打下しければ、王矮虎大に驚き慌て、鎗法亂れければ、遂に鄭彪に討れけり。一丈靑は丈夫の討れたるを見、忿然として雙刀を輪し、直に鄭彪と戰ひしが、未だ二三合に及ばざるに、鄭彪佯敗し、馬を回しければ、一丈靑は猶も丈夫の仇を報んと、馬を馳て追けるが、鄭彪は早く左の手に鎗を取かへ、右の手にて腰に繫し錦袋の內の金塼を摸出し、身を扭向て抛けるが、金塼過ず一丈靑の肩間に當り、馬より落て死したりけり。憐むべし能戰ひし佳人も、一場の春夢と消にけり。其時鄭彪勢に乘じ、砍立ければ、宋軍大に亂れ敗走す。去程に宋江は人を遣して戰の次第を聞しむるに、王矮虎、一丈靑は都て鄭彪に討れ、味方の軍馬も大半討れたりと告ければ、勃然として大に怒り、急に軍馬を調へ、李逵、項充、李袞を引率し、其勢五千餘騎已に進發せ

と云ことゝなし。此故に方臘尊ぶこと比すべ者のなく、靈應天師と稱しけり。時に祖士遠、包道乙を引て階下に至りければ、方臘自ら包道乙を引き、錦の褥に坐せしめて云ふ、今宋兵屢寡人の領地諸城を侵し、已に睦州に至れり、其勢誠に敵しがたし、萬乞天師の道法を以て敵兵を亡し、國を護り、民を救ひ、永く社稷を保ば、萬民の幸何か是にしかんや。包道乙奏して云ふ、主上御心を安んじ給ふべし、某不肖たりと云共、主上の洪福に憑り、又我胸中の學に因ば、宋軍を退けんこと豈憂るに足んや。方臘大に悅び、宴を設けて、美々しく管待けるに、包道乙も恩を謝し、朝より退き、鄭彪、夏侯成と共に殿師府中に會し、軍を起さん事を商議して在ける處に、門吏報じ、司天太監蒲文英至れりと告ければ、急に召て其故を尋るに、蒲文英對て云く、某昨夜天象を觀に、南方の將星都て光なきに、宋江等の將星は猶も明朗たり、今又天師、太尉、將軍の三位、軍を起し給ふと聞く、此軍恐らくは不利に候べし、某の愚意に因ば、今一度主上に奏して、暫く宋軍に降り、一國の厄を解を上計とすべしと、憚る所もなく說ければ、包道乙忿然として大に怒り、忽ち玄天混元の劍を掣と見えしが、蒲文英を兩段に砍たりけり。かくして包道乙は文書を認て、蒲文英の不禮を備細に書して、方臘に奏し、則ち鄭彪を先鋒となし、夏侯成を後軍となし、自ら中軍となつて、睦州を救はんとて、各清溪洞を打出けり。去程に

鄧元覚箭を面に受て馬下に死す

軍容易に登ること能ず、暫く軍を退けて、睦州を攻んことを商議せり。去程に夏侯成は漸く逃て睦州に返り、祖士遠に見えて、軍の勝敗幷に、鄧國師の討れし事を備細に語りければ、祖士遠大に驚て、夏侯成と同く清溪の内裏に至り、婁敏中に見え、備細を語り、共に階下に至て奏して云く、今宋兵窃に小路より忍で東管に至り、睦州を攻ること甚だ危急なり、伏て望くは、我君早く軍を發し救ひ給はずんば、睦州の亡びんこと旦夕にありと、慌しく告ければ、方臘王大に驚き、急ぎ殿前の太尉鄭彪を召し、御林の軍馬一萬五千騎を差添て睦州を救はん事を命じけり。此鄭彪と云は原婺州蘭溪縣の都頭なるが、今方臘に隨て麾下にあり。此人幼きより、武藝を能し、又幻術を學び、常に戰場に望めば、雲氣身に隨ふ。是に因て世人都て鄭魔君と稱しけり。此時鄭彪奏して云ふ、臣今聖旨を領り、宋軍を防ぐに、今一人の臣を助る人なくんば、大功を立がたし、幸に天師包道乙、神人の術あり、萬乞天師と共に事を計らば、立處に宋軍を破るべし。方臘王此奏を准へ、則ち祖士遠をして、靈應天師包道乙を召にけり。抑此包道乙は、先祖より金花山中の住人にて、幼年の時家を出て鬼神の術を學び、又よく一口の寶劍を使ふ。是を玄天混元の劍と名付け、百步の内に人を砍て、當ずといふことなし。後方臘に隨て共に造反し、只軍に臨で妖法を行ひ、人を害すること其數を知ず。又方臘を協て不仁の事をなさず

に遍く、風に順て飜々たり。白欽は本陣に立回り、其樣を備細に語ければ、石寶が云く、已に睦州より救の兵を越給はずんば、我等は只堅く此處を守つて出て戰ふべからず、睦州は御林の軍あれば自ら相防ぐに足らん。鄧元覺進み出て云く、元帥差へり、今若我等睦州を救はずんば、本城倘失ある時は是をいかん。其時石寶再三留れ共、遂に其詞を用ず、自ら五千の軍馬を調へ、夏侯成を引て嶺を下り進發す。宋江兵を引き、睦州へは向ず、急に烏龍嶺を攻破んと、東管をはなれける處に、早くも鄧元覺眞先に馬を跳せて戰を挑みけり。花榮遙に是を見て、宋江の耳邊に倚て、低々說て、此人如々せば獲べし。宋江默頭て云く、此計妙なりと、秦明を呼で計を授けしかば、秦明領受で馬を躍せ、則鄧元覺と戰しが、未だ五六合にも及ざるに、秦明の迯るを見て、さらに追ず、馬を縱て直に宋江を捉んと、馬前に向て進みける。花榮は豫て計りしことなれば、自ら宋江の後に扣て在しが、鄧元覺が宋江を追て、已に程近くなるを見て、弓を拽こと滿月の如く、箭を放つ事流星の如く、覷得て颼地放ちければ、其矢誤ず、鄧元覺の面を射たりしかば、忽ち馬より落にけり。宋軍四方より圍で頓て首を斬り、猶も進で攻しかば、夏侯成も敵すること能ず、睦州を差て逃れけり。宋軍は猶も追て、烏龍嶺に攻寄けるが、此時石寶は鄧元覺が討れたるを見て、緊く軍門を固め、嶺上より砲石、檑木雨の如く打下しければ、宋

九編　巻之八十七

○睦州城に箭鄧元覺を射る

次の日宋江は童樞密を請て、桐廬縣に留めて、自ら花榮、秦明、魯智深、戴宗、李逵、樊瑞、王英、扈三娘、項充、李袞、凌振の諸將を引具し、其勢都て一萬餘騎、案内の老人を先立て馬は鈴を除き、人は枚を啣で、徑路より山の半ばに至りける處に、四五百人の賊兵あなたに扣へければ、李逵大に吼て散々に砍散す。何かは賊兵抵敵べき、四方へ盡く逃失ければ、宋江の兵馬其まゝに東管の地に至りける。此時已に四更の比なり。東管の守將伍應星は、宋兵已に嶺を越たりと聞しかど、手下の軍兵纔一千騎にだも足ざれば、いかで宋軍の大勢に敵せんや。自ら馬に打乘て、急ぎ睦州に來て、祖丞相に其趣を委しく告ければ、祖士遠大に驚き、急ぎ諸將を集めて商議をなす。此時宋兵は小路より烏龍嶺の裏手に廻り、凌振に命じ、連珠砲を放たしめければ、其音天地に響き、山河も崩るゝ許なり。烏龍の關上には石寶をはじめ、此音を聞て大に驚き、急ぎ指揮白欽に命じ、敵の樣子を伺はしむれば、白欽遙に見るに、宋江の旗號天地

某は先祖より此處の百姓にて候が、近來は方臘に災せられ、逃るべき處もなく、殆憂に沈みし處に、今幸に天兵爰に至り給ふ事、再び太平を見んことぞ嬉しく候へ、只今君に一つの小徑を敎へ、此關を越め奉らん、抑此小路より越給はゞ則東管の地にして、北門は則睦州の路、西門は烏龍嶺の裏路にて候と告ければ、宋江大に悦で、先銀子を老人に與へ、其夜は老人を陣中に止て、酒食を與へて款待ける。果して此關を越て如何、次巻に詳なり。

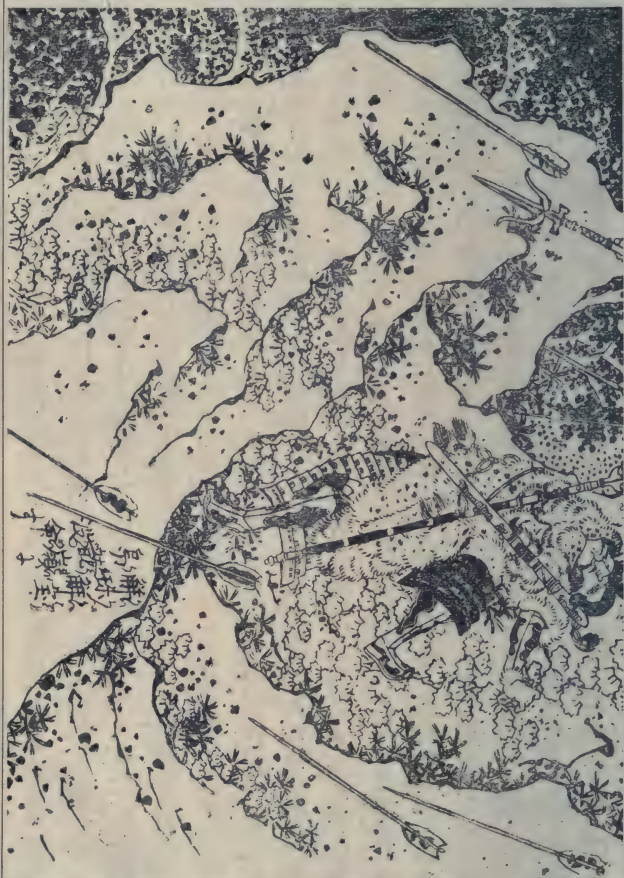
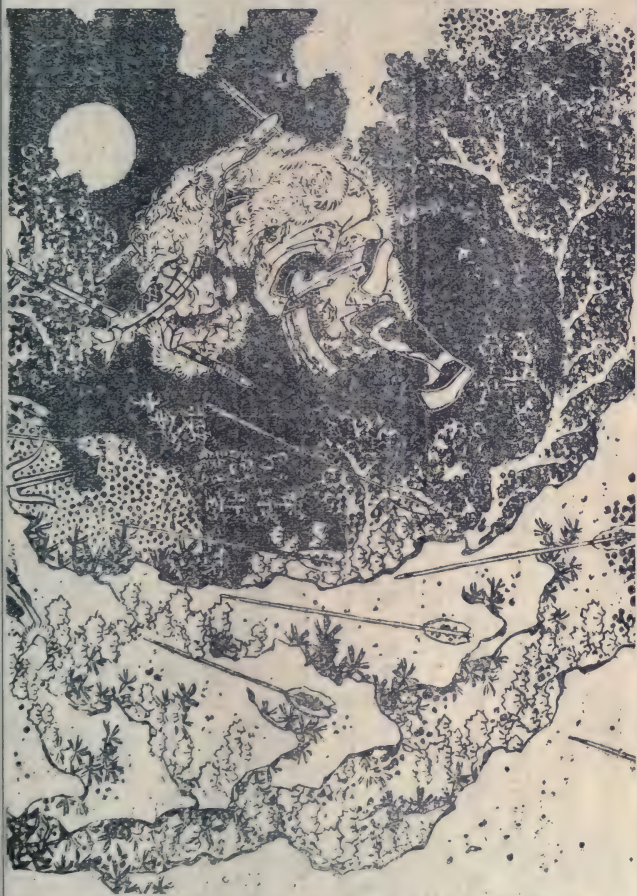
先鋒に賜ふとぞ、只童樞密已に此地に著ありと告ければ、宋江急ぎ吳用及び諸將と同じく、桐盧縣を離ることと二十里ばかりにして相待けるに、程なく童樞密著ありて、勅書を讀で賜を給ひければ、宋江等頂戴す。童樞密が云く、今上天子しば〳〵先鋒の功を立るを聞し召し、又多く將士を失ふと聞給ひ、今某及び大將王稟、趙譚を遣し、共に力を合せしむ、王稟は賜を持て、今盧先鋒の陣に往りと有ければ、宋江再び聖恩を謝し、又此度方臘を攻るに及んで、多く親方を失ふことを告て、淚をはら〳〵と流せば、童樞密是を慰め、則ち趙譚を呼で、宋江に見えしめ、共に桐盧縣に屯して、其夜は酒宴を設て饗應ける。されば次の日童樞密は、宋江と共に烏龍嶺を伐用意をなしければ、吳用堅く諫て云く、恩相輕々しく向ひ給ふこと勿れ、某が愚意には、先燕順馬麟を溪邊の小路に遣し、當地の百姓の能地理を知れる者に、此處の小路を問しめ、此關を越て兩方より夾討ば、此關攻破らんこと袋を探て物を取に等しからん、と述ければ、宋江尤と同じ、先馬麟、燕順に十餘人の軍兵を差添て、當村の溪の邊に至て、路を知れる百姓を尋しむ。されば其日の暮に至て、一老人を連返り、宋江に見えしむ。宋江問て云く、此老人は何人ぞや。馬麟答て云く、是は古く當所に住て、よく此地の路徑を知候なり。宋江が云く、老人汝我に此處の小路を敎へ、此關を越しめば、重く汝に報ゆべし。老人告て云く、

州昱嶺關へ多くの軍馬を遣はし、淸溪には只御林の軍馬の居のみ、是は悉く大内を守る軍勢なり、いかんぞ他所に遣はさんや。鄧元覺又奏して云く、陛下只今救の兵を添給はずんば、宋兵若嶺を越え、睦州の陷らんこと、半月を過べからずと。右丞相も婁敏中も、又進み出て奏して云く、此烏龍嶺は睦州の肮首なれば、今御林の軍兵三萬騎の内、一萬騎を分つて、國師に差添守らしめ給へ、と再三奏しけれ共、方臘王更に用ざれば、各朝廷を退きける。所謂風聲は醉人の夢に入ず、遂に飛花をして地に遂て吹しむとは是なり。されば婁敏中は朝より退りて後、衆官人と議しけるは、此度祖士遠に一人の猛將を差添へ、五千の兵馬を領せしめ、國師と同じく烏龍嶺を救はしむるに定りける。されば祖士遠は急ぎ睦州に囘り、一人の猛將夏侯成と同じく、五千の兵馬を揀て、鄧元覺を先だて、烏龍嶺の陣中に著き、委く淸溪大内のおもむきを、石寶等に語りければ、石寶答て云く、已に朝廷より御林の軍馬を分ち給はずんば、我等只此關を守つて出戰ふべからずとて、水軍四人の總管等には、堅く江邊を守らしめ、關上には鄧元覺を初として、石寶、白欽、景德、夏侯成の五將、堅く關所を固めける。さる程に宋江は四人の親方を失うてより以來、只桐盧縣に在て止ること二十四日、忽ち探子來て告けるは、此度朝廷より童樞密をして賜を持しめ、此地に向はしめ、又大將王稟にも賜を持しめ、昱嶺關の盧

處に、石寶がいはく、只今宋江が兵馬桐盧縣に退くといへども、若密に小路より此嶺を越られなば、睦州の危きこと旦夕にあり、しかず今日國師自ら清溪の內裏に回り、天子に奏して救の兵を乞ひ、此關所を守るを長久の計とせんか。鄧元覺が云く、元帥の云處極めて理ありとて、其まゝ馬に乘て睦州に來り、右丞相祖士遠に見えて云く、宋江が軍中勇將多くして敵すべからず、此まゝ捨置ば、烏龍關も持ち難かるべし、早く救ひの兵を差添給はんことを乞ふ、と述ければ、祖士遠尤と同意して、鄧元覺と同じく馬に乘て、清溪縣の幫源洞に至て、先左丞相婁敏中にまみえ、事の委細を語りければ、先天子に奏聞せんとて、翌日早朝を待ける程に、次の日方臘王南殿に出御あれば、二丞相、鄧元覺と同じく朝見し、各萬歲を唱へ息で後、鄧元覺進み出て奏して云く、臣元覺、聖旨を蒙りて、太子と同じく杭州を守りしに、宋江が大軍勇將多く、終に陷いれられ、今退て元帥石寶と共に、烏龍嶺の關所を守れり、此比は宋江が部下の大將四人を切て、其勢ひ大に振へり、只今宋江兵を進めて、已に桐盧縣に屯せり。彼もし或は小路を知て關を越なば、又此關をも保つこと成ざるのみにあらず、睦州の危きこと石を以て卵を推がごとし、何とぞ陛下早く良將を選び、軍馬を指向て、烏龍關を堅めしめ、永く城地を復するの計をなし給へ、と告ければ、方臘王答て云く、汝が云處其理有といへども、此比は歙

にけり。南軍の諸兵是を見て、近づく者はなかりけり。四人水軍の總管は、目前に王勣、晁中を射殺され、暫く軍を退きけり。時に宋江又山邊に至らんとせしに、左の方より喊の聲大に起り、白欽、景德眞先に攻來る。宋軍の內より、呂方、郭盛等しく馬を躍せ、兩人と相戰ふ。宋江は四方に敵を迎て、心中いかゞせんと慌てけるに、又南軍の背後に喊の聲大に起りければ、又も敵の益たるにやと馬を扣へて望けるに、南軍大に亂れければ、何事にやと見る處に、黑旋風李逵虎のごとく吼て、四方を砍倒す。背後には項充、李袞一千の步軍を引て砍來る。南軍の內より、石寶劈風刀を提げ、李逵を迎へんとせし處に、左に魯智深あり。鐵禪杖を以て打てかゝりければ、右に武行者あり、戒刀を以て砍かけたり。石寶は兩人の勢に敵しがたくや思ひけん、後へに退んとせし處に、秦明、李應、朱同、燕順、馬麟、樊瑞、一丈青、王矮虎、各勇を震て散々に南軍を砍立ければ、石寶、鄧元覺も其勢に敵しがたくや思ひけん、兵を收て嶺上に引返しけり。宋江は衆人と同じく陣中に回り、諸將に謝して、若兄弟の救にあらずんば、我も又解珍兄弟と同じく泉下の鬼とならん。吳用が云く、兄長以後かならず、自ら向ひ給ふことなかれ、と制しければ、宋江も又吳用の言を感じ、懇に謝しにける。去程に烏龍嶺上には、石寶、鄧元覺兩人軍事を議していはく、いかんぞ宋兵を退る計なからんやと、沈吟に及ぶ

ねて諫て云く、賊兵屍首を以て風化すは、其内必ず計あらん、仁兄必ず造次向ひ給ふ事なかれ。宋江那里か其諫を用んや、則ち三千の精兵を調へ、關勝、花榮、呂方、郭盛を引率して、烏龍嶺へ進發す。此夜二更の比、諸將等嶺下に至り、各喊を作りけり。宋江は馬を縱て遙に嶺上を望見るに、解珍兄弟の首屍を竹竿に縛付け、兩株の樹上にかけ、大樹の皮を削て兩行の文字を書しか共、月黑うして見分がたければ、宋江火炮を放しめ、其光にて伺ひ見るに、早晩宋江を剿て此處に號令んと書しかば、宋江大に怒りて、士卒に命じ、樹に上て、屍首を取しめんとす。其時金鼓忽ち響き、嶺上に數千の火把齊しく點し、飛箭雨の如くなれば、宋江大に驚き、水邊に退んとせしに、南軍の水兵齊しく起り、石寶手に劈風刀を提げ、宋江を打留んと眞先に馳出けり。此時宋江は馬を山邊に返さんとせしに、忽ち喊の聲大に起り、鄧元覺まつ先に進み、高聲に呼つて、宋賊何ぞ馬より下て縛を受ず、更に何れの時を待や、と罵りければ、關勝大に怒り、馬を馳刀を輪し、鄧元覺と戰いまだ二三合に及ばざるに、後に又喊の聲大に起り、南軍四人の水兵齊しく岸に上り、かさなり來れば、嶺上よりは王勣、晁中眞先に攻下る。此時花榮馬を馳て王勣、晁中と暫しが間戰ひしが、僞り負て馬を返しける。王勣、晁中勢に乘じて追蒐しに、花榮は手快く連珠箭を放ちしに、其矢誤ず二將の胸を射貫ければ、馬より落て死し

縛り、一向に登り已に敵陣に近付しに、綱叉竹藤に刮りて、欻々と大に響きしかば、山上の守兵是を見、すは賊兵ありと呼りて、一度に數多の撓鉤を提下し、一の撓鉤解珍が髻に搭りければ、解珍急に刀を拔んとせしに、又撓鉤を下し脚をかけければ、解珍心慌て、只一刀に撓鉤を砍斷しに、憐むべし一世の英雄百千丈の深谷に陷り、微塵になつて死にけり。解寶は是を見て、急に嶺を下らんとせし處に、早くも嶺上より大小の石塊を打下し、又弓弩を雨のごとく放ちければ、遂に亂矢に射殺さる。山上には是を見て、死屍を尋ねて引上しめ、竹竿に縛付嶺上に立たりけり。宋軍の探子是を見て、備細に宋江に告ければ、宋江又解珍兄弟を失ふと聞て、忽ち暈昏し、地に倒れて大に哭しが、暫く有て起上り、則關勝、花榮二人を呼び、急に軍兵を調へ、烏龍嶺を攻破りて、四人の仇を報ふべしと大に怒りけり。吳用が云く、仁兄必ず性急にして事を誤ち給ふこと勿れ、死せる者は皆天命にして、人力の及所にあらず、若烏龍嶺を取んとならば、必ず神機の妙策を施し、智を以て取べし、必しも力戰して親方を損じ給ふ事なかれと諫けれ共、宋江猶も忿然として云く、賊徒のわざに、我手足を亡ぼされ、豈居ながら安然として是を見るに忍びんや、況や賊徒我弟の屍首を以て、竿頭に風化と聞からは、我今宵兵を提て彼屍首を奪返し、厚く埋葬し亡靈の怨を休め、且烏龍嶺を攻破て、其讐を報はんと怒りけり。吳用かさ

り險阻にして、本路の外は、飛鳥にあらざれば通じがたし、若誤て脚の踏所を失はゞ、千丈の深谷に落て命を失ふべし。解珍兄弟答へて云く、某等兄弟登州にて獄を越け、梁山泊に上りしより、深く宋先鋒の高恩を蒙り、又國家の誥命を得て錦衣を著し、榮幸に勝ず、たとひ今國家の爲に骨を拔身を粉にして、宋先鋒の高恩を報ずとも、猶足らざる處にて候はずや、と述ければ、宋江も其志氣を感じて云く、賢弟敵に向ふに、必ず不吉の語を云ふことを止めよ、只願くは、早々國家の爲に力を出し、大功を立べしと有ければ、解珍兄弟大に悅び、早く拴束を成にけり。兄弟は身に虎皮の襖子を著、腰に短刀を帶び、手に鋼作の叉を提げ、宋江に辭し、其夜初更の比小路より忍んで、烏龍嶺に向ひけるが、七八里も過けるに、伏路の小卒に逢ければ、解珍手快く短刀を拔て兩人を剁捨て、已に嶺下に至れば、二更の比と覺しくて、寨内の更鼓風に順て分明なり。兩人は大路を行ず僻路より藤を攀ぢ、葛を攬へて、一歩々々上りけり。此夜月の光ひるのごとし。兩人は巖壁を傳て、險阻の處より至り、遙に山上を望むに、燒光閃々として、用心堅固に見えにけり。兩人は敵に知られじと、嶺の凹なる處に耳を側てゝ、更鼓を聞に、已に四更を打ければ、解珍密に解寶を呼で云く、夜も短ければ、最早天明も間有まじ、我等急に登て事を計らずんば、遂に大功を立がたしとて、兩人膳膊を以て、鋼叉を背に

扣へ在けるが、此體を見て、只得船を桐廬縣まで退けぬ。寶光國師は、石寶と共に山上より味方の勝を見て、勢に乘じ、軍兵を引て追下りけれ共、山の下は大江に接し、船ならでは渡しがたければ、軍を引て嶺上にかへりけり。宋江も又水軍の利を失ふを見、桐廬縣まで退て軍兵を休めけり。其日に宋江は阮小二、孟康を失ひしを、自ら悲泣に堪がたく、唯鬱々として寢食共に廢し、夢寐安らざれば、吳用衆將と倶に慰めけれ共、猶濛然として在ければ、阮小五、阮小七は兄の爲に掛孝て在けるが、自ら來て、宋江を諫て云く、我兄昔日石碣村に在て、草木と同じく朽なば、誰か一人名目を知る者だも無らんに、今國家の大事の爲に討死し候へば、誠に本望と申ものなり、宋先鋒渠が爲に必ず多く煩惱し給ふことなかれ、且軍事を商議し給ふべし、我等兄弟近日讐を報ふべし、と述ければ、宋江も方纔心を慰めけり。去程に翌日、軍馬を整へて、急に烏龍嶺を攻んとす。吳用諫て云く、兄長焦燥給ふことなかれ、我再三計策を工夫の上、近日に嶺を越て睦州を取んことも、未だ遲からずとて、已に商議しける處に、解珍、解寶進み出て云く、某等兄弟は、もと獵戸の出身にて候へば、山を登り嶺を渡り候ことは、尤慣熟にて候、今兩人獵人の形に出立て、潛に嶺上に忍入り、敵陣に火を放たば、彼等必逃散ん、其時兵を進め給はば、一鼓に睦州を定むべし。吳用が云く、此計妙なりといへ共、此山原よ

唱へて烏龍嶺下の急流より直に灘上に搖上る。南軍四人の總管は早く是を知り、士卒に命じて、五十の連火排を灘上に隱さしむ。此連火排と云は、松杉の大木を索を以て編み、内には、乾きたる柴丼に、硫黄、焔焇の類を藏したり。阮小二は孟康、童威、童猛と一向水上に搖上りし處に、南軍四人の總管四艘の快船に乘じ、各紅旗を搖し、水上より搖下るを見て、急に放ちければ、四艘の快船は又水上に搖返す。阮小二其計なるを知ず、勢に乘じ水源に追上りしに、四艘の快船早くも見えざりければ、心中大に遲疑し、急に船を岸に繋しめ、烏龍嶺の上を望むに、一面の旗搖くと見しが、金鼓等しく響き、連火排一度に燃上り、順風に火の鎖を吹下す。阮小二大に驚き、船を退んとする時、背後に喊の聲大に起り、南軍各手に長鎗撓鉤を以て攻寄たり。童威、童猛其勢に敵しがたくや思ひけん、船を棄て岸に爬のぼり、山下の僻路より本陣に回りけり。阮小二は孟康と共に、船中に在て猶も敵と戰ひしが、火鎖船上に點ければ、急ぎ水中に飛入んとせしに、敵船はや追來り撓鉤を以て搭たるゆゑ、阮小二心慌て敵に拿れ、辱しめを受んよりはとて、手快く腰刀を拔出し、自ら首を刎にけり。孟康は是を見て、又同く水中に入らんとせしに、嶺上より齊しく打下す火炮、孟康が頭盔を打碎きければ、肉泥となつて死しにけり。憐むべし二人の英雄遂に非命の死を遂けり。李俊、阮小五、阮小七三人は、遙後船に

江其報を聞て、諸軍勢を催趱め桐盧縣に出陣す。其時王矮虎、一丈青二人は、溫克讓を綁て宋江の軍前に引出せり。宋江二人の功を賞し、且溫克讓を杭州に渡さしめて、張招討の軍前にて頓て首を斬しめけり。去程に宋江は翌日水陸の軍兵を調へ、直ちに烏龍嶺を越て睦州に打入んと、已に嶺の下に至りける時、寶光國師は衆將と倶に、烏龍嶺の關隘を固めけり。抑此烏龍嶺と申は、睦州第一要害の地にして、左右は長江に靠り、山峻しく水急にして、上には關隘を建て、下には許多の軍船を貯へ、容易攻べしとも見えざりけり。宋江は軍馬を嶺下に屯し、陣を二ヶ所に張り、先李逵、項充、李袞に五百人の牌木を先手として、烏龍關の下に至りしに、關上より檑木、炮石、雨の如く下しければ、前軍進むこと能ず、計の施すべきやうもなかりけり。宋江は又阮小二、孟康、童威、童猛の四人に命じ、別に烏龍の水寨を攻さしむ。此烏龍の水寨と申は、昔年方臘が造りし處にて、前に大江を臨み、後は高山に倚て、内に五百の戰船、五千の水兵あり。水軍の總管四人あり。是を浙江の四龍と號す。其四人の名は、玉頭龍都總管成貴、錦鱗龍副總管翟源、跳波龍左副管喬正、戲珠龍右副管謝福、と申なり。此四人は原錢塘江の艄公なりしが、皆水練の達者なれば、方臘に屬して三品の職事を授り、水寨の守りとなれり。其時阮小二等四人は、一千の水軍を一百艘の船に分ち乘せ、旗を捲し鼓を擂き、山歌を

王英一丈青共に
温克譲を擒る

軍中より朱同馬を躍せ鎗を挺へ、石寶の背後より突かけければ、石寶は三人の敵を受て叶ずとや思ひけん、富陽山を望で敗走す。其時宋江鞭を以て三軍を下知し、直ちに富陽山へと推寄ける。寶光國師、石寶等は一戰に打負け、桐盧縣まで退きければ、宋江は猶も追て白峰嶺迄至りけり。

○宋江大に烏龍嶺に戰ふ

此時已に黄昏に及びしかば、暫く其地に軍馬を休め、桐盧縣を攻る用意をなしにける。先解珍、解寶、燕順、王矮虎、一丈青の五人に命じ東路へ向へしめ、李逵、項充、李袞、樊瑞、馬麟の五人をして、西路へ向へしめ、又李俊、三阮、二童、孟康の七人は水路より進ましめ、各桐盧縣を討しめけり。去程に三路の軍兵桐盧縣の東門に至りければ、已に三更の左側なり。其時寶光國師は石寶と共に帳中に在て、軍事を商議して居けるが、忽ち炮聲を聞て大に驚き、何ぞあへて抵敵べき、馬に乘べき間もなく、甲盔を打捨て各命を遁れけり。溫克讓は衆人に後れて、誰一人小路を望んで遁れければ、王英、一丈青夫妻はやくも見つけ、横に拖倒に拽て生捉れり。李逵は項充、李袞、樊瑞、馬麟等とともに猶も火を放ち、人を殺して其數を知らず。宋

望んで進發す。此時寶光國師鄧元覺幷に、石寶、王勣、晁中、溫克讓は、五人共敗殘の軍卒を集めて、富陽縣の關所を守り、使を睦州に遣し、右丞相祖士遠に救の兵を求しかば、祖士遠郎日に正指揮白欽、副指揮景德二人を大將とし、其勢都合一萬餘騎を相添て、富陽縣へ遣しけり。此白欽、景德は都て萬夫不當の勇士なれば、寶光國師は龍の雲を得たる心地して大に喜び、軍勢を一處に合せ、陣を富陽縣の山頭に取り、敵の來るを待かけたり。宋江は大軍を引率して、七里灘といへる處を過けるに、寶光國師山の上より是を見て、誰かあへて宋江を討取んや、と呼りければ、石寶直に流星鎚を帶し、劈風刀を提山を下つて、宋江を討んとす。大刀關勝是を見て、宋江を討せじと馬を躍せ迎へんとせし處に、呂方大に呼つて云く、鷄を割に何ぞ牛刀を用んや、兄長暫く待給へ、と云も終らず、手に一枝戟を提げ、馬を縱ちて石寶に向へば、石寶も又劈風刀を輪して兩人相戰ふこと五十餘合、未だ勝敗を分たざれば、郭盛傍より是を見て、又手に戟を持馬を倚せ、呂方を助く。石寶は猶も戰て精神益盛なり。其時宋江が水軍の輩順風に乘じ、追々七里灘に著船したりしかば、寶光國師は敵軍の多く益たるを見て、石寶に過ちあらんことを恐れ、急に鑼を鳴し軍を收んとす。其時石寶は山上の鑼の響を聞て、軍を引回さんと欲ひけれ共、呂方、郭盛左右より夾で攻ければ、又戰ふこと五六合に及びし處に、宋の

しめ、主爵都尉の官にぞ封じけり。扨燕青は名を隱して、雲壁と改ければ、人皆雲奉尉と呼にけり。柴進は金芝公主の女壻となりてより、日々宮殿に出入しては、後堂深廳迄も自由に立入て、方臘王の金枝玉葉なれば、諸官敬服すること、殊に甚しく、毎に王と軍事を議し、內苑までも至りければ、宮中の案內盡く知らざる處なし。或日柴進奏して云く、某常に演ることく、陛下眞に天子の氣象ありといへ共、猶罡星に侵され給ひて、今半年の間は御心を安じ給ふまじ、直に宋江を亡し、其手下の將を一人も止めず斬盡さば、罡星おのづから退くべし、其時こそ勢に乘じ席のごとく捲き、中原の地を打取て基業を興立し給ふべし。方臘王が云く、朕が師る愛將武勇の者多しといへども、近來過半宋江が兵に打取れ、朕に於て手足を缺たるごとく想ふ、是を奈何せんや。柴進又奏して云く、某昨夜天文を見て君の氣數を考るに、將星究て多しといへ共、唯十位の星の象は君を守護するあり、是まさに基業を起すの星象なり、其餘は皆正氣にあらず、また別に二十八宿の君を輔佐するあり、臣潛に想ふに、宋江が軍中にも又十餘人は來て君に降る者あらん、是們は皆天の注定給ふことにして、人力の爲所にあらず、こと〴〵く君を輔て、基業を起す良臣に候はんと、其理を盡し說ければ、方臘王大に悅んで、其日は酒宴を設け、柴進を管待けり。去程に宋江は大隊の軍馬を引領し杭州を離れ、富陽縣を

南に至るに、天子の氣、正に睦州より起り、今天子の聖顔を拜するに、恰も龍鳳の姿を抱き、天日の表を挺でり、正に是其氣に應ず、豈欣幸の至りに勝ざらんや。方臘王が云く、朕久しく東南の地を有つといへ共、近來宋江に侵され、數箇所の城府を奪れ、敵兵漸吾地に攻寄んとす、是をいかんがせんや。柴進奏して云く、某古人の言を聞に、

得レ之易失レ之易。得レ之難失レ之難。

と申事の候、凡古來、開國中原を掌握し給ふ君は、千萬の艱難危急を經て、而して太平を得、基業を成給ふこと靑史に明かなり、今陛下東南の地を開基し給ひしより、勢に乘じ許多の州郡を得給ふは、誠に天より授け給ふなり、縱令宋江に數ケ所を奪れ給ふ共、久しからずして、氣運復君に歸せん事、止江南の地のみに非ず、中原の社稷を得給ん事必然なるは、豫じめ天象に現れ、凡慮を以て思ひ測べからざる所なりと演れば、方臘王限なく喜び、柴進に中書侍郎の官を賜ひ、錦の襖を設け坐しめ、御宴を賜て管待あり。是より以後柴進は日々に召出され、いつも美言を以て方臘に諛ければ、未だ半月にも過ざるに、方臘を始として內外の官人、皆柴進に親で喜ばざるはなかりけり。方臘は熟々柴進が人物、衆に超れ、又事を做て公平なるを見て、愛慕の心に堪ず。左丞相婁敏中を媒酌となし、其愛女金芝公主と云るを、柴進に賜て妻となさ

を見て、大に驚嘆し、其夜兩人を私衙に宿せしめ、酒食を具へ懇に饗應し、翌日五更三點自ら朝服して、清溪の內裏に朝覲す。方臘王は左右に文武の百官を隨へ、後には嬪妃綵女、多くの美人を隨へ、階下の武士各軍器を携へり。其時殿頭官大に呼て云く、若事あらば班を出て奏すべし、無事なれば簾を捲て退くべし。丞相婁敏中、衆に進み出て奏して云く、傳へ聞中原は孔夫子の鄕なり、今其地に一人の賢士あり、姓は柯、名は引と申候ひき、此人文武兼備し、智勇ならび足れり、又能天文地理に通じ、風雲の變を知り、天地の氣色を辨ず、三教九流、諸子百家の學に、通曉せずといふことなし、今江南に天子の氣有を知り、故特上國に來て、禁門の外に伺候せり、臣謹で傳宣す。方臘王が云ふ、已た賢士あらば、早く朕に見えしめよ。其時婁敏中謹で門吏に命じ、柴進を引て殿下に至りければ、竝居たる群臣各萬歲をぞ唱へける。方臘熟々柴進を見るに、一表の人物凡俗の儕にあらず、龍子、龍孫の氣象有ければ、心中に喜び問て云ふ、賢士の云處を聞に、今江南に天子の氣ありと、其氣何れの所にありや。柴進奏して云ふ、臣柯引は先祖より中原の地に住居せり、某幼年にて父母にはなれ、隻身にして學業をなし、盡く先賢の祕訣を受け、又祖師の玄文を學べり、頃日は夜々天の乾象を觀に、帝星明朗にして、東吳の地を照せり、是に依て千里の遠きを辭ず、氣を望んで江

叱つて留めければ、柴進告て云く、某は中原の一秀士なり、能天文地理の學に通じ、陰陽風雲の變を辨じ、又能三光の氣色を知れり、又九流三教知らざる處なし、比日は夜々南の方をのぞむに、江南の地にあたつて、天子の氣あり、故に上國に至れり、公が輩何の故に賢路を閉塞し給ふや。關守柴進の言語の俗ならざるを聞て、其姓名を問ふ。柴進詐て云ふ、某は中原の一學士、姓は柯、名は引と申者なり、今主從二人上國に來れり、別に他意なし、其天子の氣あるを戀へばなり。其時關守、柴進を住め、使を睦州に遣し、右丞相祖士遠、參政使沈壽、僉書桓逸、元帥譚高の四人に斯と報じければ、四人は其儘使を以て柴進を迎へ、睦州城裏に請ひ、各禮義を述にけり。元來柴進は、眉清く目秀で、一表凡ならざるの人物にして、言語又俗ならざれば、右丞相祖士遠の輩、毫も疑ふ心なく、大に悦び、僉書桓逸をして柴進を引き、清溪の大内に朝覲をなさしめんと欲しけり。原來方臘の行宮は、睦州、歙州の兩所に有と雖も、今是睦州清溪縣、幫源洞の行宮を以て本城と定め、内に六部の總制あり。此時柴進、燕青は、桓逸に隨て清溪の帝都に至り、先左丞相婁敏中に見參す。柴進、高談雄辯自ら胸中の學を敍ければ、婁敏中大に喜び、柴進を留め、懇に管待けり。原來此婁敏中は、清溪縣の教學先生なれ共、學問甚だ博からざれば、今此柴進の書を知り、禮に通じ、又天文地理を說て、辯舌水の流るゝが如き

軍師朱武、林冲、呼延灼、史進、楊雄、石秀、單廷珪
魏定國、孫立、黃信、歐鵬、杜遷、陳達、楊春
李忠、薛永、鄒淵、鄒潤、李立、李雲、湯隆
石勇、時遷、丁得孫、孫新、顧大嫂、張青、孫二娘

猛將都て二十九人、其勢都合三萬餘と聞えし。盧先鋒は許多の軍馬を引率し、吉日を擇で劉都督に辭別し、又宋江と分れ、杭州を望んで發足す。先昱嶺關を奪取て、歙州を攻取んと、各勢ひ込で急ぎけり。扨宋江は多くの軍馬、軍船を整へ、頓軍勢の手配も定りければ、已に出軍の用意をなしにけり。此時杭州の城裏、城外、瘟疫大に流行し、十に八九は其病に染ざるはなかりけり。宋江が軍中にも、張橫、穆弘、孔明、朱貴、楊林、白勝の六將病に臥し危ふかりければ、共に軍に從ふこと能はず。宋江は穆春、朱富の二人を呼で杭州に止り、六將の病を看病せんことを懇に云付け、自ら三十七人の正將を隨へ、其勢三萬餘騎、水路に隨つて富陽縣を望で發足せり。去ほどに柴進は燕青を家僕の貌に出立せ、道を急ぎ海鹽縣の海邊に至り、便船に乘じ越州を過ぎ、諸暨縣を經て、睦州の界に至りけり。此處より已に方臘の取掠し地なれば、所所に關所を設けて、猥に往來の人を通さず。其時柴進燕青と共に關所を過んとせし處に、關守

配分の人數を書付け、香を炷て拈りければ、宋江は睦州、盧俊義は歙州に當りけり。宋江、盧俊義に向て云ふ、傳へ聞く方臘今清溪縣幫源洞中にありと、賢弟歙州を攻破りなば、軍馬を彼地に屯し、其まゝ走夫を以て知せ給ふべし、ともに軍馬を合せ、日限を約し、清溪洞を攻ん。盧俊義謹で領承し、宋江に軍馬の分握をなさんことをぞ請にけり。其時宋江、兩所に向ふ軍將を配分す。先睦州の方へは、先鋒使宋公明を初として、其附屬諸將には、

軍師吳用　關勝　花榮　秦明　李應　戴宗　朱同

李逵　魯智深　武松　解珍　解寶　呂方　郭盛

樊瑞　馬麟　燕順　宋清　項充　李衮　王英

扈三娘　凌振　杜興　蔡福　蔡慶　裴宣　蔣敬

郁保四

又水軍の頭領には、

李俊　阮小二　阮小五　阮小七　童威　童猛　孟康

猛將都て三十七人、其勢都合三萬餘と聞えし。先烏龍嶺を奪うて睦州を攻破んとす。又歙州へ向ふ軍勢は副先鋒盧俊義を初として、其附屬諸將には、

宋公明勅使の前に御賜を見て流涕す

拜することも叶ず、朝廷には元來其事の巨細を知し召れず、今かく其數の賜を見て、我輩豈悲傷に堪んやとて、委細に語りければ、勅使も又悲愁限なくして云く、かくのごとき義士等を損ぜしこと、誠に命と云べし、我京に返らば必ず天子に奏聞し、各追號を賜て、神に祭るべしと有ければ、宋江其厚意を謝し、其時大に宴席を設け、勅使及び、劉光世を饗應せり。宋江及び衆將は、各對席に坐して御賜の酒を戴き、皇恩を謝し、扨亡びたる衆將は各位牌を設け、御酒及び一領の錦衣を供へ、香を燒て祭を設け、其内一瓶の御酒、一領の錦衣を留め、宋江自ら是を持て張順の廟裏に至り、錦衣を取て張順の泥神に穿せしめ、御酒を灌て享祭をなせり。去ほどに勅使は留ること數日にして、京師に返り給ふ。覺えず光陰矢のごとく、已に十餘日過ければ、張招討の方より使者到著し、書翰を以て宋江に軍兵を進んことを催促す。宋江謹で是を承り、呉用と共に盧俊義を請て商議しけるは、此處より睦州へ行には大江に沿て、直に賊人の巢穴に至る、又歙州へ赴くには、昱嶺關を過て都て小路なり。今此所に軍兵を二つに分たん、知らず賢弟何れの方へ向ひ給ふや。盧俊義が云ふ、大將の部將を遣ふは、猶水の船を行がごとし、只宋頭領の嚴令に任すべし。宋江が云く、賢弟の云處其利に當れりといへども、天命の注定なきにしもあらず、しかじ神明に告んとて、自ら二つ鬮子を成し、各

九編　巻之八十六

○盧俊義兵を歙州道に分つ

時に宋江は軍師呉用と商議し、軍馬を睦州に回し、自ら發向なさんとせし時、忽ち村おくりに使來りて、都督劉光世、幷に勅使御出ありと告ければ、宋江衆將を引率し、北關門を出て勅使を迎へ、城中に入ければ、勅使頓て城内の行宮に坐し、勅書を高らかに讀揚て云く、此度先鋒宋江、衆將と共に方臘を征伐し、屢大に戰ひ功ある故、褒賞として、皇封の御酒三十五瓶、錦衣三十五領を給へり、其餘の偏將には其功に依て、各段疋の賜あり、と呼りければ、宋江謹んで御賜を拜し、三十五の衣袍御酒を見て、覺えず歙々と涙を落しければ、勅使恠で其故を問ひけるに、宋江答て云く、今朝廷より三十五の袍酒を賜るに付て、悲傷のことこれあり、願くは其故を聞給へ、此度方臘を征せん爲、都を出し時までは、我等義兄弟相揃ひ、唯其内公孫勝は故郷に歸りしのみなる處、楊子江を渡りしより、追々戰場に屍を晒し、首を敵の軍門に梟せらるゝ者頻りに多く、就中張順など戰死しても、希有の功を顯しながら、御賜を

書たるは印の字を見誤りたるなり。又云ふ、杭州の方天定に従ふ二十四人の大將の内、薛斗南が名前卷に初て出で、大尾迄落著なし。亂軍に討死とか、戰場より身を遁れ終を知らずとか有べきことなり。外二十三人と四人の元師は、各〻文段に明らかなり。

張横がことを說き、且張横、最早荒增全快の體なれば、則ち呼出して阮小七に遇しめ、舊のごとく水軍を領せしめ、其夜は各歇みける。已に翌朝にも成しかば、宋江令を傳へて水軍の頭領を召集め、船を用意し睦州へ進發す。張順かくまで靈を現すこと、世の有所にあらずとて、船を湧金門に繫しめ、西湖に一字の廟を建立し、金華太保の廟と名づけ、張順が功を委さに朝廷に奏聞せしに、聖旨勅下つて、金華將軍の號を賜りけるは、芳名末世に傳へて、張順死後の本望と云べし。宋江是を大に喜び、自ら香を炷て祭り畢り、直ちに淨慈寺に到り、暫く軍馬を休めけり。宋江熟々思へらく、杭州も難なく退治なしけれ共、江を渡て以來餘多の將佐を失ひしこと、返す〴〵も殘念なりと、心中常に悲愴にたへず、因て多くの僧に命じて、一七日の法事を修せしめ、多く討死せし亡者を追善す。扨方天定が宮中に有と所有禁物を盡く打毀ち、有合し金銀寶貝、羅紗緞子の類、殘らず軍卒に分ち與へけり。是に依て、杭州の百姓悉く安堵の思ひをなし、酒宴を設けて慶賀せり。又向に柴進、燕青敵地の動靜を伺んため、宋江に辭し去て、今は方臘が巢穴を探ること、次卷に詳なり。申文保は袁評事同僚粮米を送り來りし民の名なり、こゝに其ことを略せると覺ゆ。

流布の通俗水滸傳に此卷の獨松關の戰の處に、將印は林冲に討るとあつて、其後に又李立、湯隆、將印を生捉とあり。林冲は將印に負傷たるを討と誤たりと覺ゆ。又將卯と

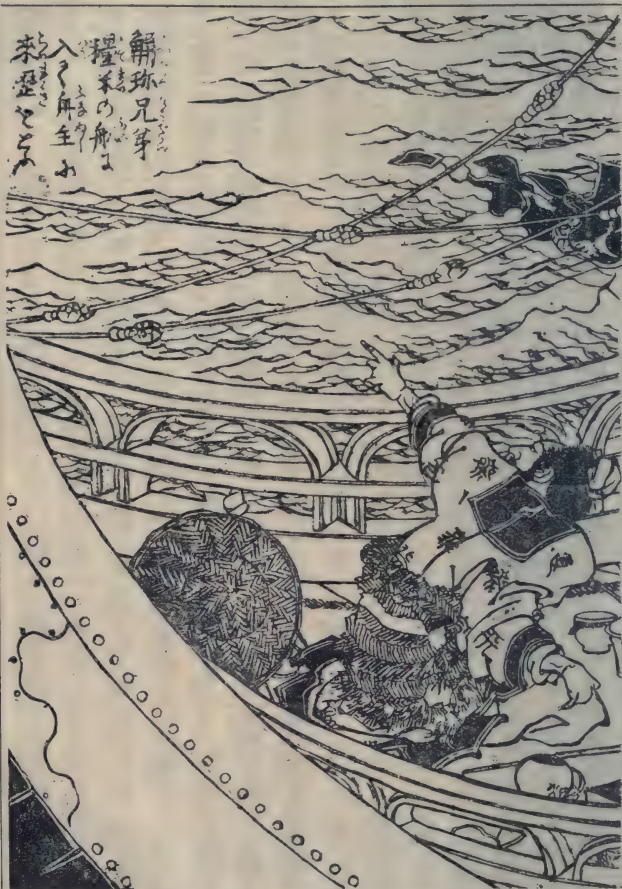
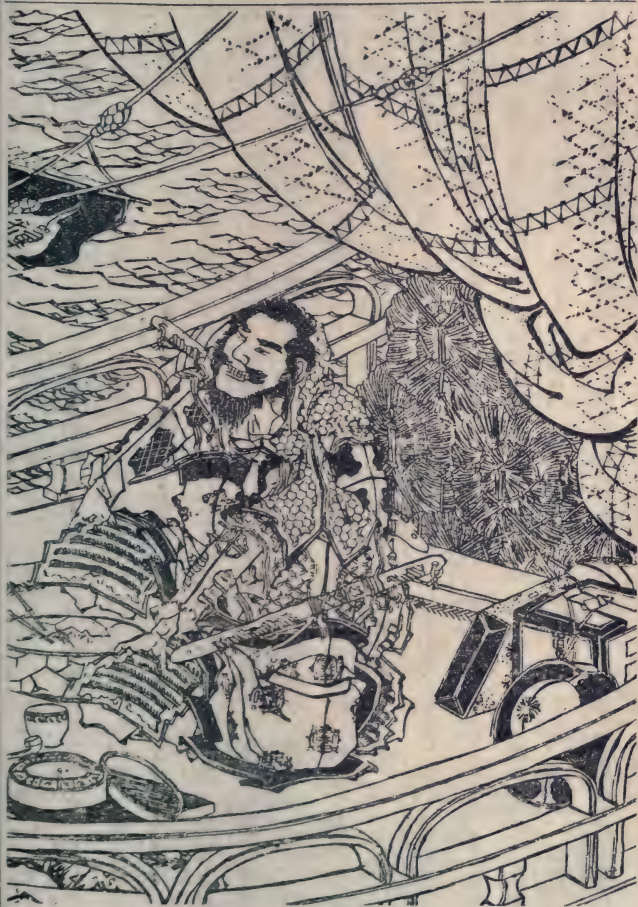
に令して衆將の功を記せしむるに、此度の一戰に李俊、石秀、吳値を生捕にし、三員の女將は、張道原を生捕り、林冲は蛇矛を以て冷恭を勦殺し、解珍、解寶は寉或を殺しけり。只石寶、鄧元覺、王勣、晁中、溫克讓五人は何れの地へか落行けん、跡影しらず成にけり。其時宋江は先榜を出して、百姓を安撫し、三軍を賞勞ひ、吳値、張道原を張招討の軍前に解し、各首を斬て軍門に梟し、扨多くの糧米を張招討に獻じ、袁評事、申文保を富陽縣の令となしぬ。衆將已に城中に至て休息せんと欲する處に、左右より呼で阮小七、江裏より岸に登り、城に入歸り來れりと告ければ、宋江帳前に召て事の子細を問けるに、阮小七對て云く、小弟張横、侯健、段景住三人同じく水手を帶て海邊に至り、舟に乘じ、海鹽の邊に徘徊し、暗に錢塘江に忍び入らんとせし處に、期ざる大風に遇て、大洋に飃泊し、急に返り來んとせしに、又大風に盡く船を打破られ、衆人都て水に落候ひき、侯健、段景住の二人は水性を知らざれば、水に溺れ死し、張横は五雲山の邊にて岸に上ると見えしが、遂に行方を知らず、衆くの水手も四方に散亂せり、某は水を泳て赭山門に至りしに、又大潮に漾されて、漸く昨夜、半播山に至て岸に上り、遙に城中に火起るを見て、又連珠砲の響を聞き、乃想へらく、是必ず我宋頭領、杭州城に在て相戰ふならんと、これによつて江裏の捷徑より返れり、知ず張横は囘り候や否や。其時宋江具に

の職を授て神たらしめり、然れ共我怨未だ滅せず、唯彼方天定を殺さんと欲しける折節、我兄張横江中より來りし故、幸ひ其體を借て魂を移し、則岸上に跳上り、五雲山の下にて方天定を殺し、我平生の怨み稍安じぬる間、直に來て宋君にまみえ奉る、舊日の洪恩未だ曾て是を忘れずと云終り、驀然として地上に倒れける。宋江大に感歎して、自ら扶け起しければ、張横忽ち眼を開て、宋江幷に諸大將を見、某いかんがして此處に至りぬるや、疑ふらくは夢ならんと云て、唯呆れたる計なり。宋江涙を流して云けるは、汝が弟張順、汝が體を假て、方天定を殺せり、汝すべからく心を收むべし、是夢にあらざるなり。張横是を聞て問けるは、我弟張順我體を借たること、偏に其意を曉しがたし、願はくは緣故を語て聞せ給へ。宋江が云く、汝は未だ張順がことを聞ざるならん、彼嚮に城中に忍び入り、相圖の火を放たんと欲し、獨湧金門の邊まで馳行ける處に、不幸にして敵兵に見顯はされ、遂に亂れ矢に中て死たりと、いまだ云も畢らざるに、張横大に哭て眼を眩し、忽ち昏々として座上に倒れける。宋江是を見て、甚だ驚き、自ら水を以て面に灌ぎ、種々藥を用ひ、一向其名を呼りしかば、良久しうして後、甦生したりといへ共、猶いまだ人事を分たざれば、宋江諸將に命じて醫を需て療治せしめ、先帳下に息ましめ、已に辰の刻にも成ければ、衆將すべて營前に聚れり。其時宋江、裴宣、蔣敬

散に攻戰ふ。唯南門のみ圍ざりしかば、敗北の敵軍共都て南より逃出る。方天定は僅數輩の步軍を從へ、這々南門の外に脫れ出で、直ちに五雲山の下に至りし處に、江中より一個の人現れ出で、口中に一つの劍を啣で岸に跳上り、方天定を望んで急々に馳來る。方天定此勢を見て、大に怕れ、馬に策て逃走らんとしけれども、怪哉此馬曾て進まざりしかば、彼人遂に赶著て、方天定が首を刎落し、則其馬に打乗て手に頭を提て、直ちに進んで城中に跑來る。

○宋江智をもつて寧海軍を取る

此時林沖、呼延灼は、敵を追て六和塔の邊に至りし處に、一個の人手に頭を提げ、馬に乘り、恰も飛がごとくに跑來る。呼延灼此人を見るに、是則船火兒張橫なりしかば、張公は何れより來り給ふや、と問けれ共、張橫肯て答ず、急に馬を飛せて、宋江が前に至りける。宋江是を見て、張橫汝は何ゆゑ水に濕て此處に至るやと問ければ、張橫手に提たる頭を棄て、宋江を拜して云く、我は是張橫にあらず。宋江又怪んで問けるは、汝若張橫にあらずんば、誰ぞや。張橫答ていはく、我は是張橫が弟張順なり、嚮に湧金門の外にて敵に討れ、一點の幽魂離ずして水中に飄蕩しける處に、西湖の龍王我忠義を感じ、水府に留め、懇に厚意を垂て、金華太保

共は、都て艙の内に隱れけり。漸城近く至りしかば、解珍、解寶、彼袁評事に從て城下に馳行き、早く城門開き給へと呼りけるに、守門の軍士共詳かに來歷を問ひ、頓て方天定に斯と報ず。方天定これを聞て、即吳値を遣し、船中の兵糧を改めしむ。吳値命を奉りて城外に出で、彼糧船共を一々查て、再び城内に回り、即刻方天定に相違なきよしを訴へければ、方天定六人の大將に一萬の人數を與へ、東北の角を擱らしめ、彼袁評事をして、諸船の兵糧を城中に運しむ。此時解珍、解寶、幷に諸の猛將共、各水手の體に出立て、兵糧を城中に運び、暫くの間に盡く運び終りしかば、彼六人の大將も軍士を引て城内に入にけり。扨宋の兵共は頓て其跡より寄來り、城を重々に圍で堅く陣勢を列ね、皆勇をなして扣へたり。此夜二更の時分に、凌振暗に吳山の頂に上り、九相子母と名づけたる相圖の炮を放ちしかば、解珍等諸大將各火把に火を著て、一同に喊の聲を揚けるに、城中俄に騷動し、宋の兵城中に充滿したる勢なりしかば、方天定大に駭き、早速馬に乘て馳出けれ共、諸門の軍士等老早八方に逃散けり。宋の兵共は功を爭て武勇を振ひ、喊き叫んで城を攻む。此時又李俊は兵を引いて淨慈港に來り、多く敵船を奪取て、湖の内より兵船を進め、直ちに湧金門に至りて岸に上り、諸將各勢に乘じて水門を奪ひけり。李俊、石秀當先に進んで城中に突て入り、東西南北に馳轉て、散

解珍兄弟
糧米の舟に
入て舟主に

流して云く、我輩は都て宋朝の民なれ共、不幸にして方臘が横行に逼められ、已ことを得ずして多くの兵粮を彼に獻ず、然れ共再たび宋朝の民とならんことを待居けるに、今日想はず横死を遂ん事こそ恨なれとて、一向哭きしゆゑ、某等妄りに殺すに忍びず、先一命を饒せり、此上にも又命令を承つて、宜しく行はんと欲し、早速伺候して是を訴へ奉る。呉用此言を聞て大に悦んで云く、是則天の賜ふ便機なり、其船に就て大功を立べしとて、即時解珍兄弟に命じけるは、爾兩人を首として、凌振、杜遷、李雲、石勇、鄒潤、鄒潤、李立、白勝、穆春、湯隆、王英、扈三娘、孫新、顧大嫂、張青、孫二娘等を帶して、各水手の體に出立ち、宜しく城中に紛れ入て、相圖の石砲を放べし、然らば我兵を發し救應をなさん。解珍、解寶命を受て云けるは、已にかくの如くんば、彼船中の首たる者を誘引せんに、宜しく計を示し給へとて、再び往て糧船に乗り、袁評事と云老人を誘て、又宋江が帳前に至れり。宋江則、袁評事に向つて云けるは、汝已に宋朝の民なれば、我令に従ふべし、我今汝が船に就て計を行はんと欲す、事成の後は重く汝を賞せん、必ず遲疑することなかれ。袁評事謹で命に従ひしかば、許多の軍士共彼糧船に取乘て、水手と打雜り、頓て諸の船を漕出す。王英、孫新、張青、扈三娘、顧大嫂、孫二娘等三對の夫婦は、各稍公稍婆の服を著し、船の頭に立竝ぶ。其餘の勇士

を目がけ砍て掛る。石寶刀を揮て相交へ、はや十餘合戰ひし處に、李逵斧を輪はして、石寶が乘たる馬の足を砍しかば、石寶馬より跳下り、後軍の內に躱れける。鮑旭早くも刀を擧て、廉明を砍て落し、倘項充、李袞と俱に勢に乘じて、散々に攻戰ふ。宋江是を見て、三軍を進め、直に城下迄攻來る。城中には兼て期したる事なれば、擂木、炮石雨のごとく打蒐たり。宋江此體を見て、軍士を傷ふことを恐れ、急に令を下し引退く。鮑旭は只獨り城內に突入ける處に、石寶城門の傍に伏して橫合より砍しかば、憐むべし、鮑旭こゝに於て死しにけり。李袞、項充、李逵三人は此仇を報ぜんと欲しけれ共、敵はや城門を閉しかば、奈何ともすることなく、空く牙を咬で引回す。去程に宋江は又鮑旭を討せ、彌憂を添へ、覺ず淚を流しければ、李逵、項充、李袞等も俱にこれを哭きけり。吳用が云ふ、此計もまた良策にあらず、敵の副將廉明を討しといへ共、鮑旭を失ひしかば、親方却て損ありとて、諸將各是を愁る折節、解珍、解寶帳前に來て、宋江に告けるは、某等兄弟南門の外二十里を馳て、范村と云處に至り、暗に敵の動靜を伺ひし處に、江邊に數十艘の船あるを見、則ち其船に乘て來歷を問しかば、船中の者ども答て云く、我此船は方臘が軍中の兵粮を獻ずる船なれ共、今戰の最中なるに依て、暫く此處にありて、便機を伺ふと告ける故、某等兄弟船中の者共を切殺さんと欲しければ、彼皆淚を

く、石寶は原萬夫不當の勇士なれば、いかんぞ容易彼を捉んや。李逵が云ふ、彼たとひ三頭六臂の人たりとも、我決して彼を生擒べし、若我彼を生捉ずんば、再び宋君に見ゆまじ、必ず憂給ふことなかれとて、遂に己が陣屋に歸り、彼鮑旭、項充、李袞等三人を迎へ語りけるは、我輩四人は從來一處に在て戰ひをなし、互に相助けて同く功を建り、我今日宋公明の前にて誇言を吐き、明日石寶を捉んと約せり、足下等三人も我を助けて力を盡し給へ。鮑旭が云く、我們四人は、就中心服の朋友なれば、心を齊うし、力を合せ、彼石寶を生擒て、武名を遠近に振ふべし、李公宜しく悦び給へとて、各虎の勇を催しけり。次の日李逵等四人飽まで酒を飲で、大に醉ひ、直に宋江が帳前に至て、合戰を一見し給へと云けるに、宋江四人の者が醉たるを見て、心を安んせず、則李逵等に向て云けるは、汝四人徒に一命を傷ふことなかれ。李逵が云く、宋君何ぞ我輩を輕く見給ふや、少刻石寶を捉へて帳前に引しむべし。宋江が云ふ、已に此の如くんば、我敢て戰を一覽せんとて、關勝、歐鵬、呂方、郭盛等四人を引て、北關門の下に推寄せ、鼓を打喊を揚て戰を挑せける。此時李逵二つの斧を持て眞先に進む。鮑旭、項充、李袞等も各軍器を持て馳出たり。石寶是を見て、大に怒り、手に劈風刀を提て馬を城外に騎いだし、吳値、廉明を左右に從へ、李逵等を相迎ふ。李逵等雷の如く吼て、四人齊く石寶

候潮門の邊に發向しける處に、城門關さずしてありければ、劉唐これを見て、功を立んと欲し、唯一騎馬を飛せ、城中に馳入らんとしける時、城の上より多く木石を投て、遂に劉唐を打取けり。林冲、呼延灼大に驚き、急に盧先鋒に見えて、劉唐が討れたることを告知せ、先兵を退けて宋江が本陣に人を馳せ、劉唐一騎馳に進で討れたると報じければ、宋江此よしを聞て、大に哭き、我昔日鄆城縣に於て劉唐と義を結び、倶に晁天王に從て梁山泊に在り、多年戰勞を盡すといへ共、未だ曾て樂を享ず、今日已に討死したるこそ哀れなれとて、則一首の詩を賦して追悼す。其詩にいはく、

百戰英雄士　生平志未降　忠心扶社稷　義氣助家邦
此日梟鳴纛　何時馬渡江　不堪哀痛意　淸泪逐流淙

宋江詩を吟じ畢て、兩眼に泪を洒ぎけり。吳用が云く、此度劉唐を失ひしは、計の妙ならざるに因てなれば、都て某が誤ちなり、宜しく諸門の軍士を收め、別に又良計を商議せんに、願くは宋君哭きを休給へ、と諫めしか共、宋江は猶頻りに憤り、一刻も急に仇を報じ恨を雪んと欲し、一向是を嘆じけり。時に黑旋風李逵躍出て云けるは、宋先鋒心を安んじ給へ、我明日鮑旭、項充、李袞等と共に兵を引て打て出で、彼石寶を捉へて、一覽に具ふべし。宋江が云

ひ、只一刀に鄧飛をも砍て落し、則手を擧て親方の勢を招きしかば、彼寶光國師、數人の猛將を引て城外に砍て出で、宋江が陣中に亂れ入て散々に打けるに、宋の大軍大に敗れ、各北を望で迯走る。宋江危く見えし處に、花榮、秦明等兵を領し、横合より搠て入り、幸に敵軍を追退けて、宋江を救ひけり。石寶は大いに一陣を破り、歡び勇で城中に引回しぬ。扨宋江は敗軍を引て皐亭山の本陣にかへり、只鬱々として、索超、鄧飛が討死したることを悲みしかば、呉用これを諫め、宋君先哭きを休給へ、今城中には許多の猛將あり、只宜しく計を施し、城を攻取給はんこと、是最肝要なり。宋江問て云く、親方の大將討れたる者多くして、諸軍勢都て辟易す、軍師いかなる計を以て城を攻取給はんや。呉用が云く、親方再び兵を引て北關門を攻るならば、城兵必ず出て戰ふべし、此時我兵佯て敗れをなし、宜しく敵を誘て城を離れしめ、則其便機に乘じ、相圖の石炮を放せ、四方より一度に起て總攻をなさば、全き勝を得て大功を立べし。宋江是を聞て、其議に同じ、翌日關勝に兵を與へて、北關門に遣しければ、石寶これを見て、急ぎ城外に突て出で、直ちに關勝を迎へ、十餘合戰ひし處に、關勝馬を回し逃しかば、石寶勢に乘じ追蒐る。此時凌振、頓て相圖の石炮を放ちけるに、四方の寄手此響きを聞き、一同に喊の聲を擧て、城の四門を緊しく攻む。こゝに又副先鋒盧俊義は、林冲等を引て

州城の候潮門を攻め、花榮、秦明、朱武、黄信、孫立、李忠、鄒淵、鄒潤、李立、白勝、湯隆、穆春、朱貴、朱富等十四人は同く艮山門を攻め、李俊、阮小五、孟康、石秀、樊瑞、馬麟、穆弘、楊雄、薛永、丁得孫等十一人は同く葊潮門を攻め、朱同、魯智深、武松、史進、孫新、顧大嫂、張青、孫二娘等八人は、菜市、薦橋等の門を攻め、李應、孔明、楊林、杜興、童威、童猛、王英、扈三娘等八人は、專ら陣中の事を窺て、所々の救應をなす。正先鋒宋江は、呉用、關勝、索超、戴宗、李逵、呂方、郭盛、歐鵬、鄧飛、燕順、凌振、鮑旭、項充、李袞、宋淸、裴宣、蔣敬、蔡福、蔡慶、時遷、郁保四等二十一人を引て杭州城の北關門を攻め、宋江已に諸將の手分を定め、自らは石二十一人の大將を引て、先北關門に寄來り、鼓を響せ鑼を鳴らして、頻りに戰を挑む。此時城門大に開きて、石寶眞先に馳出で、我に敵せんと思ふ者あらば、早く出て雌雄を決せよと、大音聲に呼りしかば、索超聞きも肯ず、大斧を揮て陣前に砍て出で、直ちに石寶と馬を交へ、はや十餘合戰ひける處に、石寶急に馬を囘し迯しかば、索超猶怒て追かくる。關勝是を見て、大に驚き、索將軍敵を追ことなかれ、石寶詐の計ありと、未だ呼りも了らざるに、石寶早くも流星鎚を飛せ、索超が眉間に打著しかば、索超忽ち馬より下に落たりけり。鄧飛、索超を救んと欲し、馬を飛せ、鎗を撚て馳出ける處に、石寶再び勇を奮て鄧飛と戰

しかば、司行方遂に水中に落て死しにけり。其餘の軍士等は盡く四面八方に逃散たり。此時呼延灼も又人馬を引て急に打て出で、盧俊義と兵を一處に合せて、皐亭山の本陣に馳回り、則宋江に見えて、諸將と共に計を商議す。扨彼張招討は、親力の諸將數郡を得たると聞て、大に悅び、卽時に統制等を遣し、宣州、湖州、獨松關等の地を守らせけり。宋江已に呼延灼が陣中を見るに、雷横、龔旺あらざりしかば、則呼延灼に對して、此兩人がことを問て云けるは、我運拙く、近來諸將に別るゝこと多し、兩人はいかんぞや。答て云く、前に德淸縣の合戰に、雷横は司行方に討れ、龔旺は黃愛を追蒐け、想はず溪の内に落ち、亂軍に殺されぬ、此時索超は米泉を討取り、猶諸軍を進めて、黃愛、徐白兩人を活捉り、司行方は盧先鋒に緊しく追れ、遂に水中に落て死し畢ぬ、其餘の敵兵どもは東西南北に逃散たり。宋江又雷横、龔旺を討せて大に哭き、則諸將に對して云けるは、我前夜夢中に於て、張順を見し時、其傍に猶四五人鮮血に染て在けるが、是則董平、張淸、周通、雷横、龔旺等が陰鬼なり、我若杭州を得ば、多く高僧を請待して、法事を設け、懇に諸將の靈魂を追薦すべしとて、此日は先牛を殺し、馬を宰て三軍を賞しけり。次の日宋江又諸大將を分て所々の城門を攻さしむ。副先鋒盧俊義は、林冲、呼延灼、劉唐、解珍、解寶、單廷珪、魏定國、陳達、楊春、杜遷、李雲、石勇等十二人を引て、杭

彼今逃たるは、定めて闘勝を欺いて、流星鎚を使んと圖しものならん、必ず彼を追べからず。宋江是を聞て云けるは、已にかくの如くんば、先兵を引がへし、陣を牢んとて、遂に諸軍を引て再び本陣に回り、早速使者を馳て武行者が功を賞しけり。扨又黒旋風李逵等は、盧先鋒を迎へんが爲、歩軍を引て山路に至りし處に、張儉等敗軍を集て此邊に來りしかば、李逵諸將を引て砍て入り、亂軍の中に姚義を打取ける。張儉、張韜兩人は、再び關上に逃回らんと思ひ、半途に至り、又盧俊義が軍馬に行遇ひ、大に一陣に破られ、這々山に入小路より逃走る。盧先鋒人馬を進め、緊しく追蒐ければ、兩將馬を乘放て歩行より山を下り、纔一里許逃延ける處に、竹林の内より、兩人の大將躍り出で、遂に張儉、張韜を生擒けり。此兩將は、則解珍、解寶兄弟なり。盧先鋒是を見て、大に悅び、頓て李逵等と兵を合せ、皐亭山の本陣に回り、則宋江に見え、戰の始終を語り、董平、張淸、周通等の討死を悲みけり。翌日彼張儉、張韜を蘇州に引せ、張招討が本陣に送り、卽日これを誅せしめ、董平等が靈前に備へけり。宋江、盧俊義に對して云けるは、將軍は旗本の兵を引て德淸縣に馳行き、速に呼延灼を迎へ、當陣に回り給へ、然らば我計を商議して城を乘取べし。盧俊義令を請て、早速陣外に打て出で、直に奉口鎭に至て、司行方が敗軍に適遇ひ、盧俊義自ら勇を奮て一陣を打破り、緊しく跡を慕うて追討したり

魯智深
鄧元覚
歩戦
図

とは、誰々も聞及ぶ處なるが、其言果して詐あらずとて、深く是を感歎す。かゝる處に飛脚到來し、北關門の下に又一彪の兵寄來れりと報じければ、石寶大に慌て、急に北關門に馳行けり。扨宋の軍中には武行者有て、魯智深が誤もあらんを恐れ、忽ち兩刀を揮て寶光に砍て蒐る。寶光兩將に敵しがたくや思ひけん、遂に禪杖を挽て城中に逃走る。武行者跡を慕うて追蒐ける處に、城中より又一人の猛將突て出づ、是則方天定が手下の大將貝應夔と云者なり。貝應夔鎗を撚て武行者を相迎へ、兩人各勇を奮て、十餘合戰ひし時、武行者右の刀を擧げて、貝應夔が鎗の柄を砍折り、囘す刀にて早くも首を刎たりけり。方天定是を見て大に怕れ、堅く城門を關さしめて、再び出て戰ふことあらず。此時朱同兵を引て、十里餘退き、堅固に陣を列ねて、捷戰のことを宋江に注進せり。宋江は北關門に推寄て戰を挑む。石寶、流星鎚を帶し馬に乘り、手に劈風刀を横たへて、城外に馳出たり。宋の軍中より、大刀關勝當先に騎出し、直に石寶を迎へて、早二十餘合戰ひし處に、石寶忽ち馬をかへし、城中に逃走る。關勝敢てこれを追ず。同く馬を勒へ本陣に囘りしかば、宋江問て云く、關勝將軍は、何ゆゑ石寶を追ざるや。關勝答て云く、石寶が武藝我下にあらず、然るに彼馬を囘し逃走るは、必定詐の計あらんと思ひ、此故に我彼を追ず。吳用が云く、石寶はよく流星鎚を使ふと聞き及べり。

○張順が魂方天定を捉ふ

こゝに又城の東門を攻る大將朱同、魯智深等は、五千の兵を引て、湯鎭の大路より轉て、菜市門の外に至り、急に東門を攻取んと欲して、魯智深當先に進み、恰も奔雷のごとく吼て、敵を罵りしかば、城兵共是を聞て、大に驚き、早速走り入て方天定に斯と告ける處に、寶光國師鄧元覺、傍に在て此言を聞き、魯智深と云僧、戰を挑とや、彼よく鐵の禪杖を使ふと聞及べり、我彼と歩戰をなし、雌雄を決せんとて、方天定に此よし奏しければ、方天定大に悅び云く、我自ら城樓に上て、國師の戰を一覽せん、彌勇力を盡すべしとて、八人の猛將を引て樓の上に登りける。此時彼寶光國師、五百の歩軍を率して、城外に打出たり。魯智深是を見て云けるは、南軍の內にも又能禪杖を使ふ僧ありや、任他三百杖を與へんとて、彼鐵禪杖を風車に輪し、直ちに寶光を望で打て蒐る。寶光も又禪杖を揮て相迎へ、兩僧互に武勇を震て五十餘合戰ひしか共、勝負未だ決せず。方天定此體を見て、心中に驚き、卽ち石寶に對して云けるは、梁山泊の花和尙魯智深と云惡僧ありと聞きしか共、かくまで武勇あらんとは思はざりけるに、豈料らんや、寶光國師の勇よりも猶勝りて見ゆるなり。石寶が云く、誠に魯智深は萬夫不當の勇あり

孫新、顧大嫂夫婦兩人等百姓の形に出立せ、李立、湯隆、時遷、白勝蒐と倶に、深山の小路より關に上せ、火を放しめければ、南兵共大に驚き、敵已に關に上りたるぞ、早く逃よと呼て、我殿れじと走りける、是に於て盧先鋒大軍を引て關上に上り給へり、扨彼孫新、顧大嫂は吳昇を生捉り、李立湯隆は蔣印を生捉り、時遷、白勝は衛亨を生捉しかば、盧先鋒此三人を張招討が本陣に引渡しぬ、又董平、張淸、周通等が屍を拾せ、ともに關上に葬り、盧俊義自ら祭を遂げ、盧先鋒は猶關を過て賊兵を追蒐け、厲天閏に追付て鋒を交へ、自ら手を下し、戰十餘合にして、厲天閏を討取り、只張儉、張韜、姚義は萬死を遁れ逃去ぬ、定て、盧先鋒近く此處に至りたまふべし。宋江此時始て、董平等が討れたるを聞き、潸然として淚を流しけり。吳用が云く、盧先鋒已に勝利を得て、關を乘取し上は、一刻も早く人馬を催し、挾で南兵を攻べきに、南兵爭か敗れざらんや、宜しく呼延灼が軍馬を以て、救應となし給へ。宋江此義に同じ、先李逵、鮑旭、項充、李袞等に三千の步軍を與へ、盧先鋒を迎はしむ。李逵大に悅び、即日本陣を打出けり。宋江又張順を祭ん爲、湖邊に出て、不慮に四人の敵將の首を得たるを、張招討へ申遣し、生捉し茅廸を檻車に入て渡しければ、張招討、盧俊義より送りし三人共に、一度に引出し、首を斬しめけり。

暗に人馬を引き、關を下り、先周通を討取り、李忠に刀疵を被せり、若親方これを救ふこと遲りせば、盡く敵に討るべかりしに、幸ひはやく勢を出し相助けたり、翌日董平此仇を報ぜんとて、只一騎關下に馳行き、大に敵を罵りしに、關上より石炮を放て、董平が左の臂を打ければ、董平鎗を遣ふこと能ず、再たび本陣に歸り、次の日又馳出て、仇を報ぜんと欲しけれ共、盧先鋒堅く制して、是を許し給はざりしかば、第三日の午の上刻、董平又張淸と商議し、兩人暗に陣中を走り出で、馬にも騎ず歩行より、關上に上りける處に、厲天閏張韜これを見て、兩人急ぎ關を下て相欄へ、厲天閏先長鎗を持て董平と戰ふ、董平勇を奮て厲天閏を捉んとせしか共、左の臂に疵を被りし故、鎗を遣ふこと自由ならず、遂に敵を捨て退きし處に、厲天閏跡を慕うて追下りしかば、張淸是を見て、早くも鎗を撚り、只一搠にと厲天閏を搠けるに、天閏原來眼明にして、手快き者なれば、急に身を扭てこれを避たりしに、張淸が鎗想はずも、松の樹に搠著しかば、張淸大に焦燥て、拽拔んとしけれ共、深く入て容易拔ず。厲天閏この便機に乘じ、再び鎗を撚り、遂に張淸を搠伏けり、董平是を見て大に怒り、又鎗を擧て、厲天閏を搠んとせし處に、張韜後に轉て、唯一刀に董平を切殺せり、盧先鋒此事を聞て、大に憤り、急に援兵を發して敵を討んとし給ひけれ共、敵早く關に上り再び出ず、此夜盧先鋒一つの計を生じ、

行ひ、敵將四人が首を得、且茅廸を活捉り。吳用聞て、誠に神妙の計なりと感じけり。宋江未だ獨松關、德淸州の消息を聞ざりし故、此日戴宗を彼兩所に遣しける。戴宗數日を過て本陣に回り、則宋江に見えて告けるは、盧先鋒已に獨松關を過れり、近日定て此處に至るべし。宋江又問て云く、諸將皆恙なきや。戴宗答て云く、我委しく戰の次第を聞り、宋君必ず憂へ給ふことなかれ。宋江猶疑て云けるは、諸將の內討死したる者有べきに、汝是を藏すことなかれ。戴宗が云く、彼獨松關の兩邊は、都てこれ高山なり、中央に一筋の道あり、山上に一個の關あり、關の傍に一株の大樹あり、其高さ數十丈にして遍く諸方に見ゆ、其下にはことく〳〵松の樹あり、關上に三人の敵將あつて緊しく相守る、第一人は吳昇と云ふ、第二人は蔣印と云ふ、第三人は衛享と云ふ、最初には時々關を下て林冲と戰ひけるが、林冲已に蔣印に負傷て後は、吳昇敢て關を下らず、唯關上に在て堅固に守り、其後厲天閏又猛將を引て關を救ふ、彼四人の猛將は則厲天祐、張儉、張韜、姚義等の四將なり、次の日敵關を下り、我兵と相戰ふ、賊軍の內より、厲天祐當先に進み出で、呂方と鋒を交へ、戰五十餘合に至て、呂方遂に厲天祐を刺伏しかば、敵兵又是に恐れ、關を下らず、盧先鋒山の險しきを見給ひ、妄りに兵を動さず、先歐鵬、鄧飛、李忠、周通等を遣し、山路を伺せける處に、厲天閏豫じめ是を知り、

て、宋江を討もらすな、と呼りける。今此處に突出て、宋江を捉んとする大將、總て十人あり。南山の方には、吳值、趙毅、晁中、元興、蘇涇等あり。北山の方には、溫克讓、霍彧、廉明、茅迪、湯蓬士等あり。此十人の大將各三千人の勢を引て兩邊より砍て出で、直に宋江を望で馳來る。斯る處に、又橋の下に喊の聲起り、左に樊瑞、馬麟あり、右に石秀あり。各五千の軍馬を領し、一同に竝び起り、敵の兩軍を迎へ相戰ふ。南兵共是を見て、大に駭き、急に引回さんとしけれ共、宋の兵緊く追詰め、散々に打ければ、溫克讓遂に敗れ、四人の大將を引て河を過んとせし處に、山の背後より、阮小二、阮小五、孟康五千の兵を引て砍て出で、茅廸を生捉り、湯逢士を搠殺す。南山の首將吳值も又四人の勇將を引き、急に退んとせし處に、李逵、鮑旭、項充、李袞等各勇を奮て緊しく是を打つ。元興、蘇涇、趙毅等を伐て、敵兵を過半湖中に追入しかば、盡く水に溺て死にけり。城中の軍士共是を見て、大勢城戸を開き、急に突出しか共、宋江が軍馬ははや山中に入り、靈隱寺に至り、各功を獻じ賞を蒙りける。此時奪取し馬五百餘疋と記せり。宋江又石秀、樊瑞、馬麟等を留て、李俊と共に西湖の山寨を守らせ、城を攻取ん用意をなさしめ、自らは只戴宗、李逵兩人を引て、再び皐亭山の陣に馳回る。吳用以下の諸大將各宋江を迎へ陣中に入り、座已に定りける處に、宋江、吳用に對して云く、我此の如く〳〵計を

宋公明自ら至て
張順が灵魂を
追福す

の大事を以て念とし給ひ、兄弟の情を以て、自ら尊體を傷ひ給ふことなかれ。宋江が云く、我自ら湖中に往て張順を祭るべし、若然らずんば、豈能此心を慰めんや。吳用諫て云く、宋君自ら敵の險地に至り給はん事、大に不可なり、敵もし斯と知るならば、必ず來て宋君を攻べし。宋江がいはく、我自ら計あり、何ぞ敵を恐れんやとて、早速李逵、鮑旭、項充、李袞等の四將に五百の步軍を與へ、路徑を窺はしめ、宋江は、石秀、戴宗、樊瑞、馬麟等を從へて五百の軍士を引て、暗に西山の小路より、李俊が陣に來る。李俊此消息を聞て、途中に出迎へ、直に靈隱寺の方丈に誘ひしかば、宋江又大に歎て、當寺の住職に對面し、則經を讀誦せしめ、張順を追薦し、翌日黃昏に宋江又一面の白旗の上に、亡弟正將張順之魂と書て、これを水邊に立しめ、西陵橋の上に多くの祭物を供へ、李逵に計を授けて、北山の路口に埋伏せしめ、樊瑞、馬麟、石秀等にも同く計を授て、左右に埋伏なさしめ、自らは戴宗を從へ、四五人の僧を引き、小行山より西陵橋の上に轉り至て、香花、燈燭、幷に祭物等を供へしめ、宋江當中に在て湧金門の下に迎ひ、頻りに流涕して、張順を祭る。戴宗も又傍に在て、同く湧金門の下に拜せり。諸の僧共一同に經を讀て、張順を追薦す。宋江自ら香を拈り、酒を奠り、懇に張順が靈魂を弔ひける處に、橋の左右喊の聲大に起り、南北の兩山に鼓の聲齊しく響き、兩隊の軍馬突出

が歎く聲を聞て、帳中に進み入り、何事を悲み給ふやと問ければ、宋江答ていはく、我今怪き夢を見たり、早く軍師を請ひ、夢の吉凶を問んとて、急ぎ使を遣しければ、呉用來てまみゆ。宋江が云く、我今夢中に於て、張順并に四五個の人に遇けるとて、張順が云しこと一々詳に語りければ、呉用是を聞て云けるは、張順湖を過て城中に忍び入り、相圖の火を放んと云けるを、一心思ひにかけ給ふ故、斯る夢を見給ふならん。宋江が云く、我張順が形を見しに、渾身血に染で、今更悲き體なりしかば、必定討れたるに疑ひあらじ。呉用暫く沈吟し云けるは、誠に張順は心靈なる勇士なれば、靈魂來て宋君に別れを告たることも有べし、嗚呼惜き大將かなと嘆じける。宋江又云ふ、傍に在し四五個の人も各血に染て悲き體なりけるが、知らず誰なるにやと、議論し居ける處に、李俊が方より飛脚來て、宋江に見え、張順湖を越て湧金門の下に至り、不幸にして敵に射殺され、敵其首を得たりと、未だ云も畢らざるに、宋江忽ち地上に倒れ、深く是を哭き、只昏々として涙に噎びければ、呉用等の諸大將も、各悲嘆に勝ざりけり。張順は原人となり溫和にして、諸將と交りを睦じうしける故、別して諸人に惜れける。宋江涙を拭て云けるは、我一生に此の如き悲しき事はよもあらじ、いかんぞ再び張順を見ることあらんやとて、又泫然と流涕袖を浸したりしかば、呉用等諫て云く、願くは宋君國家

○湧金門に張順神を歸す

混江龍李俊は、宋公明の本陣に使を馳せ、浪裡白跳張順唯一人、敵の水門より城中に入らんと申を、再三留れ共承引なく、强て剛勇にはやり、眞如此々の次第なりと告知せける。宋江是を聞て、東門の軍士等に斯と告知せ、此夜帳中に在て、吳用と軍情を商議し、直に四更の前後に至て、頗る疲れしかば、則左右の人を退け、唯獨几に靠て眠りける處に、忽然として一陣の冷風起りける。宋江駭き起て、燈の下を見るに、一個の人冷氣の内に立て、滿身血に染み、則宋江に對して云けるは、某多年宋君に隨て恩愛を蒙りしか共、未だ一二を報ぜず、今已に湧金門の下にて討れけるゆゑ、特と來て辭別し奉る。宋江大に駭きて云く、汝は張順にあらずや、先近く寄て我にまみえよとて、又傍を見るに、同じき四五個の人、渾身紅に染で立ち竝べり。宋江分明には見えざりしかども、定て諸將の内討死したる者どもならんと思ひ、大に聲を放て哭きける處に、驀然として覺來れば、則是南柯の一夢なり。帳外に在し者共、宋江

れ、此時知己となりしより、梁山泊に入り水軍頭領にて、其武名天下に隱れなく、神醫安道全を建康府より迎へんため、楊子江を渡る時も、截江鬼張旺と云ふ海賊に金銀行李を奪れ、水中に沈られしか共、悲哀の難を凌ぎ、不日に海賊を捉へ、己になせしごとく、綁て水中に沈め、一時に仇を報じ、其他所々の軍に、大功を顯せしこと數盡すべからず、無雙の頭領なりしが、一瞬の夢と消失せしは、無慚なりし次第なり。宋江、方臘を征伐の軍以前、公孫勝は歸山し、蕭讓、金大堅、樂和、皇甫端、安道全は帝都に在り、楊子江を渡りては宋萬か討死を肇とし、焦挺、陶宗旺、鄭天壽、曹正、王定六、韓滔、彭玘、宣贊、郝思文、張順と連綿討死し、楊志は病て臥し、軍に從ず、都て百八人なりし内十八人缺たれば、宋江は申に及ず、諸將愁鬱に迫ること實に理に覺えけり。張順が亡魂、靈を現すこと、其他杭州の軍事、次巻を讀て知るべし。

流布の本に吳値をごしよくと訓は誤なり。又寉或を寉或に作り、通二達海島一と有を訓誤り、達海島と三字の地名とする如き誤り諸所に多し。

張順敵地の水門に忍倚て
鈴索を扯ふる

ひ見けれども、更に一物もあらざりしかば、諸人又心を安んじ歇けり。此時已に三更の鼓を打ければ、張順又水面に浮んで城の邊に至り、岸に上て城中に入んと圖りけるが、若城中に人あらば、必ず非命の死を遂べきに、先一試んと、小石を拾て城中に投入ければ、城中未だ睡らざる軍士有て、大に驚き、城外に人ありと呼りける。張順此聲を聞て、又水底に藏れ有り。城中の騷動を聞に、餘多の軍士水門を見て云けるは、恠かな、何者の所爲にて城中に石を打けるや、若水面に船もや有らんとて、衆皆湖中を見けれ共、波風靜にして、半隻の船もあらず。軍士ども一同に云けるは、必定妖怪有て、我們を欺くならん、唯打捨て歇めとて、盡く女墻の邊に有て睡けり。此時はや四更の天氣なりしかば、張順ひそかに想ひけるは、若一向遲疑せば、少刻天明なるべし、片時も早く城中に忍入らんとて、再び岸に上て城内に石を打ければ、曾て騷動せざりしかば、張順心中に悅び、宜しく城の墻を越んとて、すべて一二丈上りける處に、城中に梆子を打しかば、諸の軍士共一度に起上り、手每に鎗を持て、城外を見下し、はやくも張順を看著て、曲者こそ在なれ、それ討取れ、と騷動す。張順急ぎ水中に跳入て、水底に淬入せんとしけれ共、城中より數千の箭を雨の如く射出しければ、張順遂に箭にあたりて、水中に死したりけり。抑此張順は江州にて魚牙主をなせし時、宋江は江州に配流せら

あらんやとて、此夜張順身邊に刀を藏し、遂に西湖の岸に至て、遙かに城郭を見るに、四つの禁門湖岸に臨で、備尤堅し。一つは錢塘門、一つは湧金門、一つは淸波門、一つは錢湖門なり。此西湖は天下無雙の絶景なりしかば、東坡詩を題し是を稱美してより、以後許多の詩客文人、此地の題詠其數を知べからず、今も猶西湖の十景とて畫にも書ことぞかし。張順已に西陵橋に至て水面を伺ひ、暗に心中に想ひけるは、我もと潯陽江に在て、多く大風巨瀾等に遇しか共、いまだ曾て此湖のごとき大水を見ず、若此處に於て討死せば我本望なり、と悅んで、遂に衣服を脫で橋の下に閣き、腰の帶に刀を挿し、水中に飛入り、暗に水底を潛て、湖を過來る。此時初更の天氣にて、月色微に明かなり。張順はや湧金門の邊に至りける處に、城中に一更の鼓を打ち、城外殊更靜にして、只一個の人もあらず。城中女墻の邊には、四五人の兵有て、一向城外を望見る。張順是等の人を見て、再たび水中に沈み、良久うして、又女墻の邊を見るに、四五人の兵はや見えざりしかば、張順直に水口の邊に探り至て、四下を伺ふに、女墻の內より鈴の索を掛て城外に垂しかば、卒爾に近づくべき樣あらずして、張順大に焦ち、彼索を取て扯斷んとせし處に、鈴一同に響しかば、城中の人是を聞き、大に怪み云く、鈴の索に響しは、疑らくは大魚來て索に觸たるゆゑ、鈴まさに響しものならんとて、盡く水面を伺

けるが、徐寧、郝思文討死したると聞て、李俊頗る是を驚き、則ち張順と商議して云けるは、我輩が守る處は、獨松關、湖州、德淸二處の要害の地なり、抑又賊兵等都て此處より出入す、我輩彼が喉の地を守り、敵若左右より夾で攻來らば、我兵必定破るべし、如じ兵を起して西山の内へ突入り、西湖を用て戰場とすべし、殊さら山西の背後は、忠溪に通じければ、是又味方の爲に利多からん。張順が云く、我輩半月餘り、此處を守るといへ共、敵未だ出て戰ふ事あらざれば、曾て寸功を立ず、若山中に屯せば、敵彌戰ふこと有まじければ、何れの日か功を立る事あらんや、我今湖中より水を渡て、水門より魚の如く、城中に忍び入り、暗に火を放ち相圖とすべし、李公若火を見給はゞ、兵を進めて敵の水門を乘取給ひて、宋先鋒に注進し、三路の軍馬一同に竝び起て、城を攻給へ、然ば立處に大功を得給ふべし。李俊が云く、此計尤妙なりといへ共、足下一人敵地に赴き給はゞ、恐らくは誤あらん。張順が云く、我たとひ一命を捨るとも、宋先鋒の爲なれば何ぞ一點も惜きことあらんや、李公必ず遲疑し給ふことなかれ。李俊が云く、足下先止り給へ、我豫じめ宋先鋒に訴へて援兵を求ん間、其節計を行ひ給へ。張順が云く、我急に行て計をなすべし、其跡にて宋先鋒に斯と告給へ、我已に城中に至る時は、宋先鋒も又此消息を聞給ひて、必ず援兵を差向給ふべし、怎ぞ再三延引すること

に染にけり。徐寧此矢に痛んで働くこと能ず、急に馬を回して逃走る。敵の六將後を慕うて追來り、已に危く見えし處に、關勝兵を引て此處に馳至り、敵の六將を追散し、徐寧を救ひ、遂に陣中に回りて、徐寧を見るに、徐寧原毒矢に中りしかば、はや眼を眩し倒れける。關勝大に驚きて、宋江に斯と注進す。宋江是を聞て、卽日關勝が陣屋に至り、則徐寧を見るに、憐むべし、徐寧滿身紅に染て半死半生の體なり。宋江涙を洒で深く嘆息し、早速醫師に命じ療治を加へしかども、毒矢に中りしことなれば、其夜四更の時分に、又眼を眩し、人事を覺ざりしかば、宋江天を仰で嘆じけるは、神醫安道全は都に召かへされ、此處又別に名醫もあらざれば、徐寧を救はんこと難かるべしとて、彌涙を流し哭きける。軍師吳用是を諫て云く、宋君先本陣に回り給ひて、軍事を議し給へ、何ぞ兄弟の情を以て、國家の大事を誤ち給はんや。宋江此時人を以て徐寧を秀州に送り、宜しく療治を加へしめけれ共、原毒矢に中り、其毒骨髓に透りしかば、半月を過て遂に死したりける。去程に宋江は人を馳て、郝思文が音信を聞しめける處に、杭州北關門の城中より、郝思文が首を竿の頭に貫て、親方の諸軍に見せけると告ければ、宋江此言を聞て、これを悲しむ。時節、徐寧遂に死したりと、注進有しかば、宋江益心を痛め、先兵を屯して大路を守りける。扨かの水軍の大將李俊等は、兵を引て北新橋の邊を守り

江、呉用、戴宗、李逵、石秀、黄信、孫立、樊瑞、鮑旭、項充、李袞、馬麟、裴宣、蔣敬、燕順、宋淸、蔡福、蔡慶、郁保四等なり。第三隊の大將は、李應、孔明、杜興、楊林、童威、童猛等也。此日宋江兵を分て各進發す。扨第一隊の大將關勝等は、兵を引て東新橋に至り、遍く四方を窺ひ見れ共、敵一人もあらず。關勝心中に疑ひ、早速橋外に引退いて本陣に人を馳せ、此由を宋江に訴ふ。宋江此言を聞て、戴宗を遣し、則關勝等に命じけるは、輕々しく兵を動すべからず、毎日兩人の大將出て自ら敵の動靜を伺ふべし。關勝等これを聞て、其言に從ひ、第一日には花榮、秦明自ら出て敵の動靜を窺ひ、第二日には徐寧、郝思文自ら出て敵の消息を窺ひ、一連に數日輪流出て南軍を伺ひしかども、敵曾て一人も出ず。此日又徐寧、郝思文數十騎を引て北關門の邊に至り、遙に城門を望見るに、城門大に開けてありしかば、兩將齊しく馬を進めて、吊橋の邊に至りける處に、忽然として城の上に鼓を鳴し、早くも一彪の軍馬撞て出る。徐寧、郝思文是を見て、急に引退んとせし時、城の西の方に喊の聲大に起り、又百餘騎の軍馬衝て出で、直に徐寧を迎へて相戰ふ。徐寧鎗を撚て、大勢の中に搠て入り、良久しく戰て、再び圍の外に突て出で、頭を廻らして親方の軍馬を見るに、郝思文大勢と戰うて、遂に活捉れしかば、徐寧急にこれを救はんとしける處に、一筋の流矢飛來て身上に中り、血は倐として紅

彼王仁、鳳儀再び馬を出して、大音聲に呼りけるは、宋朝の敗軍命惜ぐば、速に馬を下て降參せよ、若然らずんば一人も漏さず盡く討取べし。秦明是を聞て、大に怒り、馬を跳せ棒を輪して、陣前に打出で、又鳳儀を迎へて相戰ひ、王仁は猶花榮を罵て戰ひを挑しかば、花榮忿然として突出んとせし處に、徐寧が背に在て暗に弓箭取て打搭へ、能挽て漂と放しかば、其矢誤たず、王仁が左の眼に中り、王仁遂に馬より下に落にける。南軍是を見て、各色を失ひ、忽ち辟易して相騒ぐ。鳳儀は王仁が討れたるを見て、力を落し、是又秦明が棒に眉間を打れ死にけり。南兵共是を見て、大に亂れ、盡く四面八方に逃走る。宋の兵後へに隨て追討し、各勇を奮て攻しかば、石寶敵すること能ず、皐亭山に引退き、直に東新橋の邊に至つて陣を取る。此日も漸く昏ければ、南兵ども戰はん心あらず、遂に城中に引退きけり。次の日宋江、三軍を引て皐亭山を過り、直ちに東新橋の下に至て陣を取り、兵を三路に分て杭州を攻しむる。一路は步軍の大將魯智深、朱同、史進、武松、王英、扈三娘等兵を引て湯鎭路より打て出で、杭州城の東門を攻る。一路は水軍の大將は、李俊、張順、阮小二、阮小五、孟康等兵を引て北新橋より船を進め、古塘截の西路を過て、皐湖の城の城門を打ち、一路は馬步水の三軍三隊に分れ、北關門、艮山門を攻る。第一隊の大將は、關勝、花榮、秦明、徐寧、郝思文、凌振等なり。第二の大將は、宋

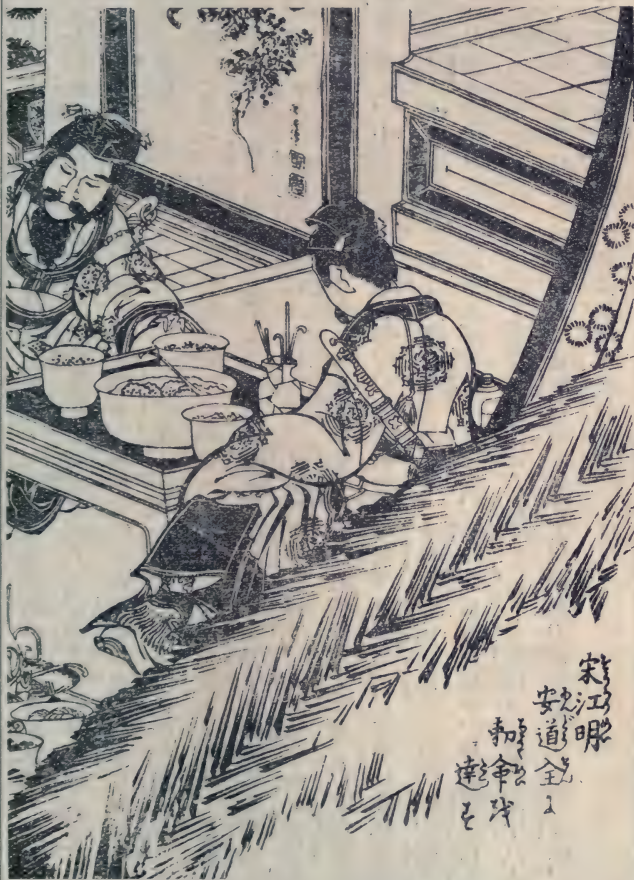
宋江を活捉るべし。方天定是を聞て大に悦び、早速人馬を催し、諸將に分與へ、自らは國師鄧元覺と共に堅く城を守る。扨彼三人の元帥各副將を引て進發す。護國元帥司行方は薛斗南、黃愛、徐白、米泉等四將を引て、德淸州を救ふ。鎭國元帥厲天閏は、厲天祐、張儉、張韜、姚義等四將を引て、獨松關を救ふ。南離元帥石寶は、溫克讓、趙毅、冷恭、王仁、張道原、吳値、廉明、鳳儀等八將を引て敵の大軍を迎ふ。三人の元帥各三萬餘騎を領し、先司行方は德淸州を救はんが爲、奉口鎭を望んで進發す。厲天閏は獨松關を救はんが爲、餘杭州を望んで進發す。去程に宋江は大軍を領して、臨平山に至り、山の頂を望見るに、一面の紅旗ありしかば、宋江先花榮、秦明に一千の軍馬を與へて、先陣に進ましむ。兩將兵を領して、一同に打て出で、已に山口を過て、未だ一里も行ざるに、はや石寶が軍馬に行遇けり。石寶が手下の大將王仁、鳳儀、各鎗を撚て陣前に跳出る。秦明は狼牙棒を輪して鳳儀と戰ふ。花榮は鎗を撚て、王仁と戰ひしか共、雌雄いまだ決せず。秦明、花榮敵軍の後へを見るに、救ひの兵多かりしかば、兩將急に馬を勒へて陣中に馳回れり。花榮が云く、敵勢甚だ大なれば、先戰を休て、宋先鋒に斯と訴へ、別に商議をなして敵を破るべし。秦明此言を聞て、可なりと同じ、卽時に人を馳て、戰の次第を宋江に訴へしかば、宋江急ぎ朱同、徐寧、黃信、孫立等四將を引て自ら陣前に馳來る。

鎭國大將軍厲天閏　護國大將軍司行方

厲天祐　吳値　趙毅　黃愛　晁中　湯逢上　王勣　薛斗南
冷恭　張儉　元興　姚義　溫克讓　茅廸　王仁　鳳儀
鶴或　廉明　徐白　張道原　貝應夔　張韜　蘇涇　米泉

又二十四人の將軍あり。

此面々皆各萬夫不當の勇あり。總て二十八人、方天定が帳前に至て計を商議す。方天定令を下し云けるは、卽今宋江が兵水陸より並び進で寄來り、已に江南を渡て、我三郡を攻取り、杭州は原南國の要害なるに、若此處を失はゞ、睦州を保んこと難かるべし、前日司天太監浦文英奏して云けるは、罡星我地を犯して禍大ならんと、今果して宋江等兵を引て我地を犯すこと、是則浦文英が言に應ぜり、汝等諸官高祿を受しことなれば、此度一命を輕んじて、敵を追退け、宜しく君恩を報ずべし、必ず怠ることなかれ。諸將頓首して云けるは、殿下心を安んじ給へ、親方には數多の猛將勇兵あり、何ぞ宋江ごときを恐れんや、今已に數郡を失ふといへども、是又憂とするに足らず、宋江、盧俊義兵を三路に分て、杭州を攻取んと圖る由、豫じめ是を聞及べり、殿下は國師と共に寧海軍の城を守り給へ、臣等各軍馬を引て敵を迎へ、只一戰の内に

宋江眠
安道全よ
勅命伐
違を

炮幷に旗號を持しめ、暗に彼地に遣さば、必ず其利を得ること有べし。宋江此議に同じ、頓て張橫、阮小七に侯健、段景住を相添へ、宜しく事を行ふべしと、命じければ、四人の大將命を領し、水主等を引き、直に海邊に至て船に乘り、錢塘江の內に漕行けり。扨宋江は再び秀州に回り、杭州を攻取ん計を議しける處に、勅使至て御酒を賜ると報じければ、宋江自ら諸將を引て勅使を城中に迎へ、則宴を設けて、慇懃に饗應し、酒已に數巡に至りし處に、勅使宋江に語ていひけるは、帝前日風病を得たまひて、御惱有ゆゑ、大醫安道全を朝廷に召給はんとの御事なり、將軍宜しく安道全を都に遣し給へ。宋江敢て勅命を違ず、卽時安道全を呼で斯と告知らせ、酒宴已に終りしかば、勅使遂に安道全を引て、宋江に辭し、各城外に打出ける。宋江又諸將を領し、十里長亭まで送り出で、慇懃に一禮を述て別れけり。去程に宋江は御酒を分て諸將を賞し、翌日劉光世に辭し、秀州城を打出で、水陸並び進で急しかば、はや崇德縣に至りける。此處を守る大將、宋江が大軍寄來りと聞て、唯一戰にも及ばず、早速杭州に逃行けり。扨彼方臘が太子方天定は、諸大將を集めて、宋江を退ん計を商議す。此時二十八人の勇士、悉く帳前に伺候せり。此內四人は元帥なり。又兼て大將軍の號を稱す。其面々は、

寶光如來國師鄧元覺　南離大將軍元帥石寶

に從て、方臘が陣中に忍び入り、敵地の備を窺て、共に大功を立て、聊宋君の厚恩を報じ奉らん。柴進是を聞て大に悅び、便ち燕青に對して云けるは、我は白衣秀才の形に出立べき間、汝は家僕の形に出立ち、琴劍書物笈等を背て、我に從ひ給へ、然らば見る人疑ひを起すこと有まじければ、直に海邊に至て船に乘り、越州を過て諸曁縣より山路を行ば、睦州はや遠からず。宋江が云く、越州の軍民共は、猶我朝に從て、未だ方臘に降らざれば、我公文を遣はして、彼所の守將に與ふべき間、吉日を撰で早く發足し給へ。柴進、燕青悅で命を受け、遂に用意を調へて、翌日宋江に別れ、直に海邊へと急ぎけり。玆に又軍師呉用、再び宋江に對して云けるは、杭州の南半邊は、錢塘の大江有て海島に通達せり、若一人の大將小船に乘て海邊より赭山門に進み入り、直に南門の外に繞出て、相圖の石炮を放ち、幷に相圖の旗號を立ば、城兵必ず騷動すること有べし、知らず水軍の大將、誰かあへて彼地に赴んやと、未だ云も罷らざるに、張橫、三阮進み出て云く、我輩、敢て彼地に赴ん、宜しく號令を下し給へ。宋江が云く、杭州の西路は都て湖泊を頼要害とする處なれば、又水軍を用ふべきことあらん、足下等四人皆一同に往は却て惡かるべし、別に又宜しく商議せんとて、計を呉用に問ければ、呉用が云ふ、只張橫と阮小七とに侯健と段景住とを添へ、總て三十餘人の水手を與へて、十餘挺の石

徳清縣を攻め、直に杭州に至て會合すべしと、約を定めけり。宋江是を聞て、又問けるは、盧先鋒に從ふ大將は幾許ぞや、又呼延灼に隨ふ大將は幾許ぞや、一々其名を報じ、我に聞しめよ。燕青が云く、盧先鋒に隨て獨松關に向ひし大將は、總て二十三員なり。

先鋒盧俊義　朱武　林冲　董平　張清　解珍　解寶
呂方　郭盛　歐鵬　鄧飛　李忠　周通　鄒淵
鄒潤　孫新　顧大嫂　李立　白勝　湯隆　朱貴
朱富　時遷

又呼延將軍に從て湖州城に在り、近日兵を進めて徳清縣を攻んとする大將は、總て十九員なり。

呼延灼　索超　穆弘　雷横　楊雄　劉唐　單廷珪
魏定國　陳達　楊春　薛永　杜遷　穆春　李雲
石勇　龔旺　丁得孫　張青　孫二娘

右兩所に發向する大將總て四十二員なり。宋江が云く、すでに此のごとくんば、敵地を攻取んこと尤易かるべし、今汝を待て柴進と倶に方臘が陣中に忍び入り、敵の要害を窺て大功を立んことを欲す、汝肯て往べきや。燕青が云く、宋君の尊命某何ぞ違んや、願くば柴大官人

これに因て我心未だ安ぜず。柴進が云ふ、我一命を棄て敵地に忍び入んに、何の不可なることかあらん、若燕青を得て同じく往ば、大に宜しかるべし、燕青はもと諸國の鄉談を曉し、殊さら聰明の人なれば、心を合せ事を謀るに足ん。宋江が云く、燕青は今、盧先鋒の陣中に在り、急に呼寄て商議すべしと、未だ云も終らざるに、盧先鋒の方より、燕青を以て捷軍を報じ給ふ、と告ければ、宋江是を聞て、大に悅び、則柴進に對し云けるは、柴大官人功を立給はん表しにや、幸ひ今燕青來るとなり。柴進斜ならず悅で云く、燕青が來ること誠に吉兆ならん、急ぎ對面して事を商議せんに、燕青を呼入給へ。宋江此言に同じ、早速燕青を帳中に呼で問けるは、湖州の戰はいかん。燕青答て云く、向に宣州を離れてより、盧先鋒兵を兩路に分け、自ら一路の兵を引て、湖州を攻め、城を守る大將弓溫、幷に手下の副將五人を殺し、遂に湖州城を乘取て、賊兵共を四方に追散し、則文書を修へ、張招討に捷軍の事を訴へ、統制を以て湖州城を守せ給はんとのことなり、盧俊義又一路の兵を林冲に與へて、獨松關を打しめ給ふ、每日戰を勵むといへ共、未だ關を得ざる故、盧先鋒、則呼延灼を湖州城に留めて、張招討の方より統制を遣し給ふを待しめ給ひ、自らは朱武等とともに人馬を引て、又獨松關に向ひたまへり、呼延灼等も又統制が到るを待て、湖州を統制に守らせ、自らは、諸將と共に軍馬を引て

人の猛將等が内、頭たる兩人極て强勇なり、一人は歙州の僧、綽名は寶光如來と云ふ、俗姓は鄧、法名は元覺と號し、能鐵の禪杖を使ふ、其重さ五十餘斤あり、人皆彼を敬て國師と稱す、又一人は福州の者、姓は石、名は寶と號し、能流星鎚を使ふ、百度放て百度中る、又よく寶刀を使ふ、名は劈風刀と云ふ、銅を截り、鐵を截る、遮莫三重の鎧を著たり共、劈風の如くこれを截る、此故に名けて、劈風刀と申す、其外の二十六人も各猛勇の者共なり、必ず輕々しく敵し給ふことなかれ。宋江是を聞て段愷を賞し、則張招討が本陣に遣しければ、張招討遂に段愷に對面し、委細のことを問ひ、此日軍を引て蘇州城に移り、副都督劉光世には、秀州を守らせけり。扨宋江は兵を移し、攜李亭に陣を取り、諸大將と會合して、杭州を攻取んことを商議しける處に、小旋風柴進すゝみ出て云けるは、某長兄の厚情を以て、高唐州の城に一命を救はれしより以來、未だ寸功を立ず、共に富貴を享け、自ら厚恩を報ぜざることを恥るのみなり、此度某深く方臘が要害の内に忍び入て、細作をなし、聊一陣の功を立て、長兄の恩を報ぜんと欲す、知らず長兄これを免し給はんや。宋江此言を聞て大に悦び、大官人、若肯て敵陣に忍び入て、敵地の要害を見究め給はゞ、我早速兵を進め、賊首を生捕んこと尤易かるべし、然れ共敵嚴に防を備へたることなれば、足下敵地に忍び行給はんこと、究て難からん、

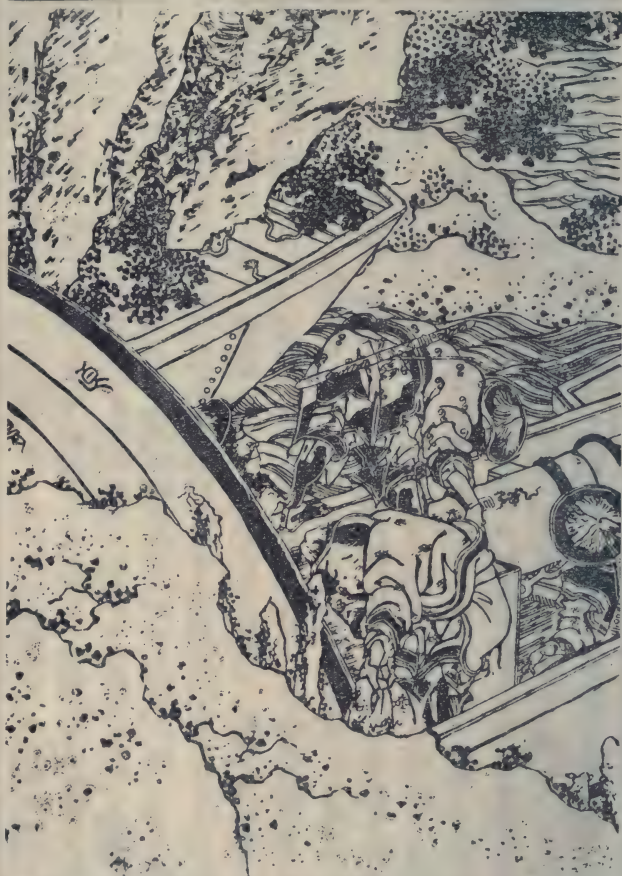
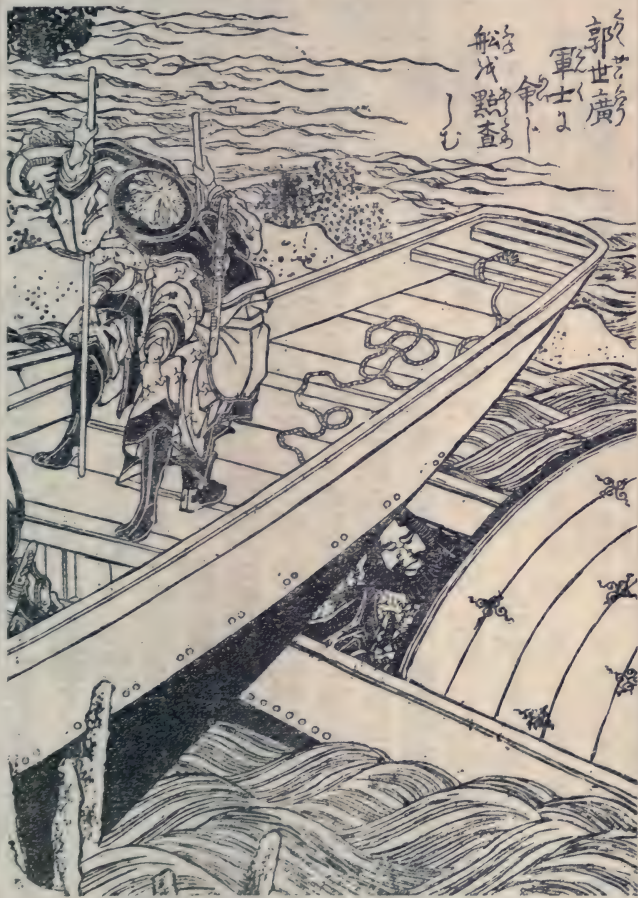
宋公明に見えて、費保等が言を告ければ、宋江是を聞て殆嘆息し、誠に心ある者共かなとて、深く感賞しけり。扨も宋江は令を下し、水陸の軍馬を催し、直ちに平望鎭を打過ぎて、秀州へと發向す。秀州を守る大將段愷は、蘇州の三大王方貌死たると聞き、此處を落行んと欲し、先人を馳て敵の動靜を伺せける處に、敵の大軍水陸より竝び進んで、早城下近く寄來れりと告ければ、段愷大に驚て、忽ち肝を落しけり。扨宋朝の先陣、關勝、秦明、兵を引て已に城下に至り、水軍を分て城の西門を圍しむ。段愷城樓に上て高聲に呼りけるは、某城を獻じて降參に出べき間、必ず城を攻給ふことなかれとて、自ら兵を領して城外に出で、恭しく宋江を迎へ、地上に拜伏す。宋江是を見て、大に悅び、便ち諸將と倶に城中に進み入り、早速榜文を出して百姓を安んじける。段愷等宋江等を拜謝して云く、某共は皆睦州の良民なりしか共、方臘に逼られ、已事を得ずして彼が幕下に屬せり、今日幸ひ天兵の至るを見て、豈降參せざらんや、願くは我等が罪を免し給へ。宋江益悅んで問けるは、汝已に降參する上は、何の罪かあらん、知らず杭州寧海軍の城中には、いかなる大將これを守るや。段愷答て云く、杭州は原富貴の地にして、居民甚だ多し、東北は旱路、南は大江、西は湖にて、則方臘が第一の子南安王方天定彼城を守る、其幕下には四人の元帥と、二十四人の猛將有て七萬餘りの軍馬あり、總て二十八

弟に命じ、四人の者を送せけるにぞ、李俊等再び楡柳莊に至りしかば、費保頓て酒宴を設て李俊等を款待し、酒已に數遍を巡りし處に、費保又李俊に對して云く、我聞く、

世事有レ成必有レ敗。爲レ人有レ興必有レ衰。

と云ことあり。李公、梁山泊に在て大業を立給ひ、已に二十餘年が間、百たび戰て百たび勝ち、大遼を破り、田虎、王慶を亡し給ひし時迄は、百八人の内一人も缺ざりしか共、此度方臘を攻給ふには、討死せし人多し、是則天數なり、李公今力を盡し、朝敵を破り給ふ共、太平の後は、却て奸臣等に害せられ給ふべし、我們四人、李公等三人と義を結びしこそ幸ひなり、宜しく此機に乘じ、安心立命の地を尋ね給へ、若長く官をなし給はゞ、必禍を蒙り給ふべし。李俊此言を聞て、大に悅び、費公の敎へ給ふ處誠に明けし、我早速足下に隨て、何國になりとも脫れ行んことを欲へ共、いまだ方臘をも平げずして、かくの如く行はゞ、宋公明の恩を忘れ、薄情の所存たらん、方臘を平げて後は、速に來て再び會合せん、願くは足下等四人暫く待給へ、豫じめ用意を調へ、我を介抱し給へと、據なく云ければ、費保等四人が云く、我們怎ぞ李公の命を違んや、豫じめ船を浮べて來臨を待申さん、必ず約を失ひ給ふことなかれ。李俊益悅んで、其夜は一宿し、翌日李俊は費保四人に別れ、童威兄弟と共に本陣にかへり、則ち

百姓を傷はしめず、早速諸將を集て其功を論ずるに、武行者は方貌を殺し、朱同は徐方を活捉り、史進は甄誠を活捉る。孫立は張威を殺し、李俊は昌盛を殺し、樊瑞は鄔福を殺し、宣贊は郭世廣と戰ひ、互に討死せり。其餘の諸大將も各〻敵兵を討取ける。宋江は宣贊が討死したると聞て、大に哭き、卽時人を馳て屍を拾しめ、懇に禮を以て、虎岳山の下に葬しむ。扨彼方貌が首、幷に徐方、甄誠等を常州の張招討が軍前に送せければ、張招討頓て是を殺し、首共を街に梟けり。張招討また劉光世を請て、蘇州城を守らしめ、猶宋江を催促して急に方臘を攻さしむ。劉光世兵を引て蘇州に移りしかば、宋江自ら是を迎へ、城中に入り、共に軍事を商議し、又水軍の消息を問はしめける處に、敵の水軍盡く逃散て、親方の水軍勝利を得たりと報じければ、宋江大に欣悅し、早速文書を修へ、捷軍のことを張招討に報じける。扨水軍の頭領等は、沿海に於て所々の敵を追散し、遂に蘇州に囘て宋江に告けるは、三阮兄弟常熟を攻し時、施恩を失ひ、又崑山を取し時、孔亮を失へり。石秀、李應等は皆恙なく囘りしか共、施恩、孔亮は曾て水練を知らざりし故、水に溺て死し畢ぬ。宋江是を聞て、彌〻淚を灑ぎける。此時費保四人は、宋江に別れを告て囘んと欲しければ、宋江再三留しか共、四人の者決して留ず。宋江是を見て、必竟留がたき事を知り、則金銀綵段を莫大に與へ、四人の者を賞し、再び李俊、童威兄

郭世廣軍士に令し
船を點査しむ

料り知り、手下の石炮打に命じ、相圖の石炮を同時に放せければ、其音天地に響て、山河も崩る許なり。三大王方貌は石炮の響を聞て大に驚き、こはいかにと騒動す。城の四門を守る大將等、石炮の響有を聞て是を恠み、皆々兵を引て城中に馳來る。此時流矢に中て死する南軍は、其數知べからず。黑旋風李逵戰に利を得、益興を催し、鮑旭等と共に兵を引て、東西南北に馳囘り、敵餘多討取けり。戴宗は又費保等四人と共に、凌振を助け、只顧石炮を放たしむ。宋江是に於て、三路より人馬を進め、直に城中に攻入て散々に撃しかば、南軍共は敵し戰ふこと能ず、各々先を爭て逃走る。三大王方貌は急ぎ馬に乘て五百の兵を率ゐ、南門より走り出んとせし處に、黑旋風李逵人數を引て此處に馳來り、喊き叫んで緊しく攻ければ、南軍ども大に亂れ、奔走す。斯る處に小港の內より、花和尚魯智深、鐵禪杖を輪して打出しかば、方貌これに敵すること能ず、只獨取て囘し、烏鵲橋の邊に退きし處に、行者武松横合より馳出て、方貌が乘たる馬の脚を砍て落しければ、方貌眞倒に落けるに、武松早くも刀を擧て、方貌が首を刎落し、其首を右の手に提中軍に馳囘り、宋江に獻じける。此時宋公明ははや城中に入て三軍を四方に分遣し、偏く南軍を搜して殺さしむ。宋の兵共は勢に乘じ、南軍を搜し出し、一々首を刎にける。獨劉贇は敗軍少々引率し、秀州を望で逃去けり。宋江は三軍に號令を傳へて、

九編　卷之八十四

○寧海軍にて宋江孝を弔す

偖も三大王方貌文書を見て云けるは、彼等は皆太子の命を奉つて、當城に武具を送る者共なれば、早速城内に入しむべけれ共、若詐のこともやあらん、猶宜しく査を加へ、其後城中に入しめよ、と命じければ、郭世廣命をうけ、自ら五百餘人を引て門の邊に出で、先二人の軍士を遣し船中を捜させけるに、果して武具を積て有しかば、郭世廣疑を休て、十餘艘の船を城中に入しめける。此時李逵は鮑旭、項充、李衮等と共に艙の内より出ければ、彼二人の軍士是を見て、大に駭き、汝四人は何者なるぞと問けるに、項充、李衮、早くも刀を舞し、二人の軍士を斬伏けり。彼五百餘人の兵共、岸の上よりこれを見て、大に怒り、盡く皆船中に跳乘んとせし處に、李逵已に岸の上に上て、二つの斧を揮ひ、矢場に十餘人の軍士を砍伏ければ、諸の軍士共甚だ怕れ、都て四方に逃散けり。李逵、費保等此勢に乘じて、岸上に跳上り、數百人の者に下知し、一度に火を放たせ、則ち四面八方を燒拂ふ。凌振は是を見て、時分は能ぞと

號ありければ、急に人を馳せ、飛豹大將軍郭世廣に斯と告たりけるに、郭世廣是を聞て、自ら城樓に上り、其來意を具に問ふ。又文書を乞取り、これを三大王に呈しけり。蘇州の軍事は次卷に委し。

論者いはく、費保等初に敵船を奪ふ時、相圖の石炮を打とは、漁師の盜賊何の爲に石炮を貯へ置しや、肯がたき文段なり。

め、諸事全く議を定め、已に用意を調へけり。先費保は解衣甲、正庫官に出立ち、倪雲は副使都に出立ち、南宮の號衣を著し、文書を携へ、都て數百人盡く皆敵兵の形に出立せける。黑旋風李逵等は船艙の内に隱れたり。卜青と狄成とは後船を掌て多く火器を帶し、已に船を出さんとせし處に、又一人の漁夫來て報じけるは、一艘の小船江面に在て四方を漕回る、いかさま恠しき船と覺えたり。李俊聞て、夫は必ず敵船にてぞ有らんと、自ら出てこれを見るに、船頭に兩人の漢子立竝びぬ。一人は神行太保戴宗、一人は轟天雷凌振なり。李俊是を見て、忙しく招きしかば、彼船飛がごとく漕來り、則岸に上て諸人に對面せり。李俊先問て云く、足下兩人何等の事有て此處に至り給ふや。戴宗答て云く、宋先鋒事の忙しきに紛れ、相圖の石炮を忘れたまひ、則ち我等兩人に命じ、石炮を小船に積しめ、足下等の後を慕せ給ひしか共、足下の船ははや見えざりし故、直に此處迄來れり、明日卯の刻に足下城中に進入り、此百張の炮を放て相圖を通じ給へ。李俊是を聞て大に悅び、則百張の石炮を漁船の上に移し、先費保を呼で戴宋等に遇しめければ、費保早速宴を設け、慇懃に饗應せり。凌振は十人の石炮手を携て、第三番の船に埋伏し、事已に調りしかば、此夜四更の時分に、諸船齊しく漕出し、蘇州へと進發し、五更の時分に、はや城下に至りける。城門を守る軍士城の上より是を見るに、南國の旗

内只頭たる兩人の水軍を船中に留め、其來歴を問けるに、兩人の水軍答て云く、我輩は方臘が第一の太子南安王方天定が手下の者なるが、此度命を奉つて、武具を蘇州に送らんと欲し、已に此邊に至れり、願くば我等兩人が一命を饒し給へ。李俊又兩人の者が姓名を問ひ、文書等盡く搜し取て、是又首を刎落し、屍を水中に棄て、費保等と商議して云けるは、我先本陣に立回て、宋公明に委細を報じ、其後謀を定むべし。費保が云く、李公の言尤可なり、急ぎ本陣に回て、宋先鋒と計を議定し給へとて、則物馴たる漁人兩人を呼で、一葉の快船を調へしめ、李公を送て宋の軍前に至るべきよし嚴に命じける。李俊は童威、童猛を留て、費保等と共に消息を待しめ、遂に快船に乘て、楡柳莊を漕出し、小港より過て直に軍前に至り、則寒山寺より岸上を馳せ、陣中に赴き、宋江呉用等にまみえ、始終の事詳に語りければ、呉用是を聞て、大に悦び、已にかくのごとくば、蘇州を取んこと易かるべし、早く號令を傳へ給へと、宋江を諫めけるに、宋江其言に同じ、先李逵、鮑旭、項充、李袞等に二百人を與へ、李俊と共に太湖莊に遣し、費保等四人と力を併せ、計を行はしめ、第二日に進發すべしと約しければ、李俊命を奉つて李逵等四人を引き、再び太湖の邊に來り、直に楡柳莊に至り、費保等に對面して、計の次第を具に語りし處、費保大に領承し、則李逵等に相見え、早速酒宴を進

○宋公明蘇州にて垓に大に會す

扨も第三日晩方に、彼漁人等已に立かへつて報じけるは、平望庄の邊に、十餘艘の敵船あり、毎船に旗を立て、公用を辨ずると相見え、船の上には僅六七人乘てあり。費保これを聞て云けるは、其船あることそ幸の便機なり、我今自ら往て計を試むべし。李俊が云く、足下若誤あらば却て惡しからん、先宜しく商議を定て、其後馳向ひ給へ。費保がいふ、我何ぞ誤つことあらん、李公心を安んじ給へとて、則七十餘艘の漁船を催して、七人の豪傑各一艘の船に乘り、其餘の船には、許多の漁人等を乘しめ、小港より大河に入て、想ひ〳〵に漕行けり。此夜星月明かにして、恰も白晝のごとくなり。扨十餘艘の敵船は、都て龍王廟の前に在て歇居たりし處に、費保が乘たる船先至て相圖の石炮を放ちしかば、七十餘艘の船一度に漕來て、喊の聲を揚にける。敵船の上なる水軍ども、此聲を聞て大に驚き、急に走り出て、柁に立並ぶ處に、費保諸の漁人に下知して、はや四五人を活捉たりければ、其餘の敵これを見て甚だ怕れ、皆水中に跳入らんとせしか共、漁人等盡く是を生捉り、彼十餘艘の船を太湖の内に牽入て、楡柳庄に回りしかば、早四更の天氣なり。費保又漁人共に命じて、活捉し輩を都て水中に沈め、其

云く、我輩若官爵の望みあらば、老早より方臘が幕下に屬し、統制官とも成べけれ共、原來官爵を望ずして、安樂を求る故、唯此處に在てかくのごとく安住す、李公もし我們を用て、成給ふ所あらば、身命を捨て、親方致すべし、若又我輩をして、官爵を受しめんとならば、決して尊命に遵ふまじ。李俊が云く、足下等都て官爵の望なきこと、是則眞の大丈夫なり、我今足下等と義を結て兄弟の盟をなすべきに、若これを承引し給はゞ、彌感謝致すべし。費保等四人是を聞て、大に悦び、李公もし肯て義を結び給はゞ、我輩は福何か是にしかんやと、則酒宴を設しめて、李俊等三人を款待ければ、李俊已に童威、童猛と倶に、甚だ感激し、都て七人義を結で兄弟の約を誓ひけり。此時李俊、費保等に語て云く、宋公明今蘇州を取んとし給へ共、方貌堅固に城を守て出戰ふことあらざるゆゑ、今に城を破ること能す、況や城の四面は水深うして、陸路なきに依て兵を進めがたし、知らずいかなる計を以て城を攻んや、若良計あらば速に示し給へ。費保が云く、李公先心を安んじて、三日逗留し給へ、我預じめ敵の動靜を窺て、其後計を用ふべしとて、即時に數箇の漁人を敵地に遣し、敵の動靜を伺はしめ、毎日美酒佳肴を調へて、李俊等三人を饗應し、共に其消息を待居ける。

人の者地上に跪て、我們は方臘が手下の賊兵にあらず、原山林に在て强盜をなし、近き比、此處に移りぬ、此處は楡柳莊と申して、四方は都て深港なり、これに依て若干の魚船を港中に出して、若商船の來るを見る時は、諸の魚船を以て、其商船を打取り、則金銀財寶を奪て、今日の渡世を致す、比日又水練に達したる者共數多馳集りて、我等四人を相助る故、方臘が手下の賊兵共、我們に敵すること能はざるなり、我久しく宋公明の忠義を聞及べり、ならびに李公と浪裡白跳張順の大名とを傳へ聞き、常に其德を慕ひける處に、今日想はず尊顏を拜し、悦び望外に出たり。李俊が云く、張順は則我と一所に在て水軍を掌り、今江陰の地に馳向て賊を攻め、他日我彼を誘引して、足下等に遇しむべし、願くば足下四人の姓名を報じ給へ。彼四人の漢子是を聞て云けるは、我們は山林に棲し者共なるゆゑ、姓名他に異なつて聞にくし、李公必ず笑ひ給ふことなかれ、則一人は赤鬚龍費保、一人は捲毛虎倪雲、一人は太湖蛟卜青、一人は瘦臉熊狄成と申なり。李俊聞て大に悦び、足下等已に宋公明のことを聞及びたまふ上は、向後盟を結び給へ、宋公明今勅命を奉て方臘を攻給ふ故、我等三人先此邊に來て、路徑を伺ふなり、足下四人若宋公明に對面し給はゞ、宋公明必ず足下等のことを、宋の天子に奏聞し、宜しく取持て官爵を受しむべし、然らば足下等富貴を樂み給ふべし。費保が

あらずと思ひ、又李俊に問て云く、汝原何等の者なるにや、早く姓名を報ぜよ、其樣子に依て一命を免すべし。李俊冷笑て云く、我已に此場に至り、何ぞ死を恐れ命を惜んや、汝無益のことを問んより、速に我輩を殺せ、我少しも恨あらず。四人の者これを聞て、好き豪傑かなと賞嘆し、首たる一人の漢子自ら座を立て、李俊等三人が綁の索を解き、頓て拜をなして云けるは、我等四人多年强盜をなして、餘多の人を殺しけれ共、いまだ公等のごとき豪傑を見ず、是に因て今害するに忍びざるなり、伏して望らくは、貴姓大名を報じ給へ。李俊是を感じて云けるは、足下四人は定て眞の英雄ならん、此上は我等が姓名を報ずべし、我は是梁山泊の宋公明が幕下にある、副將混江龍李俊と云者なり、彼等兩人は同胞の兄弟、兄は出洞蛟童威、弟は翻江蜃童猛と申し、ともに我同僚たり、此たび宋朝の御赦免を蒙りて、新たに遼の國を破り、つゞいて田虎、王慶を討平げ、今又勅命を奉て、方臘を征伐す、足下等は必定方臘が手下の人ならん、早く我等三人を綁て、方臘が軍中に引渡し、重く恩賞を請給へ、我等は原來死を捨たる者なれば、今此處にて死を致す共、毛頭も恨なし、足下等我們を憐で、自家の功を誤給ふことなかれ、我輩今此處にて命を保つとも、明日は戰場に屍を曝さんことを測べからず、かゝる身を以て、いかんぞ命の終るを哀とせんや、疾々我等に索を打候へと云ければ、四

て、李俊等三人を鉤倒し、頓て高手に綁めけり。李俊眼を縱にして、四方を見るに、草堂の上に四人の豪傑あり。頭たる第一人の漢子は、髭赤く髮黃にして、青綢の衣服を著せり。第二人の漢子は身瘦せ、髯長して木綿の衫を著せり。第三人の漢子は面黑く髯短し。第四人の漢子は眼圓して腮長うして、兩人共に一樣に裝束し、各身邊に軍器を帶して、尋常ならぬ人品なり。彼頭たる一人の漢子、先李俊を罵て云く、汝等は何れより來て、妄に此處に徘徊するや。李俊答て云く、我們は、楊州より來りたる商人なるが、魚を買んと思て此邊に至れり。彼第四人の漢子が云けるは、何ぞ必ずしも彼等が來れる處を問給はんや、定て哨の者にてぞ有べきに、早く肝を引出して、是を肴に一盃酌給へ。李俊此言を聞て、心中に想ひけるは、我昔日潯陽江の内に有て海賊をなし、其後梁山泊に上て豪傑の譽を取り、遂に御赦免を蒙て、國家の臣となりける處に、今日此處に於て、非命の死を致さんことこそ無運なれと、再三嘆息して、童威童猛を見て云けるは、今日我誤て汝兄弟を難に遇しめたり、願くば恨を休て、潔く死を遂候へ。童威兄弟これを聞て云けるは、我們今日此難に遇も、運の究る處なり、何ぞ必しもこれを恨んや、然れ共此處にて死失なば、李公の大名を沒すべし、これのみ殘念なりとて、三人面を合せて暗に牙を咬にける。かの四人の漢子李俊等三人が模樣を見て、いか樣下輩の者に

李俊童威り兄弟水天一色の
大湖に漂ふ

に合へり、然れ共汝に從はしめん副將あらず、事未だ至たからず、李大官人は、孔明、孔亮、施恩、杜興此四人を引て江陰に行き、童威、童猛に替て彼所を守り、早く童威兄弟を此處に至らしめ候へ。李應命を奉つて四人の副將を引き、即日本陣を打出で第二日の晩方、江陰に至り、則童威兄弟に替て、此處を守りしかば、童威兄弟は急ぎ宋江の本陣に回て、宋江に見えけるに、宋江は兄弟の者を李俊に從はしめて、一艘の小船に乘しめ、南方の消息を備細に窺しめけり。李俊は童威、童猛を引て一葉の扁舟に棹し、兩人の水手に櫓を搖せ、逕に冥縣の小港に赴き、是より太湖に入て、太湖の光景を見るに、天遠水に連り、水遙天を接へ、高低の水影塵無して、上下の天光一色なり。此時李俊は童威兄弟、幷に兩人の水手と共に、太湖を過て漸呉江に至り、遙對面を眺望るに、四五十艘の魚船あり。李俊が云く、我輩皆魚を買體にもてなし、漁人等に動靜を問ふべしとて、五人已に魚船の傍に漕行き、李俊先一人の漁翁に問て云ふ、大いなる鯉魚ありや。漁翁が云く、汝若大いなる鯉魚を買はんとならば、我家に來りたまへ、我これを賣べし。李俊聞て、兩人の水手に船を漕せ、則魚船に隨て、一二里ばかり行けるに、はや一簇の人家あり。彼漁人まづ船を纜で、岸に上りければ、李俊、童威、童猛、三人齊しく漁人に從て岸に上り、一軒の草屋の内に入ける處に、七八人の大漢子、手毎に撓鉤を持

殊更堅固の體なりしかば、此城急に落さんこと難かるべしとて、先本陣に回りて、呉用と計を商議しける處に、水軍の頭領李俊、江陰より來れりと報じければ、宋江頓て李俊を呼で對面し、則沿海の消息を問けるに、李俊答て云く、某向に石秀と共に、江陰、太倉、沿海等の地に攻行けるに、守將嚴勇、副將李玉、水軍を引て馳出で、暫く相攔へ戰ひしか共、嚴勇已に阮小二に一鎗に搠殺され、李玉は流矢に中て死す、依て遂に江陰、太倉を得、即日石秀、張横、張順等は直に推寄て嘉定を取り、三阮兄弟は常熟を取ぬ、某は先來て捷軍を報じ奉る。宋江是を聞て、大に悅び、早速李俊を賞し、常州に遣しければ、直に彼所に至て、張招討、劉都督に見え、江陰、太倉、海島等の地を得たる事を詳に告れば、張、劉、兩招討大に悅て恩賞を行ひ、再び李俊を宋江が陣に回しけり。宋江は蘇州の城外水面濶きを見て、必ず水軍を用て攻んと圖り、李俊に命じ、兵船等を備へしめけるに、李俊が云く、某先彼地に馳て、水の深淺を測り、其後謀を用ひて城を攻べし。宋江是を聞て、可なりと同じければ、李俊已に彼地に行て動靜を伺ひ、第三日に本陣に立回て告けるは、此城正面の方は太湖に近し、某一艘の小舟に駕して、宜興の小港より、私に太湖に入り、呉江に出で、南方の消息を具しく窺て、而して後兵を進め、四面より夾で攻ば、必ず敵を敗る事有べし。宋江が云く、汝が言まさに我心

将を出して、我八驃騎の猛将と戰はしめよ。宋江冷笑ていはく、汝早く八驃騎の徒を出せ、我も又八将を出し、勝負を決せしめん、汝必ず暗に矢を放たしむることなかれ、若此日雌雄分たずんば、明日重ねて戰を催すべし。方貌是を聞て、彼八将を陣前に出しける。宋江是を見て、誰かあへて彼等が對手にならんやと、未だ云も終らざるに、八人の大将馬を並べて跑出る。一人は關勝、一人は花榮、一人は秦明、一人は朱同、一人は黄信、一人は孫立、一人は郝思文なり。此時兩軍攻鼓を打て喊の聲を發しける。敵親方總て十六騎の猛将、各對手を擇で馬を交へ、互に精神を勵んで戰ひしかば、諸軍都て目を驚しむるばかりなり。戰はや三十餘合に至りし處に、内一人馬より下に眞倒に落たりければ、兩軍急にこれを見れば、朱同一鎗に苟正が喉を搠にけり。此時兩陣先金を鳴し、軍を收しかば、諸の大将、各相引に本陣に引入ぬ。三大王方貌は一人の大将を討せ、勝利得がたきを料り、急ぎ兵を引て蘇州城に退きける。宋江是を見て、後へに隨ひ追蒐け、直に寒山寺の下に至て陣を列ね、則朱同、徐寧兩人を賞し、捷軍を知らしめんと、文書を修へ、張招討が方に遣しける。扨も三大王方貌は堅く城を守て、再び出て戰ず、多く木石を設け、防を嚴密に備へたり。翌日宋江は、花榮、徐寧、黄信、孫立を引て、都て三十餘騎、城の邊に至て其防ぎを見るに、週遭は都て水港環り繞て、垣等に至る迄

許り行ける處に、宋江も已に大軍を引て此處に至り、兩勢相迎て、陣を對しける。呂師囊矛を横へ自ら陣前に跑出で、三軍に下知して戰を挑む。宋江是を見て、誰かよく彼を捉へんやと、未だ云も終らざるに、金鎗手徐寧鎗を撚り、馬を躍せて陣前に跑出で、直に呂樞密を迎へ、鋒を交へ、兩將各勇を震うて相戰ふ。敵親力の諸軍勢一同に賊の聲を合せ、天地も崩るゝ斗なり。兩人の大將戰ひはや三十餘合に至りしかば、呂樞密漸々疲れて逃回らんとしける處に、徐寧早くも鎗を伸して、呂樞密を馬より下に突落しぬ。此時李逵二つの斧を振て、鮑旭、項充、李衮等と共に敵陣の内に攻入しかば、南軍共大に亂れ奔走す。宋江兵を進めて追蒐し處に、半途に於て方貌が大軍に行遇ひ、兩軍各々遠矢を放て陣勢を列ける。南軍の陣中には、彼八驃騎の猛將等馬を並べて相勒へり、方貌は中軍に在て、呂樞密が討れたると聞き大に怒り、自ら戟を提げ、馬を飛せ、陣前に進み出で、甚だ宋江を罵て云く、汝は是梁山泊の盜賊なるに、宋朝の運傾て汝を先鋒に封じ、妄りに我大國を侵しむ、我今汝等を一々誅して、手段を見せしめん、必ず後悔することなかれ。宋江大に怒て云く、汝はもと睦州の村夫なり、何の福分有て覇業を圖るや、若天命を知らば、早く降參して、一命を脱れよ、我天兵こゝに至る上は、汝等を砍盡さん事、只須臾の間にあり。方貌是を聞て、大に怒り、汝若能我に敵せんと思はゞ、早く八人の賊

守らせける。扨彼呂樞密は、衛忠、許定兩人と會合して、敗軍を引き、已に蘇州城に入て軍の次第一々詳に三大王方貌に告けるに、三大王大に怒り、左右に命じて、呂樞密を斬しめんとせしかば、衛忠等再三告て云く、宋江が軍中には、諸將都て戰に慣たる者多し、況や皆梁山泊に居たる豪傑共にて、我劣じと、武勇を振ふ故、親方遂に敗北に及べり、此度は先呂樞密が罪を宥し給へ。方貌是を聞て、稍怒を休め、則呂樞密に命じて云く、我今日は暫く汝が罪を預る間、汝五千の人馬を引て、當先に馳出で、敵と一戰をなし、この罪を償ふべし、我は自ら大軍を引て、跡より打出ん、汝必ず誤ることなかれ。呂樞密命を受て拜謝し、卽時に兵を引て城外に馳出けり。扨三大王方貌は、手下に屬しある八人の大將、八驃騎と名付たる勇士共を聚て、計を商議せり。此八人都て力量ある豪傑なり。一人は飛龍大將軍劉贇、一人は飛虎大將軍張威、一人は飛熊大將軍徐方、一人は飛豹大將軍郭世廣、一人は飛天大將軍鄔福、一人は飛雲大將軍荀正、一人は飛山大將軍甄誠、一人は飛水大將軍昌盛と申す。此時三大王全身儼に披掛て、方天戟を提げ、祕藏の名馬に乘て出陣し、自ら中軍の人馬を掌る。馬前には彼八驃騎の大將等を二行に相列ね、猶三十二人の副將を左右に從へ、總て五萬の人馬を引き、城の閶闔門より打出ける。呂樞密は衛忠、許定を引て、已に寒山寺を打過ぎ、直に無錫縣を望で進發し、はや十餘里

宣州に馳て、盧俊義を催促し、早く湖州に入り、兵を杭州に會合し給へと云遣し、并に常州城を取し軍の次第まで、詳に云越しけり。扨又呂師囊は許定を引て、無錫縣に逃歸りし處に、蘇州の三大王が差向たる救ひの兵に適遇けり。此兵を領したる大將は六軍指揮使衛忠なり。手下に二十人の副將を從へて、一萬餘騎を引率し、直に此處に至て呂師囊と勢を合せ、共に無錫縣を守ける。呂師囊戰の次第を語て、金節が心變りして、敵に城を獻じたることを具に告ければ、衛忠是を聞て云く、樞密相公心を安んじ給へ、某再び州を取復し、宋江等を追散さんと、未だ云も終らざるに、飛脚到來して報じけるは、宋江が人馬はや近く至り。衛忠是を聞き、早速城の北門を打出て、宋の勢を望見るに、黑旋風李逵當先に進んで、鮑旭、項充、李袞等と共に攻來る。衛忠急に攻られて陣を布に及ばず、大に敗れ奔走し、已に無錫縣に逃入し時、李逵等四人の頭領早くも後へに隨て、縣中に馳入しかば、呂樞密大に驚き、急に南門の方に逃走る。此時關勝人馬を引て攻來り、遂に無錫縣を乘取て、四方に火をぞ放ける。衛忠、許定兩人も南門より走り出で、直に蘇州をさして落行ぬ。關勝等已に城を攻取て、使者を本陣に馳ければ、宋江是を聞て、大に悅び、諸大將と共に急ぎ無錫縣に來り、早速榜を出して百姓等を撫ければ、百姓等は都て悅びを催しぬ。宋江已に三軍を收めて縣中に屯し、卽日使者を以て張、劉兩總兵を常州へ迎へ、堅く城を

宣州の鄭天壽
大石にうち壓死す

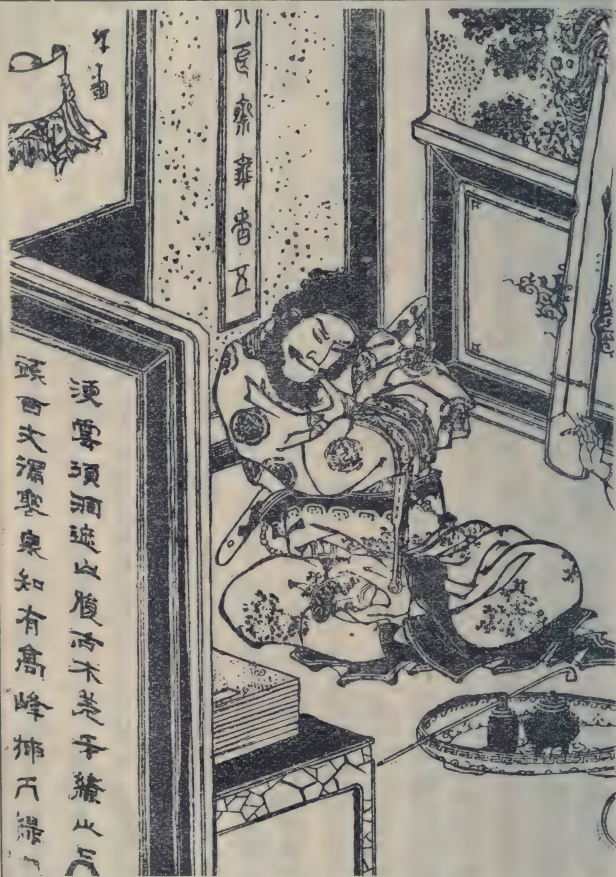
李詔は亂軍の内に討死し、家余慶は敗軍を引て湖州に落行き、程勝祖は行方しれず逃失たり。石に中て死たる一人の偏將は、白面郎君鄭天壽なり。矢に中て死たる二人の偏將は、操刀鬼曹正、霍閃婆王定六なり。宋江文書を見終て、戰の次第を備細に知り、三人の偏將を討せたることを悲て、忽ち地上に哭倒れければ、諸將大に駭き、急に扶起して諫をぞ加へけり。此時呉用等再三宋江を諫め、哭きを止めしめんとするに、宋江猶嘆息して云く、我此たび方臘を討んこと難かるべし、那日江を渡て以來、一連に八人の豪傑を失ひ、何ぞ是を哭ざらんや。呉用が云く、宋君何ぞ復ぬ事を云て、軍心を怠らしめ給ふや、昔日、遼、其他を攻し時、百八人全く無事に回りしは、皆是天數なり、今日數輩の頭領を失ひしは、是又命數なり、江を渡てより以來、已に三ヶ所の大郡、潤州、宣州等の地を得たり、是則天子の洪福宋君の虎威なり、何の利ならざること有て、自ら志を失ひ給ふや。宋江が云く、軍師の言一々理なりと雖も、百八人の輩は天罡、地煞の數にして、原來因縁ある者共なれば、永く一處に樂んと思ひけるに、今日已に數人を失ひ、我豈よく是を忍びんや、誠に傷しき事共なり。呉用猶頻りに諫て云く、宋君先宜しく歎きを休めて、無錫縣を打ん計を議し給へ。宋江が云く、柴大官人は我軍中に留て、我と同作をなし給へ、盧先鋒への返簡戴宗に與へ遣すべしとて、卽時返簡を修へ、則ち戴宗を

湖州へ赴て戰の動靜を聞き、即日柴進を引て本陣に馳回り、則宋江に告て云く、副先鋒盧俊義宣州を攻取給ひしにより、今柴大官人を以て捷軍を報じ給ふなり。宋江聞て大に悦び、早速宴を設け柴進を饗應し、軍の次第を具に問ければ、柴進一々詳に語て、文書を宋江に呈す。宋江文書を見るに、宣州を守たる方臘が臣經略使、家余慶が手下に統制官六人有り、都て歙州睦州等の地の者共なり。李韶、杜敬臣、魯安、潘濬、程勝祖、韓明の六名なり。一日家余慶兵を催しける處に、六人の統制官三手に分れて親方の勢を迎へり。盧俊義も三方より兵を進め馳向ふ。中には呼延灼有て李韶と相戰ふ。董平も韓明と相戰ひ、已に十餘合に至て、董平遂に韓明を摑伏ければ、敵の中軍大に敗れぬ。左には林冲有て杜敬臣を刺殺し、索超も又魯安を砍ぬ。右には張清在て、潘濬と相戰ふ。穆弘又程勝祖と鎗を合せり。張清已に石を飛せて、潘濬を打ける處に、打虎將李忠馳出て、潘濬を打ければ、程勝祖是を見て、急々に逃回りたり。此日親方戰に打勝て、頻りに追かけしかば、敵遂に城中に引入し處に、盧先鋒眞先に進で、城戸の邊に推寄ける。此時城中より木石を投て、一人の偏將を打殺す。然れ共親方の諸將少も恐ず、喊き叫で攻けるに、城内より雨の如く毒箭を放ち、又兩人の副將を射殺しぬ。盧先鋒大に怒り、其夜四面を取圍んで緊しく攻しかば、東門の敵遂に破れける故、早速宣州城を乘取りたり。

に是を迎へ、其功を賞しけり。金節今日宋朝に歸順し、再び良臣となる事、是又其妻秦玉蘭が功なり。宋江彼范疇、沈抃、趙毅等三人を陷車に入れ、文書を差添へ、則金節に命じ、潤州の張招討が方に送りければ、金節命を奉り、公文を領し、三つの囚車を監押して潤州に進發す。宋江先達て戴宗を潤州に馳せ、金節が忠義有ことを張招討に告ける故、金節潤州に至りし時、張招討先使者を出し、金節を城中に迎へ、多く金銀彩緞を以て其勞を賞しければ、金節恩を蒙り、大に悅び、再三頓首して拜謝せり。副都督劉光世、卽時に金節を封じて行軍都統とし、遂に軍中に留めけり。此後金節は劉光世に隨ひて、大金兀朮四太子を破り、多く戰功を立て、親軍指揮使の官となり、直に中山の陣に至て討死す。此日張招討副都督重く金節を賞して後、彼三人の敵を陷車より引出し、遂に是を誅し、頭を街に梟しける。扨宋江常州に在て、戴宗を宣州、湖州等に馳せ、盧俊義に消息を通じ、兵を催さしむる處に、飛脚到來して報じけるは、呂樞密已に無錫縣に逃回り、再び蘇州等の援兵と勢を合せ、近々又攻來ると風聞あるよし述ければ、宋江是を聞て、早速軍馬を催し、正將、偏將都て十人に、一萬の人馬を與へて南の方に發向せしむ。此十人の大將は關勝、秦明、朱同、李應、魯智深、武行者、李逵、鮑旭、項充、李衮等なり。已にして十人の大將は、人馬を引て宋江を辭し、遂に南を望て打出ぬ。此に又戴宗は宣州、

馬麟も相續て馳來る。魯智深、武行者、孔明、孔亮、施恩、杜興等も一度に兵を引いて急に攻寄ける。金節己に城中に逃入りし處に、孫立も相續て城中に追入り、西門の邊大に騷ぎければ、百姓共は是を見て、甚だ悦び、我輩多年方臘に惱されて、恨骨髓に徹せり、此節宋の兵を助けて、恨を報はずんば、更に何れの時を待んとて、盡く西門の邊に來て、宋の兵と共に南軍等を討ければ、城兵共はこれに敵すること能ず、東西に迯走る。此時城の上には、早宋先鋒の旗號を立しかば、范疇、沈抃是を見て、城中に變有ことを知り、急ぎ馬を回して城に入んとせし處に、左の方より、王矮虎、一丈青馳出て、范疇を生捉り、右の方より宣贊、郝思文馳來て、沈抃を馬より搠落し、軍士共に命じ、遂に是を活捉しむ。此時宋江、吳用、大軍を引て城中に入り、四方を搜し、南軍共を生捉盡し誅戮を行ひけり。呂樞密は許定を引て南門に馳出ければ、宋の兵共跡を慕うて追蒐しか共、遂に追著ず、再び常州に回て、各〻功を獻じける、扨かの趙毅は呂樞密におくれ、猶城中に奔走し、四門を窺ひ見るに、曾て逃れ出ん樣なかりしかば、百姓の家に躲れ居ける處に、百姓等是を知て遂に捉へ、頓て宋江が陣中に引渡す。應明は又亂軍の中に討れけり。宋江榜を掛て百姓を撫ければ、百姓共大に感悅し、老を扶け、幼を携へて、宋江を拜謝す。是に於て金節は宋江が中軍に至て、恭しく宋公明に拜謁しければ、宋江も慇懃

ば、各兵を領して城門を堅めけり。此夜金節書簡を修へ、箭に拴り著け、半夜の左側に至て自ら城樓に上り、頓て彼箭を西門の外に射出しけるに、宋江が哨の兵是を拾ひ、急ぎ西陣の内に入て、其箭を獻ず。此陣を守る大將花和尚魯智深、幷に行者武松、兩人同じく此矢を見て、心中に恠み、副將杜興を宋江が本陣に遣し、此事を訴へしむ。宋江、吳用、此時帳中に在て軍事を議し居ける處に、杜興已に至て彼箭文を呈す。宋江箭文を見て甚だ悅び、早速諸將に觸て計を定けり。呂樞密は自ら城樓の上に上つて、宋江が陣中を望み見るに、諸軍勢群て城を重々に取圍み、忽ち大石砲を放しかば、天地も震動するが如くにして、城の角樓を打壞したり。呂樞密これを見て、大に駭き、慌て忙き、城樓を下り、先試みに一戰を始んとて、城門を守る大將等に號令を傳へければ、諸人命を受て、城の四門に齊しく鼓を鳴し、諸大將、各城門を開かしめ、吊橋を下して、先北門を守る大將、沈抃、范疇、兵を引て城外に打出しかば、大刀關勝是を見て、馬を跳せ刀を舞して陣前に跑出で、直に范疇を迎へて鋒を交へ、戰未だ十合に及ばざる處に、西門を守る大將金節、又一彪の軍馬を引て城外に突て出で、頻りに喊の聲を作て戰を挑む。宋江が陣中より、病尉遲孫立馬を飛せて忙はしく跑來り、金節を迎へ、五七合戰し處に、金節詐つて敗北し、直に城を望んで逃回る。孫立後へに隨て追蒐しかば、燕順、

を活捉て、宋公明に獻じ、宜しく降參のことを願ひ給へ。金節が云く、呂樞密が手下に四人の統制官有て、各人馬を領せり、況や彼許定は平生我と不和にして、呂樞密が心腹の者なれば、呂樞密が爲に力を盡さんこと必然なり、我もし孤力を以て此ことを行はゞ、恐らくは誤有て禍を惹出し、徒に非命の死を遂べし、是に依て猶躊躇する所あり。秦玉蘭が云く、已にかくの如くば、丈夫夜中に箭文を修へ、城外に射出し、豫じめ先内意を宋先鋒に通じて、裡應外合の計を相定め、丈夫明日城を出て一戰をなし、詐て敗北し給はゞ、宋の諸軍勢必ず其意を察して追蒐べき間、丈夫は只此機に乘じ、宋の兵を城中に引給へ、然らば丈夫の功大にして宋朝の叡感を蒙り、禍を去て福至るべし。金節聞て大に悅び、妻が教に隨ひけり。翌日宋江兵を引て緊しく城を攻しかば、呂樞密諸將を集め議しけるは、汝等諸人いかなる計を以て敵を退んと思ふや、若所存あらば速に評議せよ。金節進み出て云く、當地の城は原來要害よき名城なれば、只宜しく堅固に守り、出て戰ふこと有べからず、もし蘇州より援の兵至りなば、其時三軍を引て城中を馳せ出で、内外より夾んで宋兵を打ば、いかでか勝利なからんや。呂樞密此言を聞て然りと同じ、頓て諸將を分つて城の四門を守らしむ。應明、趙毅は、東門を守り、沈抃、范疇は北門を守り、金節は西門を守り、許定は南門を守り、已にして手分定りしか

九編　巻之八十三

○混江龍太湖にて小く義を結ぶ

呂樞密は宋の大軍居城を三方より取圍み、攻ること山をも拔べき勢なれば、此時諸將に命じて云く、汝等先城を守て堅く敵を防ぐべし、必ず誤て城を破らるゝ事なかれとて、已に兵を分ち與しかば、諸將命を受て帳前を退きけり。呂樞密ははや諸將を手配し、獨後堂に入り、則ち心服の家人等を集て云く、事既に此に至りて計の行ふべきものなし、しかじ城を棄て落んにはと、暗に商議を定めけり。扨彼守將錢振鵬戰死の上は、代て守るべきは金節と許定なるが、先金節は私宅に回り、妻秦玉蘭に告けるは、今宋公明大軍を以て城を重々に取かこみ、晝夜金鼓を息ず、戰を挑む、城中は原來糧乏しく、將士少く、永く籠城せんこと最も難し、若城を破られなば、我輩は皆死を刄の下に致すべし、何を以て是を免れんやとて、深く憂に逼りける。秦玉蘭が云く、丈夫は本宋朝の舊官と云ひ、殊さら天子の洪恩を受給ひしかば、宋朝の爲に忠を盡し給はんこと、是則天の理、人の道なれば、速に邪を去て正しきに歸り、呂樞密

都て三面より常州城を取圍み、金を鳴し、鼓を擂ち、喊の聲天に喧くして、山河も崩るゝ斗なり。猶此軍次卷に詳なり。

按ずるに、流布の水滸傳に、宣州を宜州と謬り、姓の沈をちんと訓たる如き誤り多し。沈は姓なり。孟子の沈猶行、唐の詩人沈佺期を以ても知らる、姓はちんと訓ことなし。冠山子は此等の差別をしらぬ不學者にてはなし。其外百八人の諢名、姓名、訓あやまり毎度多し。

遂に引て本陣に回りける。此時城中より檑木、砲石雨の如く打出せり。李逵陣中に回り、五百の歩軍を相備へ猶戰ひを挑しか共、城中の兵共は李逵が威勢に恐れ、再び出て戰ふ事なかりけり。李逵等四人の大將は、中軍に注進せんと思ふ處に、宋江が軍馬已に至しかば、李逵、鮑旭、各宋江に見え、二つの首を獻ず。宋江幷に諸大將皆此首を見るに、是則高可立、張近仁兩人が首なりしかば、諸將大に驚きて問けるは、此兩人は萬夫不當の勇有て、人皆近く事能ずと云に、足下等いかゞして此首を得たるや。李逵答て、戰の次第一々具に語りしかば、宋江聞て斜ならず悅び、仇人の首已に得たる上は、白旗の下に於て二つの首を供へ、韓滔、彭玘が靈魂を祭んとて、宋江頓て二つの首を供しめ、自ら空を拜して覺ず涙を洒ぎ、韓滔、彭玘兩將の靈を祭り、重く李逵等を賞しけり。翌日宋江三軍を引て陣屋を打出で、直に常州を望で進發す。扨彼呂樞密は常州城の内に在て、宋江が軍馬近く至りぬと聞しかば、大に心を愕然め、金節、許定、幷に四人の統制官を集めて、敵を退けん計を議しけるに、城中の諸大將、李逵が猛威を見て、各膽を落し、心を寒し、出て戰んと思ふ者唯一人もあらず。呂樞密又再三計を問けれ共、諸將都て默然として言ず。恰も箭の雁の嘴を穿ち、鉤の魚の腮に搭たるが如し。呂樞密此體を見て、益愁を添へ、先人を城樓に遣し、宋の軍馬を見せけるに、宋江が軍兵共は、

喪門神鮑旭も刀を揮て、李逵が左に相隨ふ。項充、李袞兩人は、各軍器を持て、陣前に馳出る。高可立、張近仁は、昨日の軍に功を立て自ら是に傲り、一千の人馬を城の邊に相備へ、敵を見る事一毛よりも輕んじけり。宋の軍中には、高可立、張近仁を視認たる者有て、彼等兩人こそ韓滔、彭玘を殺したる者なりとて、早速李逵に告ければ、李逵是を聞て、大に怒り、頓て二つの斧を揮て敵陣に砍て入る。鮑旭是を見て、項充、李袞を招き、三人一同に馳出て、李逵と共に敵軍の内に砍て入り、四面八方に當て散々に打かば、高可立、張近仁、大に驚き、急に逃んとせし處に、項充、李袞早くも跑來て、高可立と張近仁とを迎へ、鋒を交へ暫く相戰ひ居ける處に、李逵斧を揮て馳來り、先高可立を馬より下に砍て落し、猶張近仁を砍んとしたりしかば、項充呼で云く、李公先斧を收給へ、一人は生捉て回るべし、と再三是を制しけれ共、李逵は原來人を砍ことを好む豪傑なれば、項充が言を耳にも聞入ず、遂に斧を以て張近仁が頭を砍て落し、頓て二つの首を取にけり。李逵益興を得て、東西南北に砍て回り、一千の敵兵を右往左往に追散し、三百餘人立處に討取り、直に城門の邊まで追蒐しかば、討漏されたる敗軍共、先を爭て城中に逃入り、牢く城戸を闔し、嚴密に防けり。李逵、鮑旭兩人は、城中に攻入んとしけれ共、項充、李袞再三是を制し、

はゞ、我立處に頭を砍て兩人が仇を報ふべしと、牙を咬み、齒を切て怒りけり。宋江が云く、我明日白旗を持せて、自ら三軍を率し、直に城下に至て勝負を決せん、各用意を調へ候へとて、此夜は先歇ける。翌日宋江三軍を引て水陸より竝び進む。諸の大將等もこと〴〵く陣を拂て打出けり。黒旋風李逵は哨の爲として、鮑旭、項充、李袞等と倶に五百の歩軍を領し、先達て常州の城下に馳向ふ。此時呂樞密は錢振鵬を討せて、心中に憂ひ、卽日文書を修へて、使者を蘇州に馳せ、合戰の次第一々詳に述て、三大王方貌に訴へ、急に援兵を求めける。斯る處に飛脚到來して、五百の歩軍はや城下に至りぬと報じければ、呂樞密是を聞て、自ら城樓に上り、遙に城外を望んで敵の旗號を見るに、黒旋風李逵と云ふ、五字を大文字にて分明に書き、これを常先に立て寄來る。呂樞密左右を顧て云けるは、黒旋風李逵と云者は、梁山泊第一の凶徒なり、好で人を殺し、樂で火を放つ、尤勇力無雙の猛將なれば、等閑の敵と一列に見ることなかれ、諸將の内誰人か先彼を討て敵の氣を呑んや。高可立、張近仁、一同に進み出て云ふ、某等兩人、李逵を生捉て相公に獻ずべし。呂樞密大に悅び、汝兩人若得て彼賊を生捕ば、我早速上に奏聞し、官爵を加へん、必ず力を併て、李逵を擒れとて、嚴に仰ければ、兩將愼で命を請け、各鎗を取馬に乘て、一千の軍馬を領し、直に城外に打出て李逵を迎ふ。李逵是を

の副將を討せて、大に怒り、靑龍刀を高く擧て、錢振鵬を砍て落し、頓て首を刎んとせし處に、關勝が乘たる赤兎馬、石に跌て前足を折きければ、關勝馬より下に眞倒に落たりけり。高可立、張近仁、是を見て一同に跑來りて、關勝を左右より夾で、已に討取んとしける處に、徐寧、宣贊、郝思文三騎、轡を竝べて馳來り、遂に關勝を助けて本陣に囘りける。呂樞密は親方勝利を得たるを見て、自ら城外に突て出で、三軍に下知して緊く撃せしかば、關勝等大に敗れて、北の方に逃走る。南軍共は勝に乘じて二十餘里追來り、宋兵許多討取て、各大に勇みけり。關勝は敗軍を引て本陣に囘り、韓滔、彭玘兩人が討れたる事、委しく宋江に告ければ、宋江甚だ哭して云く、誰か知らん江を渡て以來、已に五人の豪傑を失へり、恐らくは上天宋江を惡み給ひ、方臘を助け給ふ故にして、數輩の副將を討せ、若干の人馬を失ひぬ、我何を以て此悲みを除んやとて、自ら心を痛めけり。吳用諫て云く、宋君何故深く歎き給ふや、戰の勝負は兵家の常にして、死生は命中に定る處なれば、未だ歎くに足ず、韓滔、彭玘、今日に至て戰場に死せし事、最惜むべしといへ共、是又武夫の本望なれば却て快し、宋君先心を安じ給ひて、敵を敗るべき計を議し給へと、未だ云も終らざるに、黑旋風李逵高聲に呼つて云く、韓滔、彭玘を殺したる賊は、諸將定めて是を識認給ふらん、若我に敎て其面を見せしめ給

六将三對小合戰を

相戰ふ。呂樞密は許定、金節等を出して戰を助けしむ。兩人の者、令を受て陣前に馳出で、暫く馬を勒へて戰の體を見るに、趙毅は黄信と戰ひ、范疇は孫立と戰ふ。各相劣ぬ勇士にて、雌雄未だ決せざりし處に、戰已に六十餘合に至り、趙毅、范疇齊しく疲れ、鎗法はや亂れしかば、許定、金節、各刀を舞して砍て出る。宋の陣中よりは、韓滔、彭玘馬を並べて跳出で、直に敵の兩將を迎へて鋒を交ふ。金節は韓滔と戰ひ、許定は彭玘と戰ふ。金節は素より宋朝に歸順の心有けるゆゑに、味方の陣勢を亂さんと欲し、故意二三合戰て本陣に逃ければ、韓滔勢ひに乘じ追來る。南軍の陣中には高可立これを見て、急に弓箭を撚り、宛も滿月の如く挽て兵と放ければ、其矢韓滔が喉に中て、馬より下に眞倒に落たりける。秦明は陣中より此體を見て、大に驚き、急に韓滔を救はんと欲し、早速馬を飛せ跑出しか共、張近仁早くも刀を揮て、韓滔が首を刎にけり。彭玘と韓滔とは、元來莫逆の友なりしかば、彭玘は韓滔が討れたるを見て、大に怒り、我此仇を報はずんば有べからずとて、遂に許定を捨て高可立を相尋ぬ。許定は唯一圖に功を立んと欲し、猶彭玘が後へに隨て追來る。秦明これを見て、許定を迎へ相戰ふ。高可立は彭玘が追來るを見て、再び馬を引かへし、直に彭玘を迎へ、はや五六合戰ひし處に、張近仁橫合より馳來て、彭玘が脇の下を突ければ、彭玘忽ち馬より落て死しにけり。關勝は兩人

聞もあへず、某力を盡し、彼等を擒とせんに、何の難きことあらんと、馬を飛し、鎗を撚て跳出る。呂樞密又六人の統制官を出し戰をたすけしむ。是則應明、張近仁、趙毅、沈抃、高可立、范疇等の六將なり。總て五千の軍馬を引て城門の外に打出けり。錢振鵬先諸軍に下知して陣勢を列しめ、六人の統制官を左右に從へ、自ら敵陣を望みるに、關勝當先に進み、青龍刀を横へ、大音を揚て罵りけるは、汝反賊猥りに生靈を傷ひ、天理に背く惡徒等、猶其罪を知ずして宋朝に敵せんとするは、自ら死を招く道理なり、我若盡く誅戮せずんば、誓て此處を立去まじ。錢振鵬是を聞て、大に怒り、汝等は原梁山泊の盜賊にて、只人を剝ことを已業として、天の時を知ず、故に王業を圖らずして、宋朝の道なき君に降參し、擅に我大國を犯さんと欲するは、天命を憚ざる愚人なり、我自ら汝等を殺して潤州を取復さん、必走ること勿れと、鎗を撚て跑來りけるに、關勝大に怒り、彼青龍刀を舞して相迎へ、兩將互に勇を奮て、平生の武藝を勵み、一往一來祕術を盡して戰ひしかば、敵親方これを見て、誠に希有の勇士等かなと、感ぜざるはなかりけり。漸五十餘合戰ひし處に、錢振鵬、氣力已に疲れ、殆危く見えしかば、兩人の統制官趙毅、范疇、一同に馳出て、關勝に掛てかゝる。宋の軍中にも是を見て、同く兩人の副將黃信、孫立、軍器を揮て突て出で、直に統制官等を迎へ、鋒を交へ、六人の大將三對に成て

制使となり、兩人の副將と共に堅固に城を守り、偏に方臘を助けける。此時錢振鵬は、呂樞密が戰に打負て、潤州を失ひしと聞き、甚だ是を驚き居る處に、一人の軍士來て錢振鵬にまみえ、呂樞密潤州を落て、此處に至り給ふと告ければ、錢振鵬急ぎ城門を開て、呂樞密を迎へし處に、呂樞密戰の次第を語て、計を議しけるに、錢振鵬が云く、樞密相公心を安んじ給へ、某不才たりといへども、上天子の洪福を托み、下樞密の虎威を頼み、宋の兵を立處に追拂て、再び潤州を取復し、宋江が輩に江南の威勢を見せしむべし。呂樞密大に悅て云く、足下もし肯て此の如く心を用ひ、力を盡し給はゞ、何ぞ我國安からざらんや、若敵を追散して再び潤州を得ば、我又人馬を催し、堅く籠城し、重ねて敵來る共少しも犯るゝこと有まじ、足下彌功を立給はゞ、我早速天子に奏聞し、足下の勳功を吹噓せんに、怎ぞ昇進なからんや、必ず忠を盡して國家の恩を報じ給へ。錢振鵬是を聞て甚だ悅び、頓て酒宴を設けて、呂樞密を款待けり。扨又宋先鋒は人馬を分て、常、蘇の二箇所を攻んと、先毗陵郡を望で馳來る。當先に進む人々には、關勝、秦明、徐寧、黃信、孫立、郝思文、宣贊、韓滔、彭玘、馬麟、燕順等の十一將なり。總て三千の人馬を引て急ぎける程に、早毗陵郡を打過て直に常州の城下に至り、頻りに攻鼓を鳴して戰を挑みける。呂樞密是を聞て、誰かあへて彼を追散さんやと、左右を見ける處に、錢振鵬

地に進發す。宋江又江陰太倉等の地を攻べしとて、水軍の大將等に水軍五千を與へ發向せしむ。此人々には正將七人、偏將三人、總て十人なり。

棄命三郎石秀　混江龍李俊　船火兒張横　浪裡白跳張順
立地太歳阮小二　短命二郎阮小五　活閻羅阮小七　出洞蛟童威
翻江蜃童猛　玉旛干孟康

水軍の大將總て十人、五千の水軍を引て百艘の兵船に乘り、直に江陰、太倉等の地に發向す。此時水陸の諸大將各思ひ〳〵に粧束して、花やかに出立しかば、見る人これを感ぜざるはなかりけり。

○宋公明大に毗陵郡に戰ふ

方臘が幕下の樞密呂師囊は、六人の統制官を引て、常州の毗陵郡に退きける。抑此常州に原來錢振鵬と云者在て城を守る。手下に兩人の副將あり。一人は晉陵縣上濠の者、姓は金、名は節と號す。一人は錢振鵬が心服の者、姓は許、名は定と號す。此錢振鵬が由來を尋るに、原清溪縣の都頭なりけるが、中比方臘に歸順して、屢軍功を立て、直ちに昇進して、常州の

正將副先鋒玉麒麟盧俊義　軍師神機朱武　小旋風柴進　豹子頭林冲
雙鎗將董平　雙鞭將呼延灼　急先鋒索超　沒遮攔穆弘
病關索楊雄　揷翅虎雷横　兩頭蛇解珍　雙尾蝎解寶
沒羽箭張清　赤髮鬼劉唐　浪子燕青　此人數宋江の例にていへば、正將十五人偏將三十二人と改むべし。一定せざる書きぶりは作者の届かざるなり。

偏將　聖水將單廷珪　神火將魏定國　小溫侯呂方　賽仁貴郭盛
摩雲金翅歐鵬　火眼狻猊鄧飛　打虎將李忠　小覇王周通
跳澗虎陳達　白花蛇楊春　病大蟲薛永　模著天杜遷
小遮攔穆春　出林龍鄒淵　獨角龍鄒潤　催命判官李立
青眼虎李雲　石將軍石勇　旱地忽律朱貴　笑面虎朱富
小尉遲孫新　母大蟲顧大嫂　菜園子張青　母夜叉孫二娘
白面郎君鄭天壽　金錢豹子湯隆　操刀鬼曹正　白日鼠白勝
花項虎龔旺　中箭虎丁得孫　霍閃婆王定六　鼓上蚤時遷

盧俊義を首として、都て四十七人の正、偏兩將共に三萬の精兵を領して、南の方、宣、湖等の

小李廣花榮　霹靂火秦明　金鎗手徐寧　美髯公朱同
花和尚魯智深　行者武松　九紋龍史進　黑旋風李逵
神行太保戴宗
偏將鎭三山黃信　病尉遲孫立　井木犴郝思文　醜郡馬宣贊
百勝將韓滔　天目將彭玘　混世魔王樊瑞　鐵笛仙馬麟
錦毛虎燕順　八臂那吒項充　飛天大聖李衮　喪門神鮑旭
矮脚虎王英　一丈青扈三娘　錦豹子楊林　金眼彪施恩
鬼臉兒杜興　毛頭星孔明　獨火星孔亮　轟天雷凌振
鐵臂膊蔡福　一枝花蔡慶　金毛犬段景住　通臂猿侯健
神算子蔣敬　神醫安道全　險道神郁保四　鐵扇子宋清
鐵面孔目裴宣

宋江を首として總て四十二人の正將、偏將共に三萬の精兵を引て南の方、常、蘇等の地に進發す。盧俊義も又諸將を引て宣、湖の二ヶ所に發向す。相從ふ人々には、正將十四人、偏將三十三人總て四十七人なり。

趙毅、太歳神宣州の高可立、弔客神常州の范疇、喪門神蘇州の沈抃、六人ある内亂軍の中にて四人生捕り、二人討取よしあれば、十二人は殘なし。然者左右六人の統制とは何か誤有べし。

しかれども後に六人の名有時は、亂軍の内に統制官四人を生捉り二人を討取どいふに誤有にや。常州の軍の所に六人の姓名出たるを見合べし。

○盧俊義兵を宣州道に分つ

翌日又宋江は、盧俊義を請て軍事を議しけるが、今宣州、湖州の地も方臘これを奪て牢く守ると聞り、速に撃ずんば有べからず、我盧先鋒と兵を分て兩路より推寄べし、最鬮を拈て其當る所に發向せば可ならんとて、鬮を取けるに、宋江は常州、蘇州に取あたり、盧俊義は宣州、湖州に取當りたり。宋江卽時裴宣に命じ、諸大將の手分を定めしむ。此時靑面獸楊志は病に犯され出陣すること能ず、獨丹徒縣に留て、病を保養す。其餘の諸豪傑は盡く皆出陣す。又宋江に隨て、常州、蘇州に馳向ふ人々には、正將十三人、偏將二十九人、總て四十二人なり。

正將先鋒使保義宋江　軍師智多星吳用　撲天鵰李應　大刀關勝

龍刀を舞し、直に刑元帥に相向ふ。刑元帥も鎗を撚て關勝に摑蒐り、各勇を奮て二十餘合戰ひし處に、關勝精神益盛にして、遂に刑政を馬より下に砍て落し、頓て首を刎にけり。呼延灼親方に利あるを見て、大に三軍を進め、直に敵軍の内に突て入り、喊き叫んで攻戰ふ。刑元帥の兵士皆逃散しかば、今は力及ず、總軍南の方へ引退く。呂樞密は親方の敗北したるを見て、丹徒縣を走り出敗軍少々引率し、常州縣へと落行けり。關勝等十人の大將は、丹徒縣を奪て、捷軍の事を宋先鋒に達しければ、宋江大軍を引て丹徒縣に至り、早速人を馳て軍の次第を中軍に訴へ、乃張招討を請て潤州を守らしむ。翌日、張招討多く賜を以て丹徒縣に送りしかば、宋江是を得て、則三軍を賞しけり。

按ずるに此處水滸傳百回本九十一回に、刑元帥左右に六人の統制を從へるとあり。呂樞密に十二人の統制有て、此度の軍に討殘さる處の如く書り。然るに潤州を守る呂樞密が部下なる八十二神將に象るなり。其首たる二人は擎天神福州の沈剛は史進討取たり。同斷游奕神歙州の潘文得は、張橫これを殺す。巨靈神杭洲の沈澤は劉唐討取たり。豹尾神江州の和潼は項充李袞討取たり。黄旛神潤州の卓萬里は、孔明孔亮生捕たり。六丁神明州の徐統は、郝思文射取たり。是迄六人なり。遁甲神睦州の應明、霹靂神越州の張近仁、太白神湖州の

關勝龍刀を揮て
元帥刑政を砍て落す

は、捷軍のことを張招討に報じ、且人馬の息を歇せけり。扨彼呂樞密□は兵過半討取れ、僅の兵を引て丹徒縣に退き、急に文書を修へ、蘇州の三大王方貌が方に危急の由を訴へ、援兵を求んと催しける處に、元帥刑政兵を引て丹徒縣に至りしかば、呂樞密これを迎へて、大に悦び、則宋江等が計に陷たることを詳に語りける。刑政が云く、前日罡星呉の地に入て、親方の爲に凶多きが故に、三大王某に兵を與へて江南を守らしめ給ふ處に、果して城中に變出來し、相公已に城を乘取れ給ひし事、甚以て恨みなり、某不肖たりといへ共、相公の仇を報はん、相公も力を併せて戰を助け給へとて、翌日刑元帥人馬を引て丹徒縣を打出で、直に潤州を望で攻來る。去程に宋江は潤州城に在て、呉用等と議を定め、童威、童猛に二百餘人を與へて、焦山の下に遣し、則ち石秀、阮小七、兩人を潤州に誘はしめ、又五千の人馬を發して丹徒縣を攻さしむ。其大將には關勝、林冲、秦明、呼延灼、董平、徐寧、朱同、索超、楊志、此十人の豪傑なり。已にして關勝等は五千の軍馬を領して、はや潤州城を發し、直に丹徒縣を望で急ぎける。此時刑元帥が人馬は漸此邊に至り、遂に宋の兵と適遇て軍勢を對し、互に喊の聲を合せ鼓を鳴し、敵味方の諸大將各先を爭ひて陣前に馳出る。方臘が軍中より、刑元帥當先に進み出で、六人の統制を左右に從しむ。大宋の陣中には、關勝是を見て一番に馳出で、彼青

射殺せり。又亂軍の内にて四人の統制官を活捉て、同き二人の統制官を殺しぬ。其外打取し所の首其數を知るべからず。宋江又親方の諸大將を數るに、此日流矢に中て死したる者都て三人あり。一人は雲裡金剛宋萬、一人は沒面目焦挺、一人は九尾龜陶宗旺なり。宋江已に三人の副將を失うて心中甚だ愁へ、只鬱々として樂ず。吳用諫て云く、死生の二つは、原來命中に定る處なれば、憂とするに足らず、今三人の副將を失ひしといへ共、十二人の敵將は、生捉討取一人も殘さず、呂樞密逃延たれ共、江南第一要害の州を得たるは、是莫大の福なり、何ぞ必しも自ら憂に、尊體を傷ひ給はんや、先宜しく嘆きを休て大事を議論し給へ。宋江が云く、我輩百八人は上天星に應じて、幷に梁山泊に聚り、各義を結で兄弟の盟を約し、其後も又五臺山の知眞長老の前に於て、同死同生の誓をなして遠からざるに、豈知らんや、公孫勝は故山に回り、金大堅、皇甫端は朝廷に留り、蕭讓は蔡太師が家に留り、樂和は王太尉が家に留り、今日又三人の副將を失へり、況や宋萬は當初多く心力を盡し、山陣を開し者なれば、未だ大功は立ざるといへ共、梁山泊に於ては、其辛苦他に超たり、我豈是を歎かざらんやとて、早速に三軍に命じ、宋萬が死したる處に臺を設けしめ、種々の祭物を供へ、宋江自ら是を祭り、彼生捕し處の敵將を臺の前に引出して、是を殺害し、則其首を位牌の前に供へける。已にして宋江

兩路の軍馬を領して、先城門の邊に至りしが、中々宋の兵を退くる事能ず、沈剛は史進に殺され、潘文得は張横に殺され、宋の雄兵勢に乘じ、城門の内に亂れ入り、各功を爭て相働く。城内には猶十人の統制官有て暫く攔りしか共、遂に防ぐこと能ず、衆皆私宅に逃去ける。穆弘、李俊は城中に在て此消息を聞き、頓て方々に火を放ければ、呂樞密是を見て大に驚き、只六人の統制と共に先火を救はんと圖り、急に人馬を引て打出ぬ。此時、城の四門には、宋の兵已に攻入て散々に相戰ふ。良久しくして後、城の上に宋先鋒の旗號嚴密に建竝べ、喊の聲は天地も崩るゝばかりなり。かゝる處に、江北の方に五百艘の兵船著岸して、三千の人馬はや岸の上にあがり、眞先に二十人の大將轡を竝べ、一同に馳來る。是則關勝、呼延灼、花榮、秦明、郝思文、宣贊、單廷珪、韓滔、彭玘、魏定國等の大將なり。宋の兵總て城中に砍て入り、各勇を奮て緊しく打しかば、呂樞密手を措に及ず、戰に利を失ひ、僅の敗兵を引て丹徒縣に奔りける。宋の大軍は已に潤州を奪取て、牢く城門を分守り、諸將各江邊に出て宋公明を相迎ふ。宋公明は遊龍飛鯨等の船に旗號を建列ね、遂に江を渡りて岸に上り、諸將と共に城中に入り、懇に民を撫で、先兵を城内に屯しぬ。此時諸大將各中軍に至て功を獻ず。劉唐は沈澤が首を獻ず。孔明、孔亮は、卓萬里を活捉り、項充、李袞は、和潼を活捉り、郝思文は徐統を

居ける處に、又蘇州より御弟三大王の使者忙はしく至て報じけるは、前日楊州の陳將士が降參と申せしは、恐らくは詐あらん、全く信ずべからず、頃日司天大監天象を觀ける處に、罡星呉の地に入たるとなれば、必ず禍あるべし、先緊しく江岸を守らせ、用心を加へ候こと肝心なり。呂樞密是を聞て云けるは、大王も又此ことを以て心に懸給ふなれば、是定て尋常の大事にあらじ、彌以て守らしめんと、早速三軍に命じ、緊しく江岸を守せ、船の上の人唯一人も岸上に上らせず、急ぎ勅使を饗應したりけり。三百艘の船の上に藏れ居たる者共、半日ばかり待けれ共、何の消息もあらざりしかば、盡く皆岸の上に登りけるに、南軍共は是を攔ること能ずして、おめ〳〵と上らせたり。此時黑旋風李逵は解珍解寶と共に、城門の邊に至りければ、軍士ども頻に攔んとせし處に、李逵二つの斧を揮て、先兩人の軍士を砍殺し、猶東西に跑て狂しかば、城中の諸士一同に騷動す。解珍兄弟も各軍器を揮て砍立ければ、城兵等は城戸を閉る事能ず、右往左往に迯にけり。彼の二十人の副將等も、各軍器を揮て四面八方に馳廻り、軍士共を散々に砍拂ふ。呂樞密は江岸を守らしめんとせし處に、城門已に破れ、騷動すと聞しかば、十二人の統制官に多く人馬を與へて、城門の邊に差越ける處に、史進、柴進、はや三百艘の船なる埋伏の軍士共を引て急に岸に上り、諸人喊き叫んで城内に砍て入り、首たる兩人の統制沈剛、潘文得、

更に疑はし、汝二人は我方に留るべし、我今四人の統制官に百人の軍士を添て船中を捜さしめん、若別に物あらば我決して汝を免すまじ。穆弘が云く、我們は唯重く用ひられんとこそ願ふなるに、何ゆゑ疑を起し給ふやと、いまだ云も了ざるに、一人の軍士來て、詔到著せりと報じければ、呂樞密、急に馬に乘り、諸軍に命じ江岸を守らしめ、陳益兄弟は我に隨て來るべしとて、南門を望んで馳行ける。此時李俊は後へを回看て招ければ、二十人の副將共一度に從ひ來て城の南門に入らんとせしに、門を守る軍士共相担て云く、相公の仰には陳益兄弟のみ入しめよとの御事なり、汝等諸軍妄りに入べからずと、頻りに担ぎりしかば、只穆弘、李俊兩人のみ城内に入て、其餘は都て城の外に扣へたり。扨呂樞密は城の南門の外にて方臘が勅使を迎へ、便ち問て云く、天使何故太だ忙しく至り給ふや。天使馮喜答て云く、前日司天監浦文英奏して云く、夜天象を觀に、若干の罡星呉の地に入れり、是に依て禍大いならんとの事なるゆゑ、天子詔を降し給ひ、いよ〳〵相公をして堅く江岸を守らしめ給ふ、若北邊より來る者あらば、緊しく査を加へ給へ、其形他に異なる者あらば、早速是を誅し、禍を除き給へ、是則ち肝要なり。呂樞密是を聞て、大に駭き、陳益兄弟が動靜太だ疑しき處に、今此左右有こそ不思議なれ、先城中に入て詔を讀しめんとて、遂に勅使を引て城中に入り、已に詔書を讀

客帳司が云く、前日樞密相公、葉虞候を遣し給ひぬるに、何故今日は見えざるや。穆弘が云く、虞候は呉成と共に病を得て、床に臥し、此度は來る事能ず、只某等のみ伺候せりとて、則文書を呈しければ、客帳司、文書を取て岸に上り、則呂樞密に告て云く、楊州定浦村の陳將士が息陳益、陳泰、約諾せし處の粮五萬石、船三百艘、兵五千人是を相公に獻ずとて、則文書を呈しければ、呂樞密、文書を見て、陳益兄弟を呼ければ、穆弘、李俊、并に二十人の副將一同に岸に上る。軍士共呼つて云く、樞密相公此處に居給ふ間、閑雜の者は近く來る事勿れと、再三制しける。二十人の副將共是を聞て、先傍に立住る。穆弘、李俊恭しく身を躬て良久しく待し處に、客帳司來て、兩人の者を呂樞密が前に導しかば、樞密問て云く、汝が父陳將士は何故に自ら來らざるや。穆弘が云く、父陳將士は宋江が人馬の來るを聞て、自ら村を守り、擅に遠出致ざるなり。呂樞密又問て云く、汝兄弟曾て武藝を學びたりや。穆弘が云く、某兄弟頗る武藝を曉せども算ふるには足ず。呂樞密又問て云く、兵粮は船に何程づつ積けるや。穆弘が云く、大船一艘には三百石を積み、小船には一百石づつを積り、呂樞密が云く、汝兩人曾て別心なきや。穆弘が云く、某父子一片の忠心あるが故參れり、豈敢て別意あらんや。呂樞密が云く、汝父子が忠心は我元より知りしか共、汝が船中の軍士等が模樣太だ用心の體に見えて、

横、張順掌り。四人の副將相從ふ。曹正、杜興、龔旺、丁得孫なり。第三番の船は十人の大將掌り、兩船に相別れり。其人々は史進、雷横、楊雄、劉唐、蔡慶、張清、李逵、解珍、解寶、柴進なり。三百艘の舟に乘じ、頭領四十二人なり。其次に又宋江等若干の兵船に馬甲等を積み、遊龍、飛鯨等の船一千艘に、宋朝の先鋒宋公明が旗號を立て、阮小二、阮小五是を司て、三軍を催促す。宋公明は中軍の船に在て、江を渡る。爰に又潤州の北固山の上には、呂樞密が哨の者有て水面を望み見るに、三百艘の舟、方臘が旗號を立て、一行に漕來りしかば、哨の者これを見て、呂樞密に斯と訴へけるに、呂樞密頓て十二人の統制官を從へ、自ら人馬を領し、直に江邊に至て望見るに、前面に進し百艘の舟、先岸に傍て漕來る。船の上に兩人の大將あり。其外の者共は盡く前後左右に相從ふ。呂樞密、馬より下り発に坐しければ、十二人の統制官、兩邊に立並んで江岸を守る。穆弘李俊は、呂樞密、江岸の上に坐たるを見て、船中より禮を行ひしかば、一人の虞候走出て、穆弘等が船を三行に備へしむ。百艘は中にあり、百艘は左にあり、百艘は此時右にあり。此時又一人の客帳司來て船に乘り、汝等が此船は何の地より來れるやと問ければ、穆弘答て云く、某は是姓は陳名は益、弟が名は泰と申す、父陳將士が命を受て、米五萬石、船三百艘、兵五千、是を樞密相公に獻じて、寸心を表す、願くば足下是を報じ給へ。

騷動して十人の頭領砍て入り、喊き叫で跑回る。此十人の頭領は、花和尚魯智深、行者武松、九紋龍史進、病關索楊雄、黑旋風李逵、八臂那吒項充、飛天大聖李袞、喪門神鮑旭、錦豹子楊林、病大蟲薛永等なり。家内の軍士共豈よく敵する事を得ん、皆彼所に走り此に逃る。門外に亦復一彪の人馬寄來り、六人の大將先眞に進む。是則美髯公朱同、急先鋒索超、沒羽箭張淸、混世魔王樊瑞、打虎將李忠、小覇王周通等なり。此時六人の大將一千の軍馬を引て、館を重々に取圍み、一家の眷族一人も漏さず盡く殺害せり。諸將皆浦の邊に來て此處を見るに、四五艘の船に兵粮を積でありしかば、諸軍是を奪て宋公明に報ず。宋公明此ことを聞て、大に悅び、則呉用と商議して、計已に定りしかば、頓て張招討に別れて兵を領し、自ら陳將士が館に發向して、前軍の手分せんと議定し、三百の兵船に、張順が奪取し彼三百の旗を立て、又一千の兵に彼奪取し衣を著せしめて、船に乘せ、猶二萬有餘の兵を船艙の内に藏し、又穆弘を陳益が形に出立せ、李俊を陳泰が形に出立せ、各一艘の大船に乘しめて、其餘の船どもには、又それ〴〵の將に命じて分ち掌しむ。第一番の船は、穆弘、李俊掌り。二十人の副將相從ふ。其人人は項充、李袞、鮑旭、薛永、楊林、杜遷、宋萬、鄒淵、鄒潤、石勇を穆弘に屬し、童威、童猛、孔明、孔亮、鄭天壽、李立、李雲、施恩、白勝、陶宗旺を李俊に屬す。第二番の船は張

陳将士父子家人酒に中て倒れふす

○宋江智をもつて潤州城を取る

偖も陳將士は、頓て酒肉を具へて燕青に勸め、兩人の子息も同座に在て酒を酌み、盃數遍巡りける處に、燕青暗に解寶を見て、目睃したりければ、兄弟の者其意を曉し、解寶急にかの蒙汗藥を取出して人目を欺き、則酒壺の内に入て、そらさぬ體にもてなしけり。燕青是を見て、自ら座をたち、恭しく頓首して云けるは、某今日暫く先相公の酒を假て、此回の吉左右を賀し奉んとて、彼酒を取て大觴に斟み、これを捧げて陳將士に勸めければ、陳將士盃を接て飲乾し、陳益、陳泰にも各一盞を飲しめける。其外座間にありし家人等にも燕青一向勸めて、各大觴にて飲しめけり。燕青又解珍を視たりしかば、解珍心中に點頭き、外面に走り出で、遂に相圖の砲を放ちける。此時又十人の頭領は來て消息を待居る處に、相圖の砲を聞き、一同に馳集る。燕青は客廳に在て、陳將士父子幷に家人共都て倒れけるを見て、大に冷笑ひ、汝等毒酒を飲たるぞ愚なりとて、解寶と共に刀を拔て、一々頭を剟落しぬ。門外忽ち

潤州より來れり。軍士等是を聞て、便ち燕青を客廳に導き、陳將士に斯と告ければ、將士頓て出て燕青に對面して問けるは、足下は何れの處より來れるや。燕青下拜して云く、左右の人を退け給はゞ、我敢て來意を告ん。陳將士が云く、左右は都て我心服の者なれば少しも妨なし、汝早く來意を告候へ。燕青詐て云く、某は葉貴と申者にして、呂樞密が幕下の虞候なり、正月七日に相公の使者吳成と某と、呂樞密の命を承て、蘇州に馳相公の存念を三大王に訴へければ、三大王是を悅んで上に奏聞ありける處に、上より仰には、相公を封じて楊州の府尹とし、兩人の息男は呂樞密相見るの上にて、官爵を定め給はんとの御事なり、吳成をも回し給はんとの仰なりしか共、想はず病に犯されて回ること能はず、猶樞密府に留れり、今上より褒美として、旗三百面、衣一千領を賜る、相公も又急ぎ彼糧を潤州城迄送り給へ、必ず延引し給ふことなかれ。陳將士是を聞て、大に悅び、陳益、陳泰を呼出して、燕青に遇しむ。燕青が云く、某は則小卒なり、豈敢て相公と同座せんや。陳將士が云く、汝は呂樞密の使者なれば、我等父子が珍客なり、何ぞ慇懃の事を云や。燕青再拜して座を定めけり。猶燕青、解珍兄弟がなす所いかがの計有や、次卷を見て知るべし。

此卷に王太尉とばかり書ては聞えがたからん、駙馬王晉卿と云人なり。

作らしめ、張順又舟を漕出して再び金山の下に至り、猶具しく動靜を窺ひて、彼纜船の上に置し衣服を取て、これを著し、又瓜州に回りしかば、天色已に白みけり。張順遂に岸に上り、二三兩の銀を彼老婆に送り、兩人の僕に旗衣等の二荷の擔を挑せ、急ぎ楊州に回りける。此時宋江が軍馬は、都て楊州の城下に屯せり。楊州の官人共酒宴を設けて、宋公明を城中に邀へ、毎日慇懃に管待し、三軍に至る迄一々酒食を賞しける。扨柴進、張順は楊州に回て宋江に見え、彼陳將士が方臘に組し、近日賊兵を導て江を渡り、楊州城を攻しめんと圖る事始終詳に訴へ、又江中にて吳成を殺して、旗衣等を得たる事具く語りければ、宋江大に悅び、則吳用を請て計を商議す。吳用が云く、既に此機會ある上は、潤州を取んこと掌を反すよりも易し、先陳將士だに捉へなば、大事立處に成んぬべし、計はかくの如し、此の如しと低言しかば、宋公明これを聞て、軍師の言我意に合へり、去來計を調へんと、浪子燕青を虞候葉貴が形に出立せ、解寶を南軍の形に出立せ、定浦村の路徑を問しむ。解珍は擔を挑ひ、燕青に從ひ、總て三人楊州を出で、直に定浦村に馳せ、城より四十餘里離れて、早くも陳將士が家を望む。門前に二三十人の軍士一樣に裝束して奔走す。此時燕青浙人の鄕談を用ひて、彼軍士等に問て云く、陳將士が館は此屋なるや。軍士等が云く、貴客は何れの處より來り給ふや。燕青が云く、我は

に砍籠ければ、彼一人の漢子大に驚き、再び艙の内に走り入る。張順罵て云く、汝は何れより來りぬるや、眞直に告知せば汝を饒さん。彼漢子跪て云く、某は楊州城外定浦村と云處に、陳將士と云者の家人なり、今主命を奉て潤州にゆき、呂樞密に粮糧五萬石を獻上せんと願しかば、樞密是を悅び、則一人の虞候を某に跟て定浦村に馳せ、粮五萬石と船三百艘とを索しむ、これに依て今此處に至れり。張順が云く、其虞候が姓名はいかん、今何れに在や。彼漢子が云く、今豪傑の殺し給ひぬる漢子は、則虞候なり、姓名は葉貴と申す。張順又問て云く、汝が姓名はいかん、何れの時江を渡りたるや、船中には又何等の物ありや。彼漢子が云く、某が姓名は吳成と申し、今年正月七日に江を渡りぬ、此度我輩呂樞密の命を承り、蘇州に馳て、則御弟三大王に陳將士が存念を訴へしかば、三大王是を悅び、其褒美として、旗三百面、衣一千領、此二色を陳將士に賜る、今則船中に積り、願くは豪傑某が一命を宥し給へ。張順又問て云く、汝が主人の手下には幾ばくの人馬ありや。吳成が云く、總て數千の人馬あり、又兩人の男子を持けるが皆豪傑の譽あり、嫡男が名は陳益、二男が名は陳泰と申す。張順委細に聞き、刀を揮て彼吳成を水中に砍て落し、頓て船を漕て瓜州に回り、則柴進を呼で、事の次第一々詳に語り、彼三百面の旗、一千領の衣、盡く艙の内より取出して、二擔の荷に

張順敵地を
瞰んで星月の夜
揚子江を泳ぐ

此體にては敵の動靜を伺んこと甚だ以て難し、我今宵衣服を頭に戴き、金銀を腰につけ、水を越て金山寺に行き、賄賂を衆僧に送て敵の動靜を窺ひ、はやく回て宋公明に消息を報ずべし、柴公は此處に在て待給へ。柴進其言を聞て可なりと同じければ、張順已に用意を調へて再び江邊に至に、此夜星月明らかに風瀾靜にして水天一色なり。張順衣服を脫で頭に戴き、金銀を取て腰に拴り、猶一挺の刀を帶し、水中に飛入り、直に江心に赴きける。張順原來水練の達人なれば、水の勢自ら開け、張順を渰す事なし。張順水中に在て陸路を走るが如く、已に金山の下に至て、石峯の邊を見るに、一艘の小船纜で有ければ、張順頓て船の上に跳乘り、頭に戴たる衣服を取て、是を著し、暫く船の上に坐しける處に、潤州城に三更の鐘響きける。張順此時首を擡げ、上流を望見るに、一艘の小船漕來る。張順心中に怪み、此船必ず敵の哨なるべし、急に此處を避行んとて、船の上を見れば、櫓も擑もなき纜舟なれば、舟を動すこと能はずして、再び衣服を脫で江中に跳入り、水の內に淬して、彼船の邊に近づき、暗に船の上を見けるに、兩人の水手有て、只管北の邊に漕來る。張順水中にて刀を拔き、暗に船傍に倚て彼兩人の者を砍んとせし處に、彼水手是を見て、急に水中に飛入ける。張順早くも彼船に跳上り、船を漕開んとせし時、艙の內より又兩人の漢子走り出でけるを、張順急に一人の漢子を水中

人やあると伺ひける處に、竈の邊より老婆出來りしかば、張順問て云く、老婆汝が家には何しく動靜を窺て回るべし。柴進聞て大に悦び、四人等しく江邊に至り、一軒の草屋の内に入て、ゆゑ人なきや。老婆答て云く、今宋朝より大軍を馳て、方臘と戰ひ給ふよし、其風聞有けるゆゑ、此所に住居する人家、盡く他處に逃去ぬ、此家の者ども都て他方に落行き、唯我一人を留て家を守らしむ。張順が云く、我們四人は江を渡らんと欲す、知ず何の處に船有や。老婆が云く、此節は一艘の船も有まじ、前日、呂師囊、宋兵の至るを聞て、此處の船ども盡く奪取て、潤州に漕しめけり。張順が云く、我們は自ら粮を携たり、汝此家を我等に借て、二三日逗留あらしめんや、木賃は重く與ふべし。老婆が云く、屋を借んは易けれども、床等もあらされば、事極て不自由なり。張順が云く、旅中に在て何ぞ此等のことを嫌はんや。老婆又云く、恐らくは近日宋の大軍至るべし、其節は貴客甚だ難儀ならん。張順が云く、若大軍至らば我自是を避ん、汝恐るゝことなかれとて、柴進三人を呼で内に入れ、暫く休息して點心を用ひ、張順再び江邊に至て、江内の風景を見るに、金山寺は江のまん中にあり。張順心に想ふやう、潤州の呂樞密、時々此山に來て巡見することあらん、我先今宵水を越て金山の下に至り、消息を窺つて回るべしとて、再たび草家に來て、柴進に告けるは、江邊には唯一艘の小船もあらず、

人家には一人の男女もあらざりけり。柴進と張順は兩人の僕を引き、瓜州を望て進發す。石秀、阮小七も同じく兩人の僕を從へ、焦山を望んで馳行ける。抑此九千三百里の楊子大江は、遠く三江を接り。一つは漢陽江、一つは潯陽江、一つは楊子江なり。則四川より直に大海に至る。此江の内許多の所に通じける故、萬里江と云なり。地は吳と楚とに分て江の内に兩座の山あり。一座は金山、一座は焦山と云ふ。金山の上に一座の寺あり。山を繞せ建ける故、是を寺裏山といふ。焦山の上にも一座の寺あり。山の凹に藏れて形見えざる故、是を山裏寺と云ふ。此二つの山、原江中に生じ、楚を尾とし、吳を首とす。一方は浙西潤州、今の鎭江是なり。扨張順柴進は北固山の下を望み見るに、都て青白兩色の旗號を建て、岸邊には許多の兵船を纜ぎ、江北の岸上には只一本の旗も見えずして、一個の人もあらず。柴進が云ふ、瓜州の路上には家ありといへ共、人あらず、又渡し船も見えざるに、いかんぞ能敵地の虛實を窺はんやと、頗るあぐみて立たりける。

○張順夜金山寺に伏す

此時張順柴進に對して云く、先空屋の内に入て歇給へ、我自ら水を越て金山の下に行き、宜

百餘里直に大海に通ず、是こそ江南第一の要害なり、江を渡れば、則潤州なり、今方臘が手下の樞密呂師囊、幷に十二人の統制官堅く江岸を守る、若潤州を取ずんば方臘が大軍に敵し難からん。宋江是を聞て、軍師吳用と商議して云く、前面に大江有て路を攔る、いかゞして是を渡らんや、向に遼を攻し時は陸路なる故、水軍の頭領は曾て功を建ざりし、此度江南へ渡んには、すべからく水軍を用ふべし。吳用が云く、楊子江の內に金山、焦山とて二つの山有り、都て潤州の城郭に連れり、先數輩の頭領を遣して、彼地の動靜を伺せ、何等の船を用ひて江を渡らば可ならんや、豫じめ分明に是を知り、其後宜しく計を議定せん。宋江然りと同じ、則水陸の諸大將を聚めて問けるは、汝諸將の內、誰かあへて先敵地に赴き、具しく動靜を窺ひて回らんや。時に四人の大將進み出て、某等敢て馳行んと、一同に答へける。宋江此四人を見るに、一人は小旋風柴進、一人は浪裡白跳張順、一人は棄命三郎石秀、一人は活閻羅阮小七なり。宋江大に悅び、汝四人二手に分るべし、張顧は柴進と一處に行き、阮小七は石秀と一處に行き、直に金、焦兩山に至て旅宿を求め、潤州の虛實一々詳に窺ひて楊州に回り、委細に消息を報べし。四人の者命を承り、各兩人の僕を從て旅人の體に出立ち、遂に宋江に辭し、先楊州に至れり。此時この邊の百姓等は、宋の大軍至るよしを聞て、盡く村中を避け、途中の

定せし處に、蔡太師使者を以て聖手書生蕭讓を求む。王太尉は又鐵叫子樂和が能歌を唱ことを聞及んで、頻に是を求む。宋江辭すること能はずして、又此兩人を送り、總て五人頭領を減じければ、宋江心中樂ず、只顧是を嘆けり。扨彼江南の方臘は、原歙州の山中に棲し樵夫なりけるが、一日水中に臨で己が形を看し所に、頭に平天冠を戴きて、身に袞龍袍を著したる形移りしかば、此より謀叛を企て軍馬を聚め、則清溪縣のうち幫源洞の中に、寶殿、內苑、宮闕を造り、睦州、歙州にも又宮殿等を全く建て、文武百官盡く兼備り、誠に由々敷次第なり。方臘が得たる彼八州は則ち、歙州、睦州、杭州、蘇州、常州、湖州、宣州、潤州等の地なり。彼二十五縣は此八州の內にあり。今方臘が有つ處の國は、遼の國よりも猶大に廣くして、軍馬も又多かりけり。去程に宋江は用意を調へて東京を打出ければ、宿太尉、趙樞密自ら送て三軍を賞しける。水軍の大將等も兵船を揃へ、泗水より淮河に入て淮安を望み、盡く楊州に會合す。宋江、盧俊義各宿太尉、樞密趙氏に謝して相別れ、兵を五隊に分て進發し、直に楊州を望で馳たりける。前軍は既に淮安に至て兵を屯しける。知縣宴を設け、宋江を待受け、則城中に迎て慇懃に饗應し、方臘が賊勢浩大にして、輕々しく敵しがたきことを語て云く、前面は則楊子大江九千三

誠に天下の騷動此事たるべしと、百官一同に奏聞す。天子是を叡聞有て宣はく、逆賊方臘を征伐せん事は、朕已に張招討、劉光世に命ぜり、近々吉日を擇んで出陣させしめん、汝百官若良計あらば速に奏聞せよ。時に宿太尉進み出奏しけるは、臣愚意を以てこれを思ふに、彼賊已に八州を奪うて、勢浩大なれば、又かの遼を退治し、田虎、王慶を平げし勳功の大將宋江等を以て、張招討、劉光世に相副へ、是を前部として敵を討しめ給はゞ、必ず大功を立べし。天子是を聞給ひて、大に御感悅あり。汝が云處朕が意に合へり、急ぎ宋江等を召べしと宣ば、省院官勅命を奉り、頓て宋江、盧俊義兩人を引披香殿の下に至る。天子宋江を見給ひて、御悅斜ならず。則宋江を封じて平南都總官とし、盧俊義を封じて平南副總官とし、各金帶一條、錦袍一套、金甲一領、名馬一騎、綵緞二十五疋を賜り、其餘の正將軍偏將軍にも、各金銀綵緞を賜ひ、若功を立なば各官爵を加へ給はんとの御事なり。已に日限を定め給ひしかば、宋江、盧俊義、勅命を奉つて天子に謝し奉る。天子又宣はく、汝等が內に在る、能玉印を鐫金大堅といふ者と、能良馬を識たる皇甫端と云者とを、朝廷に留めて是を用ん、汝明日此兩人を獻ずべし。宋江、盧俊義愼んで領承し、遂に朝廷を出て、心中に甚だ悅び、急ぎ營中に回りて諸將を集め、勅命の趣委細に語りしかば、諸頭領都て大悅し、各用意を調へけり。宋江翌

此度方臘を征伐あらんが爲、朝廷より張招討、劉都督を江南に差向給ふ由、其隱れあらざるなり。宋江是を聞て云く、我人馬久しく閑居して、こゝに在こと甚だ宜しからず、しかじ宿太尉に内意を訴へて、天子に奏聞あらしめ、此度の討手には、我們發向すべし、知らず諸將の存念はいかん。諸大將大に悅んで云く、宋君の尊命誰かあへて違んやと、衆皆其議に同じけり。翌日宋江燕青を引て城門に至り、公用有よしを告て城中に入り、直に宿太尉が館に來て、宿太尉に見えければ、太尉先問て云く、將軍彌恙なきや。宋江答て云ふ、今榜文を掛て、堅く某等を禁じ給ふ故、事なくては城中に入ず、太尉の尊顏を拜することもまれなる間、常に是を憂るのみ、今日貴館に來る事餘の儀にあらず、今江南の方臘、多くの州郡を奪ひ、自ら年號を立て、近々に來て揚州を討んと圖るよし、其聞え專らなり、某等人馬久しく閑居して營中にある事、甚だ以て不可なり、我敢て軍馬を領し馳向ひ、忠を盡し、力を竭し、一戰を勵さんに、願くは太尉宜く奏聞を遂給へ。宿太尉是を聞て、大に悅び、將軍の存念我意に合へり、是則國家の福なれば、我宜しく奏聞を遂べき間、今日は先歸り給へ。宋江是を謝して再び營中に回り、諸將に斯と告にける。扨も宿太尉は翌日早朝參內しける處に、文武百官、披香殿に於て天子に見え、都て方臘が事を評議して云ふ、方臘今八州二十五縣を奪て、自ら位に卽き、近々又揚州を犯さんと圖る、

に怒て曰く、汝飽まで我店の酒肉を噉て價を償ず、却て我家を打は、傍若無人の所爲なりとて、只顧に爭ひける。李逵是を聞て、忽ち彼漢子を白眼で、汝何ぞ弱き者を欺いて無禮をなすや。彼漢子が云く、我前年彼に銀を借けれ共、猶未だ是を還さず、此所以に酒食の價を償ざるに、汝何の干ることか有て我を罵るや、我は近日張招討に隨て江南の地に出陣す、我彼地に至りなば、必定討死して屍を戰場に晒すべし、若今此所にて汝と併命ば、却てよく棺椁の內に入ることとあらん、汝早く來て對手になれとて、狂ひければ、李逵是を聞て、大に怒り、汝何ぞ僞言を云や、今張招討とやらんが江南に出陣する事は、世間に曾て其沙汰あらず、汝必ず我を赫すことなかれとて、兩人各拳を揑り、已に打合んとせし處に、燕青中に入て兩人の者を諫め、遂に李逵を引て此を過行き、一軒の茶肆に入て、主の老翁に問けるは、今前面にて爭ひをなしたる漢子、近日張招討と云者に隨て江南に出陣すと云けるが、果して此事ありや。老翁答て云ふ、貴客知らずや、今江南には强賊方臘、八州二十五縣を奪ひ、則ち睦州より起て直に潤州に至り、自ら號して一國とし、近々來て楊州を攻るよし、其沙汰專らなり、是に因て朝廷、張招討、劉都督兩人を差向け、方臘を打しめ給ふとなり。燕青、李逵、此事を聞て、急ぎ茶坊をいで、直に營中に回て、軍師吳用に斯と訴へければ、吳用は此消息を聞て、暗に悅び、則宋江に對して云く、

燕青李逵街講釈を聴
軍談

昔日蜀の關羽は左の臂を毒箭を以射られ、其毒已に骨の内に入ける時、醫士華陀が云く、若此疵を療治せんと欲ひ給はゞ、先銅の柱を立て、其上に鐵の鐶をつけて、其臂を穿ち、又索を以て牢く柱の上に拴著て、其後皮肉を開き、骨二三分を削取り、全く毒氣を除て、又油線を以て其口を縫ひ、外に膏藥を貼て、内に煎藥を用ひば、僅半月の内に平復有べし、然ども此療治は尋常の事にあらざれば極て難しと云けるに、關公はこれを聞て、呵々と大に咲ひ、大丈夫は死生を懼ず、況や一手をや、銅の柱、鐵の鐶等を用るに及ばず、肉を割骨を削るも少しも苦しからず、汝が心のまゝに療治せよとて、常の如く來客と碁をうつて、左の手を伸し給ひければ、華陀刀を持て肉を割り、骨を削りて毒を取けるに、關公は面色變せず、只客と碁の手を論じて咲ひ給へりと、未だ云も終らざるに、李逵此話を聞て、大に興を催し、覺えず大音聲を揚て、此の如き人こそ誠に大丈夫なり、と呼りしかば、諸人盡く驚いて、李逵が面を望み見る。燕青慌忙て云けるは、李公は此處を何等の處と思ふぞや、此拘欄の邊にて人を驚かしむる事、甚だ以て無禮なり。李逵が云く、關公の箭疵を療治するが如きを、是眞の大丈夫なれば、我覺えず喝采たり、何の大事か有て汝これを憚るや、と云ければ、燕青急に李逵を引て此處を立去り、わづか二三條の街を過けるに、一人の漢子石を飛し、瓦を投て酒店の内に打入ければ、酒店の主大

せんと催しける。宋江が營中には、浪子燕青暗に樂和と商議して云く、今東京には多く花燈を設け、元宵を祝ひ、豐年を祈り、今上皇帝民と樂を同じうし給ひて、洛中洛外甚だ鬧熱なる催しと聞及べり。我足下と形を更めて城中に紛れ入り、共に花燈を見て回るべし、いざ用意を調へ給へと、兩人已に議を定し處に、黑旋風李逵進み入て云く、汝兩人花燈を見んと議したること、我老早より是を知れり、いかんぞ我を誘はざるや。燕青が云く、汝を誘はんは、最易きことなれ共、汝は只禍を好むゆゑ尤も誘引がたし、今榜文を掛て緊しく我們を禁じ給ふにより、城中に出入すること能ず、汝若城中に入て事を惹出さば、非命の死を致すべし。李逵が云く、我此度は誓て禍を避べき間、共に誘引せよ。燕青が云く、已にかくのごとくんば、我肯て汝を誘ん、明日衣巾を換て、旅人の形に出立べし、我汝と共に城門に紛れ入ん。李逵是を聞て大に悦び、翌日旅人の形に出立て燕青を待つ。燕青形を更て旅人の體に出立ち、則李逵を引て城門に臨む。此時樂和は時遷と同往して、先達て城中に入しとなり。燕青は陳橋門よりは入ずして、封丘門よりはや紛れ入り、李逵と共に桑家瓦の近邊に至りける處に、拘欄の内に鑼の響く聲ありしかば、李逵是を聞き、何事にやと燕青を引て群人の内に挨入り、頭を伸して其内を見るに、一個の人三國志を講じて諸人に聞しめ、則ち關雲長が毒箭に中し處を評判して云く、

宋江是を聞て、是則 諸人の存念なり、書籍にも富と貴きとは人の欲する處、貧と賤きとは人の惡む所なりと云なれば、我諸人の形を觀、色を察して全く其意を知れり。宋江が云ふ、縱ひ今諸將は異心を挾む共、我は死とも又忠心を改じとて、翌日宋江再び諸將を集めける處に、大小の頭領等 盡く帳前に至て左右に列座せり。宋江が云ふ、我はもと鄆城縣の小吏にてありしか共、諸豪傑の助けに依て、今日遂に又國家の臣となつて 漸 恥を雪たり、世話にも人となるは自在ならず、自在なれば人に成ずといふことあり、今朝廷より榜文を出して、我 們 が城中の出入を禁じ給ふこと尤 理 なり、我 們は山林に徘徊したる者共なれば、都て其性粗し、若 擅 に城中に入ば、必ず禍を惹出して罪を被り、又聲名を壞ふべし、我等を禁じて城中に入しめ給はざる事、却て大なる幸ひなり、汝諸人自ら能これを察して、忿ることなかれ、若異心ある者あらば、先首を刎て法度を正すべし、必 誤 て上を怨ること有べからず。諸將みな宋江が言を聞て、各 涙を垂れ、一同に誓を立て退きけり。此日より宋江は曾て城中に入ず、只諸將と會して心を慰る斗なり。漸 上元の節も近かりしかば、東京の年例として門々戸々に種々の花燈を懸け、元宵を賞

と榜の上に書たりける。宋江は此よしを聞て、益憂を添しかば、諸の豪傑等都て憤り、各反逆の心ありけれ共、只宋江が心を憚りて自らこれを忍びけり。斯る處に水軍の大將等事を議せんが爲、吳學究を請ければ、吳用則船中に至て、水軍の大將に對面す。李俊、張橫、張順、阮小五、阮小七、皆吳用に對して云く、當世の天下朝廷、信を失うて奸臣權を握り、擅に賢路を塞で非道を行ふ、此度宋公明反國を退治し、大功を立給ひしか共、未だ曾て昇進せず、剰榜文を掛て我輩を城中に入しめず、我思ふに蔡京等四人の奸臣、我等を遠ざけんと圖る、しかじ此勢に乘じ、此處を立去ば可ならんや、願くば軍師宋公明と議し決斷し給へ、宋公明若承引なくんば、則兵を發し砍て出で、立處に東京を打破り、奸臣の首を雙べ見んこと何より易し。吳用が云く、各の述懷せらるゝ處至極理なり、但し我たとひ宋公明に議したり共、とても承引これあらじ、足下必ず先卒爾の事をなすべからず、古の語にも、蛇頭なければ行ずと云ことあり、宋公明同心なき處に、我們のみ反逆を企つる共、何事をか做出さん、若宋公明承引あらば、此事を行ふとも少しも誤あらじ、若宋公明同心なくば、此事を止給へ。六人の大將これを聞て、再び言ず、たゞ心中に煩ひける。吳用は再び營中に歸り、宋公明と閑談して云けるは、宋君梁山泊に居給ひし時は、何事も心に稱て諸將も皆樂みけるに、今日御赦免を蒙りて

起し給ふや、善惡吉凶自ら必ず憂へ給ふことなかれ。時に黒旋風李逵進み出て云けるは、宋君何ぞ此のごとく愚になり給ふや、昔日我等梁山泊に在し時は、上に一人の主あらずして天を怕ず、樂　自ら多かりしに、今日は御赦免、明日も御赦免とて、唯御赦免のみを願ひ給ひ、今却て憂を惹出し、諸人都て鬱悶に逼る事皆自らなす所なり、若再び此を去て梁山泊に回らば、大に樂しからん。宋江罵つて云く、汝禽獸又來て無禮を云や、我們今國家の臣となり、何の面目か是に過んや、然るに汝又梁山泊に回らんとは、天命を知らざる愚人なり、重ねてかくのごときことを云ば、我決して免すまじ。李逵打嘆じて云く、宋君若我言を用ひ給はずんば、後日必ず奸臣等が毒氣を受て悔い給ふこと多からん。諸將是を聞て、一笑を催しけり。呉用等まづ酒宴を設けて、宋江等を慰め、此夜二更の時に至て各退出せり。翌日宋江十餘騎を引て城中に入り、宿太尉幷に趙樞密が館に至て、正月の佳節を賀し、城中を奔走したりしかば、城中の軍民共、群集して見物しけり。蔡太師此事を聞て、早速天子に奏聞し、四方の城門に榜文を掛て、暗に宋江等を禁じて云く、

城外の營中にある出征の將軍等、妄りに城中に入ことなかれ。若事あらば公文を以て命ずべし。擅に城中に入者あらば、軍令に依て罪に行はん。

預かじめ是を担らんとて、遂に天子に奏聞して詔を降し、只宋江、盧俊義、兩人に元旦の朝賀を許し、其餘百六人の輩は、未だ職事を受ざる白身の者共なれば、朝賀を勤むるに及ばず、是に依て元旦には、御禮を免し給ふ間、參内無用と仰ける。獨り宋江、盧俊義は、朝賀の用意を調へて、元旦を待請し處に、此日天子朝を設けて、百官の朝賀を請給はんとの事なりしかば、宋江、盧俊義、各公服を著して待漏院に伺候し、百官と共に天子の出御を待ける處に、天子已に紫宸殿に出御あり、文武百官の朝賀を請給ふ。宋江、盧俊義、列に隨て天子を拜し、各兩班に跪て殿に上ること能ず、只首を擡げ殿上を仰ぎ見るに、諸の文武諸官、各觴を稱し壽を獻じ、未明より午の刻に至て群臣悉く御酒を賜り、各退出したりける。宋江、盧俊義、禁裏を出て營中に歸り、面上に愁る色あり。吳用等諸大將は、宋江が面に愁る色あるを見て、各心中に樂ずといへ共、今日は元旦の佳節なればとて、百餘人の輩宋江を拜し、賀を稱す。宋江は只頭を低て言ず。吳用問て云く、宋君今日朝賀を務て回り給ひ、何の事有てかくのごとく憂へ給ふや。宋江嘆じて云く、我運命拙きゆゑ、遼を破てより大功を立けれ共、諸將皆職を請ずして、尙碌々たる白身なり、唯我と盧俊義のみ小職を受しか共、未だ算るに足ず、是に依て是を憂るなり。吳用が云く、宋君は原來天理を知り給ふなるに、何故樂を忘れて憂を

恭しく申けはるは、日外本師羅眞人我に命じて云く、汝宋將軍に隨つて功を立て、恙なく東京に回なば、再び歸山して老女を奉養し、且道術をも修行せよと、再三是を命ぜり、宋君今日功成り名遂給ふ上は、我久しく逗留し難し、宋君若暇を給はゞ、則今諸豪傑に別れて山中に歸るべし、願くは我心を察し給へ。宋江是を聞て、覺えず涙をそゝぎ、則公孫勝に對して云く、我昔日諸豪傑と相聚りし時は、花の開くが如し、今日又相別るは花の落るに似たり、我向に羅眞人に見えし時、若功を立なば早速公孫先生を還すべしと、約諾しける故、今更留んことは難けれ共、いかんぞ別れを忍びんやとて、いよ〳〵嗟嘆に堪ざりけり。公孫勝又云く、我若半途にして宋君を棄なば、則是寡情ならんが、今日は宋君大功を立給ひし上なれば、我是を去とも、何の不可なることかあらん、只願はくは宋君曲て我望を准へ給へ。宋江猶忍びずといへども留めがたく、此日則酒宴を設けて、公孫勝をむかへ、諸の豪傑と共に別れを惜み、一盤の金銀を餞に送りける。公孫勝これを謝して終日酒を酌み、翌日未明に旅裝束を調へ、宋江等諸英雄に辭して營中を出ければ、宋江等自ら打送て互に涙をそゝぎ、永き別れを嘆きけり。此時正月もはや近くなりしかば、蔡太師を首として、諸の官人共都て朝賀の用意を調へり。蔡太師心中に想道く、宋江等百八人の輩都て朝賀に出なば、天子必ず重く用ひ給はんか、我

は諸英雄が威風凛々として、相貌堂々たるを見て、大に御感悦有て宣ひけるは、汝等心を用ひ力を盡して敵を破り、疵を蒙りし者も有よしを聞き、深く憂に逼けるに、百八人恙なく功を立凱陣せし事、古今稀なる勳勞なり、朕甚だ悦びに堪ざるなり。宋江再拜して云く、臣等皆陛下の洪福に仍て朝敵を退治せしなれば、諸將傷つく者ありといへども、今各無事に歸京し、天顏を拜し奉ること實に主上の威德の致す處、全く臣等が力にあらず。天子此時宋江等が官爵を授んと欲し給ひて、省院の官と評議ありける處に、太師蔡京、樞密童貫兩人齊しく奏して云く、今四方に群賊起て天下未だ安んぜず、若宋江等に大官を授け給はんことは、猶甚だ早し、先宋江を以て保義郎帶御器械正受皇城使とし、盧俊義を以て宣武郎帶御器械行營團練使とし、吳用等三十四人を正將軍とし、朱武等七十二人を偏將軍とし、又金銀を賜て勞を賞し給はゞ、衆皆聖恩に服すべし。天子其議に同じ給ひ、則文德殿に於て、宋江等に官を授け、又金銀緞疋の恩賞ありければ、宋江は頓首して恩を謝し、御殿を退出す。翌日天子錦の袍を一套、金甲一領、名馬一疋、是を宋江に賜り、盧俊義以下の諸將にも都て御賜有しかば、宋江等の諸大將大に是を悦びける。此日猶又文德殿に於て大に宴を設けしめ、宋江等諸將に御盃を賜ひ、三軍迄も皆賞を蒙りける。宋江以下聖恩を謝し奉り、退出しけるが、次の日公孫勝、宋江が營中に至り、

宋江飛雁の詞を筆す

宋江詩を詠じ畢て、益心中に慘み、自ら情を痛しむ。此夜兵を雙林渡の口に屯して、猶心中に燕青が雁を射たることを嘆き、則筆を揮て一首の詞を書く。其詞にいはく、

楚天空闊　雁離群。萬里恍然驚散。自顧影下寒塘。正草枯沙淨水平天遠。寫不成書。只寄得想思一點。暮日空濠曉烟古塹訴。不盡許多哀怨。揀盡蘆花無處宿。嘆何時玉關重見。嘹嚦憂愁嗚咽恨。江渚難留戀。請觀他春盡歸來畫梁雙燕。

宋江詞を書罷て、呉用公孫勝に見せしむ。呉用等詞中の意を見るに、甚だ悲哀憂戚の思ひあり。宋江猶鬱々として樂まざりしかば、此夜呉用等酒宴を設けて、宋江を慰め、已に半夜に至て宴終りける。翌日早天に諸將各馬に乘り、直に南を望で進發す。此時暮冬の天氣にて、景物凄涼たりしかば、宋江終道いよ〳〵憂を添へ、しきりに感歎已ざりけり。扨勅命を承たる征伐も無難に功を立て、歸京のことを奏し、例に依て兵を陳橋驛に屯し、勅命の降るを待處に、黄門侍郎に命じ給ひ、宋江等甲冑を帶しながら、參内を御赦免あり。是に依て百八人、戎裝を著し盛を戴き、東華門より參內し、直に文德殿に至て、徽宗天子に拜禮し、各萬歲を唱へける。天子

今試に箭を放て、空中の飛雁十餘羽を射落しぬと云ければ、宋江嘆じて云く、弓箭は武夫の知る所なれば、何ぞ必しも新めて試んや、我思ふに雁は、もと暑寒の二つを避て江南の地に至り、初春に又回るなり、夫雁は仁義の禽にして、或は二十、或は三十、皆相讓て行を列ね、尊者は前にあり、卑きものは後にあり、豫じめ次序を正して、而後に飛ものなり、雄其雌を失ふごときは、死に至る迄再び配せず、此に依て此禽は、仁義禮智信の五常を備へり、此禽空中に於て友を失ふ時は盡く哀鳴す、是則仁也、一たび雌、雄を失ふ時は再び配せず、是則義なり。次序に依て列をなし、飛時前後を越ず、是則禮なり、預め暑さの至るを知て江南に來り、自らよく其難を避る、是則智なり、毎年秋は南、冬は北、其時に背して來往す、是則信なり、かくのごとく五常を備へたる物、いかんぞ敢てこれを殺さんや、空中一群の雁相列て過るは、宛も我輩百八人のごとし、汝今十餘羽の雁を射たるは、我等が内數人を失ふに似たり、其悲み豈よく堪ることを得んや、汝向後自ら改て、此の如き義鳥を害すことなかれ。燕青此ことを聞て、默々として言ず、大にこれを悔けれ共、其益さらにあらざりけり。宋江悲歎の餘り一首の詩を吟じて云く、

山嶺崎嶇水渺茫　横空雁陣兩三行

九編　巻之八十一

○雙林渡にて燕青雁を射る

此より薊に、一日宋公明凱陣の途、雙林渡といふ處にて、天を仰ぎ見るに、數行の寒鴈次席を亂し、紛々として空を飛び、都て驚きの模樣あり。宋江心中に怪み、夫雁は自ら能次序に依て列正しきものなるに、今かくの如く混亂して空を飛び、都て驚くの意あるは、いか樣奇異のことなりと、只顧奇みける處に、前軍一同に騷動して、奇妙なりと譽ければ、宋江中軍に在て是を聞き、早速人を馳て其事を問せけるに、浪子燕青初め弓箭を學びし時、空を飛雁を射るに一箭も空箭なき由にて、今又試のため空を飛雁を射て、はや十羽あまり射落したるゆゑ、諸軍これを褒て、騷動すと報じければ、宋江聞て、大に嘆じ、今數行の雁次席を亂し驚く意ありしゆゑ、我深くこれを怪みけるに、豈知んや燕青これを射んとはとて、早速燕青を呼ければ、燕青馬を飛せて、宋江が前に跑來れり。宋江問て云く、我今汝が雁を射たると聞けるが、果して此事有や。燕青答て云く、我昔日初て弓箭を學びし時、空中の飛雁を射るに、一箭も誤またざりし故、

ること能はず。遙に殿上を仰ぎ見るに、百官各紫綬珠履にて、觴を擧壽を獻ず。宋江盧俊義は、早朝より階下に坐し、漸く午時に至つて、遙けく天顏を拜し、倶に心中樂しまず。朝廷を辭し、馬に乘て營中へ歸りけり。宋江等是より勅命に依て、江南の方臘を征伐し、大功を顯せども、百八人の豪將追々討死し、其外諸將のをはりまでも、九編目に詳なり。

七十二人を副將軍に封じ、各〻の軍勞を懇に褒賞し給ひ、其外にまた金銀段疋を以て三軍の諸人に賜ひ、此日文德殿に於て大に宴を設けしめ、宋江、盧俊義に錦袍一領、金甲一副と名馬一疋を賜ひ、其他の頭領共にも、錦袍一領づつ外に其功に依て、各〻賜あり。此時宋江諸將と共に聖恩を謝し、文德殿を辭し、西華門より出營中に歸りけり。此日法司、王慶を牢より引出し、東京城中城外を引渡しければ、見物の諸人山のごとく、厭肩疉背或は罵り又は嗟す。彼王慶の父王砉及び前妻牛氏、舅牛大戶等は、王慶が反叛せし始に、已に誅せられければ、今日王慶只一人、法場に引出され、刀劍をぬきて白雪のごとく四方を取かこみ、午時に至つて鑼をならし、犯由牌を讀畢り、重き刑罰に行れぬ。此時人切役は已に王慶が首を梟枷にさらすれば、看人山の如くなり。宋江等は陳橋驛の旅館に回り、各〻太平を賀しにけり。されば冬も已に過ぎ、元旦の節近ければ、宋江は諸將に命じ、朝賀の用意をなさしめけり。此時蔡太師童樞密等は、宋江等諸將朝賀せば、天子厚く用ひ給はん事を恐れて、卽天子に奏して云く、宋江、盧俊義、今已に官職を授れば、是を諸大臣についで朝見せしめん、其餘百餘人はこと〴〵く白身なれば、共に朝賀に及ぶまじと。是に依て百官各〻朝賀の日、宋江、盧俊義も朝服を著し、待漏院にて相伺ふ。天子紫宸殿において、朝賀を受給ふとて、皆階下に侍し、天顏を拜すれども、殿上に陞

ひ、先陳瓘、侯蒙、羅戩に官位を勸め、金銀段疋を賜ひける。日あらず宋江陳橋驛に屯するよし、宿太尉參內して奏すれば、黄門侍郎に命じ、宋江等に勅し、甲冑を帶ながら參內を赦免あり。宋江等一百八人勅命に從ひて、各戎裝盔を戴き、東華門より參內し、直に文德殿に至て徽宗天子に拜見し、各萬歲を唱ける。此時天子宋江等諸將を見給ふに、各錦袍金盔を著し、呉用、公孫勝、武松、魯智深は平服を著し、（按ずるに八將環英葉淸人數の外に在るべきことなれ共此ことと見えず）天顏麗く宣く、朕知卿等征伐に心を勞する事多し、寇賊忽ち平定し、其功古今類なし、其內傷つく者多しと、朕又これを愁ふと。宋江等再拜して奏しけるは、今主上の洪福天に等しく、某等の內傷者有といへ共、今各恙なく淮西を平げ、賊首を擒へ無事に歸京する事、主上の威德の致す所なり、全く臣が功にあらず、今賊魁王慶を闕下に捉置り、勅諚を待て刑を行んと欲す。此時天子法司に王慶を斬んことを勅し給へば、宋江又蕭嘉惠が計を以て城を奪ひ、百姓を安んじ、功有ども誇ず、超然として逃去し事を奏すれば、天子大に稱美し給ひ、省院官に命じ、蕭嘉惠が行方を尋ね求め、京に迎へ重く官爵に封ぜんことを勅し給へば、宋江叩頭して恩を謝す。此時天子又太師蔡景樞密童貫等と議し、遂に宋江を封じ保義郎となし、兼て皇城使を掌らしめ、盧俊義を宣武郎として、兼て團練使を掌らしめ、呉用等三十四人正將軍に封じ、朱武等

かく〔て〕陳安撫は宛州、淮西諸軍の人民を撫し、又錢糧を與へ、窮民を賑せり。抑淮西とは淮瀆の西なれば、南豐の兩所も又淮西と申なり。されば陳安撫は、宋公明に東京に歸る用意をなさしむれば、宋江、先中軍の人馬に陳安撫、侯蒙、羅戩を守らしめ、先起行なさしめ、又水軍諸頭領諸船に駕し、水路より東京に歸し、我軍の返るを俟しめ、自ら數日止り、此度王慶を敗て諸將の功有ことを、蕭讓に文を作らしめ、金大堅に碑石に彫しめ、南豐城の東、龍門山の絶頂に立しめけるが、今に古跡を存すとぞ。此時降將胡俊、胡顯、酒宴を設け、宋先鋒に餞別す。後々宋江朝廷に回り、兄弟が歸降し大功を立し事を奏聞せしかば、天子御感有て、彼兄弟を東川の水軍團練使に封ぜられたり。宋江數日止て、用意調ひ、兵馬を五隊に分ち、吉日を得て南豐を發駕す。軍士等所々を鎭守せしむる者數萬人、古郷に歸る者數千人、其餘は宋江に從へり。十餘萬の人馬を領し、東京に歸る其道すがら、聊も犯すことなし。百姓老を助け幼を抱き、香を炷燭を照し迎へ送る。日を經て東京に著く。例に任せ陳橋驛に軍馬を屯し、聖旨の下るを相伺ふ。是より向に陳安撫等の兵馬城中に入て、各參內し奏聞しけるは、宋江等百たび戰て百たび勝つ、已に淮西を亡し、其功古今に罕なり、今已に京に回り來らんこと數日の內ならんと。天子大に悅び給

縣も雲を披て、再び天日を拜する心地をなす。此時所々を守りし頭領も新官と交代し、各南豐に至りしかば、宋江太平宴を設け、衆將を慶賀し、三軍を勞ひ、又公孫勝、喬道淸をして七日七夜の醮事を成しめ、陣中にて亡びし多くの人の追善供養をなさしめけり。此時孫安軍中に有て俄に病て死しければ、宋江大に悲み、龍門山の側に葬らしむ。されば喬道淸は十分に痛哭し、宋江に告げ、某孫安と同鄕にて幼年より交り至て厚し、彼もとは父の仇を報ん爲罪を犯し、身を賊中に陷入りしか共、遂に先鋒の寬仁にて、朝廷の臣と成り、後々は出身をも成べきに、今中道に死せり、某もと邪を捨て、正に歸し、麾下に加はるは、公孫先生の美意と、孫安我が迷を示しける故なり、然るに彼今日已に死し、我獨榮耀を受るに忍びず、先鋒の厚意心に銘じ、骨に徹し、忘るゝことなし、願くは田野に回りて、殘生を過さんを先鋒免し給へと乞へば、馬靈も是を聞き、某も願くば、喬道法師と同じく去ん、と乞へば、宋江慘然として云く、我賢弟の功を奏し、重く封賞を請しめんと欲す、死生は悉く天命なり、孫安の死を以て富貴を辭せんやと、再三止るれ共、二人心を決し去ん事を求め、宋江爲方なく餞別の宴を催し、永く別るを惜み、五十兩の銀子兩人に贈りけれ共、曾て請ず。公孫勝傍に在しが頭を低てものいはず。喬道淸と馬靈は、宋江其外諸人に辭別し、又公孫勝を來り拜し、陳安撫等にも相辭し、飄然とし

宋江太平宴
献酬を

○宋江寇を剿功を成す

次の日宋江自ら王慶の宮中に至り、珍寶器物を拾收め、龍樓鳳閣及び、法度の衣服器物悉く燒拂ひ、使を雲安に馳て張横に命じ、城中の行宮を燒拂はしむ。こゝに至て王慶の巣穴殘なく滅亡す。扨も戴宗は荊南に至て陳安撫に微細を語れば、陳安撫も大に悅び、自らも又表を書し、戴宗に與へければ、早速東京に至り、宿太尉の府中に呈し、太尉翌日奏聞するに、徽宗皇帝龍顏大に悅び、勅して王慶は京に引渡し、段三娘を始、其餘の賊は淮西の市に斬り、又亂に遭狼狽の人民には多く米錢を賜て賑し、功有て討死せし諸將には各追號を賜ひ、州府の守りなき所へは新官を遣し、征伐して功有る諸將は歸京の後、賞有べしと勅言なれば、戴宗是を承り、急ぎ囘りしに、陳安撫は南豐城に入り、胡俊は弟胡顯を招き降し、城地錢糧を奉れば、安德州の賊人も降り、刄に血ぬらず隨ひしは、胡俊が功なり。是より十餘日をへて東京より勅使來れば、陳安撫、宋公明、勅諚を承り、次の日勅使は東京に囘る。扨軍士に命じ、段三娘李助等多くの賊徒を引出し、南豐の市上に於て斬らしめ、首共を梟し、衆人に見せしめ、陳安撫、宋江は胡俊、瓊英、孫安が功を記さしめ、榜を出して百姓を安んぜしめければ、王慶が掠し八十六ケ所の州

等を悉く綁けり。原來船を漕しは、混江龍李俊、櫓を遣ふは童威、其餘の漁人は皆水軍の頭領共なり。宋江の命にて、前月より多く水軍を領し、賊軍の水兵聞人世崇、胡俊等と戰ひしが、大に打勝て聞人世崇を切殺し、胡俊等を生捉しが、胡俊が貌凡ならざれば、李俊義に仗て是を赦し、胡俊又其恩を感じ、李俊と同じく雲南城の水門より忍入り、城主の將施俊を殺し城を奪ひ、又李俊思へらく、王慶敗走せば、雲南城、東川へ迯れ來るべしと。張横、張順に城を守らしめ、自ら三阮、二童と漁人の貌となり、此處に相待しに、果じて今日捉へしかば、則皆々雲南城を守らしめ、李俊は降將胡俊と同じく、王慶を押監し、其主從を引しめ、南豐に赴く途中にて、南豐落城を聞しかば、帥府に至て、宋江に參見す。宋江王慶を打もらし憂へ在し處へ、此報を聞て大に悅び、李俊が大功を稱美せしかば、李俊則降將胡俊を見えしめ、其功を述しかば、宋江其姓名を問ひ、雲南を奪ひし事を賞美し、又衆將と東川安德を攻る商議をなす時、胡俊進み出て、東川の守將胡顯は某が弟なれば利害を說下すべし、東川下さば、安德は風を望で來り降らんと。宋江悅び、李俊と同じく胡俊を東川に遣し、安撫せしめ、又戴宗をして捷を奏する表文、宿太尉へ呈する書札を持しめ、陳安撫の軍前に遣しけり。

動き得ず、近侍一人勸て、御袍を脱去て、東川に赴き給へ、遲らば好らじ。王慶尤とて、冲天の金幞頭を脱去り、日月袍、碧玉帶、雲根靴を捨て、巾幘草鞋と替へ、又近侍等も衣甲を捨て、喪家の狗のごとく、小路より東川に忍びて行に、人馬疲れ腹中飢けれ共、百姓等亂を避け、市井村坊人烟なく、鷄犬の聲絕たれば、飲食を求ん處なし。從兵漸去て僅に只主從廿騎ばかり、晩に雲南近き開州に至りしが、此處一つの大江あり。源達州の萬頃池より出で、淸江と名く。王慶船を求んとするに、向の岸邊蘆深き處に、漁船數々あり。中冬なれ共、日暖に風微にして魚を捕り、又は網を晒すもあり。中流に一雙の漁舟有り、酒を飲醉て唄ひ、或は猜拳して樂み在ければ、王慶是を見て、嘆じて云く、我今日かく困で、彼等にしかずと。近侍叫で船を呼び、我等を渡せ、錢を與べしと。彼漁人聞て、酒椀を下に置き船を漕岸に著け、王慶を見る事兩三回、早く來れ〳〵と云ふ。王慶漁人を見るに、身の丈八尺眉濃眼大にして、聲鐘の如し。此時近侍等王慶を馬より下し、先船に乘れば其儘竿を以て岸をつき、船早く一丈餘り出れば、岸に殘る近侍等忙てゝ、いかんぞ我等を乘ざるや、早々船を戻せと叫べども、更に答ず。中流に搖出し、竹竿を抛捨て、雙手に王慶を捉へ、船板の上に扭付れば、王慶大に驚きもがけども、遂に生捉れぬ。魚を捕網を曝せし漁人等は、此體を見ると等しく、岸に飛上り、王慶が近侍

夫婦に逢ひ、此事を語ければ、兩將馬を飛し南豊に向へりと告ければ、宋江直に大軍を領し、南豊城を十重廿重に取圍み、張清等は孫安を扶け、東門より攻入ば、宋江の大兵も東門より切入り、賊徒を切拂ひ、早く宋軍の旗印を所々に建て、文武の僞官を切盡す。段三娘は百餘人の内侍を從へ、西門より雲南へ落んと計り、馬上に兵器を取て馳出で、後苑にて瓊英出合ひ相戰ひ、石子を以て打落しけるを、軍士忽ち索を掛く、後宮の女共井に投じ、又自殺する者多かりし。其餘は宋軍に切殺さる。軍士等段三娘を宋江が陣前に引渡せば、宋江悅で、瓊英が功を賞し、急に又王慶が行方を尋しむ。此時王慶は一方を逃れ、南豊城の東迄至り、城中喊の聲に驚き、北の方雲南を差て逃れ行く。從ふる數百の鐵騎は、常に親近の軍士なれども、盡く迯行き、漸百騎に足ず成にけり。正に是「養士空百日用在此一朝。宜哉逐腥者。腥盡永遁逃。」王慶近侍に向ひ、われ今敗北すれ共、雲南、東川、安德三ヶ所の城地あれば、興復するに足れり、恨らくは、迯去し近侍等は常々我大祿を受し者共なり、我宋兵を退けて後、彼等を尋出し、醢にせんと馬を馳せ、天明に至り、向を望むに、雲南城近く見えければ、王慶馬上に喜び近くに、近侍大に叫んで、大王見給へ、城上皆宋軍の旗なりと。王慶驚き能見れば、旗の面に征西宋先鋒麾下混江の九字見え、餘は風に飜て見えず。王慶、今惣身悚縮靡れ、半時許

扈三娘、孫立等出て切立る事、瓜を割菜を切ごとくなれば、賊兵四方八面に散亂し、打るゝ者幾萬をしらず。盧俊義、楊雄、石秀を從へ、中軍に亂入り、方輪を切殺し、王慶を捉んとする時、金劍先生李助、馬上に劍を振こと掣電の如く、盧俊義も敵すること能ず。公孫勝遙に見て、咒文を唱へ、疾と叫べば、李助が劍手中を離れ、飛で地上に鏘地と落ければ、盧俊義飛込み、李助を只引捉へ、馬より摑で輕々敷拏來り、軍士に縛せ、猶中軍を切散せば、十餘萬の大兵六七分は切殺され、降參の者三萬餘人、劉以敬、上官義も焦挺に打れ、李雄は瓊英に石に打れ、畢先は王定六に突殺れ、僞尙書金吾將軍等逃るゝ者なく、只王慶を見ず。宋江先一度軍を收め、張淸、瓊英に五千の兵を添へ、南豐に向しめ、戴宗を南豐に遣し、孫安が消息を聞しむ。神行の法にて半時ばかりに歸り來り、孫安は君の命を承り、自ら王慶が部下に扮し、欺て城を奪んとせし處、却て賊に知られ、城の東門中に阱穴を掘り、わざと欺れたる體して、東門を開き迎へしかば、孫安に從ひし梅玉、金禎、楊芳、畢勝、潘迅、馮昇、胡邁等五百の人馬を引き、皆我先にと門内に進み入しに、都て穴に落入しを、左右の伏兵一度に起り、長鎗利劍を以て五百の人馬散々に突殺す。され共孫安は幸ひ後へに在て逃れければ、再び勇を振ひ、城門に進み、殘兵に阱を埋めしか共、賊兵孫安が猛勇に恐れ遮ること能ず。某此趣き聞て、歸る途に張淸

其音山河を裂がごとし。山下の方より數萬の軍兵湧出す。王慶急に陣勢をなし、望見るに、旌旗甲胄皆五色を分つて八陣の法、金鎗銀戟林の如く、又一行の斧鉞を並べ、三本の銷金傘の下に、三疋の繡鞍馬の上に三人の英雄を坐せしむ。左に生冠を戴き、鶴氅を著せしは、入雲龍公孫勝、右に綸巾を戴き羽扇を取しは、智多星吳用、中央に照夜玉獅子に跨りしは、忠あり義あり、虜を平げ寇を退る、征西正先鋒山東の及時雨宋公明自ら全身結束し、手に錕鋙の劒を採り、中軍を掌握す。左に神行太保戴宗有て、飛報を主り、右に浪子燕青有て、機密のことを主り、後に三十五人の猛將馬上に長鎗を挺へて扣たり。左右に畫角を吹金鼓を鳴らし、陣勢十分に備て嚴格なるは、鬼神も敵抵べからざる形勢なり。草頭天子王慶は李助と同じく、宋軍の軍威を見て深く驚歎しける處に、宋軍鬨を發し突來る程に、其勢ひ破竹のごとく、賊將と戰を始るに、宋將の尖なること電のごとく、林冲賊將柳元を切落し、黃信一劒に潘忠を切殺せば、賊陣忽ち亂れ立ち、王慶急に兵を退んとすれば、宋陣變じて、忽ち長蛇の備となる。王慶軍を退ることも能はざれば、李助と計つて軍士をして戰はしむ。楊雄、賊將段五を切殺し、石秀は丘翔を切殺し、賊軍敗軍すれば、王慶いかゞせんと馬を止しに、又一聲の砲響き、魯智深、武松、李逵等八人の猛將向ふ故、李雄、畢先を出し戰はしむれば、又右より張淸、王英、瓊英、

時に宋軍哨路の兵、塵土を起て馳來る。眞先に沒羽箭張淸、左に瓊英、右に葉淸あり。賊軍より劉以敬、上官義の二將相迎へ相戰ふ。張淸、瓊英、佯り負て迯けるを、賊の二將追かゝれば、賊兵高聲に、先鋒追給ふことなかれ、石手を打の名人なりと云を聞き、馬を止める時、龍門山の後より、砲響き、李逵、樊瑞、項充、李袞五百の歩兵を引馳出す。劉以敬、上官義兵を招て突んとせしに、李逵等山坡の後に走り行く。此時王慶、李助が大軍已に到著し、兵を合せ、李逵を追ふに形を見失へば、平原曠野の地に止め、李助令して陣を列ねし處に、又山後に砲響き、山南の一路より一簇の軍馬馳出し、眞先に進むは、王英、孫立、張淸、五千の歩軍を引て切向ふ。王慶敵を迎へんとせし處、眞先に進む女將扈三娘、顧大嫂、孫二娘なり。各五千の歩軍を從へ、賊軍の右に扣へたる柳元、潘忠と戰ひければ、南邊の王英、孫立、張靑は賊軍の左に扣へし、李雄、畢先と戰ふ。皆々五六合戰ひて、都て東へ逃走るを、王慶大に笑て云く、宋江が兵は甚だ柔弱なるに、我兵今迄いかゞして負たるやとて、大兵を驅て五六里ばかり追懸しに、忽ち鑼響き、李逵、樊瑞、項充、李袞、林中より再び馳出れば、後に魯智深、武松、焦挺、劉唐等二千の兵を引出來れば、上官義兵を招き相迎ふ。李逵等は敵しがたき體にて、漸五六合にて林の中に迯入るを、王慶是を見て、兵を進め追かけしむ。此時向うの山に轟天炮響く、

二百輛斗の車有り。三四百人の軍士番をなして在けるが、兵の至るを見て、各喊を作り迯去ければ、縻貹立寄見るに、十輛ごとに、一つの段子を積し車あれば、賊兵等是を見て、爭ひ奪取を、縻貹叱て止んとせし處に、岡上に鑼響き、火箭火炮雨の如く射下せば、賊兵驚き迯んとする間もなく、柴薪より燃上り、硫黃燄硝に傳ふ。火は雷のごとく、天も摧け、地裂るごとく、賊兵都て迯ること能ず。縻貹も終に火炮に打殺さる。此時施恩等三路より切來れば、賊兵討る者一萬人、火に焦さるゝ者數しらず。天明に至て、柴進兵を李應と合せ、捷を宋先鋒に報ず。宋江大に悅び、則大兵を進んと、帳に陞て令をなせば、諸將愼で受領し、大兵を進ましむ。賊人王慶は水軍總管、聞人世崇等を水路より進ませ、雲南州の兵馬都監劉以敬を正先鋒とし、東川兵馬都監上官義を副先鋒とし、南豐の統軍李雄、畢先を左に從へ、安德の統軍柳元、潘忠を右に從へ、統軍大將段五、御營使、丘翔を合後とし、樞密方翰を中軍の羽翼とし、王慶自ら文武の百官を從へ、李助を元師とし、大兵を領し、十里の外迄攻寄たり。

○王慶江を渡て捉る

賊将麋貹
糧草を焼ん
として却て
火攻に遇ひ
戦死す

黒雲墨のごとくなれば、柴進は日暮るを見て、急雨來らば糧草を濕すべしと、幸邊に數百間の空屋有ば、糧草の車をこゝに推入しめ、方に飯を食せんとするに、薛永夜廻りして敵の奸細一人を捉へ來れば、柴進彼を拷問するに、彼者云く、縻貹精兵を領し、今夜二更に宋兵の糧草を燒んとて、今龍門山に屯せりと。李應聞て、此機に賊人を切盡さん、と云を留て、柴進が云く、縻貹は十分の英雄なれば力を用べからず、某少しく計を施し、唐斌の仇を報はんと、數輛の糧草火炮を、李應に三千の兵を添へ、潛に他所に運ばしめ、數車の柴薪を西南の風下に竝べ置き、又百餘輛の空車に只少の糧米を積み、下には多く硫黃焰硝の火藥を隱し、施恩、薛永、穆春、李忠に二千の兵馬を添て、岡の東に伏せしめ、單廷珪に兵馬二千を添て、岡の南に伏しめ、柴進自ら魏定國と三百の歩兵を領し、各火種を帶しめ、樹林の茂みに待けるに、二更の頃縻貹は、二人の副將と一萬の兵を領し、旗を伏せ、鼓を止め、高岡の邊に至て伺ひけるを、單廷珪早く是を見て、軍士をして火炬を燒しめ、自ら馬を出し鎗を挺て、縻貹と戰ふ事五六合、佯り負て岡下に迯れば、縻貹は勇有て計なき人故、逸參に追來る。此時薛永、施恩、岡の南に火炬の光有を見て、李忠、穆春と同じく一千餘騎を兩隊となし、西南兩所の路を遮りぬ。賊兵は

め、大兵の後へに隨はしむ。其夜龍門山の南なる高岡の下に屯せしに、此夜東風大に起り、

ずと答ふ。宋江深く心中に嗟歎し、回て諸將に語れば、各奇士なるを感慨せり。晚方戴宗回り告けるは、陳安撫の答を告げ、宛州山南いまだ平定せざる處をば、陳安撫、侯蒙、羅戩と計り、林冲、花榮等をして平定し、又朝廷より、新官追々彼地に著あれば、近日陳安撫此地に參著あるべしと。扨も宋江荊南に軍務を綜理ふこと五六日、病全く平癒せり。此時陳安撫が兵馬到著あれば、宋江是を城中帥府に請ふ。此時山南の守將史進等も新官と交代して、此地に到著すれば、宋江は陳安撫に乞て荊南を鎭守せしめ、自ら大兵を引て、王慶の巢穴を攻取んと、南豐を望んで進發す。此時百八人の英雄悉く相揃ひ、河北の降將孫安等十一人有り。其勢都て二十餘萬、頻に軍に勝ち、兵威大に相振ふ。至る處の地方少しも犯すことなければ、賊人風を望で降參すれば、日を得て、大兵南豐の界に至る時、ものみの探馬回り告けるは、賊人王慶、李助を統軍大元帥とし、雲南、東川、安德、三所の兵を助とし、八萬騎を先陣とし、王慶自ら劉以敬、上官義等、數十人の猛將を從へ、十一萬の雄兵を領し拒ぐと。宋江聞て、彼等城を傾け攻來らば、何の計を用ん。吳用が云く、今我兵を數隊に分ち、彼等をして應接せん暇なからしめんを要とす。宋江が云く、實に然りとて、則兵を數隊に分つて、先李應、柴進、單廷珪、魏定國、施恩、薛永、穆春、李忠に五千の人馬を領ぜしめ、糧草火炮を數輛の車に積し

て在しが、城兵切て出ると思ひ、小口を退けしに、蕭嘉惠高聲に事を述るを聞に、倉卒にて禮を述るの間なし、早く城に入給へとある故、吳用兵を引て押入り、東西南門の軍士及まじきを料り、盔を卸で降參し、諸門に宋兵を迎入る。只縻貹は勇猛にて切拔逊失けり。吳用人を遣し、宋江に始末を告ければ、大に悅び、病の痊る事七八分、自ら雀躍し衆に扶けられ、荆南城中に入り、帥府に坐し、先百姓を保じ、軍卒を賞し、自ら蕭嘉惠を上座に請ひ、拜して云く、壯士の豪擧他人の及ぶ所にあらず、刄に血ぬらず、城地を復し、生靈を保ち、我三人の兄弟を救ひ給はる、此恩忘るゝ期あらじと。蕭嘉惠、禮を還して云く、此某が能ならず、衆軍民の力なりと。宋江此語を聞て、益敬伏し、先酒宴を設け、饗應し、自ら盃を採て、蕭嘉惠に勸めて云く、元より足下の鴻才、茂德何人か仰がざらん、某朝廷に奏問し、必ず君を高官となさん。蕭嘉惠答へて、某功名富貴の爲に此擧を爲にあらず、正に今讒人志を得て、賢良の屈害せらるゝこと數なし、某ごときは官守の責なく、閒雲野鶴何れの天にか飛べからざらんと說ければ、宋江始め歎ぜざるはなし。此日宴散じ、蕭嘉惠を止れ共辭し去ければ、次の日宋江、戴宗を使とし、捷を陳安撫に報ぜしめ、自ら禮物を持しめ、蕭壯士の寓居を訪ふに、戸を閉て答ふるものなく、隣家の紙舖にて尋れば、蕭先生は今朝早天に、琴劍書囊を童子に負しめ、去處を知ら

事を做がたかりしに、只今宋兵頻りに城を攻め、百姓等恐れる色有を見、又蕭讓等の義士を枷號を見て、且怒り、機會こゝに在て寓居に回り、童子を呼で墨を摺しめ、隣家の紙鋪にて、厚紙を求め、筆を取て數枚の書を認め、夜に入て府前府後に撒ば、次の日彼此にて拾ひ、城中に流傳す。其文、

城中都是宋朝良民。必不肯甘心助賊。宋先鋒是朝廷良將到處莫敢攖其鋒。手下猛將百八人情同股肱。轅門外枷號三人。義不屈膝。宋先鋒之忠義可知。今日賊人若害此三人。城陷之日。玉石共焚。城中百姓欲保命者隨我殺賊。

此落書の事を梁永聞て、緊く城門を守らしめ、宣令官に命じ査問せしむ。此時蕭嘉惠寶刀を懐にし、高聲に彼文句を唱へ馳めぐり、宣令官が馳通るを見て、駈寄て首を打落し、百姓共我に從へ〳〵と呼れば、皆此人の德は知り、守將は常に百姓を虐れば、忽ち合體する者數百人、同聲相應じ、暫時五六千人集れば、蕭嘉惠馳て帥府中に入り、梁永始め男女悉く切盡し、此時はや其勢二萬に餘れば、蕭讓等の縛を解き、膂力ある軍士に負せ、梁永が首を提げ北門に至り、衆民に下知して、賊將馬彍を殺さしめ、門を披き吊橋を下さしめしに、吳用此時北門を攻

を望み、高聲に呼り、蕭讓等三人を早く返すべし、若遲延せば此城を打破り、民百姓まで善惡の論なく、屠盡さんと叫ばしむ。當城の主將梁永は、副將等と鎭守して在けるが、此日靡貹、馬彏が蕭讓等三人を生捉來ると聞き、元より聖手書生の大名を聞及べば、彼等を降參せしめんと、自ら其綁を解き、歸順せんことを勸めしに、三人罵て、無智の賊、夢にも我等三人が膝ぶしを地に付んことを思ふこと勿れ、速に切れ、追付け宋先鋒此城を破らば、汝等鼠輩の骨を碎き萬段ならん、と呼れば、梁永怒て、汝等早く兩段とならんと望共、我わざと慢々地擺布んとて、軍士に三人を杖しめ、轅門の外に枷號しむ。此時三人は賊を罵つて止ず。城中大勢立寄て見る內に、壯士一人姓は蕭、名は嘉惠と云者、城南の街、紙舖の西隣に寓居せり。其高祖蕭憺は南北朝の時、荊南の刺史たりしが、或時洪水堤を崩し、殊に甚しき雨にて水壯なれば、一言を以て水を退かしめ、堤を成し、此年又大に實り、一莖六穗を生ずと、此に字を取て嘉惠を名とす。此時荊南に遊びしが、荊南の人其先祖より德あるを以て、十分に敬重す。嘉惠元志氣高く、力萬人に勝れ、武術に達し、甚だ義氣深く、王慶亂をなし、荊南城を攻し時も、守城の將に計を獻じけれ共、用ひざれば、空しく王慶に奪はる。殊に令を下し、城中の人百姓迄他に出る事を許さゞれば、是非なく此嘉惠も城中に止り、日夜賊を討ことを思へども、一人にて

病に染て、軍務は呉軍師掌れり、と告ける故、喬道清、馬靈等に西京城を守らしめ、自ら大兵を引て荊南に向ひ、宋江の陣に著しぬ。

○小旋風砲を藏して賊を撃つ

神醫安道全の療治に依て、宋江少しく病痊るに、盧俊義に面會し、大に悦びける處に、軍士報じて云く、唐斌は蕭讓等を送行く道に、荊南の賊將糜賍、馬彍が兵馬に出合ぬ。是宋江病に臥す虚を襲んと、糜賍等が計る者なり。唐斌等彼二將に對し能戰ふと雖も、小勢なるに彼は多勢なれば、糜賍に討れ、蕭讓、裴宣、金大堅は皆生捉たり。賊勝に乘て攻來りしが、盧俊義の大兵至るを聞き、只生捉をのみ引て去り候と。宋江聞て、聲を放て、蕭讓等が命休すべしとて、病勢始のごとく沈重なり。衆將皆來つて相慰む。盧俊義問ふ、蕭讓等はもと何地に行なるや。宋江涙に咽ながら話しけるは、蕭讓等我病を問んとて來り、又豫て陳安撫の命にて碑石を勒せん爲、宛州に赴く故、唐斌に一千騎を添て送らせしに、料らず今の次第なり、賢弟何卒糜賍、馬彍を捉へ、仇を報じ給へと。盧俊義領承し、北陣に至り、呉用に見え禮を述畢り、蕭讓等が捉へられし事を語れば、呉用駭て、盧俊義と議し、衆將に城の四面を攻しめ、雲梯に上り、城中

殺しけり。喬道清此ことを陣中にて聞き、扶け來て、神水三昧の法を行へば、空中黒氣發り、瀑布と變じ、彼妖火を消滅ば、賊將妖術敗るゝを見て、馬を回し逃るを、喬道清追著き、劍を揮て兩段となす。賊兵此時大に敗北し、躓き倒るゝ者五百餘人、喬道清大に喝し、降る者は助ん、背かば鏖にせんと呼れば、賊兵刀戟を捨て拜伏す。喬道清殺を止め、本陣に回り、盧俊義にかくと告れば、大に悦び、其功を稱美し、降參の賊將に妖術者の姓名を問に、彼者寇威と申妖火を發し人を燒故、世に稱して毒焔鬼王とす、王慶を扶け、惡行をなし、此度自ら請て相向へりと。扨も城中には賊將龔端、奚勝、救の兵破れたるを見て、堅く守て城を出ず。一夕喬道清法術を以て黒霧を起し、西京城を遮り咫尺も辨ず、面を對すれ共、誰なるを知らしめず。此間に雲梯飛橋を思ふまゝに城の四方へかけ、城垣より越入り、合號の砲を宋陣に放つ時、重霧忽ち晴たり。宋兵都て火種を取出し、火燵を燃列ね白晝の如くなれば、城中の軍士大に駭き、惣身麻る如く一寸も動き得ず。此時宋兵散々に切立れば、龔端、奚勝、其外多く亂軍に討取れ、賊將降參する者三萬人、殺死の者數しれず。盧俊義城に入て榜を出し、百姓を安んじ、喬道清が大功を記し、三軍を賞勞し、馬靈を使として、宋先鋒に捷を告けるに、其晩に歸り來て云く、宋先鋒荊南の軍、南豐の救兵を破り、賊將謝中を生捉にす、然れ共、戎事に苦勞の積りしにや、

下衆人に與へ、各谷口より切出で、本陣に歸りければ、盧俊義大に安堵なしける處に、王慶新に僞都督杜壆に十二人の猛將二萬の兵馬を添て、伊闕の城を救はしめ、已に三十里外に著せりと、探馬報じける故、盧俊義則、朱武、楊志、孫立、單廷珪、魏定國、喬道淸、馬靈に二萬の兵を添本陣の前を守らしめ、賊兵の城中より攻來るを防しめ、解珍兄弟、穆春、薛永に陣中を守らしめ、自ら二萬の兵を引て、杜壆が兵を迎んと龍門關の西十里に陣取せしに、山下に金鼓の響き、賊將近く押寄せ、賊將衞鶴眞先に馬を寄る。宋軍より山士奇迎へ戰ひ、衞鶴を突殺せば、賊將酆泰大に怒り、山士奇と戰ひ鐵簡を舞し、一簡に山士奇が頭を打碎く、卞祥走り來て、酆泰を切殺す時、主師杜壆兩將を失ひ、大に怒て駈來れば、盧俊義自ら戰ふこと五十餘合、孫安扶んと馳寄れば、賊將卓茂狼牙棍を以て支る處に、孫安一劍に卓茂を切殺し、杜壆の後より右の臂を切落せば、忽ち馬より落けるを、盧俊義一鎗に突殺し、大に勝を得たる處に、賊將一人出來り、戰はせず、口中に念咒すること兩句、劍を拔き正南に向ひ切付れば、賊將の口より火を噴出し火焔忽ち盛にして、宋軍を燒來る。盧俊義驚き避る間もなく、從兵大に亂れ、頭を燒髮を焦され、金鼓刀鎗を捨迯れけれ共、燒殺さるゝ者五千餘人、盧俊義大に敗軍し、辛くして逃れしが、卞祥後へにおくれ、賊人の火にて總身焔火となり、馬より落しを、賊兵亂れ突に

楊志孫安卞祥が
二千の兵馬谿陞谷
にくるしめらる

兵西京に進發しけるに、方豊の賊將武順、城を獻じ降參し、其外宋朝に歸降の者多ければ日を經て西京城三十里伊闕山の下に至て屯し、城中の動靜を伺ふに、主帥は僞宣撫使龔端及び、統軍奚勝等猛將數人を從へて鎭守す。奚勝は曾て陣法の玄妙を極と。盧俊義、朱武と計て循環八卦の陣をなして待處に、奚勝は李藥師が六花の陣をなす。朱武又陣法に達すれば、忽ち六花の陣を打破り、楊志先軍中に切入れば、奚勝等北を望で逃けるに、孫安、卞祥伊闕山の下に追至る時、山坡の後に金鼓を打ち、賊の伏兵一萬の大兵一度に起り、孫安勇戰して賊の猛將二人討取しが、一千餘騎の宋軍敵の計に陷り、深谷の中に驅入らる。此深谷は四面石壁にて外に路なく、賊兵木石にて谷口を塞ぎ、龔端二千の軍馬を以て谷口を圍みけり。盧俊義は龍門關を奪ひ、賊兵を切こと一萬餘人、され共楊志、孫安、卞祥等が軍勢見えざれば、解珍等を尋しむるに知れず。次の日伊闕山の東嶺に上り、遙に山嶺の西を望に、深谷中に一簇の人馬幽に見えければ、山つゞきに山住の家を尋て聞に、𡺸㟝谷と名け、一條の道あるのみと。依て案內を賴み、解珍兵を引き、鄒淵、鄒潤の兵も倶に賊兵を追拂ひ、木石を除け、谷中に進み入るに、鳥ならでは通ひがたき幽谷に、楊志、孫安、卞祥一千の軍馬こゝに厄められ、各樹下に坐し、死を待の外なかりしに、解珍等が人馬來るを見て、蘇生せし心地なり。解珍攜へ來りし乾糧を、楊志以

十二人の猛將二萬の軍馬を添て、荊南を救はしめ、龔正に二ヶ所の兵粮を運送せしむ。宋江令して、李讓は賊中の勇將、部下にも勇將多し、尋常に見るべからず、と嚴令し、次の日秦明、董平、徐寧、呼延灼、張清夫婦、金鼎、黄鉞等二萬の兵馬を以て紀山の下に押寄れば、李讓は馬彊、馬勁、袁朗、滕戣、滕戡を左右に從へ、二萬の兵を引て山より切下る。兩軍金鼓喧く、彩旗風に翻へり、賊將袁朗眞先に馬を出しけるを、降將金鼎、黄鉞、迎戰ひ、袁朗、金鼎を討取ける故に、黄鉞怒て、袁朗を討んと戰ひけるが、黄鉞も終に生捉れ、秦明進で相戰ふ。女將瓊英頭に金翠の鳳冠を戴き、紅羅の戰袍を著し、戟を拈るを見て、賊將滕戣陣前に出大に笑て云く、宋江等は竟に是草寇なり、軍中に女を用るやと、三尖刀を輪し瓊英と戰ふに、女將佯負て迯ければ、滕戣大に喝て追ふ時、石子を飛し鼻梁を打れ、滕戣馬より落るを瓊英馬を囘し、唯一戟に突殺せば、滕戡兄を殺され切蒐るを、呼延灼來て相戰ふ。主帥李讓、滕戡に誤あらんと軍を收め、雙方先引取ける。翌日吳用が計にて、魯智深、武松、李逵等十四人、山下の小路より山の後に廻り、裏手より山寨に攻入しめ、魯智深竟に李讓を討取り、袁朗は火炮に中て死し、馬勁、滕戡亂兵に討れ、馬彊のみ迯れ、賊軍大半討れ、紀山忽ち落去しければ、宋江山に上り、金銀粮米を取て三軍に分ち與へ、火を以て山寨を燒拂ひ、魯智深以下の功を記しむ。此に盧俊義は、大

八編　巻之八十

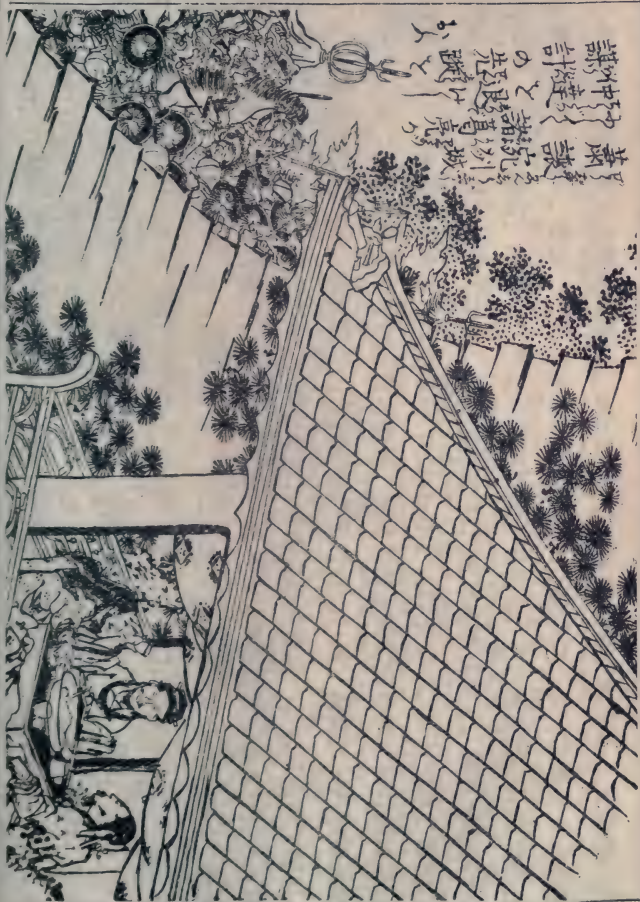
○宋江大に紀山軍に勝つ

宋江勅命に依て、呉用と商議に及ぶ處に、盧俊義及び河北の降將等、各西京に向んと乞ければ、宋江悦で盧俊義を大將として、二十四人の猛將五萬の軍馬を添て、西京に向はしむ。其諸將は副軍師朱武、楊志、徐寧、索超、孫立、單廷珪、魏定國、陳達、楊春、燕青、解珍、解寶、鄒淵、鄒潤、薛永、李忠、穆春、施恩、降將喬道淸、馬靈、孫安、卞祥、山士奇、唐斌なり。次の日宋江に辭し、各西京に進發す。扨宋江は史進、穆弘、歐鵬、鄧飛に二萬の軍馬を添へ、山南の城を守らしめ、自ら多くの將を引き、其勢都て八萬餘騎、荊南に向ひ、毎日行こと六十里にして陣取し、過る所少しも犯すことなし。兵馬已に紀山の地に至て屯せり、紀山は荊南の北にて重鎭なり。山上に賊將李讓三萬の兵馬を領し鎭守す。是李助の侄にて、王慶、宣撫使に封ず。此時李助に委しく告れば、大に駭き、王慶に奏すれば、王慶大に怒り、宋江、水滸の草寇いかんぞ猖獗なるとて、都督杜壆に十二人の猛將二萬の兵馬を以て、西京を救はしめ、統軍謝宁に

此心中に思へらく、此又蕭讓が計を以て強敵を退くることを委く語れば、宋江且悦び且驚き、心中に思へらく、此計妙なりといへ共、賊人もし是を曉らばいかんがせん、遂に是秀才の見識なりと。宋江又庫中の米粟を取出して、窮したる百姓を賑はし、二三日を過て軍務已に終りければ、呉用と商議して荊南を打んとせし處に、忽ち陳安撫の使者來て、朝廷の勅狀を說て云く、西京の從賊ども只今東京の屬縣を犯すこと急なれば、先西京を打て後に、王慶が巢穴を攻べし、との命なれば、宋江謹で領受し、呉用と兵を分て、荊南西京二ケ所を伐と計議に及びける。此軍の始末は次卷に明らかなり。

領し、散々に切て入れば、賊兵何ぞ敵抵ふべき、大に敗北す、諸能は童威に切殺さる。されば李俊は早く水門を奪ひ、多く賊兵を打取り、河水渾て紅を流せり。又鮑旭等二十人の勇將は、力を振ひ攻入て、凌振をして轟天炮を放たしむ。此時城中大に騷動し、段二は變を聞て急に兵を領し出來り、早く砲の聲に驚き、又鮑旭に出合ひ、衆將の猛きを見て、引返んとせし處に、王定六早く追著腿の上を一朴刀に打倒し、遂に段二を生捉れり。此時宋江は城中の砲聲を聞き、大兵を引き北門外に攻來れば、魯智深、李逵等は城門を開き相迎ふ。扨又賊將錢儐、錢儀等は城中に變有と聞き、兵を路より返せしに、宋兵に出合ひ、錢儀は馬靈に打殺され、錢儐は卞祥に切殺され、二萬の兵馬も大半は切殺さる。此時孫安馬靈等は兵を進め、殘賊を追拂ひ、城中に切入て宋先鋒を帥府に請ふ、此五更時分なり。宋江榜を出して、百姓を殺害する事を禁じ、次の日天明に至れば、王定六は段二を縛て引來れば、宋江大に其功を賞し、軍士に命じ段二を押監し、陳安撫の方へ引渡しむ。されば賊軍の兵卒降參する者一萬餘人、殺さるゝ者數を知らず。左謀も亂軍に殺されたり。宋江大に酒宴を設け、三軍の將士を賞勞し、又李俊等の功をくはしく記し、馬靈に命じ、捷を陳安撫に報じ、賊兵の消息を尋ねしむ。されば馬靈は神行の法をなし、半日にも過ざるに回り來り、回復して云く、陳安撫大に悅び、其まゝ表を寫し朝廷に奏聞すと。

に多くの水兵を乘しめ、城西の水門より搖出し、粮船を奪はしむ。其時宋兵は多く戰船の來るを見て、慌たゞしく粮船を岸に搖寄せ、彼水手共は盡く岸に迯上れば、諸能は戰船を進めしめ、已に岸に近付ける處に、岸上忽ち一聲の鑼響き、百餘艘の漁船を漕出し、船ごとに人は扦をさし、三四人は團牌摽鎗を持ち、飛が如く搖來れば、諸能は士卒に命じ、頻に火箭を放たしむ。彼漁船上の人いかんぞ火箭を防ぐべき、鬨と叫んで水中に飛入れば、賊兵大に勝を得て、早く粮船に乘移り、此時諸能は先一艘の粮船を奪ひ、水軍に命じ、第一の水門に搖入らしめ、先船中を改んと軍士に命じ、船板を開かしむるに、いかんぞ開くことを得ん、一寸も動ざれば、諸能深く怪み、斧を以て打破んとせし處に、不思議や彼四五百艘の糧船は、誰か一人搖者なきに、自ら動て風に順ふが如く、都て水門の內へ進み入れば、諸能大に駭き、敵の奸計に中りし事を知り、急に岸に上らんとせし處に、忽ち岸下の水底より數人の大男潛り出で、各口中に蓼葉刀を啣ふ。是李俊、二張、三阮、二童の八人なり。諸能、急に軍器を以て打んとする時、李俊忽ち胡哨を吹こと一聲、彼兵粮米の內に隱れし歩軍頭領、船板の下の梢子を抜き、岸上に飛上れり。是宋軍の猛將なり。其人々には、鮑旭、李逵、項充、魯智深、武松、楊雄、石秀、解珍、解寶、鄒淵、鄒潤、白勝、時遷、丁得孫、石勇、凌振、段景住、王定六、十九人、一千の歩兵を

蕭讓兗州城
むかし諸葛亮が
仲達を退けし
謀計の先蹤と
なす

れ逃走る。李三思、倪慴も亂軍に殺されけり。宣贊、郝思文は唯一陣に打勝て、賊を切る事一萬餘人、衣甲馬匹を得こと數を知らず、已に城中に歸りけり。此時花榮、林冲は闕翥、翁飛二人を討取り、其餘の賊兵を追散し、只糜貹を取逃し、凱歌を唱へ城に歸る。南門の外には、猶呂方、郭盛、賊將と戰ふと聞て、戰を扶んと、兩將南門へ馳向ひ、散々切立れば、賊兵いかんぞ抵敵叶ふべき、賊兵敗北し討るゝ者夥し、此日三路にて切殺るゝ者三萬餘人、疵を蒙る者、其數を知らず。屍は郊野に滿ち、血は流れて渠の如し。此時衆將兵を收めて同じく帥府に至れば、陳瓘、侯蒙、羅戩、大に悅び、蕭讓の妙計、衆將の功を稱美し、大に酒宴を設け、衆將を款待し、三軍を賞勞しけり。去程に段二は糜貹を宛州に遣して後、城樓に上て宋軍を望むに、八月中旬の天氣にて一輪の明月白晝の如く照し、宋軍の旗號亂れ搖き北の方に退けば、段二左謀に向て、思ふに宋江宛州を救はん爲退くにあらずや。左謀が云く、必ずかくの如し、急ぎ精兵を以て打べしと。此時段二は錢儐、錢儀、兩將に二萬の兵馬を添へ、宋兵を追はしめ、再び城樓に上り、西方を望み、又城外の襄水を望む時、水色月光に相映じ、三五百艘の粮船、各宋軍の旗號を建て、船毎に六七人の水手のみ北の方へ搖行ば、段二は原より人の物を掠るに馴し性質なれば、多くの粮船を見て、忽ち欲心起り、水軍總官諸能に命じ、五百艘の戰船

○書生談笑して强敵を退く

陳安撫此時宣贊、郝思文に五千の兵馬を領せしめ、西門の内に伏しめ、賊兵の退くを見て、打出べしと令し、又老弱の軍士に旗を持しめ、城の四方に伏せしめ、砲聲の響を暗號に、旗を立起すべし、と令し終り、陳安撫自ら西門の城樓に上り、侯蒙、羅戩、蕭讓と同じく、坐して軍士をして酒饌を竝べしめ、大に城の西門を開かしめ、共に笑談して酒を酌む。正に是、

聖手大名聞宇宙　能敎賊士解圍回
奇籌妙策以誰比　不讓當年諸葛才

賊將李三思、倪慴は十餘人の副將及び三萬の兵を引連れ、勢に乘じて馳來りしに、城門大に開け、三人の官人一人の書生と同じく、城樓に上て酒を飮み、四面の城垣に、更に一本の旗をも見ざれば、李三思大に訝つて、兵を進めざれば、倪慴も又云く、城中必ず備へあらん、我等兵を退け、彼が詭計にあたること勿れとて、急ぎ兵を退んとせし處に、忽ち城上一聲の砲響き、喊の聲震ひ、多くの旗幟時に立ければ、賊兵大に驚き、戰ずして自ら亂る。城内には豫て埋伏せし宣贊、郝思文、金鼓をならし、兵馬を引て切て出れば、賊兵扨こそ計有けりとて轉び倒

某只今城西に到著し、戰船を漢江裏水兩所に屯せりと。宋江聞て、李俊を帳中に止め、杯を勸めし處に、忽ち探馬回り來て、今城中の賊將密かに兵を出し、宛州を襲ふと。宋江聞て驚き、呉用と商議するに、呉用が云く、陳安撫及び花榮、共に膽略ある人なれば、宛州恐らくは失なからん、只此機に城を破るべしとて、宋江と耳語こと半時ばかり、宋江悦で、則李俊を始め、水軍頭領衆人、并に鮑旭等衆人に二千の兵馬を與へ、計を授く。されば賊將糜貹等は兵を引き、宛州に著する故、城中の軍士早く此由を陳安撫に報ずれば、陳瓘則、花榮林冲に二萬の兵馬を領せしめ、南門を出敵を迎へしむ。此時軍士又報じて云く、糜貹等豫て均州の賊人と相約し、只今兵馬三萬を以て城外北山の邊迄攻來ると。陳瓘聞て、呂方、郭盛に二萬の兵を與へ出て迎へしむ。されば半時も過ざるに、軍士又告けるは、鞏州の賊人李三思、及び倪懰等、兵馬三萬を引き、西門に攻來ると。衆人大に驚き、只宣贊、郝思文の兩將に一萬の兵あれば、半は老弱の人なれば、是をいかんかすべしとて、各議して在ける處に、聖手書生蕭讓進み出で、衆人必ず愁へ給ふことなかれ、某一つの計ありとて、陳安撫の耳邊にて低語ければ、陳瓘尤と同意しけり。

の城中に入る。此主將は王慶が小舅段二なり。王慶、平東大元帥に封じ、此城を守らしむ。縻貹段二に參見し、宋兵勢大にして、我將士五人を失ひ、全軍敗北せしよしを告げ、兵を借て仇を報ぜんと乞ければ、段二聞て怒て云く、汝は我管下にあらずといへ共、全軍を亡沒する罪いかんぞ逃るべき、軍士等早く彼を誅れ、と命ずれば、帳下より一人進み出で、將軍怒りを息て此人を留むべし。段二是を見れば、王慶が副軍師左謀なり。段二が云く、いかでか彼を赦すべき。左謀が云く、某聞く縻貹は十分の勇者にして、一陣に宋の猛將二人を討こと拔群なり、宋江等は將猛く兵强し、彼等は只智を以て取べし、力を以て敵すべからず。段二が云く、智を以て取とはいかゞぞや。左謀が云く、今聞く宋江糧草を宛州に貯へ、此處に運用すと、彼宛州は元より兵馬單弱なれば、只今元帥密に使を均州鞏州に遣し、二ケ所の主將と時日を約し、二ケ所の兵を以て宛州の南門を攻しめ、又縻將軍に兵馬を添へて、宛州の北門を攻しめば佳ならん。段二聞て、必ず宛州の失あらんを恐れ、兵を退け宛州を救ふべし。左謀が云く、其退くに乘じ元帥自ら精兵を出し、兩方より夾み打ば宋江を擒にせん。段二大に悅び、早速使を均州鞏州に遣し相約し、又縻貹に二萬の兵馬を差添へ闕翥、翁飛に力を合しめ、潛に山南を進發し、宛州に赴しむ。去程に宋江陣中にて城を攻る計を議し在ける處に、水軍頭領李俊來て云く、

す。孫安は賀吉を馬下に切て落せば、唐斌戟を以て郭矸を刺殺す。糜貹は馬を回し走りけるを、索超、孫安、馬靈、勝に乘て追蒐しに、忽ち向の山下に喊の聲起り、賊將耿文、薛贊一萬の軍馬を領し切出る。糜貹は兵を合せ、再び宋軍に切向ふ。宋軍より文仲容功を立んと糜貹と戰ひ、只一斧に切殺さる。此時崔野大に怒り、刀を揮て糜貹と戰ひ、是も馬下に切落し、唐斌と相戰ふ。張清夫婦馬を竝べ、先張清石子を打けるが、糜貹は手快き達人なれば、斧を揮て撥落す。瓊英透さず石を打ば、頭を低め、是を避け、徐寧、董平、二つの石子の中ざるを見るより、馬を竝べ突來れば、糜貹は馬を回し逃るゝを宋軍より追掛しに、耿文、薛贊助け來る故、糜貹は早く逃行く。唐斌等衆將、耿文、薛贊を切殺し、賊兵を追散し、戰馬を奪ふ事千餘匹、衣甲を得ること夥し。唐斌は文仲容、崔野を失ひ、大に哭き、士卒に命じ、兩將の屍首を隆中山に葬しめ、董平等九人は此夜山南に屯し、次の日宋江が大軍都て來り、兵を一處に合せけるが、兩將戰死を聞て、宋江深く歎き、禮を以て二人の靈を祀りけり。吳用、朱武、雲梯に上り、城中の形勢を見極め、宋江に向ひ、此城元より堅固なれば、急に攻打共益なからん、只、佯て、攻打貌をなし、機をみて計べしと云故、宋江令し、一面にては城を攻る器具を造らしめ、一面には軍士を四方に遣し、敵の消息を聞繕はしむ。扨も糜貹は漸く一方を切拔け、只二三百騎の敗軍を引き、南州

張清、唐斌十二人の猛將二萬の軍馬を領し、先鋒とし、中軍に宋江、盧俊義、呉用、其外九十餘人の猛將十餘萬の軍馬を從へ、又黃信、孫立、韓滔、彭玘、魏定國、歐鵬、鄧飛、燕順、陳達、楊春、周通、楊林、單廷珪、馬麟、十四人の猛將五萬の兵馬を領せしめ、後隊と定め、前部の兵馬は隆中山の北五里に至し處に、探馬報じけるは、王慶豫て我兵の向ふを知り、隆中山の北岡の下に、賀吉、縻貹、郭矸、陳斌を遣し、雄兵三萬を以て鎭守すと。董平、衆と商議し、孫安、卞祥に五千の勢を添て路の左に伏し、靈馬、唐斌に五千の兵を添て路の右に伏せ、中軍、砲の響を合號に起るべしと定る處に、賊兵忽ち旗を動し、鼓を打て攻來れば、南北陣勢をなし、雙方の箭は雨のごとく、賊軍馬を躍せ、頭に金盔を戴き、身に鐵甲を著し、大斧を提げ、縻貹と名乘り、罵つて云く、水洼の草寇何ぞ宋朝無道の君に屬し、死を送り來るや。宋軍より、索超駈出大に喝して云く、反賊穢言を吐んより、我斧を請よと、金樵斧を擧打掛れば、縻貹も斧を輪し戰ふ事五十餘合、秦明馳來て索超を助け、狼牙棍を振て打掛れば、賊將陳斌戟を取て相迎ふ。時に砲の聲して、孫安、卞祥、切出れば、賊將賀吉是と戰ひ、馬靈、唐斌、切出れば、賊將郭矸相迎ふ。兩軍喊を作り入亂れ、火花を散し戰けるに、宋軍より瓊英馬を馳來り、密に石子を抓で、陳斌が胸に打中れば、馬より落けるを、秦明追附き、一棍に頭を碎て粉の如く

む。守將劉敏夜軍に逃回り、人を南豐に遣し、王慶に救を乞ふ。又隣縣へ力を合せんことを求めければ、今圍れけれ共、城垣堅固に守り居けるに、宛州城北、臨汝州の賊將張壽、二萬の軍馬を引救ひ來りしが、林冲等に切立られ、其身も林冲に突殺され、宛州の南なる安昌、義陽の賊將、栢仁、張怡等救ひの兵を引來りしが、關勝等に生擒れ、宋江の陣にて首を刎らる。李雲等城攻の具造出し備れば、孫安、馬靈等心を一致し、土嚢を多く城の四面に積上げ、雲梯を城垣に掛け、勇を奮て攻上れば、賊兵多く討れ、守將劉敏も卞祥に生捉れ、討る者五千餘人、降參一萬人、時に宋江兵を領し、城中に入り、劉敏を切て捷軍を陳安撫に報じ、宛州に移て鎭守あらん事を乞ける故、直に參謀侯蒙、羅戩と共に宛州に來り、宋江衆將の功を賞しける。此時八月初にて、暑氣も少し退けば、宋江吳用等商議し、此地を南に去り、山南州は、賊第一の要害とす。彼南は湖湘に至り、北は關路に通ず、是楚蜀咽喉の地なり。今先此地を討取り賊勢を二つに分ん。宋江乃令して、花榮、林冲、宣贊、郝思文、呂方、郭盛をして陳安撫を輔けしめ、五萬の兵馬を差添て宛州城を守らしめ、又蕭讓を留め、文墨の用に供へしむ。又水軍の頭領李俊等八人、泌水より船にて漢江を經て、山南軍に遣し、自ら陸兵を三隊にし、其勢都合十五萬騎、山南に向て進發す。董平、秦明、徐寧、索超、瓊英、孫安、卞祥、馬靈、文仲容、崔野、

命を助り、宛州城に引退く。宋軍は一人の兵をも損ぜず、却て馬匹衣甲を得ること數を知らず。衆將各勝を得れば、宋江一々賞勞す。其時吳用告て云く、兄長已に妙策を以て賊胆を喪すといへども、宛州の地利盤紆て深山大澤多ければ、若賊兵將を添堅く守らば、急に破れまじ、今幸ひ秋冷に向んとして、軍馬强健なるに乘じ、宛州城を攻打て然るべし、此後兵を南北に分て、賊巢を攻ば全く勝んと。宋江尤と同意し、則關勝、秦明、楊志、黃信、孫立、宣贊、郝思文、陳達、楊春、周通等に三萬の軍馬を差添へ、宛州の東に屯させ、賊人の南より來る救の兵を防がしめ、又林冲、董平、呼延灼、索超、韓滔、彭玘、單廷珪、魏定國、歐鵬、鄧飛等に三萬の軍馬を添て、宛州の西に屯せしめ、賊人北より來る救兵を防がしむ。其時河北の降將孫安等十七人、各宋江に乞て、某等宋先鋒の恩を蒙り、朝廷の臣たることを得たり、今日願くは先陣をなし、聊にても厚恩を報ぜんと乞ければ、宋江、張淸、瓊英をして孫安等十七人と、幷に五萬の軍馬を領せしめ、先陣たらしむ。其人々は孫安、馬靈、卞祥、山士奇、唐斌、文仲容、崔野、金鼎、黃鉞、梅室、金禎、畢勝、潘迅、楊芳、馮昇、胡邁、葉淸、此面々宛州を望で進發すれば、宋江は盧俊義、吳用と同じく、其餘の頭領を引率し、方城山に打出て、宛州十里外に陣取し、李雲、湯隆、陶宗旺をして城を攻る器械を造らしめ、大軍を以て宛州城の四方を圍

ら部下の副將鄭捷、顧岑、寇猛を從へ、人は枚を啣み、馬は鑾を除き、打出んとせし處に、部下の魯成止て云く、將軍の計妙といへ共、宋江が部下には入雲龍公孫勝、混世魔王樊瑞など幻術の士多ければ、火攻をなすを見ば、彼が妙術風を回し、雨を呼ば、計成らざるのみならず、却て親方を損ずべし、と諫ける。劉敏が云く、足下の謀所利有といへ共、却て思ひの過たるにあらずやとて、衆將と同じく薄暮に城を打出たり。此時正に七月中旬にて、其夜大に南風起りければ、劉敏悦び、宋江等今に亡ぶべしとて、三更の比方丈山下に至りけるに、忽ち黒霧山谷を覆へば、劉敏大に悦び、先五千の火兵を眞先に火箭、火炮、火炬を持しめ、又寇猛畢勝をして二千の火車を催促せしめ、深林に向て焚上る。其時衆兵金鼓を敲て、方城山に攻上るに、不思義や今迄勁き南風忽ち北風に吹轉れば、數萬の火箭忽ち霹靂の響をなし、其勢金蛇火龍のごとく、都て南方に飛來れば、賊兵大に驚き、迯る間もなく、頭を焦され、額を打れ、死する者數を知らず。是全く、喬道清が法術にて、風を回す法を成故なり。宋江此時凌振をして合號の砲を放たしむれば、百千の雷落かゝる如くなり。東に張清と瓊英あり、西に孫安、卞祥あり。各兵を領し切出れば、賊兵散々に敗北し、魯成は孫安に切殺され、鄭捷は瓊英が石子に打殺され、顧岑は卞祥に切殺され、寇猛は亂兵に踏殺され、大軍盡く燒死され、只劉敏のみ辛き

じめ、李應柴進に五千騎をして守らしむ。公孫勝すゝみ出で、兄長の籌至めてよしといへども、暑中軍士遠く來て疲れたれば、賊人精鋭の兵を選攻來らば、我兵彼に十倍す共、竟に勝を得べからず、某小術を以て、三軍涼爽ならしめば、自ら强健ならんとて、高壇を築かしめ、足に魁罡の二字を踏み、左の手に雷印を結び、右の手に劔を抜き、心を凝し觀想し、巽方に向て水氣を招き、念咒すること一遍、暫く有て涼氣四方に起り、陰雲冉々として當山の嶺上より噴出し、方城山に瀰蒲ち、二十餘萬の宋兵涼風爽氣の中に居れ共、此外は舊の如く、烈日金を鎖し、蜩蟬亂れ鳴く。されば宋江始め衆人各悦び、公孫勝の妙術高德なるを稱譽す。かくのごときこと六七日の間なりしとぞ。

○喬道淸風を囘し賊寇を燒く

去程に宛州の守州劉敏は賊中にて謀計あるとて、人も尊み自らも高慢甚だしくて、賊人劉智伯とす。此時劉敏は、宋兵山林叢密の處に暑を避と聞き、冷笑て、彼等の水洼の草寇にて兵法を知らざれば、大事を做こと能はず、我少しく計を施し、二十萬の軍馬を燒打すべしと、輕捷の軍士五千人を選び、各火箭火炮を持しめ、又二十輛の車に乾柴、及び硫黄、焔焇を用意し、自

京等も天子に奏せざること能ず、竟に奏聞せしかば、天子勅して、蔡攸、童貫をして宛州を救はしむ。され共兩人兵法節約なければ、軍心悉く離散し、劉敏等に打負け、遂に宛州を陷れしか共、各罪を恐れ天子に奏せず。劉敏、魯成等蔡攸、童貫を追散し、魯州襄州を圍む。此時宋江等は河北を平定し、又勅命にて淮西を征伐す。眞に是席暖るに暇あらず。馬は蹄を留ず、大兵二十餘萬を引具し、南を望で進み、黄河を渡りし時、都より魯州襄州を救ん事を催促あれば、暑熱を犯し、粟縣汜水二ケ處を過、陽翟州の界に至れば、賊人劉敏、魯成等、宋の大軍至と聞き、則一州の圍を解ぬ。扨又張淸、瓊英、葉淸は東京を發足し、此日宋江が軍に追著き、宋公明に見え、田虎が刑せられしを見、又聖恩を蒙りし事共委く語れば、宋江を始、各稱美をなしにける。されば陳安撫及び、侯蒙、羅戩を陽翟城中に請ひ、自ら大軍を引き方城山に屯し、深樹の蔭に暑を避け、暫く軍士を休しむ。然共千里に跋渉し、暑に中る者多ければ、安道全をして療しめ、多く遮日廡を造らしめ、戰馬を繫ぎ、皇甫端に調治せしめけり。此時河北の降將喬道淸功を顯さんとて戰んと望ければ、宋江潛に計を授け、喬道淸に强健の兵軍兵三萬人を與へ、張淸、瓊英に一萬人を差添へ、皆々西山の麓に伏せ、中軍轟天炮の響くを合號に切出べしと。又孫安、卞祥に一萬の兵を添て、東山の麓に埋伏せしめ、乾きたる柴を山南の平地に積

向るといへども、將は兵法を知ず、士卒柔弱なれば、いつも敗軍す。王慶日々に强大にて、南豐府を打破りける故に、東京より官軍向へども、童貫、蔡京が屬下の將なれば、只權柄を専らにし、來て賊を攻ず。兵糧米を多く取立て、良民を犯し、地方を騷せば、百姓等大に怨み、却て王慶に從ふ者數を知らず。李助又計を廻らし、自らは荆南の產にて能城中の案内を知れば、貌を扮し星相となり、城中に忍び入り、潛に惡徒と相約し、裏外より相攻て、竟に荆南城を奪取り。此時王慶、李助を拜して軍師となし、自ら楚王と稱號す。江洋の大盜都て王慶に來從へば、三四年の間に宋朝の軍州六ヶ所を奪取り、南豐城中に寶殿宮闕を建竝べ、年號を改元し、宋朝を學んで文武の官人を設け、段三娘を立て后妃となし、始より從ふ人々に各大官を授け、先方翰に樞密官を授け、范全に殿帥官を授け、丘翔に御營使を授け、龔端に宣撫使を授け、龔正に傳運使を授け、段二に護國統軍都督を授け、段五に輔國統軍都督を授く。されば宣和元年より亂をなし、同五年の春に至る。此時宋江は河北にて田虎を征し、壺關を得るの日に當つて、淮西の王慶は雲南郡を打破り、宛州を攻取り。八ヶ所の軍州南豐、荆南、山南、雲南、安德、東川、宛州、西京、此八ヶ所に屬する州縣共に是八十六ヶ所を得、又雲南に行宮を造立し、施俊を留守とし、雲南を鎭守せしむ。始め王慶劉敏をして、宛州を攻しめし時、東京に近ければ、蔡

王慶房山の
盗魁廖立と
砍て山塞の
主となる

去程に房州の捕方土兵殺さるゝ者三十餘人、手負四十餘人なれば、許多の捕方を房山に向けるに、賊人に散々打負け、王慶に從ふ者日々に多く、山を下り來て、家を打ち、舍を劫かし、賊勢甚しければ、營中の軍馬を推て寨主となし、是より兵器を造り、軍士を訓練し、官兵を迎る用意をなす。捕方土兵等散々切立られ、漸逃歸つて府尹顧一行に告ける故、查照するに、土兵殺さるゝ者三十餘人、手負四十餘人なれば、次の日軍官等と計議し、許多の捕方を房山に向けるに、賊人に散々打負け、王慶に從ふ者日々に多く、山を下り來て、家を打ち、舍を劫かし、賊勢甚しければ、顧一行文書を鄰縣に遣し、早く救の兵馬を催し、又當地の兵馬都監胡有爲と計て、營中の軍馬を調へ、兵を起さんと約せしに、營中忽ち騷動す。是は胡有爲常々剋剝ことのみし、此兩月の俸米をいまだ與へざれば、軍官怨で命に隨ず、顧一行と計て、先一月分の俸米を與ふ。依て彌軍士の心を激し、竟に衆人胡有爲を殺害す。顧一行、勢頭惡きを見て、行方なく逃れける程に、城中主なければ、當地の惡徒集り、惡事をなしけるに、王慶城中變起るを聞て、暫時に攻來れば、惡徒共盡く王慶に從ふゆゑ、遂に房州を奪取り、庫藏の錢糧を得、李助、段二、段五等を四方に遣し、招軍旗を所々に立て、馬を養ひ、兵を招て兵糧を貯へければ、遠近の惡徒雲のごとく集りける。此時龔端兄弟向に黃達に官府へ訴られ、家業ことごとく官司に喪ひけるが、王慶が兵を招くを聞き、忽ち來り相從ふ。都て二萬餘人の衆となり、勢に乘じ、三ヶ所の縣治を奪ふ。所謂竹山縣、上津縣、隕鄕縣なり。近州朝廷へ急を告る故、宋朝度々官兵を

都頭は多くの士兵を引き、黄達を先立來るを、王慶刀を揮て都頭を切殺し、返す刀に黄達を一刀に突殺し、李助、段二等士兵を追散し、衆人房山の下に至りしに、五更の比なり。山寨の夜廻、官兵と思ひ、急ぎ訴ければ、廖立自ら甲冑を著し、鎗を取り、軍兵を領し、柵門を打出山を下り、多く男女雜るを見て、官兵にあらずと思ひ、何者か夜山寨を騷すや。李助駈寄て、大王疑ひ給ふこと勿れ、是劣弟李助なりとて、則ち王慶が始終を語り、夥中に加へんことを乞に、廖立聞て思へらく、彼等元來了得ければ、其毒氣を受んを恐れ、李助に答へけるは、我小寨何ぞ汝等を止んやと、云も終らず、王慶思へらく、山寨只廖立を結果せば、其餘は憂るに足ずと、忽ち刀を挺へ打て蒐れば、廖立大に怒り、鎗を撚て相迎ふ。段三娘、王慶を扶け、朴刀を挺へ相戰ふ。王慶は廖立が綻破を伺ひ、一刀に切殺せば、段三娘、首を剔けり。王慶高聲に云く、若我に隨はざる者は廖立を例せんと。小賊共誰か拒ぎ遮らん。多くの軍士、盔を卸戈を投げ、拜しければ、王慶衆人を領し、山に登り寨中に至りけるに、此時天明なり。此房山は四面悉く自然の石室あつて、正に房屋の如くなれば、房山と云ふ。尤房州の管下なり。王慶は各人の老少を安堵せ、又寨中の兵糧、金銀、珍寶を算へ、牛馬を宰殺し、軍士を賞勞し、又酒宴を設け慶賀しける。衆人竟に王慶

○房山寨に雙て舊强人を併す

こゝに龔家村の黄達、囘癒を得、王慶が行方を尋ね知り、昨夜房州に來り、府尹に此始末を訴へければ、府尹顧一行急ぎ都頭に命じ、兇人王慶、并に范全、段氏の一家を捉しむ。范全は公目薛氏と交深ければ、密に此消息を報ぬ。范全大に驚き、直に段家に走來て告ければ、大騒となり、皆々草堂中に寄集り、各面色土の如く、眉を燒の急にて呆れ慌る處へ、金劍先生李助、衆人を制し、列位此禍を遁れんには、某が言に從ひ候へ。衆人の云く、願くは敎を聞ん。李助が云く、此地二十餘里西に房山ありて賊人住り、寨主を廖立とて某と交深し、彼が下に五六百の賊有て官兵も制すること能ず、此處に行て夥に入ば禍を免るべし、各賊を嫌ふ共、此期に及び好人と成て免れん路なし、方翰等衆人は、後々親屬迄を連累にせんを恐るといへ共、王慶三娘に十分勸られ、是非なく計に從へば、家内を收拾け、資財を打疊げ、三四十の把火を造へ、王慶、段三娘、段二、段五、方翰、施俊、丘翔、李助、范全、刀鎗を提莊客を集めるに、隨んと願ふ者、四十餘人、共に身を固め、王慶、李助、范全眞先に進めば、方翰等は各婦人を保護し、中に在り、段三娘、段二、段五後に在り、家の前後に火を放走りけれ共、隣舍近鄕常に

吉慶有べし、此故に太公喜び、是非招請て段三娘と婚姻せしめ、婿とせんとす、又三娘の八字も甚だ善し、一對の好夫婦と云べし、今某此處に月老せん。范全聞て沈吟し、彼段子は乃頑なれば、此親事を允さずば必ず害あらんと、机を以て机に就き、則李助に對し、偖は此の如きや。此表兄兪齒者なるに、大家の嬌客となさんは、羞欣千萬なり。李助が云く、院長謙退し給ふな、彼三娘口を住ず大郎を稱贊せり。范全彌、かゝらば某も喜望外なり、今婚を主り候はんとて、懐中より一錠の銀を出し、李助に送り、貧家別に物なし、是薄義のみと差出す。李助が云く、足下とは友朋家、いかんぞ厚禮を受んや。范全が云く、惶恐高謝、事なるの後猶重く謝し申さん、只先生彼に兩姓あることを說給ふことなかれ。李助が云く、應諾候とて、彼銀子を收め、范全王慶に謝し、段家莊に回復す。彼三娘は平生一家盡く恐れ、段太公といへども彼に拘らず、今自ら王慶を招んと欲すれば此事成就せり。范全は此事播揭なからん樣に萬端省略を議するに、段家又倣家的なれば、大に喜び、當月二十二日吉日とて婚姻の祝賀をなさしめ、酒肉を備へ親戚を請ふ。范全は王慶が爲に新衣服を著せしめ、自ら王慶を送り來り、合巹も收り、李助も媒妁なれば來り、方韓、施俊、丘翔、各妻共に來り、外は皆回りしが、此面々は遠方なれば段家に一宿す。

家貧ければ未だ妻も迎へず、范節級は表兄にて、去年公幹にて西京に至りし時、某等獨身にて照顧人なきを見て、此處に住しめり。某幼きより、好で棒を使へば、得來方便して、當地の官府へも、仕へしめん意にも候らめと語る。段太公喜びたる體にて、王慶の年庚を問ひ、辭別して去けり。王慶大に疑ひ在處へ、又一人入來て、范院長在宿にやと問ふ。王慶答へて、府中に在て未だ歸らず。又問ふ、李大郎とは足下なるや。王慶熟見れば、看識たる樣にて、彼人も王慶を能々見て、互に問ず不言在處へ、范院長歸り來れば、三人房中に坐す。范全云く、李先生何故こゝに來るやといふに、王慶漸思ひ出し、彼は賣卜李助なり。李助も又思ひ出せし體にて、范全に問て云く、院長頃者甚だ雜冗み、曾て訪はざりけり。先問度は、令親に李大郎なる者ありや。范全王慶を指し、彼則我表兄李大郎なり。王慶が云く、某本姓は李、先年王姓を名乘しは、見外公の姓なればなり。李助笑て云く、某も又曾て東京開封府にて見え、王姓なるを記し得たり。王慶低頭て語ず。李助が云く、某足下に別れて後、荊南にて異人に逢ひ、劍術の祕訣を授り、世人某を金劍先生と稱せり、頃日は房州に在り、此地の繁華なるを聞て、賣卜にて生活せん爲來りしが、段氏の兄弟某が劍術を尊み、家に留て師とせり、段太公先刻爰元より歸り、足下の年庚をトするに、八字の吉兆詞に述がたし、遠からず必ず

顔色を伺ふに言いはず。彼女子が云ふ、家兄等范院長の面皮もあれば、彼原銀を取來て返すべしと。段二、段五、元來妹子を恐れければ、早速銀を取來れば、女子取て范全に遞し、家兄等の不禮を赦されよといへば、范全是を請取り、段氏の男女に別れ去る。范全王慶を引て草屋に回り、則王慶を怨て云く、我母親の緣有を以て、後の憂を顧ず、後來赦免にも遇ば、發跡させん志願なり、然るに汝甚だ沒座性ぞ、彼段二、段五は潑的にて、妹子も更に慘懶人にて、世に大蟲窩と名く、衆人多く銀子を瞞られ、富家の子弟皆々欺る、彼十五歳にて房州の富家に嫁し、其丈夫坌蠢なれば、常に心に足ず、人しれず丈夫を殺し、自ら力有を賴で、兄等と專ら惡事をなし、廝鬧に託け人の金銀を取り、近鄕迄彼等を恐れざるはなし、今又紛頭を接來りて、戯舞を建るは、衆人を釣寄せ、賭錢をなさん伎倆なり、然るに那里に至て是非を招くは、是身を顧ざるなりと說ば、王慶大に頓口す。范全は官府に當直せんとて、房州城に回る。王慶宅に在し時莊客來て、段太公、官人に見えんとするよし告ければ、怪みながら王慶出迎れば、七十餘り白髭翁なり。先上座に請うて、主人在宿せざるよし述るに、老人、足下は范院長といかがの親戚ぞやと段々尋ね、足下の相貌を熟視するに、是尋常の人にあらず、何國の人にや、何故に此地には至り給ふぞ。王慶造言して答へけるは、某は西京の產にて、早く二親に別れ、

躲閑の術を善しければ、骰を投て三紅四桼を擲出すこと毎度にて、錠銀を請返し、五貫文の錢を勝得て去らんとするに、元來仕組たること故、口論を始め、其隙に王慶が銀も錢も奪ひ去んとするものあり。王慶怒て、又是を追蒐んとする處に、衆人を推分一人の女走り出で、王慶を捕へ大に罵る。是を見れば、二十四五嬝娜なる風情なく、鸚哥綠の襖衣を脫棄て、拳を揚て王慶を打んとす。王慶は女にて破綻あるを見て、わざと彼を慰まんと、急に彼を打倒さず相撲を取る。女は侮て脇下を潛り、胸元を打んとするに、早く身を閃し、只一脚に女を踢倒し、又忽ち抱起し、甚衝突せり、衣服を汚すことなきやと云に、女子少も怒る色なく、却つて王慶を稱美し、好武藝かなと。此時口論せし男、錢を奪去し男出來り、片肌を脫ぎ朴刀を携へ、左右より打かゝれば、王慶少も恐れず、賊漢等我錢を奪ひ且罵るやと、又相撲んとせし處に、一人の漢出來り、身を横へ止て云く、李大郎無禮をすな、段二哥、段五哥も又手を動すことなかれ、雙方是同鄉の人、說話あらば寬々と說よといふ。其人を見れば、范全なれば皆戰を止む。范全女子に向ひ、三娘恙なきや。女子又萬福し問て云く、李大郎は院長の親戚なりや。范全答て、某が表兄弟なり。女が云ふ、彼人は勝れたる武藝者なり。王慶范全に向て、彼等が不法を告けるに、云こと勿れ、是は二哥、五哥の賣買なりと、少し恥かしむる體に云ければ、皆女子の

范節級表兄の
為に醜面の金印

語て、范全に助命の工夫を頼けるに、先王慶に飯を食せしめ、宿錢を算用し、王慶を供になして房州に歸りけるに、早くも陝州の囘書到來し、家に置難く、房州城下定山堡の東に草屋田地を買置し故、數人の莊客を置耕作せしめければ、王慶を此に隱し、姓名を李德と改させ、又范全建康に任せし比、神醫安道全に隨て金印を療治の法を學びしかば、幸王慶が面上の金印に先毒藥を以て腐しめ、又好藥にて半ば癒し紅疤となし、再び金石の細末を塗に、王慶が臉上の疤痕盡く消失けり。光陰矢の如く百餘日を經れば、宣和元亥年仲春の比に至りければ、官府よりの查問も少しく慢り、又王慶が臉上の金印も已に跡なく消し、衣服襪鞋等、都て范全より周濟ぎ、時々市中を遊べ共誰知者なかりけり。時に當所の西一里餘、定山堡の內、段家莊の段氏兄弟、房州の本府より一人の粉頭を接來り、彼地に於て戲臺を始む。彼粉頭は東京より新に來り、色藝も人に勝れたり。諸般の歌舞を好す。是を以て看人山のごとしと聞て、王慶も是を見んとて、彼地に行けるに、いまだ戲場は始らず。邊の所々に衆人集て賭錢さま〲あり。或は罵り、或は笑て負るは赤體となり、勝て意氣揚々たるあり。近村近鄉耕作も手に屬ず、戲場觀に來ること雲霞の如し。王慶、范全より與へ置し、柴米の代錠の銀子を懷中すれば、元來賭は上手なり。戲場より今一勝負せんと銀を質とし、錢二貫文を借賭せしに、元來東京にて

嘆息し、彼巖く擺布ば此處を去んと、市中にて解尖刀を買て用心し、又十餘日を過しけるに、棒疵も又痊しが、管營二疋の緞子を買しめ、其品心に叶ず變來れと命じ、時刻を限り、もし延引せば命を召んとて、彩服舗に走らしめ、時刻を差へしめ、罪杖を與へ、打殺さしめんと巧み、其身夫婦龐元共に酒宴をなし在ける處へ、王慶忍び入り隱れ在て、竟に東廁へ行を見かけ、張世開を一刀に殺す。龐元は物音に驚き、走り來るを首打落し、陝州の惣堺を越え、夜半に逐電せしに、管營の方にては王慶が取變來りし緞子を庭に捨て、又其身血に汚せし衣服を脱捨走りし故、忽ち王慶なる事を知て、四方を尋れども知れざる故、官府に訴へ、官府よりも改の上、陝州の四門を閉ぢ、かつ王慶が郷貫年相貌遠近に行移し、若王慶を捉出さば一千貫の信賞錢を與へんと、巖重の尋ねなり、王慶は城を出濠水の淺みを渉り、漸遁れけれ共路錢なく、懐中只百疋の錢あるのみ、先是にて酒食の認せんと、星夜に馳て官道に出で、南に走ること六七十里、紅日已に東方に發する比、市中に入しが、未門を開ず。人家の燈籠に客商安歇と書たるを見つけ、戸を推開き自内を見るに、一人奥の方より出る者あり。是王慶が姨表兄范全なり。此者幼少より父と倶に、房州に在て經紀せしが、後房州の押牢節級となり、今春三月も公用にて東京に赴き、則王慶が家に滯留せり。今相見えて大に驚きけるに、王慶私に一五一十の次第を

八編　卷之七十九

○張管營妻の弟に因て身を喪ふ

斯て王慶は、管營張世開の買物を辦じ、十餘日を經て、彼帳面を以て、自ら立替し銀子を求るに、いかんぞ一文も出す事を肯ぜん。五棒又十棒、或は二十棒を打れ、斯の如くにて、又十餘日を過けるが、其内三百餘棒を打れ、腿爛れ、襲端が送りし銀子も竭し、一日營西武功坊の膏薬店張醫士が宅に至り、療治を賴けるが、張醫士膏薬を貼ながら語て曰く、張相公の舅龐大郎も、我に右の腕を療治せしめしが、彼云ふ、北邙鎭にて躓き破るゝと、され共其疵打傷しと覺ふと。王慶聞て問ふ、某營中に在共知らず。張醫士が云ふ、彼は張相公の小夫人の兄にて龐元と云ふ、龐夫人は相公尤寵愛を蒙り、龐大郎は賭錢を好み鎗棒を使ふ、只張相公の照顧にて世を送ると。王慶此話を聞て、前日我打しは必ず龐元にて、張世開も我を罪に陷さんと計るを知り、營中に歸り、張世開が近侍の小厮を招き、酒肉を勸め、少しく錢を與へ、慢々と龐元が事を問に、邙東鎭の怨を相公に告る故、汝が打るゝも此故ならんと。王慶單身房に回り、

調へしむれ共、前日のごとく現銀に出さず。一本の帳面を拵へ、王慶をして買掛らしむ。然れ共、彼市上の商人いかんぞ半文も懸賣せんや。王慶是非なく已が錢にて買調へ、返り來つて奉るに、張世開は猶も嫌好を云ひ、打ざれば罵りける。此管營が始末次卷を見べし。

按るに世に流布の本、王慶が父王砉を又、わうげき、又わうしうと附がなするは、甚誤なり。砉を正字として音くわくなり、姓の龔をれうと訓も非なり。

牢城營に遣し、又回書を二人に與へければ、役所を辭し、東京へ回けり。此時龔正は門路を以て、管營始め諸役人迄、王慶が爲に賄を遣けり。管營姓は張、名は世開、已に龔正が賄を得て王慶が枷を外し、又殺威棒をも預り、單身房中に遣し、彼が自由に任せしむ。まさに是有レ錢木佛可レ回レ首。況是世間走レ利人。されば光陰矢の如く、兩月を經て中秋に至り、或日王慶單身閑座せしが、一人の軍漢來て說て云く、管營相公汝を召すと。此時王慶、彼軍漢と同じく廳前に來て跪けば、張世開說て云く、汝こゝに來て已に兩月いまだ汝を使ず、我今陳州にて制せし一張の弓を買んことを求む、彼陳州は東京の屬下にて、汝の故鄉に近ければ、必ず眞の價を知らんとて、則袖中より紙に包し銀子を取出し、王慶に渡して云く、此銀二兩あり、早く買來るべしと有ければ、王慶愼で銀子を請取り、房中に歸て等子を以て掛る時、却て重き事三四分。此日王慶は市に行き、弓箭舖を尋ね、只一兩七匁の銀子にて、眞の陳州角弓一張を買ひ、自ら悅び、先三匁の利あり。返來て廳前に至るに、張世開も早く內宅に歸りて在らざれば、則弓を伴當に渡して、房中に歸りけるが、次の日また張世開は王慶を召て云く、汝甚だ能事を幹り、昨日の角弓甚だよし。王慶が云く、相公火にて焙せ、常に弓廂の中に置給はゞ、益宜しく相成べしと。張世開が云く、汝が言是なり、是より每日々々食物より器物に至る迄、王慶に買

兩人立寄て再三取推ければ、龔端漸手を止め、莊客に命じ、黄達を赤身にし、東村の路の傍に捨さしむ。去ば黄達が近所の者、草を刈んと此地へ來り、是を見附け、黄達を脊負て家に回り、養生をなさしめける。扨も此時龔端は、再び莊客をして酒食を王慶に供へしむ。王慶が云く、彼必ず後々來て仇を報ぜん。龔端が云く、師父必ず案じ給ふことなかれ、彼賊亡八たゞ一人の老母あるのみにして、每に隣家に憎る、誰か彼に力氣せん、もし死せば莊客をして、命を償はしめば、縱ひ公事に遇とも何ぞ猒んや、若死せずんば、只互に相打せし罪のみ、今日全く師父の力を借て仇を報ずることを得たり、師父先寛懐で、酒を飲ながら長く此地に留つて、某兄弟に鎗棒の祕訣を教へ給はゞ、重く其恩を報ふべしとて、兩錠の銀を取出し、孫琳、賀吉に與へ、再び數日止ん事を乞ければ、兩人も又許容し、止ること十餘日、此より每日王慶は、龔氏兄弟に鎗棒の祕訣を傳へぬ。されば日を經て黄達は、王慶及び龔端が事を公邊に告たりと聞えければ、龔端急ぎ白銀五十兩を王慶に贈り、陝州に赴く使用となす。此夜王慶は旅嚢を取拾け、次の日天明に龔氏兄弟に辭別し、兩人の監押とともに發足す。此時龔端再び弟龔正に多くの金子を持せて王慶を送らしむ。されば王慶は、兩人の公人及び龔正と同じく、陝州に著しかば、孫琳、賀吉は先王慶を押へて役所に至り、開封府の公文を奉れば、府尹これを披見て、則王慶を

に王慶を拜し師とし、其夜は醉を竭し、三更に至て息みけり。翌朝杲日初て昇り、清風徐に來る。王慶自ら打麥場の柳蔭に於て、龔端兄弟を教へ、棒を遣ひ、鎗を使ふ處に、忽ち一人の大男あり、頭に巾幘も著ず、身に葛布衫を著て、手に細蒲扇を持ち、面を仰で、擺々と進み來り、一人の配軍が龔氏兄弟を教るを見て、心中以爲く、彼配軍は必ず是邱東鎭上にて棒使の男に勝者ならん、恐らくは龔氏の兄弟彼が祕術を學んことを。則ち王慶に向て、汝是罪人の身として、途中に在て、いかんぞ人家の子弟を衒るや。王慶私に思へらく、是龔氏の親類ならんと、あへて一言をも言ず。元來此人は則ち東村の黃達なり。彼今早涼に乘じ、當村の西柳太郎が宅に行き、賭帳を求んとて、此處を過しが、吆喝の聞えければ、彼平生龔氏兄弟を侮るゆゑ、直ちに進み來るなり。此時龔端は是黃達なるを見て、心中の怒氣を抑ふれ共、收らず、則ち大に罵つて云く、賊亡八汝向には賭錢を貪り、今又來て人を侮るや。黃達も又大に怒り罵りて云く、汝此烏子弟、と云終らず、蒲扇を捉げ、拳を擧て龔端の劈面より打來る。此時王慶は分明に、彼は黃達なるを知り、わざと黃達の頰へらを打當ければ、黃達は其儘後へ倒れ、起上る間もなく、龔端兄弟及び兩人の莊客立寄り、散々に打擲し、或は拳を以て打ち、足にて踢り、葛布衫を粉の如く、引裂ければ、黃達は只地上に在て、大に喘き、怎ぞ起來る事を得ん。此時孫琳、賀吉

配軍王慶
龔氏兄弟に棒法を傳ふ

り。かくて兩人は王慶等三人を、莊内の草堂中に請ひ、汗衫を脱ぎ、草鞋を去り、賓主座定る時、禮を厚くして王慶が姓名を問ば、王慶具く述べ、又府尹に陷害せられしことを委曲語り、又二人の姓名を問ば、兩人悦で、上座なるは龔端、次なるは弟龔正、先祖より此地に住で、則地名龔家村と云ひ、西京新安縣に屬せりと語り、莊客をして三人の濕布衫を洗はしめ、涼水をすゝめ渇を解しめ、又卓子上に多く椀皿を竝立て、盡く魚肉、菜蔬、珍味を豐にし、王慶を上座に請ひ、兩公人を次座に請ひ、兄弟下座に坐し、酒盃を勸ければ、王慶厚く禮を述て云く、某は罪囚の人なるに、二位の愛せらるゝこと實に羞づ。龔端が云く、田莊に何の相待なし、請先數盃を傾け候はん、各寛懷で盃を過し給へとて、闌なる時に、龔端席を進んで云く、當村の前後左右に二百餘の人家あり、皆某兄弟共を立兒とす、某兄弟も又少しく鎗棒を好んで衆人を服す、今春二月東村の祭に戲場を立て、某兄弟もかの地に遊びしに、彼地に黃達と云者あり、賭錢のことに依て彼と爭ひ、遂に彼に痛く打る、され共我等兄弟も彼一人に勝こと能ず、其後彼常に人の前に誇りぬ、剩へ我兄弟を侮れ共是非なく、忍氣して日を送れり、今公の棒法を見るに、平人の及ぶ處にあらず、某兄弟願くは、公を拜して師となさん、何とぞ點指し給はゞ、重く君に報んといへば、王慶大に悅び、謙退すること暫時、龔端兄弟竟

汝彼男と勝負を決すべし、若彼男に勝時は、此二貫の錢を、渾て汝に與ふべしと。此時王慶は衆人を分け、賀吉に棒を借り、汗衫を脱ぎ、裙子を捲て立向へば、衆人都て云く、汝の首に枷あり、いかんぞ棒を使ひ得ん。王慶が云く、枷を帶ながら彼に勝ば、是を妙手と云べけれど。衆人同聲に云く、汝若枷をはめながら彼に勝ば、增て三貫文を汝に與ふべしと。王慶が云く、列位笑ひ給ふなと。此時彼男棒を手に取り、門戸をなす。是を蟒蛇象を飲の勢と稱す。王慶も又門戸をなす。是を蜻蜓水に點ずる勢と稱す。此時彼男大に喝すること一聲、則棒を擧て打來れば、王慶後へに退くこと一步、かの男追入こと又一步にして、棒を振上げ、王慶の頭を又一棒に打來れば、王慶身を左の方へ一閃せ、彼男の棒は虛を打て、棒を收める間もなく、王慶透さず、彼男の右の腕を打ければ、持し棒は一間ばかり那處に飛たり。衆人鬨とぞ笑ひけり。此時王慶立寄り、彼男の手を取て、唐突を咎ることなかれと云に、彼男さらに言ず、右の手は痛に怺難ければ、左の手にて彼三貫の錢を取迯んとすれば、兩人の少人走り來て、錢を取返し、則王慶に與へて云く、足下請敝宅に來り給へ。此時彼男は衆人と爭がたく、自ら市上を指て迯去れり。されば二人の少年は、王慶及び兩個の公人を迎へ、各涼笠を戴き、南を望で五六里を過ぎ、一つの林を過ければ、那邊に一處の大莊院あり。巡は都て土塀にて、二三百株の柳あ

○龔端龔正配軍王慶を師とす

此時六月上旬なれば、天氣大に熱し、一日に只四五十里の路を歩み、十五六日を經て、嵩山の地に至れり。或日歩行の中、孫琳向の山を指して云く、此山を北邙山と名け、西京の地に屬せり、北邙山の東に一ヶ所の市鎭有り、市を離れ、東の方人家稀なる所に、三株の大栢樹あれば、彼樹蔭に休んと、已に至りけるに、一簇の人亞背疊背、一人の漢子を取圍んで見物す。何事ならんと、王慶等立寄みれば、一人上身を赤著、樹蔭に在て、呟々喝々と高聲に呼で棒を使ひ居たりしかば、王慶覺えず失口て、彼等が棒を使ふは、只花棒にて鳥間にも遇ずと云ければ、彼男早く此言を聞き、棒を收め見るに、是一人の流配軍なれば、大に怒り罵て云く、賊配軍何ぞ我棒を嘲るや、我今棒法に於て、此天下に竝者なし、汝何ぞ大謾に放屁や、と云も終らず、棒を抛捨て拳を提て、已に王慶を打んとせし處に、忽ち人叢裡より二人の若者走出で、彼男を遮つて云く、先手を動すこと勿れと推止め、又王慶に對して云く、足下も又今の如く、彼が棒を嘲る者ならば定て手段も高强らん。王慶が云く、某不圖言を失し、彼漢子の怒を惹り、某も又鎗棒を好めり。以前の男罵つて云く、賊配軍我と見事棒法を比んや。二人の少年も又勸て云く、

五日を經ば、必ず痊べし、萬乞暫時の赦待をなし給はれかし、と頼みければ、兩人は此銀子を見て、應允しが、蔡收より人を使はして、發足せん事を催促すれば、是非なく彼銀子を返し、王慶を催促するに依て、王慶も仕方なく家財を賣拂ひ、胡員外に賃房錢を還し、已に用意をなしけるが、父王砉は兒子の故に氣を害し、兩眼已に瞎れ、別家に貧しく暮せしが、今又王慶が陝州に配流せらるゝを聞き、覺えず心痛し、小童に扶けられ、王慶が家に來り呼つて云く、汝常に我教訓を聞ず、今日此の如し、と云も終らず、涙を流せば、王慶幼年より遂に王砉を爺々と呼ざれ共、今家敗れ離別するに及で、心中大に酸禁く、則王砉に答て云く、家爺々我此般屈事官司に遇て、遠く配流せらる、堪耐ず、彼牛老兒我に逼迫て休書を書しめ、纔の銀子を與へしなり。王砉が云く、汝平生妻を愛し、舅に孝あらば、彼いかんぞ汝を捨ん、只我心を恨むべし、と云ければ、王慶素より諫言を嫌ひければ、此言を聞き、又憤然として再び老父に言はず。孫琳、賀吉と同く城外に進發す。王砉頓足し歎て云く、我特々此處に來りしに、かゝる禽獸に言を交へまじきものをとて、小童に扶られ、泣々家に歸りけり。去程に王慶は、孫琳、賀吉の兩人と共に東京を離れ、僻靜なる旅店を借り、調治すること十餘日、棒瘡已に愈ければ、又兩人と同じく、陝州を望て進發す。

汝に與へんまゝ路途中の盤費とし使ふべし。王慶が云ふ、我常に父母に逆性せし罪に仍て、只今如此の身となりしこと、誠に不孝とや云ん、然るに又今此銀子を與へ給はんこと、實に泰山の高恩感ずるに餘り、有難しと、手を延ければ、牛大戸、王慶が手を推退て云く、今汝此銀子を求んと欲す共、我等閑に與ふべからず、汝今より陜州へ配流せば、二千餘里の道を隔て、路遠く山遙にして、何の時か歸り來ん、況や汝常に別人家の女兒を調戯て、自身の妻女を顧ず、今汝に替て誰か養はん、又一男一女の子とてもなければ、只今一紙の休書を書き、汝去りし後何方へ嫁する共、爭執なしといはば、今此銀子を與ふべし、と云ければ、素より王慶は平生花費し、嚢中半文の錢もなければ、自ら思へらく、陜州此を去こと正に遠し、怎地か無錢にて行ことを得んと左思右想し、自ら歎じて云く、罷よ〳〵彼が意に隨んとて、則休狀を書き、丈人に與へければ、牛大戸は又銀子を與へて歸りけり。されば王慶は行嚢包裹を收拾けんとて、孫琳、賀吉と同じく家に歸るに、早く妻は牛大戸に接歸られ、則門を鎖けり。王慶大に怒り、隣家に行て斧を借り、唯一打に門を打破り、家内に入て見るに、凡妻女の穿的衣服の類より櫛釵に至る迄、残らず集て持去ば、王慶且怒り且悽慘み、先間壁の老婆を請ひ、酒食を求め、孫琳、賀吉兩人に與へ、又十兩の銀子を贈て云く、某棒瘡疼で實に走ること能ず、將息して四

折しも王慶此怪事に遇ひ、遂に府尹に擺撥れ、獄に下りぬと聞えければ、府中の上下誰か此事を知らぬ者なからん。早く四方に傳播し、王慶が罪は嬌秀より起りたれば、此度は活らじ、と評議す。此事蔡京、蔡攸の耳に達す。父子暗に商議して云く、今若王慶を殺さば、此事彌實となつて、醜聲なほ四方に聞ゆべし、しかじ彼を遠き軍州に配流し、其跡を滅さば可ならんと、潜に心服の人を召て此趣を府尹に告しめ、又吉日を撰み、彼嬌秀を娶て婚禮を行はしめ、一つには童貫の羞を掩ひ、二つには世人の議論を止め、蔡攸の子は素より獃的の性質なれば、何ぞ嬌秀の備細を知ん、只其儘に治りける。去程に開封府の府尹は、潜に蔡太師の命を被り、其日廳に陞て、牢中より王慶を引出し、先枷首を除き二十杖を打しめ、文墨匠をして、王慶の額を刺墨し、又重さ七十斤の護身枷を套め、一通の牒文を添へ、兩人の役人を差添へ、西京の管下陝州に配流せしむ。されば兩人の公役孫琳、賀吉は、王慶を監押して、開封府を出ければ、王慶が丈人牛大戶、王慶、孫琳、賀吉の三人を迎へて、南街の酒屋に至り、先酒保を召て、酒肉を求め、三人を款待し、又懐中より一包の銀子を取出し、王慶に對し、我常々汝が身の行ひを訓といへども聞入ず、終に天の憎を請け、今日只今如此の罪を蒙り、配軍人と落魄す、其不便なる事、いふ斗りなしといへども、是非に及ばず、只今此別離をなす、仍て此白銀三十兩、

の怪事に遇て、骨違ひせしことを委しく告れ共、相公いかんぞ信ぜん、早く行て返答あれと。王慶が云く、某今かくのごとくに臉赤し、いかんぞ相公に參見せん、只暫く待給へ。公人が云く、相公今立處に待給ふ、若遲らば、我等も連累を蒙らん、早く來れ〳〵とて、兩人は王慶を引張て、早く門外に出ければ、妻牛氏は忙はしく出見るに、はや行方も知れざりけり。されば兩个の公人は王慶を連れ、開封府に至れば、奉行は疾く堂に出、則王慶を階下に召し、大に喝て云く、汝は軍健の身として、いかんぞ怠慢して勤めざる。王慶此時、怪を見て腰を痛め、坐臥安からず、敢て怠るに非ず、何とぞ相公是を憐察し給へ。府尹聞終り、王慶が顔紅を見て罵り、這廝專一に酒を貪りて惡事をなす、必ず法に背く事有べし、今日又妖言を以て上官を欺んとす、彼賊を策うつべしと有ければ、數人の軍卒王慶が云說を待ず、散々に打ければ、王慶皮肉爛れ敗れ拷問に勝ず、府尹猶も妖言を以て民を惑し、叛反をなす罪に陷んとす。王慶は昨夜婦人に剋剝せられ、又今打れければ、雙斧を以て木を伐が如く、地上に倒れ、再び蘇り打るゝにたへず、屈事と思へ共、只得招首して云く、某猥りに妖言を以て衆人を欺き、不法を計んとせしか共、不幸にして此のごとくと告ければ、府尹王慶の口詞を錄さしめ、直に枷杻を套め、死囚牢へ送らしめけり。されば童貫密に府尹をして、王慶が罪を尋ねしめし處に、

を生ずるにあらざれば、必　獄訟のことあらん、其禍尤甚し、虎龍鷄犬の日に於て尤愼み給ふべしと說ければ、王慶聞て都て主意をなし、錢を與へて李助に謝せば、李助も又相謝し東を望で去けり。此時府中の公人五六人役所より出來り、王慶を見て云く、汝なんぞ此に在て閒話するや。王慶怪を見て骨閃せしを委しく語れば、衆人都て笑ふ。王慶が云く、列位、もし我を相公尋ね給ふ時は、宜しく方便し給へ。衆人が云く、理言だりと。是時王慶は衆人に別れ家に歸り、妻をして藥を煎ぜしめ、只早く癒んことを欲し、未だ二時ばかりに過ず、兩服の藥を渾て飲盡し、又藥の早く廻んことを欲し、五六盃の酒を飲けるが、此夜大に發熱し、又妻に房事を勸められしかど、腰痛んで動くこと能ず、かの妻は久しく王慶が嬌秀と契るに依て、獨り寐すること長々なれば、此夜慾心熾んにして、王慶が腰の痛むも構ず、强く房慾を恣にし、次の日辰牌に起上り、王慶少しく空腹なるに依て、先少しの酒を溫めて飲み、又飯を啖んとせし處に、忽ち門外より呼て云く、都排內に有や。王慶が妻、戶の透より覗き見るに、是兩个府中の役人なれば、王慶に斯と告れば、王慶は箸を打捨て、忙しく出迎へば、手を拱て問て云く、二位の光臨せらるゝ事何の御用かある。役人が云く、都排まさに娛るや、早朝より好春色、今朝相公自ら役人の名寄帳を見て、都排の至らざるを大に怒り、急に我等に召しむ、我等都排

て云く、覺擾うと。やがて袖の内より、紫檀の課筒を取出し、内より大定通寶の錢を取出し、王慶に與へて云く、官人天に對して、自ら心中に祈り告べしと。王慶大定通寶の錢を受取り、街心に出て、かの日輪を拜せんと欲するに、腰痛て屈る事能はず。されば只面を仰で天を祈れば、李助傍より是を見て、密に錢老兒に問て云く、彼官人は思ふに打身なりや。錢老兒が云く、彼板発の怪をなすを踢とて、腰の骨を差へ、適こゝに至る迄は、歩行することも難かりしを、我膏藥を用ひて歩行も又自由なりと。此時王慶は已に祈り終て、錢を李助に返せば、李助は王慶の姓名を問ひ、課筒を振て口中に念じて云く、

日吉辰良。天地開張。聖人作レ易。幽ニ贊神明一。包ニ羅萬象一。道合ニ乾坤一。與ニ天地一合ニ其德一。與ニ日月一合ニ其明一。與ニ四時一合ニ其序一。與ニ鬼神一合ニ其吉凶一。今有ニ東京王姓君子一。祈レ天買レ卦。甲寅乙卯日。奉レ請ニ作レ易文王先師一。至聖至靈。指ニ示疑一。明報應

李助課筒を開八卦をなすに、是水雷屯の卦なれば、則ち六爻の動靜を見て王慶に問て云く、官人の占ふ處は何事ぞや。王慶が云く、家宅のこと、李助首を振つて云く、小生直言せんに、官人必ず怪むること勿れ、只今案ずるに屯は難なり、儞の災難今まさに起るべし、是家内に怪事

○王慶姦に因て官司に喫ふ

次の日朝に至て自以爲く、我かく痛んで、官府に行とも、いかんぞ怺られんとて、猶寐て午時に至りしが、妻に膏藥を買んことを勸られ、只得痛を怺へ、役所前の膏藥店錢老兒が宅に往て、二枚の膏藥を求めければ、王公早く療さんとならば、家法の行血湯を二服許用ひ給へとて與へければ、王慶其儘便袋より貳兩ばかりの銀子を取出し、紙に包み、錢老兒に與へて云く、先生輕少を嫌ふことなかれ。錢老兒が云く、王公は我信友なるに、何ぞ價に及んと口にはいへ共、右の手に銀子を取り、藥箱の内に投入ければ、王慶も藥を懐中し、回らんとせし處に、衙門の西荅より、一人の賣卜先生頭に紗巾を戴き、身に葛布衫を著し、手に涼傘を持ち、傘の下に紙招牌を掛大書にて、先天神數と。又右と左に兩行の文字ありて云ふ。

荊南李助　十文一數　字々有レ准　術勝ニ管輅一

此時王慶は心中嬌秀がことを思ひ、又昨日の怪事に遇ば、則大に呼つて云く、李先生請此處に坐せよと。彼の先生が云く、官人何の貴幹かあると云ながら、熟々王慶を瞼む。王慶が云く、願くは先生某が爲に一數を卜ひ給へ。彼李助涼傘を下し、膏藥店に入來り、則錢老兒に向

友人の前にて此ことを誇り話せば、誰言となく此事世上に云觸し、正排軍張斌の耳に入れば、童貫に斯と告ぐ。童貫且怒り且羞ぢ、折を伺ひ蔡攸等と測り、潛に王慶を殺さんと計れども、世上へ聞えては、却て彌此事を云觸さんとて、只穩に王慶が罪過を尋ねける。扨又王慶は此こと已に發しければ、久しく童府に往ず。或日家内に間座せしが、此時五月下旬にして、炎熱甚しければ、板発を天井に置て乘涼しが、家内に往扇を取來らんと立けるが、忽ち彼板発の四脚搖出しければ、王慶大に叫で云く、奇怪々々とて、足を揚て彼板発を踢るに、力を用ること甚だ強く、脇肋を違へて地上に倒れ、苦しく〳〵と喚て、半時ばかり動きえず。王慶が妻は此音に驚き走來り、此模樣を見、則王慶の面を打て云く、郎當怪物毎日外に出て、家内を顧ず、漸〳〵唯今返り來て、又何事をなすや。王慶が云く、大嫂其所にあらず、我實に脇肋を差へぬ。彼婦人王慶を扶け起せば、王慶は妻の肩に手を掛け、齒を喰切叫んで云く、阿也痛こと甚しと。彼婦且笑ひ、且罵りて云く、不正質汝常々人と打合て痛ことなきに、今日何の人に打れ、此のごとく痛むやと。王慶を床上に扶上げ、先一注子の酒、一楪の肴を勸め、又戸を閉め蚊帳を釣て、其夜は夫婦歇ける。

附蔡收が子は生質殊に愍なれば、嬌秀は常に是を嫌うて恨居しが、今日王慶が風流なるを見て、いかんぞ戀はざらんや。只目を放たず、王慶を眺れば、王慶はいよ〳〵魂をぬかして見惚たるを、轎子に附添し役人董侯は、先より兩人の配目を見て、早く推料せしかど、知ぬ體にて居しが、此時に至て握難ね、王慶が劈面を只一打して叱て云く、儞は是開封府の軍健人の分として、いかんぞ見醜しく相府の轎子に附添や、再び近寄ば我相公に申上げ、儞が首をして體と二つとなさんと罵れば、王慶は夢の始て醒たる心地して、一言返す辭もなく、頭を抱て廟門を走り出で、自ら心中に思へらく、我いかんぞ此の如く獃的をる、彼は相府の令愛、我は賤しき軍役なるに、彼を妄りに慕ふは、癩蝦蟆の天鵞の肉を噉んとするに異ならず、いかんぞ食ふことを得んやとて、家に歸り、其夜はたゞ氣を忍んで休みけるが、翌日より只嬌秀が事のみ思ひ慕ひて、物事手に屬ず。正に是由來嬌鳥慕ニ春花一。不レ識ニ春花慕ニ嬌鳥一。されば嬌秀も彼日王慶を見初てより、唯日夜ともに慕うて、厚く侍婢に賄し、彼董侯に王慶の處、幷に備細を問ひ、遂に媒婆と相計り、潛に王慶を童府の裏門より招き入れ、人しらず、鬼知らず契りければ、王慶自ら悅びに堪ず、只終日酒を飲暮し、暮を伺ひ童府に忍び入ければ、誰知者もなかりける。されば覺えず三ヶ月をも經たりしが、諺に云樂究て悲を生ず。或日王慶醉て泥のごとく、

童貫が養女嬌秀艮岳に遊ぶ

彼女子は童貫には姪女なるを養女とし、蔡攸の子に許配しむ。小名は嬌秀と云ふ。歳已に二八なり。此比は天子李師々の家に遊幸して、艮岳に至り給はざれば、童貫先内相禁軍に云附け、且艮岳へも案内を通じ置き、嬌秀を遊しむ。此時王慶は恍呆として、二時許門前に待ども、彼女子更に出來らざれば、腹中大に飢し故、東巷の酒店に至り、慌しく六七盃の酒を飲み、少しの肉を食し、彼女子の去んことを恐れ、酒料も又問ず、便袋より貳兩ばかりの銀子を取出し、追附來り算用せんとて、彼銀子を與へ、再び艮岳の前に走り行き、彼女子を相俟けり。正に是酒不〻醉〻人人自醉、色不〻迷〻人人自迷と。されば須臾して果して、彼女子養婢と同く門外に歩み出で、先轎子に乘ず、門外の景色を見る。王慶立寄て彼女を熟見るに、櫻桃のごとき脣、秋水のごとき眸にして、眞に傾國の美人なれば、王慶惣身都て痲たるごとく、目をはなさず前に進み後べに後れ、彼女子を見れば、彼女子も又王慶が左右に附添ふをあやしみ、密に王慶を見るに、面白く眉黒く、風流の年少なれば、早く愛戀の心をなす。此時養婢等は再たび嬌秀を轎子に乘しめ、衆人とりまいて、艮岳を離れ、酸棗門外に赴ければ、王慶は只乘物の前後につきて至るに、彼女子ふたゝび轎子より下り、岳廟に參りて香を炷ば、王慶は只うつとりとして彼女子に見惚居れば、彼女子も、又王慶を見て目を離さず。元より此嬌秀が云名

に依て、本府の副排軍に充られたり。

○春陽を踏で妖艶奸を生ず

或日王慶五更に役所に至て、早く公事を了りければ、城南に遊んと間歩して玉津圃に至りしが、此時は政和六年仲春のことなれば、遊人蟻のごとくに集り、車馬雲の如く馳て、花柳春を競へり。此時王慶は只一人、玉津圃の池邊に徘徊し、若相識の人來らば酒樓に遊んと、垂柳の下に跼立て、春色を賞せし處に、忽ち池の北邊より、十人許の幹人前拂して、多くの養婢共、一乘の轎子を取巻て南をさして歩み來れば、王慶近より彼轎子の内を見に、一人の女花の如き貌なり。元來好色の王慶なれば、早く魂をぬかし、只轎子を見入しが、彼警蹕の幹人は悉く、童貫府中の人なれば、只遠く轎子に附添ひて、東に巡り西に廻りて、艮岳の前に至りぬ。抑此艮岳と云は、京城の東北の隅に當りて、是則徽宗皇帝の築かしむる處なり。奇峯怪石亭樹池館有つて、其美麗云べからず。外面はみな朱の垣にして、禁闕と同じ。是天子の別莊なれば、平人は指の尖も入るゝこと能ず。此時彼一簇の人は、艮岳の前に至り、多くの娵は彼女子を扶けて轎子より出し、艮岳の門内に進み入れば、門番の役人慇懃に禮をなす。元より

じく朝廷に至て恩を謝し、宛州を望で進發し、宋江が軍に追付て、王慶を征伐す。抑淮西の王慶が出所といへば、原東京開封府の副排軍にて、其父王砉は東京の富家なりしが、專ら衙門の役人と交りを結び、他人の訟事を取持て良善の人を害し、又は爭論の轂推をなして、小事を大事に廣くし、非に荷擔し枉て是となす故、誰有て恐れざる者なかりけり。こゝに又一人の風水先生有り。一ヶ所のよき墓地を見出し、此地に先祖の墓を移せば、後來大に富貴の子を生ずべしと教れば、王砉大にこれを尊信して、風水先生と相計り、頓て彼墓地を奪んとて、竟に地主と爭ひ、累年の公事に及しが、豫て役人に賄じ、終に其地を奪ひしかど、多くの費に竟に產業を亡せり。去程に其地を得て祖先の墓を移し、一年餘を過ける處に、王砉が妻竟に孕甲ぬ。又或夜王砉の夢に一疋の虎來り。堂の西に踞りしを、何國よりか一つの獅子來て虎を啣み去と見て、夢覺けるが、其妻此王慶を生り。されば此王慶は、幼少より浮浪にして、十六七歳に至れば、讀書を好ず、只馬を走せ、雞を鬪し、鎗棒を輪す。然れ共力人に勝れければ、王砉夫婦十分に愛しけるが、又三四年を經て更に家業をなさず。只少も金錢有ば、或は賭し、或は妓を買ひ、毎日大酒して人と尋鬧す。されば王砉夫婦も時々教訓すれ共、却て逆に怒て父母を罵れば、いかん共することとなし、六七年の間に遂に家産を亡ぼせり。されど武藝を善する

平を慶賀し、陳安撫、侯蒙、羅戩を上座に請ひ、宋江以下張淸を除き百七人、河北の降將、喬道淸、馬靈を始十七人左右に列座し、杯を勸めけり。されば陳瓘、侯蒙、羅戩は席上に於て、宋江等の功を稱美しければ、宋江も又三人の知己を得たるを悅び、或は朝廷のことを論じ、或は武藝を談じ、共に盃を順逆し、半夜に至て散じけり。次の日宋江は吳用と共に議し、大軍を引具し、州官に辭別し、陳瓘の兵と同じく威勝城を打立ち、南を望で進發す。其過る所の地少しも侵す事なければ、百姓大に悅び、香を炷き、燭を照し相迎へ、宋江の德に感悅す。去程に沒羽箭張淸は、瓊英、葉淸と同じく田虎を引て東京に著し、先宋江の書札を宿太尉に達ければ、宿太尉此趣を天子に奏すれば、天子も大に瓊英母子の貞孝を稱し、勅して瓊英が母宋氏を追號して、介休貞節縣君となし、有司に命じ、彼地に祠廟を建しめ、四時の祭を行はしめ、瓊英を封じて貞孝宜人となし、葉淸を封じて正排軍となし、白銀五十兩を賜て、其功を賞せしめ、張淸は昔の原職に服せしむ。其時天子法司に命じ、田虎、田豹、田彪を市中に引しめて、斬罪に行はしむ。此時瓊英は父母の小像を法場の傍に掛け、前に一つの卓子をすゑ、已に午時に至て、田虎の斬るゝを待ち、監斬官に請て、自ら田虎の首を打落し、卓上に供て父母を祭り、聲を放て大に哭ば、傍邊に有合人々も各涙を絞りけり。されば次の日瓊英は張淸、葉淸と同

制曰朕以敬天法祖。纘紹洪基。大業永成。爾來邊庭多敬國祚少寧。爾先鋒使宋江等。跋山川越險阻十分成平虜之功。朕實喜賴。今差參謀侯蒙賜詔書。陳瓘。宋江。盧俊義等以賞爾功。玆者又因强賊王慶作亂傾城芟民。爾等衆將協力盡忠先救宛州。功奏蕩平定行封賞。爾其欽哉。

宣和五年四月

裴宣勅書を讀畢れば、宋江等各萬歲を唱へ、恩を謝し已に終れば、侯蒙命じて、金銀段疋等の物を三軍に給散す。先陳安撫及び、宋江、盧俊義には、各黃金五百兩、錦緞十表、名馬一疋を賜ひ、吳用等三十餘人の正將には、各白金二百兩を賜ひ、又白銀一萬兩を三軍に分ち賜つて、事已に終れば、宋江又張淸等をして田虎等を東京に引渡せしことを述ぶ。時に公孫勝、宋江に告て、五龍山の龍像を修復せん事を乞ければ、則匠人を遣し、始の如くに裝飾直し、其外軍事を取片付け、兩三日を過けるに、諸所の城を守りし頭領は、各新官と交代し、兵馬を引て威勝に集著あれば、宋江は銀子を以て諸將に分ち與へ、又蕭讓、金大堅をして石碑を彫しめ、田虎を征伐せし功を記さしむ。此時五月五日なれば、宋江は宋淸に命じ、大に酒宴を設け、太

八編　巻之七十八

○墳地を謀て陰險逆を産す

扨も大宋徽宗道君皇帝は、太尉宿元景が奏する處に從ひ、侯蒙、羅戩を行軍參謀たらしめ、金銀、緞疋、衣甲、馬匠等の賞物を持しめ、河北に遣し、陳瓘、宋江に勅書を賜ひ、自ら又王黼、蔡攸等に勸られ、艮嶽に行幸し、遊樂をなし、軍務の大事を等閑になし給ふぞ是非もなき。正に是人主「不レ知ニ邊庭苦ニ、高唐日日盡ニ餘歡ニ」と云べし。去程に侯蒙、羅戩は勅書及び諸將に賜ふ品々三十五輛の車に載せ、河北を望で進發し、日を經て威勝城外二十里の外に至りしに、張清夫婦葉清が田虎を引渡し來るに逢ければ、張清は禮を厚くして、侯蒙、羅戩に相見え、又人を城中に遣し、此趣を報ぜしめける故、陳瓘、宋江、諸將等と同じく郭を出て相迎へ、侯蒙、羅戩を城中に請じ、勅書を龍案の上に置き、宋江を始として、各北に向て跪けば、侯蒙は南に向て、龍案の左に立つ。此時裴宣は、香を炷て沐手し、龍案に向て九拜し、高らかに勅書を讀む。衆人聞く。時に其文に云く、

蔡收共に師を喪ひ、國を辱しむ、何ぞ罪を加へ給はざる、宋江等が如きは、眞に才略人に過ぎ、屢奇功を立て、嚮には遼を征し、今又河北を定む、今王慶大に猖獗なり、乞ふ陛下早く宋江等に褒美を賜ひ、彼が軍馬をして淮西を征伐せしめば、忽ち大功を立べしと奏すれば、道君皇帝文武の百官を集て、計議あるに、宿元景進み出奏して云く、臣今朝宛州の申文を見るに、禹州、許州、葉縣の三ヶ所王慶に犯され、今已に危しと、此三ヶ所は神京に近ければ、早く征伐せずんば有べからず、臣が愚見に依に、陳瓘宋江等に勅し、彼が師を京に回さず、直に兵馬を淮西に赴しめ、先急に禹州等の三ヶ所の急を救はしめば、必ず捷を奏すべし、又侯蒙、羅戩二人は、元來武勇計略備れば、此二人を行軍參謀たらしめ、然るべしと。皇帝是を可なりと准入給ふ。此王慶が軍事は、次巻を見るべし。

按ずるに流布の本に、北軍より降參の將孫安毎度宋朝に力を盡し、北將の唐顯を討と有て、田虎威勝城より出軍の時、供奉の諸官の内に、都督胡英、唐顯とあり。是は唐昌の誤なり。又姓名の文字附假字の誤甚だ多く、剩字にも誤甚し。今悉く訂す。

に蔡京席上に於て兵法を談ずれば、衆人愼で是を聽く。其中に一人の官人、面を仰で屋上を遠見し、更に是を聞ざれば、蔡京大に怒て、其姓名を査照するに、此人姓は羅、名は戩、世々雲南達州の人なり、今武學諭の官たり。此時蔡京怒止ず、直に其罪を正さんとせしに、天子已に臨幸あれば、先百官を卒て聖駕を迎へ、各萬歳を唱けり。此時武學諭羅戩は、蔡京が啓口を待ず、俯伏して奏して云く、臣羅戩萬死を冐し、淮西の强賊王慶が反叛せし由を奏せん、王慶淮西に於て亂をなす事五年、官軍も敵すること能ず、嚮には蔡收大兵を以て征せしが、全軍敗北し、罪を恐れ、陛下一人を欺て云く、軍士水土に服せず、權に兵を收むと、已に今大なる患をなせり、只今其勢益甚しく、前月臣が故鄕雲南を打取り、百姓を殺し、婦人を淫し、其慘毒云に忍びず、共に八ヶ國十六ヶ所の州縣を奪り、然るに蔡京我子の師を喪ひ、國を辱しむるをも恥ず、聖駕未だ至らざる先に、猶嚴然として兵法を談ず、臆病者の談ずる兵法を聽て何の益かあらん、故に臣更に耳に懸ざれば、彼却て怒をなす、陛下速に國を誤る賊臣を誅し、早く王慶を征伐せしめ、生民の塗炭を救ひ、永く社稷を保ち給はゞ、天下の幸ひならんと、憚る處なく奏しければ、道君皇帝始て聞し召し、深く蔡京が罪を問給ふ。時に蔡京又奸佞好言を以て支語かせば、遂に罪を加へ給はず。次の月亳州の太守侯蒙、京に上て上書して云く、童貫

しと。宋江愼んで恩を謝し、又陳安撫に告て、田虎が宮殿金屋悉く燒拂ひ、庫藏の金錢糧米を以て百姓を賑はし、又書を認め宿太尉に呈し、表を寫して朝廷に奏聞し、捷音を告んとて、其書翰を戴宗に持せ、東京へ遣しける。されば戴宗は宋江の命を請け、表文書札を持ち、陳安撫が使者に追著き、東京に至り、先宿太尉の府中に至りけり。

○陳瓘宋江同く捷を奏す

斯て戴宗は宿太尉が府中、楊虞候に就て書簡表文を呈せしむれば、宿太尉見て大に悦び、宋江等が大功を稱し、翌早朝陳安撫が表文と倶に天子に奏すれば、道君皇帝龍顏悦び給ひ、則宋江等に、軍を收め歸京すべし、重く官人となすべし、と勅命下れば、戴宗此消息を聞て、則宿太尉に辭別し、次の日未の刻、威勝の城中に歸り、宋江、陳瓘に斯と告ければ、陳瓘令して、田虎、田豹、田彪三人を東京に引渡さしめ、其餘の生捉は悉く、威勝の市中に於て斬らしめけり。此時晉寧の屬下、蒲縣の賊は田虎已に擒となりしを聞き、城を獻じ降參すれば、陳安撫盡く免し、再び其故里に回し、良民となさしめけり。去程に道君皇帝、已に勅使を河北に遣し、陳安撫等早く歸京せん事を命じ、次の日武學院に御幸有ければ、百官先に集り伺候せり。時

周通、陳達、楊春、楊林に兵馬を添て索超等を助けしむ。此時宋江は諸將と共に銅鞮山を圍んで、已に李天錫を破り、又使者を陳安撫の軍に遣し、賊首田虎を捉し趣を注進し、自ら大軍を領し、威勝城に至りければ、盧俊義相迎て城に入り、先榜を出して、百姓を安んぜしむ。此時盧俊義、卞祥を引出し、宋江の前に引居ければ、宋江は卞祥が魁偉たるを見て、自ら縛を解き、禮を厚くして、相待ば、卞祥も又宋江の意氣に感じ、遂に宋軍に歸順せり。次の日張清夫婦及び葉清は、田虎、田豹、田彪を陷車に入て威勝城に至りければ、宋江命じて、嚴しく是を守らしめ、又酒宴を設けて、張清夫婦の爲に慶賀せり。此日威勝の屬縣武聊の城主方順は、城を獻じて宋朝に歸順せんことを乞ければ、宋江免して、初のごとく城を守らしむ。されば宋江は威勝に一兩日止りけるに、探馬來て告けるは、關勝等は兵を領し、楡社に至り、索超を扶けて北將房學庶を殺し、其兵を討取事五千餘人、降參する者數千人と告ければ、宋江大に悅び、諸將に對して云く、衆兄弟の力にて大功を成ことを得たりとて、張清夫婦が、賊首を捕へし功を始め、諸將の功を記さしむ。扨四五日經て、陳安撫の兵馬到著有り、と告ければ、宋江諸將と同じく郭を出て相迎へ、城中に請じ、參見已に了ければ、陳安撫稱贊して云く、將軍等五月の内に大功をなす事、眞に不世の勳と云つべし、某此趣を朝廷へ奏聞せば、重く將軍等を用ひ給ふべ

眞先に進む大將は、副先鋒盧俊義なり。元來盧俊義は諸將と共に沁源城を攻取り、大兵を領し、威勝城に攻來り、北軍、宋軍と戰ふと聞き、早く兵を進めしなり。北軍大に敗北する處に、秦明、楊志、杜遷、宋萬兵を領し東門を奪ふ。歐鵬、鄧飛、雷横、楊林は西門を奪ひ、楊雄、焦挺、穆春は歩兵を領し、王宮に攻入ば、龔旺、丁得孫、李立、石勇、陶宋旺は歩兵を領し、内院に攻入り、宮女、近侍等を盡く切殺す。されば太子田定は變を聞て自殺せり。此時張清、瓊英は孫二娘、唐斌、文仲容、崔野、耿恭、曹正、薛永、李忠、朱富等と切立れば、北兵幾萬數を盡し討れ、屍の山血流れて大河の如し。盧俊義令を傳へ、百姓を害する事を制し、急ぎ使者を以て捷音を宋先鋒に報ぜしむ。其夜宋江は北軍を打取て、直ちに五更に至るに、降參する者幾千と云ことを知らず。次の朝、盧俊義軍將を計點するに、降將耿恭人馬に踏殺されたるのみにて、其餘は盡く恙なし。此時衆將來て功を獻ず。中にも焦挺は、田定が死屍を負來れば、瓊英は牙を咬切り、自ら佩刀を拔持ち、田定が首を斬て父母を祭る。鄔梨が妻倪氏は已に病死せしかば、瓊英は葉清が妻安氏を呼で、張清と同じく、盧俊義に暇乞し、襄垣に返て田虎を押送し、宋江の陣に赴きける。されば盧俊義猶も軍務をなし、一兩日過ける處に、忽ち探馬來て告けるは、北將房學度兵を引て楡社を圍で、索超湯隆と戰ふと告ければ、急ぎ關勝、秦明、雷横、

に叫んで、我二人罪なしとて、もがき立んとせしかば、早縛られ、馬上の田虎も呉用が計にて、孫安をして宋軍中にて能田虎の面貌に似たる者を選ばしめ、粧束を似せしめ、又後に從へる尙書都督等は、皆解珍等が假に出立なり。此時衆人各兵器を携へ、先王定六、郁保四、蔡福兄弟に五百の兵を領せしめ、田豹、田彪を裏垣に引渡さしむ。城上よりは田彪等が捉られしを見て、詐あるを曉り、各兵器を携へ、城門より切出れば、此時瓊英は解珍兄弟を左右に從へ、散々に北兵と戰ひ、石子を飛し早く二十餘人を打ければ、北兵此勢に駭き、各城中に退くを、瓊英兵を招て追ふ暇に、樂和、段景住は軍士に命じ、各北軍の號衣を脫しめ、自ら朴刀を挺へ兵を領し、南門に攻入り北兵を切退け、宋軍の旗號を城上に建ければ、瓊英も兵を領し、切立切立早く南門に攻入ゆゑ、城中大に騷動し、猶文武の百官、王親、國戚、數萬の兵を領し切出れば、瓊英等衆人縱ひ萬夫の勇有り共、僅四千餘人を以て數萬の敵に抵り難く、急ぎ兵を退んとせし處に、沒羽箭張淸は宋先鋒の令に依て、八千の軍兵を引來り、城門に切入り、石を飛し、北將四人を打倒しぬ。此時瓊英は已に味方の多きを見て、父の仇を報ぜんと、猶も深く攻入るを、張淸大に止て云く、田虎は我已に擒にすれば、汝深く重地に入べからず、と制しける處に、忽ち城外喊の聲大に起り、金鼓三たび響ければ、張淸馬を回し城外を見るに、盡く宋軍の旗號にて、

田虎が巣穴
威勝城滅亡
乱軍

薛時、林昕は猶三萬の軍馬を領き、銅鞮山に迯上れば、宋江兵を領し、四面八方を取圍で攻ける處に、魯智深歸來て、田虎は已に張淸の手に生捉たりと告ければ、大に悅び、人を褁垣に遣し、武松をして堅く城門を閉て、田虎を守らしめ、張淸は早く兵を領し威勝に至り、瓊英等と力を合べしと命ぜしむ。此時瓊英は吳用に計を授り、解珍兄弟、段景住、王定六、郁保四、樂和、蔡福兄弟と同じく五千の軍馬に各北軍の旗印を持せ、武聊城外石盤山の側に陣取して、威勝の動靜を伺ふに、田虎は已に城を出て、我兵と戰ふと聞ければ、瓊英は衆人と同じく威勝に赴くに、此日天已に昏れ、暮霞歛り、新月東山の頂より出る比、城下に至り、嬌なる聲して、我は郡主瓊英なり、大王を守つて歸り來れり、疾く城門を開くべし、と呼れば、守城の軍士、王宮に此よしを告ぐ。田豹、田彪慌しく馬に乘南門に來り、城樓に上て望見るに、果して飛龍傘の下に大王馬に跨り、馬前に女將あり。旗には郡主瓊英と誌したり。又後へに、尙書都督等の官あり。時に瓊英又高聲に叫で云く、胡都督等は宋兵に敗られ、行處を知らず、我大王を保護して、此に至れり、早く城を出て御駕を迎ふべしと。田豹、田彪は是田虎なるを見て、急ぎ城門を出て相迎へ、田虎の前馬に至りけるを、彼馬上の大王大に喝して云く、武士等我が爲に二賊を捉へよ、と云も果ざるに、左右の武士集り來て、二人を擒にせしかば、田豹、田彪大

○張清瓊英雙功を建つ

扨も田虎の先陣大半城内に入し時、忽ち一聲の梆子響き、四方の伏兵一度に起り、胡英が領せし三千の兵馬こと〴〵く陷穴に追込んで、長鎗にて亂れ突ば、憐むべし三千餘人夢中の人となる。田虎は計なるを知り、馬に鞭北を望んで走りけるを、張清、葉清兵を領し追けれ共、田虎が乘し馬は、聞えし名馬、未だ追付がたきに、田虎が馬前に一陣の陰風起り、一人の女子げんしゆつし、口中に叫で云く、賊首田虎いづくへ行や、仇氏の夫婦こゝに有り、汝に害せられたる怨、忘れがたし、と云も終らず、又一陣の冷風起り、彼女子已に消失しが、田虎が乘たる名馬驚き嘶き、田虎地上に落けるを、張清馳來つて生捉にせし處に、北將唐昌大に怒り、田大王を扶んと鎗を挺へ、突來れば、張清早く石子を取り、唐昌を打けるに、面に中り馬より落つ。其時張清大に叫で云く、我眞は仝羽にあらず、宋先鋒の部下沒羽箭張清なりと云も終らず、唐昌を突殺し、自ら田虎を引立て已に城中に入ける。魯智深は終日北兵と戰ひ、銅鞮山の北迄至りしが、忽ち田虎は張清に生捉れしと聞き、此よし宋先鋒に告んと南に歸りけるが、日昏時なり。宋江が軍士北兵を討取事二萬餘人、范美人及び姬妾等も皆亂軍に殺され、李天錫、鄭之瑞、

れ打ば、孫安は雙劒を揮て共に北陣に切入けるに、宛も無人の境に入ごとく、北軍を斬立る。北軍十萬の衆も、縦横に切立られ、散々に敗北す。田虎は李天錫等と東の方へ逃れける處に、魯智深兵を引て追來れば、李天錫をして迎へしめ、自ら吳昌、唐昌、葉淸と共に只五千の敗軍を從へて、西の方へ逃れし處に、又一班の軍馬東より突來れば、田虎天を仰で嘆じて云く、天我を喪せりと。北兵彼軍馬を見るに、眞先に一人年少の將軍、頭に靑巾を戴き、身に綠戰袍を著し、手に梨花鎗を携へ、捲毛の白馬に乘じ、馬前旗の上に分明に書して云く、中興先鋒郡馬全羽と。葉淸是を見て、田虎に斯と告れば、田虎大に悅び、急ぎ馬前に召しむれば、全羽馬より下て奏して云く、臣甲冑身にあり、俯伏する事能ず、其罪萬死すべし。田虎が云く、卿を宥す、罪なし。全羽又奏して云く、今事已に急なり、請大王暫く襄垣城に幸し、暫く敵を避給へ、臣郡主と同じく宋兵を退け、再たび威勝に還幸なさしめ、基業を中興すべし。田虎大に悅び、急ぎ令して、襄垣城に赴んと、全羽を後軍の殿となし、胡英を前隊とす。此時宋の大軍後より追來れば、且戰ひ且走つて、已に襄垣城下に至りければ、守城の軍卒大に城門を開きたり。前隊に進みし胡英等は大王を顧るに遑あらず、はや門内に進み入けり。

次の日雨晴ければ、軍馬を進めんとする處に、又飛馬來て告けるは、宋江、孫安、馬靈を遣し、敵を拒ぐ、と告ければ、田虎大に怒り、孫安、馬靈は我高官にて、高祿を受ながら反叛して我に敵す、もし彼二人を捉る者には、千金を賜ひ、萬戸侯に封ずべしとて、自ら兵を驅て宋軍を相迎ふ。宋軍前隊の病尉遲孫立、鐵笛仙馬麟、馬を進め北軍を臨むに、劍戟林の如く、旌旗風に飜り、飛龍傘の下に金鞍白馬上に坐したるは、草頭天王田虎なり。自ら陣前に出戰を挑む。宋陣中には宋江中軍に馬を扣へ、吳用、孫新、顧大嫂、王英、扈三娘、孫立、朱同、燕順を左右に從へり。此時田虎は宋江を見て左右に命じ、生捉にせよと令する處に、忽ち飛馬來つて報けるは、關勝等が兵馬は楡社、大谷二城を破り、盧俊義が兵馬は介休、平遙二ヶ所を破り、又太原城を水攻にす、又右丞相卞祥は綿山の北に在て花榮等と戰しが、盧俊義太原より兵を引て後へを攻め、竟に卞祥を生捕にす、只今盧俊義兵を關勝と合せ、沁源縣を圍み、已に危く候と告ければ、田虎大に驚て、急ぎ令し、軍を收め威勝城に歸らんと、則李天錫を後への押住となし、自ら薛時、林昕、胡英、唐昌を從へ、銅鞮山の北迄退しに、忽ち一聲の砲響き、宋軍の猛將魯智深、劉唐、鮑旭、項充、李袞、各兵を領し去路を遮れば、田虎は御林の軍馬に命じ禦しむる處に、馬靈、孫安傍より打來り、馬靈は足に水火の二輪を踏み、金磚を以て亂

殺さるゝ者、幾萬人を知らず。又死首は城の塀、屋根に充滿す。只城外に北齋神武帝建る處の避暑宮あり、基地甚だ高し。近所の軍民一度に上り、押合て踏殺さるゝ者二千餘人なり。城外の百姓は盧俊義が密の諭を得て、鑼の聲響きを暗音に、悉く高き岡に登れば、一人も損ずる者なし。此時李俊は水軍を領し、西門を奪ひ、船火兒張横は、浪裏白跳張順と同く、北門を奪ひ、立地太歳阮小二、短命二郎阮小五は東門を奪ひ、活閻羅阮小七は南門を奪ひ、各宋軍の旗印を立て、日暮に至て水退けば、李俊等大に城門を開き、盧俊義の軍馬を請て城に入る。此時城外に鷄犬の聲聞えず、屍首は積で山のごとし、只溺死する者數を知らず。只逃るゝ人民は千餘人に過ず。各地上に拜伏して命を乞ば、盧俊義悉く是を免す。されば頂忠徐岳は帥府の後の檜樹に上在しが、水退くを見て、密に下り逃んとせしを、忽ち宋兵に生捉れ、盧先鋒の前に引渡せば、頓て首を刎にけり。扨庫中の金銀粮米を取出し、水に浸されし百姓を賑はし、重て城の塀を修復し、房屋を建、百姓を住居せしめ、人を宋先鋒の方に馳せ、捷を告しむ。田虎は十萬の大軍を統領し、大雨に逢て、銅鞮山の北に陣取在けるが、忽ち流星馬來て報じけるは、鄔國舅病卒し、郡主郡馬も此故に襄垣に歸り、國舅を葬れりと告ければ、田虎大に驚き、急に人を襄垣城中に遣し、旨を傳へ、瓊英に城を守らしめ、全羽は來て我軍を扶くべしとなり。

彼等久しく止ること能ふまじ、此勢に乘じて、城を出戰はゞ必ず勝を得んとて、已に商議定りけり。時に四月上旬なり。張雄急ぎ城樓に登りて、城外を望むに、宋兵各履を穿て、山阜高岡に登りければ、張雄大に疑ひて有ける處、忽鑼の音聞え、智伯渠の邊と東西より千軍萬馬を奔馳るごとく、暫くの間に、洪波怒濤衝至れば、是天上の銀河より水を傾るに異ならずして、更に逃るべき樣も見えざりけり。此時正に四月上旬なり。張雄は兵を分つて宋兵を討んと、已に用意をなしける處に、忽ち四面に白浪天を浸し、城中に突入る。是原來混江龍李俊が計、大雨の後水勢俄に漲るを見て、二張三阮等と同じく、二千の水軍に命じ、智伯渠暨び晉水を引て、太原城に灌ぐ、正に是大地忽爲₂憑夷府₁、盡是江魚腹中人。暫くの間に城下水勢湧浸せば、軍民驚き塀に上り、屋上に登り、或は木を攀ぢ、或は梁を懷き、老たるは卓上に上るに、忽ち浮上り、房舍は盡く傾き、彌が上に大水嵩み來るにぞ、各水中の鬼となりにけり。城外には李俊を始め、二張三阮、各飛江桴に乘て、城に逼り近づく。其高さ城の塀と齊しければ、塀を攀ぢ、城中に入り、各手に利劍を取り、守城の軍士四五百人を切倒す。張雄は城樓の上に上て、大に駭き逃る間もなく、張橫、張順飛江桴より城に上り、朴刀を以て張雄を切倒せば、張順立寄首を切る。されば城外の水勢漸退く頃には、溺死したる者、壓

太須城中
大水と僮と
軍民騒乱す

宣贊、郝思文、呂方、郭盛をして汾陽府を守らしめ、自ら軍馬を領し、介休縣を打破り、韓滔、彭玘に彼地を守らしめ、又平遙縣を打破り、孔明、孔亮に彼地を守らしめ、自ら大軍を引率し、只今太原城を圍むといへ共、大雨に阻てられ、十分に攻ること能ずと告ければ、水軍の頭領李俊傍より進み出で、關勝に對して云く、盧俊義今大雨に遇て城を攻ること甚だ利あらず、若洪水に至る時は、三軍共に止ること能ふまじ、此時賊人是を討ば如何せん、爰に一つの計あり、盧先鋒と共に計ん、と云ければ、關勝大に悦び、李俊を太原城に至らしむ。されば李俊等、童威、童猛をして船を管領せしめ、自ら張横、張順、阮小二、阮小五、阮小七と同じく、簑笠を著て風雨を冒し、間道より盧俊義の陣に至り、未だ寒温をも敍ず、密に盧俊義に計を授ければ、盧俊義大に喜び、急ぎ軍士に下知をなし、直に木を砍て筏を作らしめ、又李俊等にも此事を行はしむ。抑此太原城の守將張雄は、萬夫不當の勇あり。又兩人の副將あり。一人は頂忠と名付く、一人を徐岳と名く、共に武藝に通ぜり。手下の軍兵盡く兇惡にして、城中の百姓其害に當らざるはなし。此故に家産を捨て四方に遁れ出て、人民も甚だ少し。張雄等は今大兵に圍れ、甚だ愁て在けるが、今此時に至て大雨降るを見て、大に悦び、頂忠、徐岳と商議して云く、今連日の大雨にて宋軍水地に在て利なし、況や柴薪少なければ、

敗を分たず有けるを、花榮傍より見て、心に卞祥の手段を愛し、特と暗箭を放たず、馬を跳せ鎗を挺へ、戰を助く。其時卞祥兩將を引受て、再び戰ふ事三十餘合にして、勝敗を分たず。且又北軍の陣中には、卞祥の過あらん事を恐れ、金を鳴し兵を收れば、花榮、史進も天色已に晩るを見、又寡を以て衆に敵すべからざれば、軍を收め、南に去こと十餘里に陣取す。此夜南風大に起り、黑雲四方に暗く、震動雷電し、大雨車軸の如し。此時田虎許多の軍勢を引領し、已に威勝城を離ること百餘里にして陣取す。帳中には內侍姬妾及び、范美人各宴を設けて歡樂す。されば此夜より五六日を經るといへ共、霖雨繼で止ざれば、翠蓋油幕都て漏り、軍士も炊爨すること能ず、弓箭翎脫れ、衣甲盡く濕へば、甚だ惱て見えにけり。去程に索超、徐寧、單廷珪、魏定國、湯隆、唐斌、耿恭等は、關勝、呼延灼、文仲容、崔野、及び李俊等、水軍の諸將と商議し、單廷珪、魏定國を留て潞城を守らしめ、各楡社縣に向ひて城を破り、又索超、湯隆をして楡社を守らしめ、關勝等の諸頭領は勝に乘じて、其勢破竹の如く、又大谷縣を討破り、守城の將を殺し、其餘は悉く降參せしかば、關勝は百姓を安撫し、又捷軍を宋先鋒に報ぜしむ。次の日より關勝等も、又同じく大雨に遇て兵を進むること能ず、虛しく一兩日を經ける處に、忽ち盧俊義より使者來つて報じけるは、盧俊義先の日

李廣花榮是を見て、馬を躍せを鎗挺へ、馮翊と戰ふ事十合に至らず、花榮馬を返し本陣に迯回れば、馮翊又馬を飛し追蒐しに、花榮左の脇に花鎗を挾み、弓を取て箭を搭け、滿月のごとく扯き、身を扭回て颼地放てば、其矢誤ず、馮翊の眉間に中ければ、馬より落る時、花榮忽ち馬を返し、一鎗に突殺す。宋軍勢に乘じ、攻寄れば、北軍散々に敗北し、顧愷は林冲が鎗に突殺され、魚得源は馬より落て亂軍に踏殺され、其外五千の軍馬大半討れけり。其餘は盡く迯失ければ、花榮等猶も追蒐五六里を過ける處に、早く卞祥が大軍に出合たり。抑此卞祥は、原來農家の出身にして力强く、能鼎を擧げ、又武藝も衆に超たり。此時兩軍金鼓を打ち、鬨を咄と作り、北軍の大將卞祥眞先に馬を出す、其姿頭に凰翅を餝りたる金盔を戴き、身に魚鱗の銀甲を著す。身の丈九尺、腰の廻り十圍、手に大斧を提げ、傳祥、管琰、寇琛、呂振の四將を左右に從へ、又統軍提轄防禦團練等の諸官人を背後に備へたり。宋軍中より九紋龍史進馬を縱て、陣前に馳出、大に喝して云く、來る者は何人ぞや、早く馬を下て縛を受け、我刀を汚すことなかれ。卞祥呵々と大に笑て云く、鑵兒も又二つの耳有に、汝人として卞祥が大名を知ざるや。又史進叫んで云く、暴逆の匹夫何ぞ天兵を拒むやと、馬を跳せ、手に三尖兩刃の八環刀を持て討て懸れば、卞祥も又斧を輪し相迎ふ。兩將共に戰ふこと已に二十餘合に及べ共、未だ勝

兵十萬を選び、吉日をトし、牛を殺し馬を宰し、旗を祭て師を起す。又弟田彪、田豹及び、都督范權、其外文武の百官と共に、太子田定を輔け國を守しむ。されば葉清心服の人を襄垣城中に遣し、此趣を張清、瓊英に報ぜしめければ、張清大に喜び、解珍兄弟をして、星夜に宋先鋒に報ぜしむ。されば卞祥は兵符を授けて軍馬を選び、樊玉明、魚得源、傳祥、顧愷、寇琛、管琰、馮翊、呂振、吉文炳、安士隆等の諸將を從へ、其勢都合三萬騎、威勝州の東門を出て、軍馬を兩隊となし、先鋒は是樊玉明、魚得源、馮翊、顧愷等五千の軍馬を引領て、沁源縣を過ぎ、綿山を經る處に、忽ち金鼓天に響き、林の內より一彪の軍を馳出す。其時眞先に進んだるは、宋軍の頭領花榮、董平、林冲、史進、杜興、穆弘等なり。都て五千の軍馬を引て、北軍を切止む。原是宋江が張清の報を得て、衆將此地に埋伏せしむるなり。其時董平手に兩桿鋼鎗を提げ、大に喝して云く、來る者は何ぞや、早く繩を受べしといへば、樊玉明大に罵り云く、水泊の草寇、何の故に我城府を奪ふや。董平大に怒り呼はつて云く、天兵こゝに有り、いかんぞ拒抗や、と云も終らず、雙の鎗を挺へて、樊玉明と戰ふこと十餘合、いかんぞ玉明、董平が英雄に及ばんや。馬をかへし迯けるに、早く董平に追付れ、只一鎗に咽喉を刺れ、馬より落て死にけり。其時北將馮翊是を見て、大に怒り、馬を跑らし、渾鐵の鎗を挺へて、直に董平を討んとす。小

猶も戰ひ守るべし、古語に云ふ、寧ろ鷄の口となるとも、牛の尾となることなかれ、主上よく是を再四し給へ、と奏しければ、田虎躊躇して未だ答ず。又奏して云く、總官葉清襄垣より來りと告ければ、田虎急ぎ召出すに、葉清奏して云ふ、郡主瓊英、郡馬全羽、屢勝て兵威大に振うて、今正に昭徳を攻んとするに、鄔國舅適病に染て果さず、伏て望らくは、大王良將精兵を添て郡馬を助け給はゞ、まさに昭徳府を恢復すべし、と申ければ、其時僞都督范權傍より奏して云ふ、臣聞く郡主郡馬甚だ驍勇にして、宋兵都て是を恐る。若大王自ら猛將雄兵を隨へ助け給はゞ、必ず中興の大成をなさん、臣不肖たりといへ共、太子と同じく國を守べしと奏しければ、田虎遂に其計に陷る事を知らず、此言に從へり。原來范權の女子傾國の姿あり。范權始て是を田虎に獻じて、后宮とす。田虎大に寵愛す。是故に范權が說、從ずと云事なし。今日范權は宋兵の勢大なるを見て、忽ち田虎の恩を忘れ、又葉清より重き賂を請け、機に乘じ國を賣らんとす、仍て田虎を勸め、襄垣に赴しむ。田虎は卞祥を大將として、十人の猛將、三萬の精兵を差添へ、盧俊義が兵を迎しめ、又僞大尉房學庶に、猛將十人、精兵三萬を差添へ、楡社縣を救ひ、關勝等を迎へしむ。草頭天王田虎自ら僞尚書李天錫、鄭芝瑞、護駕樞密薛時、林昕、都督胡英、唐昌を始として、敎頭、團練使、指揮使、將軍、校尉等の諸官を領して、精

商議して、猶も北方へ進發し、征伐せん用意したり。戴宗、馬靈は共に一日千里の法を行うて、只一日に昭德に至り、宋先鋒に備細を語れば、宋江大に悦び、又魯智深がことを聞て、且訝り、且は悅び、自ら陳安撫が府に至て捷音を報じけり。

○混江龍水を太原城に灌ぐ

去程に田豹は、段仁、陳宣、苗成と同じく敗軍の兵を引き、威勝に返て田虎に見え、師を喪ひ、地を失ひし趣を泣て訴へける處に、僞樞密官、內裏に入て奏して云く、今朝より四方の報馬頻に來て報じけるは、統軍大將馬靈は已に擒となり、宋軍關勝、呼延灼は楡社縣を攻め、又盧俊義が兵馬は介休縣を打破り、已に城郭を奪となり、其上只襄垣縣の鄔國舅より、時々捷軍を報ずるのみ、宋江も又襄垣に近付ずと告ければ、田虎大に驚き、手足を措ことなく、急ぎ文武の百官を集め商議して、金に降らんとす。其時僞右丞相大師卞祥進み出で、左右を叱し、衆官を退け奏して云く、縱ひ今宋公明の兵三路より攻來る共、我此威勝の地は萬山四方に環り列り、糧草二年をたもつべし、況や御林衞駕等の精兵二十餘萬あり、東に武縣、西に沁縣、源縣あり、後に太原縣、祈縣、大谷縣あり、各〻精兵五萬あり、城郭堅固にして糧草豊に足れり、

を經んやといへば、戴宗心中に訝りながら、何の益なきことなれば、互に笑ひ爭うて歩けるに、遂に馬靈とともに、汾陽城に到著す。此時公孫勝は已に北軍を切退け、兵を收めて城に入り、盧俊義、秦明、宣贊、郝思文、韓滔、彭玘等は、索賢、黨世隆、凌光の三將を殺し、又田豹、段仁、陳宣、苗成等を追散し、兵を收め返りけるに、又喬道清が武能徐謹を追散し、陳達、楊春、李忠、周通等と共に返らんとせし處に、忽ち出合ければ、再び兵を合して北軍を追ひ、楊春は大捍刀を以て、武能を馬より下に切落す。郝思文は鎗を以て、徐謹を刺殺す。是に依て北軍大に敗れ、此外打るゝ者數をしらず。又馬疋衣甲を奪ふこと多し。其時盧俊義は喬道清と兵を合して凱歌を唱へ、共に城中に返り、帥府に入處に、魯智深、戴宗等馬靈を引來るに出合ければ、盧俊義大に悅び、忙しく問て云く、我師いかゞして此處に至るや、又は宋先鋒と鄔梨、戰うて勝負いかにと尋るに、魯智深答て、井に落し事、及び宋江鄔梨と戰ひ、勝利を得し事共を委しく語れば、盧俊義を始め、衆多の頭領も不思儀の思ひをなしにけり。其時盧俊義自ら馬靈の縛の索を解き、禮を厚して款待ければ、馬靈も路上にて魯智深が話を聞て、奇異の事に思ひしに、今又盧俊義が意氣有をみて、拜伏し降參す。其日盧俊義は三軍を賞勞し、其夜は各歇けり。次の日盧俊義は、戴宗等及び新に降參の馬靈を以て、宋先鋒へ捷音を報じ、又軍師朱武と

窓より望み見るに、一人の和尙趺坐して經を念ず、我彼和尙に歸路を問に、彼和尙答て云く、來る處より來り、去處より去と、我其心を知らず大に焦躁ければ、彼和尙笑て云く、上は悲々想に至り、下は無間地に至り、三千大千世界廣遠なれども、凡人知こと能ず、凡人皆心あり、必ず心あれば、必ず念あり、地獄天堂皆念より生ず、是故に三界惟心、萬惟識一念、一念生ぜざれば、六道倶に銷す、輪廻斯に絶と告ぐ、我彼僧が明白に說を聞て、彼和尙を拜せんとするに、彼和尙笑て云く、汝一囘緣纏井に入て、迷はんとす、我汝に歸路を敎んとて、我を領て、五六步を過ぐ、又示して云く、是より汝と相分れん、年を經て再び相會せん、此を去ば必ず神駒を得んと、云も終らず遂に和尙を見ず、又前面を見るに、山川草木先に異なる事なし、依て五六步ばかりも進みけるに、計らず、此馬靈に相遇り、我其蹊蹺なるを見て一禪杖に打倒せり、然といへども、我何故に此地に至ることを知ず、又此處の氣候を見るに、昭德府と同じからずして、如何してか桃李大葉を生じて一枝の花もなし。戴宗笑つて云く、今已に三月下旬なるに、桃李いかんぞ花あらんやといへば、魯智深更に信とせず、爭うていふ、啊呀今はまだ三月の下旬なり、我只適纔か井に落て、止ること暫くにして、只今此處に出來るに、何ぞ其ごとく日數

魯智深窟中の
別世界
和尚の事を
聴問す

ずると等しく、馬靈が持し金礴地上に落ち、宋兵の軍器及び惣身悉く火焔を生じ、長蛇の陣を變じ火龍の陣となせしかば、北兵大に驚き、各命を遁んと散々に敗走す。公孫勝麈尾を以て親方を招き、北兵を討取こと幾萬を知ず。馬靈は公孫勝に法を破られ、漸一方を切拔け幸ひに神行の法をなし、脚に風火の二輪を踏み、東を差て飛ければ、神行太保手に朴刀を提げ、神行の法にて追かけしが、暫くの間に、馬靈行こと二十餘里なるに、戴宗は未だ十六七里に過ざれば、馬靈の影を見失はんとす。此時馬靈は猶も飛行して、一つの林を過ければ、一人の大和尚手に禪杖を振り揚げ、早く馬靈を打倒し、頓て繩を懸ける處へ、戴宗追著き那處を見に、此體なれば近寄けるに、魯智深ゆゑ、師はいかんがして此に在や、是天より降るに似たり。魯智深笑て云く、我天より降ず、只地下より出たりとて、二人馬靈を縛り、實地を踏で汾陽へと進發す。されば戴宗は途中に於て、魯智深に此來歷を尋るに、答て、我前日襄垣の戰に、田虎一人の烏婆娘を遣す、這厮石子を飛し多くの頭領を打破り、我彼烏婆娘を追て捉んとせし處に、料ずも茂草叢中の一穴に陷り、半時斗り經て、漸空底に至しが、幸に身を損はず、又穴中を伺ふに、傍に一穴ありて、少しく亮明あれば、我進み去て見るに、不思議や別の天地あり、又山河人家等あり、又は多くの人民有て都て營業をなす、此人各我を見て笑へども厭ず、已に

八編　巻之七十七

○花和尚縁纏井を解脱す

扨も盧俊義令を下し、黄信、楊志、歐鵬、鄧飛四人を、公孫一淸に隨はしめ、又戴宗は神行を能すれば、是も同じく隨しめ、陳達、楊春、李忠、周通四人を、喬道淸に隨しめ、盧俊義自ら、秦明、宣贊、韓滔、彭玘、郝思文と同じく兵を領し、北門を出で、田豹を相迎へ、此日汾陽城外東西北の三方には、金鼓天に喧しく、旗風に飜り、東の方には神駒子馬靈馬を當先に進め戰を挑めば、宋兵大に城門を開き、吊橋を下して城外に出で、長蛇の陣を列たり。時に馬靈馬を跳らせ戟を挺へ、大に罵り云ふ、汝等敗將速に我城地を返せ、少も遲延せば汝等を肉泥となさん。此時宋の軍中より、歐鵬、鄧飛馬を竝べ馳出し、高聲に叱して云く、汝が死期已に至れりと云も終らず、鐵鎗を輪し打かゝれば、馬靈戟を挺へて相迎ふ。三將十餘合戰しが、馬靈左の手に金磚を取て歐鵬を打んとす。公孫勝は馬上に劍を揮て法を修せしが、馬靈の手起るを見、劍を以て一度指ば、忽ち一聲の霹靂響き、火光輝き、公孫勝が持し劍より火焰を生

此巻に限らずかゝる事所々に多し。作者の不念か傭筆の謬哉。

合して相向ふ。其勢三萬餘騎、汾陽城の北十里ばかりに陣取ぬ。又田豹に從ふ人々には、索賢、凌光、段仁、苗成、陳宣、黨世隆等萬夫不當の勇有り。されば盧俊義、毎日馬靈等と戰へ共、只妖術に苦しめられ、多く味方を損じければ、盧俊義は汾陽城に退き、堅く城門を閉しめて、敵の動靜を伺ふ處に、忽ち東門の軍士來り報じて云く、公孫勝、喬道淸、ともに宋先鋒の命を受け、二千の軍馬を引具し來て戰を佑くと。盧俊義急ぎ城門を開しめ、自ら公孫勝を請て上座に坐せしめ、喬道淸を次の座に請ひ、酒盃を勸めながら、多くの味方を失へ共、某手を束ねて計なし、今兩先生の來り給ふこと、豈悦しからずや、と語れば、喬道淸が云く、先鋒憂へ給ふことなかれ、公孫先生及び某も是が爲に來れりと、いまだ云も終らざるに、軍士來て、馬靈兵を領し東門より攻寄せ、武能、徐謹は西門より攻寄せ、田豹は諸將を引き、北門に寄ると告ければ、公孫勝聞て、某東門に向ひ馬靈に敵せん、喬賢弟は西門に出で、武能、徐謹を生捉にすべし、盧先鋒は北門に向ひ、田豹を迎へ給へ、と令すれば、盧俊義尤と同心す。軍の次第は次巻を見て知るべし。

田虎の弟を田豹と云ふ。其弟を田彪と云ふ。三大王と稱するは是なり。同音別字なり。

按ずるに流布の本に、田彪を田豹とも書き、徐謹を徐瑾と書き、人名の文字更に一定せず。

猛、黄河より東潞水を經て囘り來れりと告ければ、宋江一々面謁し、酒宴を設け、諸將を管待し、又關勝等の諸將、李俊等の水軍皆潞城に遣し、索超等を扶けしめ、楡社大谷より兵を進め、威勝州の後へを守らしむ。一兩日を過て陵川の守將李應、柴進、高平の守將史進、穆弘、蓋州の守將花榮、董平、杜興、施恩等、各新官と交代し來れば、宋江自ら酒を勸め、其勞を慰めける。此時花榮告て云く、某先鋒の命に依て蓋州を鎭守して在けるが、北將の山士奇、再び敗殘の兵を集め、浮山縣の軍馬と共に、蓋州に押寄ければ、某等少しく計を設け、竟に山士奇を生捉にし、北兵を打取こと二千餘人、山士奇竟に降參し、今某に從ひ、城外に在て伺候せりと告ければ、宋江急ぎ招て相まみゆ。されば宋江が軍馬昭德城に屯し出戰ず、伴て張淸、瓊英を恐るの意をなして田虎の心を鬆しむ。去程に盧俊義は已に汾陽府を攻取て、義孝縣迄兵を進めしに、北軍馬靈に出遇たり。抑此馬靈は涿州の人にして妖術を善し、足に風火の二輪を踏で日に行こと一千里、世の人神駒子と稱す。又よく金磚を以て人を打に、一人も敵する者なし。陣に望む時は、兩眼の外に一つの妖眼を現出す。是によつて、人又稱して小華光共名く。彼が手下に二人の猛將あり。名を武能、徐謹と云ふ。共に馬靈の妖術を學べり。此時馬靈は田豹と共に、兵を

切入られ、遂に城地を奪れたり。此時徐寧は池方を突殺し、其外北軍を打取こと五千餘人、索超等已に城に入て百姓等を安んじ、某をして捷音を報ぜしむ、と語れば、宋江大に悦び、索超が功を錄せしめ、陳安撫に報じ、急ぎ回書を書て、使者を潞城に歸さしむ。去程に威勝の省院官は、四方よりの注進を聞に、喬道淸、孫安も已に敵に降り、潞城已に破たりと告ければ、此趣を田虎に奏す。田虎驚いて、百官と商議する處へ、襄垣より葉淸國主の書札を持來ると告ければ、急ぎ召出し、鄔梨が書札を披き、近侍に讀しむるに、全羽を婿とし、此人十分の英雄にて、宋兵を切退る故、宋江退いて昭德を守る、臣鄔梨、近日又郡主瓊英と同じく前隊として、昭德を奪返さんと奏聞すれば、田虎聞て七八分は憂を減じ、則全羽を封じ、中興平南將先鋒郡馬職となし、兩人の使者に錦緞銀兩を持しめ、葉淸に從はしめ、襄垣に遣しける。又神行太保戴宗は、此比宋公明の命を承り、所々の州郡に至り、追付新官の至ることを觸終り、汾陽に行て、盧俊義の消息を探聽ふ。こゝに六府交代の新官各東京より著あれば、是迄の守將は各新官に交代して、州縣を守らしめ、各軍馬を領し、昭德城に馳向ふ。第一隊は衞州の守將關勝、呼延灼なり。壺關の守將孫立、朱同、燕順、馬麟、抱犢の守將文冲容、崔野等も同じく來て、宋先鋒、陳安撫にまみえ、水軍頭領李俊、張橫、張順、阮小二、阮小五、阮小七、童威、童

没羽箭と優英女花燭の合巹となし天地を拝す

り。又醫人全靈は則安道全なり。其時瓊英も是迄の寃苦を説て、遂に一夜を明しけり。されば一兩日を經て、張淸、瓊英、安道全、葉淸と心を合せ、竟に鄔梨を毒殺し、又徐威を欺きて府中に請ひ、只一刀に切殺せば、其餘は皆降れり。此時張淸再び令し、若城中の消息を他に泄す者あらば、其九族を夷げんと命ずれば、誰か其ことを洩すべき。此時解珍兄弟を牢中より放ち出して、城門を守らしめ、又安道全と葉淸とを城を出し、昭德に至り、此趣を宋先鋒に報ぜしむ。此時呉用、又李逵武松をして、聖手書生蕭讓を警固なさしめ、夜に紛れ襄垣に至らしめ、瓊英、張淸に見えて、鄔梨が筆跡の書札を求め、新に假筆の書札を蕭讓に書せしめ、葉淸に書札を持して、威勝に遣し、招贅のことを田虎に報ぜしめ、計を行ひける。さる程に宋江は、昭德城中に在て軍事を料理ひ終りし處に、忽ち潞城より使者來て、索超、徐寧等城を攻取し由を報ずれば、急ぎ使者を召て委細を尋るに、使者答て云く、初め我軍潞城を圍しが、池方かたく城門を閉て出戰ざれば、徐寧諸將と計を定め、裸形にて散々に罵れば、城中の軍士大に怒り、各戰んとするを、池方も是を制すること能はず、竟に四方を開て切出れば、我軍且戰ひ且退て、北軍をして城を離れ四方に散ぜしめ、東方よりは、唐斌兵を領し切出れば、西よりは湯隆兵を引て切來り、東西二門の軍士等は門を閉るに暇もなく、唐斌、湯隆、城中に

されば次の日、宋江又至れば、鄔梨再び三千騎を全羽に添へて、敵を迎へしめけり。

○張清の緣瓊英に配し且呉用が計鄔梨を鴆す

されば全羽敵を迎へ、辰の時より午の時迄大に戰ひ、石子を放て散々に敵を打ければ、宋兵大に敗北す。全羽は勝に乘じ、五陰山の下迄追蒐ければ、宋江も敵抗こと能ず、遂に昭德城に逃かへる。此日全羽は勝を得て、城中に歸ければ、鄔梨十分に悅びける時、葉淸告て云く、今日相公の左右に、此全羽、瓊英郡主あれば、何ぞ宋兵の雄猛なるを恐れんや、大事必ず成就すべし、某愚意を以て思ふに、郡主豫て願有り、我と同く、石子を飛す人あらば、匹偶を許すと、今此全將軍かゝる英雄なれば、佳婿となさんも郡主を辱しめずと、再三鄔梨を勸れば、本來天の配せる姻緣にや、鄔梨竟に是を許し、三月十六日は吉日なればとて、全羽を招て佳婿となす。此日大に禮儀を備へ、宴を設け、洞房中の備へ花燭の盛んなる、酒肴の美なる云盡すべからず。時に全羽、瓊英俱に天地を拜し、次に鄔梨を拜して洞房に入ば、笙歌天に喧しく、異香薰々たり。全羽は燈下に於て彼瓊英を熟見るに、柳の眉、桃の腮、美なること云べからず。其夜兩人魚の如く水の如く、全羽は枕上にて眞の姓名を說に、元より是宋軍の正將沒羽箭張淸な

大言を出して、何ぞ我軍を侮るや、我汝と武藝を比べん。全羽笑て云く、我幼少より十八般の武藝盡く伺はざる處なし、豈汝を恐れんや。其時葉清、鄔梨に告げ、全羽と同じく各馬に打乘り、鎗を取て教場に至り、來々往々戰ふこと五十餘合に至れ共、勝負を分たず。此時瓊英傍より全羽を見るに、面貌甚だ見知る人に似て、鎗法も又我と同じければ、心中に疑ひ、忽然として悟り思へらく、是夢中に、我に石子を投ることを敎し人に異なる所なし、又石子を放たんも知べからずとて、自ら馬を跳せ、畫戟を挺て兩人を隔たり。是もとより、葉清と全羽と一路の狐なることを知らず、葉清の全羽を傷んことを恐てなり。此時瓊英、全羽を迎て戰ふこと五十餘合に至れ共、勝負を分たず。瓊英此時馬を囘し東へ走りければ、全羽は勢に乘じて追來るを、瓊英早く、石子を取て全羽の肋の下に放ちければ、全羽早く推察し、右の手を擧て石子を手中に取ければ、瓊英彌驚きて、再び第二の石手を飛すに、全羽は瓊英の手おこたるを見て、自ら手中に持し石を手に應じ投けるに、忽ち一聲に響有て、瓊英が投し石子と空に在て打合ひ、雪花の如くに地上に落れば、城中の軍卒等呆れて見物す。鄔梨是を見て大に悅び、全羽を召て廳前に至らしめ、自ら衣甲名馬を賜ひ、又軍兵二千を添て、宋軍を迎ん事を命じければ、全羽謹で命を受け城を出で、宋兵を切退け捷を報ずれば、鄔梨斜ならず悅び、酒宴を設け賞勞す。

て高聲に呼つて云く、我は鄔府の葉清なり、只今醫人全靈、全羽兩人を請て歸れり、早く門を開け、と呼りければ、急ぎ城門を開きけり。其時葉清は全靈、全羽を案内して城中に入り、幕府に進み、先兩人の醫人を瓊英にまみえしむ。此時瓊英は、全靈を案内して、鄔梨の臥榻の前に至しに、鄔梨は病已に危く見えけるを、全靈先脈を診し、内には湯液を用ひ、外には膏藥張ければ、三日の内に皮膚已に色付き、飲食漸進み、五日を過ずして瘡口荒々痊て、飲食常に異なる事なければ、鄔梨大に悅び、全靈を召て云く、足下の神術に依て只今平生に復す、今より足下と富貴を共にせんと有ければ、全靈も亦拜して云く、某の鄙術豈取に足んや、某只一人の弟あり、全羽と名づく、幼より武術を好で能其藝に通ず、今某に從て此に在て藥を煉る、萬乞相公是を提拔給はんことを願ふと說ば、鄔梨急ぎ召て全羽を見るに、是凡俗の徒にあらざれば、心中大に悅び、則府中に召使ふ。されば全靈は恩を謝し、府中に逗り、已に四五日も過けるが、忽ち宋江兵を領して攻寄たりと告ければ、葉清、鄔梨に告て云く、宋江等兵強く將雄なり、只女郡主に命じて敵を退け給へと。鄔梨急ぎ瓊英をして教場に下て、軍馬を選ばしめんとせし時、全羽すゝみ出て云く、某新たに收祿をかうむり、敵兵已に城に臨むと聞く、豈坐して見物せん、願くば軍兵を借給はゞ、彼等をして片甲もなからしめん。葉清特と怒て云く、汝

遂に其病根を語られき、是を以て某薬を與るに、忽ち病は痊ぬ、今葉清が語る處と符合せるごとし、是誠に不思議にあらずやと語れば、宋江再び孫安に瓊英がことを問に、是鄔梨が嫡女にあらずと。葉清又告て云く、主女瓊英元より仇を報ずるに志あり、此比陣上に於て、頻りに君の虎威を侵し、多くの石子を以て將軍等を敗れり、某恐らくは、城破るゝの日は玉石共に焚んと、因て今日萬死を侵し、竊に先鋒に告て其罪を乞ふと。吳用傍より、倩葉清を見て、則宋江に對して云く、某渠が顔色を見るに、眞の義士なり、天兄長をして功をなさしめ、孝女をして仇を報ぜしむとて、則宋江に耳語て云く、我兵今三隊と分れて田虎を攻るといへども、田虎若金人と心を同じうせば、遂に是を攻亡すこと能ず、某是を以て未だ計を得ず、只内應する人有んことを求しに、天其便を借給ふ、張將軍の姻嫁も偶然たることにあらず、田虎の首納は必ず瓊英の手中にあらん、先に李逵が夢にも、神人已に知らせあり、兄長猶記え給へるや。

要ㇾ夷二田虎族一須ㇾ諧二瓊矢鏃一、

と、此句に合ずやと說ば、宋江は始て其意を悟り、張淸、安道全、葉清三人を召て、潛に計を授しかば、三人計を承りて去にける。去程に襄垣城の北將は敵樓より望に、葉清囘り

多くて救得ずと。其時郁保四一人の奸細の者を搦かへり來て、宋江の陣中に引を、孫安傍より是を見るに、北軍の總官葉清なりければ、孫安則宋江に對して云く、某聞く此人元より意氣あり、然るに獨城を出るは必ず緣故あらんと。其時宋公明軍士をして、葉淸が綁を解しめければ、葉淸宋江を拜して云く、某機密の事あり、請ふ將軍左右を退け、委く訴るを聞給へ。宋江が云く、我陣中は悉く心腹の人なれば、何事によらず語候へ。葉淸云く、此比鄔梨毒矢に中て昏亂し、藥を用れ共効なし、依て今醫を求るに託て、城中を出て君に消息を報ず。宋江が云く、此比汝が兵我兩將を生捉にす、今兩將いづくに有や。葉淸が云く、某恐らくは、二位の命を傷んことを測り、鄔梨の昏亂を幸ひに、監候に置りと。此時葉淸は仇申夫婦田虎に殺され、瓊英が事を委く說て、悲慟して聲を失ひければ、宋江聞て、頗る物悲しといへ共、元來葉淸は敵將なれば、詐あらん事を恐れ、正に疑て在けるが、安道全進み出て云く、宋先鋒必ず疑ひたまふことなかれ、葉淸が云處虛說にあらずとて、一五一十の話を說き、去冬張淸將軍の夢に、一人秀士來て、張將軍を請ひ、一人の女子に石子を放つ法を敎しめ、又張將軍に對して云く、汝と宿世の因緣有りと說ければ、張淸夢覺て、竟に女子を戀うて病となる、此時某張淸の脈を伺ふに、是七情の感ずる處なれば、某再三盤問に、張將軍も隱すこと能ず、

共、孫安勇を振うて大に北軍を切殺し、又一劍に北將唐顯を馬下に切て落す。是を見て、北軍少々隔勢を、鄔梨は孫安が軍卒に冷箭を放たれ、其矢頸項に中り、忽ち馬より落ければ、徐威等衆將各 力を合せ、漸 鄔梨を助け、金を鳴し軍を收め、北を指て退きけり。されば沒羽箭張淸は東陣に扣へ有けるが、忽ち報馬來て告けるは、北陣の中に石子を飛す女有て、扈三娘等、衆將を打 傷 と訴へければ、張淸大に訝り、宋先鋒に稟し、急ぎ披掛て馬に乘兵を領し來りしに、彼女先鋒、已に兵を收て鄔梨を保護し、林を過て見えざれば、空しく襄垣の方を打看り、暫く馬を止めて居たりけり。されば孫安は猶兵を進んとせしに、解珍兄弟已に生捉となり、魯智深、武松、李逵三將は北軍に切入て存亡を知らざるに、天色已に暮ければ、只得なく張淸と同じく、兵を收めて本陣に歸りけり。其時宋江は帳に陞て、神醫安道全をして衆將の疵を療治せしむ。安道全は命を領し、衆將を療治し畢る時、孫安軍の次第を委く宋江に語るに、宋江は解珍兄弟を生捉れ、又李逵等三人存亡知り難しと聞て、大に驚き、十分に愁し處に、武行者、李逵、各身に血を汚たる衣を著し、本陣に返りければ、宋江大に悅び、軍の備細を尋るに、武松答へて云く、今日の戰ひ、李逵只顧北軍に切入しに依て、其 誤 あらんことを恐れ、戰を佑て直に城下に切入りけるに、北軍の士卒等解珍兄弟を奪うて城中へ進むを見れ共、城兵命を捨て働く者

に回す。瓊英勝は乘じ追來れば、孫安馬を馳遮んとせし處に、本陣の軍兵左右に別れ、五百人の歩兵飛出で、當先に進んだるは李逵、魯智深、武松、解珍、解寶の五將なり。李逵は手に板斧を提げ大に呼つて云く、彼小婆娘、淫婦の體を以ていかんぞ我々に無禮をなすやと、云つつ討て蒐んとすれば、瓊英は李逵が兇猛なるを見て、直に石子を拈て投けるに、其石誤ず李逵の額に中るといへども、骨硬く皮老ければ、只痛るのみにして、曾て破れず。瓊英は李逵を打倒さゞるが故、馬を回し本陣に迯かへれば、李逵大に怒り、虎鬚逆に竪ち、圓眼を睜出し、大に吼り、直に北陣の内に切入ば、魯智深、武松等は、李逵に失あらんを恐れ、五將一度に切入ける。瓊英は衆將の緊しく追ふを見て、又石子を飛し、早く解珍を打倒せば、解寶、魯智深等急に解珍を救ふ間に、李逵は猶も北陣を切廻る。瓊英は李逵が近き進むを見て、又石子を投ければ、額を打るゝ事已に兩次に及び、鮮血流れ迸るといへども、終に是鐵漢なれば、猶も板斧を揮て散々に北軍を切亂す。此時孫安は瓊英が退くを見て、兵を招て攻寄りけるに、恰と鄜梨が大軍を領し、徐威等の八將を隨へ攻來るに出合ければ、兩軍散々集々に戰ひける。されば魯智深、武松は、漸解珍を救ひ出し、自ら又北陣に切入ければ、解寶は解珍を助け、又五六十歩過けるに、北軍早く追附て絆索を拋出し、頓て二人を生捉けり。其時宋軍散々に敗北すといへ

三女将一戰風玉屑を動し
雪瓊英と散するに似たり

三娘が石子に打るゝを見て、來り助けんと、馬を引かへす。瓊英兵を招て追來れば、孫新大に怒り馬を飛し、雙鞭を舞し遮るに、未だ鋒を交るに及ばず、早く瓊英に石子を投られ、其石子頭の獅々盔に中り、瑺的と響きければ、孫新大に驚き、急ぎ本陣に回けり。瓊英は勝に乘じ、兵を驅て追蒐しに、忽ち一聲の砲響き、旗柳梢に亂れ、萬馬花外に嘶て、山坡の後より一彪の軍馬馳出す。是林冲、孫安、李逵等、宋江の命を領し、先陣に接應するなり。兩軍金鼓を打て、喊聲を鬨と作りけり。宋軍の内より豹子頭林冲馬を出し、丈八の蛇矛を挺て出ければ、北陣の中より、瓊英、手に方天畫戟を提げ、馬を飛し、直に林冲に向ひ走る。林冲は女子なるを見て、大に喝して云く、潑賤の淫婦何故天兵に抗拒やと云も終らず、瓊英と戰ふ事五六合、いかんぞ林冲に及ぶべき、急に馬を返し東の方へ走りければ、林冲追蒐る。孫安傍より大に呼り、林將軍追べからず、彼必ず暗算あらんと云けれ共、林冲素より手段高く秀ければ、いかんぞ彼を怖ん。猶馬を飛し、綠草上を追こと頻なれば、瓊英は林冲の追來て近附を見て、左の手に畫戟を提げ、右の手に礫子を撚り身を紐向て、林冲の頭をさして放けるに、林冲眼明らかに手快き達人なれば、早くも矛の柄を以て石子を拂ふ。瓊英は石子の中ざるを見て、再び第二の石子を放つ、眞に流星制電の如く、林冲避る間もなく、忽ち眉間を打破られ、鮮血眼に入ければ、馬を本陣

じ、身に繡袍を著し、手に畫戟を提げ、背上に錦袋内に多くの礫を藏したり。顏は晩春の桃花のごとく、眉は初春の柳を掃ひ、年は二八の比にして、眞に絶世の佳人なり。馬前旗號に、平南先鋒郡主瓊英と分明に寫したり。宋軍の衆將各見て喝采す。時に南陣鼉鼓天に喧しく、繡旗風に翻り、矮脚虎王英は、美貌の女子なるを見て、馬を縱ち鎗を挺へ、直ちに瓊英に向ふ。瓊英又馬に拍を入れ、戟を撚て戰ふこと二十餘合、王英は瓊英の美しき色に心亂れ、忽ち鎗法に破綻あるを伺ひ、只一戟に王英が左の股を突ければ、馬より落にけり。扈三娘は丈夫の傷るゝを見て、大に罵て云く、潑賤の淫婦甚だ無禮なりと、云も終らず馬を飛し、王英を救んとせし處に、瓊英戟を挺て止めければ、火花を散し戰ひけり。王英は地上に轉んで、已に北軍に擒にならんとせしを、孫新、顧大嫂、緊く北軍を追退け、漸王英を救ひけり。顧大嫂は扈三娘が瓊英に勝ざるを見て、馬を飛せ、雙刀を使うて戰を助く。三人の女將各祕術を盡し戰へば、正に風に玉屑を飄し、雪の瓊花を散すがごとし。兩軍の衆將も各呆れて扣へたり。此時瓊英戟を以て空を刺し、馬を返し走りける處に、扈三娘、顧大嫂馬を並べ追來る。瓊英少も慌ず、左の手に畫戟を住め、右の手に石子を拈り、柳腰を扭り、星眼に扈三娘を覷て投けるに、其石子誤ず。左の臂に中ければ、其痛堪がたく、早く刀を掛捨て本陣に迯回りけり。顧大嫂は扈

王英を扶けしかば、盛本は力二將に敵しがたく、馬を返して走りけるを、扈三娘追附て、只一刀に盛本を馬下に切て落す。此時北軍大に亂れ、切殺さるゝ者五百餘人、葉淸は敢て敵を迎ず、只百騎を領し、走りて襄垣城南まで退きけるに、早く瓊英が軍馬の至るに逢ふ。元より葉淸は半年前より田虎の命に依て、徐成と同じく此襄垣を守て在しが、此度瓊英が先鋒となり、此地に至ると聞ければ、機を見て相まみえんと料りしが、今瓊英の兵馬に出合ければ、陣中に至て瓊英に見ゆるに、已に長となつて、威風凛々たるを見て、自ら心中に喜び立寄しが、瓊英も葉淸なるを見て、左右の軍士を退け、葉淸に向て泣て云く、我今日幸に虎窟を離るゝといへども、只五千の兵馬を隨へしのみにして、別に我を助る者なし、又我に從へる兵士とても、皆是田虎が部下の人なれば、事を託しがたし、唯此儘に日を送らば、仇を報ずることを得がたし、若身を逃れて彼に知れなば、返て其害に罹らん、これを如何がせんや。葉淸答て云く、某も又計策を思想すと雖も、門路あらず、若機會あらば必ず報じ申さんと、云も終らず、忽ち宋軍の兵馬攻來れりと告ければ、瓊英急ぎ披掛て馬に乘兵を領し、打出けり。其時兩軍金鼓を鳴し、各陣勢を列ねけり。北軍陣將裏旗搖く處、一人の女將眞先に馬を出す。頭には金釵烏雲に映

相迎ふ。兩將戰ふこと十餘合にして、未だ勝敗を分たざれば、扈三娘馬を縱ち刀を舞して、

の代官を定置ば、四五日を過ずして、六府の交代官人、各此地に至るべしと有ければ、宋江謹で相謝し、先朝より賜はる處の金銀緞疋を分ちて、三軍に賞し、又戴宗を汾陽に遣して、盧俊義の消息を聞繕はしむ。又新に降參せし、金鼎、黄鉞を壷關、抱犢の兩所に遣し、孫立、朱同等と交代せしめ、事已に了ける處に、忽ち探馬來て報じけるは、只今田虎、馬靈に軍馬を添て、汾陽を救はしめ、又鄔梨國舅ならびに、瓊英郡主に兵馬を添て、東より攻來り、已に襄垣に至れりと告ければ、宋江急ぎ呉用と計て、敵を迎る用意をなしける處に、降將喬道清進み出て云く、馬靈もとより妖術をなし、又神行法を善し、又金磚を以て人を打に、百發百中ならずと云事なし、今某先鋒に屬して、未だ少しの功あらず、願くば、吾師公孫一清と同じく汾陽に向ひ、彼に說て降參せしめんはいかにと云に、宋江大に悅て、則軍馬二千を公孫勝、喬道清に與へ、汾陽に進しめ、又索超、徐寧、單廷珪、魏定國、湯隆、唐斌、耿恭に二萬騎を添へて、潞城縣を攻打しめ、又王英、扈三娘、孫新、顧大嫂に一千騎を添て先鋒とし、宋江自ら呉用を始め衆頭領を從へ、三萬五千の兵馬を領し、陳安撫に暇乞し昭德城を出で、北を望て進發す。されば宋軍の先鋒王英等は、已に襄垣の界なる五陰山の邊にて、北將葉淸、盛本等が兵馬に出合ひ、兩軍各喊を作り、宋陣中より王英馬を跑せ、鎗を撚て陣を出れば、北軍中より盛本鎗を挺へ

へらく、我誠の幸あり、天より異人を賜て、我を佑けしめ給ふならんとて、是より瓊英をして毎日〻〻馬を馳劍を試みしむ。されば此こと城中に傳播し、瓊英を稱し、瓊矢鏃とぞ名付ける。此時鄔梨は瓊英が爲に佳婿を選んと欲せしかば、瓊英、倪氏に對して云く、若奴家が爲に匠配を求め給はゞ、是非奴家のごとく石子を飛す人にあらざれば、死すとも匠配を願ずと誓ひける。扨鄔梨は自ら王侯の位ありと聞て、心中思へらく、今田虎宋軍と爭ふ事、是鷸蚌の爭なり、我此機會に乘じ、漁父の利を得んと、計已に定りければ、今日自ら請て軍馬を領し征進す。去程に宋江等は、兵を昭德城に屯して伺ひける處に、十餘日を經て、陳安撫の軍馬既に至れりと告ければ、自ら諸將と同く郭を出て相迎へ、城中に請て各禮を施し終れば、陳安撫は宋江の謙恭にして仁厚なるを見て、心中に欽服し、則云く、今天子先鋒の奇功をなすを知て、特と小官を遣し、金銀緞疋を以て三軍を賞勞し、且先鋒の功を扶しむと有ければ、宋江等拜して云く、某等相公の力を極て保奏し給ふを以て、聖恩を受ること、皆相公の賜ものなり、宋江死すとも其恩を忘るゝこと能はずと。陳安撫が云く、將軍早く大功を立て、京に歸らば、天子重く用ひ給ふべし。宋江再拜し謝して云く、萬乞今より相公自ら此昭德を守り給はゞ、某等は兵を分つて田虎の巢穴を攻ん。陳安撫が云く、小官京を出る時、已に天子に奏して、先鋒の打取し六府

夢中に傳授せしが、元來聰明の瓊英なれば、夢覺て後に一々能覺え、房門を閉ち、鎗棒を取て演習せしが、日を經て精熟す。されば光陰矢のごとく、宣和四年の冬の季に至りしが、或夜瓊英几に凴て假寐せしが、忽ち異香薫じ、一人の秀士頭に折角巾を戴き、一人綠袍を著したる年若き將軍を連來て、瓊英に石子を飛す法を教しむ。かの秀士又瓊英に向て云く、我高平より特々天捷星を請來て、汝に異術を教て、父母の仇を報ぜしむ、又是將軍は汝と宿世の姻緣有と聞て、瓊英は女心に羞しく、忙たゞしく面を掩しが、几上の剪刀を拂ひ落し、鏗然と聲あれば、其響に驚き、眼を開いて傍を見れば、寒月窓を照し、殘燈猶滅せず、夢に似て夢にもあらず。瓊英坐すること半時ばかり、始て其夢なることを知り、次の夜に入て猶も石子を飛す法を能記えければ、庭上にて鷄卵のごとき丸石を拾ひ、試に屋脊の鴟瓦をねらうて放ちけるに、忽ち一聲の響有て、瓦を粉の如く碎きて、地上に落しければ、倪氏は此響に驚き走り來て、何事ぞと問ば、瓊英は云紛らして、夜來夢中に神人來て告給ふは、汝の父王侯の位あり、依て汝に異術を傳へて父を扶け、功をなさしむと、因て今試に石を飛し、鴟瓦を打しなりと語れば、倪氏大に驚て、此事を鄔梨に告ければ、鄔梨いかんぞ信ぜんや。急ぎ瓊英を召て一々武術を試に、果して悉く精練し、更に石子を飛す、法殊に妙にして、百發百中なりければ、鄔梨大に驚き思

石室山の白石化中の
妻宋氏乃容貌を
現ず

り、其色雪の如く、少の疵なく、眞の美石なれば、土人しばく是を取らんとするに、忽ち一聲の霹靂起て、石を取人を地上に倒す。是を以て、土人相戒め、此石に近寄ことなしと語れば、葉清軍士等と同じく至りて見るに、軍士都て叫び云ふ、啊呀不思議や今迄一つの白石なりしが、いかんがして是婦人の屍と變ぜしぞやと、訝かれば、葉清立寄て子細に見るに、奇怪なる哉主人宋氏の屍首にして、面貌猶生るがごとし。額に大なる疵あれば、葉清大に驚き涕泣し、いかがせんと頓足して有けるが、其内一人の軍士あり。彼は田虎が始亂を起せし時の馬圉なるが、能此屍首のことを知り語て云く、昔大王兵を起せし時、介休の地に於て此婦人を捕へ、夫人となさんと欲せしが、此婦人大王を欺て綁を解しめ、此處の高岡より身を投て死しければ、大王我に命じ、衣服及び首餝をはがしめしが、今三年餘を過て、顏色猶變ずることなしと語れば、葉清限なく歎き、軍士に對して云く、我も又、此女を知れり、此我友宋老が女子なりとて、軍士に命じ土を掩はしめければ、又元の白石と化すれば、各不思議の思をなす。次の日葉清威勝に歸り、此始終のことを委しく、安氏をして瓊英に傳へしめしかば、瓊英父母の仇なることを知りて、日夜聲を飮で泣悲しみ、只父母の仇を報ぜんことをのみ思ひしに、此より每夜眼を合せず、忽ち神來て云く、汝父母の仇を報ぜんことを思はゞ、武術を敎へんとて、每夜々々來て

て、平遙縣に赴きしが、途中多くの強人出來り、仇申を殺し、莊客を追散し、妻宋氏を捕へ去しかば、莊客遁れ返て其趣を葉淸に報じける。彼葉淸は元より義氣ある人にて鎗棒を能使ふ。妻安氏も謹愼の人なれば、仇氏の家人も誰が喜ざる者もなし。時に葉淸此趣を仇氏の親眷に告しめ、又官府へ告て、強人を捕へん事を乞ひ、又主人の屍首を葬り、自ら妻安氏と倶に瓊英を養育し一年餘を過けるが、田虎亂を起し威勝を奪ぬ。鄔梨をも介休綿上等の地に遣し、財寶を奪ひ、男女を捕へ掠めしむ。されば葉淸夫婦及び、瓊英等も共に鄔梨に擄れしが、鄔梨原子なければ、此瓊英の容貌勝れたるを愛し、實の子の如くす。瓊英も幼きより、聰明の女なれば、自ら身を遁るゝ事能ずと知ぬ。外に親しき者もなければ、倪氏の我を十分に愛するを見て、倪氏に請て、葉淸の妻安氏をして伏侍せしむ。葉淸も始捕へられし時は逃出んとせしか共、瓊英現に此處に有て、是主人の骨肉なれば、其生死を知らずんば有べからず。又妻安氏も彼所にあれば、機會を見て三人同じく身を遁んと、主意已に定りければ、假に鄔梨に隨て度々軍功有ければ、鄔梨命じ、安氏を元の如く夫婦と成しめ、是より消息を瓊英に傳る事を得たり。鄔梨は葉淸が度々戰功有を見て、遂に田虎に奏して、葉淸を總官に封じ、石室山に遣して木石を司らしむ。されば日々山中に至けるに、或日軍卒等岡の下を指て云く、此處に一塊の白石有

高ければ、田虎娶て妻とし、鄔梨を封じ樞密とす、仍て軍士等是を國舅と稱す。鄔梨又奏して云く、臣が女兒瓊英、近來夢中に神人に遇ひ、武藝を授り、夢覺れば、力人に勝れ、十八般の武術、奥に通ぜざる所なし、又不思議なるは、石を飛し飛鳥を擊に、百發百中の妙を得、世の人稱して瓊矢鏃と名づく、只今願くは女兒を先鋒とする事を免し給はゞ、某と同じく彼地に向て、宋兵を退け、宋江を擒にし、必ず大功をなすべし。田虎大に悅び、則瓊英を封じ郡主となし、先鋒たらん事を免しければ、鄔梨も大に悅び、急ぎ用意に及びける。時に百官の中より、都郡馬靈忽ち進み出て云く、臣願くは軍馬を領し、汾陽に向て敵を退けんと乞ければ、田虎又大に悅び、各金印を賜ひて、又各三萬の兵を領せしめ、急ぎ進發せよと有ば、馬靈謹で命を受け、次の日相辭し汾陽に征進す。鄔梨は教場に至り、三萬の精兵を撰み瓊英を先鋒とし、昭德に進發す。抑此先鋒瓊英と云は、十六歲の處女にて傾國の美色あり。鄔梨が眞の女兒にあらず。本姓は仇にて、汾陽府、介休縣、綿上の產にして、仇申と云人の女子なり。此仇申は家富し人なるが、四十歲を過れ共子なく、又其妻死しければ、平遙縣の宋有烈の女子を娶て繼室とし、是瓊英を生り。瓊英十歲の時宋有烈病死せしかば、仇申は妻と同く喪を弔に行に、平遙縣は介休を隔ること七十餘里有ば、瓊英を家に止めて、主管葉淸夫婦に伏侍せしめ、自ら夫婦莊客を連

八編　巻之七十六

○瓊英處女先鋒と做る

去程に昭徳の屬地、潞城の守將池方は、元より田虎が心腹の人なるが、昭徳已に陷り、喬道淸已に宋兵に圍れぬと聞き、急ぎ使を威勝に遣し、此由田虎に告ければ、大に驚きける處に、晉寧も陷り、三大王田彪命を脫れ歸り來ると告るにぞ、其委細を尋るに、田彪聲を放て大に泣き、宋江勢大にして、已に晉寧城を打破られ、我子田實も敵に殺され、師を喪ひ城を陷いる、臣が罪萬死すべしと、說ければ、田虎猶大に駭き、急ぎ文武の百官を聚め、自ら問て云く、唯今宋江我二ケ所の大郡を奪ひ、喬道淸已に彼に困めらること、汝等いかゞして是を救はんやと、云も終らざるに、國舅鄔梨進み出て云く、主上必ずしも憂へ給ふことなかれ、臣恩を承ること久し、願くば、軍馬を領し、昭徳に馳向ひ、宋江を擒にし、再び城を奪返し候はんと奏すれば、田虎大に悅びぬ。此鄔梨は原威勝の人にして、富戶の子弟なるが、能鎗棒を使ひ、力萬人に敵し、又硬弓を引き、重八十斤の潑風刀を使ふ。田虎豫て其名を聞及び、又鄔梨が妹は美人の聞え

此比陳瓘、尊堯錄を著し、神宗を以て堯に比するは、則陛下を譏るなり、乞陳瓘が上を訕る罪を正し給へと、幸ひに天子罪を加へ給はず、然るに今捷を報ずること、陳瓘が面皮よきのみにあらず、我も又喜に勝ず、明早朝我此捷を天子に奏聞すべしと在ければ、戴宗は再拜し、旅宿に返て伺ひけり。去程に次の朝、天子文德殿に出御なれば、宿太尉宋江の表文を奉り、田虎を征し、六府を打取し事を奏聞すれば、天子龍顏大に悅び給ひしかば、宿太尉又奏て云く、正言陳瓘、尊堯錄を著し、先帝神宗を堯に比し、陛下を以て何ぞ是を罪とすることを得ん、況や陳瓘剛にして正く、計有る者なれば、何とぞ彼に官爵を加へ、兵馬を領せしめ、河北に遣し、宋江が軍を助けしめば、大功を立んこと疑有べからず、と奏すれば、天子其まゝ陳瓘に安撫の官を授け、御營の軍馬二萬を差添へ河北に遣し、宋江を佑しめ、且金銀を持しめ、宋江の三軍を賞勞せしめんことを勅し給へば、宿太尉は聖恩を謝し、急ぎ府中に回り、戴宗を召し回書を渡し、此由を告ければ、戴宗は恩を謝し、神行の法を行て、次の日昭德城にかへり、宿太尉の回書を呈し、東京の趣を委しく語れば、宋江回書を披見て、書中の委細を衆人に語れば、各陳瓘の義氣を感じ、悅はざるはなかりけり。されば宋江は諸軍に令し、陳安撫の至るを待て進んと、暫く城中に屯せり。軍事猶次巻に委し。

を戲遊するにもあらず、只天地の精英を盜み、鬼神の運用を借のみ、佛家には是を金剛禪邪法と云ふ、仙家には是を幻術と云ふ、足下今より心を改めて、正に歸せば、凡を超て聖に入べし、と語れば、喬道淸始て夢の覺たるがごとく、遂に公孫勝を拜し、師となせば、宋江はじめ各公孫勝の道德を稱美せり。其夜は酒宴已に終て、次の日宋江は蕭讓をして、表を書せしめ、晉寧、昭德の二府を得しよしを、宿太尉に報じ、又新に打取し、衞州、蓋州、高平、陵川及び昭德の六府へ、朝廷より守護の官人を乞て、今迄の守護の官人と交代せしめんことを請ふ表文を、東京に達せしむ。されば戴宗は表文を持て、次の日宋公明に辭別し、神行の法を行て、次の日東京に著し、先宿太尉の府中にいたり、一人の虞候に進物を送り、書札を早く太尉に達せん事を願ひければ、楊虞候其儘書札を以て、府中に入けるが、程有て出來り、太尉仰付有て、頭領を召ること有ければ、戴宗謹で御前に至るに、宿太尉大に悅で云く、汝能時來りたり、比日は蔡京、童貫、高俅等共に天子に奏して云く、宋先鋒師を失ひ國を辱しむ、乞ふ其罪を糺し給へと、天子猶豫して決し給はざる處に、右正言陳瓘進み出て、奏して云く、彼大臣等賢を妬み能を猜みて、忠臣義士を誣す、臣聞く宋江の兵已に壺關を越え戰功多しと、今君を欺く蔡京等が罪を正し給へと、是を以て陳瓘竟に蔡京等の旨に忤ふ。蔡京等又昨日天子に奏して云く、

孫安喬道淸と宋朝に降を

く、汝いかゞして是を知るや。孫安が云く、其時羅眞人後々徳に遇て魔降らば、其時こそ正法を授んとの語ありや。喬道淸が云く、有り。孫安が云く、兄長の法を破る人の姓名を知るや。喬道淸がいはく、知らず。孫安が云く、彼人は則羅眞人の高弟にして、宋江の副軍師なり、名を公孫勝と云ふ、彼人委く兄長のことを知れり、今此城を昭徳と名く、然るに兄長の法破るゝは、是徳に遇て魔降るの時なり、さるによつて公孫勝、是非に汝をして正道に歸せしめんことを欲す、依て山に上つて兄長を擒にせず、彼已に法を以て汝に勝ば、汝を擒にせんことも、又難からず、兄長迷を止て、早く正しきに歸し給へ、と勸むれば、喬道淸言下に悟を開き、遂に孫安と同じく、費珍、薛燦を領し、嶺を下つて、公孫勝の陣に至りければ、公孫勝自ら出迎ふ。此時喬道淸拜伏し罪を乞て云く、君の仁愛を蒙る某一人の故に大軍を勞せらるゝ、其罪益深しと、謹で謝しければ、公孫勝大に悦び、賓の禮を以て相待し、樊瑞等に命じ百谷嶺の圍を解しめ、自ら喬道淸、費珍、薛燦等を領して、城中へ入れば、宋江禮を厚くして相迎へ、又好言を以て相待ければ、喬道淸深く欽服せり。時に諸將追々城中に歸りければ、宋江酒宴を設け慶賀せり。公孫勝席上にて、喬道淸に對して云く、足下の法術は上は諸佛菩薩の修して、虛空三昧自在神通に入にもあらず、下は蓬萊神仙の髓を變へ、筋を移て、造化

靜り、只城門に人馬の出入あれば、はや宋兵城に入しことを知り、獨嗟嘆して在けるが、忽ち崖の邊林の中より、一人の樵者腰に斧を挾て、扁擔を荷うて口中に山歌を唱へ出來る。其歌に、

上レ山如レ挽レ舟下レ山如レ順レ流挽レ舟常自戒

順レ流常自繇我今上レ山者預爲ニ下レ山謀一

喬道淸此歌を聞て、恍然として則ち問ふ、汝城中の消息を知るや。樵夫が云く、金鼎、黃鉞、已に副將葉聲等三人を殺し、城を獻じ、宋朝に降參すと說終り、已に山上に登ければ、喬道淸は猶も長嘆して居ける處に、又一人山下より步み來れば、何者ならんと是を見るに、殿帥孫安なりければ、大に驚き、いかんがして此に至るやと、問ふ間もなく、孫安馬より下つて禮を施せば、まづ喬道淸忙たゞしく問て云く、殿帥兵を領して晉寧に至りしに、いかんがして、又獨此に至れるや、況や嶺下多くの宋軍あり、何ぞ路を遮らざるや。孫安が云く、先廟中に至つて語らんとて、兩人廟中に至り、孫安先晉寧にて盧俊義に生捉れ、宋朝に隨ひし事を委しく語れば、喬道淸只默然として言いはざれば、孫安又云く、兄長必ず狐疑することを止よ、宋先鋒等皆々十分義氣ある人なれば、我等彼が部下となつて、朝廷の臣とならんこと、豈長久の計にあらずや、某又兄長に問ことあり、兄長昔曾て羅眞人を訪ことありや。喬道淸慌たゞしく問て云

して、孫安と同じく捷を報ぜしむ。扨も盧先鋒は宣贊、郝思文、呂方、郭盛に二萬の兵馬を添へ、晉寧を守らしめ、盧俊義自ら其餘の諸將二萬の兵を領し、汾陽に進發せり。某昨日晉寧を發足し、孫安にも神行の法をなさしめ、唯今囘り候なり、孫安は府門の外にあつて伺候せりと告ければ、宋江大に悅び、急ぎ孫安を請に、其貌魁偉にして凡俗の徒にあらざれば、階を下て迎れば、孫安則拜して云く、某自ら料らず天兵を拒むこと、其罪萬死すべし。宋江が云く、將軍已に邪を棄て正に歸せば、某と同じく田虎を亡し、京に囘りて倶に富貴を受んとて、先酒宴を設け、孫安を管待ければ、孫安大に悅び、喬道淸が事を問に、宋江答て云く、彼已に法を戰はしめ、公孫勝に破られ、今百谷嶺に逃ると、始終を語れば、孫安原來喬道淸と友なれば、是非彼を降伏せしめ、朝廷に歸べしと乞ければ、宋江大に悅び、急ぎ戴宗をして孫安を公孫勝の陣に送らしむ。されば孫安は戴宗と同じく、公孫勝の陣に至り始て面謁し、委細を語れば、公孫勝も悅び、孫安を嶺に上らしめ、喬道淸を尋しむ。扨喬道淸は費珍、薛燦と同じく十五六騎を隨へて百谷嶺に上り、神農の廟中に身を隱し、廟中の道祝に米を借て飢を凌しが、此廟中には三人の道祝のみなれば、彼等が每日勸化し貯ふる米を都て食盡しけれ共、怒りを隱し相爭はず。此日喬道淸は城中喊の聲を聞き、廟中を出で、山の頂に上り望に、城外の兵已に

ずも馬より地上に落けるを、宋兵早く集て竟に生捉になす。北陣中より是を見て、孫安を助けんと、秦英、陸清、姚約、馬を出し遮るを、宋軍より、楊志、歐鵬、鄧飛、等く出て相迎ふ。此時楊志大に喝すること一聲、只一鎗に秦英を馬より突落す。歐鵬は陸清を迎へ戰しが、故意拔目を見せけるに、陸清只一刀と斬來るを、歐鵬早く身を閃せば、此空を切隙に、歐鵬鎗を取延べ、陸清の首筋を刺ければ、馬より落て死せり。姚約は二人の死を見て、馬を回し、本陣に迯歸る。鄧飛早く追付き、鐵鏈を擧て頭を打ば、碎れて粉の如し。此時北兵大に敗れ、殺さるゝ者四五千人、盧先鋒大に勝を得て、城中に歸りければ、軍士等早く孫安を縛て引來れば、盧俊義自ら綁を解て、禮をあつくし、朝廷に從はんことを勸めしかば、孫安も又盧先鋒の義氣に感じ、遂に朝廷に從へり。其時又孫安、盧先鋒に對して云く、城外に猶七人の將、五千の人馬あり、某自ら城を出て彼等を招き、共に降參せしめんはいかんと。盧俊義更に疑ず、孫安をして城を出しければ、孫安一人北陣に至て七將を隨はしめ、城中に歸ければ、盧俊義大に喜び、酒宴を設け管待ける。其時孫安又告て云く、某喬道清と同く威勝を出で、彼は昭德に向ひしが、此人元來妖術をなせば、宋公明必ず其毒に罹ん、某元より彼と同鄕にして莫逆の友なれば、只今昭德に向て彼に說て、同じく朝廷に歸順させせんと乞ければ、盧俊義竟に是を免し、某を

有り、某彼地に三四日止りしかど、急に城を攻ること能はざりしかば、今月六日の夜に至つて、黒霧あたりをも分ざれば、盧先鋒密に軍士をして、多の土嚢を作らしめ、三更の比城下に積上しに、城の東北の守懈て見えければ、我兵密に土嚢に上て城に入り、守將十三人を殺せしが、只田彪のみ北門より逃出て、行方知れざれば、降參する者二萬餘人、戰馬を得る事五千餘疋に及び、盧先鋒已に城中に入り、次の日まさに三軍を勞て在ける處に、忽ち報ず、威勝より晉寧の援として、田虎の命に依て、殿帥孫安十人の勇將二萬の兵馬を領し、已に城外十里の外まで攻來れりと告ければ、盧先鋒令して、秦明、楊志、歐鵬、鄧飛を先手として、自ら兵を領し、接應して敵を迎へしが、秦明馬を出して孫安と戰ふ事七八十合、盧先鋒金を鳴らし兵を收め、孫安も兵を收め陣取す。盧先鋒は孫安が勇猛なるを見て、心中思へらく、彼只智を以て取べし、力を以て敵すべからずとて、次の日軍馬を分つて伏勢を設け、自ら陣を出で、孫安と戰ふこと五十餘合に至りし處に、孫安が乘たる馬、前足を失し、孫安馬より落ければ、盧俊義喝して云く、是汝の戰負たる罪にあらず、早く馬を替來れとて、孫安をして馬を替しめ、又戰ふこと五十餘合、盧俊義僞敗し走りければ、孫安追て林の邊に至りけるに、忽ち一聲の砲響き、左右の伏勢一度に起り、絆馬索を投かけ投かけ、早く孫安が馬を引倒せば、孫安測ら

夢中の如しと。宋江等衆人も感泣の涙を流しける處に、降將金鼎、黃鉞は、翁奎、蔡澤、楊春三人を引率し、共に來て參拜せしかば、宋江忙しく扶け起して云く、將軍等今大義を擧て、生人を保つこと萬世の勳功なり。黃鉞等が云く、某等速に來り歸すること能ず、其罪遁るべからざるに、却て先鋒の厚禮を受ること、死す共忘じと、又拜し畢り、魯智深等が賊を罵りて、屈せざることを具さに語れば、宋江感泣して稱嘆す。此時李逵進み出で、我聞く彼賊人、只今百谷嶺に迯入れりと、我行て只一斧に切殺し、無念を晴さん。宋江が云く、喬道淸はすでに公孫勝が兵百谷嶺に圍めり、況や公孫勝、其師羅眞人の命に依て、是非喬道淸を降伏せんと欲す、汝輕々しく事を行ふまじと、制しければ、李逵默然て退きけり。

○陳瓘諫官安撫に陞る

此時宋江は先榜を出し、百姓を安んじ、三軍を勞ひ、公孫勝及び金鼎、黃鉞降參して、軍民を保し功を記さしめ、事終る處へ、忽ち神行太保戴宗、晉寧より歸り來れりと告ければ、急ぎ召て盧俊義の消息を問けるに、答て、某仁兄の命を受け、晉寧に赴し處、盧先鋒はまさに城攻最中にて、某に申さるゝは、城を攻取つて捷を仁兄に報ぜん間、汝暫く此地に留るべしと

大宋征北正先鋒宋江　示諭昭德州守城將士軍民人等。悉知田虎叛逆。法在必誅。其餘脅從情有可原。守城將士能反邪歸正改過自新。率領軍民。開門降納定行保奏朝廷赦罪錄用。如將士怙終不悛。爾等軍民俱係宋朝赤子。速當興擧大義擒縛將士歸順天朝。爲頭的定行重賞奏請優敍。如執迷逡巡。城破之日玉石俱焚。孑遺靡有。特諭。

此文を箭に拴り城の四面より射入しめ、又軍士に命じ攻口を緩め、城中の消息を伺ふに、次の日未明に、城中忽ち喊を作り、四門に降旗を立ければ、宋江は計就ぬと悅び、人をして其樣子を伺はしむるに、原來守城の偏將金鼎、黃鉞、宋軍の箭書を見て軍民を聚め、副將葉聲、牛庚、冷寧を切殺し、三人の首を竹竿に掛け、宋軍に示し、牢中より李逵、魯智深、武松、劉唐、鮑旭、項充、李袞、唐斌を放ち出し、各轎に乘しめ、大に城門を開き、數千の軍民香を炷き、燭を點じ、宋軍を迎ふと聞えければ、宋先鋒大に悅び、諸頭領に令し、數萬の軍馬を引率し、列を正し、次第に城中に進みけり。誠に諸軍刃に血ぬらず、百姓を秋毫も犯す事なければ、歡聲城中に充々たり。されば宋江已に帥府に坐しければ、魯智深等八人早く來て、參拜して云く、某等八人都て陽間の人にあらざるべき、今長兄の威力を以て又相見ることを得たり、恍惚として

を降服するの意あれば、特と彼を百谷嶺中に逃れしめ、軍馬を四路に分つて、嶺の四面を圍ましむ。已に二更の比に至て、數千の炬火晝の如く照し、東西より多くの軍勢來りければ、誰やらんと望見るに、林冲、張清、已に宋先鋒の下知を請て、五千の軍馬を引領し、公孫勝が軍を佑るなり。公孫勝大に悦び、共に兵を合するに二萬餘騎となりければ、猶も山の四方を圍しめければ、縱ひ翼を生ずる共、逃るべき樣なかりけり。扨宋江は次の日に至て、喬道淸が公孫勝に圍れたるよし聞ければ、急ぎ吳用に商議し、大兵を引て昭德城を十重廿重に圍けるが、城中の守將葉聲等堅く守て出ざれば、攻打こと三日に至れ共破ること能ず。宋江城南の陣中に在て大に憂へ、李逵等が存亡も未だ知ざれば、潸然と淚を流す。吳用勸めて云く、兄長煩悶給ふ事なかれ、某少しく計略を廻らさん。宋江忙しく問て云く、軍師何の良策かある。吳用答て云く、城中の軍馬元來微なれ共、只喬道淸の妖術を賴とす、今彼敗走して外より援の兵至らざれば、いかんぞ怖ざらん、今朝某雲梯に登て、城中を望むに、軍士等各驚き恐るゝの色あり、此機會に乘じて、數枚の紙に軍民を曉諭の文を寫し、利害を說て城中に示さば、軍民必ず守將を縛て降參せん、かくのごとくば刄に血ぬらず、此城を得ること三日を過べからず。宋江大に悅び、軍師の奇謀中れりと、早速數十枚の文を寫して云く、

進む道を遮り、來て相逐ず。昭徳城には、喬道淸が法敗れ、大に敗北するを出て救はんと思へ共、宋兵大勢なれば、恐らくは城地に失あらんを計り、緊しく城門を閉て出る者なかりけり。公孫勝は樊瑞、單廷珪、魏定國と兵を領し、昭徳城の西を過るに、王英、孫新、兩將に出合ければ、先本陣に返て休息せしめ、自ら軍勢を引て喬道淸を追蒐たり。此時白日西山に沈で、路途已に暗ければ、數千の火把を燃し、照輝して白晝の如し。已に十里許りも追蒐しに、喬道淸は費珍、薛燦と同じく敗殘の兵を引率し、北を望で走りけるに、宋兵間近く追付たり。公孫勝馬上より高聲に呼て云く、喬道淸早く馬より下て降參すべし、迷ひを取こと勿れ。喬道淸馬上より答て云く、人各情あり、汝いかんぞ我に逼ることの甚しき。其時喬道淸後へを顧るに、只費珍、薛燦及び敗殘の兵三十餘騎のみにして、其餘は悉く落失ければ、擒となつて辱を受んより、自殺せんには如ずとて、已に劍を抜ければ、費珍慌しくも劍を奪取て云く、國師必ず短見をなし給ふことなかれ、向に高山あり、身を藏匿に足れり、と勸めければ、喬道淸も進退已に窮れば、遂に二將と同じく、高山の中に馳入たり。抑此高山は昭徳城の東北に當て、百谷嶺と名く。相傳ふ神農百穀を嘗る所なりと。是に依て山中に神農の廟あり。其時喬道淸は、費珍、薛燦と同じく、只十五六騎を引率して、神農廟に屯せり。扨も公孫勝は、豫ねて喬道淸

賢弟遠く來て軍務に勞す、同じく本陣に回て勞を休めんはいかに。公孫勝が云く、先鋒知らざる處あり、我師羅眞人常に說く、涇原に喬冽なる者あり、彼道骨あり、昔日來て我に道を問へ共、彼魔心重くして惡を好み、殺運未だ退ざるを、我暫く彼を拒ぐといへ共、後來魔心漸退て機緣至らば、自然と德に遇て服せん、其時汝彼を化度すべし、後々了語玄微を得ば、用る所あらんと、某衞州を發し、途中にて妖人の動靜を問に、降將耿恭彼が趣を語るを以て、涇原の喬冽なる事を知る、今日彼が術を見るに、某と肩を比ぶ、某只五雷正法を傳授するを以て彼が法を破つたり、今此地を昭德と名づく、某愚意に、羅眞人の法旨、德に遇て魔降の語に合ことあらずや、今若此地を逃さば永く魔障に陷て、下方の生靈を惱さば、某も又師の法旨に違ふべし、此機會に乘じ降伏せずんば、再び得る時なかるべしと。其時宋江始て其意を悟り、大に相謝し、衆頭領と同じく本陣に回りけり。されば公孫勝は樊瑞等と一萬の勢を引率し、喬道淸を追かけたるに、彼は費珍、薛燦と敗殘の兵を引て、昭德城の西門より城中に進んとせし處に、忽ち金鼓天に響き、林の中より一彪の軍勢駈出す。眞先に進たる兩將は、矮脚虎王英、小尉遲孫新なり。五千の軍馬を領し路を遮りけるに、費珍、薛燦は戰ふに心なく、喬道淸を護して一方を打破り、北方を望て逃れけり。王英、孫新は豫て公孫勝の令を請け、只彼等が城に

ば、孫琪、聶新、馬を馳て相迎ふ。費珍、薛燦は其間を伺ひ、喬道清を取廻して、西の方へ逃去る。扨も徐寧は孫琪、聶新と戰うて精神彌盛んなれ共、此時北兵猶二萬餘騎なれば、寡を以て多に敵し難く、徐寧如何はせんと思ひし處に、宋江が兩路の兵都て至れば、孫琪、聶新、三方に敵を請ては叶はじと、馬を回し逃る處に、徐寧追付き、一鎗に孫琪が左の臂を突ければ、忽ち馬より落にけり。聶新是を見て、馬に鞭打跑りしが、早く張清に追付れ、首筋を突れ、馬より落て死にけり。北軍大に亂れ、三萬の人馬半は宋兵に討れ、屍野に滿て、血流れて川の如し。此時宋江は喬道清西の方へ逃たりと聞き、急ぎ公孫勝、林冲、張清、湯隆、李雲、扈三娘、顧大嫂、徐寧、索超と兵を合するに、二萬五千の兵有ば、半を分つて昭德を攻め、半を以て喬道清が逃る道を遮つて、必ず逃すまじと命じける。此時已に申の時過なれば、盡日の戰に親方の軍士等も已に疲れければ、暫く休んとて、陣中に回らんとせし處に、軍士吳用、先鋒終日の戰に勞れ給はんとて、樊瑞、單廷珪、魏定國に一萬の軍馬を差向け、火炬を持しめ接應す、と報じければ、宋江喜び斜ならず。公孫勝が云く、已に此兵あらば、先鋒は衆頭領とともに陣に歸て休息し給へ、某は樊瑞、單廷珪、魏定國三將と同じく、兵領をし、喬道清を追て、是非彼を降伏せん。宋江が云く、賢弟神功を以て災厄を救ふ、喬道清術盡て、思ふに何事をなさん、況や

叫びければ、北軍中より倪麟馬を跑らせ、刀を舞し相留む。兩將戰ふこと十餘合なる處へ、北陣中より雷震馬を出し、戰を助けんと馳蒐れば、宋軍中より、湯隆馬を駈らし、鐵槌を以て相留む。此時兩軍大に喊を作り、林冲は倪麟と戰ふこと、又二十餘合、此ぬけ目を見て、只一矛に倪麟を馬より下に突伏ければ、雷震は眼の邊親方を失ふを見て、自ら戰ふに心なく、馬を回して逃んとせしが、早くも湯隆に追付れ、鐵槌に頭を打碎かれ、馬より落て死にけり。

○入雲龍の兵百谷嶺を圍む

此時宋江鞭を以て北軍を一指し、張淸、李雲、扈三娘、顧大嫂一度に切來れば、北軍大に敗北し、其討るゝ者數を知らず。孫琪、聶新、費珍、薛燦等は、只喬道淸を守つて、五龍山下の陣を捨て、昭德城に歸らんと、已に城下に近付ける處に、あなたの山下に金鼓大に震ひ、一彪の軍馬を馳出す。眞先に進んだる兩將は、宋軍の猛將徐寧索超なり。兩軍未だ戰ざる先に、昭德城中の戴美、翁奎と戰ひしが、索超、金樵斧を揮て、只一打に戴美を馬下に切て落せば、翁奎大に驚き、兵を引て城中に迯回り、緊く門を鎖しけるを、索超は猶も追て城下に至るに、城上より射下す矢は雨よりも茂ければ、兵を領し引退く。徐寧は兵を引て、喬道淸が行先を遮りけれ

公孫勝高道清法術を争ふ

水の五行に按して、或は勝或は負け、未だ勝敗を定めず。此時狂風大に起り、兩軍旗を捧るの軍士、すべて風に捲動されて、打倒る。公孫勝左の手に劍を取り、右の手に麈尾を取て、空中に向て投ると齊しく、彼麈尾忽ち鴻雁と化し、須臾にして九霄に上ると見えしが、又化して大鵬となり、翼垂天の雲のごとく、九霄より飛下つて、彼五色の龍を打けるに、忽ち刮々と響て、其聲雷の如く、かの五色の龍を打て、鱗甲忽ち散亂し、紛々として空中より落來る。元より此五龍山には、昔より靈異のこと多く、常に五色の龍を現出せしかば、當所の人民等廟を立て、龍王を祭り、又五色の龍を泥を以て塑り、金の裝粉畫どもまことの龍と異なることなし。此時兩人は法を以て此塑龍を招て戰はしめしが、公孫勝又麈尾を化して大鵬となし、泥龍を打しめければ、彼年舊しく乾き硬りたる泥土こと〴〵く碎け、北兵の頭を打て、二百餘人を打倒す。此時公孫勝手を揚て招けば、麈尾は初のごとく手中にあり。喬道清是を見て、再び妖術を使はんとせし時、忽ち公孫勝に、五雷の正法をつかはれ、空中に一尊の金甲神を現じ、手に利劍を以て喬道清をさし來れば、喬道清口中に念咒すれども、更に少しの奇特もあらざれば、心中に大にあわてける處に、公孫勝大聲に、喬洌馬より下て、縛を受よ、と叫びければ、大に驚き逃回る。此時林冲馬を飛し、矛を撚て喬道清を追來り、罵りて云く、賊道人何國に行や、と

道にして、正法にあらず、早く馬より下て我に歸順せよと。喬道清、遙にかの先生を見るに、頭に七星冠を戴き、身に鶴氅を著し、手に松紋の古定劍を携へたり。喬道清見終て云く、我今適法を行うて、靈ならずとて、なんぞ汝に隨んや。公孫勝笑て云く、汝まだ小術に誇るぞや。喬道清喝して云く、汝我を侮らば、再び手段を見すべし、と云も終らず、精神を振ひ、口中に咒文を唱へ、手を擧て費珍を招けば、費珍が手中に持し長鎗、宛も人に奪るゝがごとく、自然と空中に飛揚り、公孫勝をさし來る。公孫勝少しも騒ず、劍を以て秦明を招けば、秦明が持し狼牙棍、早く自然と手中を離れ、彼長鎗と空中にあつて相戰ひける時、兩軍喊を作り各呆れ見る處に、忽ちに一聲響有て、彼長鎗直ちに狼牙棍に打落され、北軍の戰鼓に貫き立ければ、狼牙棍は始の如く、秦明の手中にあり。喬道清又念咒し、手を擧北の方を招き、一聲疾と叫べば、忽ち五龍山の頂に黑雲大に起り、雲中に、黑龍を現出し、飛騰して宋軍に降らんとす。公孫勝から〳〵と大に笑ひ、手を擧て五龍山を招けば、忽ち雲中に光を放て、黃龍現出し、空中に有てかの黑龍と戰ふ。其とき公孫勝高聲に、青龍白龍早く來れ、と招ければ、忽ち青龍白龍空中に現出す。喬道清是を見て、劍を揮うて大に叫び、赤龍早く來て相扶けよ、と云中に、忽ち山頂より赤龍現出し、各飛舞して五色の龍空中に相戰ふ。正に是木火土金

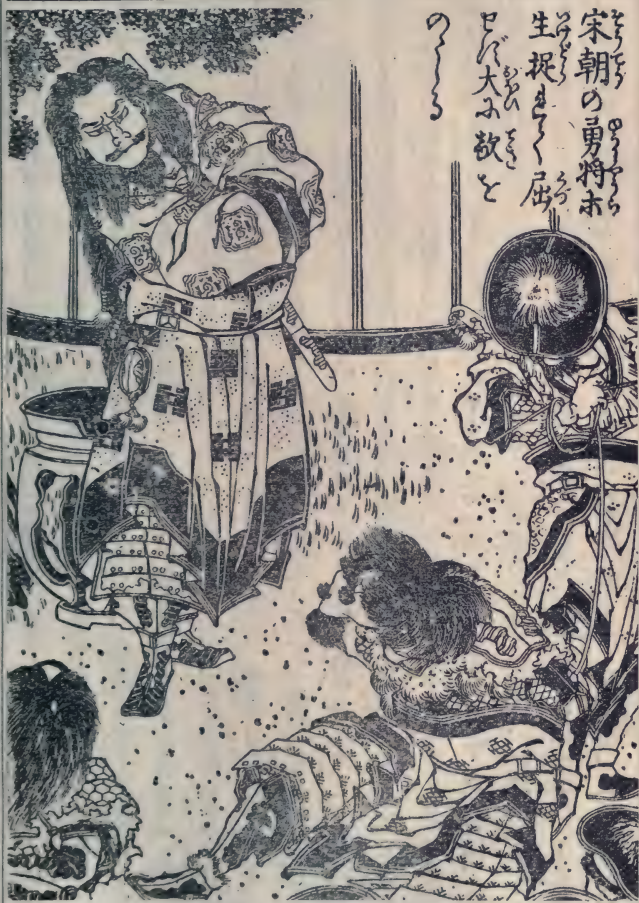
公孫勝宋江に對して云く、喬道淸法破れて敗走す、彼を城中に歸さば根を深うし、蔕を固め制し難かるべし、兄長是を計り給へ。其時宋江急ぎ令して、先徐寧、索超に五千の兵を差添へ、城の南門を遮らしめ、王英、孫新に五千の兵を添へ、城の西門を遮らしめ、只喬道淸が城に回るを遮つて、彼迯るを追ふこと勿れ、と下知すれば、衆將命を領し馳向ふ。其時宋江、公孫勝と同じく、林冲、張淸、湯隆、李雲、扈三娘、顧大嫂を引具し、一萬の軍馬を馳て、北軍を追ければ、喬道淸は雷震等と同じく、且戰ひ且走つて、四五里許逃れけるに、又向うより一彪の軍馬を馳出せば、誰ぞと見るに、孫琪聶新の輩なりければ、兵を合せて、五龍山の陣に回りけるに、猶も宋兵鑼を鳴し、鼓を打て大に推寄ければ、孫琪が云く、國師暫く休息し給へ、我等彼と一死を賭にして戰はんと。喬道淸は兼て衆人に道術を誇りしに、今日公孫勝の術に法を破られ、十分に忿り、且羞て、則孫琪に答て云く、汝先進むことなかれ、我再び彼等と戰んとて、眞先に馬を出せば、雷震等左右に從へり。時に大に罵つて云く、水洼の草寇、いかんぞ人を欺くや、我再び汝と勝敗を決すべしと。其時宋江の陣中に旌旗左に招き右に展て、一起一伏都て陣を連ね、金鼓響き眞先に馬を出すは、山東の呼保義及時雨宋公明なり。左の馬上に坐したるは、入雲龍公孫一淸なり。手に寶劍を取て喬道淸を指ざして云く、汝の學ぶ處の術は外

金光を出して、かの風砂をつきはらひしと見えしが、空中の神將紛々として、陣前に落るを見るに、すべて紙にて作れる人形なり。是を神兵の術と名付たり。時に喬道清は神兵の術の破らるゝを見て、大に神通を演べ、髪をさばき劍に憑て、口中に念咒し、又三昧神水の法を行へば、忽ち黑雲壬癸の方より掩ひ來りけるが、宋の陣中より、忽ち一人の先生馬を騎出し、手に松紋の古定劍を執り、口中に咒念し、一聲疾と叫べば、忽ち空中に黃袍神を現じ、手に降魔の利劍を携へ、北に向つて彼黑雲を滅しけり。喬道清は大に驚き見る所に、宋の軍中より聲々に叫て云く、賊道人愕然ことなかれ、只今手段高强の者出來れり、と叫びければ、喬道清且は恥ぢ、且は恐れ、本陣をさして迯かへれり。今妖術を破る先生は、入雲龍公孫勝、衛州に在しが、宋江の命に依て、王英、張清、解珍、解寶と倶に急ぎ到著し、宋江に見えけるに、喬道清が妖術樊瑞を破るを見て、此日二月八日にて干支戊午にして、戊土に屬すれば、則天下神を請て、彼壬癸の水に尅て、妖烟を拂ひ、忽ち青天白日を現出す。其時宋江、公孫勝と共に陣前に至て、北軍を望むに、喬道清大に恥て、南をさして迯去けり。

○幻魔君の術五龍山を窘む

歩兵を引率し、悉く黒旗黒甲を著し、手に摽鎗利劍を携へ走出れば、右より神火將軍魏定國五百の火軍を引率す。各身に絳衣を著し、手に胡蘆を引提げ、内には硫黄、焔硝、五色の火藥を貯へ、五十輌の火車を眞先に推し、都て乾たる柴を積上げ、一度に火を著押出せば、左の方は烏雲地を捲き、右の方は烈火天を焦し、兵を進め攻來れば、北兵大に驚き恐れ退んとせし處に、喬道淸大に怒り高聲に、迯る者は斬んと叫び、自ら右の手に寶劍を拔き、口中に咒文を唱しかば、忽ち黒雲地を蓋ひ、風雷大に起て氷雹大に降り、霹靂交加り、聖水神火を打消ければ、單廷珪、魏定國大に驚き、本陣に迯回り、須臾にして靑天白日を現出す。地上に猶鷄卵の如き氷雹あり。喬道淸は宋兵を望むに、悉く氷雹に打れ、頭を損じ眼を潰しかば、自ら神術に傲り、高聲に叫んで云く、宋兵共再び手段高強者あらば出來れと。此時樊瑞且恥且怒り、自ら馬上に在て劍に仗り、平生の法力を使ひ盡し、口中に咒文を演れば、忽ち狂風四方に起り、砂を飛し、石を走らせ、日光昏し。此時樊瑞兵を招て切來れば、喬道淸大に笑て云く、思ふに汝の小術何事をかなさんとて、自ら又劍を揮て法をなし、口中に詞あれば、忽ち狂風宋軍の方を吹き、砂石を飛し、空中に多くの神將を現しければ、樊瑞は自ら術の及ざるを知り、本陣に迯回るを、喬道淸は四人の將と同じく追來り、已に危く見えける處に、忽ち宋の陣中より一道の

其勢都て二萬餘騎、次の日五鼓に城を出で、城南五龍山のもとに陣取し、宋江の大寨に攻寄たり。此時宋江は、賊兵已に向ふと聞き、先樊瑞、單廷珪、魏定國をして敵を迎へしむ。喬道淸は、自ら高阜に登り、宋の陣を望むに、「四面八向之有」準、前後左右之相救、門戸開闢之有」法、呼吸聯絡之在」度。喬道淸見終て心中に稱美せり。時に宋の陣中一聲の炮響き、彩旗風に飜り、金鼓天に震ふ。喬道淸高阜を降り、雷震、倪麟、費珍、薛燦を左右に從へ、自ら陣前に出ければ、宋將一騎眞先に馬を出す。是則混世魔王樊瑞なり。手に寶劍を取り、喬道淸を指て罵りて云く、賊道人よく我に敵するや。喬道淸心に思へらく、此人定て少しく法術をなさん、我先是を試んと、則樊瑞をさして罵て云く、無智の敗將いかんぞ狂言を吐や、我汝と武藝を比べんや。樊瑞が云く、比ぶべしとて、則劍を挺へける。此時兩軍大に喊を作り、樊瑞劍を揮て切蒐れば、喬道淸も劍を揮て相迎へ、戰ふ事三十餘合に至り、忽ち兩將の股の間より、黑煙まき上り、左に廻り、右に旋て、空中に散ずれば、衆人呆れ見る處に、樊瑞劍を擧げ、只一打と喬道淸を切けるに、是空なりければ、已に馬より落んとす。是喬道淸烏龍蛻骨の法を以て、特と破綻を見せ、樊瑞に切來らしめ、手段を敵に見するなり。時に喬道淸は陣前に回り呵々と大に笑へば、樊瑞も馬を返回ると等しく、宋軍左右の陣門大に開き、左より聖水將軍單廷珪五百の

宋朝の勇将ホ
生捉まるく屈
ヒバ大ホ敬と
のへる

まづ唐斌を罵りて云く、反賊汝いかんぞ恩を忘れ敵に通同せしや。唐斌喝して云く、汝狂言を云ことなかれ、汝等死期已に近しと。此時喬道清は、生捉の姓名を見るに、こと〴〵く宋兵中の勇將なれば、則衆人に對して云く、汝等志を改め降らば、我晉王に奏して高官の人となさんと、いまだ云も終らざるに、李逵圓き眼をむき、虎の髭を逆だて、大に叫ぶこと雷のごとく、罵つて云く、賊道人、汝我等をいかなる人と思うて亂言を云や、我は是黒爺々黒旋風なり、我を斬とも少しも、眉を顰ば、好漢の數ならじと。魯智深、武松、劉唐も又聲を等しく、賊道人、汝夢にも我等を降さんことを思ふなよ、我等が首は切べけれど、鐵のごとき腿は屈ること能はじと。喬道清大に怒り叱していはく、早く切れと命ずれば、魯智深呵々と大に笑て云く、我死を見ること歸るが如しと。喬道清これを見て、心中に思へらく、我素よりかゝる硬き人を見ず、まづ彼等の命をとゞめ置き、再び理會せんとて、慌しく軍士に命じ、暫く彼等を監せよ、と有ければ、武松又云く、賊道人斬ば早く剄れ、煩しさを見るに堪ずと罵れば、喬道清は只頭を低てものいはず。自ら心中に三昧神水の法の靈あらざるを怪み、唯城門を堅めしめ、敵の樣を伺ひけるに、已に四五日を經て、聶新、馮玘、大兵を領し至りければ、喬道清是を城中に迎へ、又宋兵の久しく來り戰ざるを見て、思ふに別の計も有まじとて、自ら諸將を隨へ、

八編　卷之七十五

○喬道淸の術宋江を破る

かくて吳用命じて、大陣を以て小陣を包み、李藥師が六花の陣に擬し、用意已に終る處に、樊瑞急ぎ壺關より歸れりと告ければ、宋江召て、喬道淸が事を委しく語れば、樊瑞が云く、是全く邪法なれば、某不才たりといへども、明日法をなして、彼を擒にすべし、と告ければ、吳用が云く、彼もし來て戰を挑まずんば、只堅く守て、公孫一淸の來るを待べし、と有ければ、宋江命じて、張淸、王英、解珍、解寶の五百の兵を差添て、衞州に遣し、公孫勝を召しめ、只此處には寨柵を堅め、軍士は各甲冑を卸ず、弓は弦を弛ず、刀は鞘に納ず、用心嚴しく扣たり。去程に喬道淸は妖水を現じ、宋江を生捉んとせしに、忽ち妖水退き、宋江遁れ去しかば、自ら怪で思へらく、我此術は天下第一の妙法なるに、敵兵誰か解法を知や、思ふに彼が軍中にも必ず異人あらんとて、先兵を收め、孫琪等と城中に回り、酒宴を設け、捷軍を賀する處に、軍士等、魯智深、武松、劉唐、李逵、鮑旭、項充、李袞、唐斌を縲て階下に引居れば、孫琪

る、山士奇、史定と共に山を下つて戰ひ、索超斧を以て史定を切て二つとなすと。又壺關の破るゝ時、田虎の臣、唐斌歸り忠に依て、山士奇馬を下つて降參せよと、云も終らず矛を擧て、史定を馬より下に突伏しとあり。斬られ二つとなりし程なく、又討死するはいかなる杜撰ぞや、概事實を筆に述るには、かゝる事はなし。作者筆先を以て、儲け述る書は、心を用ひざれば、かくのごとき麁忽多し。都て水滸傳一部百回の舶來本といへ共、符合せざること算ふべからず。世の論者口を噤ざる所以なり。又此卷に出る人の姓憑と馮を共にふうと訓は誤なり。憑はひよう、馮はふなり。又人の名楨は禎なり。后土の神位尊戊己と訓は誤なり。戊己は則つちのえつちのと土の强弱を表せし字なり。じゆつと訓は戌の字にて別なり。論者云く、水滸傳一部に夢いかにも多し。又唐斌が矢文、若宋江關を伺はしむる使を出さずば、急に達しがたく、手術皆差ふべし、危いかな。又田虎が亂を聞出し、宋江に告知らすと、此後李逵が口論より、方臘が亂九へんめにくはしを聞出し、宋江に告知らすと、同じ趣向なり。

人を見るに、赤き髮、裸形にして、腰に黃棍をつけ、手に鈴鐸を取り、地上の土を取て、彼滔々たる水を望んで撒ければ、忽ち平地を現出す。彼人又云く、汝等猶數日の災厄あり、人を衛州に遣さば、此難を遁るべし、と云も終らず、一陣の風と化して去ければ、衆人且歡び且驚きて、宋江を守つて南に走り、五六里も過ける處に、忽ち一彪の軍馬向うより馳來れば、敵兵にやと見る所に、吳用、王英、扈三娘、孫新、顧大嫂と同じく、一萬の軍馬を領し、宋江を迎へければ、宋江、吳用に對して云く、賢弟の言を聞ず、已に相見る事能ざらんとす。吳用が云く、先本陣に歸り給へとて、已に本陣に歸りければ、宋江再び彼妖術に迷はされ、又異人に遇ことを語れば、吳用大に驚きて云く、位尊戊己は土神なり、兄長の忠義、よく后土の神を感ぜしむ、土能水に尅つと說ければ、宋江悟て則ち沐浴し、天に向て拜しけり。此時天色已に暮んとせしかば、敗殘の兵次第に回り來りければ、宋江軍士を算るに、一萬餘騎を失ひければ、吳用、宋江に對して云く、賊人もとより妖法をなせば、其用意をなすにしかず、某が愚意には、潛に此陣を明けて、十里を退て陣取し、此陣中には只羊の蹄を以て太鼓を打しめんと。宋江聞て可なりとし、則令を傳へ、十里を退いて陣取けり。

按ずるに流布の通俗忠義水滸傳拾遺に云く、壺關の軍、田虎が手下の猛將八人此關を固た

不思議や今迄ありつる平原の地、たちまち白浪天を浸して、恰も大海のごとくなれば、縦へ兩脇に翅を生ず共、遁るべきやうはなかりけり。此時魯智深、武松、劉唐聲を齊うして云く、此まゝに死せんよりは、力を盡し打死せんとて、各北軍に切入ば、忽ち霹靂一聲響き、空中より二十餘人の神人現出し、手に鐵槌を取て、早く魯智深、武松、劉唐を打倒せば、遂に北兵に生捉れぬ。其時宋江前は大海にて進むこと能ず。後へには北軍潮の湧がごとく追來り、大聲に呼つて云く、宋江早く馬より下て縛を受よ、汝の一死を免すべしと呼れば、宋江天を仰いで歎じて云く、我死すとも惜むに足ず、唯君恩未だ報ぜず、又親老て人の養ふなし、李逵等衆人をも救ず、唯此儘に死せん事、豈恨にあらずやと有ければ、林冲、徐寧、索超、張清、湯隆、李雲、郁保四の七人も、只宋江を護て西に走り東に走り、聲を齊くして云く、只兄長と同じく死せば、是我等の幸なりとて、寸歩も離れず、其義勇こそ凄じけれ。正に是、國危知ニ忠士一。歳寒見ニ孤松一。去程に郁保四は、はや身に二つ迄矢を受しか共、猶も帥字の旗を捧げて、宋江の左右を離れざれば、北軍より是を見て、帥字の旗未だ倒れざれば、あへて立寄ず。其時宋江等は、各手に劍を拔持て自殺せんとせし處に、不思議や忽ち一人走り來て止て云く、衆人愁ふることなかれ、我は位尊戊己なり、汝等の忠義を憐み、彼妖水を掃て汝の命を救はんと。衆人かの

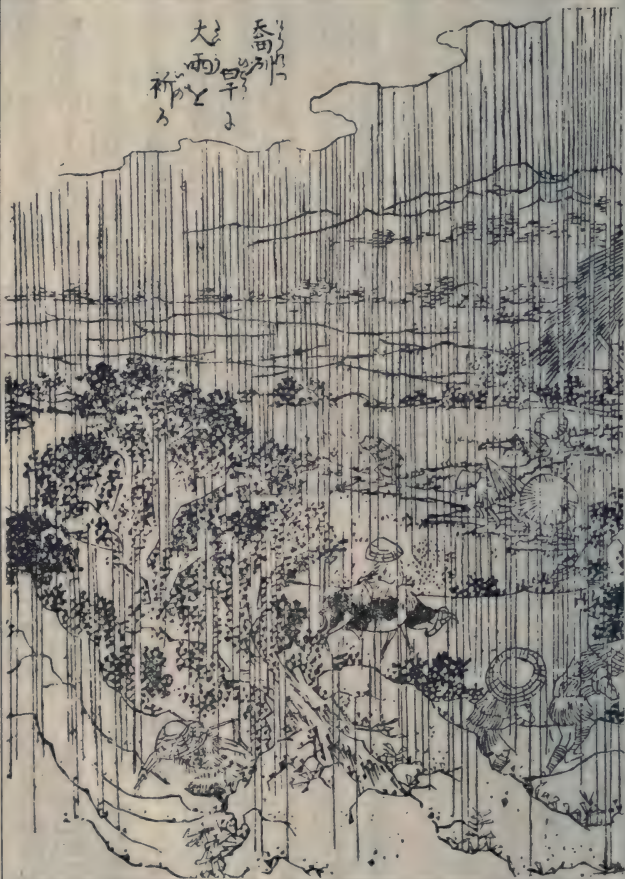
清も兵を合して南門に至り、喊を咄と作りけり。去程に喬道淸は城中に入ければ、孫琪等十將おのおの參見し、宴を設けて饗應しける處に、忽ち宋兵又攻來れりと告ければ、喬道淸大に怒て云く、這廝等甚だ不禮なり、我出て宋江を捉ふべしとて、馬に騎四人の猛將を左右に隨へ、三千の兵を領し、城門を開きて馳出たり。其時兩軍喊を作り、畫角等しく鳴し、南北より放つ矢は雨の如し。宋の陣中には、宋公明眞先に馬を出せば、郁保四師の字の旗をさゝげ、馬前に建たり。左に徐寧、林冲、魯智深、劉唐あり。右に索超、張淸、武松、湯隆あり。宋江馬上遙に北軍を望むに、當先に一人の先生、手に寶劍を提馬上に坐す。是幻魔君喬道淸なり。宋江指し罵て云く、汝逆賊、早く我兄弟を返せ、少しも遲延ば汝を捕へて、屍を摧くこと萬段とせん。喬道淸喝して云く、宋江無禮をなすこと勿れ、我今汝を捉んに、汝いかんがして我を捕ふるや。宋江大に怒て、鞭をあげ指しければ、徐寧、索超、張淸、劉唐、魯智深、武松、各軍器を以て切かゝる。喬道淸口中に咒文を唱へ、劍を以て西を指し、齒をたゝいて疾とさけべば、須臾に天昏くして砂を飛し、石を動し、多くの神將空中より打降れば、宋軍戰ずして自ら亂れ、萬馬等しく嘶きければ、林冲等急に馬を回し、宋江を護し北へ走れば、喬道淸兵を招て追來る。此時宋軍大に亂れ、四面八方へ逃失ぬ。されば宋江は諸將と同じく、未だ半里の地を過ざるに、

名を滅すと、此場に至ていかんぞ命を顧んや、馬を跑らし矛を撚て、喬道清に打蒐れば、喬道清も彼が兇猛なるを見て、慌たゞしく念咒をなし、一聲疾と叫べば、忽ち狂風黄砂を吹き、唐斌が面を打來れば、眼眩んで退く處を、北軍の兵卒只一鎗に左の腿を突ければ、馬より落る所を北兵終に生捉ぬ。元より北軍例有て、凡そ敵將を生捉し者には、各賞物有ければ、更に敵將を害せず、只生捉を爭ひける。其時唐斌に從ひし軍兵は、都て黄砂に眼を暈され、大半敵に打取られけり。去程に林冲、徐寧は東門に在けるが、城南に戰の聲聞えければ、馬を馳て來りしが、喬道清は李逵等を多く擒りて、早城内に入と聞て、大に驚き、本陣に回らんとせし處に、彼耿恭は敗殘の兵を從へ馳歸れば、委しく事の次第を聞き、同じく本陣に回りて、宋江に斯と告ぐ、宋江大に驚き、しばし倒れて在けるが、又起上て云く、李逵等が一命已に休せん、と哭けるに、吳用來て諫て云く、兄長先悲しみを止て軍事を議し給へ、賊人已に妖術をなさば、急ぎ使を壺關に遣し、樊瑞を召て敵せしめん。宋江が云く、尤なりといへ共、我明日を待がたし、急ぎ昭德城を破て、李逵が命を救はんと有ければ、吳用懇に止れども、先一面は人を壺關に馳せ樊瑞を召しめ、又一面には、吳用をして諸將と同じく本陣を守らしめ、自ら林冲、魯智深、徐寧、劉唐、湯隆、李雲、郁保四を隨へ、其勢二萬餘騎、昭德城へ推寄る。其時索超張

先生を取卷て、眞先に進んだり。彼先生頭に紫金冠を載き、身に鶴氅著て、手に錕語の寶劍を取り、紅羅傘のもとに白馬に乘り、馬前の旗に、護國靈感眞人軍士左丞相征南大元帥喬道清と誌せしかば、耿恭見て大に驚き云く、此人利害甚しと。その時李逵等は游兵を領し馳來り、喬道清が軍を取んとせしかば、唐斌、耿恭止めて云く、此人幻術を善す、將軍輕々しく迎へ給ふことなかとれ制すれば、李逵いかんぞ扣んや、我彼撮鳥を斬んと、斧を揮て驀地喬道清に打て蒐る。正に是不管花枝綠且紅、颺天捲地黑旋風。此時項充、李袞、鮑旭等は李逵に過あらんを恐れ、各摽鎗をなげかけ馳向へば、彼先生呵々と大に笑ひ、喝して云く、汝等に我手段を見すべしとて、寶劍を以て空にさし、口中に咒文を唱へ、一聲疾と叫べば、忽ち狂風大に起り、一塊の黑氣舞降り、天地を包み、青天白日忽ち暗く、面を對すれども見る事能ず。李逵等は喬道清が妖術に困められ、五百の游兵悉く生捉れぬ。

○宋公明の忠后士を感ず

耿恭は此體を見て馬に鞭うち、東をさして逃れければ、唐斌唯一人馬を扣て在けるが、自ら心中思へらく、喬道清もとより妖術を善すれば、逃るとも遁すまじ、我聞勇士は法に死せずんば、

旱よ
大雨と祈る

威勝に至りしが、此時田虎亂を起し、喬道清が術あるを見て、彼を招き軍師となし、幻術を以て人を惑はし、多くの州縣を奪ひ、其功大いなればとて、護國靈感眞人、左丞相の職を授けたり。此時喬道清は軍を領し、昭德を救はんことを乞ければ、田虎大に悦び、國師寡人が爲に、昭德を救ひ給はるべし、と云も終らざるに、殿帥孫安進み出で、奏して云く、臣願くば軍馬を領し、晉寧を助けん、と乞ければ、田虎其まゝ兩將を征南大元帥に封じ、各に二萬の兵馬を授け、征進の用意をなさしめけり。抑此孫安も涇原の人にして、喬道清と同鄕なり。身丈九尺腰の大さ十圍頗る謀略有て、力萬人に敵し、又よく鐵劍を使ひ、父の爲に仇を報じ、人を殺し、追捕の到んことを恐れ、家を棄て威勝に來り、喬道清の勸めに依て田虎に仕へ、敵を禦ぎて功あるゆゑ、殿帥の職を授れり。此日孫安は十人猛將に二萬の兵を領し、晉寧へ進發す。其十人は、梅玉、秦英、金禎、陸淸、畢勝、潘迅、楊芳、馮昇、胡邁、陸芳、なり。さて又喬道清は二萬の精兵を從へ、聶新を右に、馮玘を左に引連れ、自四人の猛將と當先に進み、昭德を望て進發す。其勢あたるべからず見えにける。其四將は、雷震、倪麟、費珍、薛燦と云ふ。されば日を經て、喬道清が軍馬、已に昭德城の北に至りけるが、唐斌、耿恭が兵は北門を攻打しに、忽ち西北の方に敵兵有と聞き、馬を回して遙に望に、北軍中に四人の將軍、一人の

入しが、又鹿と化すると夢見て、此喬冽を生り。此人力萬人に敵し、能鎗棒を使ふ。又崆峒山に遊で異人に遇、劍術を授り、風を呼び、雨を呼び、霧に駕し、雲に騰る。後又二仙山に至て羅眞人に見え、玄微を悟ん事を乞しに、羅眞人答て云く、汝外道に志厚ければ、善心に歸して後、再び來て我に見ゆべし、と有ければ、喬冽怒つて歸來り、自ら幻術を賴で四方に遊び、善事を修せず。此年安定州大に旱し、五ヶ月迄一滴の雨降ざれば、州官榜を出し、若雨を祈て寄特有者には、三千貫の信賞を取せん、と有ければ、喬冽是を見て、壇に上りて祈しが、忽ち大雨降て人民大に悅びぬ。されど州官は已に雨の降を見て、俄に欲心を生じ、當所の不正學究何歳といへる者と計て、兩人各千貫づつを分ち收め、一千貫を喬冽に與へて云く、先生かくのごとく神術あれば、錢を用ることも有まじ、今此處錢糧不足して、百姓飢渴すれば、假に二千貫を我に預くべしと有ければ、喬冽聞て、大に怒罵つて云く、信賞錢は是當地の人民の集め出すなれば、是民の膏なり、然るを汝掠取て、酒色に耽り、國家の大事を破るべし、我今民の爲に一害を除くべし、と云も終らず、拳を舉て劈臉を打けるに、彼州官は、元來淘虛せし人なれば、痛く打れ家に歸り、四五日經て遂に空しく成にけり。喬冽は此動靜を聞知て、追捕の至らん事を恐れければ、涇原に歸り、名を道淸と改め、道士の貌となり、母と同じく家を棄て、

成て、昭徳を打んと乞ければ、陵川の降將耿恭も、同じく向はんことを乞ければ、宋江是を許し、又文仲容、崔野に向て云く、汝等兩位は久しく抱犢山に住して、彼山の案内を能知れば、今より人馬を領し、彼山を守り給はんや、某昭徳を打取り、其時再び相會せんはいかん、と有ければ、兩將は謹で命を領し、宋江に辭別し、此夜抱犢山に歸りけり。去程に次の日、宋江は戴宗をして晉寧に遣し、盧俊義の消息を聞しめぬ。呉用と商議し、昭徳を討用意をなしにけり。されば唐斌、耿恭に一萬の兵を添へ、東門を守らしめ、索超、張淸をして一萬の兵を以て、南門を討しめ、只西門を圍まざるは、威勝の救兵來る時は、敵を前後に受ん事を知てなり。又李逵、鮑旭、項充、李袞に五百の歩兵を差添て游兵とし、孫立、朱同、燕順、樊瑞、馬麟を止めて壺關を守らしめ、宋江自ら大兵を領し、昭徳城の南に陣取ぬ。斯て威勝には、田虎諸官と同じく、軍事を談じてありけるが、壺關の守將山士奇及び、晉寧の田彪より申文來り、宋江の勢大なることを說き、且壺關已に破れぬと告ければ、田虎大に驚き、誰か昭徳を救ふべし、とありければ、班部中より一人首に黃冠を戴き、身に鶴氅を著し、進み出奏して云く、臣冀くば、昭徳に向て敵を退けんと。衆人見る時、是國師喬道淸なり。抑此人は陝西の地、涇原といへる處の人にして、初の姓は喬、名は洌と云し人なり。其母懷姙の時、一疋の豺室に

ば、更に敵兵を追討ず、各關上に攻上るに、唐斌は早く李逵等を引て關を奪ひ、合號の砲を放たしむ。此日北軍大に亂れ、仲良は亂兵に殺され、竺敬は徐寧に突殺され、其外討るゝ者二千餘人、生捉るゝ者五百餘人、降る者甚だ多し。されば宋江が大兵已に關中に入ければ、唐斌馬より下て、宋江を拜して云く、某久しく君の大名を聞仰ぎ、大寨に投ぜんと欲すること、數度なりといへ共、門路なうして尊顏を拜すること能ず、今天其便をかし、某をして平生の願を滿しむとて、又宋江を拜しければ、宋江慌たゞしく答て、唐將軍已に朝廷に歸順せば某と同じ、豈慇懃の禮を用んや、某朝廷に歸らば天子に奏して、將軍の功を虛くせじと有ければ、唐斌敬で拜謝す。時に孫立等は、文仲容、崔野を引て關中に至れば、宋江大に悅び、酒宴を設け、唐斌等三人を慶賀し、又其功を功績簿に記さしめ、又軍兵を算るに、新に降參する者三萬餘人、戰馬を得ること千餘疋、此時諸將都て來て、功を獻ずれば、宋江是を勞ひ、又唐斌に昭德城中、兵の多少を問に、答て云く、城内にもと三萬の兵馬ありしを、山士奇一萬騎を選で相守れり、今猶二萬の兵馬あり、其守將は、孫琪、葉聲、金鼎、黃鉞、冷寧、戴美、翁奎、楊春、牛庚、蔡澤等の十人なり、田虎もとより昭德を賴んで要害とし、壺關を以て、其屏墻となせしかば、今壺關破るゝは、已に一臂を失はん、某不才たりといへども、願くは前部と

ども、敵兵已に我陣後に至ると聞ば、備へなくんばあるべからずとて、先孫新、朱同、單廷珪、魏定國、燕順に一萬の兵馬を差添へ、潛に陣後に備へ、もし文仲容、崔野が兵來らば、未だ壺關を得ざる内は、兩將をして我陣に近づかしむることなかれと命じ、又徐寧、索超に五千の兵を領せしめ、陣の西に埋伏せしめ、唯陣中砲の響を合號に兵を合し、關上に攻上るべし、萬一彼が計にあたらば、只陣前を固むべし、と命ずれば、各用意をなしにけり。去程に山士奇は、唐斌と同じく待て天明に至りしが、忽ち陣後に塵砂大に起れば、唐斌遥に指ざして云く、是必ず文、崔の二將、敵の後を打なるべし、唯速に砍出べし、と有ければ、山士奇命じて、竺敬、仲良をして關を守らしめ、自ら吳成と同じく眞先に進み、唐斌陸輝をして後へに備へ、その勢一萬餘騎、各拔つれて切下れば、宋兵急に退くを、山士奇勢に乘じ追來るに、忽ち一聲の砲響き、宋軍伏勢左右よりかゝれば、山士奇、吳成は左右に分れ戰しが、又一聲の砲響き、李逵、鮑旭、項充、李袞等各摽鎗を以て擲出れば、山士奇案に相違し、馬を回し關前に迯至るに、一將矛を横へ馬を立て、大に叫で云く、唐斌此にあり、壺關已に宋朝に屬す、山士奇はやく馬より下て降參せよ、と云も終らず矛を舉て、吳成を馬より下に突伏ければ、山士奇大に驚き、數十騎を従へ、命を限に迯去けり。此時林冲、張清はもとより關を奪ふに志あれ

は必ず宋兵の後へに至らん間、關上よりも兵を進めて夾み攻べしと有ければ、山士奇大に悦び、又盃を勸めけり。

○李逵が暴衆人を陥る

されば初更の比ほひ、唐斌關上に上り、遙に山下を望で、大に怪み、星の光のもと、人あるに似たりとて、則矢壺の矢を取て山下を望で射下しける。此時宋軍の兵卒は、宋江の命を請け、關上の消息を伺んと、山下の路を行けるが、彼矢兵卒の右の股を射たりければ、大に痛でたへがたけれど、其矢箭鏃なきに似たれば、大に怪み取上見れば、多くの絹を以て矢鏃を縛れば、必ず子細有ことを知り、急ぎ陣中に歸り、是を宋江に獻ずれば、宋江取て燈下に披き見るに、細字の密書なり。是唐斌が宋江に奉る密約なり。其文に、

明日早朝此關を奉るべし。又文仲容、崔野は兵を領して、君の陣後に至らん間、只砲の響を暗號に、關門より切出ん。其時唐斌は機に乘じ、關を奪はんまゝ、宋先鋒其用意をなし給へ。

と委しく記せしかば、宋江急ぎ吳用を召て商議するに、吳用が云く、此事僞にて有間敷候へ

が、彼唐斌勢ある人に凌れ、怒に乘じ、竟に仇人を殺し、罪を遁ん爲、梁山泊に至て夥に入んと志し、此山下より過しが、抱犢の主將、文仲容、崔野に止られ、遂に此山の主將となりしが、田虎が造反せし時、自ら勢及ぶべからざるを測り、假に彼に隨ひしが、近來某衛州を守ると聞て、此正月元旦唐斌、只一人馬に騎て、潛に衛州に來り、委しく向來のことをのべ、仁兄の忠義を慕ひ、朝廷に歸順し功を立て、罪を贖はんことを願ふ故、某唐斌と同じく、抱犢山に至り、文仲容、崔野にも見けるに、二人も又少の異心あることなく、只朝廷に歸せんことを願ひ、闕を獻じて進見の禮となさんと、委しく心服を語りぬ、よつて早速告奉る。

と記せしかば、宋江、吳用大に悅び、只兵を止めて動靜を伺居ける。彼山士奇は又使者を抱犢山に遣し、早く兵を出し、宋兵の後へを攻んことを、催促せしめければ、使者歸り來て凡唐斌の意を說けるは、只今月明らかにして、晝のごとくなれば、月暗きを待て兵を出し、敵の知得ざらんことを、肝要とすと述ければ、山士奇は唯月の黑きを相待ける。されば此時より、凡そ十四日を經て、唐斌は數騎を連來れば、山士奇急ぎ闕上に迎へ、酒宴を設け管待ける。唐斌が云く、今夜三更の頃ほひ、文仲容、崔野一萬の兵を領して、抱犢山の東より向はゞ、天明の頃

て、馬を回し、本陣に迯かへるを、張清早く石子を放つに、其石山士奇が盔を打ちんと響しかば、山士奇大に驚き鞍に隱れ迯歸る。此時北軍大に亂れ、山士奇、仲良、漸々關上に迯回り堅く守て出ざるを、林冲兵を進め關下に攻寄けるに、關上より射下す矢は雨の如く、進むこと能ず。早く林冲が左の臂に一つの矢中りければ、其日兵を收め本陣に回り、安道全に矢疵を療治せしむ。幸ひ疵も淺く一兩日を過ぎ、矢疵は癒けり。去程に山士奇は關上に入軍兵を算ふるに、二千餘人を失ひ、又兩將をも討せたれば、只堅く關を閉出て戰ず。急ぎ使を威勝に遣し、晉王に說しめていはく、宋江等兵强く將猛く、容易に敵しがたし。早く良將をして佑けしめ給へ、と注進し、又密に抱犢山の守將、唐斌、文仲容、崔野等に約していはく、汝等精兵を領して、抱犢の東より宋兵の後へを攻め、炮を放て號合とせよ、我又兵を領し關を出で、兩方より夾み攻ば、必ず勝を全うせんと、約すでに定れば、只よく守て出戰ず、日限を相待けり。去程に宋江は陣を留ること半月餘なれ共、壺關の險に支られ、急に破ること能ず、唯鬱々として在けるが、忽ち衛州の關勝より、書狀到著し、軍事を告來れり、と報じければ、宋江吳用と共に書を開き讀けるに、

抱犢山の主將唐斌はもと蒲東の軍官なりしが、勇にして且義あり、某とは久しく友たりし

林冲敵を
近く箭をうく

以て此關を得べきや。林冲が云く、明日の戰に、兄弟等力を合せ、賊將を討取り、共に關上を攻取んはいかん。呉用が云く、將軍必ず造次に事をなすべからず、孫武子が云く、勝べからざるものは守りなり、勝べき者は攻なりと、意は敵に對して未だ勝べからざる時は、自ら守り戰ず、勝べき時に至れば、急に是を攻伐べし、是孫子が兵法なり。宋江が云く、軍師の言　甚善し。扨次の日林冲、張清、兵を領し戰を挑んと乞ければ、宋江是を許し且令して云く、縱令勝とも輕卒關上に攻上ることなかれとて、又徐寧、索超に兵を添佑けしむ。林冲、張清五千の人馬を領し、旗を搖し鼓打ち、大に罵つて戰を挑み、已に午後に至れ共、少しの動靜もあらざれば、已に歸り來んとせし處に、忽ち關上に一聲の砲響き、關門開く處に、山士奇馬を跳せ、左に伍肅、右に呉成、仲良あり。二萬の軍馬を從へて、關上より追來る。其時林冲少も慌ず、張清に向て云く、賊人我勞疲たるに乘ずれば、努力して是を迎ふべしと、各馬を囘し合せ、相手を選ず散々に相戰ふ。林冲は伍肅と戰ひ、張清は梨花鎗を以て、山士奇と戰ひ、索超は斧を以て呉成、史定に敵す。兩軍喊を作り、七騎の馬は塵を跳立跑廻る。此時林冲喝して、只一矛に伍肅を馬より下に突落せば、索超と戰ひ在し呉成、史定叶ずとや思ひけん、兩將索超を捨て迯んとするに、索超早くも斧を揮て、史定を兩斷とす。山士奇は眼前兩將を失ふを見

此處に至り、四五日を過ざるに、蓋州已に宋江に陷れしと聞しかば、必ず此地に攻來らんを計り、毎日兵を勵し、馬に秣飼て敵の寄るを相待しに、宋江已に五里の外に陣取ぬと聞えし程に、急に一萬の人馬を隨へ、史定、仲良、竺敬と同じく各馬に騎り、山を下て打向ふ時に、宋兵已に山下に推寄て、兩軍各金鼓を鳴し喊を噇と作りけり。北軍の眞先の一將馬を馳出し、頭に鳳翅盔を戴き、身に金甲を著し、手に鐵棍を携しは則山士奇なり。高聲に罵り、水泊の草寇、いかんぞ我界を犯すや。宋軍の中より豹子頭林冲馬を躍せ、大に喝して云く、汝等逆賊猶天兵に逆ふやと、矛を撚て山士奇と戰ふ、五十餘合に至れ共、勝負を分たず。林冲心中に其術を感ず。北軍の竺敬、山士奇を扶けんと、刀を拔馬を飛せ來れば、宋軍より沒羽箭張淸鎗を挺へ相迎ふ。兩將の戰ひ二十餘合、張淸佯り負て馬を返せば、竺敬馬を飛せ追來る時、張淸左の手に鎗を取直し、右の手に石を取り、覘を定め抛けるに、其石竺敬の鼻を打ち、流るゝ血は泉の如く、馬より忽ち落けるを、張淸馬を駈寄せ、鎗にて刺んとす。北軍より史定、仲良竝び出で、命限り救ひ得て本陣に囘りけり。此時山上には、一將を打倒さるゝを見て、山士奇も過ちあらんことを恐れ、金を鳴し兵を收む。宋江も又兵を收めしむ。其夜宋江、吳用と商議し、今日の戰敵の一將を打倒せば、銳氣を挫といへ共、此山の嶮を容易打難からん、何の計を

こと三十餘里、宋江馬上遙に、向の山を見るに、石崖四方をかこんで、城郭のごとく、雲木天を挿んで蒼々たり。漸々山下に近付しかば、李逵忽ち馬前に走り來て、此山を指ざし、大哥此山は我夢中に至りし處なり、と告れば、宋江則ち降將耿恭を召し、問て云く、汝久しく此地に在ば定て此山を知つらん、某許貫忠の圖畫を以て考れば、是房山の高嶺にして、天地嶺と名くるにあらずやと、云も終らざるに、李逵高聲に云く、我夢中にかの秀士も、又天地嶺と説り、我これを忘れりと。耿恭が云く、此山則天地嶺なり、山中多く洞穴有て、昔人兵を避し處と聞く、近來土人の云に、靈異尤多し、夜々石崖の中に光有つて、四方を照し、樵夫適崖畔に至れば、異香芬々たること、當面遇し者多しと語れば、宋江遙に嶺上を拜し、此日行こと六十里にして陣取ぬ。又日を經て壺關の南に至り、五里の外に陣を取る。壺關は山の形壺に似て、上に關所有り。漢の時設しより始て此名有り。東に抱犢山、北に昭德城あり。要害の處なり。山上には田虎が手下の猛將八人、三萬の兵を以て楯籠り、敵を防ぐ。八人は山士奇、陸輝、史定、吳成、仲良、雲宗武、伍肅、竺敬なり。彼山士奇は、元より沁州富戶の子なるが、生質萬人に勝れ、能鎗を遣ひ、人を殺し、罪に行れんを恐れ、竟に田虎に屬し、敵を防で功ある故、兵馬都監の職を授け、此度朝廷より、宋江が兵馬攻來ると聞き、田虎彼に一萬の兵を添へ、

神を祭り、且賊人を怖しめ、扨兩路の大兵は北門より出れば、花榮等酒を進め餞送す。宋江盃を取て花榮に勸て云く、賢弟の威名、今賊軍に振へば、誠に此城を守護するに足れり、此城北面に敵を請ば、奇兵を設て是を討べし、賊人恐れて再び南を伺ふまじ。花榮唯々す。宋江又盃を盧俊義に勸め、今日兵を出さゞるに、陽城、沁水を得ること悦しからずや、是より賢弟長く驅て、早く晉寧に至り、賊首を捉へ、大功を立同じく富貴を稟候はん。盧俊義が云く、仁兄の威名已に振ひ、敵人戰ずして服す、況や某嚴令を奉ずれば、豈心を竭さゞらんや。其時又宋江、蕭讓に命じ、許貫忠が圖畫を寫しめて一卷となし、盧俊義に渡し、宋江自ら兵を三隊に分つ。まづ林冲、索超、徐寧、張淸に一萬の軍馬を與へ、前隊とし、孫立、朱同、馬麟、湯隆、李雲、燕順、單廷珪、魏定國に、一萬の兵馬を添て後隊となし、宋江は吳用と共に、其餘の諸將を從へて中軍となり、其勢都合五萬餘騎、東北に向て進發す。副先鋒盧俊義は、宋江に分れ、四十人の猛將五萬の軍兵を引連て、西北に向ひ進征す。されば花榮等四人は、宋江、盧俊義を送て城中に歸り、强弓火炮を設け、用心をなし、又城の東西の兩路に伏兵をなし、只賊兵に備へたり。又高平には、史進、穆弘是を守り、陵川には、李應、柴進これを守り、衛州には、公孫勝、關勝、呼延灼是を守りて固めをなす。去程に宋江が三隊の人馬は、蓋州を離れ行

楊林　周通　石秀　杜遷　宋萬　丁得孫　龔旺
陶宗旺　曹正　薛永　朱富　白勝

かくのごとく分配定れば、宋江再び盧俊義に向て云く、今兵を兩路に分たんに、知らず賢弟何れに向ふや。盧俊義が云く、只先鋒の嚴令に随はん、いかんぞ主帥の言を背んや。宋江が云く、然りといへども天命なきにしもあらず、試に鬮子を成て神明に伺ふべしとて、裴宣に命じ、東西に鬮子を成し、宋江、盧俊義、各香を炷き、天に祈り、兩人是を拈けるに、宋江は東の方を拈り、盧俊義は西の方を拈ければ、只雪の晴るを待て兵を進んと、各用意をなしにけり。

○關勝義をもつて三將を降す

扨も宋江は花榮、董平、施恩、杜興に二萬騎を相添て、蓋州を守らしめ、已に六日になりしかば、盧俊義と倶に兵を發せしに、探馬報じけるは、蓋州の支配陽城、沁水二ケ所の百姓、田虎に害せられ止ことを得ず、賊に從ひしが、今天兵至ると聞て、百姓相集り、陽城の守將寇孚、沁水の守將陳凱を生捉り、各酒を荷ひ、羊を牽て、城を献じ、來つて降を乞ふ、と告ければ、宋江聞て甚だ悦び、先兩所の百姓を賞勞ひ、榜を出し、再び良民となし、寇孚陳凱を斬て軍

至て兵を合し、威勝と取て田虎を擒にすべしとて、分撥已に定りけり。此時宋江に隨ふ衆將には、正先鋒宋江を初として、都合四十七人なり。

軍師　呉用　林冲　索超　徐寧　孫立　張淸　戴宗
樊瑞　朱同　李逵　魯智深　武松　鮑旭　項充
李袞　單廷珪　魏定國　馬麟　燕順　解珍　解寶
宋淸　王英　扈三娘　孫新　顧大嫂　凌振　湯隆
李雲　劉唐　燕靑　孟康　王定六　蔡福　蔡慶
朱貴　裴宣　蕭讓　蔣敬　樂和　金大堅　安道全
郁保四　皇甫端　侯健　段景住　時遷　河北の降將耿恭

又盧俊義に隨へる諸將には、副先鋒盧俊義を始として、都て四十人、

軍師　朱武　秦明　楊志　黃信　歐鵬　鄧飛　雷橫
呂方　郭盛　宣贊　郝思文　韓滔　彭玘　穆春
焦挺　鄭天壽　楊雄　石勇　鄒淵　鄒潤　張靑
孫二娘　李立　陳達　楊春　李忠　孔明　孔亮

李逵夢をみて
皁子とうろ

きことありとて、蔡京、童貫、楊戩、高俅を殺せしことを語るを、宋江が云く、衆人高聲に喜ぶことなかれ、何ぞ夢中のこと信ずるに足んやと制しけれ共、李逵は猶も拳を握り、袖を裏り、高聲に語て云く、哥々何ぞ彼がごとき賊將を恐れ給ふぞや、扨々夢とは云ながら、我是迄かくのごとき快暢ことを覺えず、又其外に奇意のことあり、其夢中に一人の秀士來て、我に告て云く、今宋先鋒急に田虎を破んとならば、十字の要訣ありとて、其文に云く、

要ㇾ夷二田虎族一須ㇾ諸二瓊矢鏃一。

と、是を數十遍念ずれば、則田虎を亡滅するの要訣なりと教しに依て、我又能是を覺えたりと、委しく語りければ、宋江、吳用、共に此文を聞と雖も、解することを能はず。傍に安道全と、張清竝居たりしが、瓊矢鏃と聞て、忽ち此事を解語んとしけるに、張清、安道全に向て丟眼せしかば、安道全は微笑て、遂に默して休にけり。されば吳用も其意を解こと能ず、其夜は各休けり。去程に次の日雪已に晴ければ、宋江は盧俊義、吳用と諸共に、兵を進むる用意をなしにけり。其時吳用が云く、今兵を兩手になさんに、東の一路に向はんは、先壺關を越て、昭德を取り、灤州楡社を過て、大谷より臨縣に至り、共に兵を合して、賊人の後より攻討ん、又西の一路に向はんには、先晉寧を取り、霍山を過て汾陽を取り、介休、平遥、祁縣を過行き、臨縣に

八編　卷之七十四

○宋江兵を兩路に分つ

去程に宋江は宜春園の雨香亭にて、衆人と酒を酌み、ふと昔年の事を追思し、李逵が睡りしも知らざりしが、李逵睡中に卓子を拍ければ、酒錐汁水を翻し、衆人の衣袖を濺しけり。其時衆人李逵を見るに、猶も叫んで、老婭よ虎は已に去れり、心を苦愁給ふべからずと、嚷きければ、衆人李逵が袖を引き、忽ち夢覺め、燈燭の耀煌を見、自ら夢なりしを知て云く、扨も夢にてありしよな、然りと雖も、快當ことかなと云ければ、衆人皆々笑て云く、何の夢を見て、此のごとく樂や。李逵が云く、我夢に老母に遇り、衆人も知給ふごとく、我母は虎に喫れ失ひしと思ひしに、再び老母に逢見しに依て、伴ひ回らんとせし處に、又も額の白き虎出來しに依て、打殺さんとせし處、いかゞしてか打損じ、大地に斧を打込と見て夢覺ぬと語りければ、各此形勢を聞歎息せしに、李逵再び語つて、彼多くの潑皮を殺せし事共、備細に語りければ、魯智深、武松、石秀等も共に悅び手を打て、快當々々、と云ければ、李逵又笑て云ふ、又々快當

隨ひ、林中に走行き見るに、果して一人の老婆、青石の上に坐し、眼を閉て在ければ、李逵立寄て得と見れば、我老母なりければ、大に叫で云く、老娘々其後は何の處に居給ふ、我只虎に喫れ給ふと思へりとて、老母を懷て哭ければ、老母が云ふ、我兒よ、我もと虎に嚙れし事あらずと云ければ、李逵大に喜びて、我今天子の招安を被り、已に官人となれり、宋江の大兵現に城中に屯す、是より直に伴うて歸り榮耀を請しめんとて、直ちに老婆を脊に負て半里ばかり過けるに、忽ち林の中より、一陣の風吹來て、白き額の猛虎一疋躍り出で、李逵に向ひ撲來れば、李逵大に駭き、老母を石の上に坐せしめ、斧を揮て虎の頭を打んとせしが、猛く力に任せ打ければ、空を打て地上に倒ぶと覺えしが、忽ち夢は覺にけり。扨又宋江は兵を分て、昭德、晉寧を取んとする軍事、次卷を見べし。

即日に兵を進んとす、いかんぞ賊臣等此讒言をなすと罵りければ、其時文武の百官、李逵が四人の大臣を殺すを見て、各李逵を捉んと立寄れば、李逵は斧を揮上大に呼つて云く、汝等若我に近づくならば、彼四人の賊臣と同じく、殘らず打捨んと云ければ、其勢に誰有て近付く者もなかりけり。李逵大に笑て云く、快當々、今日已に彼等四人の賊將を殺して、痒き處をば掻たるに似たり、早く此趣を、哥々宋公明に報じ知しめんとて、大踏に歩んで、宮殿を離れ、以前の山下に至りければ、秀士走り出笑ひ問て云く、將軍今日の遊び樂しかりしや。答て曰く、眞に秀士の言に違ず、甚だ樂なり、我彼四人の賊を殺したれば、此上の樂みはなしと云ければ、秀士悅で云く、快當哉、我は是汾沁の間に住者なるが、將軍等の忠義なるを見て、一つに要緊の話あり、今宋先鋒急に田虎を征伐し給はんとならば、爰に十字の要訣あり、將軍に敎へ奉つらん、軍士能覺えて宋先鋒に傳へ給へと云、則李逵に向て念て云く、

要レ夷二田虎族一　須レ諧二瓊矢鏃一。

と數十遍を念じければ、李逵も又秀士の言各理有をみて、又念ずる事數回、心中に得と覺けり。其時秀士微く笑て又告けるは、那里の林の中に一人の老婆あり、將軍早く行て是を尋ね給へ、と云かと思へば、忽ち行踪しれず失にけり。李逵は不思議のことと思へ共、先秀士の言に

尋るに、忽ち一つの宮殿あり。殿中より大聲にて、李逵必ず不禮をなすことなかれ、と呼りければ、李逵頭を仰ぎ、宮殿を望むに、昔日宋江と同じく、朝見せし文徳殿なりければ、大に驚き、斧を藏して地に俯伏なす、早く朱簾を捲上けるに、天子遙に上殿に御座あり。文武百官左右に列なれり。其時李逵殿前に向て拜すること三度にして、心中に思へらく、ありや我今一たび拜する事を失したりと、又拜せんとせし處に、天子問て宣く、汝只今何の爲に衆人を殺せしや。李逵奏して云く、彼賊人等良家の女兒を奪んとす、是に依て其兩老牛悲むを見るに忍びず、彼賊人を殺し候なりと。天子大いに歡感有て、其ごとき奸黨を除いて、人の難苦を救ふこと、眞に義勇の士なり、今汝を封じ、値殿將軍となすべしと、勅命有ければ、李逵大に歡び思へらく、天子かくの如く明白に勅し給ふこと、誠に一天の君たりとて、殿下に坐し、拜すること數度に及で殿上を見るに、蔡京、童貫、楊戩、高俅進み出で、奏して云く、只今宋江數萬の兵を領し、田虎を征伐するに至り、只悠々として歡樂し、更に征伐すべき氣色もなく候、伏乞陛下彼等を罪に行ひ給ふべしと、奏しければ、傍より李逵是を聞て、大に怒り、無明業火を按れども住らず、雙の斧を取て階を上り、早く四人の首を剁て、大音聲に叫で云く、皇帝々々彼賊臣の云ことを聞給ふこと勿れ、哥々宋公明は早くも三ヶ所の城を奪取り、現に今蓋州に屯し、

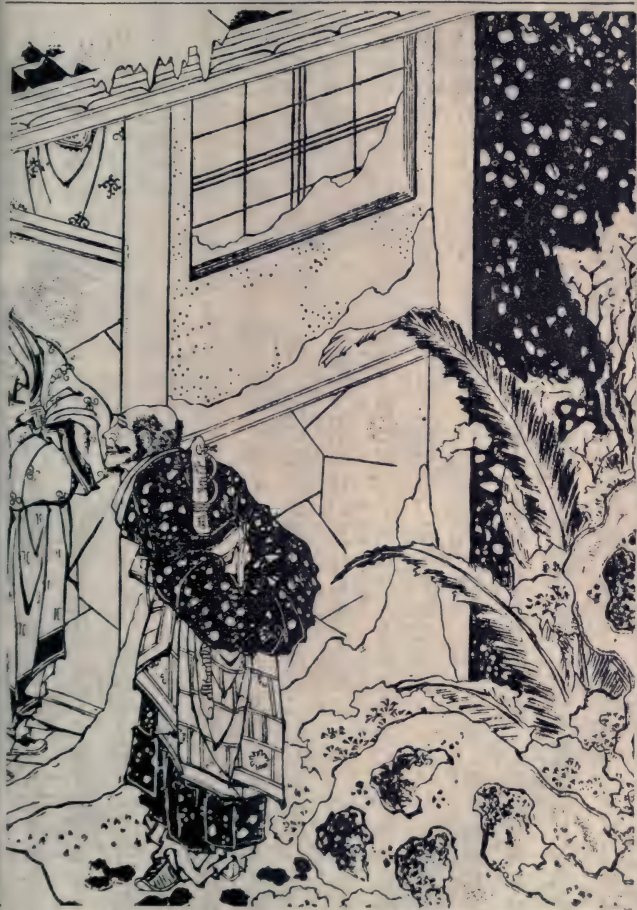
李逵と云ものなり、現に今哥々宋公明と同じく、勅命を蒙りて田虎を征伐す、今日當地城中に在て酒を飲み、偶遊んで此地に至る、然るに彼潑皮共、今の如く無禮をなす、何ぞあれごとき、兇人千萬人殺す共、恐るゝことあらん、必ず安堵すべしと有ければ、老人大に喜び、涙を措ひ、先李逵を請て上座に坐せしめ、酒を勸しかば、李逵さらに辭せず、數盃を飲ける時、猶種々の魚鳥肉類美肴を竝べ酒を副しめ、老婆一人の女兒を領し、李逵が前に至りければ、李逵此女兒を見るに、二八許の佳人なり。老婆李逵を拜して云く、將軍の英雄を以て、我娘の命を救ひ給ふ、誠に再生の父母に異ず、もし醜陋を嫌ひ給はずんば、女兒を參らせん、何とぞ小星となし給ひても、召仕れなば、我々一家の大幸なり、と云ければ、李逵聞て跳り上り、大に呼つて云く、我豈汝の鳥女を求ん爲に、賊人を殺んや、閒話を二度云ことなかれとて、只一脚に卓子を踢倒し、門前に走り出で、未だ五六里を過ざるに、以前の大漢子手に朴刀を取走り出で、大聲に罵りて云く、黑賊必ず走ることなかれ、いかんぞ我多くの兄弟を殺せしや、我彼女兒を求るに、汝此ことに與んやとて、朴刀を挺へ打て懸れば、李逵又大に怒り、斧を輪して戰ふこと二十餘合、何ぞ李逵が英雄に及ばんや、朴刀を捨て走りしかば、李逵は猶も追かけ、早く一つの林を過ければ、彼大漢子何れへ迯失けん、行方知ず成にけり。其時李逵猶も四方を

給へ、得意處ありと告ければ、李逵が云ふ、秀士此山を何と申や。答へて、天地嶺と名く、遊翫せば又此處に歸りたまへ、再び相會せんと約しければ、李逵は秀士に別れ、已に山頂に至んと、四五里の路を過れば、傍に大なる莊院あり。莊中大に鬧しかりければ、墻の間より伺見るに、數十人の大男各手に鎗棒をもち、家具を打碎けば、又一人の大漢子罵りて云く、老牛子早く女兒を我に與へ妻となせよ、然る時は汝が命を助ん、若與へずんば汝が輩殘ず殺んと、散々罵りければ、李逵大に怒り、早く門の内に飛入り、大に喝て云く、是なる潑皮いかんぞ他人の娘を奪んとするや。衆人罵りて云く、我等他人の娘を求るに、何ぞ汝が願管に預んやと云ば、李逵大に怒り、火の熾たる如く、板斧を揮て七八人を砍倒し、猶も彼大漢子を討んと飛蒐に、早くも迯失ければ、奥の一間に跑入る時、緊く門を閉ければ、只一脚に蹴倒し裏に至るに、白髪の老人婆々と倶に哭居たりしが、李逵の來るを見て、大に驚き迯んとす。李逵大に呼つて云く、兩人恐るゝ事なかれ、我汝等の不平を見るに忍ず、彼潑皮を追ひ退ん爲なり、今兇人は盡く砍捨たり、汝等必ず安堵すべしとて、老人を引て見せしむるに、老人戰々立寄り、李逵が多く人を殺すを見て、大に驚き叫んで云く、君今多くの兇人を殺すと云共、官府に至らば必ず連累にあはん、是を如何せんや。李逵笑て云く、汝我を知ずや、我は是梁山泊の黑旋風

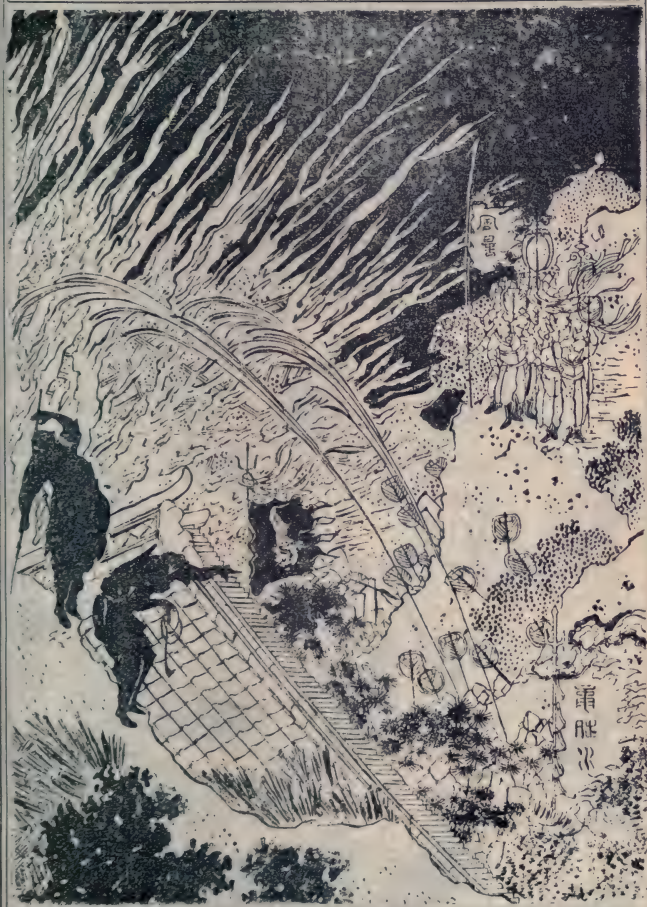
衆人答て云く、只今樂和が受て持來りし雪、李逵が鼻息にて消失たるを笑ふなり、と語りければ、宋江も又大に笑ひ、先衆頭領を引率し、宜春園に至て賞翫せり。

○李逵夢に天地を鬧す

抑此宜春園と云は、蓋州城東の景地にて、檜栢梅松深く茂り、内に雨香亭あり。今日宋江此亭に宴を設け、衆人と酒を酌雪を賞し、燭を照し夜宴す。宋江醉中に偶然と昔日の難苦を追懐し、則ち衆人に向て云く、我は原鄆城縣の小吏なりしが、大罪を犯し、已に刑に行るべきを、衆兄弟の力を以て辛き命を助り、今國家の臣と成て、身に榮耀を蒙り、昔日の事を思へば、眞に夢の如しと、潸然として涙を流しければ、戴宗、花榮も共に、古舊のことを思ひ出して、各〻涙を流しけり。此時李逵は、宋江が話を久しく聞て在けるが、暫に至て、大に困勞れ、卓上に依て睡り、自ら門外を見るに、今迄降積し雪、忽ち消失ければ、大に疑ひ、宜春園を出て二三里を過城市に至り、又東西を分ず數里を過けるに、前に高山有て溪水左右に流れ、甚だ絶景の地なれば、山に登つて遊ばんとて、已に山前に至りしに、忽ち一人の秀士あり。頭に折角巾を戴き、身に淡黃袍を著し、林の間より走出笑つて云く、將軍若遊翫せんとならば、先此山を過

宋江諸将と雪を賞し夜宴す

しらせけり。其時宋公明、二百餘人の軍卒に各賞物を賜りけり。されば其夜三ヶ所へ遣せし使者、返り來て告けるは、諸頭領皆恙なく、都て羊酒を拜飲し、共に先鋒の恩を謝せりと告ければ、宋江大に悦び、此消息を聞けば、對顔するに勝れりとて、諸頭領と同じく開懐で暢飲せり。去ば翌日は立春の節なれば、各東郊に出て春を迎ふべしと約し、各宴を退きけり。其夜子の刻より、東北の風起て濃雲暗く、大雪地に降積ること三尺許り、風に從へる柳絮は謝氏が詠を思ひ、空に飄る鵞毛は樂天が詩を感ず。されば次の日早朝衆頭領已に集て雪を賞しけるに、地文星蕭讓衆人に向て云ふ、抑此雪に多くの名目あり、諸君に語り聞せ申べし、先一片に降を蜂兒と名づけ、二片に連るを鵞毛と名づけ、三片に連るを攢々と名づけ、四片に連るを聚四と名付け、五片に連るを梅花雜片と名づけ、六片に連るを六出と名づく、夫雪はもと陰氣の凝結りたる物なれば、六出は極陰の數に應ぜり、今日立春なりといへ共、いまだ冬の節に近ければ、此雪あるひは五片、或は六片なり、諸君是試み給へと云ければ、樂和簷前に走り出て、皂き衣の袖を以て、彼降雪を請けるに、果して五片六片なりければ、大聲に、奇なり妙なり、君の言に違ずと感じけり。此時衆頭領各立寄て是を見るに、李逵が鼻息荒ければ、忽ち一陣の熱氣にて雪は盡く消失ければ、衆人大に笑ひけり。宋江も立寄て何事やらんと尋るに、

に入り、先士卒に命じて火焔を滅しめ、榜を出して百姓を傷害ことを禁ず。其日衆將各來て功を告ければ、宋江先賊人の首を城門の前に號令し、三軍を賞勞て、諸將の軍功を帳簿に記さしむるに、石秀、時遷、解珍、解寶、第一の功あれば、表を寫して、朝廷に奏聞し、又蓋州城中府庫の財寶金銀を、盡く京師に遣はし、朝廷に納め、又書を以て此趣を宿太尉に告しめけり。此時臘月已に廿日をすぐ。宋江又軍務を料理して、覺ず四五日を過けるに、張淸、安道全と同じく蓋州に來て、病平癒したるよしを告ければ、宋江大に悅んで云く、明日は是宣和五年元旦なれば、兄弟の輩同じく春を迎へんとて、翌日早朝宋江を始として、諸將同じく、公服を著し、幞頭を戴き、京師を望んで拜禮し、朝賀已に終れば、各公服幞頭を脫しめ、紅錦の素袍を著し、九十二人の頭領、幷に新に降參せし耿恭等、都て宋先鋒の前に來て新年を賀す。其時宋江大に宴を設ければ、諸將は宋江が爲に觴を擧げ、壽を祝す。時に宋江が云く、我兄弟の力に依て、國家の爲に三ヶ所の城を奪ひ返し、又此新年を迎て歡樂する事、誠に人生の大幸なり、只是公孫勝呼延灼を始として、水軍の頭領李俊等八人の外、柴進、李應は陵川の城を守り、史進、穆弘は高平の城を守り、都て十五人の兄弟、此座に在ざる事殘念なりとて、三擔の羊酒を軍卒に持しめ、衛州、陵川、高平の三ヶ所に遣し、元旦を慶賀し、且は捷軍の趣を

ざるに、石敬、秦升、鎗を挺へ切止ければ、解珍、解寶は朴刀を挺へ戰ふ事五六合、早くも石敬、秦升を討留けり。其時宋軍は卽刻城門を奪ひ、吊橋を放ければ、城外の宋軍、林冲、徐寧、韓滔、各兵を領し、東門より攻入り、遂に安士榮を討取けり。扨又秦明、董平、彭玘は西門より切入り、莫眞、赫仁、曹洪を討取たり。此時北兵討るゝ者數を知ず、屍は積で山をなし、血は流れて海の如し。されば鈕文忠は已に城門を奪れたるを見て、于玉麟、郭信、盛本、桑英と同じく、二百餘騎を引率し、北門より遁出で、馬を馳せ落行けるに、未だ二三里を過ざるに、忽ち喊の聲大に起り、左に黒旋風李逵あり、右に花和尚魯智深あり。各數千の軍兵を領し、四方より攻ければ、いかなる夜叉鬼神なり共、逃るべきやうなかりけり。其時李逵高聲に呼で云く、我宋先鋒の命を蒙りて、汝衆賊を待こと久し、撮鳥迯ること勿れと云も終ず、二つの斧を輪し、早く郭信、桑英を截て兩段となす。鈕文忠是を見て、大に驚き、馬を跑らせ未だ一里許を過ざるに、早くも魯智深に禪杖を以て散々に打れ、甲盔を碎れ、微塵に成て死にけり。其時北兵二百餘人、李逵、魯智深が働きに切殺され、只于玉麟、盛本、圍を切ぬけて辛き命を助りけり。魯智深大に呼て云く、暫く汝等二人を赦さん間、田虎に此趣を報ずべし、近日三人の首を割べしとて、鞍馬甲盔を奪ひ取て陣に歸り獻納めけり。其時宋江が軍馬已に蓋州城

時遷石秀
斬て放火を

上に多くの柴を積上て一人の守將もなかりけり。原來城内の軍兵盡く城上に在て敵を禦ば、誰か草料場を守る者もなし。其時時遷は懷中より火種を取出し、硫黃、焰硝と倶に枯草に點け、又廟中に回りて、老人の屍首の上に、積置たる柴薪に火を點けるに、折節夜風勁して、火焰天を焦すばかりに起りけり。此時時遷、石秀、大に呼り、城中に失火ありと報じければ、城中の軍民大に驚き、上を下へと騒動せり。時遷、石秀は其隙を伺うて、早くも北軍の號記ある衣服を脱ぎ、西南の方へ退きけり。去程に鈕文忠は草料場に火起るを見て、大に駭き、急に軍士を引て火を救はんと馳向ふ。城外の寄手は城内火起るを見て、時遷、石秀が内應なることを知り、宋江、吳用は、解珍、解寶と共に城南に至り、秦明をして飛樓を城垣の低き處に渡さしむ。其時吳用は、解珍兄弟に命じて云く、城内の賊人、數度の軍に利を失ひ、料るに英氣を失ふべし、此時討ずんば更に何れの時を待ん、兄弟共努むべしと有ければ、解珍、解寶、謹で命を領し、兩人飛樓に飛上り、大に喊を作て城垣に攻上り、刀を揮うて散々に切立れば、城上の軍士大に恐れて、各城樓を迯下れり。褚亨は兩人城上に攻上るを見て、鎗を挺へ遮りけるに、早くも解珍に討取れ、頓て首をぞ刎にける。此時宋軍潮のごとく城垣に攻上る。解珍、解寶は早く城内に砍下り、大に呼つて云く、我に敵する賊あらば、各肉泥となすべしと、未だ云も終ら

出逢ければ、于将軍も一戰に及ばず退き給ふに依て、我等も又城中に退きけり、其實は勞苦に堪ず、況や又天氣甚だ寒し、萬乞汝が買貯し酒あらば、少し我等に賣與べしとて、懐中より碎銀取出し、老人に與へければ、彼老人大に笑て答て云く、二位の軍官知給はずや、此頃は城中日々に用心緊しく、一人の燒香の人だになきに、某何の錢有て酒を買貯へんやとて、彼碎銀を返しけり。時遷石秀碎銀を再び老人に與て云く、爾先收め置べし、我等兩人日々に城を守つて暫時も睡らず、今夜此處に一宿をなさしめば、明朝早く去らん。老人手を搖て云く、二位の軍官必ず我を怪め給ふことなかれ、今鈕文忠の軍令嚴しければ、若二位を留て知れなば、共に罪を蒙るべし、と云ければ、其時時遷は左右に人なきを見て、石秀に丢眼すれば、石秀早くも佩刀を拔出し、老人の背後より、只一刀に首を切落し、則廟門を閉にけり。此時黄昏にて誰知る者もあらざれば、時遷は廟後に至て見るに、空地の上に多くの柴薪を積置たれば、石秀と倶に運び來て、老人の死骸の上に積上げ、又廟の右なる屋上に登て望むに、西南の方は都て民家なり。其とき時遷は石秀と共に、天を望むに、暗夜なりといへども、星の光少しく四方を照らし、又遙に人の哭聲聞えければ、西南は多く在ことを知り、又廟の東北の方へ行に、四方は都て土墻に圍んだる空地なれば、是なん草料場なることを知り、石秀と共に伺ひ見るに、空地の

め、蓋州を救はしむ。其時晉寧の兵は、蓋州城を望で進發せしか共、城を離るゝこと十餘里ばかり、高原の下を過ける時、忽ち砲聲響きしが、深林の中より、兩彪の軍馬飛出けり。是則史進、朱同、穆弘、馬麟、黃信、孫立、歐鵬、鄧飛の八將なり。其時八人の猛將、一萬の雄兵を引率して、散々に砍立ければ、晉寧の兵は二萬騎たりといへども、遠く來て、都て勞困て在ければ、いかんぞ宋の雄兵に敵せん、散々に砍立られ、其討るゝ者數を知らず。大將鳳翔、王遠も、辛き命を迯れ、敗殘の軍兵を引率し、晉寧へ返りけり。去程に于玉麟は、鈕文忠の命を領し、晉寧の兵を迎へんと、城を出て半里ばかり過けるに、花榮が遊騎に遇ければ、北軍大に驚き、神箭將軍來れりとて、各慌て迯退く、于玉麟も、豫て花榮の手段を恐れければ、只一戰にも及ばずして、衆人と共に城中に引退く。花榮は勝に乘じて、于玉麟が兵三十人を打取けり。去程に時遷、石秀は、豫て北軍の號記ある衣服を著し、鬧に紛て、于玉麟の兵と共に城内に忍び入り、直ちに南門の邊の小巷に至りしに、一つの古き祠あれば、花表の額を見るに、當境の土地の神祠と書せしかば、是こそ耿恭が宋公明に語りし處なりとて、兩人は祠の後べなる、小家の內を伺ひしに、一人の老人火に向て在けるが、兩人を見て、城內の兵と思うて更に疑ず。軍の次第を尋れば、兩人答て云く、我等只今于將軍に從ひ、城を出て戰ひしに、彼神箭將軍に

聲已に止ければ、鈕文忠は久しく立て、宋軍の陣裏を伺ふに、只更鼓の聲のみして些の燈光も見えず、自ら城樓を下て帥府の前に至りしに、忽ち東門に砲の聲天地に響き、又西門の外に喊の聲大に起り、金鼓齊しく鳴ければ、鈕文忠大に驚き、東西に奔走して、天明に至りけり。其日宋江が兵ども、四方を圍み、夜に至て退きければ、北軍各休息せし處に、二更の比、忽ち金鼓の聲四方に起る。鈕文忠諸將に語て云く、是宋軍疑兵の計なれば、只城を守て彼が計に陷るべからずと、未だ云も了らざるに、軍卒報じて云く、東門の外火光天を焦し、其數を知ず、飛樓雲梯を以て城垣に近付りと告ければ、鈕文忠は、褚亨、石敬、秦升と同じく東門に馳來り、軍士に命じ、僞りに火矢を放たしめしに、忽ち西門の外に砲聲山河に響き、城樓も又震ひ動きしかば、城中の軍民も大に驚き、安堵の思ひもなかりけり。されば鈕文忠を始として城中の諸將、兩夜宋江に惱され、片時も休する事能はず。其夜も天明に及びしかば、宋江再び來て城を攻む。其日鈕文忠は城樓に上て四方を伺ふに、忽ち西北の方より旌旗天を蔽て、數萬の軍兵東南を望んで來れば、又見る宋軍の中にも、數千騎の軍馬を馳て四方に往來せり。鈕文忠是を見て、救兵の至りしを料りければ、先于玉麟を出し、救兵を迎る用意をなさしめけり。原來西北より來る軍兵は、則田虎の弟晉寧の守將田彪、部下の猛將鳳翔、王遠に二萬の雄兵を領せし

を見終り、各陣中に返りけり。其時呉用は臨川の降將耿恭を呼で、蓋州城中の路徑を問に、耿恭が云く、抑當城は原民家なりしを、鈕文忠四方に垣を築き城とせり、よつて城北古廟の傍に廣き空地あり、是今草料場にいたし候、と語りければ、呉用其日宋江と商議して、則時遷、石秀を呼び、計を授け、又凌振、解珍、解寶に百人の軍兵を添へ、各轟天砲を携しめ、計を授け、又魯智深、武松に三百人の軍兵を與へ、各金鼓を携しめ、計を授け、又劉唐、楊雄、郁保四、段景住に八百人の軍兵を與へ、計を授け、又戴宗をして東西南三ヶ所の陣に往來して號令を傳へしめ、各分撥定り、衆頭領令を聞き、用意をなしにけり。扨又鈕文忠は、日夜救の兵を待ども至らざれば、心中大に憂て、先軍卒に命じ、大木大石を運しめ、只城を守て出ざりけり。

○蓋郡を打つ智多星が密計

時に忽ち北門の外に喊の聲大に起り、金鼓齊しく鳴ければ、鈕文忠自ら北門の城樓に上て伺ふに、喊の聲金鼓都て喧すしければ、何の兵にやと疑ふ時、忽ち城南に喊の聲大に起りけり。其時鈕文忠、于玉麟等をして緊く北門を守らしめ、自ら馳て南門の城樓に登て伺ひけるに、喊の

許に退て陣取し、李雲湯隆をして、雲梯を造らしむ。去程に林冲等四將は、飛樓雲梯を城の墻に渡し、輕捷なる軍兵をして、雲梯に登らしめんとせし時、忽ち城内に喊の聲起り、火矢を雨の如く射出しければ、宋の軍兵五六人射殺さる。時をうつさず、飛樓雲梯盡く燒失ふ。宋の軍兵傷を蒙る者數しらず。宋江は城を攻れ共、勝ざるを見て、盧俊義吳用と倶に南門の下に至て軍兵を催促し、城を攻しめけり。其時花榮等五將は、宋江に見えんと西門より來ければ、敵將楊端、郭信城樓より是を見て、花榮を指ざし、于玉麟に告て云く、前日我二將を射しは此賊にて候へば、某只今仇を報じ候はんと、弓を引飄地放てば、花榮は弦音を聞て、忽ち身を反り、早くも箭を右の手に捏り、口に銜へ、弓を取て彼矢を搭て、楊端を覷て飄地放てば、其矢過ず楊端が咽喉を射て、忽ち倒れ死にけり。其時花榮大に罵つて云く、汝等鼠輩いかんぞ我に冷箭を放つや、我悉く汝等を死しめんとて、再び箭を取り、弓に搭げ、放んとせしかば、于玉麟を初城樓上の北兵共、忽ち面色土の如く、各城樓より飛下ければ、花榮冷笑ひ罵つて云く、汝等神箭將軍の手段を知れりやとて、已に過んとせし處に、宋江、盧俊義、吳用等馬を早め追來り、各花榮の弓術を賞しけり。吳用が云く、仁兄我等花將軍と同じく、城垣の要害を伺ふべしと勸ければ、宋江は花榮を當先に進め、盧俊義吳用と共に、城を繞つて要害

見るに、晉の地の分野に當つて、罡星光明かなり、只堅く城を守て出て戰ふ可ずとなり。鈕文忠謹で領意し、又奏して云く、近比は宋朝より、宋江等の軍兵を以て攻寄られ、我兩所の城を奪れ、昨日の戰にも我五人の大將を失へり、若早く救ひの兵を起し給はずんば、遂に此城保ち難からん。使臣が云く、我威勝に返らば、必ず救兵を差向ん、樞密は唯堅く城を守るべしとありければ、鈕文忠謹で恩を謝し、宴を設け使臣を款待し、又軍兵に下知して、強弓、硬弩、砲石、檑木、火箭、火器を相集め、城を守る用意をなしにけり。去程に燕順王英等の衆將は、北軍を散々に砍散し、本陣に回り、次の日宋江は匠人に命じ、雲の梯を始め、城を攻る器械を造らしめ、扨林冲、索超、宣贊、郝思文に一萬の軍兵を差添へ東門を攻さしめ、徐寧、秦明、韓滔、彭玘に一萬の軍兵を差添て西門を攻さしめ、只北門を攻ざるは、若城中へ救の兵來る時は、前後に敵を受ん事を恐てなり。扨又史進、朱同、穆弘、馬麟に五千の軍兵を差添て、城北高岡の地に埋伏せしめ、又黄信、孫立、歐鵬、鄧飛に五千の軍兵を差添へ、城の南深林の内に埋伏せしめ、若賊人の救兵あれば兩方より攻討しむ。又花榮、王英、張靑、孫立、孫新に軍兵一千騎を差添へ、四門に往來して軍事を辨しめ、李逵、鮑旭、項充、李袞、劉唐、雷横に、歩兵三百人を添て、花榮等と共に軍中の用を達せしむ。其手配定りて、宋江、盧俊義、吳用と倶に城東一里

帳中に憂へ在しに、貔威將安士榮進み出で、樞密愁へ給ふ事なかれ、某愚意を以て案ずるに、宋江等頻りに勝て驕り、用心怠るべし、某潛に夜討せば、必ず今日の仇を復し、全き勝を得べし。鈕文忠が云く、將軍若向はゞ、我も兵を引て佐くべし、于玉麟、褚亨、兩將軍に城を守らしめん。安士榮悅で、樞密もし自ら征伐し給はゞ、宋江を擒にせん事今晩に在べしと、商議已に定り、夜四つ時安士榮は、沈安、盧元、王吉、石敬と同じく五千の軍馬を引き、潛に城を出で、各枚を啣で、直に宋江の陣前に至り、喊を作り砍入けるに、陣中には燈燭光輝くのみ、甚だ靜なれば、安士榮計に中りしを知て、大に驚き、急に軍を退んとせしに、忽ち石炮天に響き、左に燕順等四將、右に王英等四將有り、各喊を作り切出で、また陣中よりは、李逵等六將各刀を以て切出ければ、北軍大に敗北し、沈安は武松に切殺され、王吉は王英に突殺さる。宋兵は安士榮、石敬を眞中に取圍み、已に危く見えける處に、鈕文忠、曹法、石遜と同じく軍兵を領し、漸一方を切拔け、各兵を收め城中に迯歸る。其時鈕文忠軍兵を計點するに三千餘人を亡し、又沈安、王吉を失ひ、石遜は身に重き痛を帶び、已に命危ふかりければ、陣中に在て長歎す。其時忽ち威勝より使來ると告ければ、鈕文忠慌しく馬に乘て北門を出で、使者を迎へ城中に請じけり。時に使者田虎の令旨を讀で云く、近比司天監夜々天象を

等ともに五千の軍馬を引率し、北軍を扶けけり。花榮等四將は急に兵を分て戰ひけるに、楊端、郭信、蘇吉も守返し、宋兵を四方八面より攻ければ、花榮等四方に敵をうけ、火花を散して戰ひける。此時忽ち東の方に喊の聲大に起り、北軍大に亂れければ、花榮何事ぞと見るに、左に董平、右に黃信兩將馬を跑らし、散々に砍立れば、北軍大に敗北し、安士榮、于玉麟等は急に兵を領し、城中に迯入り、緊しく城門を閉にけり。されば宋兵は勝に乘じ、城下迄推寄けるに、城上より檑木砲石雨のごとく打下し、宋兵近づくこと能はず。此時宋江の大軍都て來りければ、先兵を一處に合し、五里許退きて陣取す。宋江は陣中に蕭讓をして花榮の軍功を書せしめける時、忽ち一陣の快風起り、砂石を飛し、西の方より吹來り、親方の旗を動しけり。吳用が云く、此陣風を考るに、今夜必ず賊兵我軍を劫かすべし、先鋒必ず準備し給ふべし。宋江が云く、此陣風誠に尋常にあらずとて、則歐鵬、鄧飛、燕順、馬麟に三千の兵を領せしめ、陣の左に埋伏せしめ、王英、陳達、楊春、李忠をして、又三千の兵を領せしめ、右に伏せ、又魯智深、武松、李逵、鮑旭、項充、李袞に步兵五百人を添へて、陣中に埋伏せしめ、炮の聲を號として、各々砍出べしと、分撥も已に定りければ、宋江は吳用と陣中にて、燭を明かにし、兵を譚じ相待けり。去程に鈕文忠は、此日の軍に二人の大將を失ひ、又軍兵を計點するに、二千餘人失ひ、

宋朝の花栄
蓋天の方瓊を
箭
落す

矢馬の眼中に射たりけり。其時孫立馬より飛下り、鎗を捉へて、猶も方瓊と戰ひける。孫立が乘捨し馬は痛を負て大に嘶き、十歩許跑しが、遂に倒れ死しにけり。張翔、孫立を射あてざるを見て、刀を提げ、馬を飛して、方瓊を助けんと打蒐れば、宋軍の中より、秦明狼牙棍を舞して隔て戰ひけり。されば孫立は本陣に歸て、馬を換て乘んとて、已に本陣に返らんとせしが、方瓊馬上より、鎗を以て前後左右を突廻し、身を脱すること能ず。如何はせんと猶も戰ひしに、宋の軍中より、神臂將花榮是を見て、大に罵て云く、賊將いかんぞ我兄弟の馬を射るや、汝又我手段を見るべしと、云も終らず弓を引て飄地放てば、其矢誤ず方瓊が胸を射て、馬より忽ち落ければ、孫立立寄り只一突に殺しけり。去程に張翔は秦明と戰うて、未だ十合に至ず、いかんぞ秦明の力に及ばんや、漸々に鎗法亂れければ、北陣の中より、郭信馬を馳鎗を捉て、秦明の後へより討蒐る。秦明二人を迎へ猶恐れず戰ふ時、花榮再び弓を滿月のごとく挽て、張翔が後心を覘ひ、飄地放ちければ、其矢過ず張翔が前胸まで射透し、馬より落て死にけり。郭信は是を見て、馬を囘し逃歸れば、秦明猶も追蒐ける。孫立は換馬に乘陣を出で、花榮、索超と同く、大に兵を驅て攻寄ければ、北軍何かは抵敵べき、楊端、郭信、蘇吉、各本陣に逃囘る。宋軍猶追詰しに、忽ち北軍の後へに、喊の聲大に起り、鈕文忠眞先に馬を進め、安士榮、于玉麟

通ず。鈕文忠は四人の副將、十六人の勇士を始として、三萬餘騎の軍兵を以て、蓋州城に籠けるが、頃日臨川、高平二城敵に破られ、今又官軍攻寄ける由聞えければ、先威勝、晉寧の兩所へ使を遣し、救の兵を求め、方瓊を始として、楊端、郭信、蘇吉、張翔五人の將に命じ、城を出て官軍を迎へしむ。此時鈕文忠自ら方瓊を送て云く、將軍勉て敵を退け、再び二城を奪ひ返せよ、我も兵を引て相佑くべし。方瓊が云く、樞密が云付を待ず、我彼二城を奪ひ回さずんば誓て返らじ、先には彼が計に中るを以て敗北せり、力及ばざるにはあらずとて、自ら詮束し、馬に乘り、五千の軍兵を前後に備へ、東門を出て進ける。其時宋江の軍馬已に城下に押寄せ、陣を張り、先鼓を打て喊をどつとぞ作りけり。北陣の裏より方瓊眞先に馬を出し、四人の副將後に隨へり。方瓊頭に捲雲冠を戴き、身に龍鱗の甲を著し、腰に獅蠻帶を繫め、足に抹綠靴をはき、黃驃馬に乘じ、手に渾鐵の鎗を提げ、大に呼つて云く、水泊の草賊いかんぞ計を以て、我城を奪ふや。宋陣の裏より、孫立大に罵りて云く、反賊々々今天兵の至るに、何ぞ馬を下つて降參せざる、と云も終らず、馬を馳、鎗を挺て直に向ひ、方瓊と戰ふ事三十餘合にして、未だ勝負を分ず。其時北軍の陣中より、張翔馬を跑し、方瓊が孫立に勝得ざるを見て、弓に箭を搭へ、孫立を覷て飄地と放てば、孫立早くみて、自ら乘し馬の頭を矢向に向へければ、其

されば宋江が人馬甚だ大勢故、城外に陣取し、吳用と共に相議し、先何れより攻べしと相謀れり。吳用が云く、元より蓋州は山高く谷深うして、要害堅固の地なれば、今已に兩城破れば其勢甚だ孤なり、先蓋州を攻打を可とせんや。宋江が云く、先生の言我が意に合へりと、則柴進、李應を陵州に遣して、花榮等六將と交代せしめ、又史進、穆弘、張清をして高平を守らしむ。此時張清少し病有と告ければ、則安道全をして療治せしめ、次の日宋江令を下し、花榮、秦明、索超、孫立に五千騎を添て先鋒とし、又董平、楊志、朱同、韓滔、彭玘に一萬騎を添て左翼とし、又徐寧、燕順、馬麟、陳達、楊春、楊林、周通、李忠を右翼とし、黃信、林冲、宣贊、郝思文、歐鵬、鄧飛を後隊とし、宋江、盧俊義、自ら諸將を領し中軍となり、大兵を引て蓋州へ進發す。扨宋江は軍兵を五隊に分攻寄る。蓋州の探兵急ぎ大將鈕文忠に告にけり。元來文忠は、盜賊の出身にて、多く盜貯へし金銀財寶を以て、田虎を助け造反し、宋朝の州郡を奪ふを以て、田虎彼に樞密使の官を授けたり。是人三尖の長刀を使ひ、萬夫不當の勇あり。又手下に四人の副將あり。其姓名は猊威將方瓊、貔威將安士榮、彪威將褚亨、熊威將于玉麟、此四人各武藝衆人に勝たり。又別に十六人の勇士有り、其姓名は楊端、郭信、蘇吉、張翔、方順、沈安、盧元、王吉、石敬、秦升、莫眞、盛本、赫仁、曹洪、石遜、桑英、此面々も武術に

八編　巻之七十三

○軍威を振ふ小李廣の神箭

宋公明が陣に探馬返り來て云く、輝縣、武涉、二ヶ所を攻し賊將も、陵川已に破るゝと聞き、各圍を解て去失ぬと告ければ、宋江大に吳用が神算を稱贊す。されば宋江は猶も兵を進めて、盧俊義が勢と合せ、河北に進發せんことを議するに、吳用が云く、此衞州の地は左に孟門有り、右に大行あり、南は大河に隔り、北は上黨に近ければ、賊人もし我兵の西に去を伺て、此衞州を攻討ば、兩所に敵を受て叶まじ。宋江が云く、軍師の高見妙なりとて、則ち關勝、呼延灼、公孫勝に五千の人馬を差添て、衞州を守らしめ、又李俊等八人の水軍の頭領に多くの戰船を領せしめ、衞河に在て衞州を守る助けとし、宋江自ら大兵を引て高平城外に至れば、盧俊義は城を出て相迎ふ。宋江が云く、賢弟頻りに二城を破る、其功古今に希なりとて、是を功績簿に記さしむ。此時盧俊義は降將耿恭を引て參見せしかば、宋江が云く、將軍邪を棄て正に歸し、國家の爲に力を出せば、朝廷にも重く用ひ給ふべし、と有ければ、耿恭も拜謝して退ぬ。

は、盡く親方の旗印なりければ、則城門を開きて進ましむるに、耿恭が軍卒、我劣じと爭ひ入る。是則李逵、鮑旭、項充、李袞、劉唐、石秀、楊雄の七騎なり。後へに隨へる百餘人も、こと〴〵く宋軍の歩兵なり。把門の軍士叱て云く、汝等何ぞけたゝましき、列をなして入べし、といまだ云も終らざるに、李逵等各拔列て早くも把門を切殺し、散々に城中に切入ば、北兵大に驚き、上を下へと騷動す。張札驚き、鎗を構へ出來るに、石秀出合ければ、兩將戰ふ事六七合、遂に石秀に切殺さる。此時忽ち一聲の炮響き、幹王山邊より一班の軍馬攻來る。眞先に進みし兩將は、則史進楊志なり。各散々に切來れば、北兵討るゝ者數知ず。趙能も亂兵に切殺さる。盧俊義も兵を領し馳來り、張札が從者を切鏖し、三軍に命じ、猥に百姓を殺す事を禁じ、札を出し軍民を安んじ、兵を領し、高平城に進みいり、使者を以て捷を宋先鋒に告しめり。去程に宋江は、此時吳用と共に軍事を議し在ける處に、忽ち盧俊義が使者至り、委細を宋先鋒に告ければ、宋江大に喜び、則ち吳用に對していはく、盧俊義一日に二城を破れば、賊人も已に勢を吞るべし、其功大いならずやとて、嘆稱し、早速の戰功を賀し、使を回しけり。猶諸將の功勞、次卷より續見て知るべし。

をなづけ、酒宴を設け、款待せり。又三軍を賞勞し畢て、則耿恭に問ていはく、蓋州城中いくばくの人馬か有る。耿恭答て曰く、城中は則鈕文忠是を守れり、勇猛の將尤多し、又左右に陽城、沁水二ヶ所の城あり、只高平城のみ此を去こと六十里にして、其地韓王山に近し、城中の守將、張札、趙能、尤も勇猛なりと、委く語れば、盧俊義聞て杯を擧げ、耿恭に對して云く、將軍此酒を滿飮せよ、某今夜の內將軍をして一つの功を立しめんに、必ず勞を辭することなかれ。耿恭が云く、某已に君の高恩を蒙り、何ぞ勞を辭せん。盧俊義悅で云く、將軍已に行ことを肯ぜば、必ずかくのごとく、如是になすべしと、潛に計を授け、又李逵等衆人に各北軍の旗號、同じ衣服を著せしめ、又楊史、史進に五百の人馬を差添へ、李逵等を後へに從はしめ、又花榮等をして、陵川城を守らしめ、自ら三千騎を從へ、接應せんと、分撥已に定れば、耿恭は路を急ぎ、高平城の南門に至りしが、日已に暮れ、星光の下より望み見るに、旗印風に飜り、其備嚴なり。耿恭城下に至り、高聲に呼つていはく、我は陵川の耿恭なり、董澄、沈驥、我諫めを聞ざるに依て、遂に陵川を陷いる、某圍を切拔け、此百餘人を引連れ、此處に逃れ來れり、早く門を開て我等を救ひ給ふべし。守城の軍士、此趣を張札、趙能に告ぐ。時に兩人櫓に上て多くの火炬を點さしめ、伺ふに果して耿恭眞先に馬に乘り、後に從へる軍士等

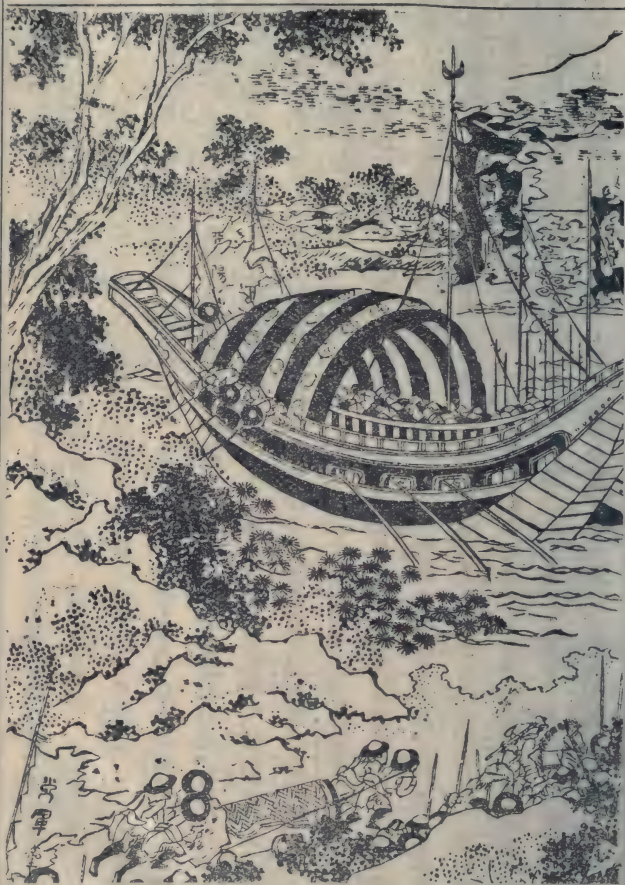
守門の軍士相集り、防んと立寄るを、魯智深大に吼る事一聲、禪杖を舞し、はや四五人を打倒ば、李逵斧を左右に振て、六七人切倒す。鮑旭兵を引て續いて切入り、早城門を奪ひければ、耿恭頭勢あしきを見て、急ぎ城樓より飛下り、北をさして逃んとせしが、竟に宋兵に生捉れぬ。されば董澄、沈驥は花榮と戰ひ在けるが、忽ち城内喊の聲起るを聞き、馬をかへし城内に歸んとするを、花榮透さず、弓箭をつがへ飄と放てば、其矢董澄の後心を射て、馬より忽ち落にけり。此時盧俊義兵を招て散々に切捲れば、北兵大に敗走し、沈驥は董平に切殺され、其外討るゝ者數を知らず。李逵は只管切て廻れば、盧俊義制し、猥に百姓を害せしめず。竟に陵川城を奪取て宋軍の旗印を建て、兩所の伏勢に落城の體を知らしめければ、黃信、孫立、史進、楊志も各城中に至りける。去程に董平は沈驥が首を獻じ、花榮は董澄の首を獻じ、鮑旭等は耿恭及び多くの軍士を生捉て陣中に引渡せば、盧俊義命じて衆人の縛を解しめ、自ら耿恭が手を引て、客位に坐せしむ。耿恭拜していはく、某已に擒となつて、いかんぞ君の厚禮をうけん。盧俊義扶け起し、將軍城を出て敵せざるは、必ず深き意有べし、今宋公明一圖に賢士を招く、將軍歸順せば必ず重く用ふべし。耿恭涙を垂ていはく、某已に君の恩を蒙れば、願くは麾下の一小卒となつて、高恩を報ずべし。盧俊義大に悅び、再び好言を以て、新に降參せる軍士

かば、耿恭進み出で、諫て云く、某曾て聞く、宋江等衆人は、悉く勇猛にして容易に敵すべからずと、只堅く城を守つて、使を蓋州に遣し、救の兵を求め、兩方より是を挾み攻ば可ならんとて、再三是を留めけれ共、董澄いかんぞ聞入ん。則大に怒りて云く、堪耐ならず、彼等我を侮れり、遠く來れば必ず疲れん、いざ戰うて片甲をも殘さず、盡く切盡さんとて、耿恭に城を守らせ、自ら沈驥を從へ、三千の兵馬を引連れ、城を出て相迎ふ。此時兩軍大に喊を作り、金を鳴し鼓をうち、北陣の内より董澄眞先に馬を出し、頭に金の盔を戴き、身に鐵甲を著し、手中に潑風刀を提げ、高聲に罵りて云く、水泊の草寇此に死を送り來るや。宋の陣中より、朱同馬を出し喝して云く、天兵に何ぞ早く降參せざる、我刀を汚す事を免んと。兩將戰ひ十餘合、勝敗を分ざるに、朱同馬を囘し東へ走るを、董澄勢に乘じ、追來れば、宋陣より、花榮馬を躍せ、鎗を構へ相戰ふ。三十餘合に至て勝負分らす。沈驥傍より見て、董澄を扶んと、馬を飛せ、鎗を突く。花榮敵の添を見て、馬を飛せ東の方へ走る。董澄、沈驥、馬を馳せ、嚴く追ふ時、耿恭城上より見て、親方誤あらんを恐れ、金を鳴し、兵を收んとせし處に、宋陣の内より一彪の軍馬馳出で、李逵魯智深を初め、多くの歩兵眞先に進み、早く城門の邊に突來れば、北兵いかんぞ此勇猛に當り得ん。耿恭急に城門を閉んとする時、早く宋兵城中に切入り、

宋江に對し、前日遼を破て囘りし時、彼雙林鎭にて出會せし、許貫忠が贈る處なり。宋江が云く、汝此日返り來りし時、我朝見の事に取紛れ、曾て備細は問ず、彼人は果して是英雄ならん。燕青が云く、貫忠元より博學多才にして、兵法に通じ智略有り、其外の小役は、琴棋書畫に至る迄、せざる處なし、彼人仕官を好ず、只退き隱れて世に交ずとて、彼が相敍し處を逐一語れば、吳用大に感じ、誠に天下の英才と覺ゆと嘆息すれば、宋江も又深く嗟嘆せり。されば盧俊義は先黃信、孫立に三千の兵を差添て、陵川城の東五里斗に伏勢せしめ、又史進、楊志に三千の兵を添て、城の西五里斗に伏せ計を授け、其夜潛に二ケ所に遣し、次の朝盧俊義五更に飯をたかしめ、軍士等飽まで食せしめ、夜明に陵川城に押寄せ、兵を分て三隊にし、旗を搖し金を鳴し、戰を挑ましむ。此時守將の軍卒、急ぎ此趣を主將董澄へ注進す。かの董澄は則鈕文忠の部下の勇將にて、丈九尺力萬人に勝れ、重さ三十斤の潑風刀を使ふ。又偏將、沈驥、耿恭二人相扶け勤めけり。

○盧俊義黑夜に敵を賺す

此時董澄は、宋朝梁山泊の兵を遣し、已に城下に推寄たりと聞き、急ぎ城を出戰はんと欲せし

江等を管待し、彼田虎が勢大にして、輕々しく敵すべからざる事を語れば、宋江再び其子細を問に、官人答て云く、澤州は田虎が手下の勇將鈕文忠、是を守りしが、此度其部下の張翔王吉なる者二人に、一萬の兵を添て、當地の所屬なる輝縣を攻しめ、又沈安、秦升なる者二人に一萬の兵を添て、懷州の所屬武涉を攻しむ。先鋒急ぎ兵を發して、早く此兩所を救ひ給へと告ければ、宋江是を商談するに、吳用が云く、陵川は則ち蓋州の要地なれば、先に是を攻擊しめば、兩所の圍み自ら解べし。盧俊義進み出て云く、某願くは兵を領し、陵川を取ん。宋江大に悅び、則ち一萬五千の人馬を盧俊義に差添へ、陵川を攻討しむ。彼馬軍の頭領は、則花榮、秦明、董平、索超、黃信、孫立、楊志、史進、朱同、穆弘なり。又步軍の頭領には、李逵、鮑旭、項充、李袞、魯智深、武松、劉唐、石秀なり。去ば次の日、盧俊義兵を領し去ければ、宋江吳用と進發せんとす。吳用が云く、賊兵久しく驕れば盧俊義必ず功をなさん、我輩元より、三晉の地形を知らざれば、一人の案內者を得て、兵を進むべしと、云も終らざるに、浪子燕青進み出で、軍師必ず心を勞する事なかれ、三晉の地形已にこゝに有りとて、懷中より卷物を出し、卓上に展れば、宋江吳用始終り子細に見るに、三晉の山川を委く畫き、或は城地或は關所、此處伏勢すべし、此處に戰ふべしと殘りなく寫ければ、吳用駭き、此卷何れより得たるや。燕靑

宋江の大軍黄河を渡る

遂に汾陽に於て宮殿を建て、文武の百官を設け、自ら晋王と稱し、多くの猛將を以て要害の地に立籠ければ、容易に攻べきやうもなし。去程に宋江は、吉日を選て軍を出せば、宿太尉自ら來て餞し、趙樞密も營中に來て、三軍を賞勞す。此時宋江盧俊義は、宿太尉趙樞密に相謝して兵を分ち、三隊となし、先五虎八驃騎を先手と爲さしむ。五虎の將と云は、大刀關勝、豹子頭林冲、霹靂火秦明、雙鞭將呼延灼、雙鎗將董平、八驃騎と云は、小李廣花榮、金鎗手徐寧、青面獸楊志、急先鋒索超、沒羽箭張清、美髯公朱同、九紋龍史進、沒遮攔穆弘、先手の諸將分發已に濟み、又十六の彪將を後軍らたしむ。其人々は、鎭三山黃信、病尉遲孫立、醜郡馬宣贊、井木犴郝思文、百勝將韓滔、天目將彭玘、聖水將單廷珪、神火將魏定國、鐵笛仙馬麟、火眼狻猊鄧飛、錦毛虎燕順、錦豹子楊林、跳澗虎陳達、白花蛇楊春、小覇王周通、摩雲金翅歐鵬と定む。扨宋江盧俊義は吳用公孫勝と同じく、其餘の諸將を領し、三聲合圖の砲を放ち、金鼓齊く鳴して、陳橋驛を發足し、東北をさして征進し、過る所の地少しも侵すことなく、已に原武縣に至れば、處の役人郭を出て相迎ふ。此時李俊等の水軍は、已に船を黃河に廻して相待り。されば宋江が大兵、難なく黃河を打渡り、再び李俊等をして戰船を領せしめ、先達て衞河に至らしめ、宋江自ら大兵を領して衞州に著しければ、其地の官人郭を出て相迎へ、城中に請て、宋

び給ひ、則ち宋江を平北正先鋒に封じ、盧俊義を同じく副先鋒に封じ、各御酒、綵緞、金甲、錦袍を賜ひ、其餘の諸將には段疋銀子を賜ひ、賊を平げ回り來らば、功を論じ、官位を封べき勅あれば、宋江、盧俊義、再拜して朝廷を退き、營中に回りける。

○宋公明の兵黃河を渡る

偖も宋江諸將を集め、勅諚の趣申聞け、鞍馬衣甲を整へしめ、宋江又吳用と計議して、先水軍に命じ、戰船を黃河に遣し、我軍の至るを待て、黃河を渡さしめん事を令し、用意已に備りければ、吉日を擇んで征進す。抑河北の田虎が出身を尋るに、本これ威勝州沁源の獵師なり。性質力萬人に勝れ、武藝秀で常に惡徒と交り、幸に此地は萬山四方を環り、要害よき處なるに、或年大に旱して、百姓大に困窮のあまり、亂を思ふの機に乘じ、遂に妖言を以て、愚人を惑し、始は金銀財寶を奪ふのみなりしが、後々は次第に增長し、竟に國郡を攻取り、其勢強うして、官兵も是に敵すること能はず。元より宋朝の末に至ては、京の貴人は勿論、末々の諸侯の國に至るまで、たゞ驕奢を好んで、誰一人武術を能する者なければ、遂に田虎の如き亡命の徒にあうては、其鋒にあたる者なし。されば田虎は五州五十六縣を奪ひ取り、こゝに於て田虎、

軍何故に光臨せる。宋江がいふ、某聞く、只今河北の田虎亂をなし、多の州郡を攻取り、近日又衛州を攻と、某が人馬今幸に無事なれば、願くは彼賊を征伐し、忠を國家に盡すべし、萬乞恩相此事を奏し給はんや。太尉大に悦んで云く、將軍等元來忠義なり、我必ず天子に奏聞せんとて、先酒宴を設けて宋江を款待ければ、宋江大に相謝して、日暮に至り、營中に歸り、宿太尉の消息を伺ひ待ける。次の日宿太尉は、披香殿に於て天子に見え、此時省院官奏して云く、河北の田虎造反して、只今五府五十六縣を攻取り、自ら王と稱し、年號を改め立て、此比又陵川懐州を攻取れりと。天子此奏を聞て、大に驚き、則文武の百官に問て宣く、卿等誰か朕が爲に此賊を征伐せんや。此時宿太尉進み出奏して云く、田虎已に多くの州郡を奪ひ、其勢破竹の如し、猛將雄兵にあらざれば、敵しがたかるべし、只今現に遼を破て勝を得、宋江等兵を城外に屯せり、彼に勅して征伐なさしめ給はゞ、必ず大功を立候はんと奏すれば、天子大に悦び給ひ、則宋江、盧俊義を披香殿下に召し、各拜し畢れば、天子勅して、卿等が英雄にして忠義有こと、朕素より知る、今卿等に勅して、河北の逆賊田虎を征伐せしめんに、必ず勞を辭せず、早く凱歌を奏せば、重く優擢べしと有ければ、宋江、盧俊義奏して云く、臣等已に聖恩を蒙り、何ぞ勞を辭する事をせん、只死をもつて國に報ぜんのみと。天子龍顔大に悦

傘と棒とを携へ、脚に腿絣護脚をばき、大に喘き叫んで云く、早く酒肉を持來れ、我火急の公幹ありて、城中に行くと。酒保忙しく酒と肉と持出れば、我大漢一向に飲食ふを見て、戴宗則問て云く、足下正しく何の公幹あつてかく慌しき。彼漢筋を下に置き、口邊を拭て答て云く、河北の大寇田虎亂をなす、儞是を知るや。戴宗が云く、我風に聞ど、未だ委しき事を知らず。彼漢子が云く、田虎が亂をなすや、州縣を奪ひ、官軍も是を制する事能ず、比者は蓋州を攻取り、追付又衞州を攻んとす、こゝを以て城中の騷動斜ならず、農百姓も安き心なし、因て本府より某を急に東京に馳て、是を告しむるなりと、云終て早く酒錢を拂ひ、棒と傘とを提げ、門を出嘆じていはく、皇天早く憐を垂れ、救ひの兵を發し、我等が妻子をも無事ならしめ給へとて、東京の方へ去ければ、戴宗石秀も此事を聞き、急ぎ酒代を拂ひ、陳橋驛に回りて、此ことを宋江に告ければ、宋江則呉用と商議して云く、我等此處に閑居し日を送んよりは、しかじ天子に奏聞し、兵を起して、田虎を征伐せんはいかん。呉用が云く、此事必ず宿太尉より奏し給はゞ成就すべしと。其時又諸將を集め、此ことを議しければ、各大に喜べり。去ば次の日、宋江自ら公服を著て、十餘人の伴當を列れ、宿太尉の府中に來て案内せしめければ、太尉則宋江を堂上に請ふ。此時宋江再拜して寒温を述べ、太尉則禮を返して問て云く、將

用と古今の得失の話をなしてありける處に、戴宗、石秀、各平生の衣服にて來り云く、某等甚だ閑暇に堪難し、兩人少しく遊行せんことを欲し、わざと長兄に告來る。宋江が云く、早く行て疾くかへれ、今日は少しく汝等と一盞を傾くべしと。されば戴宗、石秀、二人は陳橋驛を離れ、多くの市坊村坊を過て路の傍を見るに、大なる碑石に造字臺と彫めり。又左右に多くの小字あれ共、歳月を經て磨滅して見えず、戴宗子細に見ていはく、是昔蒼頡字を造る處なりと。石秀笑て云く、是我等の與る事にあらずとて、兩人は顏を見合せ、相笑ひぬ。行く事一二里、又傍に空地有て、地上は盡く瓦礫なり。又側の石碑の面に、博浪城の三字を刻り。戴宗しばらく見て云く、則是張良が滄海壯士をして、秦の始皇を打しめし所なりとて、稱賛す。石秀が云く、只惟惜むべきは一推中ずとて、兩人又嘆じて過ぐ。此時營を離るゝこと已に十餘里、石秀が云く、我等費に遊ぶ事半日、何ぞ一盃の酒を用ひざらんや。戴宗が云く、向うの青旗飜る處、是酒肆にあらずやとて、兩人まづ酒店に入て、窓の邊に坐し、早く酒保酒を持來れと叫べば、酒保其儘五六皿の菜蔬を並べて、手を拱て問うて云く、官人多少の酒を求るやと。石秀が云く、先兩角（一升なり）の酒を持來れ、肉あらば只管持來れと。酒保去て、程なく酒及び一盤の羊肉を持來れば、兩人盃を舉て共に酌で在しかば、忽ち一人の大漢子店に入來て、手に

て東京に著にけり。此節宋公明が軍馬、東京城外陳橋驛に屯し、聖旨を伺つて在ければ、燕青は斯と聞き、直に營中に來て宋江に參見す。是より向、宿太尉、趙樞密中軍の人馬は已に城中に入り、宋江等が軍功を委く天子に奏聞すれば、天子大に稱贊し給ひ、則ち黄門侍郎と云る官人に命じ、宋江等を甲冑を著ながら朝見せしむべしとて、甲冑の下に錦の襖を纏ひ、東華門より入り、文德殿に於て、天子に朝見す。此時百官各萬歳を唱止て、天子宋江等を見給ふに、多くの英雄皆錦袍金帶を著せしかば、天子大に悦び宣はく、朕此度卿等が多く征伐に勞あるを知れり、只中傷する者あらんを恐れ、常に心を勞せり。宋江再拜して云く、聖主の洪福に憑て、中傷する者在しも、各無事にして、今逆虜盡く平ぎしは、全く陛下の威德のいたす所、臣等何の勞あらんと、地に俯伏すれば、天子則省院官に命じ、宋江等に封爵を授けん事を議し給ふに、太師蔡京、樞密童貫進み出て奏しけるは、宋江等が封爵は臣等宜しく計ふべしと。ここに於て天子又光祿官に命じ、大に酒宴を開き、宋江等に御酒を賜ふ。宋江盧俊義に錦袍一領、金甲一副、名馬一疋を賜ひ、其餘は盡く金銀を賜ひしかば、宋江を始として、各恩を謝して、禁裏を退出し、陳橋驛の營に返つて軍馬を休め、聖旨の下るを相待て、已に日數を過しけれ共、蔡京、童貫等、いかんぞ封爵の事を取持んや、更に何の消息もなし。或日宋江營中に閑居し、吳

へと。貫忠固辭て受ず。燕青又勸て云く、君此の如くの才德を、草木と同じく朽しめんよりは、某と同じく、京に至て出身を求めんはいかん。貫忠口氣を歎て云く、正に今奸邪權を專にし、賢良を妬み、才能を忌む、爰を以て忠臣及び正直の人、罪なくしてむだに害せらる多し、これに依て、某が思ひ死灰となる事已に久し、君も又功成り名遂るの後は、必ず早く退くべし、古よりいふ、鵰鳥盡て良弓藏ると。燕青點頭歎じ止ず。又說話して半夜に至て相休む。次の朝已に朝飯畢て、貫忠則燕青を伴ひ、山前山後に至て遊覽す。燕青高き處に登て、四方を望むに、四面は盡く重りたる峯にして、流水潺湲として人の往來なく、珍しき鳥の聲のみにして、其邊に住る人家は只二十餘間のみなり。燕青大に悅び、此處桃源に勝れりとて、景色を貪り見て、其日も已に暮ければ、此夜も又一宿し、次の朝則ち貫忠に辭別せしに、貫忠しばしと止め、則童子に命じて一軸の掛物を取出し、燕青に賜て云く、是は近ごろ某が畫く處なり、君京に返らば、委しく是を熟覽せられ候へ、後々かならず用る所有べしと。燕青謝して軍卒に命じ、行囊に收め、兩人相分るゝに忍びず。貫忠則燕青を送る事二三里、燕青が云く、諺にも君を送る事千里なるも、遂に一別すべしといへば、遠く送り給ふことなかれと。其時兩人戀々として相別れ、互に見送て已に路を隔たれば、燕青は馬にて急ぎ、日を經

外に出て見るに、後の馬上なるは主人なれば、忙しく門前に出迎ふ。貫忠、燕青、二人馬より下り、堂に入り、賓主坐定り、已に茶を進め、貫忠は燕青が軍卒に飯を與へ、耳房の中に休しめ、又馬を後槽に繋しむ。此時燕青は貫忠の老母に見え、則貫忠の後房に至り、窓を開きて溪邊を望むに、水影山光一室に映じて、其景畫け共なり難ければ、燕青稱すること再三、貫忠笑ていはく、陋居何ぞ稱するに足んやとて、則遼を征せしことを問こと多時す。暫く在て、童子來り燈をともし、卓子をかき出て、一盤の鷄一盤の魚を竝べ、且一壺の酒を持出れば、許貫忠把て燕青に進めて云く、村醪野菜あに君を相待に足らんや。燕青が云く、甚だ相擾忝なし。此時窓外の月光白晝のごとく、雲輕く風靜にして、風景さらに佳なりければ、兩人數盃の酒を傾け、已に闌に及びしに、燕青が云く、昔某大名府に在し時、君と莫逆の交をなせしが、程なく君は武擧に應じて、仕官せらると聞しに、急流勇退はやく、此處に隱居し給ふは、何等の風流なるや、某のごときは東西に奔走して、未だ一日の暇を得ず。貫忠笑つて云く、宋公明及び、衆將軍の英雄たる事天下に隱れなし、某の如きは、只荒山に隱れ、更に尺寸の功なし、たゞ恨らくは、奸黨權を恣にして朝廷を蔑如にすれば、我も出て仕るに心なしとて、兩人又盃を洗て更に酌む。此時燕青は白銀廿四兩を取出し、貫忠に送て云く、薄禮願くは納給

貫忠辭して云く、某先鋒の忠義あることを聞こと久し、よつて君の左右に侍せんことを欲すれ共、老母有て七旬に過れば、遠く離がたし。宋江が云く、かゝらば某強て勸じとて、燕青に對し、賢弟今往ば、早く歸て我に懸念せしむること勿れ、京に歸らば朝見すべし、汝も其期を過つべからずと、令すれば、燕青領承し、則盧俊義にも此趣を告げ、貫忠と同じく宋江衆頭領に辭別せしかば、宋江則大軍を領し進發す。此時燕青は、一人の軍卒に行嚢を擔しめ、又別に一疋の馬を備へ是に乘り、我騎し駿馬には許貫忠を乘せ、雙林鎭を出で村を過ぎ、林を經、山下の小逕七八里も過ぎ、兩人馬上に昔の説話などし、又二十餘里過て大溪の邊に至りければ、貫忠向の高山を指して云く、此山中某が敝盧ありとて、行こと十餘里、遂に山中に入るに、峰巒秀で溪澗澄り。燕青其風景を見て、覺ず天已に昏ぬ。落日帶烟生碧霧、斷霞映水散紅光。元より此山大伾山とて、昔神禹、河を導て至りし處なりと、則書經中に、大伾に至ると記せるは此處の事なり。許貫忠、燕青と多く山坡を登り、山上に至るに、平かなる地有て、樹木深き處三四軒の草舍あり。其内溪邊に南向の茅屋あり。門外脩竹蒼松森々として、柴門半は掩うたり。貫忠指ざし、則是某が宅なりと。燕青見る時、竹籬の内に一人の村童、茅簷の下に松枝を拾在けるが、忽ち馬蹄の音に怪み、此山中に何故馬蹄の音あるやと、門

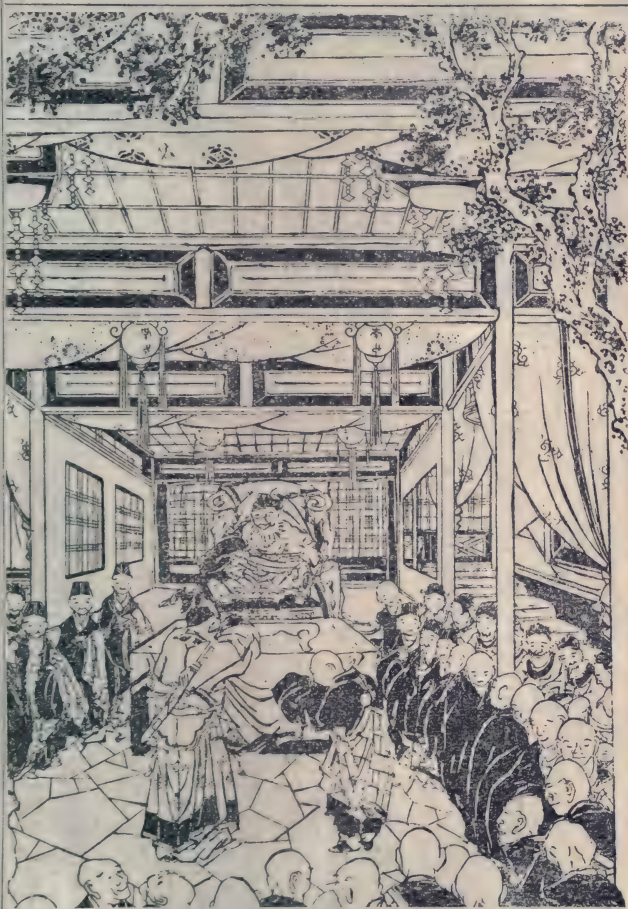
れば、燕青立止て、熟々伺ふに、少し面識あるやうなれば、探頭探腦見すます時、彼人近く來て呼て云く、賢弟は燕青にあらずやと。燕青云く、扨は是許貫忠兄なるかと。此時貫忠馬より下て、共に禮をなし、久濶の情を述ける處へ、宋江が大軍已に至り、宋江眞先に馬を進めれば、燕青則宋江を指ざし、貫忠に對して云く、是則宋先鋒なりと。此時宋江は、燕青が一个の人と說話するを見て、彼人の體を伺ふに、相貌堂々たる人物ゆゑ、馬より下りて禮をなし、躬を屈め問て云く、高士の大名はいかん。彼人慌しく禮を還して、某姓は許、名は貫忠、世世大名府の住人、今山林に隱れ栖り、兼て君の大名、耳に雷の轟くが如し、又燕將軍と某は、兼て深き交なりしが、一別以來見えざること數年、風に聞く、燕青君の麾下に隨へりと、是を以て某又悅に堪ず、今先鋒已に遼を破て返り給ふと聞き、某特々此に來て燕將軍を待しに、はからず君に遇ことを得たり、某の幸甚し、今某暫く燕將軍を敝廬に迎へ、略く舊情を述んことを欲す、先鋒これを許し給へ。燕青も又告て云く、某許君と久しく別れ、料ず此處に遇ひ、已に許君の美意を蒙れば、某一度彼所に至らんことを願ふ、先鋒これを許し給へと乞にぞ、宋江猛然思ひ出し、則貫忠に對して云く、燕青常に先生の英名を說けり、因て慕ひしに、今日料ず見ゆる事、是天の引合なり、同じく城中に回りて、一盃を酌んはいかん。

斯て雙林鎭に至りし時、盧俊義其外と兵を會し、各征戰の勞を休ましめん爲、一兩日を過せし折節、冬至の節に遇ければ、宋江は自他各無事なるを賀し、一陽來復の佳節至れるを歡び、雙林城中に於て大に太平宴を儲けしめ、一百八人幷に三軍一同酒を酌しめ、太平を賀せしめける。此日上下皆大に醉ければ、宋江再び香を焼き、衆人に對していはく、某片言あり、兄弟聽聞せらるべし、只今各朝廷の臣なれば、昔の比にあらず、況や皆天星地曜の精なれば、各異心なく患難相佑け、忠義を盡し、樂は必ず樂を同うし、憂は共に憂へ、只生るゝ時を同うせずといへ共、願くは同日同刻に死せん、若不仁にして忠義を忘れ、始有て終なき者は、ともに神明の冥罰を蒙り、永く地獄に陷つて、萬世人と生るゝことなけんと、誓ひ終れば、衆人同聲に發願し、只生々相會し世々相會せんと、盟の血を歃り酒を飮で、大に醉ひ、各帳中に入て休みけり。此夜浪子燕青は帳中に在て、夢に似て夢に非ず、忽ち一个の處に至る。山秀て水明らかにして、甚だ風景好地なれば、傍の人に其地を問に、則ち雙林鎭なりと答へければ、燕青心中に思へらく、我此頃城内に在て、此等の景地あるを知らず、暫く遊行して慰んも妨あらじと、足に任せ二三里行けるに、忽ち後へに馬の嘶く聲す。燕青頭をかへして是を見るに、一人の大漢子頭に青紗巾を戴き、身に皁布の道服を著し、馬上に出來る。是庸碌の人と見えざ

ら參じ給へ、若これを分明に云は、恐らくは天機を泄さんとて、深く是を祕し給ふ。長老又魯智深を呼で示し給ふは、汝今此を去ば、永き別れとなるべし、汝が正果漸近し、我又四句の偈を汝に授んに、終身までこれを忘るゝことなかれとて、則偈を說給ふ。

逢レ夏而擒。遇レ臘而執。聽レ潮而圓。見レ信而寂。

魯智深偈を授りて數遍復し、則長老を拜謝す。長老の云く、汝須く此語を記取して、本來の面目を忘るべからずとて、又宋江と閑談あり。夜已に三更の前後に至りしかば、長老則宋江等を請て歇せけり。翌日宋江、魯智深、幷に諸大將、各長老に別れて山を下りければ、智眞長老自ら諸僧を引て、山門の邊まで送り給ふ。宋江等長老に謝して五臺山を離れ、直に盧俊義を慕て急ぎ、はや軍前に至りければ、盧俊義、公孫勝、自ら出て宋江等を迎へける。宋江則五臺山のことを語て、彼法語を、盧俊義、公孫勝に見せけれ共、皆其意を曉さず、疑ひを起しければ、蕭讓是を見て、禪機の法語いかんぞ容易に曉す事を得んや、宜しく其應を待て、其意を知り給へとて、衆皆感歎止ざりけり。

○雙林鎭に燕青故に遇ふ

偈を以て答て云く、

六根束縛多年。四大牽纒已久。堪嘆。石火光中翻二了幾箇筋斗一。咦閻浮世界諸衆生。泥沙堆裡頻哮吼。

長老偈を說畢り給ひしかば、宋江又諸將と共に、香を拈て禮拜し、某等百八人、願くは只同生同死して、世々相逢んと誓をぞ立にけり。長老已に法座を下つて、雲堂の内に入給ひ、諸人皆齋畢りしかば、長老又宋江魯智深等を方丈に誘ひ給ひ、閑談與に入て日已に暮にけり。宋江又問て云く、某もと魯智深と共に、四五日當山に逗留して、浮屠の淸敎を聞んと欲へども、此節は勅令を奉つて、大軍を領せしことなれば、久しく留りがたし、原より大和尙は、過去未來のことを曉し給ふ善智識なり、願くは某等諸人が、前程の吉凶禍福を知らしめ給へ。智眞長老これを聞給ひて、又四句の偈を書給ふ。其偈は云く、

當風雁影翻。東闕不二團圓一。隻眼功勞足。雙林福壽全。

長老此偈を宋江に與へて云ふ、是則ち將軍一生の事なり、久しくして後必ず其應有べし。宋江此偈を見けれ共、其意を曉さず。長老に對して云く、某愚にして法語を悟ず、願くは長老明らかに解して、前程の吉凶を知らしめ給へ。長老の云く、是則禪機の隱語なれば、將軍自

を聞て深く感謝せり。魯智深一包の金銀采緞を長老に獻ず。長老問て云く、汝此等の物は何の處より得たるや、若不義の財にて有ならば、我決して是を請じ。魯智深が云く、我數度恩賞に預り、聚る所を是を所持して益あらず、故に我師に獻ず、願くは是を收め給へ。長老の云く、然らば我此財物を以て一藏の經を調へ、汝が罪を滅じて、早く善果を遂しめん。魯智深是を聞て、長老を拜謝せり。宋江も又金銀采緞を堂頭和尙に獻ず。智眞長老堅く辭して、是を請給はざりければ、宋江合掌して云く、和尙もし禮物を受給はずんば、是を貼庫師の方に送り、貴寺の僧衆に齋の供養すべしとて、則魯智深と議して、彼禮物を貼庫が方に送りける。此日長老方丈に於て、百餘人の頭領を饗應し給ひ、閑談晩に至りしかば、宋江等都て客廠に一宿せり。翌日貼庫齋を設け、鐘をつきければ、智眞長老法堂に出て、一山の僧衆を聚め給ふ。五臺山の僧衆頓て、法堂の內に至て會集す。宋江、魯智深、幷に諸の頭領、盡く兩邊に立竝ぶ。此時長老法座に陞て燒香あり。則法語を唱へ給ひしかば、諸の僧衆一同に合掌せり。宋江法座の下に至て、長老を禮拜して云く、某一句の語を堂頭大和尙に問んと欲す、願くは吾師是を敎へ給へ。長老の云く、將軍はたして問給はんずる法語あらば、速に問給へ。宋江又禮拜して問けるは、浮世光陰有」限、苦海無」邊人身至微、生死最大、願くは大和尙これを示し給へ。長老則

又一人の首座出て宋江に對面し、長老は今坐禪入定の時節なるが故、自ら將軍を迎へず、先知客寮に入て歇給へとて、宋江等を知客寮に迎て、暫くして後侍者出て云けるは、長老已に方丈に出て、將軍を待給ふ間、速に來り給へとて、諸頭領を引て方丈に入ければ、智眞長老自ら階の下に降りて、宋江等を堂上に迎へ給ふ。宋江彼長老を見るに、齡已に六十有餘にして、眉長く鬚白く、儼然として奇異の相あり。宋江等百餘人の輩一同に香を撚て、長老を三拜せり。魯智深は感悅の餘り、却て兩眼に涙を含み、香を炷花を採て、長老を拜しければ、長老これを見て云ふ、汝此山を去てはや數箇年を過せり、人を殺し、火を放つ事は、猶昔にかはらざるや。魯智深是を聞て、只頭を低て默止しける。宋江が云ふ、某原來長老の淸德を聞しか共、緣薄うして、尊顏を拜せざりき、今詔を奉つて、遼の國を征伐せんがために此處に至り、幸ひ今堂頭大和尙の法顏を拜し奉り、自ら雀躍に堪ざるなり、且智深和尙は數年某等と一所に在て、人を殺しぬといへ共、原善心のあるが故、良善の輩を害せず、宜しく道を行ひ、邪のことをなさゞるなり。智眞長老の云く、諸方の客僧常に當山に至り、將軍等の天に替て道を行ひ給ふことを吹噓す、此故に我老早より百八人の英雄は、各忠義有ことを知れり、我弟子魯智深、今宋將軍に隨つて共に忠義を守る事、全く佛心に合へり、我豈是を悅ばざらんや。宋江此言

八編　巻之七十二

○五臺山に宋江參禪す

東京大相國寺に菜園を守り、火を放て立去し花和尙魯智深曹正が其勇藝を感じ導し故、靑州寳珠寺に入て山陣を奪ひ、强盗の頭領をなし、後梁山泊に入て宋江に隨ひ、今遼の國の軍平ぎしに依て、最初の師五臺山の智眞長老を訊んとす。此長老は當世第一の知識にて、過去未來の事を曉し給ふ故、數年以前より、魯智深は乃ち了身達命の者たることを知り給ひしか共、魯智深未だ俗緣盡ずして、殺生の債を還さんと欲するに因て、暫く魯智深を許して、塵世の内に奔走なさしめ給ひけり。善哉智深は宿根に猶道心あるゆゑ、今日此念頭を起して再び本歸を拜せんと欲するなり。宋公明も又素より善心有故、智深と共に智眞長老を拜せんと欲し、諸の頭領と一千餘人を領し、遂に五臺山を望で馳ける程に、はや山門の邊に至りしかば、諸僧此音信を聞て、宋江魯智深等を迎へける。僧衆の内に魯智深を認識たる者多かりけるが、今日かくの如く、百餘人の豪傑と共に、美々しく粧束して參詣したりしかば、諸の僧衆一同に感じけり。

がな、誤て更に解すべからず。たとへば禪宗を禪宋と誤る類擧て云べからず。今百囘本八十九囘に出る所を以て、一々國字を改加ふと云ふ。古人己が道を尊くし、衆の思ひ付ん爲、張良は黃石公を假設る類、和漢然り。宋江九天玄女を儲るも、旣に其先例多し。玄女の腹冲淺略、讀人肯ふまじく思はる。是則作者の屆ざるよりかくのごとし。

朝夕一向本師の事を渇想すといへ共、未だ再び拜謁せず、自ら本意に背けり、今日幸に太平無事の身となり、いかんぞ本師を拜せざらんや、殊に本師昔日我に示して曰ひけるは、汝今人を殺し、火を放つの性有といへ共、後必ず悟を開きて、正果を得べしとの事なりき、我再び本師に見えなば、前程のことをも猶委しく問べし、我今貯へたる所の金帛多ければ、是をも盡く本師に奉らん、願くば宋君數日の暇を給はらば、再び五臺山に上て、長老を拜し、頓て跡より赶上て、共に東京に回るべし。宋江是を聞て、忽ち想ひ出し、誠に智眞老師は當世の活佛なり、汝若行ば我も同往すべしとて、又諸大將と議しけるに、諸人都て同往せんと願ひける。獨公孫勝は道家なる故にや、留るべきよしを云ければ、宋江是を誘はず。又副先鋒盧俊義に、金大堅、皇甫端、蕭譲、樂和、此四人を隨はしめ、共に三軍を掌せて、先諸軍の將を打立せ、宋江は諸將と共に一千餘人を領し、急ぎ五臺山に詣んと議定したりしかば、魯智深大いに悅んで、宋江等を誘引し、直に五臺山を望で進發しけり。宋江參禪の趣次卷に詳なり。

論者云く、此卷趣向甚だ淺々なり。吳用は六韜三略に通曉すとあるに、九天玄女いかなる奇法を說と思へば、河圖洛書の數、五行生剋の理を述たり。此位の事を知らずして、軍師と云べきや。又冠山子の譯本といふ流布の水滸傳字違前卷と同じく、此卷遼宋の簡牘つけ

能はざりしなどと、詐りて誇言をいふことなかれ、若重ねて天命に違はゞ、我再び來て立處に國を滅し、王を始め汝等迄殺し盡すべし、汝等すべからく以來を愼めとて、嚴に仰ければ、兩人の丞相頓首して、命を請け、我們いかんぞ敢て、宋朝の聖恩を忘れんや、毎年の貢ものゝ少しも缺ことあらじとて、遂に宋江を謝して回りけり。宋江又女大將一丈青等を發足をなさせ、卽日當地の石匠に命じ、一つの石碑を立さしめ、蕭讓に文を作らせて、此回のことを記し、則是を石碑の面に刻せける。功を石に刻し、後世に殘す事、漢の馬援を始め先規多し。されば今に至る迄、古蹟猶存すと云々。已に宋江は軍馬を五隊に分け、五行に列ね、はや打立んとせし處に、花和尚魯智深至て宋江に告けるは、我昔日鎭關西を殺し、代州雁門縣に走り、趙員外が緣に依て五臺山に上り、智眞長老を師として出家を遂げ、暫く五臺山に在りし時、思はず酒後に寺中を鬧し、叢林の規矩を亂せり、誠に擯發あるべき事なるに、長老却て是を宥し、殊更憐憫を垂給ひし處に、我其以後又酒に醉て、大に一山を騷動させ、多く火工道人等を打傷ひし故、長老已ことを得給はずして、我を東京の大相國寺に遣し給ひて、智淸禪師の會下に於て菜園を守らしめ、則菜頭の職を授け給へり、其比豹子頭林冲、高俅が惡に殺害せられんとせし故、我半途に於て林冲を救ひ、夫より直に山陣に取籠り、其後に宋君に隨て數年を過し、

不可なり、唯趙樞密一人を城中に入らしめ給へ、と議を定め、趙樞密に斯と告ければ、趙樞密已に城内に入て、宴に赴き、終日宿太尉に陪して、飲宴をなしにけり。此日遼王は種々美を盡して、宿太尉、趙樞密、幷に十人の大將を饗應し、又禮物を調へて、宿太尉、趙樞密、兩人に獻じ、其夜も又宿太尉を館驛の内に留めける。翌日遼王百官を引て鼓樂を奏し、宿太尉、樞密趙氏等を城外迄送りしかば、宿太尉等是を謝して、遂に宋江が陣に回りける。遼王又丞相褚堅を、宋江が陣に遣し、一々禮物を送らしむ。宋江令を傳へて、天壽公主以下の活捉共を盡く放て、本國に回し、諸事全く調りしかば、先宿太尉を送りて、東京に歸らしめ、其後宋江三軍を手分して、行列を定め、此日中軍の人馬を發して、趙樞密を東京に送らせ、宋江は猶後に留つて、水軍の頭領等を先水路より都に回らしめ、再び幽州城に人を馳て、左右の丞相を招きければ、遼王頓て左丞相勃瑾、右丞相褚堅を宋江が陣中に遣しける。宋江自ら兩人の丞相を迎へ、帳中に入り、賓主座已に定りし處に、宋江が云ふ、我此度勇兵を以て幽州城を圍み、遼の一族共盡く打滅さんこと、唯眼前に在しか共、汝が城中に降參の旗號を建ける故、我先城を打ずして、暫く延引しける處に、天子憐憫の上にて、十分の洪恩を惠せ給ひ、汝等が一命を饒さしめ給へり、汝等必ず此恩を忘て、貢を缺ことなかれ、汝は又宋江等が我城を破ること

遼王
宿太尉と

郎の官手を清め、謹で詔書を披讀して云く、
大宋皇帝制曰。三皇立位。五帝禪宗。無君子莫治野人。無野人莫養君子。雖中華而有主焉。夷狄豈無君。茲爾遼國不遵天命。數犯疆封。理合一鼓而滅。今覽其情詞。憐其哀切。憫汝惸孤。不忍加誅。仍存其國。詔書至日。即將軍前所擒之將。盡數釋放還國。原奪一應城池仍舊給還遼國。管領所供歲帛愼勿怠於戲敬事大國。祗畏天地此藩翰之職也。爾其欽哉。故茲詔示。想宜知悉。
宣和四年冬月　日
侍郎詔書を讀罷りしかば、遼王百官と共に再拜して恩を謝し、君臣の禮すでに畢つて後、詔書を取て龍案の上に安置せり。遼王再び、宿太尉に相まみえて後殿に誘ひ、大に酒宴を設け、水陸の珍味を相具へ、佳人美女管絃を奏し、歌舞の聲、殿中殿外に喧し。遼王自ら盃を執て、宿太尉に進め、黄昏に至て、宴已に終りしかば、宿太尉并に十人の大將、各館驛の内に歇みけり。翌日遼王、右丞相褚堅を宋江が陣中に馳て、趙樞密、宋先鋒を城中に迎へ、酒宴を進んと云越ければ、宋江是を吳用に商議しけるに、吳用が云けるは、宋君自ら城に入給はん事

廷を怨み奉るにはあらざれ共、功已に此に至り、今又これを虚しうせんこと、甚だ以て惜むべし。宿太尉が云く、先鋒先憂へ給ふことなかれ、我京に回りなば、御邊等の勲功を委細天子に奏聞せんに、爭でか恩賞なからんや。趙樞密も又宋江を慰めて云けるは、我證見となつて宋先鋒の功を奏すべし、何ぞ大功を空しくせんや、必ず憂を休めて心を安んじ給へ。宋江が云く、某等百八人、力を竭し心を合せ、國家の爲に勲功を立けれ共、原來恩賞を好む心有ず、只身の上の禍を免れ、無事を保ば、百八人が福ひ何事か是に如んや、然れども勞して功なきがごときは、諸人の惜む所なり、若樞密相公、我が爲にこれを辨じ給はば、深く懇情を感ずべしと語り、此日は黄昏まで飲酌をなし、宿太尉を款待せり。此夜遼王が方に人を馳せて、勅使を迎ん用意を調へしめ、翌日宋江十人の大將を以て、宿太尉を遼の國に誘はしむ。彼十人の大將は、關勝、林冲、秦明、呼延灼、花榮、董平、李應、柴進、呂方、郭盛等なり。總て三千の人馬を領して、宿太尉を中央に取圍み、嚴に行列を備へて、幽州城の外に至しかば、諸の百姓共香花燈燭を設け、途中に群集せり。此時遼王は文武百官を引て、城の南門を出て、恭しく詔書を迎へて、金鑾殿の上に至りしかば、十人の大將は左右に立ち、宿太尉は龍亭の左に立ち、遼王は百官と共に殿前に跪き、宿太尉は遼の國の侍郎の官に命じて、詔書を披讀せしむ。侍

を調へける。太師蔡京は多く賄賂を得て、心中に悦び、内意を楮堅に通じ、汝先心を安んじ回るべし、諸事は我們四人が身の上に干つて、御赦免の議を調ふべしと、懇に云越ければ、楮堅内意を受て、大に悦び、遂に東京を發足して、遼の國に回りけり。翌日蔡太師は百官を引て參內し、早く詔書を降し給ひて、遼王が罪を御赦免なし給へとて、一同に奏しければ、帝其奏を准し給ひ、卽日翰林學士に命じ給ひて、詔書を修へしめ、太尉宿元景を勅使として、遼の國へ遣し給ふ。扨も趙樞密に勅命有て、宋江等に戰を休させ、活捕の者共悉し饒さしめ給ひて、得たる處の州郡都て還さしめ給ふなり。宿太尉は已に勅命を奉つて、全く用意を修へ、吉日を擇で天子に辭別し奉り、遂に柴進、蕭讓等とともに、遼の國へ進發す。此時嚴冬の天氣にて、一天に雪降り、所々都て銀を布たる如くなり。既にして、宿太尉は柴進、蕭讓二人を以て趙樞密に斯と訴へて、宋江にも又斯と告ければ、宋江此消息を聞て、諸大將と共に五十里の外に打出て、恭しく宿太尉を迎へて陣中に誘ひ、美々しく酒宴を設け慇懃に饗應せり。宿太尉宋江に對して、此度蔡京、童貫、高俅、楊戩、并に省院の官人等、都て遼王が賄賂を請け、天子の御前に於て宜しく奏聞したるゆゑ、天子遼王の罪を免し給ひて、戰を止しめ給ひ、剩得たる所の州郡并に擒の輩を、盡く遼王に還さしめ給ふなり。宋江此ことを聞て嘆息し、某朝

左右多狼心狗行之徒。好財貪賄。前後悉鼠目獐頭之輩。小臣昏昧屯衆猖狂。侵犯疆封以致天兵而討罪。妄驅士馬動勞王室以興師。量螻蟻安足以撼泰山。想衆水必然歸于大海。念臣等雖守數座之荒城應無半年之積蓄。今特遣使臣褚堅冒于天威納上請罪。倘蒙聖上憐憫。葢爾之微生不廢祖宗之遺業。是以銘心刻骨瀝膽披肝永爲戎狄之蕃邦。實作天朝之屛翰。老々幼々眞獲再生。子々孫々久遠感戴。進納歳幣誓不敢違。臣等不勝戰慄屛營之至。誠惶誠恐稽首頓首謹上表。以聞。

宣和四年冬月日　大遼國主臣耶律輝表

徽宗皇帝表文を叡覽し給ふ處に、群臣擧て、御赦免なし給はゞ、大に可ならんと奏しける。帝此議に同じ給ひ、早速御酒を以て來使に賜りしかば、褚堅等再拜して恩を謝し、則金銀彩緞を捧て、天子に獻上せり。天子も又緞帛を以て遼王に惠み給ふ。此日光祿寺に於て褚堅等に御宴を賜り、後日詔を降して、遼王が罪を御赦免有べき間、先回るべしとの御事なりければ、褚堅等謹で恩を謝し、再たび館驛にかへり、又金銀彩緞を以て、諸の官人に送り、彌首尾

翌日帝殿上に出御あつて、百官の朝賀を請給ひて後、樞密使童貫列を出て奏しけるは、今先鋒使宋江遼の兵を追退け、幽州を圍み、是を破らん事旦夕にあり、此故に遼王、城中に降參の旗を建て降參を願ひ、今日右丞相褚堅を以て、罪を謝すの表を獻り、永く我君に歸伏せんと欲す、況や每年貢を獻じ、再び中國を犯すまじと、誓を立て奏聞す、伏て願くは陛下是を察し給へ。天子叡聞有て、宣ひけるは、既に此の如くんば、速に其罪を免して、猶其國に封ずべし、汝群臣等、若別に議論あらば心底を殘さず奏聞せよ。時に太師蔡京進み出て奏しけるは、臣等皆此事を議しけるに、古より今に至る迄、四夷未だ盡く亡すべからずと云ことあり、臣愚意を以て想ふに、遼國を存して、北方の要害となさば、中國の爲に益あつて、唇齒の國とするに堪ん、願くは陛下遼王が罪を免して、戰を罷しめ給へ。天子叡聞有て、其奏を准し給ひ、早速遼の使者を宣て、御對面あらんとの勅命降りしかば、殿頭官勅命の趣を遼の使者に云聞せ、城内に招きける。褚堅等是を聞て、心中に悅び、盡く城中に入て、金殿の下に至り、頓首再拜して表文を獻る。其表に曰く、

大遼國主臣耶律輝頓首百拜上言

臣生居二朔漠一。長在二蕃邦一。不レ通二聖賢之大經一。罔レ究二綱常之大禮一。詐レ文僞レ武。

足し、先宋江が陣中に至りければ、宋江又褚堅を引て趙樞密に見えて、此回遼王、丞相褚堅を東京に馳て、降參の事を願ひ奉るよし、詳に訴へける。趙樞密これを聞て、褚堅に對面し、則語て云けるは、我も又先宋鋒と商議して文書を調へ、遼王の存念を、我君の叡聞に達すべし、則柴進、蕭讓兩人を足下に跟て、東京に遣さんとて、卽時に文書を修へて、柴進、蕭讓に與へければ、褚堅遂に趙樞密に別れて、東京に上りけり。去程に褚堅は、夜を日に續で急ぎしかば、不日に東京に至り、彼十輛の車幷びに、諸の人馬、都て館驛の内に留め置き、先柴進、蕭讓、公文を持て省院に至り、今遼王戰に負け、危急に及びしゆゑ、右丞相褚堅を都に上らしめて、降參のことを願ひ奉る、然れども上を憚て、未だ入城せざるよし具に訴へける。省院官是を聞て云けるは、汝兩人先彼等と共に館驛の内に歇むべし、我們先商議をなして、晉耗を通ずべしと約し、先兩人の者を回しけり。此時東京には、蔡京、童貫、高俅、楊戩、幷に省院の官人等は、專ら賄賂を貪るよし、其隱れあらざる間、褚堅豫じめ緣を求めて、蔡京等四人の大臣、幷に省院の官人等に重く賄賂を送て、内意を賴みける。

○宿太尉恩を頒て詔を降す

の事調て、赦免の詔降るべし、然らば又時節を待て大事を興さんに、何の不可なることかあらん。遼王聞て、大に悦び、已に其言に服しければ、翌日右丞相褚堅、幽州城を出て宋江が陣中に至りける。宋江是を迎へて帳中に入り、丞相が來意を問ければ、褚堅則ち答て、卽今遼王が降參せんと欲して、宋江に重く禮物を送らんと欲すること、一々備細に語りける。宋江是を聞て、我連日城を圍み、已に攻落さんとせし處に、城中に降參の旗を建ける故、我先兵を收て動靜を伺ふなり、兩國の戰には、古より降參するの例有て、猶且是を許すの事あり、これに依て我かくのごとく戰を罷め、汝が東京に上るをも、あへて攔らず、然るに汝禮物を以て我に賄賂を送んとは、甚だ以て無禮なり、汝が遼王は宋江を何等の者と思ふぞや、再びかくのごとき醃臢き事をいたさば、我決して免すまじ、汝速に回り、我存念を遼王に訴へよと、色を變じ怒りしかば、褚堅大に恐懼せり。宋江又言を和らげて云けるは、丞相早く東京に上りて天子に奏聞し給へ、天子若御赦免あらば、我早速圍を解て都にかへるべし、必遲疑し給ふこと勿れ。褚堅此言を聞て、宋江を拜謝し、遂に別れて幽州城にかへり、委細を遼王に奏して、諸の大臣等と商議を定め、翌日遼王、金銀彩緞を相調へ、是を十輛の車に載せて、丞相褚堅并に十五人の臣下を東京に遣し、謝罪の表を宋の天子に獻る。褚堅等命を奉て幽州城を發

計ならん、と一同に奏しける。遼王是を聞て其議に隨ひ、早速城の上に降參の旗を立て、使者を宋江が陣中に馳ていはく、毎年貢ものを獻じて、再び中國を犯すまじき間、此城の圍を解て引給へと、慇懃に訴へしかば、宋江是を聞て、使者を後軍に誘引し、則ち樞密趙公に見えて、來意の趣を一々詳に告しめけるに、趙樞密是を聞て云けるは、敵の降參を許さん事、此則國家の大事なれば、私の主意に及ばず、すべからく天子に奏聞し、然して後に是を免すべし、汝が遼王もし彌降參の心あらば、大臣を使者として東京に上らせ、天子に朝見して、降參のことを奏聞せよ、天子若これを准させ給はゞ、我方に圍を解て兵を退くべし。使者此言を聞て、遂に幽州に回り、遼王に斯と奏しければ、遼王又群臣を集て、此事如何と評議をなす。時に右丞相太師褚堅、列を出て奏しけるは、我兵は此度の戰に盡く討れ、殘る軍兵とては僅なり、いかんぞよく大軍に敵せんや、臣愚意を以てこれを思ふに、多く金銀彩緞を以て賄賂を行ひ、豫じめ人心を結ばんこと專要也、臣自ら宋江が陣中に行て、重く厚禮を送り、先兵を收しめて、此城の危急を免れ、其後又臣禮物を調へて、急ぎ東京に上り、諸々の官人等に、多く賄賂を送り、天子の前に於て宜しく奏聞なさしめん、今中國には、蔡京、童貫、高俅、楊戩、此四人の賊臣、專ら權威を震つて、天子の心に合へり、若金銀彩緞を以て、此四人に賄賂を贈なば、必定和睦

中軍に至り、解珍、解寳は先軍器を揮つて、遼の兵を四面八方に砍拂ふ。遼王の前後に相隨ひ居る猛將ども、命を捨死を輕んじ、王の駕を守て兩人の丞相も共に、北を望んで走り行き、直に幽州城に引取りける。羅喉、月孛、兩人の皇侄も敵に遇て殺されたり。獨紫炁皇侄は往向しれず逃失けり。已にして宋の大軍は幽州城を取圍み、直ちに四更の時まで攻ければ、遼の兵二十餘萬を討取て、全き勝を得たりける。漸く曉に至て、諸將皆回りしかば、宋江金を鳴して軍を收め、已に陣を取り、功を獻ずべきよしを諸將に觸けるに、一丈青は、太陰星天壽公主を獻ず。盧俊義は、計都星皇侄耶律得華を獻ず。朱同は水星曲利出淸を獻ず。歐鵬、鄧飛、馬麟は、斗木獬蕭大歡を獻ず。楊林、陳達は、心月狐裴直を獻ず。單廷珪、魏定國は胃土雉高彪を獻ず。韓滔、彭玘は柳土獐雷春、翼火蛇狄聖を獻ず。其餘の諸將は都て首を獻じける。宋江一々實檢して、先八人の活捕を趙樞密が中軍に送つて、緊しく是を守らしむ。此時得たる所の兵粮、器械、馬旗等は其數を知べからず。遼王は幽州城に逃入て、城門を牢く閉さしめ、再び出て戰ふことあらざりけり。宋江三軍に命じて、幽州を重々に取圍で、多く石砲を設け、緊しく城を攻さしむ。遼王是を見て、大に驚き、則群臣を聚て計を議しける處に、群臣等しく進みいで、今已に敵の大軍に圍れ、死生存亡旦夕に在り、速に宋朝に降參せんこと、是則上

張淸これを見て、横合より赶來り、彼石を執て飛せければ、兀顏統軍これを避る事能ずして、遂に耳の根を打れ、大に慌て横路に走らんとしけるに、關勝頓て追付て、馬より下に砍て落しければ、張淸相續て馳來り、再び鎗を以て喉を搠き、終に是を殺しけり。兀顏統軍一世の豪傑をなし、武威を遠近に振ひけるが、今日一刀一鎗の下に身を亡しけるこそ憐なれ。こゝに又花和尙魯智深は、武行者等六人の頭領等を引て、喊き叫んで太陽の陣中に砍て入り、敵の大將耶律得重、急に逃んとせし處に、武行者早くも兩刀を揮て、耶律得重を砍て落し、首を刎けり。耶律得重が兩人の子は這々命を脫れ逃去ける。太陽の陣已に敗れしかば、魯智深諸將に對し云く、我輩是より中軍に攻入て、遼王を生捉んと議定せり。扨太陰の陣の大將天壽公主は、四方に喊の聲響くを聞て、急ぎ女兵共を引て相待ける處に、一丈靑兩刀を舞して顧大嫂等六人の頭領を引き、直に帳中に砍て入り、天壽公主鎗を撚て、一丈靑を相迎へ、僅三五合戰ひし處に、一丈靑透間を見て、天壽公主の左の脇へ突入り、遂に公主と引組で、馬より滾び落ち、上を下へと反覆す。王矮虎これを見て、忙しく跑來り、頓て天壽公主を生捉けり。顧大嫂、孫二娘各勇を振つて、女兵共を追散せり。孫新、張靑、蔡福等は、外面に在て夾で攻ければ、遼王の一族共盡く捉れ、共に索を懸たりけり。扨又玉麒麟盧俊義は、兵を引て

一丈青
天寿公主
を生捉
る

夜天火地火相交はり、殺氣天に滿て鬼神を哭しむ。宋の諸大將各功を爭うて攻戰ふ。此時兀顔統軍は獨中軍に在けるが、四下に喊の聲喧しきを聞て、急に甲を著し、已に打出んとせし處に、雷車はや中軍に至て、猛火熾に焚え、炮の聲は天地も崩るゝ斗なり。關勝一彪の兵を引て、帳前に至りしかば、兀顔統軍方天畫戟を撚て、關勝を相迎へ、各勇を奮て數十合戰ひしか共、雌雄いまだ決せざりける處に、沒羽箭張淸石を取て只管うちければ、兀顔統軍が副將共、石に中て疵を蒙り、皆々四方に逃走る。李應、柴進、宣贊、郝思文、各軍器を擧て遼の副將等を東西に追散せり。兀顔統軍は羽翼と賴たる副將共、はや逃失せて、左右にあらざれば、大に驚き、急に馬を回して、北の邊に逃はしる。關勝猶後に隨て禁しく追かけけり。かゝる處に、小李廣花榮、關勝が後に在て、兀顔統軍が迯るを見て、同じく馬を飛せ追來り、遂に弓箭を搭て、能拽漂と放ちけるに、其箭兀顔統軍が甲の鏡に中て火光をぞ散しける。花榮第二の箭を放んとせし處に、關勝已に赶上て、兀顔統軍が頭を砍る。兀顔統軍は三重の盔を戴き、三重の甲を著せしゆゑ、關勝靑龍刀を以て砍けれども、只二重を砍透して猶一重を透さざりしかば、兀顔統軍一命恙なく、再び馬を回して、關勝を相迎へ、又五六合戰ひける處に、花榮二の箭を取て放しかば、兀顔統軍は弦音を聞て、是を避け、急に馬を飛せて走り行く。

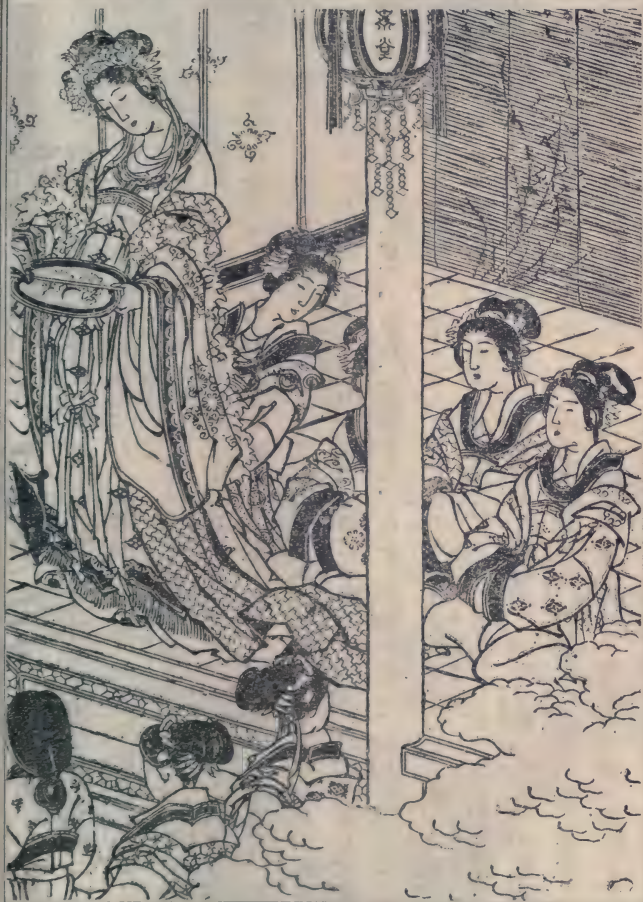
猶五方の旗號を立て勢を八面に分け、九宮八卦の陣勢を列ね、宋江すでに號令を傳へしかば、諸將各隊伍を列ね、遂に其日の暮に陣中を打出たり。䚟兀顔統軍は宋江が出て戰はざるを見て、略油斷して居たりける處に、宋江が人馬此夜已に陣勢を列ねて、敵陣に相對し、劍戟麻のごとく立並べて、嚴密の光景なり。此日は黄昏より、朔風凛々として、彤雲密々なりしかば、いまだ晩ざるさきより一天已に暗かりけり。宋江諸軍に觸て全く相圖を定めける。先四路の軍馬を分て、急に進發せしめ。只黄袍の軍馬を留て陣前に備へける。四路の人馬共は、遼の哨を追散し、直ちに北を望で砍て行く。二更の左側に至て、宋江が軍中に再三石砲を放ちしかば、呼延灼陣門を打開き、後軍に突て入り、直ちに火星の陣を打ち、關勝は中軍に突て入り、直に土星の陣を打ち、秦明は右軍に突て入り、直に金星の陣を打ち、林冲は左軍に突て入り、直に木星の陣を打ち、董平前軍に突て入り、直に水星の陣を打ち、公孫勝は陣中に在て劍を揮兕を念じ、法を行ひしかば、此夜は南風大に作り、石を走せ沙を飛せ、雷車一度に發す。李逵、樊瑞、鮑旭、項充、李衮等は二十四輛の雷車に火を放て、五百の勇兵を領し、直に敵の軍中に推入ける。一丈青扈三娘等は、兵を引て敵の太陰の陣中に打て入り、花和尚魯智深等は兵を引て敵の陣中に打て入り、玉麒麟、盧俊義は一彪の軍馬を引て雷車に隨ひ、敵の中軍に突て入る。此

し添ける。則徐寧、穆弘、黄信、孫立、楊春、陳達、楊林等の七將なり。又敵の金星の陣へは、霹靂火秦明に紅袍の軍馬を與へて發向せしめ、白旗の七門の内の敵兵を左右より討べしとて、又七人の副將を差添ける。乃ち劉唐、雷横、單廷珪、魏定國、周通、龔旺、丁得孫等の七將なり。又敵の火星の陣へは、雙鞭將呼延灼に黒袍の軍馬を與へて發向せしめ、紅旗の七門の内に備へたる敵兵を左右より衝べしとて、又七人の副將を差添ける。則楊志、索超、韓滔、彭玘、孔明、鄒淵、鄒潤等七將なり。敵の土星の陣へは、關勝に青袍の軍馬を與へて發向せしめ、中軍の黄旗の軍馬を左右より攻べしとて、又八人の副將を差添ける。則花榮、張清、李應、柴進、宣贊、郝思文、施恩、薛永等の八將なり。敵の太陽左軍の陣へは、七人の大將魯智深、武行者、楊雄、石秀、焦挺、湯隆、蔡福等に繡旗花袍の軍馬を與へ發向せしめ、同く左右より打しむ。敵の太陰右軍の陣へは、七人の大將扈三娘、顧大嫂、孫二娘、王英、孫新、張青、蔡慶等に、銀甲の軍馬を與へて發向せしめ、同じく左右より突しむ。遼王の中軍へは、六人の大將盧俊義、燕青、呂方、郭盛、解珍、解寶等に精兵を與へて、これを打しむ。又五人の大將李逵、樊瑞、鮑旭、項充、李袞等には、雷車を守らせて敵の中軍の内に入しむ。其餘の大將或は水軍の頭領共は、盡くみな陣前に至て助け戰ふ。共に力を併せて敵陣を破る。陣前に

先問て云く、軍師敵陣を破らん計ありや。呉用答て云く、未だ良計を得ず。宋江又云く、我已に九天玄女を夢みけるに、玄女良計を以て我に授け給へり、是に依て軍師と共に評議せんと欲し、今特々此處に迎へり、速に諸將を聚めて、手分を定めんとて、先夢中に於て九天玄女より授りし計を一々詳に語て、呉用等諸大將にも聞しめ、商議を決し、趙樞密が陣に使者を馳せ、今已に敵陣を破らん計を設けし間、雷車二十四輛を造らしめ給ひ、其内に火石火炮等を載給はるべしと、委細に云越しければ、趙樞密欣悦斜ならずして、二十四輛の雷車を二日の内に造らしめ、則火石火炮等を多く其内に載せ、宋江が陣中に送りしかば、宋江是を見て、心中に悦びけり。

○宋公明陣を破り功を成す

斯て宋江は、先敵の水星の陣を打しめんとて、雙鎗將董平に、黄袍の軍馬を與へて、皂旗の七門の内に備へたる敵兵を左右より攻べしとて、又七人の副將を差添ける。則ち朱同、史進、歐鵬、鄧飛、燕順、馬麟、穆春等の七將なり。又敵の木星の陣へは、豹子頭林冲に白袍の軍馬を與へて發向せしめ、青旗の七門の内に備へたる敵兵を左右より討べしとて、又七人の副將をさ

九天玄女宋公明に良計を授く

大將八人を以て、敵の紅旗の軍馬を討しむべし、是則水火に剋の義なり、又青袍の大將九人を以て、敵の中軍黄旗の軍馬を討しむべし、是則木土に剋の義なり、又二隊の人馬を選で、一隊は綉旗花袍を用ひしめ、敵の太陽の陣を打しむべし、一隊の人馬には素旗に銀甲を用ひしめ、敵太陰の陣を打しむべし、又二十四輛の雷車を造らしめ、上に火石火炮を放たせ、直に敵の中軍に亂れ入て、公孫勝に風雷天罡の正法を行はしめ、遥ちに遼王の駕前に斬入なば全き勝を取べし、白晝に兵を進んは不可なれば、夜に入て汝自ら中軍を掌り、號令を嚴にして、緊しく推寄ば、唯一鼓にして大功を立べし、我言必ず其驗有べき間、汝これを心中に收め、稀めにも退慢の心を起すことなかれ、我は天上に在り、汝は下界に在ゆゑ、宿縁已に限りあり、我今汝と永く別れ、他日瓊樓金闕に於て、重ねて參會せん、汝早く下界を立て、天上に回るべし、と懇に示し給ひければ、宋江再拜して恩を謝し、遂に別れを告て、殿を下りけるに、九天玄女自ら座を立給ひて、宋江を送り給ふ。彼青衣女童、又宋江を引て原の路に出で、已に石橋を過て、女童又路徑を指教へ、遼の兵は那邊に在間、將軍宜しく彼を破て功を立給へとて、宋江が脊を打ければ、宋江忽ち夢覺て、時を伺ふに已に四更の前後なり。宋江自ら奇異の思ひをなし、軍師吳用を請て夢の吉凶を問はんと欲し、頓て人を馳けるに、吳用早速帳中に至りしかば、宋江

持たまふ。兩邊には青衣の仙女二三十人相隨て左右に侍りける。玄女娘々宋江に對して曰ひけるは、我天書を將軍に授てより以來、數ヶ年を過せり、汝よく忠義を守て、少しも怠らざりし故、宋朝の天子汝が罪を赦し、遼の國を攻しむ、知ず近日戰の勝負はいかん。宋江地上に拜伏して奏しけるは、臣娘々の天書を授りしより以來は、益忠義を守て毛頭も邪の事をなさず、只諸豪傑と共に、天に替て道を行ひける處に、幸ひ天子の御免を蒙り、今勅命に依て遼の國を征伐し、早く四つの大郡を得しか共、遼の都統軍兀顔光に、混天象の陣を布れ、親方是を破ること能ず、數度打負け、臣今計盡て、死生存亡旦夕に測がたし。玄女娘々の云く、汝混天象の陣法を知りたるや。宋江再拜して奏しけるは、臣原來不能不才、いかんぞよく此陣法を知ん、伏して願くば、娘々廣く仁慈を垂給ひて、敎訓を惠み給へ。玄女娘々の曰く、此陣の法は聚陽の象なり、若只力を以て打ば、畢竟攻ること能ふまじ、遼の前軍皂旗の内に水星北方を司る、五炁辰星を設けり、汝が宋の軍中にも七人の大將を選み、黃旗黃甲黃馬を用ひしめて、皂旗七門の敵を打せ、又一人の猛將に黃袍を著せしめて水星を打しむべし、是則ち土水に剋の義なり、又白袍の大將八人を以て、敵の青旗の軍馬を討しむべし、是則金木に剋の義なり、又紅袍の大將八人を以て、敵の白旗の軍馬を討しむべし、是則火は金に剋の義なり、又皂袍の

く粉壁なり。其外色々の彫物有て善盡し美盡せり。女童遂に宋江を引て、左の廊下より内に入り、則ち宋江を此處に待しめて云けるは、將軍先心を寛げ、暫く待給へ、我少刻來らんとて、紙門の内に入にけり。宋江頭を擡て四方を見るに、其美麗なること、いかさま凡間の光景とは大に異なれり。女童又出て云けるは、娘々專ら待せ給ふ間、將軍早く來り給へとて、宋江を導き、紙門の内に進み入る。此時又兩人の女童向より來りしかば、宋江恠んで是を見るに、各頭には芙蓉碧玉冠を戴き、身に金縷絳綃衣を著し、面は滿月の如く、手は春筝に似たり。此兩女童は、宋江に對して禮をなしければ、宋江急に頭を垂て、再び女童が面を見ざりける。兩女童が云く、將軍何故甚だ慇懃なるや、娘々今將軍を請て、家國の大事を評議あらんとの御事なり、將軍急ぎ我に隨て來り給へ。宋江唯然として兩人の女童に隨ひ、内に入ける處に、殿中に金鐘の聲高く響て、玉磬の音深く鳴る、誠に尋常ならぬ光景なり。青衣の女童已に來り、宋江を請て殿上に昇しめ、直に延て珠簾の前に至りけり。此時又一人の仙女出て、宋江を簾中に迎ふ。宋江則簾中に入て、香案の前に跪き、暗に眼を擧て殿上を望み見るに、淨雲靄々として紫霧朦朧たり。正面の九龍床の上に九天玄女娘々坐し給ふ。頭には九龍飛鳳冠を戴き、身には七寶龍鳳絳綃衣を著し、腰には山河日月裙を繫び、足には雲霞珍珠履を穿き、手には無瑕白玉珪璋を

八編　卷之七十一

○宋公明夢に玄女の法を授る

宋の東京より勅命を蒙り、遠く遼の國に來りし王文斌あへなく戰死を遂しめ、殘懷淺からず、倘軍中に在て計議に苦み、宋江坐臥安んぜずして憂に逼り、此夜燭を秉て獨帳中に在けるが、疲の餘りにや、几に靠つて睡りける處に、夢の内に忽然として怪風起り、冷氣直に人を襲ふ。宋江怪で立出見るに、一人の青衣女童來り、宋江に向ひ恭しく禮をなす。宋江問て云く、女童は何れの處より來れるや。女童答て云く、娘々の命を奉つて將軍を相邀ふ、願くば將軍早く駕を移し給へ。宋江云く、娘々は何處に居給ふや。女童が云く、娘々居給ふ處は、此より僅二三里を隔ぬ。宋江是を聞て、遂に女童に從ひ、共に帳中を出て四下を見るに、天氣明朗として風色清涼たり。誠に初春の時節と相同じ。漸二三里ばかり行し處に、一つの大林あり。青松茂盛にして翠柏森然たり。紫桂亭々として、石欄隱々たり。兩邊は都て竹柳桃等の樹木殊更密々にして、又曲折の欄杆あり。宋江已に石橋を過て、此所を見るに、朱紅の門あつて、盡

告有て、敵陣混天象の備を、打破るべき教を示さるゝより、大合戰宋江勝軍の次第、八編の初に委し。

按ずるに此卷、遼の大將に皇姪とあるは、國王の兄弟の男子なり。侄姪の字ををひとよむなり。王のをひ故皇の字を加ふ。日本には甥姪と雖も、甥は婿なり。孟子に、甥を二室に館すと云にて知るべし。又冠山子の譯本と云通俗水滸傳に、此卷混天象の陣を布處に、蒼龍本星とは木星の誤なり。又東北を守る將に紫炁氣と同じ星を炁と旡と見損じ、紫無星と書しは餘りの誤なり。西北を守る將に、月孛星と書べきを、月専生と有り。此處は天象の表示にて、凡木星、火星、土星、金星、水星を五緯の星と云ふ、鎭星は則土星なり。又羅喉、計都、紫炁、月孛を四餘と云ふ、天文の書に明細なり。冠山子何ぞ斯不學の人ならん。冠山子の名を假り、斯る醜をなす事、一部の内諸所に多し。又十一曜大將には、日月五星四餘星を配し十一なり。二十八宿將軍の連名は、舶來百回本の八十七回に出る處を此卷に抄出す。角木蛟孫忠とは、二十八宿の角星は五行木に屬し、生類蛟を配す。軫水蚓班古兒とは、軫宿は水に屬し、生類蚓を配す。下に人の姓名首尾を以て例して知るべし。

く人馬を進めて打しめん、とぞ議しにける。王文斌、未だ此陣を知らざりしか共、諸人の前にて、已が智謀有ことを現して、譽を取んと欲し、只知りたる體にもてなしける。王文斌、已に前軍に下知して、攻鼓を鳴さしめ、頻に戰を挑せしかば、敵兵も同じく攻鼓を打せ、喊の聲を合せ、天地も崩るゝ許なり。宋江大音聲に呼はりけるは、遼の陣中に勇士あらば、早く出て鋒を交へんやと、未だ云も終らざるに、黒旗第四門の内より一人の猛將馬を躍せ、刀を舞して、陣前に馳出る。相從ふ副將共は其數を知るべからず。旗號の上に大將曲利出清と、銀字を以て明かに書付たり。王文斌是を見て、心中に想ひけるは、我若此處にて武勇を現さずんば、一生の誤ならんとて、鎗を撚り馬を飛せて、陣前に跑出で、遂に曲利出清と鋒を交へて、二十餘合戰ひけるが、曲利出清、益精神を揮て、王文斌を馬より下に砍て落し、頓て頭を刎にけり。宋江是を見て、急に退かんとせし處に、曲利出清緊しく追來り、又一陣を破て、勢鐵石の如くなり。宋江等は本陣に逃回りて、王文斌が討れたることを憂へ、早速文書を修へ、趙樞密に斯と告ければ、趙樞密此事を聞て、甚だ驚き、卽日表を以て王文斌が討死の由、都に申越し、彼從て來りし兵共は、都て東京に回しけり。扨宋江は倘軍中に在て、一向計を議しけれ共、未だ行はん計只一つもあらざりしかば、坐臥安んぜず、疲れに假睡けるに、九天玄女夢の

衣服等を、宋江が陣中に送り、諸軍勢に與へんと議しければ、趙樞密、先使者を以て此ことを宋江に告知らしむ。宋江此消息を聞て、悅び斜ならず、則人を馳て王文斌を軍中に迎へ、美美しく宴を具て慇懃に管待けり。王文斌、先戰のことを問しかば、宋江答て云く、某朝廷の勅命を奉りて、此處に至り、天子の幸福を托んで、四つの大郡を攻取り、今已に幽州に至りける處に、兀顏統軍混天象の陣を列ね、二十萬の大軍を備へ、遼王を請て自ら出御ならしめける故、某數陣を破られて、多く人馬を失ひ、暫く先戰を息て、空しく陣を守るのみにして、更に計あらず、今日將軍の來臨を蒙りけるこそ、萬千の幸なれ、願くば朝廷の爲に、敎を某に惠み給へ。王文斌が云く、混天象の陣の如き、何ぞ奇とするに足らんや、某不才たりといへ共、共に軍前に至て敵陣を一覽し、其後又別に良計を商議せん。宋江聞て大に悅び、先裴宣に命じて、御賜の衣服等を諸軍勢に分ち與へ、衆皆南を望で、天子の聖恩を謝し奉つり、此日は終日飲宴を催しける。翌日王文斌、全身に衣甲を著し、戰馬に乗り、諸將と共に陣前に討出しかば、遼の兵是れを見て、急ぎ中軍に報じ、先六隊の哨を出し、宋の兵を伺はしむ。宋江人馬を分つて、遂に此六隊の兵を追散せり。王文斌は自ら臺の上に登て、稍久しく敵陣を打望み、則宋江に對して云けるは、敵の陣勢たゞ尋常の陣にして、驚くに足らず、宜し

陣に逃かへれり。此時討れたる兵、其數を知べからず。宋江三軍に命じ、濠を掘せ柵を設しめ、山口の陣を堅固に守らせ、春の至るを待て、再び戰はんとぞ圖りける。趙樞密は表を調へ、使者を都に遣し、諸軍勢の衣服等を求めけるに依て、此度朝廷より、鄭州の團練使王文斌に、東京八十萬禁軍敎頭一人を相添て、衣服等の物を宋江が陣中に送らしめ給ふ。抑此王文斌と申者は、文武兼全く、智勇足備り、原來有名の良將なり。此時王文斌、勅命を奉つて、一萬餘人を領し、二百輛の車に衣服を載て、これを民夫に推せ、東京を發足して、只顧急ぎければ、不日に邊庭に到て、趙樞密にまみえ、則公文を呈し、勅命の趣述ければ、趙樞密是を聞て、大に悅び、王將軍來り給ふこと、莫大の幸なり、今宋先鋒、遼の兀顏統軍が軍に數陣を破られ、帶傷の者甚だ多し、此故に宋先鋒先戰を息て、永淸縣の邊に陣を列ね、諸將都て憂に逼るのみ。王文斌が云く、朝廷今某を遣したまひて、諸軍に催促し、早く勝を取ん事を圖らしめ給ふ、然るに數度敗北に及び、某豈都に回て、此ことを奏聞せんや、我不才たりといへども、幼き時より、頗る兵書を讀で、略陣法を曉せり、先軍前に至て試に計を施し、宋先鋒の爲に、敢て憂を分つべし、知ず相公の尊意はいかん。趙樞密是を聞て、大に悅び、早速酒宴を設て、王文斌を饗應し、幷に諸の軍兵共にも、酒肉を以て賞しけり。王文斌彼二百輛に載し

目前の大軍に傴み、宋江再び諸將と議して云けるは、遼の勢浩大にして、彼を破ん計あらず、我深くこれを憂て、日を度ること年のごとし、いかなる計略を以てか、敵を退けんや、諸將もし計あらば、速に語り給へ。時に呼延灼すゝみ出て云けるは、我們明日十隊の軍馬を分ち、兩路より發向し、快く一戰を決すべし。宋江が云く、我元來諸將の力のみを賴みとす、必ず心血を盡して戰ひ給へとて、已に其議に同じける處に、吳用これを諫て云く、我兵已に兩度まで、敵を打んと欲して自ら破れを取れり、しかじ先堅固に陣を守り、敵の寄るを待て、一戰をなし給へ、若頻りに親方より、敵を打んと圖らば、却て過ち有べし。宋江が云く、敵の寄るを待て一戰せんには、親方必ず氣を飲れて、勝利を得んこと難からん、諸將皆力を併て、敵陣を攻んに、何ぞ只顧負ることのみあらんや、軍師必ず心を安じ給へとて、卽時に三軍に號令を傳へ、用意を調へしめ、翌日兵を十隊に備へて、兩路より推寄せ、直に混天象の陣中に突て入り、喊き叫んで攻戰ふ。かゝる處に砲の聲、陣中に起り、四七二十八門一度に分れ開て、忽ち長蛇の陣に變じ、遼の兵盡く皆機に乘じて、一同に砍て出で、宋の兵をさんぐに撃しかば、宋江が人馬共は、手を措に及ず、大に敗れて、東西に奔走し、這々の體にて、本

議に服しける。宋江翌日、兀顏統軍が陣中に使者を馳ければ、兀顏統軍自ら使者に對面して、來意を問ける處に、使者答て云く、宋先鋒申けるは、即今天氣甚だ寒冷なる間、先戰を罷て、來春再び勝負を決し候はん、願くは統軍、此節は先軍を收め引退き給へ、然らば兀顏小將軍を送り、李逵に換んとの事なり。兀顏統軍是を聞て、大に怒り、我悴自ら拙うして宋江に生捉れ、たとひ一命を脱れたり共、何の面目有て主君に見えんや、我曾て悴がことは念はず、汝若悴を殺さば我又李逵を殺すべし、宋江果して、戰を止んと欲はゞ、自ら我帳前に來て降參せよ、然らば我肯て一命を饒すべし、若然らずんば、我今大軍を引て、立處に踏潰し、宋江等百八人の輩一々活捕て首を刎落さん、汝速に回て此由を申せとて、高聲に罵りしかば、使者大に驚き立歸り、兀顏統軍が返答を、委細宋江に告けるに、宋江是を聞いて、心中に慌て、已に斯あらば、和睦の沙汰は先閣て、唯兀顏小將軍を以て李逵に換んとて、即時兀顏小將軍を軍中に携て、陣屋を打出で、直に敵陣に近付き、大音聲に呼はらせけるは、我今兀顏小將軍を送り還すべし、早く李逵を以て、是に引換候へ、然後雌雄を決すべし。兀顏統軍、此言を聞て、早速李逵を陣前に送り出しければ、宋江が方よりも、兀顏小將軍を渡し、互に取替し、各陣中に馳入けり。此日は兩軍先戰をなさずして、相引に引退き、共に悅ぶこと限なし。然り

宋遼互に陣前に生捉を取換ふ

龍

を皆後陣に送て、安道全に療治をなさしめ、然して後に、又吳用と商議して云けるは、今日の戰にも、又親方打負て、兵多く討取れ、剰へ李逵を生捉れたり、軍師いかなる計を以て、李逵を救ひ候はんや。吳用が云く、前日我陣に兀顏統軍が愛子を活捕しかば、幸ひ今これを以て、李逵に換ん。宋江が云く、今縱ひ彼を以て李逵に換たり共、此後又誰にても活捉れなば、何を以て救はんや。吳用が云く、宋君は何故自ら迷ひ給ひて、現在のことを忘れ、未來のことを料り給ふや、先李逵を救はんことこそ肝要なれと、未だ云も終らざるに、遼の使者至れりと告ければ、宋江頓て使者を呼で對面しける處に、使者宋江に對して云けるは、某此處に來ること別儀にあらず、今日の戰に宋將軍の幕下なる、大將黑旋風李逵を生捉しか共、兀顏統軍敢てこれを殺さず、懇に酒食を以て饗應す、兀顏統軍の一子、今已に擒と成て將軍の陣中に有り、若これを以て李逵に換給はゞ、早速李逵を將軍の帳前に送るべし。宋江是を聞て答へけるは、已にかくのごとくば、我明日兀顏統軍の愛子を陣前に送り出し候はん、足下も又李逵を陣前に送り出し、互に取替し給へとて、已に約を定めしかば、使者は遂に回りけり。宋江再たび吳用と商議して云けるは、我們已に敵を破るの計なし、しかじ先兀顏統軍が愛子に托て、和睦のことを云遣し、暫く戰を罷て、他日又良計を施さば可ならんか。吳用是を聞て、其

出て戰はずんば、彼必ず推寄て、我陣を打べし、諸將もし良計あらば、速に云給へ。盧俊義進み出て云けるは、明日軍馬を發して、手痛く攻戰ひ、豫じめ敵陣の虚實を伺ひ、其後又計を行はゞ可ならんか。宋江聞て此議に同じ、已にかくのごとくば、盧俊義の高論に從はんとて、翌日三軍を引て、本陣に打出で、直ちに遼の陣を望んで攻來る。漸く近く至りしかば、宋江先關勝、呼延灼に兵を與へて、敵の前軍を打しめ、自らは總勢を引て、遼の大軍を相迎ふ。宋江、又花榮、秦明、董平、楊志等を以て、左に備へ、林冲、徐寧、索超、朱同等を以て、右に備へ、敵軍皁旗の七門を打しめけり。皁旗の陣勢果して破られ、諸軍都て奔走す。宋江が陣中より、この體を見て、李逵、樊瑞、鮑旭、項充、李袞、五百の兵を引具し砍て出る。其次に又魯智深、武行者、楊雄、石秀、解珍、解寶、手下の兵を引て攻來り、直ちに敵陣の內に突入て、喊き叫び相戰ふ。斯處に砲の響四方に起て、黃旗の敵軍、地を蓋て圍み來る。宋江が人馬これに敵すること能ず、急に引退く。遼の大軍勢に乘て緊く追擊したりしかば、宋の軍馬大に亂れ、我殿れじと本陣に逃回る。此時雜兵過半討れ、杜遷、宋萬重傷を被り、只這々の體なりけり。こゝに又黑旋風李逵は、親方の敗北したるを見て、大に怒り、只獨敵軍の內に砍て入り、敵餘多討取けれ共、遂に大勢に生捉たり。宋江此消息を聞て、大に憂ひ、先帶傷の頭領等

薛雄、婁金狗阿哩義、鬼金羊玉景、此四人を太白金星烏利可安に隨はしめて、宋江が陣を討せんとて、已に商議を定めける。宋江が陣中の諸大將は、敵陣の右軍に備へたる、七つの旗門、あるひは開け、あるひは閉ぢ、中軍に鼓を鳴し、那引軍旗、只管搖動して、東より北に轉り、北より西に轉り、西より南に轉るを見て、各怪みける處に、朱武これを見て云けるは、我敵陣の虛實を考るに、今一向引軍旗を以て、東西南北に轉るは、是則天盤左旋の象なり、今日は金に屬したるゆゑ、此のごとく天盤左旋の象をなす、必ず敵來て、我陣を打こと有べし、と未だ云も終らざるに、敵陣の內より大砲を放て、早くも一彪の軍馬突出で、一度に咄と喊の聲をあげ、緊しく攻來る。其勢は、山を倒すがごとくなり。宋江が人馬、手を措に及ばず、後を望で急に引退んとせし處に、遼の大勢左右より取圍んで、散々に攻ければ、宋江が兵大に亂れ、一度に奔走して、本陣に逃回る。遼の兵敢て長追ひせず、先兵を收めけり。宋江已に本陣に回て、諸將を査め見るに、孔亮は刀疵を蒙り、李雲は矢疵を蒙り、朱富は砲疵を蒙り、石勇は鎗疵を蒙りける。其外帶傷死人は其數を知べからず。宋江先三軍に號令を傳へ、陣を堅固に守らしめ、自ら中軍に在て、心中に憂へ、則ち盧俊義等と商議して云けるは、今日の合戰に一陣を破られ、多く人馬を傷ひ、今更計を施すべき樣これあらず、然れども、再び

して、相貌堂々たり。諸々の力士共前後左右に圍で、中軍の內に、遼の大王自ら坐せり。其裝束は頭に衝天唐巾を戴き、身に九龍黃袍を著し、腰に藍田玉帶を繫び、足に朱履朝靴を穿き、尤華やかなる光景なり。其左右には兩人の大臣有り、一人は左丞相幽西孛瑾、一人は右丞相大師諸堅、各々頭には貂蟬冠を戴き、身には火裙の服を著し、共に善盡せり。龍床の兩邊には、金童玉女簡を執り、珪を捧ぐ。龍車の前後には、勇將猛兵御馬を護て遼王に供奉す。又遼王已に三軍を領して、はや昌平縣の邊に至り、嚴密に陣勢を列ねて、諸軍勢を屯し、四面八方に劒戟を建竝べ、防を堅固に備へ、循環進退殊更神妙なり。扨宋江は吳用、朱武、兩人を引て臺の上に上り、遙に敵陣を望みて、宋江大に驚き、敵の陣勢はいか樣名陣と覺えて、循環進退究て立妙なり、曾て此陣を知り給ふやと、吳用に問けれ共、吳用も又これを知らざりし處に、朱武此陣法を知て、宋江に告けるは、此則ち太乙混天象の陣なり。宋江が云く、いかなる計を以て彼陣を討んや。朱武が云く、彼陣は無邊無窮に變化する故、等閑に討がたし。宋江が云く、若彼陣を打破らずんば、いかんぞ能敵を退けんや。吳用が云く、彼が陣內の虛實を知らずしては、卒爾に討んこと難かるべしとて、評議區々にして、未だ一決せざりけり。扨彼兀顏統軍は、諸將に對し云けるは、今日は金に屬せし間、亢金龍張起、牛金牛

遼の大軍混天の陣を布く

領し、總て七門の下に備たる軍勢は、其數を知べからず。後軍の一隊は盡く紅旗を持せ、七つの旗門を設け、毎門に千疋の馬あり、各一人の大將あり。其裝束は皆紅色を用て、一樣の軍器を持り。七門の内に一人の總大將あり、是則朱雀火星洞仙文榮なり。其裝束究て嚴にして、三千の兵を領せり。總て七門の下に備へたる軍勢は、其數を知べからず。前軍の左に又一隊の雄兵五千を設けたり。此大將は則ち、太陽星弟大王耶律得重なり。其裝束の嚴なること、言語に盡じがたし。前軍の右に又一隊の女兵五千を設けり。此大將は乃ち、太陰星天壽公主答里孛なり。其裝束の嚴なること言語に盡しがたし。陣前の中央に又一隊の軍馬を設たり。都て黄旗を用ひて、四人の大將あり。各三千の兵を領し、四角に相分れ、一人は東南を守る。是則羅喉星皇姪耶律得榮なり。其裝束は青袍金甲を著し、名馬に乘れり。一人は西南を守る。是則計都星皇姪耶律得華なり。其裝束は紫袍銀甲を著して、良馬に乘れり。一人は東北を守る。是則紫器星皇姪耶律得忠なり。其裝束は綠袍銀甲を著し、名馬に乘れり。一人は西北を守る。是則月孛星皇姪耶律得信なり。其裝束は白袍銀甲を著し、良馬に乘れり。黄旗の内に又一人の上將あり、是則中央鎭星都統軍兀顏光なり。其裝束は頭に七寶紫金巾を戴き、身に黄金亀背甲を著し、手に長柄の鎗を撚て、駿馬に乘り、威風凜々と

柳土獐雷春　鬼金羊王景　童里合　井木犴　周豹　參水猿
軫水蚓班古兒　翼火蛇狄聖　李復　張月鹿　卞君保　星日馬

檀州の洞仙侍郎が部下にて、前に生捉し何里奇と、こゝに出たるとは、文字も差ひ別人なり、紛らはしき故こゝにことわる。

良久しうして後、遼兵攻鼓を打せ寄來る。前面に六隊の人馬あつて、諸將を導く、其循環往來極て自由なり。其跡より二十餘萬の大軍、地を蓋て進み來る。前軍の一隊は、盡く皁旗を持せ、七つの旗門を設け、毎門に千疋の馬有て、各一人の大將有り。其裝束は皆黑色を用ひ一樣の軍器を持り。七門の内に又一人の總大將有り。是則玄武水星曲利出淸なり。其裝束極ておごそかにして、三千の兵を領せり。七門の下に備へたる軍勢は、其數を知るべからず。左軍の一隊は、盡く青旗を持せ、七つの旗門を設け、毎門に千疋の馬有て、各一人の大將あり。其裝束は皆青色を用ひて、一樣の軍器を持り。七門の内に、又一人の總大將あり、是則蒼龍木星只兒拂郎なり。其裝束極めて嚴にして、三千の兵を領せり。總じて七門の下に備へたる軍勢は、其數を知べからず。右軍の一隊は、盡く白旗を持せ、七つの旗門を設け、毎門に千疋の馬あり、各一人の大將あり。其裝束は皆白色を用ひ、一樣の軍器を持り。七門の内に又一人の總大將あり、是則咸池金星烏利可安なり。其裝束究めて嚴にして、三千の兵を

計都星　皇姪耶律得華、雄兵三千を領す。
紫炁星　皇姪耶律得忠、雄兵三千を領す。
月孛星　皇姪耶律得信、雄兵三千を領す。
東方　青帝　木星　大將只兒拂郞、兵三千を引く。
西方　太白　金星　大將烏利可安、兵三千を引く。
南方　熒惑　火星　大將洞仙文榮、兵三千を引く。
北方　玄武　水星　大將曲利出淸、兵三千を引く。
中央　鎭星　土星　上將都統軍兀顏光、各飛兵馬首將五千を統領して中壇を鎭守す。兀顏光が部下に、二十八宿將軍有り。

角木蛟　孫　忠　亢金龍　張　起　氐土貉　劉　仁　房日兎　謝　武
心月狐　裴　直　尾火虎　顧永興　箕水豹　賈　茂　斗木獬　蕭大觀
牛金牛　薛　雄　女土蝠　兪得成　虛日鼠　徐　威　危月燕　李　益
室火猪　祖　興　壁水㺄　成珠那海　奎木狼　郭永昌　婁金狗　阿哩義
胃土雉　高　彪　昴日雞　順受高　畢月烏　國永泰　觜火猴　潘　異

共、何ぞ能我陣を破んや。宋江是を聞て、其議に從ひ、卽時に三軍に號令を傳へて用意を催しけり。翌日五更の一點に、宋の兵悉く陣を拂て打出で、直に昌平縣の界に至て、陣勢を列ねける。霹靂火秦明は前に備へ、雙鞭將呼延灼は後に備ふ。大刀關勝は左に備へ、豹子頭林冲は右に備へ、急先鋒索超は東南に備へ、金鎗手徐寧は東北に備へ、雙鎗將董平は西南に備へ、靑面獸楊志は西北に備ふ。宋江中軍を守り、其餘の諸將は各其職に依て相守る。後面に又步軍を以て一陣を設けたり。盧俊義、魯智深、武行者、此三人を首として、數萬の精兵を備へ、拳を磨き、掌を擦て、敵の至るを待蒐けり。

○顏統軍陣に混天の象を列ぬ

遼國の都統軍兀顏光、出軍の手配をなさんとて、諸大將を集め、兵を分て其備を議定する。諸將の高名なる族には、先十一曜の大將有り。

太陽星　御弟大王耶律得重、兵五千を領す。

太陰星　天壽公主答里孛女、兵五千を領す。公主とは國王のむすめの事なり。

羅喉星　皇姪耶律得榮、雄兵三千を領す。姪とは日本に云ふをひの事なり。

李金吾これを見て、恨骨髓に徹し、只一騎鎗を撚て、延壽を奪ひ復さんと跑來る。宋の軍中より、霹靂火秦明、狼牙棒を輪し、李金吾を相迎へ、各精神を揮て數合戰ひける處に、李金吾漸〻氣力疲れ、遂に秦明に頭を打碎れて、馬より下に落にけり。太眞駙馬これを見て、勝がたくや思ひけん、急に兵を引て逃走る。宋江三軍に下知して、追打したりしかば、遼の兵大に亂れ、右往左往に逃散けり。此時宋の兵共は、敵の戰馬三千餘疋を得、其外甲盔、旗兵粮等を得たる、其數を知べからず。宋江又勝に乘じて、三軍を進め、直に燕京を望みて推寄る。此時宋江は高き處に上て、遼の勢を打のぞみ、大に慌て本陣に回り、先兵を退くべしとて、則三軍を引き、直に永淸縣の口に來て、陣勢を列ね、盧俊義、吳用、公孫勝等と商議して云けるは、今日の戰に勝利を得たるといへども、敵猶大勢を以て攻來る、明日も必ず又彼と戰ふべし、恐らくは、小勢を以て、大勢に敵せば、其利を得んこと難からん、知らずいかなる計を施して大敵に當らんや。吳用が云く、古の善兵を用ふる人は、小勢を以て大勢に敵せり、當初晉の謝玄は五萬の人馬を以て、符堅が百萬の雄兵を退けたり、其外小勢を以て、大勢に勝たる人儘多し、何ぞ必ずしも敵の大勢を恐れんや、先三軍に號令を傳へ、豫じめ嚴密に備を設け、又九宮八卦の陣を列ぬべし、敵若來て陣を打ば、其機に依て計を行はん、彼縱ひ百萬の勢有といふ

○呼延灼力蕃將を擒にす

斯る處に一人の大將現れ出で、大音聲に呼て云けるは、黄口の孺子、汝何れに逃んとするや。兀顏延壽これを聞き、大に怒り、鎗を撚て戰んとせし處に、彼大將鐵の鞭を擧て、眉間を望で打て蒐る。兀顏延壽原來眼明かにして、手快き勇士なれば、早くも鎗を以て閣住め、猶働かんとしけれ共、彼大將又二つの鞭を一同に揮て、鎗の柄を打折しかば、兀顏延壽これを見て、牙を嚙み、急に腰刀を拔んとせし處に、彼大將直に進み入て、兀顏延壽を脇の下に挾み、遂に索を掛にけり。此大將は則雙鞭將呼延灼なり。兀顏延壽が兵共、逃出べき路もあらざりしかば、悉く皆馬を下て降參せり。既に今陣中に水火竝び起て、人目を迷せけるは、是皆公孫勝が法を行ひしに因てなり。公孫勝敵の敗れたるを見て、法術を收ければ、陣中忽ち靜つて、再び青天白日なり。此時太眞駙馬と李金吾は、各一千の軍馬を引て、兀顏延壽が消息を待て居けれ共、未だ何等の音耗もあらざりしかば、只馬を勒へて敵陣を望ける處に、宋江陣前に馳出て、高聲に呼りけるは、汝兩人早く馬を下て降參せよ、兀顏延壽は、はや我手に生捉れて玆にあり、汝等よくこれを見よとて、則兀顏延壽を、高手小手に縛て、陣前に引せければ、

陣門を開て戦を挑みける。兀顔延壽名馬に乘り、躍り出で、二十餘人の副將を引て、一千餘騎の馬軍を領せり。當日は火に屬しければとて、正南より進ずして、西方より推寄せ、白旗を風に飜へして、宋の陣に突入り、直に中軍に至て、此處を見るに、銀墻鐵壁の如き者、團々として四方を圍みければ、兀顔延壽大いにおどろき、心中に思ひけるは、陣中に何ぞ此のごとき城を得んや、先四面を打破て陣外に出べしとて、諸將と共に、馬を勒へて後を顧るに、滿地すべて水聲の響のみ聞えて、更に路なし。兀顔延壽彌驚き、兵を引て南門の方に來りけるに、猛火盛に起て、黑煙眼を遮りしかば、延壽又引回して、東門の方に至りけるに、滿地都て大木大石路を塞て出べき樣なかりしかば、延壽直に轉て北門の邊に來りし處に、黑氣天を遮て烏雲日を蔽ひ、只暗々として、獄中に在が如くなりしかば、兀顔延壽進退こゝに究り、獨心中に想ひけるは、宋江が軍中に妖法を行ふ者在に疑なし、任他一方を打破て出べしとて、諸軍とともに、喚き叫で砍て出けり。

公孫勝兀顔延寿を悩

せり。朱武是を見て、呉用に語て云けるは、此陣は乃武侯八陣の圖なり、人皆是を知ず、先宋先鋒を請て、能此陣を見せしめんと、則宋江を臺の上に迎へけるに、宋江此陣を見て、奇異の思ひをなす。朱武が云く、彼が此陣法を知る事甚だ以て不思議なり、是等の陣法は皆一家相傳の祕法にして、外に傳へざる處なり、初め太乙三才の陣を列ねて、河洛四象に變じ、四象又循環八卦に變じ、八卦又八々六十四卦に變じて、此八陣の圖を列ねしは、循環自由なるが故なり、是等は都て神妙の陣法なれば、必ず彼を輕く覷給ふことなかれ。宋江委細聞て、再び陣前に馳出けるに、兀顏延壽鎗を横へ呼りけるは、宋江汝此陣を知りたるや。宋江罵て云く、汝黄口の孺子、只此等の陣法を知のみにして、焉ぞ我に敵せんや、此陣は則ち八陣の圖、我軍中の雜兵も又能是等の陣法を知りたるなり。兀顏延壽が云く、汝已に我陣法を知りたる上は、汝も又珍しき陣法を列ね我に見せしめんや。宋江が云く、我此九宮八卦の陣は人々皆曉し珍しからずといへども、敵に破れざるの妙あり、汝敢て此陣を打んや。兀顏延壽大に笑て云く、是等の小陣を破らんこと、甚だ易し、我今立處に陣を討んに、心ず流箭を射さしむることなれかとて、早速號令を傳へて、太眞駙馬、李金吾に各一千の軍馬を發せしめ、救應をなさせ、頓て三軍に下知して、頻りに攻鼓を擂しめけり。宋江も又三軍に號令を傳へて、金鼓を鳴さしめ、已に

法を知て、宋江に告けるは、彼陣は則太乙三才の陣なり、未だ奇とするに足ず。宋江是を聞て、呉用を臺の上に留め、自ら朱武と共に梯子を下り、陣前に馳出で、則鞭を擧げ、大に罵りけるは、遼の敗將汝が此太乙三才の陣、何ぞ奇とするに足らん、我國の孩子等は、よく這等の陣を知たるなり。兀顏延壽又呼て云く、汝既に此陣を知りたるは奇特なり、我又陣法を變じて、汝に見せんに、汝よく是を知れとて、再び陣中に馳入り、自ら旗號を把て、左右を招きければ、陣法忽ち變り、別に又陣勢を改めけり。朱武見て、河洛四象の陣なりと、宋江に告知する處に、兀顏延壽再び陣前に出で、高聲に問けるは、宋江汝此陣を知たるや。宋江答て、河洛四象の陣を知らざる者、遼國には有もやせん、大宋國には孩子も知れり。兀顏延壽頭を掉て、又陣中に入り、旗號を以て左右を招ば、陣法忽然と變じけり。呉用忽ち、循環八卦の陣なりと、宋江に知せたり。延壽陣前に出問けるは、汝能此陣を知けるや。宋江冷笑て、これは循環八卦の陣なり、汝いくばくの陣を布とも、我陣に曉さざる者一人もなければ、陣を布ことを止よ。延壽是を聞て、心中に想ひけるは、我此數陣は皆祕傳の陣法にて、等閑の曉す處ならぬに、彼悉く是を知るは、宋の陣中必ず好軍師有に究れり、我今一度陣を變じ試んと、旗號を把て、東西南北を招きければ、忽ち又變じ一陣を列ね、四方皆門路無して、其内に八々六十四隊の軍馬を藏

こと却て易し、恰も四邊に阱を造るがごとし、自ら陥て死すべし、又敵將謀なきの士ならば、久しく留て戰をなすことを得ず、自然と退くことあらん。宋江聞て此議に隨ひ、則一彪の人馬を城外に遣し、城を去こと十里にして、方山と云處に至て屯し、九宮八卦の陣を列しめて、敵の至るを待せけり。遼の兵は三手に分て寄來る。兀顔延壽が人馬は、皂旗を持せ、太眞駙馬が人馬は、紅旗を持せ、李金吾が人馬は、青旗を持せ、三軍ひとしく方山の邊に來りて、陣勢を相對す。彼兀顔延壽は、幼き時より、父に從ひて陣法を學び、深く玄妙を知けるが、今宋江が人馬、九宮八卦の陣を張たるを見て、太眞駙馬が人馬を左に備へ、李金吾が人馬を右に備へ、己が人馬を中に備へ、又梯子に上て、宋の陣を良久しく打望み、獨自ら冷笑て、梯子を下りければ、左右の副將等問て云く、將軍何故冷笑ひ給ふや。兀顔延壽が云く、敵今九宮八卦の陣を列ねて、人を欺んとすること、甚だ以て笑ふべし、我なんぞ那陣を知らざらんや、我先宋江を驚しめんとて、三軍を左右に列ね、祕傳の陣勢を張り、自ら馬を飛せ、陣前に跑出で、則大音聲に呼て云けるは、宋江汝九宮八卦の陣を張て、誰を欺んと欲や、汝又能く我此陣勢を知りたりや、否や。宋江是を聞て、早速吳用、朱武兩人と共に梯子に上て、敵の陣勢を望見るに、三隊相連て、左右に相顧み、尤尋常ならず覺る陣法なり。朱武早くも此の陣

て、諸將を集め、共に商議して、諸路の人馬を求めしむ。兀顔都統軍が嫡子兀顔延壽、父に告て云けるは、大人父を稱する語は自ら大軍を催し給へ、某は先數人の猛將を引き、太眞駙馬、李金吾、此兩所の軍馬に會合して、幽州に推寄せ、宋江等を散々に打べし、然らば大人至り給ふ時は、宋江等已に疲れ、只一鼓に破られ擒とならん事、何の疑かあらん。兀顔都統軍これを聞て、其議に同じ、則軍馬五千、歩軍二萬、是を兀顔延壽に分與へ、先陣と定めければ、延壽甚だ悅び、遂に三軍を引て、太眞駙馬、李金吾等の二將に會合し、士卒を合せみるに、すべて三萬五千の人馬を得たり。延壽大に悅び、吏將下に立つ大將分をして、軍中を轉檢し、鎗刀弓箭の等を整しむるに、一たび令を下して、兵器完く備る。こゝに於て、延壽二將と共に、三軍を領し、燕京を打出で、昂々として幽州を望で進發し、はや近々と寄來る。宋の軍中より、前に探子を入置たれば、早くも馳來て、宋江に告ける故、此音信を聞き、便吳用に請議て云けるは、已に遼兵と戰ふ事數度、遼兵皆敗を取れり、此度又寄來て、我軍を伐んとす、是必定彼手下の精兵を選み、猛將死を輕んじ、戰を事とする者多からん、軍師これに當るに、いかなる計を以て彼を退け給はんや。吳用答て云く、先一彪の人馬を催し、城外に遣し、一の陣法を布き、敵兵の至るを待て、慢々に戰を挑しむべし、敵兵若豪强にして、步戰を好み、力量を主とせば、是を計ん

遼の兀顔光大元帥の命を承

去來此處を落行んとて、三軍に下知して、紅旗を山の後に引取せ、則諸將と共に、急々に逃走る。李金吾は猶戰て在けるが、親方の紅旗、はや見えざりしかば、忽ち心中に駭き、同じく山の背後に引退く。宋江は敵敗北したるを見て、大に悅び、自ら三軍を領して、幽州城に馳入り、先懇に百姓を撫て、軍馬を屯し、早速使者を檀州に馳て、趙樞密を薊州に移らしめ、水軍の頭領等は皆幽州に至て、共に敵を攻べしと云越し、又副先鋒盧俊義には、兵を分て覇州城を守らしむ。趙樞密は、親方勝利を得たると聞て、大に悅び、卽日表を修て、朝廷に奏しける。扨彼遼王は此日寶殿に坐し、左丞相幽西索璝、右丞相大師諸堅、幷に統軍の諸大將等、悉く集めて議しけるは、宋江已に我大郡四箇所を奪ひ、今又幽州を取しとなれば、彼必勝に乘じ、我此燕京を攻べし、況や賀統軍兄弟三人、都て討死し、親方の兵過半逃散て、勢已に微なり、汝等文武の群臣、何等の計の一を以て宋江を退けんや。時に都統軍兀顏光、列を出て奏しけるは、我君必ず憂ひ給ふことなかれ、臣先に自ら發向せんと欲しけれ共、賀統軍に阻てられ、却て敵に勝を取しめ、殆大事に及べり、願くは、臣諸路の軍馬を催し、一戰を勵み、立處に宋江を活捉て、我君に獻ずべし。遼王聞て大に悅び、早速兀顏光に金印を與へ、大元帥とし、急に發向して、宋江を討べきよしを命じけり。兀顏統軍、王命を受て寶殿を下り、直に教場に至り

七編　巻之七十

○宋公明大に幽州に戰ふ

賀統軍は、此度の合戰、宋兵の勢、とても勝がたきを料知り、遂に引回して西門の邊に馳せし處に、又雙鎗將董平に遇て、一陣を破られ、直に走て南門の邊に轉出ければ、朱同待受て又一陣を破りけり。賀統軍敢て城中に入ず、只大路に倚て、正北の方に走り行く。二三里ばかり過つらんと思ふ折節、前面に又一彪の軍馬突出で、鎭三山黄信刀を輪し、賀統軍に討てかゝる。賀統軍心慌て手を措に及ばず、遂に黄信に頭を砍れ、眞倒に落馬して、慌忙き逃走る。斯る處に、楊雄、石秀、左右より躍り出で、頓て賀統軍を踢倒し、綁んとせし處に、宋萬鎗を撚て追來る。其跡より又諸頭領、各先を爭ひ追來りしかば、楊雄、石秀、心中に想らく、諸將必ず功を爭ひ、義氣を壞ふ事あるべければ、今賀統軍を殺さんにはしかじとて、遂に賀統軍を亂鎗にて殺しけり。遂の兵共は大將を討せ力を落し、各紛然として四面八方に奔走せり。太眞駙馬は賀統軍が兵共、右往左往に奔走するを見て云けるは、親方打負たること必然なり、

るべきや。

とを知り、急ぎ號令を傳へ、敵を追べからず、と觸ける處に、敵の伏勢早くも起り、左の方より太眞駙馬兵を引て突出る。大刀關勝これを見て、急に相迎へ、又右の方より李金吾、兵を引て突出るを、雙鞭將呼延灼これを見て、同じく相迎へり。總て三路の軍馬相支へて戰ひ、暫時の間に討死する者多ければ、屍は横たはつて野に遍く、血は流れて河を成す。この軍の落著は、次卷を見るべし。

按ずるに、流布の冠山子譯本と云ものに、李逵を李達とし、頭領の名を書續け、喪門神鮑旭、幷に牌手項充、李袞と有て、牌手を人の名の如くす。百回本の八十六回に喪門神鮑旭引著牌手項充、李袞幷衆多蠻牌とあり。然ば盾をかざしたる軍士のことなり。又青石峪の山には栢の樹極て多しとある。栢は柏と同く、かえ又はかやと呼ものにて、かしはの字は槲なり。柏をかしはと訓來るは、舊く誤來れり。是に付愚が見識を言んは、論語に歳寒して松栢の凋に後るゝと云も、かしはと云て捌べからず。槲は凋むこと甚疾し。歳寒き迄葉はなし。松と栢の義なり。然るに儒士として舊く訓あやまる、かしはとなして、講談などするは、槲の葉榮え枯るゝの時をも知らず、從來謬來る訓も辨へず、論語一部を說ば、其誤幾ばくならん、覺束なきことなり。冠山子の手にいでて、此等付がなの麁謬あ

ことを聞き、此幽州に至つて戰を助くるなり。賀統軍急ぎ使者を馳て、兩路の大將に云越しけるは、先城中に入ずして、山の背後に埋伏し、我軍馬城を出て、宋江が人馬と相戰ふ時、左右より竝び起り、夾んで攻給へと、已に約を相定め、賀統軍自ら軍馬をひいて、幽州城を打出で、敵の至るを待わびけり。扨宋江は諸將とともに、兵を引て、幽州の近邊に至りけるに、吳學究が云けるは、敵もし城門を出ずんば、曾て備あらん、彼もし兵を引て城外に打出ば、必伏勢あるべし、我兵あらかじめ二手に分て進發し、一手の兵は直ちに幽州に至つて、來る敵と相戰ひ、一手はすべからく救應に備へ、左右より二手の兵をすゝめ、もし伏勢あらば、救應の兵迎へ戰べしと、すでに計を定めければ、宋江則ち、關勝に、宣贊、郝思文を相添へ、左の方にあらしめ、又呼延灼に、單廷珪、魏定國を相添へ、右の方にあらしめ、各一萬餘人を與へける。兩人の大將計を受て、山の後の小路より打出けり。宋江は大軍を引て進發し、直ちに幽州城に寄來る。さて彼賀統軍は、人馬を引て城内を打出で、遂に宋江が勢を迎へ、陣勢を相對す。林冲馬を躍せ、鎗を撚つて、陣前に馳出しかば、賀統軍刀をまはし相迎へ、僅數合戰ひける處に、賀統軍急に馬を勒へて逃走る。宋江が軍馬後に隨うて追蒐る。賀統軍兵を兩路に分ちて、いまだ幽州に入らず、只顧城を繞つて走り行く。吳用この體を見て、伏勢あるこ

れば、盧俊義人馬を引て峪口に至り、則宋江に見えて、大に哭き、もし宋君救を垂給はずんば、我們は、皆此處に餓死すべきに、今日想ず萬死を脱れ、再び性命を保つ事、偏に宋君の賜なりと、感悦に堪ざりけり。宋江是を聞て、共に悦び、遂に本陣に回りて、暫く先人馬を歇ましむ。次の日呉學究が云けるは、此機に乗じて幽州を取べし、若幽州をだに取なば、遼の國は立處に亡ぶべし。宋江聞て、此言に同じ、則盧俊義十三人の頭領は、先薊州に回し休息させ、宋江自ら大軍を引て獨鹿山を打立ち、直に幽州へと寄來る。賀統軍は敗軍を收め、幽州城に逃回り、兩人の舍弟を討せ、心中憂へ、只鬱々として居たりけり。かゝる處に飛脚來て報じけるは、宋江自ら大軍を引て、幽州に寄來る。幽州城の敗軍共是を聞て、益憂を添へ、皆城樓に上て、城外を望見るに、東北の方の兵は紅旗を持せ、西北の方の兵は青旗をもたせ、兩邊より一同に馳來る。賀統軍此由を聞て、大に驚き、自ら城樓に上てこれを見るに、是却て遼の國の旗號なりしかば、賀統軍心中に悦びける。紅旗の軍馬は、遼の國の駙馬太眞胥慶、五千餘人を領せり。青旗の軍馬は、遼の猛將李金吾、一萬餘人を領せり。此人は則李陵が嫡孫にして、姓は李、名は集と號し、原來金吾の爵を受しゆゑ、李金吾と稱するなり。此人今雄州に在て、宋の國の邊界を侵し、屢戰功を建たりけるが、今度親方の數城を失ひし

固に備ける。賀統軍が兩人の舍弟、先を爭うて陣前に馳出で、敵の至るを待掛たり。宋江が軍兵は、峪口を奪んと欲し、一度に勇を奮て寄來る。豹子頭林冲、馬を飛せて當先に跑出で、遂に賀拆を迎へ鎗を合せ、僅二三合戰て、賀拆を馬より下に搠伏けり。歩軍の頭領是を見て、一同に砍て入り、黑旋風李逵二つの斧を揮て、遼の兵を散々に砍拂ふ。李逵が背後には、混世魔王樊瑞、喪門神鮑旭、蓍牌手項充、李袞、幷に衆多の蠻牌の兵を引て、遼の軍中に亂入る。李逵已に賀雲と戰て、賀雲を馬より下に砍て落ければ、遼の兵、賀雲を救はんとて、一度に吐と喊き叫で攻來る。樊瑞是を見て、左右より突出で、遼の兵を迎へ、追つ追れつ、良久しく攻戰ふ。此時賀統軍は、兩人の舍弟を討取れ、大に怒り、口中に咒語を念じ、妖法を行ひければ、恠風大に作り、天地を暗しける。宋江の軍中には、公孫勝是を見て、私にあざ笑ひ、手中に劍を揮て、口中に咒語を誦へけるに、忽ち怪風を掃去て、浮雲現れ出で、一輪の紅日殊更明かなり。宋の兵是を見て、彌勇を奮ひ、我殿れじと先を爭ひ攻ければ、賀統軍自ら刀を舞して陣前に砍て出で、敵親方紛々として、一時ばかり戰しに、遼の兵終に破れ、東西に逃走る。宋の兵共は勢に乘じて追來り、頓て峪口を切開きぬ。原遼の兵若干の大石大木を以て、峪口を塞ぎける故、盧俊義等出ること能はざりき。此時宋の兵共、大石大木を掃ひ退て、峪口に入け

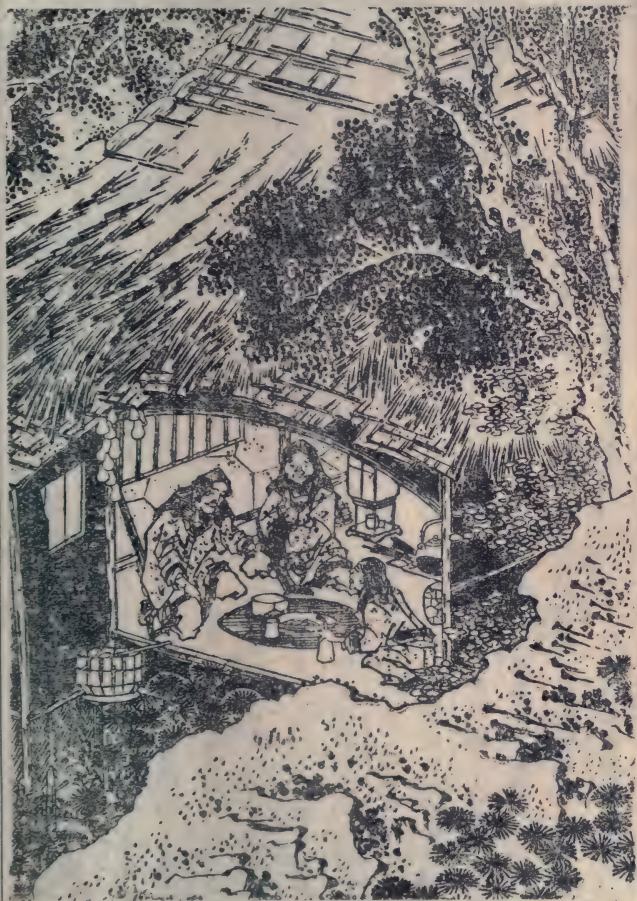
随うて、共に青石峪に陥入たらんに、今白勝一人を引て来しとは、尤奇異のことなりとて、早速帳下に呼入れ問けるに、段景住先答て云く、某石勇と共に、高山の澗間に在て四下を望みける處に、山の頂より氈を以て包たる物、滾び落けるゆゑ、某等両人これを把て氈を解ければ、其内より白勝出候ひぬと、未だ云も罷らざるに、白勝頓首して申けるは、盧先鋒先に、某等十三人と共に敵を迎へ戰ひ給ひし時、天氣俄に暗んで、日色光なく、東西南北さらに見え分ず、深く悪所に入り、翌日路を尋ね、打出んとしけれ共、四面都て峨々たる高山相連なり、只一筋の路もあらずして、出べき様もなかりければ、諸の人馬、なほ幽陰の地に在て、各饑に疲れ、漸く危く見えけるゆゑ、某何とぞ路を尋んと欲し、氈を以て身を包み、山の頂より、山の麓に滾び落ち、乃ち段景住、石勇両人に遇て、共に馳回りぬ、願くは宋君、早く兵を引て、盧俊義を救ひ給へ、若延引に及ばゝ、諸將諸卒都て饑死すべし。宋江是を聞て、其夜人馬を催し、解珍、解寶を案内者として路を引しめ、直に大栢の樹の有所を望で馳行き、三軍に號令を傳へて、宜しく青石峪の口を斬開くべし、と命じける。諸の人馬終夜急ぎける程に、暁に至て、はや山前に両株の大栢の樹を近く望めり。此樹果して其形傘のごとくなり。解珍、解寶軍馬を導て、山前の峪口に至りしかば、賀統軍是を見て、急に人馬を列ね、防を堅

尋ね給ふ一彪の軍馬は、必定此青石峪の内に陥入て在るべし、宋公明令軍馬を屯して居給ふ處は、獨鹿山と申て前面平かなれば、猶よく戰をなすべき處なり、獨鹿山の頂には定めて四方より敵兵來るべし、足下等若那一彪の軍馬を救んと欲ひ給はゞ、急ぎ青石峪を打開て救ひ出し給へ、青石峪の口には、必然遼の軍馬路を截塞て有べし、此山には原來栢の樹極て多し、其中にも青石峪の入口には、兩株の大栢樹あり、其形は傘の如くにして、四面に望めり、此樹の邊は青石峪第一の要害なり、彼賀統軍は自ら能妖法を行ふ間、宋公明に此事を告知せ進らせて、彼が妖法を破り給はんこと、是尤も肝要ならん。解珍、解寶、此言を聞て大に悦び、我隨分心を用ひて、青石峪を打開き、頓て親方の人馬を救ひ出し候はんとて、遂に劉二兄弟に謝し別れ、先本陣に囘りしかば、宋江則問て云く、汝兩人曾て消息を知得たるや。解珍兄弟が云く、某等幸ひ當地の獵人に遇て、盧先鋒の消息を承知せりとて、劉二兄弟が語りし始終具に告ければ、宋江聞て、大に駭き、早速呉用を請て評議まち／＼なりけり。

○盧俊義が兵青石峪に陥る

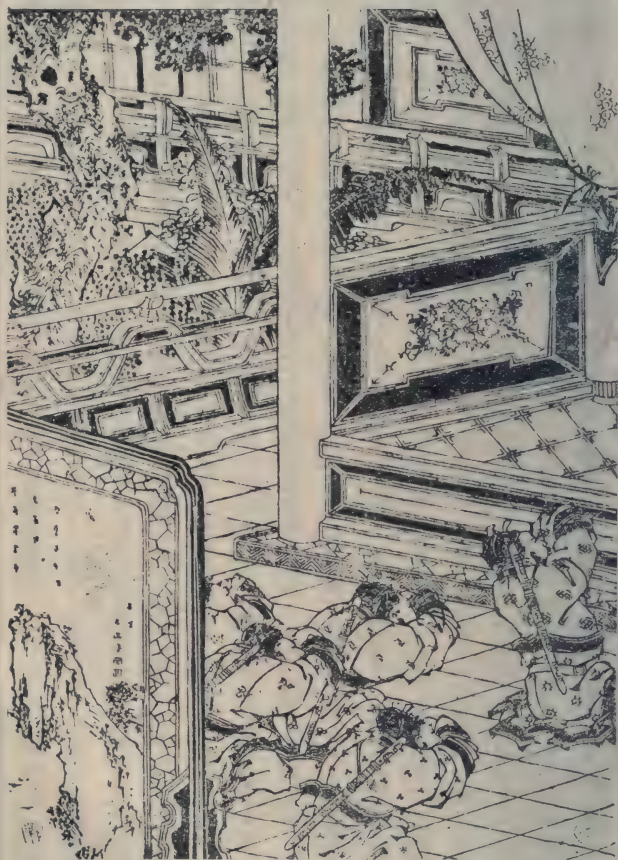
此時段景住、石勇等、白勝を引て囘りぬと報じければ、宋江是を聞て云く、白勝は原盧俊義に

人解珍解寶と申て、同胞の兄弟なり。此間まで梁山泊にありけれ共、此度宋朝の御赦免を蒙り、宋公明遼を攻るに依て、某等兩人も同じく此處に至れり、前日の合戰に親方打負け、一彪の軍馬いまだ回らざる故、某兄弟これを尋んが爲、直に此山に入て、方々捜せども、猶未だ遇ざるなり。彼兩人是を聞て打笑ひ、足下等兩人果して、梁山泊の豪傑ならば、我肯て路徑を教ふべし、先心を安んじ酒を酌給へとて、則かの鹿を煮て肴とし、慇懃に酒を勸め、盃數遍巡りける處に、劉二劉三問て云く、梁山泊の宋公明は、天に替て道を行ひ、良民を傷はず、忠義を主とするよし、遍く天下に流布して、心ある者は、都て宋公明を慕ふとなり、知らず、宋公明果して是等の德ありや。解珍兄弟答て云く、宋公明は、偏に忠義を專として百姓を害せず、只濫官汚吏等を殺すのみなり。劉二兄弟是を聞て、大に感じ、我們常に宋公明の德ある事を聞けれ共、恐くは詐にもや有らんと、未だ全く信ぜずして、疑ひけるに、果して眞の義士なるこそ宜なれとて、彌解珍兄弟を敬ひけり。解珍兄弟が云く、我尋る一彪の軍馬は、十三人の頭領と、五千人の雜兵なり、何れの地に陷入て有にや、汝若是を知り給ひなば、速に教へ給へ。劉二兄弟が云く、我此處は幽州の支配下にして、青石峪と云處なり、只一筋の路あつて、四方は皆峨々たる高山なれば、若彼一筋の路を塞ぐならば、再び出ること能ふまじ、足下等の

兄弟、老女が前に至て拜をなしければ、老女がいはく、我は唯忰等が回りたるとこそ思ひつれ、汝兩人は、原何れの地の獵人なれば此處に至り給ふや。解珍が云く、某は山東の者にて、原來は獵人なりけるが、此國に來て商賣をなしける處に、今兵亂の時節にて、商賣に本錢を失ひ、已に渇命に及ぶゆゑ、深く山中に入て野味鹿兎の類を云ふを求んと欲し、想ず路に迷て此邊に至れり、願くば老女一夜の宿を借給へ。老女が云く、宿を借んことといと易し、我兩人の忰も同じく獵人なり、逐付回り候はん、暫く安座して待給へ、我飯を調へ足下等に與ふべし。解珍兄弟これを聞き、淺からず悦びけり。已にして、半時ばかり過しける處に、兩人の獵人、鹿を挑て回りければ、老女出迎へて云けるは、汝兩人、先鹿を卸し、此兩人の客に相見せよ。彼獵人此言を聞て、解珍解寶に相見え、則問て云けるは、貴客等は何の事有て、夜中に此處に來り給ふや。解珍兄弟齊しく答て、一々詳に告ければ、彼兩人が云く、某等兄弟は、代々此處に棲獵人劉二劉三と申者共なり。父劉一は不幸にして、數年以前に死去し、唯一人の母に仕へ、專ら獵を營とす、此處は路徑甚だ雜にして、我們だにも猶且路に迷ふことあり、況や足下等は山東より初て此處に至り、直に此山に入て獵せんとし給ふは尋常の人にあらず、願くは實名を知らしめ給へ。解珍兄弟これを聞て云く、今は何をか藏すべき、某等兩人は、原山東の獵

り、暫く觀念して法を行ひけるに、黒雲忽ち散り、恠風頓て息み、敵兵戰はずして自ら退きけり。宋江こゝに於て三軍を進め、遂に圍を衝破て、高山の邊に引退き、先陣を列ね、人馬を算るに、盧俊義等十三人の頭領、幷に五千餘の軍馬未だ見えざりしかば、宋江心中に是を愁へ、翌日未明に、林冲、呼延灼、秦明、關勝四人を遣し、盧俊義を尋しむ。林冲等四人の大將四方に分れ、終日尋けれども、未だ消息を聞ずして囘りしかば、宋江益愁を添へ、則九天玄女の籤を取て卜しけるに、十分凶なることあらざりけり。宋江諸將に對して云ふ、盧俊義今日迄囘らざるは、必然幽陰の地に陷入て有べし、急ぎ是を救ひ出し會合せんとて、終に解珍、解寶を獵人の形に出立せ、澗間を搜さしめ、又時遷、石勇、段景住、曹正等四人を、四方に馳て消息を求めしむ。解珍、解寶は虎の皮の衣を著して、獵人の形を粧ひ、直に深山に入て澗間を搜し、日も早黄昏に至りければ、人音更になかりけり。解珍、解寶、又數座の山を繞て普く尋ねける。此夜月色朦朧として、分明ならざりしかば、解珍火を打て火把を點さんとしける處、遙對向の山の傍に燈の光見えければ、解寶が云く、燈の光ある處必ず人家あらん、我們先彼處に往て飯を求むべしとて、兩人遂に燈を望で尋來り、約莫一里餘馳けるに、果して一軒の敗屋あり。解珍、解寶、自ら戸を推開て内を見るに、燈の下に一人の老女閑座せり。解珍

ひ、四面八方に當つて痛く戰ひしかば、敵頗る進退し難つ扣へたり。斯る處に、天色忽ち陰り、白晝夜のごとくにして、東西南北さらに見分たず。盧俊義これを見て、大に驚き、一彪の人馬を引て慌忙き逃去る。遼の軍兵共盧俊義が逃るを知り、鼓を打ち喊を擧げ、一度に咄と跡を慕て追蒐る。盧俊義山の口に至りし處に、敵兵の聲其内に聞えしかば、盧俊義兵を引て山の内に斬て入り、路を尋て、這首這首に奔走しける處に、忽然として怪風大に起り、石を走せ沙を飛せて、人馬を迷はしむ。漸く二更の時分に至りて、雲開け風靜り、一天に星辰見れける。諸人皆頭を揚げ四方を見るに、盡く高山相連なりて甚だ險阻なり。盧俊義此時、徐寧、索超、韓滔、彭玘、陳達、楊春、周通、李忠、鄒潤、楊林、白勝、此十二人の頭領と共に、五千の軍馬を領し、各星光の下に在て路を尋けれ共、東西南北、高山峨々として、脫れ出べき路、只一筋もなかりけり。盧俊義が云く、軍士共晝夜の戰ひに嘸疲れつらん、今宵は先此處に屯して、人馬を休しめ、倘明日路を求て打出べしとて、遂に軍馬を休けり。扨又宋江は兵に下知して戰ひける處に、黑雲四方に起て、石を走せ沙を飛せ、人々面を對すと雖も、更に見え分ず。公孫勝馬上に有てこれを見、諸將に向て云けるは、此のごとく大風起て、石を走らせ沙を飛しむるは、必定敵軍の内に妖法を行ふ者在べし、我速にこれを破らんとて、寶劍を拔て左右に打振

宋江是を聞て、自ら軍前に馳出で、遙前面を望み見るに、山の背後より一彪の敵兵進み來る。宋江三軍に命じ、陣勢を列ね、敵の至るを待懸たり。遼の大軍漸近く至り、一人の大將華かに裝束して、當先に馳出る。是則遼の副統軍賀重寶なり。宋江是を見て、左右に呼りけるは、遼の統軍は定めて勇將ならん、誰かあへて彼を活捉んやと、未だ云も終らざるに、大刀關勝青龍刀を舞し、赤兎馬を躍せ、直に陣前に馳出し、賀重寶と鋒を交へ、一往一來祕術を盡し戰ひしかば、敵味方各目を驚しめて見物す。既にして五十餘合戰し處に、賀統軍氣力疲れ、遂に馬を回して、本陣に逃走る。關勝後へに從ひ急に追蒐ければ、賀統軍兵を引て、山の後に奔走す。宋江此時三軍を發し、一度に追行き、はや四五十里も過けるに、鼓の聲四方に響て、伏勢有模樣なりしかば、宋江急に人馬を領し、引回さんとせし處に、山の左より、一簇の敵兵起て路を攔る。宋江是を見て、急に兵を分け、已に戰んとしける處に、又山の右より、一彪の大軍出來る。まつ先に賀統軍馬を飛せて跑出で、左右より夾で攻ければ、宋江が人馬相救ふこと能ず、大に亂て奔走せり。盧俊義は後軍を引て戰ひけるに、前軍はや見えざりしかば、急ぎ退んとせし處に、又一彪の敵兵突出て、喊の聲天地にふるひ、四方より取蒐りて緊く攻ければ、盧俊義が兵遂に圍れ、殆危く見えにけり。盧俊義諸將に下知して、ともに武勇を奮

兩弟に命じて云く、汝兩人詐て敗北し、敵を幽州の境に引入べし、然らば我自ら計を以て、敵を敗んと、已に商議を定めけり。扨宋江は覇州に在て、堅固に城を守り居ける處に、哨の者來て報じけるは、敵已に蘇州城に寄來る、恐くは過ちあらん、軍兵を出して蘇州を救給はんや。宋江が云く、彼已に來て蘇州を攻るならば、我軍は此機に乘じ幽州を打べし、先蘇州に馳て盧俊義と兵を一處に合せんとて、遂に三軍に號令を傳へ、卽日覇州城を打出で、急ぎ進發す。遼の大將賀拆と云は、賀統軍が弟なるが、兵を引て覇州城に攻來る。半途に於て宋江が人馬に往遇戰を始けるが、纔三五合にも至らざるに、賀拆大に敗れ迯走る。宋江敢て是を追ず、先兵を收めけり。又賀拆が次の弟賀雲兵を率し、蘇州に推寄せ、呼延灼と戰て敗走せり。呼延灼又是を追ず、引回しぬ。宋江已に盧俊義と會合して、幽州を取ん策を商談す。吳用朱武兩人が云ふ、幽州の敵兵兩路に分つて寄來るは、必定我兵を誘ん計と覺えたり、先暫く兵を屯して、敵の動靜を伺ひ給へ。盧俊義が云く、敵數度敗北して恐れを催す時節、いかんぞ能我兵を誘はんや、若今幽州を取ずんば、後必ず取難からん。宋江が云く、敵已に勢究り、力盡く、いづくんか敢て計をなさんや、唯よく此機に乘じて幽州を取べしとて、吳用等が諫言を用ず、頓て人馬を引て幽州に發向す。かゝる處に、飛脚到來して、宋江に報じけるは、遼の兵前面に在て路を攔るなり。

兀顔遼王を諌て欧陽が死を宥び

大將とを引て、宋江が勢を相迎へ、只一戰の内に利を得べしと、未だ云も終らざるに、又賀統軍進み出て奏しけるは、我君必ず御心を安じ給へ、臣不才たりと雖も、自ら見識あり、諺にも鷄を殺すに焉ぞ牛刀を用んと云なるに、何ぞ正統軍自己に向ひ給はんや、臣略計を施して、彼等を一々討取べし。遼王是を聞て、欣然として悦びけり。抑此賀統軍と申は、姓は賀、名は重寶と號し、遼王の兀顔統軍が部下に在て、副統軍の職をなし、身の長一丈、力は萬人に敵し、殊更妖術を善す、今幽州に在て、諸路の軍馬を掌り、專ら權威を振ひけるが、此時遼王に奏して云く、我幽州の地には、青石峪と云處あり、四面は悉く高山にして、只一筋の路あり、臣數十騎を引て敵を此内に引入れ、外面より取圍んで攻戰はゞ、敵再び外に出ること能ず、悉く皆餓死すべし。兀顔統軍が云く、汝何等の計を以て、敵を青石峪の内に賺し入んや。賀統軍が云く、彼已に我三つの大郡を打破り、氣滿志驕て、我兵を見る事甚輕し、我もし兵を引て彼を誘ば、彼必然勢に乘じて進み來り、自ら陷坑の内に落入り、再び脫れ出んこと能ふまじ。兀顔統軍が云く、汝の計尤神妙なり、先試にこれを行ひ給へ、若萬一做壞あらば、我大軍を以て助け戰ふべし。賀統軍こゝに於て遼王に辭し、直に幽州に囘て人馬を催し、是を三手に分て、一手の人馬には幽州を守らせ、二手の人馬には覇州、蘇州等の兩所を打しむ。賀統軍

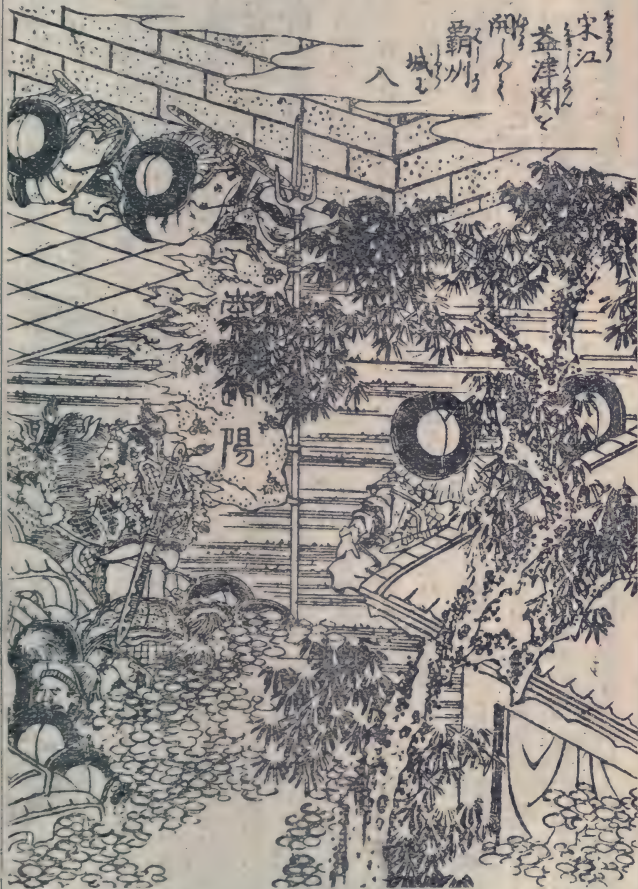
に聚る者にあらず、時の不祥に遇て暫く梁山泊に取籠れり、豈敢て遼王に降らんや、只此覇州を取んが爲、詐つて足下等に降れり、今既に功なりし上は、足下等を害するに及ざる間、早々本國に歸り給へ、此覇州は又宋朝に獻じて、再び爭ひ給ふことなかれ、向後我等が兵の到る處、一人も免すことあらじとて、即時に號令を傳へて、城中の遼兵共を、盡く城外におひ出し、其後、定安國舅等を幽州に還しける。宋江又懇に民を撫て、盧俊義と兵を分ち、宋江は覇州を守り、盧俊義は薊州を守る。趙樞密は、覇州を得たると聞て、甚だ悅び、即日表を修て、使者を東京に馳せ、軍の次第を詳に天子に奏聞せり。偖も定安國舅は、三人の侍郎と共に燕京に囘て、遼王に見え、始終の事詳に奏しければ、遼王聞て大に怒り、則歐陽侍郎を罵て云く、汝佞臣我を諫て宋江を招き、却て我第一の要害、覇州城を失ひ、此燕京いかんぞ能保んや、先汝が首を刎ね、我憤りを休んとて、已に左右に命じければ、左右の官人一同に出て、歐陽侍郎を引立んとせし處に、兀顏統軍列を出て奏しけるは、我君必ず憂へ給ふことなかれ、彼等今覇州を取しといへ共、少しも患とするに足ず、臣自ら計を以て彼等を退けん、歐陽侍郎が死罪を免し給へ、若歐陽侍郎を殺し給ひなば、却て宋江等に笑はるべし。遼王是を聞て、其言に從ひ、歐陽侍郎が罪を免しけり。兀顏統軍又奏して云く、臣自ら二十八宿の將軍と、十一曜の

賢路を開て能知能を擧る、我遼に従ふは天の時を知ればなり、汝速に心を改て遼王に歸順し、我と倶に力を合せて、大業を立んや、然らば昔日梁山泊にて義を結びし情致長く全からん。盧俊義聞もあへず、大に罵つて云く、我もと北京に在て家を安じ、業を樂で居たりける處に、汝我を賺して梁山泊に上らしめ、我已に先祖の姓名を穢しけれども、幸ひに宋朝の御赦免を蒙り、共に名を淸め恥を雪んと欲しけるに、汝いかんぞ宋朝に背て遼に降るや、汝若恥を知たる者ならば、早く出て死を我手に致せ。宋江是を聞て大に怒り、早速城門を開かしめて、林冲、花榮、朱同、穆弘等四人を出て、盧俊義と戰はしむ。盧俊義此四人を見て雷の如く吼り、直に馳出て四人に敵し、少しも怕ず、二十餘合戰し處に、林冲等四人一度に馬を勒て城中に走入る。盧俊義鎗を把て後軍の人馬の勢を招きしかば、大勢一度に喊き叫んで追來る。林冲、花榮、吊橋の邊に踏留て、再び相戰ひ、又敗北して、盧俊義を城中に引入けるに、諸の軍馬四方より砍て入り、遼の兵を散々に薙倒す。國舅是を見て大に怒り、獨自ら牙を咬で狂ひしか共、大勢に敵する事能はず、諸の侍郎等と共に、手を束ねて生捉れけり。宋江此時諸將を引て州裡に入り、定安國舅、并に歐陽侍郎、金福侍郎、葉淸侍郎等が綁を解て、堂上に請じ、恭しく上座を讓り、座已に定りし處に、宋江が云く、足下等の主君、我輩を見給ふ所、大に差へり、我輩百八人の豪傑は、原山林

皆先を爭うて、文安縣に逃かへりぬ。吳用は馬を飛せ、覇州の城下に至りしかば、城門を守る軍士ども、城中に斯と報じけるに、宋江と歐陽侍郎、自ら城門の邊に出て、吳用を迎へ、直に延て國舅に見えしむ。吳用慇懃に頓首して云けるは、某便宜を伺ひ、馳ける故、想はず遲參に及べり、某已に城外に出し時、盧俊義早くも是を知り、大軍を引て緊く追蒐け、遂に關前に至れり、然れども、某運命盡ざるや、はや城中に入て、死を免れりと、未だ云も終らざるに、飛脚追々到來して、宋の兵已に文安縣を破り、直に覇州に寄來ると、慌しく報じける。定安國舅是を聞て、早速軍馬を催し、早打出んとせし處に、宋江諫て云く、國舅先暫く扣へ給へ、盧俊義已に城下に至りなば、我自ら馳向て、又復諫言を加へ、彼若決して承知せずば、當に一戰をなして盡く討取べしと、評議半なる處に、また飛脚來て、宋朝の兵漸く近く至れりと告ければ、國舅已に宋江と共に城に上て、宋の兵を望見るに、儼然として城外に陣を列ねける。盧俊義華かに披掛て、馬を躍せ、鎗を横へ、武を輝し威をふるひ、門旗の下に在て、大音聲に呼りけるは、朝廷に反たる宋江は何れに在や、早く盧俊義に對面せよ。宋江是を聞て、城樓の下に躍出で、盧俊義を指て云けるは、盧先鋒汝何故自ら迷て、天の時を知らざるや、いま宋朝は賞罰明ならずして、奸臣志を得、佞人權を振ふ、是に依て天下已に兵亂に及べり、我遼王は

じける。須臾あつて若干の軍士、土烟を立て關前に馳來る。關上には檑木砲石を設て防ぎ戰はんとせし處に、一人の秀才、先關前に至る。其跡に又一人の和尙、一人の行者、幷に數十人の百姓慌忙き逃走る。吳用已に高聲に呼りけるは、我は是宋江が手下の吳用と云者なり、今宋江を尋て出馬しける處に、宋の兵大勢後を慕うて追來る、早く關を開て我を入しめ給へ。關を守る軍士等、是を聞て、吳用と云は則此人のことなるに、急ぎ關を開て入しめんとて、頓て關門を開しかば、吳用はや關内に馳入ける。彼和尙と行者、同じく關上に馳來る。關を守る軍士等、これを相攔へていはく、汝等何ぞ妄に關上に來るや。和尙が云く、我輩二人は皆出家なり、軍馬に追れ、此處に至れり、汝等宜しく我を救はんや。軍士共耳にも聞入ず、頻に推出さんとしたりしかば、兩人の出家大に怒り、忽ち大音聲に呼つて云く、我們兩人は好んで人を殺す勇士、魯智深、武行者なり、汝等に手段の程を見せんとて、魯知深は六十二斤の鐵禪杖を輪し、武行者は兩刀を揮ひ、直ちに關中に打ていり、恰も瓜を砍り、菜を切がごとく、はや百餘人討取ける。彼數十人の百姓は、解珍、解寶、李立、李雲、楊林、石勇、時遷、段景住、白勝、郁保四等なり。此時都て關上に馳來り、終に關口を奪ひけり。盧俊義は大軍を引て追來り、直に關内に砍入て、文安縣に攻來る。關上に在し軍士共いかんぞ能敵せんや。盡く

たると聞て、歐陽侍郎が方に人を馳せ、先軍馬を城下に留めて、只宋江一人を城中に誘引し給へ、と云越ける。歐陽侍郎、此消息を聞て、軍馬を城下に留め置き、唯宋江一人を誘て城中に入れ、頓て國舅に對面す。國舅已に宋江を見るに、威儀端然として、人物凡しからず。國舅暗に是を悅び、自ら迎へて、後堂に至り、上座を宋江に讓けるに、宋江慇懃に謝して云く、國舅は則當朝の金枝玉葉なり、某は降參したる小將なるに、何故慇懃の禮を行ひ給ふや。國舅が云く、我久しく將軍の大名を聞及べり、遼王も又深く將軍を慕ひ給ひて、此度已に歐陽侍郎を以て將軍を招きし處、早速來り給ふこと、誠に是を感激す、遼王必ず、將軍を擧て重く用ひ給ふべし。宋江がいはく、某已に御赦免を蒙る上は、駑鈍の力を盡し、上恩を報ずべし。定安國舅これを聞て、大に悅び、急ぎ酒宴を設け饗應せり。國舅又人を城外に馳て、諸の人馬を城内に入しめ、重く三軍を賞しける。花榮等諸將都て國舅に見えしかば、國舅諸將を見て、大に悅びけり。宋江又歐陽侍郎に對して云ふ、今宵吳用が來る事あらん、關を守る軍士等に命じて、關内に入らしめ給へ、我彼と一處に歇むべし、彼は元來文武足備つて、智謀兼全く、六韜三略通ぜざる處なし、此故に我彼と一處に在て、計を議せんと欲ふなり。歐陽侍郎是を聞て、卽時關を守る軍士等に號令を傳へ、もし吳用と云もの來らば、早速關を開いて入らしめよと命

宋江益津関を
開しめ
霸州城に
入
陽

日過しける處に、歐陽侍郎已に至て宋江に對面し、我遼王將軍の歸順し給ふ事を聞給ひて、御感悅斜ならずして宣はく、將軍已に親方に順ひ給ふ上は、宋の兵幾千萬來る共怕るゝに足ず、遼の國多き物とては、勇兵猛將なり、將軍貴族を迎へ給はんこと是又安堵して、先霸州城に入給へ、我自ら人を馳て貴族を迎せ、頓て對面ならしめん。宋江聞て大に悅び、某は一日も早く親方に參らんと欲す、知ず何の日我を迎へ給はんや。歐陽侍郎が云く、既にかゝる上は、則今宵打出ば大に可ならんとて、即時三軍に號令を傳ける。此日昏方に至て、城の西門を開き、歐陽侍郎は數十騎を引て、眞先に馳出で、自ら路の案内す。宋江は人馬を引て後より馳出で、約莫二十里餘過ける處に、宋江馬上に在て大に嘆じて云く、我已に軍師吳用と約して、共に遼王に降らんと云合せけるに、急に忙て立出しによつて、吳用がことを忘れたり、早く人を遣して迎はしめば可ならんとて、頓て使を馳けるに、歐陽侍郎先益津關に至り、大音聲に、關門を開けと呼りしかば、關を守る軍士等歐陽侍郎を見て、急に答へ、頓て關を開きける。歐陽侍郎はや宋江を引て關中に入り、直に霸州城に至りし處に、夜已に二更の左側なり。時に國舅里定安にかくと報じける。抑此康里定安は、遼王の皇后の兄にてありしかば、尤權威あり。殊更武勇人に卓え、兩人の侍郎を從へ、此城を守る。一人は金福侍郎、一人は葉淸侍郎と號す。此兩人宋江が歸順し

し、我若盧俊義と戰はゞ、必ず舊日の情を傷はん、侍郎もし何の地の城なりと共、暫く我に借給はゞ、盧俊義が追來し時、我先其城に入て、軍馬を屯し、宜しく好意を以て彼を諫べし、彼若彌從はずんば、其後計を以て戰はん、知ず侍郎の尊意はいかん。歐陽侍郎是を聞て、大に悅び、即ち答て云けるは、我覇州に二つの關あり、一つは益津關と號し、兩邊は都て險しき高山なり、中央に唯一筋の路あり、一つは文字縣と號して、兩方は皆聳たる險山なり、關口を過ぬれば、則是縣路なり、此二ケ所は覇州の要害とす、將軍もし盧俊義を避給はんとならば、此處より覇州城に入給へ、覇州を守る人は、遼王の御舅康里定安と申す大將なり、將軍若覇州城に入給ひなば、彼康里定安と共に、城中に在て動靜を窺ひ給へ。宋江が云く、若得て斯の如くば、早速人馬を馳て、先眷屬を邀しめ、心中の憂を除て、後事を宜しく行ば可ならんとて、諸事委く議を定めしかば、歐陽侍郎大に悅び、頓て迎へに來らんとて、遂に宋江に別れ回けり。此日宋江は使者を馳て、盧俊義、吳用、朱武を招き、覇州を攻取んとする計を議定したりしかば盧俊義は計を聞て打出ける。吳用、朱武、暗に諸將に觸て、かくの如しく〵と計を授けて宜しく行はしむ。扨宋江に相從ふ人々は、林冲、花榮、朱武、劉唐、穆弘、李逵、樊瑞、鮑旭、項充、李袞、呂方、郭盛、孔明、孔亮總て十五人宋江共に僅二萬の軍馬を領し、歐陽侍郎が來り迎ふを待て、早二三

七編　卷之六十九

○呉學究智をもつて文字縣を取る

斯て宋江ならびに諸將卒、蘇州の地に人馬を休ること一月餘り逗留せしかば、七月半に至りけり。此頃檀州の趙樞密の使者、文書を持來りて云く、朝廷今詔書を降し給ひ、戰を催促し給ふ間、急に兵を起し、征伐すべきよし達し來る。宋江文書を得て呉用と商議し、先玉田縣に至て盧俊義が兵と會合し、軍馬を練り、軍器を調へ、其後再び出勢せんと定めける。かゝる處に、遼王より使者到來せりと報じければ、宋江これを聞て出迎へけるに、彼使者は歐陽侍郎なり。宋江頓て使者を延て後堂に入り、一禮已に畢りしかば、宋江先問て云く、侍郎今日又來臨を惠み給ふは、何等の事ありや。侍郎が云く、我遼王深く將軍を慕ひ給ふ、將軍若肯て歸順し給はゞ、遼王必ず將軍を以て侯に封じ給ふべし、將軍早く歸順し給ひて、遼王の渴想の思ひを息め給へ。宋江答て云く、侍郎前日來り某と密談ありし時、百八人の者已に此事を曉し、半はあへて承知せず、某もし侍郎と共に此處を出て幽州に至らば、副先鋒盧俊義兵を引て追蒐べ

清を取違へあり。舶來の本に从うて書す。但戴宗を末に次しは、百回本もかくのごとし、誤と覺ゆ。

しまゐらせん。羅眞人、公孫勝、各宋江が承知したるを感激して、深く是を謝しにけり。ここに於て宋江等羅眞人に辭しければ、羅眞人自ら洞の外に送り出て云けるは、將軍早く功を立給ひて、侯に封ぜられ給へ。宋江謹で是を謝し、遂に別れて山を下り、公孫勝等と共に馬に乘り、再び蘇州城に回りける。此時黑旋風李逵相迎て云けるは、宋君已に羅眞人を尋ね給ひしとなるに、何ゆゑ我を連ては往給はざりし。戴宗が云く、汝前年、羅眞人を殺さんとしけるゆゑ、羅眞人深く汝を恨み給ふなり。李逵が云く、羅眞人、前年某を空中に吹上げ、剩へ蘇州の官府に落し、苦を請しめ給ひぬるに、何ぞ猶我を恨み給ふやと云ければ、諸人是を聞て、各一笑を催しける。宋江已に城中に入て諸將を呼集め、彼八句の法語を吳用に見せけれども、吳用も未だ此意を曉さず。諸將追々是を取り、再三反復し見けれ共、更に其意を知がたし。公孫勝が云く、是則天機の玄語なれば、其意を漏し給ふことなかれ、且宜しく收め、長く所持し給へ、必ず妄に疑ひ給ふべからず、我師父の法語は後必ず驗あつて自ら知れ候なり。宋江聞て、其言に從ひ、則收めて天書の內に入置けり。時漸冷氣を催し、宋江再び兵を起すより次卷に讓る。

按ずるに流布の水滸傳には、宋江盧俊義に從ふ諸將の姓名甚不順に次で、剩へ張青張

し、羅眞人打笑て云く、此事又定る所あり、豈よく始終分散せざらんや、我今法語を授けんと、則四言八句の法語を書て、宋江に與ふ。其文字は、

忠心者少　義氣者稀　幽燕功畢　明月虛輝
始逢冬暮　鴻鴈分飛　吳頭楚尾　官祿同歸

宋江此法語を見けれ共、曾て其意を曉さず。則又羅眞人に問けるは、某等は皆愚昧にして此語の意を悟ず、願くば詳に敎へ給へ。羅眞人が云く、是則天機なれば豫じめ漏しがたし、他日其驗あらん時、自ら知り給へとて、則宋江を請て歇たり。翌日早天に公孫勝已に回て、宋江と共に羅眞人を拜しける處に、羅眞人宋江に告て云く、我弟子公孫勝は俗緣日短うして道行漸く長し、今彼を留て此處に在しめんと欲へども、恐らくは將軍等の舊情に背くことあらん故、あへて是を留めず、猶將軍に從はしめて大功を立しむ、他日遼を亡し歸京し給はん時、必公孫勝を我に還し給へ、一つは貧道が道法を傳へ、二つには則老母が倚門の望みを兗しめん、將軍は原忠義の士なれば、須く忠義の行を感じ給ひて、公孫勝をかへし給へ。宋江が云く、某豈あへて眞人の貴命を背んや、殊に公孫先生は、向に高唐州を攻し時、眞人に借し人なれば、理まさに今にも還すべき事なり、師必ず心を安じ給へ、他日大功を得て後、早速かへ

宋江羅眞人参謁す

至て、幸に道顔を拜し奉り、喜望の外に出ぬ、願くば師、我輩が前程のことを知しめ給へ。羅眞人が云く、今日ははや日も晩けるに、先此處に一宿し、心靜に語り給へ、然らば我將軍等の吉凶を考ふべし。宋江此に於て、彼拜具を獻じければ、羅眞人是を辭して云く、貧道は山野に住み、身を隱したる者なれば、金銀綵緞は用ふべき所なし、將軍は十萬の兵を掌り給ふ事なれば、金銀綵緞は軍中に於て入用多かるべし、宜しく是を收めて、軍中に用ひ給へ、貧道は決して受まじ。宋江これを聞て、尙再三詞を盡し送りけれ共、羅眞人は決して是を受ざりけり。此時公孫勝は、先家に回りて老母を拜謁せり。此夜宋江は羅眞人に對して、心腹の事を語り、前程の吉凶を問けるに、羅眞人が云く、將軍已に忠義の心を守つて、道を行ひ給ふ上は、天神地祇これを憐み給ひ、他日生ては侯に封ぜられ、死しては神に祭れ給ふべし、必ず疑ひを起し給ふことなかれ、然れ共將軍一生の命薄うして、全美を得給ひがたし、是又天に定る所なれば恨み給ふべからず。宋江が云く、我此身刀劍の下に亡るにあらずや。羅眞人が云く、然ず、將軍は寐間の内にて死し給へ共、一生の命薄きゆゑ、憂多くして樂少し、若功なり名とげ給ひなば、早く身を退き給へ、必ず富貴を貪り給ふ事なかれ。宋江が云く、富貴は某が願にあらず、たとひ貧しきとも、百八人の朋友常に參會して、倶に生涯を語らば、宋江が意滿足すべ

今日已に蘇州に至りし故、先來て我師父を拜し奉る。羅眞人が云く、宋公明はいづれに在や。公孫勝が云く、則此處に誘引したりとて、早速宋公明を延て座前に至る。羅眞人座を下て、宋江を迎ふ。宋江再三謙退して拜をなさんとしたりしかば、羅眞人が云く、將軍は今國家の大臣となつて、腰を金にし、衣を紫にして、天子の勅命を奉じ給ふ人なるに、我あに拜を受んや。宋江是を聞て云けるは、師は當世の神仙なり、何故慇懃の言を云給ふやとて、則香を炷て拜をなしければ、羅眞人辭すること能ずして、宋江が拜を請にける。宋江、又花榮等六人の頭領を呼で拜を行はしめ、各座已に定りしかば、羅眞人が云く、將軍等は皆上天星に應じて、凡人にあらず、今日幸宋朝に歸順有て、清名を末世に留め給はんこと、何よりの悅びなり、公孫勝は貧道に從て、山中に在けれ共、本同じき天罡星に應じたる者ゆゑ、終に將軍等と會合せり、將軍今日駕を枉て貧道を訪ひ給ふ事、貧道深くこれを感激す、然れ共山中淡薄食味なく、萬品備なくして、何等の款待あらず、願くばこれを免し給へ。宋江頓首していはく、某は則鄆城縣の小吏にして、罪を犯したる者なれ共、諸豪傑四方より馳集り、同聲相應じ、同氣相求め、恩は骨肉の情のごとく、宋朝より三回詔書を降し給ひて、罪を御赦免ありけるゆゑ、諸將みな某に隨て、共に宋朝に歸順し、此度勅命を蒙りて、遼の國を征伐し、直に此蘇州城に

早速諸將と云合せ、人馬を蘇州城に屯し、暑氣の除くを待にけり。翌日宋江、又公孫勝に問けるは、先生の師父羅眞人は當世第一の導師たることを聞及べり、前年戴宗李逵を馳て、先生を尋しめける時、彼兩人、已に羅眞人にまみえ、常に淸德を稱揚す、我此たび幸に當地にいたり、羅眞人を拜せずんば有べからず、先生我を引て拜せしめ給へ。公孫勝が云く、我前日より、かく思ひしかども、軍事いまだ定めざるに依て、先相扣へり、然るに宋君、師父に遇んと欲し給ふこと幸ひなり、明日早く導き參らせんとて、其夜は各歇みけり。翌日宋江拜具として金銀彩緞を相調へ、花榮、戴宗、呂方、郭盛、馬麟、燕順の六人を引て、公孫勝に相隨ひ、總て八騎五千の步卒を卒して、九宮縣二仙山を望んで急ぎける。宋江等已に著山したりしかば、公孫勝遂に宋江を引て觀裡に至る。鶴軒の前に在し道士共、公孫勝を見て各禮を行ふ。公孫勝問て云く、我師父は何の處に居給ふや。道士等答て云く、師父頃日後山に退隱し給ひて、觀裡に至り給ふことは少なり。公孫勝これを聞て、則宋江と共に後山に赴き、はや一里許馳せけるに、洞の内に讀經の聲あり、是則羅眞人なり。公孫勝已に洞の前に至りしかば、童子戸を開て公孫勝、宋江を迎へ、直に延て洞の内に入し處に、公孫勝、先師父を拜して云けるは、我舊友梁山泊の宋公明、宋朝の御赦免を蒙りて、先鋒の職を授られ、此度大軍を引て遼の國を征伐し、

辭して回りける。宋江又吳用と議して云く、我今云し返答はいかん。吳用是を聞て、只管嘆息し、默然として言ず。宋江問て云く、軍師は何故嘆息し給ふや。吳用答て云く、我つら〳〵思ふに、歐陽侍郎が云し事一々其理あり、今宋朝の天子至て聖明なれ共、果して蔡京、童貫、高俅、楊戩、四人の奸臣等に昏され給ひて、專ら此輩が言を信じ給ふ、我等後日たとひ功有といふとも、官爵を授け給ふこと有まじ、向に三番迄詔を降し給ひて御赦免あり、今日かくのごとく、遼の國を征伐なさしめ給へども、只先鋒の職のみを宋君に授け給ふばかりにて、其餘は都て白身なり、某愚意を以てこれを料るに、遼王の募に應じ、彼州に歸順せば、反て梁山泊にあらんよりは、大に强如ならん、只宋君の忠義に背く所あり。宋江これを聞て云けるは、軍師大に差へり、たとひ宋朝我に背くとも、我忠心宋朝に背ずんば、是則義士の本意なり、我們後日大功を立て、恩賞を請ずとも、淸名を末代に留んことぞ悅ばし、若正しきに背き、邪に從はゞ、天必定我を罪し給ふことあらん、我輩は只忠を盡して國にむくい、而して後死せんのみ、何ぞ頻りに官爵を求んや。吳用が云く、宋君いよ〳〵忠義を守り給ふ上は、唯此便機に乘じて、彼が覇州を奪ふべし、然れ共、卽今は暑氣甚うして合戰をなしがたし、暫く此處に人馬の氣力を養はしめ、其後計をなさば可ならんとて、宋江吳用已に議して、

緞百八端、名馬百八疋を、百八人の英雄等に賜ふ、もし百八人の英雄等が生地故鄕より其姓名を寫し遣し給ふぞならば、一々官爵を授け給はんとの御事なり、遼王久しく將軍等の大名を聞及び給ひしゆゑ、某を馳て將軍等を招しめ給ふなり、願くは宋將軍意を同じうして、親方に歸順し給へ。宋江是を聞て答へけるは、侍郞の云給ふ處、誠に確的せり、然れども某不肖の身として大罪を犯し、直に梁山泊に上りて身命を脫れ、數度官軍等を追散して、彌罪を添へけれども、朝廷反て三度迄御赦免の詔書を降し賜て、今日の大將を蒙らしめ給ふ、然れ共我いまだ此恩を報ず、是に依て、急に宋朝を棄るは不可ならん、侍郞は先歸り給へ、卽今天時炎暑甚うして、人馬の奔走極て難ければ、暫く遼王の國を假て兵を屯し、秋の至るを待て、いかん共宜しく議すべし。歐陽侍郞が云く、將軍もし遼王を見棄給はずんば、先此禮物等を收め給へ、某は立囘て遼王に斯と告げ、後日商議せんに、必ず我王に隨ひ給へ。宋江が云く、侍郞はいまだ我軍中のことを知り給ふまじ、我輩總て百八人の內、若此消息を聞者あらば、反て禍を惹出すことあらん。歐陽侍郞が云く、將軍は今兵權を掌て諸將の首たり、誰かあへて背く者あらんや。宋江が云く、我輩百八人の內には、性直剛勇の士究て多し、我日を逐て彼等を諫め、百八人皆同心の上にて返答に及ぶべし。歐陽侍郞是を聞て、其言を領し、遂に宋江に

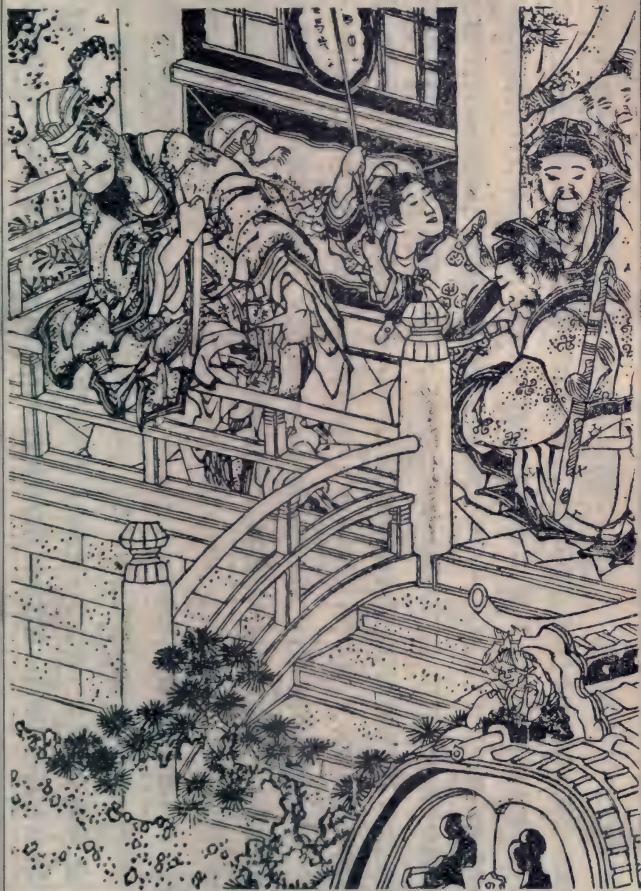
の人を退け給へ。宋江此言を聞て、左右の人を遠く退け、則後堂に入て其事を問ひしかば、歐陽侍郎身を躬めて宋江に告けるは、我遼の國、久しく宋將軍の大名を聞及び、平生深く渴想すといへ共、山川相隔て路遠きゆゑ、未だ尊顏を拜せざりき、將軍等は皆梁山泊に居給ひて、天に替て道を行ひ、諸英雄心を同じうし、力を協て宋朝を助け給ふと承知せり、然れ共宋朝には、奸臣們威を振うて賢路を塞ぎ、只賄賂を送る者のみ是を用ひ、賄賂を送らざる者は、縱ひ大功有といふともこれを擧ず、かくのごとく賞罰明かならざる故、遂に天下の大亂を致して、江南、兩浙、山東、河北等の地に盜賊竝び起て、百姓を傷ひ、民其塗炭を受る者甚だ多し、今日將軍十萬の勢を引て、宋朝に歸順し給ひしか共、只先鋒の職を得給ふのみ、其餘の豪傑は未だ職を請給はずして、皆是白身の人なり、尤一命を捨て、直に此沙漠の地に至り、各勞苦を受て早功を立給ひしか共、朝廷より一點も恩賞を行ひ給はず、是皆佞人等、朝廷に在て自らなす所なり、若多く賄賂を以て、蔡京、高俅、童貫、楊戩、此四人の賊臣に送り給ふならば、官爵の恩命立處に至るべし、若然らずんば、將軍たとひ大功を立給ふとも、朝廷曾て恩賞あらず、反りて罪を被り給ふべし、某今日遼王の命を奉て、此處に至り、則遼王の詔書を携たり、先宋將軍を封じて、遼邦鎭國大將軍總領兵馬大元帥とし、金一提、銀一秤、彩

を退きけり。扨彼歐陽侍郎は、遼王の勅命を奉はつて、若干の禮物を帶し、此日遼王を辭し、遼京を發駕し、許多の供人前後左右に從へ、蘇州城へと急ける。及時雨宋公明は、蘇州城に在て、軍馬を養ひ、暫く休息して居ける處に、遼の國より使者來りぬと報じければ、宋江是を聞て、心中に恠み、頓て九天玄女の籤を取り、吉凶を試みける處に、大吉の籤に取著しかば、宋江則吳用と議して云く、大吉の籤を得たるは、必定遼の國より我輩を招くならん、此事いかゞせば可ならんや、と沈吟に及びける。

○宋公明夜益津關を度る

此時吳用が云く、已にかくのごとくば、計を以て計に就き、先其招きに應じて、此蘇州を盧先鋒に守らせ、我輩は彼が覇州を奪ふべし、若果して覇州をだに取なば、遼の國を破ん事、何ぞ難からんや、今已に檀州を取しかば、先遼の國の左の手を除き畢んぬ、此上はたゞ先難後易の計を施し、彼を疑はしめずんば可ならんとて、已に議を定めければ、宋江下知して城門を開き、遂に使者を迎へけるに、歐陽侍郎、頓て城中に入て宋江等に對面す。宋江先問て云く、侍郎來給ひて何等の事ありや。歐陽侍郎答て云く、些事有て將軍に達せんと欲す、先左右

遼王これを聞て、其言に同じ、汝が奏する處其理に當れり、朕今一百八疋の名馬、一百八疋の好緞、これを宋江等に惠み、又一通の詔書を修へて、宋江を鎭守大將軍總領遼兵大元帥に封じ、金一千兩、銀一萬兩を與へて信物とし、其餘の頭領共に、都て官爵を授くべし、汝朕が爲に、彼が陣屋に赴き、宜しく事を調ふべしと、未だ云も終らざるに、兀顏都統軍、列を出て奏しけるは、我君いかんぞ是等のことを行ひ給はんや、宋江等は、皆山野の盜賊なるに、彼を招き給ひて、何の用かあらん、當朝には二十八宿の將軍、十一曜の大將あり、此外強兵猛將雲霞のごとし、豈彼等を破らざらんや、彼若兵を退けずんば、臣自ら人馬を引て立處に追散し候はん、望らくは我君彼等を募給ふことなかれ。遼王聞て云けるは、汝は原來我國の上將として、比類なき勇士なれば、朕つねに威悅す、若今又宋江等を召寄て、軍中に用ひなば、畢竟汝も又兩翼を生ずる道理なり、必ずこれを遮ることなかれとて、兀顏が諫を容ひざりけり。抑此兀顏は遼の國第一の上將にして、十八般の武藝盡く曉し、且又兵書戰策都て洞達せり。今年三十五六歲と覺えて、顏色麗しく、威風凛々として、相貌堂々たり。身の丈は八尺有餘にして、力は萬人に敵し、屢大功を立て、名を遠近に振へり。眞に是萬夫不當の勇ある豪傑の棟梁なり。今已に遼王を諫しかども、遼王これを容ひざりしかば、再び一言をも云ずして、遂に殿中

丞相諸堅
遼王に
宋江が来由と説

れ、宋朝の人馬盡く死し畢ぬ、彼皆斯の如き英雄なる故、宋朝の天子、總て三囘詔書を降して赦免ありし故、宋江遂に宋朝に歸順して、此度我國を征伐すといへ共、只宋江、盧俊義等は、先鋒の職を蒙りしが、猶未だ實の官爵にあらず、其餘の輩は都て皆白身の者どもなり、彼百八人は、原上天星に應じたるとやらんにて、各希有の勇士等なれば、必ず輕々しく覷給ふことなかれとて、一々詳に奏しければ、遼王これを聞て云く、已にかくのごとくんば、いかなる計を以て彼等を退んやとて、殆憂に逼る處に、歐陽侍郎進み出て奏しけるは、我君聞せ給へ、人の子としては孝を盡し、人の臣としては忠を盡すは、これ則人の道なり、臣不才たりといへども、一つの計を獻じて敵兵を退くべし。遼王これを聞て、大に悅び、汝何等の計を以て敵を退けんや。歐陽侍郎奏して云く、宋江等は皆梁山泊の英雄豪傑なれ共、然れ共宋朝には蔡京、高俅、童貫、楊戩、此四人の賊臣有て專ら權を振ふ、已に親しき者を進め、疎きを退け、擅に天子を欺き、賢路閉ぢ、奸佞のみ進む、久うして後、いかんぞ敢て宋江等を容んや、臣愚意を以てこれを想ふに、我君多く禮物を宋江等に賜て、官爵を加へ俸祿を増し、慇懃の詔を以て、彼百八人の者を親方に招き給へ、君若宋江が軍馬を得給ひなば、中原を取給はんこと掌を反すよりも易からん、臣敢て、此御使を承らん、明らかにこれを察し給へ。

めて、天色涼しからんを待ち、其後又謀を議し給へと、備細に云越ければ、宋江返簡を得て、其命に從ひ、則盧俊義に原來從ふ所の諸將を相添へ、玉田縣を守らしむ。其餘の諸大將は共に大軍を收めて蘇州城を守り、天氣涼しくなりし上、再び計を議して、遼の國を攻んとぞ圖りけり。扨も弟の大王耶律得重は、洞仙侍郎と共に眷屬を帶して、幽州にかへり、直に燕京に至て、朝外に伺候す。遼王は金殿に坐して、文武百官の朝賀を受畢りし處に、閤門大夫列を出奏しけるは、蘇州の御弟大王已に囘り給ひて、朝外に伺候し給へり。遼王聞て、早速殿下に宣出しければ、耶律得重幷に洞仙侍郎、堦の下に拜伏して、大に哭く。遼王是を見て問けるは、愛弟は何故いたく流涕するや、若ことあらば早く奏聞せよ、朕汝が爲に理會せん。耶律得重涙を拭ひ奏しけるは、今宋朝より宋江等を差向け、我國を攻さしむ、宋江等が人馬甚だ強勇にして、勝を取こと能ず、臣兩人の悴を討せ、檀州の四將を殺されぬ、これに依て檀州、蘇州、都て是を失へり、臣只一死を請のみなり。遼王の云く、汝先心を惱すことなかれ、彼宋江と云は、宋にて何等の官なるや。右丞相諸賢進み出て云く、臣聞く、宋江はもと梁山泊水滸寨の盜賊なり、彼等百八人の者共は良民百姓を害せず、只々濫官汚吏を殺すのみなりと流言して、專ら萬民を煽惑たる賊徒なりけるが、向に童貫、高俅、兵を引て彼等を攻め、却て彼等に打破ら

の達人なりけるが、此時果して彼聳たる塔上に登りて火を放ちしかば、火光三十里四方を照し、大に煌を飛せり。其後又佛殿に火を放けるに、黑烟地に落ち、紅焰天に沖り、火勢甚だ烈しかりしかば、城中の百姓共大に哭き叫んで、四方に奔走す。かゝる處に、又州府の内に火起て、直に城の南門を燒拂ふ。蘇州城の内に、總て三ケ所に火起り、空中に火星飛で諸方に火つきしかば、城中の軍民いかんぞよく城を守らんや。盡く己が家に逃回て眷屬を救んと騷ぎけり。弟大王此體を見て、大に驚き、宋江が軍士城内に紛れ入り、此火を放ちたらん事を料り知り、急に眷屬を車に乘せて、城の北門を開せ、盡くみな慌て忙き逃走る。是に依て城中の人馬自ら散亂す。尤拙かりける光景なり。宋江が人馬は喊の聲を揚て砍て入り、はや南門を奪ひけり。洞仙侍郎は快く戰はんとはしけれども、踏住る親方なかりしかば、唯大王に從て、北門より逃出たり。宋江已に大軍を引て、蘇州城を乘取り、先兵に下知して四方の火を消さしめ、懇に百姓を撫て三軍を賞し、石秀、時遷兩人が功を第一と記させける。宋江又使者を趙安撫が方に馳て、蘇州城を取しことを詳に訴へ、相公此地に移り給ひて、當地を守り給はゞ、又兵を發して、燕京を攻取んと、文書を以て達しけり。趙安撫返簡を遣し、我は猶檀州を守るべき間、宋先鋒先自ら蘇州を守り給へ、卽今の天氣炎熱烈しく、人馬の苦み尋常ならず、暫く軍を休

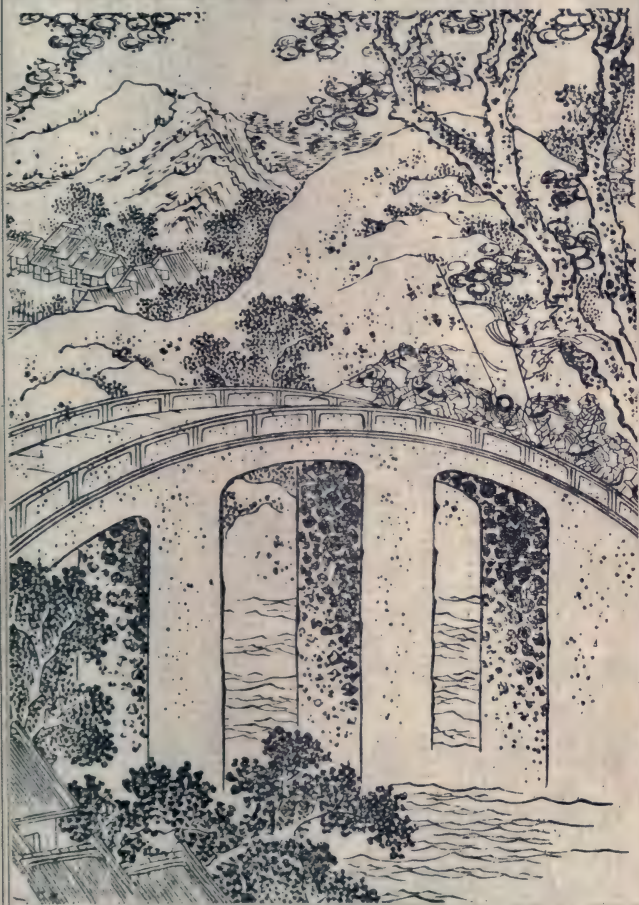
軍に下知し、一度に喊の聲を擧しめて、吊橋の邊に攻來る。耶律得重これを見て、いよ〳〵愁をそへ、且城門を閉て、かたく城を守り、表を遼王に獻じ、文書を覇州幽州に遣し、急に援兵を求めけり。扨宋江は吳用と商議して云く、此城かくの如く堅固に守りけるに、いかなる計以て是を破らんや。吳用が云く、石秀時遷已に城中に忍び入り、今に至る迄計を行ざるこそ不思議なれ、且我輩は城の四面に砲架を設け、緊く攻め、凌振に大砲を放たしめて、城中に打入なば、此城必落べし。宋江是を聞て、其議に服し、速に城に攻しめんとぞ圖りける。弟大王は宋の兵四面より緊く攻るを見て、城中の百姓共盡く呼集て城を守らしむ。こゝに又梁山泊の石秀は蘇州城に忍入て、寶嚴寺の內に躲れ居て、動靜を窺ひける處に、時遷來て石秀に告けるは、宋先鋒の人馬、はや城外に推寄て、緊く城を攻るとなり、我等兩人、若火を放ずんば、更に何れの時をか待ん。石秀是を聞て、則時遷と議して云く、汝は先寶塔の上に火を放て、其後又佛殿を燒拂ふべし。時遷領掌して云く、足下は又私に忍び入て州府の內に火を放ち、南門の要害を燒毀し給へ、若城外の親方この火を見ば、必定力を加へ城を攻ん、何ぞ是を破らざるべきやとて、兩人已に議を定め、各火藥を以て、懐に收め馳去けるが、此日の黃昏、宋江人馬を領し、城を攻る事甚火急なり。抑此時遷は簷を飛、壁を走り、墻を跳り、城を越る事

常よりも一入働し處に、兩大將已に討れしかば、忽ち力を落し、盡く蘇州城を望で引退く。宋江は兵を引て、十餘里ばかり追蒐け、再び本陣に回て重く三軍を賞しけり。翌日又將令を傳へて、三軍を發し、直に蘇州の城下に至て、水も漏さず重々に取圍む。弟大王は、兩人の大將を討取れ、大に恐懼し、洞仙侍郎と商議して云けるは、汝速に人馬を領して打て出で、宜しく敵を退くべし。洞仙侍郎敢て命をうけ、咬兒惟康、楚明玉、その餘曹明濟を引て、一千餘騎を領し、遂に城外に出て、陣勢を張る。宋江が大軍は、近く城下を望んで、雁の翅の如く竝び來り、索超大斧を横へて、當先に進み出で、遼の軍中よりは、咬兒惟康鎗を輪して陣前に躍出で、兩將已に馬を交へて鋒を合せ戰ひ、漸く二十餘合に至りし處に、咬兒惟康、氣力疲れて、敵し戰ふこと能ず、竟に馬を勒て本陣に逃回る。索超後に從て赶來り、恰も雷のごとく吼て、大斧を揮ひ、遂に咬兒惟康をぞ砍殺せり。洞仙侍郎樓の上に在てこれを見、急に楚明玉、曹明濟を出し、戰を救はしむ。兩將各鎗を撚て、陣前に馳出れば、宋の陣中には、九紋龍史進刀を舞し躍出で、直に兩將を迎へて數合相戰ひ、早楚明玉を馬より下に斬て落しければ、曹明濟急ぎ逃れんとせし處に、史進叉刀を擧てこれをも共に斬て落し、直ちに敵兵の內に突て入り、恰も人なき所を跑るがごとく、四面八方に當て、散々に砍拂ふ。宋江是を見て、諸

れども、彼已に寄來りて我州を犯さんと圖る上は、我自ら迎へて相戰ひ、賊數輩活捉て、立處に勝利を得ん事、何の疑かあらん。洞仙侍郎が云く、敵將の內によく石を飛せて、人を打つ賊あり、汝すべからく是を用心すべし。天山勇が云く、彼石を打つ賊は、我馬より射落しけるが、必ず死失しならん、何ぞ彼を以て患とせんや。洞仙侍郎が云く、若彼賊をだに除るば、其餘は怕るゝに足らずと、商議して居ける處に、哨の者來て報じけるは、宋江が軍馬はや近々と寄來れり。弟大王是を聞て慌忙き、三軍を催し、城外に打出で、三十餘里城を離れて、宋江と陣勢を對しける。此日遼の猛將寶密聖馬を躍せ、陣前に馳出で、大音聲に呼て云く、汝梁山泊の潑賊早く出て雌雄を決せんや。豹子頭林冲、聞もあへず、鎗を撚て捌て出で、直に寶密聖を迎へて、三十餘合戰ひしか共、勝利いまだ決せず、林冲功を奪んと欲して、平生の勇をふるひ、鎗を高く擧て捌けるに、寶密聖此鎗を避るに及ず、遂に捌て、馬より下に落にけり。宋江是を見て、大に悅び、三軍を發して緊く攻戰ふ。遼の軍中には、天山勇、此體を見て、忿然として怒り、鎗を橫たへ馬を飛せて、陣前に突出る。徐寧早くも鎌鎗を撚て相迎へ、戰已に二十餘合に至りし處に、徐寧便宜を窺て、天山勇を捌伏けり。宋江は敵將二人討取たるを見て、益欣然と悅び、兵に下知して一同に戰はじむ。遼の兵共は、今日の合戰に必ず勝を取んと圖り、

俊義と議して云けるは、盧俊義向に玉田縣にて圍を請給ひし時、我豫じめ蘇州を取の計を議定せり、彼石秀、時遷は、久しく彼地に居住して、能案内を知りし故、前日已に敗軍の形に打立せて、蘇州城に忍ばせたり、彼兩人、若蘇州城に入たるならば、おのづから計有べし、前日彼等計を獻じて云けるは、蘇州城の内に寶巌寺と云ふ大伽藍あり、廊下には法藏あり、中央には大雄寶藏あり、殿前には一つの寶塔有て、直に雲霄に聳たるとなり、かゝる大地なりとい へ共、常には人の參詣希にして、殊更物靜なる寺中なれば、時遷密に寶藏の上に躱れ、我輩が城を攻るを待伺ひ、時遷は寶塔の上に火を放ち、烽を起げ、石秀は、又自ら紛れ入て、州府の内に火を放ち、一時に城中を燒拂はんと商議して、はや城内に入畢ぬ、よも倣損じは有まじければ、急ぎ三軍を催し、共に攻往ば可なるべし。盧俊義聞て、大に悦び、已にかくの如くんば一刻も早く兵を催し給へとて、已に其言に服しければ、宋江卽時號令を傳へて、盧俊義と兵を一處に合せ、喊き叫んで、蘇州城に寄來る。扨蘇州の城主耶律得重は、兩人の息を討せて大にかなしみ、寶密聖、天山勇、洞仙侍郎、此三人に對して云けるは、向に涿州、覇州等の援兵各分散して、親方力を落し、今又宋江兵を合せて、此蘇州に寄來るとなるに、いかなる謀略を施して、これを破んや。寶密聖進み出て云く、宋江が兵若來らずんば、我も又彼を饒すべけ

郁保四、孟康等、總て四十八人なり。但し大將をも、くはへてのかず。副將盧俊義は、右軍の人馬を掌る。相
隨ふ大將には、軍師朱武、關勝、呼延灼、董平、張清、（張清不審）索超、徐寧、燕青、史進、解珍、
解寶、韓滔、彭玘、宣贊、郝思文、單廷珪、魏定國、陳達、楊春、李忠、周通、陶宗旺、鄭天
壽、龔旺、丁得孫、鄒淵、鄒潤、李立、李雲、焦挺、石勇、侯健、杜興、曹正、楊林、白勝總
て三十七人なり。既にして宋江盧俊義は、各人馬を引て蘇州へと進發す。又彼趙安撫は二十
三人の豪傑等を領して、堅く檀州城を守りける。扨此蘇州城は、遼王の弟耶律得重、四人の
男と倶に、堅固にこれを鎭守して、幙下に十餘人の猛將あり。其内一人は正總兵寶密聖と號し、
又一人は副總兵天山勇と號す。各萬夫不當の勇有て、屢勳功を立し故、耶律得重、常にこ
れを尊敬すといへり。去程に宋江が軍馬は、連日の戰に殆つかれたりしかば、暫く休まし
めて、其後計をなさんとて、先人を檀州に遣はして、張清が箭疵を問せけるに、神醫安道全
答て云く、張清が箭疵は、外皮肉を損破しけれ共、幸に內を傷はざりしゆゑ、療治をなすに難
からず、頓て膿水乾きなば、自ら收口て無事なるべし、且卽今の天氣炎暑甚しうして、人馬
病多し、是故に趙樞密に候ひ、蕭讓宋清兩人を、はや東京に遣はして、多くの藥種を調し
めぬ、宋君必ず心を安んじ給へとて、委細に云越ければ、宋江是を聞て、心中に悅び、再び盧

盧俊義遼兵を擊討す

軍馬馳來る。朱武此人馬を見て云けるは、今東南の方に見えたる勢は、必定宋先鋒の軍馬ならん、暫く動靜を窺て城外に打出なば、終に勝利を得んとぞ議定せり。扨又遼の軍勢は辰の刻より未の刻迄城を圍みしか共、曾て勝利を得ざりしかば、遂に兵を収て引退く。朱武是を見て云けるは、今此便機に乘じて追打せずんば、更に何れの時をか待んとて、盧俊義を諫めけるに、盧俊義早速號令を傳へて、縣の四門を開かしめ、自ら軍馬を引て城外に突出で、敵の後に隨て散々に攻しかば、遼の兵大に破れ、星落ち雲散が如く、四面八方に逃走る。此時宋江も又軍馬を進めて、敵兵を追討し、全き勝をぞ得たりけり。宋江已に人馬を収て、玉田縣に入り、盧俊義と兵を一處に合せ、蘇州を攻破らん事を議定し、唯柴進、李應、李俊、張横、張順、阮小二、阮小五、阮小七、王矮虎、一丈靑、孫新、顧大嫂、張淸、孫二娘、裴宣、蕭讓、宋淸、樂和、安道全、皇甫端、童威、童猛、王定六等を留めて、趙樞密と共に檀州を守らしむ。其餘の諸將は、二手に分て進發す。宋江は左軍の人馬を掌る。相隨ふ大將には、軍師吳用、公孫勝、林冲、花榮、秦明、楊志、朱同、雷横、劉唐、魯智深、武松、李逵、楊雄、石秀、黄信、孫立、歐鵬、鄧飛、呂方、郭盛、樊瑞、鮑旭、項充、李袞、穆弘、穆春、孔明、孔亮、燕順、馬麟、施恩、薛永、宋萬、杜遷、朱貴、朱富、凌振、湯隆、蔡福、蔡慶、戴宗、蔣敬、金大堅、段景住、時遷、

云く、某等四人、深く敵地に砍入て路に迷ひし處に、今朝又敵兵に遇て一戰をなし、大に勝利を得て、此處に打出たり。盧俊義聞て甚だ悦び、彼耶律宗霖が首を、玉田縣に懸て梟首たり。盧俊義又玉田縣の内に三軍を收め、懇に民を撫て、秋毫も犯さず、暫く休息せんと欲しける處に、哨の者來て報じけるは、遼の大軍四方より推寄て、玉田縣を圍み來る。盧俊義聞て、大に驚き、燕青を引て城樓に上り、はるかに城外を望見るに、數十里が間に火把を攔照し、其勢甚だ大いなり。漸近く至りしを見るに、耶律宗雲名馬に乘て、當先に進み來る。燕青が云く、昨日張清汝等が矢に射られけるに、今日我一箭を放て禮を還さんとて、弓箭を把て打搭へ、能挽て漂と放しかば、其箭果して耶律宗雲が眉間に中り、忽ち身を倒して、馬より下に落たりけり。遼の大勢是を見て急に救ひ、早くも五六里許退きける。盧俊義は、縣中に在て諸將と議して云けるは、敵今箭に中て暫く退きぬといへ共、天明なば必ず又來て、縣を圍むべし、いかなる計を以てこれに當らんや。朱武が云く、宋先鋒もし此消息を聞給ひなば、必然來て救ひ給ふことあらん、裡應外合の計を以てこれに當ば、敵を退けて此難を免れんこと易かるべし。盧俊義聞て、其議に服し、諸人一處に在て、曉を待設けし處に、果して遼の大軍四面より寄來り、縣を重々に取圍んで一滴の水ももるべきやうなかりけり。此時又東南の方に、土煙起て數萬の

新編水滸畫傳

東武　高井蘭山翁譯編

七編　巻之六十八

○盧俊義大に玉田縣に戰ふ

偖も盧俊義以下諸將談合の間、東方漸白みしかば、再び人馬を發して打て出で、已に玉田縣の邊に至りし處に、雙鎗將董平、金鎗手徐寧、先達て此處に兵を屯し、已に盧俊義を迎へて告けるは、某等力を盡して遼の勢を追散し、則此邊に陣を列ねたり、侯建、白勝は戰の次第を注進せんが爲、宋公明の本陣に馳行き、又只彼解珍、解寶、楊林、石勇等のみ未だ曾て見えず。盧俊義是を聞て、先人數を計點んとて、即時號令を傳へて、兵を數るに、五千餘人見えざりけり。盧俊義心中に憂ひ嘆息して止ざりし處に、巳の下刻に至つて、解珍、解寶、楊林、石勇二千餘人を引て、此處に馳來れり。盧俊義早速對面を遂げ、戰の次第を問けるに、解珍答て

卷之八十一……………………三七一―三九八
雙林渡にて燕青雁を射る
張順夜金山寺に伏す
卷之八十二……………………三九九―四二六
宋江智をもつて潤州城を取る
盧俊義兵を宣州道に分つ
宋公明大いに毗陵郡に戰ふ
卷之八十三……………………四二七―四五三
混江龍太湖にて小しく義を結ぶ
宋公明蘇州にて垓に大いに會す
卷之八十四……………………四五四―四七八
寧海軍にて宋江孝を弔す
卷之八十五……………………四七九―五〇七
湧金門に張順神を歸す
張順が魂方天定を捉ふ
宋江智をもつて寧海軍を取る
卷之八十六……………………五〇八―五三四
盧俊義兵を歙州道に分つ
宋江大いに鄔龍嶺に戰ふ
卷之八十七……………………五三五―五六一
睦州城に箭鄧元覺を射る
盧俊義大いに昱嶺關に戰ふ
卷之八十八……………………五六二―五八八
宋公明智をもつて清溪洞を取る
卷之八十九……………………五八九―六一六
魯智深浙江に座化す(其一)
魯智深浙江に座化す(其二)
宋公明錦を著て古鄉に歸る
卷之九十……………………六一七―六四五
宋公明の神蓼兒洼に聚る
徽宗帝夢に梁山泊に遊ぶ

李逵が暴衆人を陥る
宋公明の忠后土を感ず
卷之七十五……一九八—二三五
喬道淸の術宋江を破る
幻魔君の術五龍山を窘む
入雲龍の兵百谷嶺を圍む
陳瓘諫官安撫に陞る
卷之七十六……二三六—二五三
瓊英處女先鋒と倣る
張淸の緣瓊英に配し且吳用が計鄔梨を鴆す
卷之七十七……二五四—二八一
花和尙緣纏井を解脫す
混江龍水を太原城に灌ぐ
張淸瓊英雙び功を建つ
陳瓘宋江同く捷を奏す
卷之七十八……二八二—三〇九
墳地を謀て陰險逆を產す
春陽を踏で妖艶奸を生ず
王慶姦に因て官司に喫ふ
龔端龔正配軍王慶を師とす
卷之七十九……三一〇—三四〇
張管營妻の弟に因て身を喪ふ
房山寨に雙びて舊强人を併す
喬道淸風を回し賊寇を燒く
書生談笑して强敵を退く
卷之八十……三四一—三七〇
宋江大に紀山軍に勝つ
小旋風砲を藏して賊を擊つ
王慶江を渡て捉らる
宋江寇を剿くし功を成す

九編

新編水滸畫傳　四　目錄

七　編

卷之六十八……一―二八
盧俊義大に玉田縣に戰ふ
宋公明夜益津闕を渡る
卷之六十九……二九―五六
吳學究智をもつて文字縣を取る
盧俊義が兵青石峪に陷る
卷之七十……五七―八五
宋公明大に幽州に戰ふ
呼延灼力蕃將を擒にす
顏統軍陣に混天の象を列ぬ

八　編

卷之七十一……八六―一一三
宋公明夢に玄女の法を授る
宋公明陣を破り功を成す
宿太尉恩を頒て詔を降す
卷之七十二……一一四―一四一
五臺山に宋江參禪す
雙林鎭に燕靑故に遇ふ
宋公明の兵黃河を渡る
盧俊義黑夜に敵を賺す
卷之七十三……一四二―一六九
軍威を振ふ小李廣の神箭
蓋郡を打つ智多星が密計
李逵夢に天地を鬧す
卷之七十四……一七〇―一九七
宋江兵を兩路に分つ
關勝義をもつて三將を降す

水滸畫傳

四